

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

モンゴル国における20世紀 (3)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2014-02-12 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小長谷, 有紀, ジャーダムバ, ルハグワテムチグ, ロッサビ, メアリー, ロッサビ, モリス メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/5040

Senri Ethnological Reports

115

SER 115

国立民族学博物館

調査報告

115

The Practice of Buddhism
in Kharkhorin and its Revival

モンゴル国における20世紀(3)

小長谷有紀・J.ルハグワテムチグ・
Ma. ロッサビ・Mo. ロッサビ

編



モンゴル国における20世紀(3)

小長谷有紀・J.ルハグワテムチグ・
Ma. ロッサビ・Mo. ロッサビ 編

Edited by

Yuki Konagaya

Lkhagvademchig Jadamba

Mary Rossabi

Morris Rossabi

National Museum of Ethnology
2013 Osaka

ISSN 1340-6787
ISBN 978-4-906962-11-2 C3039

国立民族学博物館 2013

国立民族学博物館 調査報告

115

モンゴル国における20世紀(3)

小長谷有紀・J. ルハグワデムチグ・
Ma. ロッサビ・Mo. ロッサビ 編

国立民族学博物館

2013

序

小長谷有紀

本書は、モンゴル国における宗教と農業の維持発展あるいは両者の関係についてさぐるために、現在も宗教および農業の両面で中心地となっているハラホリン地域において、地元生まれの人びとにインタビューしたテキストである。

編者がこれまで刊行してきたインタビュー集『モンゴル国における20世紀——社会主義を生きた人びとの証言』（国立民族学博物館調査報告（SER）41号/日本語，42号/モンゴル語）とその続編『モンゴル国における20世紀(2)——社会主義を闘った人びとの証言』（SER 71号/日本語，72号/モンゴル語）のさらなる続編である。これまでのインタビュー集と比べると、ハラホリンという地域的な特徴（locality）と、対象者が政治家ではなく、普通の人びとである（ordinary people）という特徴を有している。

ハラホリンは、13世紀に建設されたモンゴル帝国の首都カラコルムにちなんで命名された行政区域であり、社会主義時代には国営農場として発展してきた。また、モンゴル高原において、最初の仏教寺院が16世紀に建設されるなど、定住的な要素を伴う中心地として歴史的に継続して利用されてきた地域である。こうした地域的な特徴があるために、地元の人びとの語りには畢竟、社会主義時代における農業開発や宗教維持に関する言及が多い。あるいは言及を求めることができる。

自主的な回想であれ、質問による回答であれ、こうした語りは、社会主義時代、一般の人びとが日常生活の中でいかなる宗教実践を秘密裏におこなっていたか、元僧侶たちがどのように社会主義に対応したか、あるいはポスト社会主義時代に一般の人びとや元僧侶たちがどのように宗教復興に関わったか、といった点に関する具体的な証言として重要な資料となるだろう。

このインタビューは、2009年12月、モンゴル大学文化人類学部講師のジャーダムバルハグワテムチグさんの優れたヒアリング能力によって遂行された。録音状態が悪かったにもかかわらず、正確に復元してテキスト化するという労にあたったのは、ウランバートル在住のダシダワー・ムンフバットさんである。翻訳はその夫人である斎藤美代子さんをお願いした。日本学術振興会2009～2011年度科学研究費補助金、基盤研究（A）（一般）「世界遺産エルデニゾー僧院に関する総合的研究——過去の復元から未来への保存へ——」（代表：松川節）の成果の一部である。チベット仏教に関する用語については、当該科研の代表者である、大谷大学の松川節教授が校閲した。また、植物名については、岡山大学研究員のナチンションコルさんに確認をお願いした。インタビューに応じてくださった方がたをはじめとして、上記の方がたに深く感謝する。と同時に、全体の編集上の責任はあくまでも編者が負っていることをここに明記する次第である。

注記

原語であるモンゴル語のテキストでは、ごくわずかながら、文脈の不明瞭な箇所に（ ）を付して文章をおぎなつた。一方、日本語訳のテキストでは、読みすすめるうえであったほうがよいであろうと思われる訳注を（ ）内にくわえた。さらに日本人にとってわかりにくいであろうと思われる箇所には〔 〕で文をおぎなつた。こうした補筆の部分で若干の相違があるものの、基本的に逐語訳である。

他方、英語訳はモンゴル語から翻訳している。もっぱら意識であり、重複的な表現などを省略しているため、抄訳となっている。英語訳のテキストでは、語句に関する簡単な説明は本文中の（ ）内におさめ、より詳細な説明は注として文末にまとめてある。文末の説明は、コロンビア大学のモリス・ロッサビ特任教授が担当し、抄訳は夫人のメアリー・ロッサビさんが担当した。

3つの言語によるテキストは、以上のような異同がある。

目 次

序	小長谷有紀	1
第一部 (日本語)		
解説「ハラホリンにおける社会主義的近代化」	小長谷有紀	5
インタビュー		
I. バダムハンドさん		17
II. バダムレグゼンさん		46
III. ボルジゴンさん		92
第二部 (モンゴル語)		
Ярилцлага		
I. Бадамханд		147
II. Бадамрэгзэн		174
III. Боржигон		220
第三部 (英語)		
Interviews		
I. Badamkhand		275
II. Badamregzen		294
III. Borjigon		323
Three Buddhists in Modern Mongolia	Morris Rossabi	355
写 真		375

ハラホリンにおける社会主義的近代化

小長谷有紀

ここでいうハラホリンとは、モンゴル国ウブスハンガイ・アイマグ（アイマグの原義は集団をさすが、行政区の場合は以下、県と略す）のハラホリン・ソム（ソムは行政決定権をもっているが、便宜上、以下、郡と略す）を指している。この行政区は、モンゴル国公文書館にある文書によれば、1956年の閣僚会議議決により国营農場としての設立が決定されており、行政区の変遷を整理したソドノムダグワによれば、1959年にほぼ現在の地区が構成された（Sodonmdagva 1998：482）。アタルと略称される農業開発運動（1959～65年）の本格的な開始にやや先行する事例であると言ってよいだろう。農業開発の初期の事例は一般に、以前から農耕がおこなわれていた地域であり、ここハラホリンもまたその一例に属す。

13世紀、フビライ・カン時代のカラコルム首都圏の屯田としては「和林」「昔宝赤八刺哈孫」「孔古烈（列）」の3ヶ所が知られており（白石ほか 2009：605）、そのうちの「和林」はカラコルムの音写で、現在のウブスハンガイ県ハラホリン郡に相当する。当時、開発された耕地の跡が、コロナ衛星写真によってオルホン川下流の扇状地面に広範囲に確認されている（相馬 2010）。跡地が確認されることからわかるように、すべての耕地が持続的に利用されてきたわけではない。しかし、当該地域の農業利用そのものは社会主義時代にまで踏襲された（小長谷 2010：24-25）。

社会主義時代には、灌漑水路がさらに整備され、小麦などの穀物のみならず野菜栽培なども積極的に試みられ、発電もおこなうなど、いわば総合地域開発のモデル地区として位置づけられ、1980年にはスタッフらが北極星勲章を受けた（小長谷・チョロン 2013：20-21, 75-76）。

都市的施設についても継続的に利用されてきた。16世紀、モンゴル帝国時代の古都カラコルムの跡地に、アブダイ・ハーンの宮殿とエルデネゾー寺院が建設された。そもそも、古都カラコルムがそれ以前の遺跡を踏襲して利用されてきたことが、近年の発掘調査によって解明されつつある（Shiraishi 2011）。

エルデネゾー寺院は、多くの寺院からなる複合的な組織であり、それぞれジャスヤサンとよばれる資産をもち、周辺の遊牧民に家畜群を委託放牧したり、役人に金品を貸し付けたり、遠隔地との交易活動をしたり、経営体として機能していた（ハタンバートル、ナイガル 2012：90）。一方、寺院に属する僧侶たちは、他の寺院と同様に、出身別に部衆（アイマグ）を構成して、集住していた（ハタンバートル、ナイガル 2012：30）。このような経済的な機能中心を果たす集住地区という点では、人口は小規模ながらも都市

的な性格をもつ門前町である。1931年の調査によれば、「550人あまりの僧侶が修業生活を営み、60あまりの堂宇と30あまりのジャスを有し」ていた（ハタンバートル、ナイガル 2012：105）。その後の宗教弾圧政策によって放棄されたエルデネゾー寺院の堂宇建築物は、「近隣ソムの小学校や僧の手工業組合、共同商店、倉庫、病院、ソムの役所、草刈り局の住居として分与して移行し、また一部を建築資材として利用すること」（ハタンバートル、ナイガル 2012：110）になった。やがて、個々の建築物の多くは倒壊するものの、門前町の跡地は引き継がれて現在に至る（Chuluun, S. and T.I. Yuspova 2013）。

このように、ハラホリンは、農業および宗教の両面で、歴史的に持続的利用が確認されるという地域的な特徴をもっている。それゆえ、当該地域に住む人びとは、宗教や農業と密接な関わりをもつことが多い。そこで、2009年12月、社会主義時代にいかに信仰を維持していたか、という点に的をしぼって、男女3人にインタビューをおこなった。

インタビューを担当したルハグワテムチグは、短い滞在にもかかわらず、農業技師から民主化後に僧侶に転じたバダムレグゼンさん（1936年生まれ、以下敬称略）、ハラホリン国営農場で放牧を担当していたボルジゴンさん（1941年生まれ、以下敬称略）、ハラホリンの小麦工場で働いていたバダムハンドさん（1943年生まれ、以下敬称略）に遭遇することができた。

これまで、エルデネゾー寺院に関しては、50代の僧侶のインタビューがおこなわれたことがあるものの、宗教復興に焦点があてられたため、社会主義時代の生活については明らかではない（二木 2010）。これに対して、ルハグワテムチグによるインタビューでは、生業と信仰の双方すなわち当該地域の場合は農耕と寺院の双方が語られる。とりわけ、農業技師から僧侶に転じたバダムレグゼンは、「モンゴル国における寺院と農耕の親和性」（Konagaya 2011）をまさに体现する人物となっている。そもそも、モンゴル高原における伝統的な農耕は灌漑用の水を必要とし、一方、寺院のように人びとが集住する場合にも水場が必要である。すなわち、寺院と農耕は、双方の地理的必要条件が一致するうえに、たがいに需要と供給の関係にあるため、十分条件も一致するのである。

一般に、普通の人びとにライフヒストリーを語ってもらうというタイプのインタビューを実施するとき、イエス・ノーで答えることのできる質問をしてしまうと、返事がイエスもしくはノーで終わり、応答が途切れがちになる。かといって、単純に回答できない質問をしてしまうと、長々と語りがつづき、文脈が変化しつづける。今回のインタビューでは、聞き手のルハグワテムチグが具体的な過去の様子がうかがいあがってくるような質問を連続していくため、非常に充実した内容になっている。

インタビューを実施した直後、ルハグワテムチグは社会主義時代の宗教実践について以下の3点を指摘できると筆者への私信で述べた。

1) 僧侶たちは、還俗させられたのちに、結婚する場合と、結婚しない場合があり、いずれにせよ、各人で経文を唱えた。これらの行為は隠された。

2) 一般人は、人の誕生時の命名や、死亡時の葬式に際して、旧僧侶たちから助言を得ていた。また仏具類を隠しもっていた。

3) 高僧に関する社会的記憶は、魔力と結びついて現在も人びとの心にとどまっている。

一般に、1930年代後半、チベット仏教への弾圧が強化されてからというもの、民間における宗教実践は秘匿されたと考えられている。実際のところ、どのようにひそかに実践されたのであろうか。これについては、インタビューの中で、「深夜」「密封されたゲル（移動式住居）」などという表現が重複しているので、以下にその内容を確認しておく。〈 〉は筆者による見出しである。

〈深夜の読経〉バダムハンド

深夜に読経していたんだ。ツァガン・サル（旧正月）のあとには必ず年配の人びとを連れてきて、とっぷり夜がふけたあと、天窓の覆いを閉めて経をあげさせていたんだよ。天窓の覆いをしめなければ、人が入ってくるかもしれないから。そのように深夜そうやって経を読んでいたんだよ、声をひそめてね。

〈寺代わりの密閉ゲル〉ボルジゴン

深夜に扉を閉じて、柵の扉に鍵をかけ、ゲルの扉にも鍵をかけて灯明を灯し、そしてお香を焚く。そして読経して座るんだよ、彼らは。そしてその日に何を読むのか、彼らには読むべき定められたものがあつたんだろう。それは毎日読むべきもの、そういう師からもらつたそういう経典があつたようだよ。それを毎日読む。そして、それをすべて読むために、人が行き交わない、人びとの姿が消えた、休息している時間だから、それを読んでいたんだよ。うちのこのシャンハの寺にはその当時ラマ僧たちがまた日中の法要として毎日、法要を行う、常の法要というものがあつた。それはだいたい途切れることなく読経していたと、寺院を復興するときに、そのように話されていたよ。1つのゲルに入ってしまった、まったく途切れることはなかつたとね。それはとても驚くべきことだよ。そして彼らは、その宗教儀礼に使用する道具、仏や崇拜物などを、一般にこうしてたくさん残していたようだ。個人の物もたくさんあつただろう。仏のある家庭はたくさんあつたんだからね、そうだろう。その時の寺の物から取つて残した、繊細な神聖なものを取つて残したようだね。

〈秘密裏のオボーでの読経〉ボルジゴン

また秘密裏に読経させる、オボー（峠などにある土地神のよりしろ）などの上に行つては経典を読ませるんだよ。また家では「4人のラマ僧の食事、読経させて食事を供する」というものがあつたよ。宗教のそういう…4人のラマ僧に読経させる、そういうことをしていたんだよ。そういうことが一般におこなわれていたんだ。だいたいおこなわない年はない。ときにはシャンハの寺に行つておこなわせる。4人を集めて、ラマ僧を1つのゲルに集めて、読経して、そしてお供え物や何かを整えていた。それもまた秘密とするほかなかつたよ、党员だからね。一見革命家だったから。そうして、まあ党员として生きていたんだらうよ。だいたいそういうことだったんだ。

〈アルツ（お香）に対する認識〉バダムハンド

お清め？自分で清めるよ、誰かに頼みするのはだめだっただろう。ちょうど子どもが入院しているとき、外からアルツを差し入れようとすると、シャンハの人たちはいつもこういうことをするといつてののしっていたものだよ、お清めをするといつて怒っていたんだよ。ゾル（子

どもの名前)が入院して、かなり後のことだよ、1年生になっていた、そのとき、知り合いの同郷のそういう当直、看護婦が当直をしているときに、アルツを入れないと、持ち込ませないんだよ。シャンハの人たちは信仰をしている、アルツを持ち込んだといってね。

最後の事例は後述する「文化躍進運動」と結びついている点で興味深い。宗教実践に関する要素として、たとえばオポー（土地神のよりしろ）、ボルハン（仏像）、フジ（線香）、アルツ（マツの芽の粉香）などが挙げられる。それらのうち、アルツは一般的に使用が認められていた。いわば消臭芳香剤として世俗化されていたと見てよいだろう。しかし、病院のように近代化をまさに象徴するような施設内では、アルツもまた忌避されるべき旧弊な存在と見られていたことがわかるエピソードである。些細な事例だが、うまく記憶から引き出され、当時の価値観を映し出している。

上述のように僧侶を招いて読経するのは、どのような場合なのだろうか。この点については以下のような証言によって確認することができる。ルハグワテムチグが指摘する命名や葬送のほか、病気や不調の悩みも引き受けられていたようである。

<秘密裏の読経>ボルジゴン

秘密裏に（僧侶だった人を）連れてきて読経させる。隠れて連れてきては相談をする。うまくいかないんだけど、私はどうなっているんでしょう、何がおこっているんでしょうなどということを探ねるんだよ、また、探ねようという人のところに行って、探ねる。相談する師があって当然だろうよ、そうだろう。それというのも、すべての人を洗脳して、その代わりに新しい脳にするわけではないんだから。みんなの中に信仰や崇拜といったものはずっと存在していたんだよ。

<秘密裏の相談>ボルジゴン

とても優れた人だと信仰のある人びとなどがよくやってくるんだ。田舎だから秘密だね、どこからでも関係なくこっちへ、もともとこちら側の丘を越えてやってくる。あちらこちらからたくさんやってくるんだ。主にこの東から多くやってくる。

<深夜の相談>バダムハンド

チーデレク（知人の名前）までも、ダワースレン（息子）が病気にときにはシャンハに行って僧侶に相談しようと、深夜に行ったもんだよ。かなり前のことだよ、それは。深夜相談して、もどってきたんだ。怖かったんだと、人に知れるのを恐れているんだとそう言っていた。シャンハに行って相談していた、そこには僧侶がいたんだよ。その土地の人間なら知っている、優れた人だということをも。もしも世の中に知れたら、例の封建主義や何だといって、やられてしまうだろうよ。

<秘密裏の民間医療>ボルジゴン

医学が入ってきていた、もちろん入っていたよ。ソムの医者として準医師がいた。そしてだいたいはそのソムの医者が来るものだよ。それ以外にはまあチベット医療、伝統医療などを知っている人たちが何人か、そういうことをおこなっていたと思う。それはでも、明らかなものではなく、秘密で行うんだよ。もし知れたら民衆を惑わしたといわれるからね。そういうことだった。

<命名>ボルジゴン

ああ、(名前を) もらうよ。知識のある人のところにおこなってもらうんだ。それはまた聖者である昔からのラマ僧であった優れた人からもらうんだよ、人びとが優れているという人からもらうんだ。私の両親はもらっていた…たぶんそうだっただろう。またそれも好きなように自分たちで与えるものではないよ…。だいたい何々さんから名前をもらおう、誰々さんからお香を焚いて祈禱をしてもらって、そうしてもらおう。その人がもし時間があればやってきて、お香を焚いて祈禱をして、名前を与え、そして帰っていく。もしも来ることができないようならば、その人のゲルでお香を焚き、名前をもらって帰る。そうしていたよ。

<命名>バダムハンド

ほとんどは自らつける、でも、つけてもらうこともある、年配の人からもらっていたよ。秘密で訪ねて行ってもらう。うちの亡くなった夫の親戚だという、とても優れた僧侶だと言われていた人がいた。1地区にいたんだという。ダワースレン(子ども)の名前をその僧侶からもらったんだよ。アンジャー(僧侶の名前)のところにいきなさいと義母がね、さあ、おまえはアンジャーのところにいきなさい、夜に密かにいきなさい。そしてそのころ、60何年、62年だったかね、かなり夜が更けてからいきなさい。名前を聞いた朝の色になってね、聞き終わったときには。とても優れた人だったというよ。そしてその人から名前をもらったんだ。そして「ダワースレン」という名前をつけて、黄色い物で襦袢を作りなさいという、「さあ、このあとの子どもたちの名前はおまえが自分で名付けなさい。どんな曜日に生まれるか、その上にスレンという名前を加えて名付けなさい」とそう言っていたんだよ。

<葬送>ボルジゴン

秘密でね、行っていた。そういう習慣は捨てなかったよ。アルタン・サヴ(直訳すれば、金の容器という意味)を開く(埋葬方法について僧から指導を受けることを指す)、そして方向を定める、葬りに出立する日時などはそういう人を訪ねて聞くんだ。そしてシャンハへ行くんだよ。この地方の者は、オルホン川の北側に仏画家という1、2人のラマ僧から聞いていたんだろう。そして時にはシャンハへ行く。そうしていた。だいたいそのアルタン・サヴを開く、そのさまざまなことがおこると、普通の人間が考えて、あそこに葬ってしまうというようなことはありえないよ。必ず、そうした方がいい、その人のところに行ったほうがいい。必ずうかがいをたてて、その答えを得る、そういうものだったようだ。どうだったのかよくはわからないよ、でも人びとは好きなように葬儀などをしてはいなかっただろう。一般にアルタン・サヴを開かせると言っていたよ。そうしたんだと話していた。開く人びとをそこから、大きな寺院から探してきて、昔はそういう人がたくさんいたんだから。そうだろう。一部はできないというけれども、だいたい多くはそうできていたんだよ。その習慣は途切れてはいなかっただろうね。

<葬送>バダムハンド

開く人は減多にいなかったよ。1人の人が、シャンハにはたった1人の人が開いていたんだというよ。そしてその後、このあたりにも開く人がいたんだろうよ。いやほとんど開かせないんだよ、それからとても恐れる。そのアルタン・サヴを開かせに行くと、知られれば、それは許されないことだと言ってね。

ルハグワテムチグが指摘する3番めのポイントは、民主化後に宗教家に転じたバダムレグゼンの語りに集中的に現れている。ただし、指摘されている魔力(magical power)とは、おおむね負の力である。具体的には、モンゴル語でハラール *kharaal* と呼ばれる呪詛をさす。他の2人のインタビューには登場しない話題である。バダムレグゼンは一

方で、幼少期の体験談として、呪文を唱えたら狼が退散してくれたことを語っている。こうした体験がわざわざ語られることと、言語による魔力 (magical power of words) に対する意識が強いこととは心理的に呼応しているだろう。ただし、高僧の逸話が社会的に記憶される契機は他にもあるに違いない。今回のインタビューの事例で顕著になったのは、もっぱら呪詛の記憶であった。その詳細は本文テキストを参照されたい。

ハラホリンでのこのインタビューは、社会主義時代の宗教実践に焦点をあてるという原則とともに、それだけに限定することなく、ライフヒストリー全般を聞き取るという原則を維持して実施された。そのため、語りの内容は、宗教実践にとどまらない広がりをもっている。

3人はそれぞれ牧畜、農業、軽工業という異なる産業面で働いてきたため、それぞれの領域についての記憶を語っている。バダムハンドは、牧畜のなかでも、とくに女性として搾乳を担当していたため、これについて言及しているし、バダムレグゼンは農業技術者であったため当該地域の農業について詳しい。一方、ボルジゴンは兵役を終えたあと溶接工になったためか、アルテリという手工業生産組合について言及している。1930年代に処刑された高僧をのぞいて、一般の僧侶たちは手工業に配置転換されることによって労働力が確保された (モンゴル科学アカデミー歴史研究所 1988 : 375)。そうした歴史的経緯が、ハラホリンの地域性として彼の語りを通じて出現することになる。以下、牧畜、農業、軽工業と順次、特徴的な点を抜粋して確認しておこう。

<ハラホリン国営農場の家畜私有禁止>バダムハンド

最後には、78年だったかね、ここの国営農場が全部持ってってしまったんだよ。何にも残さずに持ってってしまったんだ。10頭の家畜さえも残さなかったんだよ。それはうちのこの国営農場以外の他の場所ではやらなかった、この国営農場だけがやった誤りだと私は思っているよ。そういうわけでこの私たちハラホリンの者たちというのは、疲弊してしまったんだよ、何頭かの家畜を少しでも多くしようというときに、また取り上げられて。

<搾乳労働>バダムハンド

そう、まだ星が出ていたよ、メスウシを搾ろうとするときは。そのネグデル (直訳すれば、統一という意味) 化運動 (牧畜民の社会主義的集団化を指す) が成功してからというものは、ザボ (原料を精製する工場) が乳を集めていたんだ。ザボの乳とって持っていく。メスウシを飼っている者たちを集めてね。乳を搾るために早く起きるんだよ、ひどかったよ。呼ばれて起こされて、起きあがる時は星が輝いていたよ、あちこちに星がね。こうして考えてみると、3時だろうか、4時くらいだったと思うよ。

<罪ある家畜>ボルジゴン

例をあげるなら、わが家、本当に生きた例としてわが家がある。祖母はかなり多数の家畜を持っていた家なんだよ、それが納める羊毛が不足したとする。割り当てられた羊毛はどうやっても到達できやしない。こうやって、裁判にかけられる。裁判所が呼び出して、そして判決を受ける。そして罰金を払い、そしてさらにその不足した羊毛を出せというんだ。それを払うことになった。こうやって何とかそれを納めるようにする。そして3頭の種牡馬があった、そこか

ら1頭（の種牡馬がひきいる群れ）を羊毛代として払ったんだ。

<自発的な考え>ボルジゴン

それで祖母とはいうと、さあこれらを政府に渡そう、ただで、もうやめよう、とにかく早く政府に渡してしまっ、苦しむのはやめようといってね。そうしているとシャンハにネグデルが作られた、そして、ホジルトにも作られるという。ではホジルトに行ってみよう、そのネグデルに入ろう。こうしてホジルトに行ってみたところ、そのソム行政は許可をくれないんだよ。そういう大変な目にあった。そして後になってからネグデルが作られて、56年にネグデルが作られて何頭かの家畜を渡して一息ついたんだよ。そういうことが起こった。

ボルジゴンの言及は、集団化過程における富裕な場合の普遍的な事例である。一方、バダムハンドの上記冒頭の言及は、国営農場の場合の特殊事情である。つぎに、以下は農業に関連する言及である。

<ハウス栽培>バダムレグゼン

そのレンツェン農場長が私を呼んで、「君はホジルトに行きなさい。専門の人を見つけてくれというんだ、君は適任だ」という。こうして私はホジルト温泉療養所に75年に行って、78年までホジルト温泉療養所で、65度の熱湯で5メートルの噴水を接続して、ガラスの温室を作って、そこでトマト、キュウリを栽培していたんだ、……私は医者のような白衣を着て、そして真っ赤なトマトやキュウリを持って、こうしてホテルに届ける、そういう仕事をしていた。

<囚人による農業>バダムレグゼン

いろいろな公的機関が野菜などさまざまなものを栽培しているとき、私は1200人服役していた刑務所、ハラホリン刑務所に、私は85年9月に刑務所の農業士として赴任した。こうしてたった1個のジャガイモを植えて食べることにすら知らない1200人の服役者のいるハラホリン刑務所にやってきたんだ。今でもそこはあるよ、でも私が定年になったあと、私のやっていたものは壊され、捨てられてしまったんだよ、だが、その痕跡はある。

囚人を国営農場で労働させるという行政措置は、たとえば、セレンゲ県のズーンハラー国営農場でも1937年に実施されている（小長谷・チョローン 2013：43，95）。農業の文化的位置づけが推察されるようなこの処置は、全国的に採用されていたことがわかる。さらに、以下は軽工業に関連する言及である。

<僧侶を労働者にするシステム、アルテリ（手工業生産組合）>ボルジゴン

ここの南シャンハの中心地、このあたりの定住地のシャンハ・ソムというのがね、南のシャンハというところに学校があったんだよ、うちのソムには。その寺院というのはソムの中心地にあった、かなり多くの家々もあったよ。それから私が学校にいたとき（1949-53年）は、アルテリ（協同組合）という1つの組織があった。一般に主な公的機関というとそのアルテリというものだったよ。そして、そのアルテリは、以前シャンハ寺院にいた僧侶たちに仕事を与えたんだ。そこではいろいろな鉄を使った製品を作る、木工品を作り、靴を作る。モンゴル靴、鞍褥、そしてだいたい日用品なんかを多く作っていたんだよ、アルテリというのはね。一般に国内の生産、今現在わが国で話されているところの、中小の生産工場という、それにあたるよ。物入れの大箱や容器、ゲルの木製部品、フェルトも作る。そういう組織だったんだよ。その後、

それを、ああしたんだ、ホジルト・ソムに移転させ、向こう側の「岩のアルテリ」というのと、それとうちのシャンハ・アルテリを統合して拡大させて、そして移転して行ってしまった。でも、そのあともこのソムはまだそのままあったんだよ。

<兵士が労働者になるというシステム>ボルジゴン

除隊になる若者たちはみんな建築現場で働いていた。とてもたくさんの若者が兵役に就いていたんだ。そして、その建築現場にいた若者たちはそのまま建築業に残る、そういう傾向だったようだ。そして、あちらこちらの建築分野へと就職していたんだ。工場や生産業へと就職していた。

<工場建設と人員募集>バダムハンド

この国营農場が作られて、その近辺の人びとを労働者にしたんだよ。遠く離れたゴチン（ゴチン・オス・ソム）やボグド（ソム）などから人びとを連れてきてね、労働者として働こうとやって来たんだ。遊牧民にしたり、トラクターの運転手にしたり、労働者として工場で作らせてね。

みんな若者だったよ、みんな私の同世代の若者たち。若い、20歳になったばかりの若者。

寺院、兵役、国营農場はそれぞれ異なる社会的文脈をもつにもかかわらず、社会主義的近代化の過程においては、技術労働者を養成する社会的揺籃すなわち一般人を技術者にする仕組みという点で共通した機能を果たしていることが了解されよう。

ところで、興味深いことに、このように3人はそれぞれ領域が異なるにもかかわらず、いずれも往時のいわゆる発展をそれほど肯定的に捉えているわけではないように見受けられる点で共通している。社会主義時代に、ひそかに宗教実践をおこなっていた人びとは、社会主義的近代化の発展路線に対して、ある種の距離感を持っており、そのことが反映されているのかもしれない。

これに対して、社会主義時代に展開された文化躍進運動については3人の評価は必ずしも一致しない。バダムレグゼンは経典回収に言及し、バダムハンドは衛生検査に言及し、ともに否定的に語るのに対して、ボルジゴンは総合的評価を肯定的に語る。教育という近代化の恩恵をほとんどの人びとが受けたため、社会全体としては評価が多様化するのかもしれない。以下に3者の文化躍進運動に関する言及を抜粋してみよう。

<経典の強制提出>バダムレグゼン

経典を持つ、仏教を信仰する家もなくなった。文化躍進運動の時代、すべてを持って行って、さあお前は仏を持っているか、経典を持っているか、と言ってね。特に党のメンバー、同盟のメンバーはというと、それを最も調べて、弾圧していたんだよ。なぜかというと、私は自分が青年同盟長をしていたから、このことを詳しく知っているんだよ。

<衛生検査>バダムハンド

文化躍進運動っていうのは本当にひどいもんだったよ、私たちをひどい目に合わせたもんだよ。文化躍進運動、3つの省の検査だといって。文化躍進運動がやってくるといって、3つの省の検査だといってね。

深夜、家に入ってきて調べるんだよ。その時代、不可という成績をつけられたら、どうしよう、

どうしようとはばかり思っていたよ。さすがに牢屋には入れないだろうけどね。

子どものおもちゃを置く一角、本の一角、本棚、衛生用品がなどと、ないものはないよ。そして、このゲルの柱から1つ1つノートがぶら下げられる。そして例の長、その地区の長や何かが入ってきて、調べるんだよ、1週間に2回は来なかったけれども。見て悪かったならば、そのノートに不可だと成績をつける、優や良ならば、良というふうにつける。……カーテンの棧などもこうやって拭いてみて、埃がついていたら不可だよ。

<文化躍進運動>ボルジゴン

それはまあ、遅れた状況からの脱出だよ。

私が小さい頃、私は祖父母と暮らしていたと話したろう。うちの祖父母の2人は結婚して最初に持ったゲル、それでずっと暮らしていたんだよ。それを新しくする、建て替えるというような考えはない。必要がないからね。建てることができている、暮らせている、とね。そして竈ではなく、昔ながらに火をそのまま燃やしていた、竈はないんだ。そうするとゲルは煙にまみれていて、煙にまみれ続けて、天井のオニ（屋根棒）などはねえ、例えば移動するときにオニをこうやって取り外す。そうすると煙のあれ（煤）が手にくっついてね、こうやってべちゃべちゃとくつつくんだよ。ずっと煙の中にあって、こんなに分厚くその汚れがくっついているんだよ。……そういうことから抜け出すために、それらを洗わせ、削らせてまた洗わせる、そしてできる者はペンキを塗る、余裕のある者は塗装するんだ。そしてそうやっているうちに、すべてを塗装するようになって、天井のツァヴァグはまた洗ってね、すこしきれいになって柔らかくなる。そうしているうちに清潔になっていく。そして内側の白い覆いの布をつけるようになる。外側にも白い覆いの布をつけるようになる。

一般に下着はつけなかったのを、下着のシャツを着るようになり、パンツをはいていなかったのをはくようにさせて…。そして布団には白いシーツをつけさせるようになって。私たちが文明化した活動だったんだよ、それは。大きな成果をもたらしたんだ。私たちはそのおかげでとても文化的になり、かなり清潔になった。その後60年代くらいまで続いたよ、その文化躍進運動は。

ここで文化躍進運動と試みに訳したモンゴル語は、ソヨリン・ドブトルゴー *soyolyn dobtolgoon* で直訳すると「文化の疾走」という意味である。ここに掲げた言及がしめすとおり、生活改善運動とでもいうべき政策であった。社会主義時代の正史（モンゴル科学アカデミー歴史研究所 1988）には、年代別の記述にくわえて1940年から65年までの文化や生活に関する変遷をまとめた章があり、「文化革命」の語がもちいられている（モンゴル科学アカデミー歴史研究所 1988（第2巻）：217）。しかし、ポスト社会主義時代の正史（MUSUATK 2003）では、当時のスローガンは紹介されなくなった（MUSUATK 2003：vol. 5）。作家として有名なバーバルの歴史書『モンゴル人たち——移動と定住』では、第11章「文化革命」の「生活文化の革命」の項目で言及されている（Baabar 2006：518-520）。人びとは、当該政策を、生活上の大きな変化として経験し、それらの経験が社会的記憶として蓄積されていると思われる。人びとの生活から近代化を捕捉しようとするとき、きわめて重要な側面であり、これを筆者自身の今後の課題として引き受けていきたい。

引用文献

日本語文献

相馬秀廣

2010 「農業とともに歩む」白石典之編『チンギス・カンの戒め——モンゴル草原と地球環境問題』
pp.184-197, 東京：同成社。

白石典之, 相馬秀廣, 加藤雄三, A. エンフトル

2009 「モンゴル国フンフレ遺跡群の調査とその意義——元代「孔古烈倉」の基礎的研究——」
『国立民族学博物館研究報告』33(4)：599-638。

小長谷有紀

2010 「モンゴルにおける農業開発史」『国立民族学博物館研究報告』35(1)：9-138。

N. ハタンバートル, Yo. ナイガル

2012 『エルデネ・ゾー史 (16-20世紀)』清水奈都紀訳, 京都：大谷大学文学部松川研究室。

二木博史

2010 「エルデニゾー寺院とその周辺——2010年現地調査報告——」『日本とモンゴル』45 (1)：46
-60。

モンゴル科学アカデミー歴史研究所

1988 (1969) 『モンゴル史』(2冊本) 田中克彦監訳・二木博史ほか訳, 東京：恒文社。

日本語・モンゴル語文献

小長谷有紀・S. チョローン

2013 「モンゴル国営農場資料集」国立民族学博物館調査報告SER110。

モンゴル語文献

Baabar

2006 *Mongolchuud: Nuudel, Suudal* (『モンゴル人たち：移動と定住』)。

Mongol Ulsyn Shinjlekh Ukhaany Akademi Tüükhiiin Khüreelel

2003 *Mongol Ulsyn Tüükh 5-r boti (XXzuun)*, UB, (『モンゴル国史』第5巻)。

Sodonomdagva, Ts.

1998 *Mongol ulsyn zasag, zakhirgaany zokhion baiguulaltyn ööchlölt shinechilelt (1991-1997)*, UB,
(『モンゴル国の行政区域変更 (1991-1997)』)。

モンゴル語・ロシア語文献

Chuluun, S. and T.I. Yuspova

2013 *Mongolyn Borkhan Shashiny Soyol: Khentii, Khangain süm, khiidiin sudral*, (『モンゴル仏教文化——ヘンテイ、ハンガイの寺院の研究』) 国立民族学博物館調査報告SER113。

英語文献

Shiraishi, N.

2011 *Traces of life in the Uighur Period found beneath Erdene Zuu Monastery*, in Matsukawa, T. And A. Ochir (eds.) *The International Conference on “Erdene-Zuu: Past, Present and Future”*, pp.93-95, UB.

Konagaya, Y.

- 2011 The Affinity Between Lamaseries and Agriculture in Mongolia, in Matsukawa, T. And A. Ochir (eds.) *The International Conference on “Erdene-Zuu: Past, Present and Future”*, pp. 155-163, UB.

インタビュー

I バダムハンドさん

父の名はダムバ。1943年、ハラホリン生まれ。女性。2009年12月のインタビュー時点で66歳。社会主義時代はハラホリンの小麦工場に勤務していた。現在は家畜を放牧している遊牧民。体調が悪いために、冬季、ハラホリン市内に居住していた。インタビューでは、とくに社会主義時代の宗教生活と、現在の仏教実践について語った。インタビュー時間は約2時間。

B: バダムハンド

D: ルハグワデムチグ

I 出自

B: 書くんだったら、この机のここで。

D: ああ、大丈夫です。

B: 私たちの世代っていうと、一時期この信仰というものはあれだよ、禁止されていたんだよ。暗闇の中だよ、あなたたちが小さいころ、こんなくらいのころというのは…。

D: こっちに座ってください。どこに座りますか？

B: いいんだよ、私はここで。

D: 寒くないですか？

B: 大丈夫だよ。

D: こっちに座らないですか。あなたのお名前は？

B: バダムハンド。

D: 誰のバダムハンドですか？(姓は何ですか？)

B: ダムビーン・バダムハンド。

D: ご自分のこと、どこで生まれたんですか？ 家はどのあたりですか？

B: 今？

D: 総じて。

B: もともとこのあたりの人間だよ。うちは本当にこのあたりなんだ、エルデネ・ゾー寺院の北側にハンドジャムツの仏塔がある、私はこの仏塔のあたりで生まれたらしいよ。本当に生まれた土地にずっと住んでいるんだよ。

D: そうですね。何年に生まれたんですか？

B: 1943年。

D: それ以後、ずっとこの土地に？

B：そうだよ、それ以後この土地にずっとこうやって住んでいる。小さいころから、田舎でずっと過ごして、そのあと工場を定年退職して…。今は68歳になったっけ。そして今までこうやって故郷に住み続けているんだよ。私の両親はというとね、その、先祖はみんな太子だったらしいよ、太子の血筋の者たち。そして、このエルデネ・ゾー寺院の僧侶たち…。この北に、寺院の丘と呼ばれているところがある。この寺の僧侶には父の親戚にあたる人がいて、父の母、私の祖母の兄はそこの僧侶だったというよ。そして、オトチ・マーランバ（医学を修得した僧に与えられる位）、今でいうならばエルデネ・ゾー寺院の最高位にあたるこのオトチ・マーランバは、これまたうちの親戚だったという。そして、これらの人びとはみんな捕らえられて連れて行かれてしまった。

D：あなたは小さいころ、学校で勉強したんですか？

B：いいや、学校にはまったく行かなかった。私たちの時代は、1950何年ごろには、ほとんど学校に行かせなかったんだよ。学校をやめさせた人というのは、ずるがしこい人だったんだろうよ。自分の子どもを学校からやめさせた人というのはね。

D：あなたは何人兄弟ですか？

B：2人だよ。私の弟はウランバートルにいるよ、私にそっくりのおじいさんだよ。軍隊で長年働いていた、そして定年になってね…。

D：そのお兄さんは学校で勉強したんですか、しなかったんですか？

B：弟かい？ 勉強したよ。彼は私と違って学校で勉強したんだ。軍隊に行って、そこでずっと勤めて、そして定年になって…。

D：あなたのご両親と一緒に？

B：そう、私は両親と一緒に…。

D：家畜を？

B：そう、家畜を育てていたんだよ、家畜と一緒にいてね、そうやって過ごしていて今日を迎えたんだよ、今も暗闇（無教養）さ。学んだ本も何もない、まあ仕方ないね。

2 ハラホリン国営農場の建設

D：当時というのは、ネグデル化運動は起こっていなかったんですか？

B：ああ、そうだよ、まだ始まっていなかった。ネグデル化運動というのは、ここでは59年に終わったんだよ。59年にはすべてが、58年から始まって、59年にはみんなネグデルになって、シャンハのネグデルになったんだよ。何ていう名前だったっけ、「エンフタイヴァン（平和の意味）」だったっけ、名前さえ忘れてしまったよ。そうして、60、61年だったろうか、60年に、58、59年にこの未開墾地を開墾して、そうして、60年に国営農場が作られたんだよ、国営農場と一緒にあったんだ、このハラホリン国営農場に。そして、うちはというと何頭かの家畜をネグデルに渡して、ネグデルから

残されたほんの少しの家畜は最後には国営農場に取り上げられて、一時期ほとんど無家畜になってしまった、家畜を持っている人なんていないんだよ。本来、ソム中心地の人たちは労働をして、草原部の人は家畜を飼ってそれで生活をしていけるものなのに。最後には、78年だったかね、ここの国営農場が全部持ってってしまったんだよ。何にも残さずに持ってってしまったんだ。10頭の家畜さえも残さなかったんだよ。それはうちのこの国営農場以外の他の場所ではやらなかった、この国営農場だけがやった誤りだと私は思っているよ。そういうわけでこの私たちハラホリンの者たちというのは、疲弊してしまったんだよ、何頭かの家畜を少しでも多くしようというときに、また取り上げられて。

D：家畜を再び取り上げられて？

B：そう。また家畜をね、100頭ほどの家畜が残っていたんだよ。

D：その家畜をどうしたんでしょうね？

B：そうしてネグデルに売ってしまったんだよ。

D：国営農場の家畜を？

B：国営農場は自分の家畜だといって（私たちの家畜を）取り上げてね。そしてこのネグデルに持って行って、売り払って、少しずつネグデルに渡して、そうしてなくしてしまった。こうやって、うちの国営農場で働いていた者たちを滅茶苦茶にしまったんだよ。今こうしてみると、あなたがたの統計などにも表れているだろう、ネグデルの遊牧民だった人たちは格段に多い家畜を所有している。国営農場、ここで労働者だった者たちは家畜はというと何もないだろう、一番少ないんだよ、私たちはそうやって取り上げられたからね。

D：ネグデル化運動が起こったとき、一般的に人びとは好意的だったんでしょうか、どうだったんでしょうか？

B：ああ、一部は本当に嫌がっていたよ。そのころ、ネグデル化運動が起こったときというのは、私が16、17歳だったころだろうか、かなり大きくなっていた。一部は本当に嫌悪していたし、一部はまあいいさ、とりあえず人民は従わなくては、とそんなふうだった。ある人びとはみんなに従うというか、今、1人で孤立してどうするんだといって、ある人びとは昔コムーン（コミュン集団経営体）というものがあつたらしいが、それのようにしようとしているんだといって、本当に嫌がっていたんだよ。

D：そして、あなたの両親は家畜を国営農場に？

B：そう。国営農場に渡したんだよ、うちの両親は、そして…。

D：そして、あなたの弟さんは学校に入っていたんですか？

B：そうだったよ。うちの弟は学校で勉強して、このシャンハの学校は4年で卒業するものだったんだよ。その後、ホジルトに進学して勉強していた。ホジルトに行って、7年生は卒業しなかったと思う。ホジルトでは7年生を卒業するものだった。弟は5、

6年生までは学校にいただろう。そして、学校を辞めてしまって、草原で一時期暮らしたあと、国営農場でトラクター、コンバインの運転手になって、そして何年かトラクターを運転していた。そして、軍に入隊して、それから軍人になったんだよ。

D：若いころ、だいたいどんなふうな暮らしでしたか？ 朝は何時に起きて…？

B：朝はだいたい、若いころというと、家畜の放牧をしていたとき、メスウシの搾乳をしていたときというのは、今思えば、3時くらいに起きていただろうねえ。

D：そんなに早く？

B：そう、まだ星が出ていたよ、メスウシを搾ろうとするときは。そのネグデル化運動が成功してからというもの、ザボ（工場を意味するロシア語のザボードからの借用語）が乳を集めていたんだ。ザボの乳だといって持っていく。メスウシを飼っている者たちを集めてね。乳を搾るために早く起きるんだよ、ひどかったよ。呼ばれて起こされて、起きあがる時は星が輝いていたよ、あちこちに星がね。こうして考えてみると、3時だろうか、4時くらいだったと思うよ。こうやって起きて、あちらこちらでシャルシャルという音がしてね、まだ夜が明けていないから静まりかえっている、その中で乳を搾るシャルシャルと音が立つほど搾っていたんだ。私はとにかく今のこの子どもたちがそんなふうによく起きることはなくなってよかった、もしもそんなふうで起こされたら死んでしまうと思っているよ。

D：夜は何時くらいに寝ますか？

B：夜は完全に暗くなったところに眠る。夜になると自分たちでも遊んだりするんだよ。搾乳を終えて乳を渡して、日中は子ウシや他の家畜を追いかけて、ほとんど暇はないからね。今思うと、1日が長かったね、今思うと1年に感じられるようだったよ。そうして、夜に少し涼しくなってきたところに、自分たちも遊ぶんだ。そして、夜かなり更けてから眠る。もっと暗くなってから寝なさい、といって早くには寝かせないんだよ。日が落ちたとたんに布団に入って横になるなんて、といってね。若いころというのは、ちょうど眠りに落ちたなと眠り込んだ瞬間に起こされるように感じたものだよ。こうして起きるものだったんだよ、私たちは。私には今、こうしてたくさんの子どもがいる、私はとても小さな若いころから、ウシの乳搾りをしてきた者だよ。小さいころからこうやって朝早く起きて、夜はかなり遅くに寝る。そうして、その後は仕事をして、国（国営農場）の仕事をして、個人的にも1頭の家畜を持っていたよ、モンゴル人というのは家畜を飼って疲れることはないからね、1頭のメスウシを飼っていたんだよ、このソム中心地だね。その搾乳の仕事を間に合わせようと、6時よりも遅く起きるということはまずないね。時には6時になったり、時にはならないくらいに起きる。冬はというと、6時は少し早いだろう、夏ならばもう日が昇っているよ。

D：どんな遊びをするんですか？ どうやって遊びますか、だいたい、当時の子どもたちというのは？

B：私たちかい？ そうだね、当時というのは川辺やなんかで、特に何するでもなく、小さいころは落ちている石や骨でね。少し大きくなると、そういうことはしない、何で遊ぶというものを見つけれなくて、みんな並んで座ってね、だいたいそうやってそういう時間、そうやって過ごすことができていたんだろうよ。

D：石で家や何かを作って遊びますか？

B：そう。家を作って、骨でいろいろな家畜を作って、こうやって積み上げて、私たちのおもちゃというのは今思うとそんなものだったんだよ。

D：男の子たちも一緒に家を作りますか？

B：作るよ、作る。男の子、女の子一緒になって遊ぶよ、まだまださ。男の子は家畜の放牧に行く、家畜のところに行くよってのはごっこ遊びをするんだよ。そんなふうな遊びをしていたんだよ、私たちはね。こうして、ときどき小さな彩色された茶碗のかけらを見つける、それはとてもきれいだったよ。私の遊びというのは、そういうものだったんだよ。今の子どもたちはとてもきれいなものを見るようになって、物に関心を示さなくなった。

D：当時の子どもたちは夜になるとそう、彼らに昔話やなんかを土地の老人たちが話したりしてくれるんですか？

B：昔話やなんか、なぞなぞなどを話してくれる。なぞなぞの当てっこをする。そうして、例のシャガイ（くるぶしの骨）で遊ぶよ。こうしておはじきをしたり、そうして、アラク・メルヒー（シャガイをカメの形に積み上げてサイコロで出た数を取り合って遊ぶゲーム）をしたりして遊ぶ。いろいろな遊びをするよ。私たちのおもちゃというと、シャガイだし、シャガイで遊ぶ。大きな子も小さな子もみんなで遊んでいたよ。そうしていたんだよ、ツァガン・サル（旧正月）以後には、家畜の寝床の場所の雪をのけて、そこに皮を敷いて、丸くなってみんなで座って、シャガイで遊ぶんだよ。大きな子も小さな子も。ゼンドメンというものがあったんだよ、私たちの時代には。そのゼンドメンでもよく遊ぶね。

D：ゼンドメンというのは木でできた？

B：木でできていて、そして動物の形をしているおもちゃだよ、それでその、ダーロー（双六に似たゲーム。ドミノのような形で12の穴があいている）のようにこうやって上からこうやっておいて、下にあるのを取って遊ぶ、つき合わせてね。こういうもので遊ぶんだよ、うちのあたりの子どもたちは。

D：トランプは？

B：なかったよ。トランプというものでまったく遊んだことがない。私の小さいころはそのゼンドメンというものだけがかった。

3 社会主義時代の食生活

D：当時、食事や何かはどんな感じだったんですか、今のように、野菜などを食べていたんですか？

B：いや、食べないよ。野菜はまったく食べたことがなかった。当時というのは、野菜はいうまでもなく、小麦粉も手に入らない。小麦粉というと、1つの世帯に3kgの細かい（良質な）小麦粉、この白い小麦粉だよ、それと2kgの粗い（粗悪な）小麦粉というものをくれていたんだ。それは世帯ごとに決まっている。小さなこういう枝が混じって、黒い色の物が配られたよ、粗い小麦粉といってね、そんなものをくれるんだよ、私たちには。そして行商で小麦粉がくるというので、自分たちの家庭用のものを買おうとそこに行く。時には少し多く入ってくるので、その時には5kgをそこで手に入れたんだよ、小麦粉をね。そして、食べるものはなにかというと、ツァーゲン・トス（原乳を沸騰させてできた乳脂肪を集めて保存したもの）そしてアーロール（酸凝固チーズ）、エーズギー（加熱凝固チーズ）やそういうものを食べるんだよ。夜になると、肉をゆでて食べてしまう。朝になって起きると、バターをお茶に入れて飲んで、家畜のところに行くんだよ。アーロール、エーズギーを少し、子どもたちの懐に入れてやって、放牧に行かせる。夜になって帰ってくると、ヒヤラムツァク（内臓を細かく刻み、血の中に混ぜたものを凍らせる。保存しておいたそれから少し切り取って汁を作る）が作ってあるかもしれない、ヒツジの頭や膝下部分をゆでてあるかもしれない、そういうもの、いつも肉の食事を食べるんだよ。

D：だいたいいつごろから、ジャガイモや野菜が入ってきたんですか？

B：このジャガイモ、野菜はというと、私の知っているのは、そう、ネゲデル化運動が完成して、62年から入ってきたんだよ、栽培し始めたんだよ、そのジャガイモをね。58、59年だったか、そのころ少し見かけるようになった、でもまったく食べたことはなかった。そしてだいたい60、59、60、61年、そのころ、この国営農場が作られて、野菜を栽培して、こうして、このキャベツやジャガイモが大量になってね。ジャガイモはとてもきれいな黄色いこういう物で、皮は新しく、とても質の良いものだったんだよ。収穫されたキャベツを持ってきて、ただでくれる、ただで車から下ろして、下ろして、人にあげてしまう。もらった方は食べたことがない、どうやって食べるのかわからないといって、外に転がしておいたんだよ。ゲルのある場所にまとめてくれるんだけれど、家畜さえも食べない、キャベツや何かは外に転がったままだったよ。こうしてジャガイモ、キャベツをまったく知らなかった、ジャガイモはときどき食べることもあった。でも、ジャガイモを切って、食事（肉）に入れて、食事と一緒にゆでて、肉と同時に取り出してしまう。生ゆでになるのは当然だよ、そして、ちゃんとできあがらない、だめなものだと、まったく食べることができなかった。後になって、かなり後になって、うちはソム中心地に移動してきて、うちは63年に入ってきた世帯

なんだよ。でも、それ以後もまだ野菜は食べられなかった。そうして、中心地にやってきて、子どもたちもたくさんになって、65, 6, 7, 8年ごろに70年ごろから、野菜を食べることを学んだんだよ。今では私は野菜がとても好きだし、この子たちと野菜の入った食事を一緒に食べたいなと思うんだよ。

D: 米は一般にあったんでしょうか？

B: 黄色い米(粟)だけがあったよ。白米は本当にほとんどなかったものだよ、当時は。たまにわずかに見かけたものだ。ほんの少しね、白米は普通まったく食べないよ。私の母はというと、私は1人っ子で育ったんだよ。家のたった1人の子どもとしてね。私のその弟もまた1人だよ。私の両親2人はというと兄妹だったんだよ。そして、私を養子にして育ててくれた母は子どもがなくて、父はというと、たった2人の子どもしかいなかった。そして、その2人の子どもを1人ずつ取って、そして2つのゲルでそれぞれ1人っ子のように育てたんだ。当時、白米というと、わずかな物があって、それをときどき「風邪をひいたみたいだね、米を炊いてあげよう」といって少し鍋に入れて、沸騰させて炊き込んで。そしてそういう風邪を引いたときに食べさせてくれるものだったんだよ、白米をね。それに比べて粟はいつもあったね。

D: 風邪をひいたときにとっても必要だったんですね、それは？

B: 必要だったということだよ。軽い食事といって食べさせてくれたんだろうか、そういうふうには与えられていたんだ。粟はね、粟は買って食べていたよ。

D: 甘い物や果実などはありましたか？

B: 当時というのは、ほとんどなかったねえ。私たちの小さいころというのは、ドムボン・チヘルという大きな白い飴があったんだよ、圧縮されたね。そうして、氷砂糖がある。紙に包まれた飴はまったくないよ。ときどきウランバートルから来た人なんか、チュムグン・チヘル(中にとりとした部分のはいつている飴)といって、こんな長い、固い飴を持ってきてくれる。私が小さいころには、私はそういう飴を見たことがあった。ドムボン・チヘルという、こういう大きな、大きな飴があったんだよ、粉砂糖のようなものを圧縮してしまったものだったようだよ、とても固いんだよ。普通の砂糖はあるよ、箱に入った角砂糖。

D: ロシア製ですか？

B: ロシア、角砂糖はね。そのドムボン・チヘルを割ろうとして子どもたちが円になって座ってね、ある子どものデール(民族衣装)の裾を敷いて、片手に金槌、片手に刀を持って、こうやって砕いて、座っていたものだよ。

D: 自分たちで？

B: 大人が子どもたちにあげようとね。大人たちが中心地に行ったんだろうか、どうしたのか、手に入れてきて、子どもたちに割ってやろうとしていてね、そのドムボン・チヘルを。そういう飴があったんだよ。粉砂糖というのはまったく見たことがなかつ

た。あることはあったんだろうよ、それは、でも買うことはなかった。干しぶどうはときどき手に入ったよ。60年代の末、60、70、59、60年代の時代、60、61、62年のころには、中国から、干したスモモや干シアズナなどが入ってきて食べていたよ。これはとってもおいしかったねえ…今ではなくなってしまったようだね。そういうものが中国から入ってきて、食べていたんだ、中国から持ってきていたんだよ。そうして、例の戦争が終わって、ネグデルが作られて、復興して、物を持ってくるようになったんだろう。車などで物を持ってくるようになったんだろうよ。そういうことが話されていたんだよ、うちの方ではね。私たちはこうして、こうやって育った者なんだよ。こういう物を食べて飲んで育った者だよ。ヒヤラムツァクをよく食べる。内臓も。そして頭や膝下をよく食べる。

D：ヒヤラム（乳を水に入れて沸かし、冷ました飲み物、乳のお湯割り）をたくさん飲ませて、お茶はあまり飲ませなかったというようにいわれているようですが？

B：お茶はそんなに飲ませないね。

D：どんな理由があるんですか？

B：それはよく知らないよ。子どもたちがお茶をたくさん飲むと、胃もたれをおこすといわれていたんだ。子どもたちにお茶を与えてどうする、消化不良をおこすぞといわれてね。それはお腹の中の何かを変化させてしまうものだったんだろうよ。

D：そうですね、あまりお茶を飲ませなかったといわれていますよね。

B：そう、お茶はそんなに飲ませない、ヒヤラムを与える。そうこうして、春や夏になると、アイラグをお腹いっぱいになるくらい飲むからね。

D：一般的に夏は肉を食べますか、食べませんか？

B：ないね、ボルツ（揚げ菓子）を作るといって、肉はないんだよ。春のいつだったか、わからないけれど、ウーツ（保存用の肉、秋に肉を屠り皮袋などにしっかりとめて保存する。春に出してきて食べる）、ウーツなど、この入れ物に入れてまとめた肉（冷凍）を割って、それは新鮮なままだったような気がするんだよ、ウーツといっぴりひとかたまりにした肉を出してきて、それをゆでて食べるんだよ。ゆでて近所の家にもあげてね、他の家の人たちや何かにあげてね、うちはウーツを割ったからといって。それらが終わると肉を用意することになる。夏はまったく食べないよ、肉をね。

D：肉などは？

B：夏かい？ 肉を食べたいねえ。夏は肉は何もないよ。こうなってくるとね、春になってくると雪がたくさん降る、新年以後、ツァガン・サルのはじめ、家畜が出産し始める。家畜が出産するころになると、土が見えてきて、雪が溶けてきて、こうやって土の部分が丸く出てくるころになると、こうして家畜が出産するようになるね。さあ、米を炊くのに使う乳が出たというんだ。こうしてオーラグ（初乳）をゆでて食べて、米に乳を入れて炊いて食べて、だいたい、こうして肉から離れていくんだよ。と

きどきほんとうにときどき、とても寒い雨のとき、昔はというととても雨が多かったんだよ。そういう寒い雨が何日も降り続けているときに、血や肺…、なぜうちはボルツを入れなかったんだろうね、ボルツはだいたい入れなかったんだ。脂身はこんなに大きくて、脂身を切ってパンタン（小麦粉を溶かしたスープ）を作る。ああ、そのおいしかったことといたら。肉の姿を見ない（肉をほとんど食べていない）からね。

D：大麦粉や何かはありましたか？ ザムバイ？

B：大麦粉はこのあたりにはなかったよ。そのザムバイ粉というのはゴビの方にあったんだというよ。そう、私が小さいとき、大麦粉というのはこのあたりでは見かけなかったね。後になって、少し入ってくるようになったよ。そのザムバイというのはこの南側ゴビの方にあるんだというね。

D：あなたは放牧をしていて、そのあと工場で働くようになったんですか？

B：そうだよ。私は放牧をしていて、そのあと国营農場で2年間ヒツジの飼育をして、そして工場に入ったんだよ、そして工場で働いてね、30年近い年月、工場で働いたんだよ。そしてそこで定年になった。

D：工場ということですが、どんな工場だったんですか？

B：小麦工場だよ。この小麦工場はずいぶん昔に設立されたんだよ、うちのこのあたりにね。そして、この国营農場が作られて、その近辺の人びとを労働者にしたんだよ。遠く離れたゴチン（ゴチン・オス・ソム）やボグド（ソム）などから人びとを連れてきてね、労働者として働こうとやって来たんだ。遊牧民にしたり、トラクターの運転手にしたり、労働者として工場で働かせてね。

D：ほとんどは若者だったんでしょうね？

B：みんな若者だったよ、みんな私の同世代の若者たち。若い、20歳になったばかりの若者。

4 社会主義時代の祭りと信仰

D：当時、あなたが若かったころ、祭りやナーダム（祭典）というようなことはおこなわれていましたか？ どんなお祭りがありましたか？

B：おこなわれていたよ。ナーダム。ナーダムがおこなわれるんだ。ナーダム以外の祭りはほとんどないよ。ナーダムが開かれていたよ。ときどき、選挙になる、選挙というと例の選挙用のゲルを持ってきて、エルデネ・ゾー寺院のところに持ってきて、何日前にゲルを建ててしまう。そして、中にはシャタル（将棋）やダーム（ドミノ）が置いてあってね、あれもあったかもしれない、こういうラジオ、52（ロデイナ52）というものがあったんだよ、そのラジオが置いてあった、そして、こういう広報の掲示板など。それらを見ようとして混み合っていたよ。それはまた、とても楽しいものだったよ、選挙を行って競馬をする、またシャタルやダームの選手権をおこなうんだ

よ。相撲も取る。それ以外には、ナーダムがあった。ナーダムはとてもすばらしいものだったよ。ああ、私たちにとってはね、今の子どもたちはどう思うかわからないけどね。朝は早く起きて、ウシの乳搾りをしたあと、ここから南へ、シャンハに向かうんだよ。搾乳をして、日が昇る前に乳を渡して、そのナーダムに行くんだよ、馬に乗って走っていく。みんな一緒に馬に乗ってね。そして夜に戻ってきて、また乳搾りをして、乳を渡して翌朝にはまた行くんだよ。3日間おこなわれるものだった、ナーダムはとてもすばしかったもんだよ、ナーダム。3日おこなわれて、1日目、2日目は子どもたちを行かせる。3日目になると両親が行く、年配者が。今思うと、その3日目はアルヒ（ウォッカ）や何かを全部、3日目にすべてを集めて飲んだんだろうよ。私はそう思っている。そういうナーダムというものがおこなわれていたんだよ。

D：ツァガン・サルは？

B：ツァガン・サルかい。一時期はしてはならなかったんだよ。一時期ツァガン・サルは、私が小さいころはおこなわれていなかった、新年の挨拶もさせなかった。そして、例の仏へのお供えの食べ物や米なんかは供えさせない。大箱の中に、前に開くこんな形の箱に入れておいて、夜更けになると箱を開けて、そこで灯明をあげる、こんな感じだったんだよ。

D：ツァガン・サルに？

B：そう。一時期とても大変だったんだよ、私が小さい頃というのは。とにかく、そんなことをしたというと、そのバグの教化者という者たちが、とても威張っていた奴らが、いたんだよ。常に走ってやってきてうるさいんだよ、常に走ってきてはそのお供えのお皿に入った食べ物や米、仏へのお供えを調べてやめないんだよ。

D：それはいつくらいの年代ですか？

B：それは60何年だったよ。60年そう、58、59年に57、58年このくらいにはまったく新年の挨拶をさせなかったよ。後になると、50年代の後半にネグデルで働くネグデルチンたちの祭りだといって（彼らはするようになった）、労働者たちは行ってはならない、このネグデルの家畜を飼っている遊牧民はツァガン・サルを行っていたんだ。ずっとそうしていて、最後にはツァガン・サルをさせるようになった。

D：当時、あなたはツァガン・サルをすることはできなかったんでしょ？

B：できないよ。私たちは労働者だといって、ツァガン・サルをおこなわせないというんだよ。

D：灯明の25（旧暦の冬の最初の月の新月から数えて25日目に多くの灯明を灯して徳を積む習慣）というのは行っていましたか、当時？

B：私は暗闇（無宗教、無知識）の中で生きてきたから、ゾリーン25は知らなかった。その後、ゾリーン25と、年配の人たちはそのゾリーン25を、後になって、かなり後になって行ってたよ。他の場所では行ってたんだろう。私はまったくその暗闇のま

ま過ごしてきて、信仰心の薄い人間なんだよ。

D：あなたが幼いころ、あなたの家には仏画や何かはありましたか？

B：あったよ。仏画を隠してしまうんだ。仏画をわかるように置くと、例の奴らが怒ってね、何というものだったか、その捕まえて行くといってやめない、宗教の残骸だといって、黄色い宗教（チベット仏教）の残党だといって。そして、封建主義の残りだといって、仏を拜むことは表だっておこなわせない。仏や供物というのは私が小さいころにはこの岩の空洞にたくさんあったんだよ。岩の窪みに経典などが、そこそこに仏が。そうやって隠していたんだろうよ。

D：夜になると仏を出してきて、灯明やお香をあげますか？

B：ああ、そうだね。こんな大箱の中にしまい込んでいて、夜、大箱の前面のふたを開けたままにしておいて、灯明やお香をあげるんだよ。

D：毎夜あげますか？

B：毎夜あげるよ。それを毎夜あげて、朝になるとお供え物をする。そして素早く閉めてかぎをかけてしまう。

D：そのほかの家はどんな感じだったんですか？

B：知らないね。そのほかの家がどんなだったか、小さかったからねえ、そのころは。うちの近くの家ではだいたいそんな感じだったよ。

D：お守りや何かを身につけますか、つけませんか？

B：つけるよ。こういうこんな感じのもの。仏（の絵）やお守りやなんかを、皮を粗く縫ったお守り袋を作って、そこにに入れて首からさげていたんだよ、小さいころ。それまではさすがに調べられないみたいだったよ、大人も子どももそういう仏を持っている。

D：まじないの言葉や何かを教えてくださいませんか、例えば何かから怖がっているときなど。

B：教えてくれるよ。誰もいない草原に行くときに、怖かったりしたら、それを唱えなさい、今はあまりよくない時代だから、これを唱えていなさいとそれを教えてくれるんだよ。

D：両親が教えてくれますか？

B：ああ。両親が教えてくれる、他に誰も教えてくれないよ。

D：当時、一般に僧侶はいたんでしょうか？

B：いないよ、僧侶の格好をした人はまったく見かけることはなかった、僧侶だという人はときどきいたように思うよ。しかし、僧服を身につけることはない、普通の人の格好をしていた。

D：そして、家畜を飼って？

B：家畜を飼って、本当に普通に、そうでなければ、例の封建主義の残党といって捕まえていかれてしまう。

- D：妻子はいたんでしょうか、いなかったんでしょうか？
- B：妻子を持っているよ、彼らはみんな妻と子どもがいる、あそこから出て、寺院から出て（還俗して）、妻子を持つようになったんだろうよ。みんな妻子持ちのそういう人たちだよ、宗教が認められてから、この寺院、エルデネ・ゾー寺院にたくさん僧侶になって戻ってきたんだよ。だいたいみんなとても知識のある人びとだったようだよ。
- D：そういう人びとは隠れて経典を読んでいたんでしょうか？
- B：ああ、読んでいたよ、深夜に読経していたんだ。ツァガン・サルのもとには必ず年配の人びとを連れてきて、とっぶり夜がふけたあと、天窓の覆いを閉めて経をあげさせていたんだよ。天窓の覆いをしめなければ、人が入ってくるかもしれないから。そのように深夜そうやって経を読んでいたんだよ、声をひそめてね。
- D：僧侶からはときどきいろいろなことを聞いたり（教えを受けたり）したんでしょうか、どうだったんですか？
- B：そうだねえ、聞くことは聞くね。でも、聞いている方も、聞かれている方も、絶対秘密にして聞かないと、「そういうことを聞いて、占わせている」と告げ口されたとしたら、双方罪に問われるんだよ。内密に聞いていたんだよ、後になって、少しはましになって…。
- D：どのくらいの時期からましになったんですか？ だいたいいつから仏教への信仰を明らかにできるようになったんですか、それぞれの家では？
- B：だいたいましになったのは70年に近くなってからだよ、恐れるのをやめたんだよ。それ以前は仏教を信仰することを、一般的に少し怖がっていたよ。僧侶に経を唱えさせる、その人を招く、祝福やお香を炊いてお清めをさせることや何かから、とても恐れていたねえ。70年代が近づいたころ、少しましになったんだよ。
- D：ダライ・ラマがモンゴルを訪問したとき、そのときあなたはそれを聞いていましたか？ 田舎にいるとき、60年代の、70年代のころ？
- B：私はそのころはソム中心地で仕事をしていたね。
- D：そういうことを聞きましたか？ ダライ・ラマが来る、モンゴルに来るんだということなどを聞いていましたか？
- B：ああ、聞いていたよ。ウランバートルにダライ・ラマがやってきて。それはというと70何年だったんだろうか、70年代だったかね。かなり昔のことだよ、ダライ・ラマがウランバートルを訪問しているという。どこに行った、ガンダンの丘が人でいっぱいになって入り切らなくなってしまった、バスや道路が通行止めになったなどが噂されていた。そして、そして、その米をダライ・ラマがこうやって撒き散らすとそれを拾おうとして人が折り重なって倒れたなどと話されていたよ。
- D：それを、当時は反宗教ということをどんな人びとが語っていたんでしょうか？ 党の指導部の人たちやなんかですか？

B：ああ、例の党の人たち。

D：その人びとは反宗教の宣伝をかなり行っていたんでしょ？

B：ああ、とってもね、かなり行っていたよ。宗教というのをみんな悪くいうんだ。意識を混乱させるものだといって、長い年月200年あまりもそれに抑圧されてきたんだといって、それらを悪くいう、とても悪くいうんだよ。80年代になっても、悪くいうのは変わりなかったんだ。ずっとそうした状態で、最後にはかなりましになったんだよ。

D：あなたの家には経典などはありましたか？

B：うちには経典などがあったんだろうけど、どうしたかは知らないよ。

D：経典などをどう使っていたんでしょ、僧侶などに持って行って読ませたりしていたんでしょか？ それともただ置いておく？

B：そうだねえ、ほとんど読ませたりはしないよ。ときどき必要なそのとき、1年に1回読ませていただろうか、そういう読ませる経典がうちにはあったように思う。それをときどき読ませるんだ。うちは後になって経典を持つようになった家だからね。そうして、私が縁遠くなって、ある家に嫁ぐことになって、家を出てしまった。それからどうしたのか、無くなってしまったみたいだよ。経典もない、仏もない、どちらも無い。思うに、うちの母が「さあもうやめよう」といって無くしてしまったんだろう、エルデネ・ゾー寺院に納めてしまったのかもしれない、どうしたのかねえ。

D：あなたは若いころ、この仏教についてどう思っていましたか？

B：ほんとに、何も考えてなくて、人のいうようにそういう嘘のものだと思っていたよ。私みたいなものにはだいたい嘘を話すんだからね。今思うと、いつも意識を混乱させる、封建主義や何かだとその2つが話されていたんだ。本当にそういうもんだと思っていたんだよ、私は。

D：アルテリ（手工業生産組合）はどこにあったんですか？

B：アルテリかい？ このホジルトに「ホジルト・アルテリ」というのがあった。このシャンハには「シャンハの下センター」というのがあった。また他にもう1つのアルテリがあったよ。靴を作っていて、とても美しいモンゴル靴を作るんだ。

D：アルテリに僧侶たちはたくさん働いていたんでしょか？

B：年配のいろんな人たちが働いていたんだよ、そうだっただろう。後になって、残った何人かの僧侶たちがいたんだよ、このシャンハで働いていた人びとの「ホジルト・アルテリ」に私は本当は行ってみたことがない。ホジルトにはあった、「ホジルト・アルテリ」というのにね。ホジルトというのは一般にかなり上のほうにアルテリがあって、温泉や保養所があって、またそのあたりにはかなり大きな寺があったようだよ。

5 文化躍進運動

D：文化躍進運動というのがあったときはどんな感じだったんですか、その文化躍進運動は？

B：おお、そうだね、文化躍進運動をやったときは、私はもっと大きくなってしまっていた、もっと大人にね。文化躍進運動っていうのは本当にひどいもんだったよ、私たちをひどい目にあわせたもんだよ。文化躍進運動、3つの省の検査だといって。文化躍進運動がやってくるといって、3つの省の検査だといってね。

D：文化躍進運動で何をやるんでしょうか？

B：それはもういろんなことをさせるんだよ。各人ごとに個人の布団を持ち、個人に2枚ずつの取り替えるためのシーツをもって、2枚ずつの交換用の掛け布団カバーをもって、そうやってそれらがちゃんと準備して洗ってあり、こうしてある。夜用の布団はまた別で、そしてそれにつけるシーツたち。そして入浴するためのタオルや風呂桶、そして足ふき用のタオルや何やとって各人ごとに1つずつ。それはね、本当に私たちをひどい目にあわせたよ。たくさんの子どもたちと仕事のかたわらでね。夜には、[疲れていて] こんなふうの子どもたちの靴が散らばったまま、寝てしまうしかなくてね。そうすると深夜、家に入ってきて調べるんだよ。当時、不可という成績をつけられたら、どうしよう、どうしようとばかり思っていたよ。さすがに牢屋には入れないだろうけどね。そんな感じだったよ、その文化躍進運動っていうのはね。子どものおもちゃを置く一角、本の一角、本棚、衛生用品がなどと、ないものはないよ。そして、このゲルの柱から1つ1つノートがぶら下げられる。そして例の長、その地区の長や何かが入ってきて、調べるんだよ、1週間に2回は来なかったけれども。見て悪かったならば、そのノートに不可だと成績をつける、優や良ならば、良というふうにつける。そうやってこの柱の上の方などを、この天窓の中側を、彼らは綿でこうやって拭いてみてね、なんて傲慢な奴らだろう。カーテンの棧などもこうやって拭いてみて、埃がついていたら不可だよ。

D：今こうやってカーテンが引かれています、こういう文化躍進運動のころから、入ってきた習慣ですか、家々ではカーテンをつけていますよね？

B：そう、このベッドの前？ それはそのころから自分たちで飾るようになったんだよ。そして家ごとにこういう塗装をしたゲルじゃない。その文化躍進運動のために、ほとんどの家がみんな茶色いゲルだったから柱を洗って、きれいな色にしようとするけど、できない。だから、削って削ってね、そうして洗って拭いて、柱や天窓を洗ってばかり。その文化躍進運動っていうのは本当に大変だったよ、大変だったように思うよ。

D：以前、人びとはそれらを使っていたんですか？ そのシーツや何かを。あるいはただしまっただけだったんですか？

B：使うよ。家族が多い者たちはそれらをかぶって眠って、その布団や何かはどんどん

増えていくんだよ。そしてそれはいつもきれいにしておかないとね、突然入ってきて検査されて…。

- D：鉄製のベッドがあったんですか？ それとも木製のベッドがあったんでしょうか？
- B：木のベッドがほとんど、そして1つこういう青い枠の、緑の枠のベッドがあったんだよ。手に入る上等のベッドがそれだよ。この鉄製のベッドというのは、それらのベッドの後に入ってきたんだよ。うちが中心地に移ってきて、1つの青い枠のベッドを置いて、そして1つの木製の色のついた（モンゴルベッド）…それがあって、本当にきれいな物に思われたよ。今でもうちにあるよ、煙で黒くなってしまったけどね。田舎の者たちにはそういうベッドはないよ。とても上等の物といえば、その色のついたベッド（モンゴルベッド）、そしてだいたいこういう板で作った寝床。板寝床という、長い板にこういう足をつけて、作ったものをみんな置いていたんだよ。
- D：同盟（組合）のメンバーとならなければならない？
- B：そう、同盟（組合）のメンバーだよ、労働者同盟のメンバー、労働者同盟のメンバーでなくてはならない。
- D：党員でなければならないんですか？
- B：党員は絶対ではないよ。よく仕事をする、よい教育を受けた人びとが党員になるんだよ。党員になるときにとても大変だっただろうよ。3年見習いをして、そうして、こうして、ってね。3年間見習いをしたあと、党員にしたんだという。
- D：当時、給料は生活するのに十分でしたか？
- B：十分だったよ。給料はね、その額というのはあれだよ、評価がいいんだよ。お金はお金らしかったんだよ、当時はね。当時というのは生活するのに十分だったよ。見張り（管理人）は100トゥグルグくらい、120トゥグルグくらい、見張りや掃除夫や何かは120トゥグルグの給与をもらっていた、一部、それらの上役になると、少しまた180トゥグルグや何か、そしてこの工場ではね、小麦畑などで機械を動かして働けば、わりといい給料がもらえる。350、400トゥグルグ多くもらうよ。400や350トゥグルグ、当時の400、350トゥグルグといえば、今を思えばたくさんのお金だよ、いっぱいお金が買えるお金。うちはというと、私たち2人ともノルマで働く、私も自分のノルマをこなし、亡くなった夫もノルマをこなして、私たち2人は給料をもらっていたんだよ。だから十分だったね。
- D：品物や何かはどうだったんでしょうか、わりと豊富だったんですか？
- B：おお、品物は豊富だよ、商品は悪くなかったよ。たくさんあったんだ。ダーリムバ（粗製の木綿布）や何か、ヤムボー（粗い木綿布）やなんか、いろいろね。
- D：ロシア製ですか？
- B：ロシア製だよ、みんなロシア製。ダーリムバ、ヤムボー、そしてサテン、ジグーン（布の一種）。今ではどれも見かけなくなったね。

D：中国製品は？

B：今、中国製品は豊富だね。

D：中国製品はその当時あったんですか？

B：中国製品、絹が入ってきていた。18の絹（1メートル18トゥグルグで売られていた絹）、36の絹（1メートル36トゥグルグで売られていた絹）とって、それは、それは美しい絹、今の高い絹があった。ロシアは絹製品では今ひとつの所だね。ロシアからとってそういう美しい絹はまったく入ってこない。ロシアのもっとも美しい絹は柔らかくて、まあそれなりの絹だったよ。22（1メートル22トゥグルグで売られていた絹）とってね。それからいろいろなちりめんがよく入ってくる、ロシアから。ロシア製といわれていたけど、本当はどこからかは誰も知らなかった。そして粗悪な品物がたくさんやってくる。私たちは今の子どもたちのように着飾ったりはしなかったよ。ヤムボーやダーリンバでデールを作って着るんだよ。外出するときはサテンでデールを作って着るんだよ。そして大きくなって、ちゃんと着飾るようになると、絹や何かでデールを作って着るんだよ。私たちの着る服というのは絹と靴の2つだけだったから、消費は少なかったよ。いろいろな既製服なんかはほとんどなかった。

D：工場にはロシアの専門家などがいたんですか？

B：工場はハンガリーのだったから、ハンガリーの専門家たちがいたよ。これはハンガリーの工場だったんだよ。

D：へえ、そうですか。

B：そう。だからハンガリー人の専門家たちがいたんだよ。2、3人のハンガリー人がいたよ、ハンガリー。

D：彼らはここにずっとこうやって？

B：そう、ずっとその中でね、彼らは宿舎を持っていて、中に住んでいるんだ。そして、順番に交代で昼夜なく工場の中で働いている、工場を作って、そして技術を教えてやってね。

D：訳がついていたでしょうね、今思うと？

B：そうだね、通訳がいたんだろうねえ。でも特別にそういうものはなかっただろうよ。身振り手振りでね、こうやって。そうやっているうちにその言葉を覚えてしまうんだろうよ、一緒に働いている人たちだから。これはハンガリーの工場だから、ハンガリー人がいたんだよ。その南の発電所はポーランド人がいたよ。ポーランドの援助で建設されたからね。このアルコール工場これらは…。

D：遊牧民の子どもたちはピオネールに入る、そういうものだったんでしょうか？

B：みんなピオネール。ピオネールじゃない人なんていないよ、みんなピオネール。

D：学校に行く、行かないに関係なく？

B：学校に行った、学校に行く、行かないは関係ない、学校に行けばピオネール、例の

赤いスカーフを首に巻いてね、デールの上に結んでね。

D：あなたもつけていましたか？

B：どんな制服とかっていうもんじゃないよ、私のころはね、デールの上にそれを結んでいたんだ。

6 民主化時代の宗教と経済

D：この地域で有名なラマや転生者などという人びとの歴史や何かもあったんでしょうね？

B：ああ、あったらうよ。まったく知らないよ。私は暗闇の中で生きてきた、暗闇のままやってきた人間だからね。歴史や何か、あったと思うよ。うちのこのあたりには「オルホンの先生」という名前の人が1人いたんだ、ただ1人、年を取った人がいたんだよ、その上（北側あるいは川上）の方にね。

D：あなたはその後いつごろから仏教を信仰するようになって、こうやって家でまつって来ましたか？

B：まあねえ、例の宗教がよくなってからね…うちはだいたい信仰のない家だったんだよ。そうしていて、あとになって、かなり最近、この90年代から仏をまつようになったんだよ。

D：その僧侶は誰ですか？

B：どの僧侶？

D：それ、そっち側にある写真の？

B：違うよ、これは私の子どもたちの父親、父親の写真だよ。

D：ああ、そうですか。

D：私は僧侶か何かとだろかなあと…。

B：僧侶じゃないよ。

D：そうですか、この仏たちを最近になってまつたんですか？

B：そう、最近ね…。仏の名前も知らないんだよ。最近になって子どもたち…

D：経典や何かも最近まつたんですか？ それとも家にあったものですか？

B：うちにはまったく経典なんてなかったよ。これはうちの1人の息子のものだよ。上の子の2人の子ども（孫）のうちの1人、もう1人の子どもの2人の僧侶がいるんだよ、その2人が1つずつくれたんだよ。

D：ああ、子ども、あなたの子どもの中でラマになった子がいたんですか？

B：うちの1人の婿が僧侶なんだよ。あそこの、エルデネ・ゾー寺院の僧侶。経典のない家なんてないもんだとってね、その大きい方をくれて、その小さいほうをゴムボ（人名）がくれたんだよ、うちの息子の子ども（孫）。それもまたエルデネ・ゾー寺院の僧侶だよ。それがくれたんだ。

- D：あなたは息子が僧侶になるとき賛成しましたか？
- B：それは、あれだよ。その小さいほうはといううちの息子の子ども。その大きいほうはうちの婿だからね。これに対して嫌だなんていう話はどこからも出てこないよ。彼らはそれぞれ別々に自分たちの好きな道を生きているんだからね。
- D：あなたは今は毎日エルデネ・ゾー寺院を拝みますか、あるいはドゥイチンの日（春の最初の月の上旬、新年の15日間）だといって拝むんですか？
- B：ああ、ときどきそういうことをするよ。熱心じゃないからときどき忘れてしまうんだ。毎日お供えしようとは思っているんだけどね。
- D：このシャンハの寺院はいつ開院されたんですか、だいたい？
- B：このシャンハの寺院はいつ復興されたんだっけ？ …最近だよ。それほど間がないよ、92、3年の時代だったか。
- Bの娘：うちのお父さんが94年に亡くなって、そのころやっと復活したところだった、94年に読経をさせるといって…。
- B：ああ、そうだよ、亡き夫が亡くなって、それでシャンハに行って…そのころ復活したところだったよ、92、3年に復興したんだ。
- D：そのときはかなり年配の人びとが法会にはいたでしょうね？
- B：そう、年配の人たちがいたよ。今では年配の人はいなくなってしまったよ。かわいそうにそうしてみんな年を取って、年寄りから先に…。今では子どもたちが主にいるようだよ。
- D：今ではこのエルデネ・ゾー寺院にラマの転生者はいるんでしょうか？
- B：エルデネ・ゾーにはだいたい少ないよ。エルデネ・ゾーには年配の僧侶の人はほとんどいない。だいたい若い僧侶だよ。一般にエルデネ・ゾー寺院には年配の僧侶はほとんどいないねえ。
- D：あなたの世代の人びとから僧侶になった人はいたんでしょうか？
- B：いることはいたよ、ときどきね。今はもういないだろうよ。私の世代の人の中から僧侶になった人はとても珍しく、少なかったよ。南側のシャンハにシヒハヤン（人名）だけがいたんだよ。このエルデネ・ゾー寺院にはほとんどいなかったんだよ、見かけなかった。私の世代より少し年配の者たち、年配の僧侶たちがいたんだよ。そして後の世代、今30何歳より若い20何歳のあなたたちのような、こういう子たちの僧侶がいる。このエルデネ・ゾー寺院の最高位の僧は若者だよ、30何歳の人がいる。うちのプレブはまだ40歳になっていないだろう、なったっけ？
- Bの娘：なったわよ。42歳よ。
- B：おお、そうならばプレブと同年だよ、うちのプレブと同年だというよ。その最高位の僧は…。次のヒャムバ（人名）はもっと若いよ。
- D：このエルデネ・ゾー寺院の？

- B: そう, もっともっと若いんだよ。
- D: 2人のヒヤムバがいるんですか?
- B: 2人。イヒ (大きいほう, あるいは年上のほう)・ヒヤムバはかわいそうに身体が弱いみたいでね, ときどき座って, ときどきは座らない。
- D: あなたはこのお寺に参拝しますか?
- B: 行くよ。
- D: どんなときに行きますか, 法会や読経をさせるといって行くんですか?
- B: 法会のときや読経をさせるというときに行くよ。そしてときどきドゥイチン (新春の法会) のときや何かに行き, 拜むんだよ。今はあまり体の調子がよくないから, 行けなくなってしまったけれどね。このエルデネ・ゾー寺院の大ゲスグイ (統括する地位の僧), はうちの婿なんだよ。
- D: そうですね, なんていう名前ですか?
- B: エルデネチョローン。よくあれだよ, ウランバートルに行っているよ。
- D: 今はウランバートルに行っていますか?
- B: 行ってるよ。今はあっちにいる。
- D: パーサンスレンというのはそのヒヤムバですか?
- B: そう。
- D: ウランバートルに行っているようですよ, また。
- B: ああ。パーサンスレンとうちの婿のふたりは, 同い年だということなんだよ。
- D: その2人がですか?
- B: そうその2人は同い年。1人が1歳年上だったっけ。同い年だといったよ。そう, 今はウランバートルに行っている。南のこのオター・グムブや何かにもよく行くよ, うちのその婿はね。
- D: ここで僧侶になった人ですか?
- B: そう, ここで僧侶になった, とても小さいころになったんだよ。
- D: 90年代になって, 幼い子どもたちが僧侶になったその時期ですか?
- B: ああ, そうだよ, 当時にラマに…。
- D: 当時なぜそのように小さな子どもたちがラマになったんでしょうね?
- B: 知らないねえ。僧侶にみんな憧れていたんだらうよ。今でも小さな男の子たちを僧侶にしようという話が聞こえてくるんだからね。
- D: 自分からですか?
- B: 自分から。この僧侶というのはなかなかいいものだと思うんだらうよ。うちからはその息子の小さい子どもたち, それらの中で一部は僧侶になりたいなあといっているようだよ。うちからはそのうちの1人の息子の子どもがエルデネ・ゾー寺院で僧侶になっているよ。それと婿の2人が僧侶だよ。

D：ここではその、他に、一般に90年以後、仏教以外の他の宗教がありますが、ここでは人びとは…？

B：おお、ここにもあるよ、ここに何ていったっけ、イエス（キリスト教系）というものがあるよ。

D：ああ、そうですか。

B：歌を歌わせてねえ。そういうものがあるんだよ、この辺りには。

そのイエスはかなり昔からあるよ、かなり前に入ってきた。いまもあるだろうよ、あるようだよ、ある、ある。

D：子どもたちや若者たちがそこに出入りしているのでしょうか？

B：そう、子どもたちや若者が、最初彼らがやって来たときに、たくさん出入りしていたんだよ。今は特に目立たないけど、どうしたんだろう。うちのこの辺りからはそれだよ、信者になった若者たちが大勢いるようだよ、労働者というか、役人というか。それらは最初に本を配って、道を歩いている若者たち、柵のあいだなんかから、こういう小さな本を配っていたんだよ。今はやめたようだね。食事や飲み物も与えていたんだというよ。

D：ここには学校があるようですね、宗教の？

B：そう、そっち側にね、仏教の上級学校（大学）があるんだよ。その校長をしているんだよ、うちのその婿は。このエルデネ・ゾー寺院の僧侶たちというのは、そうしているんだよ、いくつかの仕事を兼業しているんだよ。国から給与というものがなさそうだから、それでやっていっているんだから。

D：社会主義の時代には一般に宗教を厳しく監視して弾圧していたのでしょうか、どうだったのでしょうか？

B：そうだよ、ひどく弾圧していたんだよ、宗教を。社会主義時代というのはひどい目にあわせるんだよ、これを弾圧しようね。少なくとも人びとが相談したり、布教したりすることはできないんだよ。ときどき、1人の僧侶、時折優れた人の子どもや何かに相談したいと思っても、隠れて夜が更けてからの時間だけ尋ねることができて、そしてまた、不必要に何度も訪ねることはできない。何もできなかったよ…民主化してからやっと公然となったんだよ。それ以前は絶対に秘密だったんだよ。

Bの娘：私はよく覚えているわ。80何年だったか、うちの両親にツェレンナドミドという長の人を仏をしまえとっていたのを覚えているわ。

B：そうだったよ。そして80何年ごろはその仏を出させなかったよ。ひた隠しにするんだよ、それを。チーデレク（知人の名前）までも、ダワースレンが病気にときにはシャンハに行って僧侶に相談しよう、深夜に行ったもんだよ。かなり前のことだよ、それは。深夜相談して、もどってきたんだ。怖かったんだと、人に知れるのを恐れているんだとそういっていた。シャンハに行って相談していた、そこには僧侶がいたん

だよ。その土地の人間なら知っている、優れた人だということを。もしも世の中に知れたら、例の封建主義や何だといって、やられてしまうだろうよ。

D：オポーをまつったりしていたんでしょうね？

B：いいや。オポーをまつるというのは、それはなかったんだよ。民主化したあと、このオポーをどこでもまつるようになった。それだけでなく、オポーをまつる、作るそういうことなんかは、もしもそれをまつっていたならば捕らえられてしまうだけでなく、処刑されてしまうだろう。当時には自分の財産というものはなかったものだから、仕事をやめさせると脅していたもんだよ。仕事から追放すると、工場長がやめさせるといって。

D：普通にアルツ（松の芽を粉にしたお香）やお香を焚くということはありませんか、そのころ？

B：ああ、焚くよ。アルツはね、それを焚きなさいといっていたんだよ。それはなぜかということ100メートル以内を清めているといっている、アルツを焚きなさいといっていたんだよ。アルツは焚いていたね、大丈夫。

D：そして、自分をこうやって煙をかけて誰がお清めをしますか？

B：お清め？ 自分で清めるよ、誰かに頼んでするのはだめだっただろう。ちょうど子どもが入院しているとき、外からアルツを差し入れようとする、シャンハの人たちはいつもこういうことをするといっているのしっていたものだよ、お清めをするといっている怒っていたんだよ。ゾル（子どもの名前）が入院して、かなり後のことだよ、1年生になっていた、そのとき、知り合いの同郷のそういう当直、看護婦が当直をしているときに、アルツを入れないと、持ち込ませないんだよ。シャンハの人たちは信仰をしている、アルツを持ち込んだといっている。

D：では少しのアルツやお香なんかはあげていたんですね。

B：そう、あげるよ。そして後になって、この民主化したあと、本当に恐れることをやめたんだよ、仏や信仰、ラマ、転生者、何だろうが特に怖がることはない。

D：信仰者連合というのが一時期でできましたよね、90年代以後？

B：ああ、そう。

D：その人びとや何かがやってきて寺を支援したんでしょうね？

B：ああ、そうだろう、私はよくは知らないよ。

D：あなたが小さいころ、経典をこうやって持って、ゲルを回ってこうやってぐるぐる回る、そういう習慣を行っていたんですか？

B：するよ、夜になると、夜にはゲルをこうやって、経典を持って家を回っていたんだよ。

D：それは子どもたちが持って回るんですか、あるいは大人が回りますか？

B：私たちが自分で回っていたよ、それがどういうことだったのかは知らずにね。帯を

しめて、帽子をかぶって、とても美しく回るんだよ、それは。何回でも回るんだよ、そしてドゥンゲルドゥンゲル（経文を唱える声）といて回っていたもんだよ。マーニタルニア（経文）を唱えて回っていたんだよ。

Bの娘：エルデネ・ゾー寺院にはまったく僧侶はいなかったのかしら？

B：いなかったよ。このエルデネ・ゾー寺院は完全に閉鎖されていたんだよ。この仏塔、今この外側の仏塔はみんな頭部がない。利用されずにいるうちに、崩れ果ててしまったんだよ。そして、これは後になって、70何年から始まって、修復して、博物館にすると修理をして、博物館にするととてもきれいに修理してね。そして博物館になって、そしてその後、僧侶が法会をするようになったんだよ。

D：この法会の僧侶たちはこのあたりの子どもたちですか、この辺りの僧侶ですか、それとも？

B：だいたいはこのあたりの者だよ。このあたり、エルデネ・ゾーは大勢の僧侶がいて、秋の法会や何かには僧侶でいっぱいになってしまうんだよ、ドゥイツェン（ドゥイツェン）の法会ならばよりたくさんだよ。

D：子どもたちなどに名前をつけるときはまた、年配の僧侶の人のところに行って、名前をもらっていたんですか、それとも自分たちでつけますか？

B：もらうよ。ほとんどは自らつける、でも、つけてもらうこともある、年配の人からもらっていたよ。秘密で訪ねて行ってもら。うちの亡くなった夫の親戚だという、とても優れた僧侶だといわれている人がいた。1地区にいたんだという。ダワースレン（子ども）の名前をその僧侶からもらったんだよ。アンジャー（僧侶の名前）のところに行きなさいと義母がね、さあ、おまえはアンジャーのところに行きなさい、夜に密かにいきなさい。そしてそのころ、60何年、62年だったかね、かなり夜が更けてから行きなさい。名前を聞いた朝の色になってね、聞き終わったときには。とても優れた人だったというよ。そしてその人から名前をもらったんだ。そして「ダワースレン」という名前をつけて、黄色い物で襦袢を作りなさいという、「さあ、このあとの子どもたちの名前はおまえが自分で名付けなさい。どんな曜日に生まれるか、その上にスレンという名前を加えて名付けなさい」とそういていたんだよ。

D：人が亡くなるときにもまたアルタン・サヴ（金の容器）や何かをまた秘密に開かせていた（葬式などの助言をうける）んでしょうか、どうだったんでしょうか？

B：そう、開かせていたんだよ。開く人は滅多にいなかったよ。1人の人が、シャンハにはたった1人の人が開いていたんだというよ。そしてその後、このあたりにも開く人がいたんだろうよ。いやほとんど開かせないんだよ、それからとても恐れる。そのアルタン・サヴを開かせに行き、知られれば、それは許されないことだといつてね。

D：人が亡くなるときに、どのように葬られるんでしょうか、特に何もなくて、日や何かを見ないでただ葬られていたんでしょうか？

- B：日を見るよ。よい日，よい曜日を見ないはずがないよ。見てそして，それはね…。
- D：自分たちで見ますか？
- B：自分たちで，そのダワー（月曜），パーサン（金曜）なんかを数えてね。そして私が小さいころには，そんな特別なことはおこなわれていなかったんだよ。ウシの曳く車の上に置いて，そして吊いをしに行くもんだったよ。
- D：そのまま置くんですか？
- B：そのままだよ。当時には多くの人には必要ない，1人の人が吊いに行くんだよ。息子が誰か，自分の家族や近い者がね，特別にそういう吊いをしてくれる人もいたよ。そういう1人くらいのそういう人が，1人でその荷牛車を曳いて連れていくんだよ。
- D：そしてどうしますか，灯明を灯しますか？
- B：ああ，灯すよ。灯明を供える，灯明を供えて，経や何かを当然読むんだよ，自分たちでね。
- D：それは特に制限されていなかったようですね。
- B：それを知られないように，秘密でね。それは特に知らせたりしない。
- D：ヨールカ（クリスマス）というお祭りは，いつごろから入ってきたんでしょうか，モンゴルに？
- B：かなり昔に入ってきたんだよ。このあたりにはちょうど国营農場が建設された，その年にヨールカを行っていた。他にモンゴルで，ウランバートルなんかでいつ入ってきたのかは知らないよ。
- D：どのように祝っていたんでしょうか，映画に出てくるように冬のおじいさんや何かがあったんですか？
- B：ああ，そうだよ。冬のおじいさん，そしてその雪の娘たちとダンスをするんだよ。冬のおじいさんはとても白い長いひげを生やしたおじいさんだったね。当時というのはヨールカの飾りや何かはいろんなものがあるよ。糸をこうやって引っ張っていて，そこに綿をこうやって燃って，そして紙でまた燃ってね。色をつけて何層にもしてね。鎖や何かも紙でこうやって作っていたよ，あなたたちの時代も作っていただろうね。うちの田舎ではこうやって作っていたんだ。紙でこうやっていろんな色に染めて，鎖を作るんだよ。今と同じような，とてもきれいな飾りなんかはないんだよ。
- D：ツリーの木なんかは入ってきましたか？
- B：ツリーの木はね，山から持ってくるんだよ。でも今，最近ではツリーを持つようになって，山の木を持ってくるのをやめたようだね。山から緑の木を見つけてくるのは。
- D：それは家ごとにそうするのですか，それとも？
- B：しないよ，家々はしない。ただこれは国营農場の公的な機関がするもんだよ。
- D：普通の家ではだいたいお祝いしたんですか？
- B：お祝いするよ。でもそんなに盛大にヨールカ（ツリー）なんかを飾ったりはしない

よ。後になって、90年代以後、子どもたちにツリーを飾ってやるべきだと、飾るようになった。私はそういうものにとてもうといんだよ、うちはだいたいそんなふうにつリーを飾ったりはしなかったね。

D：当時、ロシア人たちはいたんでしょうか、一般にハラホリンに？

B：いなかっただろうよ。ロシア人を知らなかったよ、だいたい見かけることはなかった。

D：中国人は？

B：おお、いないよ。中国人はこの水路を建設して、それが終わると、追い出されて出て行かされてしまったよ。うちのハラホリンには中国人まったくいなかったと思う。少しの、1人くらいの年寄りの中国人がいたということもなく、まったくね。この南側、シャンハの方には1人か2人の年寄りの中国人がいたよ。それはそうやって暮らしていた中国人を国民党の兵士の追放というものがおこって、そのときに彼らを追放させてね、残った者を集めて連れて行ってしまったというよ、まったく抵抗できなかった。

D：ああ、とても昔。

B：とても昔。

D：20年代ですか？

B：そう、そして中国人はいなくなった。そして残った中国人を、私がとても小さいころ、50何年ごろだったからよくわかってはいなかったよ。そして残った中国人、この町中は中国人でいっぱいといっていたんだよ。残った中国人を集めて、追い出して、国外に追放してしまった。そして、ほとんど中国人はいなくなったんだ。今では、中国人がとても多くなってしまっているよ。中国人に支配されると危険なんだというよ、バザルワーニーホームパド（厄除けの意味で用いられる感嘆詞、ああ、仏さま）。

D：ロシア人たちには好意的だったんでしょ、当時？

B：ああ、ロシア人には好意的だったよ。ロシアを褒め称えていたんだよ。ロシアをととても褒めるんだよ。わがロシアの兄たちといってほめていたよ。

D：一般に今、人びとはたくさんアルヒを飲むというようですが、当時はだいたいアルヒをよく飲んでいただんでしょうか、どうだったんでしょうか？

B：ほとんど飲まないよ、アルヒを。アルヒはとても貴重だった、今と同じようにこういうロシアのアルヒなんかはとても珍しかったんだよ。ときどきわずかにモノポリ（モンゴル製アルヒの名前）というときどきそれがあるっていう噂を…そう宴会や結婚式なんかをしている家は1本か2本の瓶や何かがあったんだよ、どうやって手に入れていたんだろうか。そして、モンゴル・アルヒ、蒸留、蒸留したアイラグ（乳酒）がある。ツァガン・サルや何かになっても、そのロシア・アルヒはないものだよ。そのモンゴルの蒸留酒をちょっとだけね、その家でまあできる範囲で、そう2リットルか3リットルか、瀬戸物の入れ物などに少しそういうアルヒを持っている。そしてアイ

ラグを飲むよ。今と同じような規律のない状況じゃあないよ。せめてこうやって座ったとしても順列で座る。そして一番年上の人が上席で、年齢の順番で座るんだよ。そして小さな子どもたちや何かは、その下座のほうにこうして。そのアルヒや何かを飲むときには、30歳以下の人びとにはくれないんだよ。それは上座の何人かの有力な年配者だけが彼らのあいだでそれを飲むんだよ。

D：この工場の労働者たちもまたそれほど飲まないんですか？

B：当時は飲んでたよ、でも今と同じようにこんな無秩序には飲まないんだよ。ときどき、ある宴や儀式のときなんか、その業務ごと、あるいはその部門ごとに集まるんだよ。それじゃなく、こうやって酔っぱらって、暴飲するということはないんだよ。だいたいアルヒはそんなじゃなかったんだよ、この何年か、完全に度が過ぎているね。アルヒも豊富になった、お金も豊富になったんだねえ。お金はというと、貴重なもののように、豊富なもののようになっているんだよね、今のお金ってのは。

D：当時、若者たちは今の30か40歳くらいの男性やなんかに、こうやって何かを尋ねようと思うと、よく知っている知り合いの僧侶、占える人やなんかがいましたか、そして、お互いに少し調べて尋ねますか？

B：ああ、そうするよ。そうやってほしい両親が主に尋ねるんだよ。自分たちは一般にそれほど頻繁には行かないよ。そして40歳とか30歳後半になった人たちは宴会などの席でときどきそうしていたんだよ。私が若いころにはあれを、お酒を飲むときには年長者がこっち側に座る、ときどき腕に入ったアルヒがやってくるとこうやってね、かなり人の後ろに隠して、こうやって飲んだもんだよ。年長者の方を何回もちらちら見て、こっそり飲んだものだ。そういうきまりがあったんだ。今では、若者たちにもきまりなんてないし、大人にもないね。アルヒをそんなにやたらと飲んだりしなかったもんだよ。後になってだんだん、だんだんと、今では度が過ぎているよ。今よく流れている韓国の映画なんかも、アルヒの、子どもたちにとってアルヒを飲むきっかけを与えている映画のように思うね。その韓国映画を見ていると、とても若い娘たちもが常にアルヒを飲んでいるよ。ひどく酔っぱらって、アルヒを飲んで酔っぱらって気を失うと、1人がおんぶして走っていなくなってしまうんだよ。こういう韓国映画というものまたアルヒを飲む原因を作り出しているというよ。そして男の子たちはそんなふうにしていて、1人を背負って、いなくなっていくんだよ。

D：当時、結婚するときには両親が勧めるもんだったんですか、あるいは、自分たちだけで知り合って勝手に結婚するもんだったんですか？

B：違うよ。自分が誰かと知り合って、そしてそれをひた隠しにしてね、気絶しそうになるよ、知られることが怖くてね。

D：両親はまたいろんな人から年齢や干支が合うかどうかを尋ねたりしたものでしょうか？

B：知らない，聞いていたかもしれないよ，普通はどうするもんだったのか，今ではわからないよ。自分たちでね。両親からはほんとうに気を失いそうに怖かったもんだよ。秘密にしてね，秘密に…。

D：亡くなったご主人は子どもたちの名前を自分でつけたんですか？

B：自分でつけたよ。

D：人に尋ねたりしなかったんですか？

B：しなかったよ，みんな自分でつけたんだよ。

怖がると思ったら本当に異常なほどだったよ，はずかしかったんだよ，両親が怖かったのは。相手の知り合おうとしている人を見るとまた失神しそうになる。そんなふうだったんだよ，私たちはね。そうしているうちにある人と知り合って。

D：嫁問いなどはあったんですか？

B：その嫁問いや何かは，ああいう人たちにあったんだろうよ。その，例の金持ちの貴族や何か，そういう家系の人たちにあったものだろうね。私たちの時代にはなかったよ，私たちよりも前にあったんだろうよ。私たちの時代にはね，あなたは知っているかね，こうするもんだったんだよ。ある夜にね，ある夜に1頭のウマを曳いてやってくる，そして深夜くらいになったら出てきてくださいといってね。そのとき着ているデールのままでも構わない，出て行って，その人が2頭のウマと一緒に谷に立っているんだよ。私の場合は本当にそうだったんだよ。デールや服を持って来られるとすれば，お母さんがちょっと家を出たすきなどの場合で，デールを持ってくることができればそれを着るし，持ってこれなかったらそのときに着ていたデールのままだよ。

D：ああ，そしてその人と一緒に行ってしまうんですか？

B：そうだよ，そのウマに乗ってね，行ってしまうんだよ。

D：そうやって逢い引きするんですか，それとも結婚するんですか？

B：結婚しようとしているんだよ。両親に隠れてね。後から親が探しにきて，また家に連れ戻されるんだよ，またそうやって。

D：両親はそれを知っていたんでしょうか？

B：知ってるよ，知らないわけがない。そしていい日を見てもらっていたと思うよ。必ず男性が正式にやってきて連れて行くという習慣があるといって，探しにきて一旦連れて帰るんだよ。

D：結婚の祝宴などはしますか，しませんか？

B：夏ならするものだよ。私は結婚の祝宴などはしていないんだよ。冬だったんだよ，冬だったように記憶しているよ。皿に盛ったもてなしの食べ物がおかれ，私が行ったときにはそういう食べ物があって，義母が肉をゆでてくれていて，置いてあったんだよ。亡き夫は母親にも何もいわなかったんだというよ。そうしていて，ある日，夜になったあとその2頭のウマに鞍をつけて曳いて行ってしまった，どうしたんだろうと隣の

人に聞いたんだというよ、亡き夫の母はね。すると、その人は息子さんはバダムハンドを連れて来ようとしてるに違いないといったんだ。義母は、ああ、本当にそういうことなんだろうと思って、お茶を沸かして待っていたんだけど、戻ってこない、かなり夜も更けてしまったんだよ、今思うとね。冬だったんだよ、それは冬だったように思うんだよ。若かったもんだよ、若かった。

D：ゲルを建ててくれるものですか？

B：建ててくれるよ。うちは実家で同居していて、小さな茶色いゲルで暮らしたあとに、後になって自分たちでゲルを建てたんだよ。

D：工場で働いていた人びとは寮や何かがあったんでしょうか、それとも？

B：ないよ、みんな自分たちのゲルだよ。後になって工場の建物（寮）というものが出てきた。でも、寮に入るのは嫌だったね、それは。建物に慣れていないもんだからね。

D：暖かかったんでしょうか、どうだったんでしょうか？

B：寒かったみたいだよ。冬、寮に暮らしている人たちは寒くて死にそうだと話していたよ。暖房が弱かったんだろうね。後になって、そういう工場の寮として、労働者の寮として2階建ての建物があったんだよ。そこには何軒かの世帯が住んでいたよ。それらのわずかの世帯は冬には寒くて死にそうだと話していたもんだよ。寒かったんだよ、暖房が悪くてね。そしてその後、民主化になってね、それらも私有化されたんだよ。本当に人の家にいるってことほど、ばかげたことはないもんだよ。私有化したあと、住んでいた人たちを追い出してしまった。そしてその寮にいた人たちは前にはよかれ悪かれこういうゲルを持っていたんだけど、それを無くしてしまったと慌てていたんだよ、追い出されてしまってね。

D：私有化のときに券とって、そういうものをくれましたか？

B：ああ、そういうものをくれたよ。株式だといってあるものをくれたよ。うちには今もあるんだよ、その青い券があるよ。

D：ああ、旗や何かを描いてある？

B：小さいピンクの券は売ってしまった、それはすぐに売り払ってしまった。こっちのほうはね、いつまでも有効だ、子どもや孫たちの時代にはそれは高価な紙になるといつてくれたんだよ、最初にくれるときには。さあ、そしてその理由すらもわからない、どうしたもんだかそれをね、うちには6、7枚あるよ。これをどうにかしたいもんだとときどき思うんだよ。

D：民主化したとき、一般に人びとはどんな感じでしたか？

B：ああ、いろいろだったよ。一部は争いのない、いい時代が戻ってくるといつていた、時代がいい方に動いたと。一部はこの政権は60年だといわれていたというから、70年生き延びたのは10年長く生きていて、また戻ったんだと話していたよ。

D：話していた人びとというのは、どんな人びとだったんですか？

B：年配の人たちが話していたよ。私たちの世代よりも上の世代，40，50歳そのくらいになった。50歳を超えて60歳くらいの人たちだったんだよ。最初に人民革命が勝利して，このあたりの僧侶たちを減ぼしていたときには，時が来たんだから仕方がない。この政府もまあ短命な政府だよ，60歳の政府だと，僧侶たちはそういっていたんだよ。でも70歳になってしまった，この政府はといて。一部はいい時代がやってくると話していた，一部は悪い時代がくるといっていた，人はそれぞれそう話さずにはいられなかったんだよ。

D：あなたにはどう感じられましたか？

B：私なんかはいいことも知らないし，悪いことも知らないよ。どうなるものかなあと思っただけだよ。まあどっちでもいいさ，ひどく困らなければどっちの政府でもいいやと思っただよ。

D：当時，遊牧民たちは自分の勝手に冬用の肉を準備する権利があったんですか？

B：権利はあったよ。冬用の肉として食べるよ。

D：搾乳もする？

B：搾乳するよ，また。搾乳して，例の夏や何かはノルマの乳を渡すんだよ，ザボにね。そして，それを超えれば他に借りはない。それ以外にも，羊毛や何か取られないものはないんだよ，全部ノルマがあって，剛毛も毛も柔毛も，家畜から全部とるんだよ，さすがに糞は取らないけどね。その乳をザボに納めてしまえば，それ以上搾れるものは渡す必要はなかったんだよ。

D：自分たちで白いお茶を沸かす乳はありましたか？

B：ああ，乳はある。乳をお茶に入れて沸かして，タラグ（ヨーグルト）を発酵させていたよ。それに彼らはヒツジやヤギの乳は取らないんだよ。ウシの乳だけを集めていたんだ。

Bの娘：最後のほうはヒツジの乳も渡すようになったのよ，ね？

B：そう，その…。

Bの娘：私たちが小さいころは，ヒツジを搾らせなかったわよね。

B：そのころは搾らせなかったんだよ，あんたたちの小さいころはね。そして，乳をね，それになった，ああ何だったっけ，その私たちがいて解散した…。

Bの娘：ああ，国营農場？ 会社？

B：おお，そう。会社になってそれがヒツジの乳を取るようになった。

D：国营農場が会社になったんですか？

B：そうだよ。国营農場が解散して会社になって。解散してから会社になってしまって，そのヒツジの乳を取るようになったんだよ。国营農場はメリノス・ヒツジを搾乳させることはない，乳も取らない。

D：肉用のヒツジですか，毛用ですか？

B：毛，肉用のヒツジだったよ。たくさん毛が取れるヒツジだったよ。羊毛がとてもたくさん取れるんだよ。上質のヒツジからは5kgくらいは取れたんだというよ。体中が毛でいっぱいなヒツジは今ではこのテレビなどでときどき出ているようだね。放牧に慣れさせていないから，放牧するときとても大変な家畜だよ。

D：そうなんですか，モンゴル・ヒツジと比べると？

B：モンゴル・ヒツジとは比べものにならないよ。子ヒツジはとても弱いんだよ。

D：牧地の家畜ではない？

B：飼料の家畜。

D：それであなたはここで働いていて，それで定年になったんですか？

B：そうだよ。この工場ですっと働いて，そして定年になった。

D：遊牧民たちはネゲデルで働いていた家畜を個人資産としてもらったんですか？

B：個人資産としてもらったんだ。

D：国营農場で働いていた人たちは？

B：国营農場で働いていた者たちももらったよ，でも，後になって例の会社になって，その会社で働いていて，そして家畜ももらったんだ，ほんの少しのね，それはそんなにたくさんじゃないよ。

D：工場で働いていた人たちは何も残らなかったんですか？

B：何にもくれなかった。工場で働いていた人たち，工場や役所には家畜を与えないということで，くれなかった。工場や役所から家畜をもらおうとすると，工場や役所で働いていた者だといって，国营農場の16頭の家畜をもらう，うちはというと10頭をもらう，そして他は全部取ってしまった。

D：あなたは今，家畜もっていますか？

B：ああ，今，田舎に何頭かいるよ，子どもが飼っているよ。まだ肉のスープはとぎれていないよ。

D：あなたはここで移動せずに住んでいるんですか？

B：そう。定住しているよ。私は田舎にいたんだよ。去年以後，体の具合がよくなってね。そして，子どもたちが田舎にいるよりも暖かい中心地にいなさいというので，ここにやってきたんだよ。夏になると田舎に出るよ。体がよくなればね，でもそれほど調子がよくない。一番下の娘に世話をさせて，その子には学校を休学させて，一緒に暮らしているんだよ。この先娘はどうなるだろうね。1年間休学させてね，世話をさせているんだよ。

D：では私はこれで失礼します。ありがとうございました。

II バダムレグゼンさん

父の名はダシペルジェー。1936年、ウブルハンガイ県ボグド郡生まれ。男性。2009年12月のインタビュー時点で74歳。社会主義時代は国营農場の農業技師で、現在はエルデニ・ゾー寺院の僧侶。インタビューの主な内容は、幼少期の生活ならびに社会主義時代の宗教を含む生活全般。革命青年同盟のリーダーであったが入党は許可されなかったという。13歳のときに元僧侶から、密かにコイン占いを学び、人びとの要請を受けてときおり実践していた。2005年に僧侶となり、詩作や地方誌史を独自に編纂している。チベット語について、モンゴル語で読経し、英語でも読経できるよう準備している。インタビュー時間は約3時間。

B：バダムレグゼン

D：ルハグワテムチグ

1 出自

D：あなたのお名前は何とおっしゃいますか？

B：私はバダムレグゼンという者だよ。ウブルハンガイ県のズーンボグド郡、今ではウブルハンガイ県のボグド郡といわれている、その土地に生まれた者だ。本来の出自、ずっと昔をたどるとラミン・ゲゲーン聖僧の出自の者だ。さあ、なぜラミン・ゲゲーン聖僧の出自の者といったのかというと、バヤンホンゴルのパローンボグド、ウブルハンガイ県のズーンボグドというと、ラミン・ゲゲーン聖僧の治めるホショー（旗）の地だった。イヒボグド、バガボグドという2つの聖なる山をもつ。そのバガボグドというのはウブルハンガイのズーンボグド山、アルツボグドだといわれているんだよ。そのアルツボグドの出身なんだよ、私は。だからその出自や出身、血統をたどってみると、父方かというと、その当時ボグドハーン8世のシャビ（弟子）の旗と呼ばれているところがあった。サイン・ノヨン・ハンのアイマクの旗には入らず、直接ボグドハーン8世の管轄、シャビの旗とされていた。そのシャビの旗というのは、現代の管轄単位で見るとウブルハンガイのボグド郡、つまり私の生まれた土地になるんだ。昔はホブドと呼ばれていた。ホブドは合併されてボグドになった、後になって1つになったんだ。ゴチン・オス郡、トゥグルグ、パローンバヤン・オラーン、ハイルハンドラーンなどの郡、ナリーンテールまでも含まれていたんだよ。

シャビの旗は、ドンドボグドのシャビの旗と呼ばれていて、その中にアルツボグドの聖僧と歴史書などには記されているよ。そのボグドハーン8世の聖僧たちについて、仏教研究者の僧侶であるプレバトが書いている本があるだろう、そこに書かれているよ。アルツボグドの聖僧、ラミン・ゲゲーン聖僧の聖僧という2人の聖僧がいた。

そのアルツボグドの聖僧というのが私の父方の血筋にあたる者たちなんだよ。そう、そして私はダシベルジェーギーン・バダムレグゼンという。私の父ダシベルジェーという人はというとツェムベリーン・ダシベルジェーという名前だった。その父ツェムベルという人は、その時代ソイヴォンと呼ばれていた、高貴な僧侶の召使いで、そういう人びとのことをソイヴォンと呼んでいたんだ。つまり私たちのその聖僧、後になってウルシュー・バクシ（慈悲の師）と呼ばれる、私たちゴビ地域の者たちの敬うバヤディー・ソノムツェレンという人の、召使いだっただよ、従者だったんだ。さあ、そして、そのウルシュー・バクシは1937年7月に捕えられ、処刑された、そういう人なんだ。ゴビのたった1人の有名なホトクト（仏教における僧侶階級の最高の称号、化身ラマ、一般に活仏と訳される）が私たちの故郷の人だったんだよ。今、ナサントクトフ、ダムディンシャラブという国家功労者となっている人たちというのは、父親はというとチミドドルジという人だった、いや、ちがうチミドバザル。彼らはチミドバザリー・ナサントクトフ、ダムディンシャラブというんだよ。そして、そのチミドバザルの祖父の兄にあたる人というのが、そのウルシュー・バクシ、ボグドのソノムツェレンという人だったんだ。そして、その人のソイヴォンで、ツェムベルという人の孫が今のこの私なんだよ。

私はというと今74歳、1936年子年に生まれたんだ、そのボグド郡の地にね。ウルシュー・バクシの寺院の近く、そのダワーという山の近くだ。その後、私は70歳になって、このエルデネゾー寺院で僧となって、仏教の道に入ったんだ。それより前、社会主義時代には、専門は農業技師で、専門として農業に従事し、37年、私は農業を行ってきた。そして、今こうやって僧になっても、私はこの生産の仕事を手を捨ててはいないよ。今もこのあたりの南側の丘、その水路から1km離れたところに私の畑がある。そして2ヘクタールの土地を妻と2人、土地私有法によって土地を所有することになって、その1ヘクタールの畑に毎年いろいろな種類の野菜を栽培しているんだ。この仕事をやめてはいないんだよ。先頃、アタル3（第3次開墾運動）、開墾運動50周年で記念の集まりがあって、それが終わって2、3日になろうとしているんだ。

さあ、そして先ほどの続きだがね、社会主義時代の国民、その時代の産物ともいえる私は、人民革命党に2、3度、入党しようとしたんだが、私を党員にしなかったんだ。それはなぜなんだろうと、今振り返ると、仏典を読む道に入って、こうやって仏典を読んでわかってきたことは、私たちが言うところの運命として、党に入ってはならない者だったんだろうよ。こうやって向こう側で運命が私を入らせないように、このように引っ張っていたんだと、私は今、仏教の道に入って、悟りが近づいた今になって、こうやって振り返って理解している、このように思っているんだよ。そういうことだったんだろうとね。ああ、そうとはいえ、そのときというのは、民主主義者というのか、思想、特にこの仏教、智慧をもつ人びとというのは、その時代、集会など

でまったく正直に話すことはできず、目の敵にされ、迫害される、そんなふうだったんだよ。その時代というのは、私の故郷でも仏教をひどく迫害する、一般にいろんな経典を読むことはなく、占いや精霊を呼び出すなど、さまざまなことをおこなってはならない、仏教を信仰する家があってはならない、こういう時代だったんだ。特に1970年ごろというのはね、私は人民革命党の補助員であり、モンゴル革命青年同盟のソムの委員長、ネグデルの農業技師だった。私はというと、その時代、1964から1969年までそういう長として働いたり、兵役についたりしていたんだ。そうして2、3度入党しようとしたんだが、まったく私を党員として入党させない。私はだいたい鋭く、荒々しい性格の者だよ、生まれつきね。正直でないものを見過ごすことができない、物事を正しく、正当な道でおこなおうとする、経典を読むとしても、依頼したその人の徳になるようにと思って読むんだ。もしも何か違ったように読んだとしても、向こう側にある私の心は、この経典がこの人にとって正しく反映されるようにという思いで、念じながらそれを読んでいるんだよ。こういう私の思想というのが、その時代の偉い人たちの気に入らなかったんだらう、だから党に入らせなかったんだらうよ。

さあ、こうして私は人生で2度、人民革命党から、ウブルハンガイ県の党委員会から、被害にあったんだ。1969年、私は農牧上級学校（現在の農牧大学）に専門を向上させるために入学した、それ以前は農業技術士の専門だった。そのとき、62年にドルノドの農業専門学校を卒業して、農業技術士の専門でドルノド郡のマタド郡で働いていた。そして、その秋にウブルハンガイ県に戻ってきて、ウブルハンガイ県の土地でアルヴェイの平原を最初に開墾して、農業をおこなった、こういう最初の農業者なんだよ。こうして69年に私は上級学校に行った。そして、1969年に農牧上級学校に行つて勉強しようとしたところ、10月にウブルハンガイ県の党委員会の第一書記長、ラムフーという人だったよ、その当時。ラムフーのサインのある電報が農牧上級学校の校長ジャミヤンジャヴ先生だった、そのジャミヤンジャヴ校長の秘書のところに電報がきた。法的機関が取り調べているので、その学生をこちらに戻すように、と書いてある。「さあ、君、行きたまえ、14日以内にこれを解決してくるように」という。さあ、こうして14日以内に解決しようと、大学生になるといって、たくさんスーツや洋服を買っていたのを売り払って、帰るための資金にして戻ってきたんだよ。その時代というのは60トゥグルグ以上だったんだよ、ウブルハンガイとウランバートルのあいだ〔の交通費〕というのは。こうして戻ってきて、アイマグの党委員会の支局の会議にかけられ、学校をやめさせられたんだよ。そうして、私をウブルハンガイ県の灌漑へ、当時というのは、ゴビといえば井戸の掘削、水のある地点の電気による探査などがおこなわれていた。そして私は作られた井戸の管理を一緒にまかされた。その仕事だけをおこない、それに熟練したんだ。ロシア人とも親しくなった、その時代というのはゴビにロシア語を話す人間はいなかったんだよ。とにかく彼が簡単な言葉を話すと、ま

あそれを少しは理解していたんだろう。こうして私をその灌漑施設に力づくで配属した、その当時このようにされていたんだよ、命令を出して、入らせたんだよ。こうして69年に農牧上級学校からこうやって、上級専門クラスをこうやってぶち壊されてしまったんだよ。1つ目はこのような大きな被害を受けた。

さあ、こうして私は県の党委員会によって農牧上級学校から退学させられ、その灌漑施設で働いていて、その次の春から人びとと一緒に働くようになった。そして70年の春に戻ってきた。ここに功労農業技師アヨールという、私の昔の知り合いの人がいたんだ。このアヨールに頼んで、今でいう裏口のようなものだよ、こうやって私は、第2部局というのがあって、その部局で保存庫の主任として働くことになり、そうしていると、75年の春「ホジルト温泉療養所が専門家を探している」という。国営農場の党委員長レンツェンという人がいた、日和見のレンツェンという人がいた、もう亡くなったよ。彼が県の党委員会の第2書記長だったとき、ローホーズの問題に連座して、机から手紙が出てきたとしてね、かわいそうに、そうしてハラホリン国営農場長としてここに赴任させられてきたんだよ。そのレンツェン農場長が私を呼んで、「君はホジルトに行きなさい。専門の人を見つけてくれというんだ、君は適任だ」という。こうして私はホジルト温泉療養所に75年に行って、78年までホジルト温泉療養所で、65度の熱湯で5メートルの噴水を接続して、ガラスの温室を作って、そこでトマト、キュウリを栽培していたんだ、白衣を着てね。党中央委員会委員長ドゥゲルスレン氏、県の党中央委員会委員長グンチンという人がいた。ああ、そしてウランバートル市の党委員会の第1書記長アルタンゲレルなど、こういう大臣や長たちがホジルトに療養にきていたんだ。そのとき私は医者のような白衣を着て、そして真っ赤なトマトやキュウリを持って、こうしてホテルに届ける、そういう仕事をしていた。こうしていると農牧省大臣、その当時誰だったか、副大臣がやってきて療養するのに出会った。それらの野菜を持って入っていくと、その人が私を捕まえて、私のことを、こんな優れた人がこんなところで仕事をしているなんてどういうことなのか、というんだ。当時、中央委員会第4回総会がおこなわれて、食料プログラムというのが向上させられたんだよ。家畜の育成、肉を少なくして野菜などをたくさん栽培する。こうして国の分野保護者だといって、私を、ウブルハンガイ県トゥグルグ郡、トクトーン長という県の農牧業長がいた、今は亡くなってしまったよ。そのトクトーン長たちが私を連れて行って、引っ張ってくれて、ウブルハンガイ県トゥグルグ郡、今のマザル組合といわれている。最近マザルの2つの組合ができたんだよ、それで最近それらの人びとがここにやってきたよ、この前の50周年でね。わがウブルハンガイ県の開墾運動50周年を記念したんだよ、この前、県中心地でね。それから2、3日がたつ。彼らがやってきたんだよ、そのために。

こうして、私はマザルに赴任して、栽培の仕事をした、78年に行ったんだよ。そう

して78年からそこで85年まで働いていて、85年に食料の目標プログラムというそういうものを作り上げた。いろいろな公的機関が野菜などさまざまなものを栽培しているとき、私は1200人服役していた刑務所、ハラホリン刑務所に、私は85年9月に刑務所の農業士として赴任した。こうしてたった1個のジャガイモを植えて食べることにすら知らない1200人の服役者のいるハラホリン刑務所にやってきたんだ。今でもそこはあるよ、でも私が定年になったあと、私のやっていたものは壊され、捨てられてしまったんだよ、だが、その痕跡はある。ガラスの温室を作って刑務所に野菜を供給するようになって、田舎に小麦も植えたし、野菜も植えた。こうして働いていて、93年に定年になった。定年後は個人的に野菜を栽培して、こうしているんだ。そして70歳になってから、この寺院で学び、それ以後は僧として生きている。さあ、おおまかな私の経歴はこんなふうなものだよ。今、仏教の道に入って4年、経典を読んでいる。そして、今は占いもする。そういう人がいるだろう、ダシツェレンなどをリーダーにする、あの年いろいろやっていただろう。彼らと一緒に何かをしたいと思っているんだ。でも、そういうチャンスがないからね、こうして過ぎていっているよ。ああ、人びとは私にいろいろ占わせるけど、とにかく嘘は言っていないようだよ。さあ、1つ目にはこういうことをしている。2つ目はというと、私はどんな本でも手に取ってすぐに読むことができる。経典はそのままだね〔チベット語で〕。それで翻訳などもやってみようとしているが、60、70歳を過ぎてくると人は力が落ちてくるものだよ。そのせいで経典のいい翻訳はできないんだ。だが、まあ先生方が翻訳して出ているいい本が世の中には多くなった。それらを見て覚えて、私は今ではツァガン・ダリ・エヘ（幸運長寿、無病息災、世界の8つの危険を防ぐために読む経典）、ノゴーン・ダリ・エヘ（病気や災難、貧困などが解消され、よい行為がより広がるように読む経典）、ヒーモリーン・サン（運気の向上、大願成就のために読む経典）、アヤン・ザミン・ユール（旅の無事を祈る祝詞）などの重要な儀式の経典は、直接モンゴル語で読んで、そのあとすぐにチベット語で読んであげるようになっているよ。

D：へえ、そうですか。

B：これをあなたはこうしなさいとね。私はこのことについてソニンバヤル師のところに行っただ、ソニンバヤル師に行って説明した。そして「私はこのように僧になろうとしていて、こうやっています、先生、私はどうしたらいいですか、こうするのが正しいのでしょうか、間違っていますか」と言ったところ、「おお、それは正しいことだよ、最も正しい、ただ怠けてはいけないよ、疲れたと思ってはいけないよ。最初にモンゴル語で読んだならば、そのあとで必ずチベット語で読んであげるようにしなさい」とこのように私におっしゃったんだよ。そうして私はこうやって最初にモンゴル語、そのあとチベット語で経典を読むようになったんだ。この法要でも私はそうしているよ。

D：へえそうですか。

B：今あなたたちがこうやって入ってきて、アヤン・ザミン・ユールを読んでもらおうというのならばそうするよ。それだけではなく、私は英語でヒーモリーン・サンを読むことができるんだからね。

D：へえ。

B：そうだよ、人に翻訳させて、こうやってヒーモリーン・サンを英語に訳して、そして興味のある人や、読ませたいという人が来たならば、私は英語で読んであげるんだ。それを英語を話す人のところで読んでみて、間違っていないか、発音はどうか、どの字をどう発音するかなどを教えてください、そうしてこうやって人びとに読んであげているんだ。だが、このところ英語で読ませるといふ人がやってこないから、英語の経典を忘れかけているんだよ。そんなこんなだね。このように仏教の道を追求しているんだよ。さあ、何か尋ねたい、話したいことはあるかね。それを話さない。私は自分について、今、簡単だけれど話したからね。

2 幼少期の生活

D：あなたは幼少期をどこで過ごされましたか？

B：私の幼少時代。私は、1945年にね、ウブルハンガイ県のボグド郡に最初の小学校が設立された。私はボグド郡の最初の小学校の生徒になった者だよ。そして、私と一緒に、今は母子のための研究所の研究者、8カ国語を話す、42冊の医学の本を書いたジャンチヴィーン・ラドナーバザルという私の同級生がいるよ、今も元気だ。保健に関して国際的な仕事をしている。そして、その他に、ツェデンバル書記長やバトムンフ書記長の主治医をしていた、第2病院を指導する医師だったグンテヴィーン・ガイタヴというのもいた、今も元気だ。ああ、その上にモンゴル農牧省の最初の森林エンジニアを務めていた、サンチロヴという人も今も元気である。昨日も電話してきたよ。パローンバヤン・オラーンに行ってきた、県都にいるとね。この前ウランバートルで会ったよ。あそこ、ドラゴン（長距離バスの駅）でウブルハンガイに行こうとしていた。すると私がそこにいるのがどうやってわかったのか、電話してきて、それでそこで会ったんだ。長年会っていなかったんだ、そういうサンチロヴのように同級生たちは今も元気で暮らしている、そういう友人たちがいるよ。

そうして1945年から1949年まで、ボグド郡の小学校で学び、卒業した。そして49年から田舎に出てね、その時代というのは、ウブルハンガイというのは、郵便の車が49年からやってくるようになったんだよ。その時は郵便の車はなく、ウルトゥ（ウマの乗り継ぎ駅）というのがあったといわれていた時代だ。そしてその時代、うちのボグド郡というのはウブルハンガイ県の県都から210kmの距離、そして210kmというと30kmに1つのウルトゥがあった。7つのウルトゥをウマを乗り継いで子どもたちは

学校に行くものだった。

私はそのころ小さな子どもだった、そもウマで駆け回っていた。そしてちょうど学校に入るとき、そういう運命だったのだろうか。人の家で働いてね、いくらのお金を得ようと、その時代というのは、お金というのは希少なものだった。人の家で1週間働いてヒツジを放牧して1日に1トゥグルグを賃金としてくれたんだ。そして7日、14日働いて、10何トゥグルグになったら、ウブルハンガイへのそのウルトウの費用や、学校での本や学用品にしようと思って働いていたとき、ウマに引きずられて、はいていた靴が鐘にひっかかって足に傷を負い、膿んでしまったんだ。こうして怪我をしてしまって、学校に行くことができなかった、こうしてウブルハンガイの10年制学校に行くことができず、取り残されてしまったんだよ。ああ、このガイタヴやサンチロヴたちはみんな行ってしまった。それで私は草原に出たんだよ。そして49から51年までの3年間、私は草原の民だったんだ。うちの家は貧しかった、その時代というのはネグデルというのもまだできていなかった。だから私は裕福な家のヤクやウシを放牧して、ボグド山の尾根で3年間、人のウシを放牧して冬を過ごしたんだ、その時代というのは生活において人に使われるという、人の家の飯を食うという、そういうものが存在していたんだよ。そして、私は700頭のヤクとウシを放牧した、母と一緒にね。ボグド山の尾根というところも丸くなっている〔家畜が落ちるかもしれないので危険である〕んだよ、どれほど大変だったか。私には本当に映画の写真のような写真がみんなあるよ。それで今年になって、故郷へ行ってみよう、死ぬ前に行こうと思って行ったんだ、遠く家があった場所にね。そして本堂のところから貴重な物を持ってきたんだ。その仏の写真がある、それを県の博物館に持って行った。昔はそんなものを気にもかけず、知らなかった人たちが今は手のひらを返したように「へえ、本当だ、本当に貴重なものだ、それをそこに行って見てみたい、今もあるかどうか」と興味を示してね、県の博物館の貴重資料になっているんだよ。そういう写真を撮ったんだよ、私はね。

今、私はというと詩を、生涯で4、5冊の本を書いた者だよ。最初の本は1997年だったか、ツェグメディーン・ガイタヴという政府から表彰されている詩人、ツェグメディーン・ガイタヴと私というのは同郷で、同じクラスだった、そして、ガイタヴの70歳の記念というのを10年前にやったんだよ。今年は80歳のお祝いをしたよ、それで私は70歳のときに招待されて行ったんだ。そのときに1冊の小さな詩集、最初の本を書いて行った、『草原で一晩過ごした月のように』という題名のね。今年80歳のときもまた招待されて最近行ってきたよ、9月19日に招待されて故郷に行って、その家のあったところに像などが建てられていた。モンゴルの作家たちが県の作家たちと共同してこうやって最近80歳記念を祝って、映画を作ってね、ドキュメンタリーを作ったんだ。さあ、そのために、また1冊の小さな本を書いたんだよ、それも主にはガイ

タヴの書いたもので、中に少しだけ自分の書いたものがある。

さあ、次の本はというと1990、違う2000何年だったのだろうか、ハラホリンの50周年になったんだよ。その50周年に『満月』という名前の本を書いた。『満月』。ここには「オマイン・アムの伝説」が入っている。そして、このオルホン川の広い谷、ここにある国营農場。なぜこのオルホン川の谷に国营農場が建設されるようになったのかという理由を14世紀の歴史から導き出した簡単な歴史を述べた。そしてハラホリンの国营農場が50年でどのように発展したのかという歴史を述べ、その上に3章の文章がある。最初の章は私の詩、そして次にはハラホリンの歴史、このオルホン川の略史。そして3番目はというと「ウブルハンガイの農業の歴史についての論文」というテーマで3章に分かれている、こういう小さな『満月』という本、とてもかわいらしい本になったよ。

そして、次の本はというと、一昨年だった。『歴史的遺跡のあるオルホン川の谷』という本を書いた。『歴史的遺跡のあるオルホン川の谷』だよ。ああ、それをモンゴル人民革命党の本部で印刷させて、1,000部印刷させるために渡したんだ。すると、132万トゥグルグを持ってきて、本を受け取りなさいと、こういうんだ。1,320,000トゥグルグなんて、年金の84,000トゥグルグをもらっている年寄りが、どうやって1,320,000トゥグルグを支払えるというんだ。そこでいろんな人たちに頼み込んだ、特に国会議員の8人には寄付を頼んだんだ。ルンデージャンツァンのところには行かなかった、それは間違いだったよ、間違いだった。最も重要な、会って頼むべき人に会わなかったんだよ、今振り返って考えてみて、とても後悔している。その他の民主党系の議員たち、私は民主党を支持している者だから、彼ら4人に頼んだんだ、彼らは誰もだめだとはいわなかったよ。その次にモンゴル人民革命党から選出されたチンゾリクや誰や3人とは会ったよ、寄付をあげるといっていた。選挙の後に、選挙の後に、と。そして選挙の後になって、私は彼らにその寄付をもらおうとしていて、できないでいるうちに、7月の騒動、7月の騒動ですべてなくなってしまった、モンゴル人民革命党の建物は焼けてしまった。3冊だけ、頼み込んでもらっていたんだよ、「3冊もらいたい」といってね。その1冊を私は作家連盟に見せた、作家連盟で印刷する場合、支援は5,000、10,000トゥグルグあるかどうか。1冊は、私は故郷へ持って行った、ナイガル〔知人の名前〕にまで見せて頼み込んで、国会議員に見せるといってまた1冊、2冊目を持って行った。最後の3冊目はこの中でいろいろの人に渡っていた。先生が持って行ったんだ、後になって編集するためにね。ナイガルも見せていたよ。

こうして残りは見つからなくなってしまった、なくなってしまったんだよ。ああ、1冊は手元にあるよ。モンゴル作家連盟にも渡したんだよ。モンゴル作家連盟は去年の冬、80周年を記念したんだよ。そして、80周年に私は招待されてモンゴル作家連盟のメンバーになって、私に「天の血筋」というそういう勲章をくれたんだ。さあそれ

で、この本はというと『オルホンの歴史的遺跡のある谷』というもので、ハル・バルガス、フシュー・ツァイダム、北に行ってアルハンガイのホトントのほうにあるドイティーン・トルゴイ。このオルホン川の谷にある。オラーン・ハドニー・アゴイといって、そのドイティーン・トルゴイ、オラーン・ハドニー・アゴイというまったく研究されていない場所、そこに行って写真を撮り、自ら歴史を研究してみた。そして、このオルホン川の谷というところにはどんな歴史文化があるのか、すべてを著述しようと努力したんだよ。とてもよくできた本にしあげたんだよ。こうして私には1冊だけ残っている。『満月』という1冊の本になったんだ。ああ、そうしてこの前、私は開墾運動の50周年にあたって、4冊目の本を、ガイタヴの80歳記念と関連させて、『アルツボグドの息子、アルヴァイ平原の農業技師』という、自らを賞する本を書いた。この前の月曜日、印刷が仕上がったんだ。「娘さんたちに見本を1冊渡しました。あなたはそれを見て校正をするならして、また持ってきてください。そして私たちは何冊印刷するのか、どのくらいの額になるのかをお知らせします」ということなんだよ。昨日娘が来るはずだったんだよ、ウランバートルから、でも来なかった、今日やってくるだろうよ。さあ、このようなことなんだよ。

こうして、私はこのエルデネゾー寺院のことも書き入れた。本堂のことも書き入れた。オルホンの谷の本にね。そして、このエルデネゾーにはこういうことがあったんだと突き止めたんだ。このエルデネゾーには、またこのオルホンの谷には転生者がいたんだよ。さあ、その転生者とはというと、最初、アルハンガイ県のルン郡と、その当時呼ばれていたんだよ、地方の行政単位としては。アルハンガイ県ルン郡。このルン郡の土地にエルデネ・オールという山、この北側では窪地といわれている。そのこちら側にエルデネ・オールというところがある、もとはルン・トルゴイと呼ばれていた。トルゴイ（丘）がオール（山）になり、オール（山）がトルゴイ（丘）になり、最近地方ではこうやって呼び名が変わっているようだね。最近、この春、このルン・トルゴイ、今ではルン・ハイルハン（山への尊称）に仏塔が建設された、地元の人びとがすばらしい仏塔を作った、今年これをまつったんだ。さあ、なぜ私がエルデネ・オールと強調して話しているのかというと、エルデネ・オールに第7世ツォルジトン（座主）ダグヴァダルジャーという転生者のホトクトが生まれたんだ、このエルデネ・オールにね。ここに第7世ツォルジトンが生まれたんだ、いいかね。さあ、この歴史を見てみると、1700、1500年の時代から始まるんだよ、1500年から1700年の時代のことになる。この時代1770年、私の研究によると、ここにハダクで囲んだ場所があるだろう、ここがツォクチン・ホルル〔法要を行う本堂〕、エルデネゾー寺院の主なる信仰、現代的にいうならば議会の建物ということだよ。ツォクチン・ホルルというのは1770年に、この第7世ツォルジトン、ダグヴァダルジャーの時代に建設されたんだよ、作られたんだ、5年の歳月をかけて。70から75年にかけて建てられ、75年から儀式がお

こなわれるようになった。そしてこのツォクチン・ホルルでは108人のツァム（儀礼的舞踊）、モンゴルの他にはない大規模なツァムをおこなっていたんだ。そのツァムというのはアブタイ・サイン・ハンのゲルのあった跡の上でおこなわれ、踊るんだ。1937年に最後のツァムがおこなわれた。今、あそこにあるだろうよ、その記録がある、映画をロシア人が撮っていたそうだ。さあ、ツォクチン・ホルルはこういう起源を持つ、こういう歴史がある。

こうして、この第7世ツォルジトン、ダグヴァダルジャーが亡くなって、次に誰に転生したのかというと、アルハンガイ県のホトント郡の地にフクシン・ゴル（年老いた川）と呼ばれている場所、そこに生まれたんだという。そのゴンチクジャルツァンの経歴や血筋などを、すべて研究して、ラマ・オポーという表題で、この『オルホン川の谷』（『オルホンの歴史的遺跡のある谷』）という本の中に書いたんだ。ああ、そしてわが国の芸術の偉大な創造者、ルンの者だよ、誰かというとチョヴァーミドさん、彼はラマの山、バヤンゴル山にいる。さあ、そしてその最後の転生者ゴンチクジャルツァン様はというと、1937年に連れていかれ、12月3日に銃殺されたんだよ、70何歳のときに。ゴンチクジャルツァン様はここに生まれた方だよ。そして後になってバヤンゴルの、そこはラマ・オポーといってオポーをまつり、信仰してきた場所だ。今、その少しこちら側に小さな仏塔がある。そこには洞窟などゴンチクジャルツァンにゆかりのさまざまな場所がある、ここにはダライ・ラマの絵画もあるんだよ。そこはそう、何を作ろうとしていたんだよ、マンバダツァン（医療を行う寺院）、薬のマンバダツァン、今ウランバートルでナツァクドルジ氏が指導してやっているようなマンバダツァンをここに開いていたんだ。そしてこの中には、今では湖がある。アブタイ・ハンの湖といって。そしてこの北東側の端っこにゼールゲン *zeergene*（マオウの仲間、学名は *Ephedra*）が生えている。この4つの堂塔の平らな所にいろいろな種類の葉に入れる植物などを持ってきて、幼木を植えていたんだよ。だが、この中には、最近の自然環境の変化によって生えなくなってしまっている、私がここに入ってきたときには、赤い野菜・白いジャガイモがあるだろう、赤い花の咲くジャガイモまでがここに生えてきていたんだ。そう、この柵の中にね。その花は悪いものを防いでくれるんだよ。その北東側の角にホニン・ゼールゲン *konin zeergene*（マオウの仲間、学名は *Ephedra Przewalskii*）がある、ゴビに生えるホニン・ゼールゲンは麻薬の中に混ぜる植物だというよ。ゴビに生えるヤマーン・ゼールゲン *yamaan zeergene*（マオウの仲間、学名は *Ephedra monospermaria*）、ホニン・ゼールゲンという草がある。そのホニン・ゼールゲンまでも持ってきて植えていたんだ。とてもおいしい赤いイモ（地下茎）がなるんだよ。この隅にある、そっちの北側の角にね。こういうすばらしい歴史がわがこの辺りにはあるんだよ。これらを研究してこうやって世の中に出す、これらを引き出す、そういう人はいなくなってしまったんだよ。そういうものにいろいろな人たちがお金

を捨てているよ、プロジェクトだ、何だ、と関係した人たちはね。だが本当に心から何かをしようとする人間は少なくなってしまうんだよ。私は、まあね、考え方が違う人間だからね。今でも自分だけで思っているだけじゃなく、批判する。もしかすると排除されてしまうかもしれない時代になっているよ。だが、とにかくできることならばこの堂塔を再建できるならば、とね。歴史の上に何か形を残して死にたいものだと思っているよ。ああ、そういう感じだね。

D：小学校では寮に暮らしていましたか？

B：ああ、寮にいたよ。そして1945年というところ、5つの壁のあるゲルというのはなかったんだよ。4つの壁のあるゲルだったよ。2つのゲルを建てていた。1つのゲルは台所といって食事を作る。1つのゲルには子どもたちが暮らしている。そして厚手の敷物を敷いて、その上に1枚の敷き布団。その時代というのは布団などはなかったんだよ。羊毛を内側に張ったデールをかぶって寝るんだ。そして内側に羊毛のついたズボンをはいていた。そのズボンというのにはノミがつくんだ。デールにもノミがつく。そこでその毛の張られたズボンを外で凍らせて干しておいて、デールだけをかぶって1枚の大きな敷き布団の上にみんな寝転がって眠るんだ。日中になると敷き布団をたたんで、そして南側に置いてね。半分のノートをくれるんだ、その当時は、49年というところノートは手に入らなかった、鉛筆やペンはなかった。そしてボグド山の尾根に生えているタヴィラン（タビルガナ *tavilgana*、シモツゲの仲間、学名は *Spiraea*）という、こういう真ん中に穴のあいているこういう長い植物があるんだ、今もこのボグドの向こう側に生えている、タヴィランと呼ばれている。そのタヴィランを拾い集めて、そしてそれで鉛、うちのこのあたりというのは石がたくさんあるんだよ。その石炭が地下にある場所に、その石墨は当然あるんだ。その石墨を取ってきて、一部を溶かしていたんだ。溶かした所にそのタヴィランの木の真ん中の穴部分に流しこむんだ。そして、それを削って、こうやって鉛筆を作ってしまう。それ以外にも…、うちのソムでは地震がおきて、57年に地震がおきてなくなってしまったんだ。今ではソム・センターは廃墟になってしまっているよ。その当時というのは泥や土で作った建物だったんだからね。そして、その山の水が洪水となって流れるそのオラーン・エレク（赤い崖という意味の地名）のあたりというのは、鉄丹の土というものがあってね、その赤い鉄丹を溶かして使うんだ、例の昔でいう小さな仏具の器だろうか、今この仏具でロウソクを灯す、芯の穴のない器、このくらいの大きさの器だよ、その廃墟というのは近いよ、30km、その山の南側斜面にあるんだよ。そしてその廃墟からそれらを見つけたんだよ。とてもたくさん、そういう茶器、その底を取ってこうやってブリキでこうやって脚を取り付けてね、ラツ（封蠟）のようなものがあると、そのラツを溶かして、それでくっつけたんだ。そうして、赤い鉄丹から作ったインクを入れるインク入れにした。そしてタヴィランの枝にペン先を糸でくくる。糸でこうやってくりつけ

るんだ、鉄のペンを。先がすぼまった胴体がふくらんだ形で星の模様のついたペンという、昔、そういう鉄のペンがあったんだよ。そういうペンを持ってきて、こうやって糸でくくりつける、そして例の鉄丹に浸して書くんだった。そうやって書いていたんだ。ラドナーバザル、ガイタヴたちは今ウランバートルにいるが、彼らの所に行ってこうやって聞いてみたら、まさに同じことを話すだろうよ。

あばたのパボーという私たちの先生がいたんだよ、僧だった人だというよ。そして、私の名前はラマの戒律、毎日読む、ラマの戒律の中に、バドマーレグゼンと呼ばれているものがある。訳すと花の根源ということで、蓮華の花という意味だよ。そのアルツ山脈というのは180kmの長い山脈なんだよ、バガボグドの南側にこうやって、ゴビ・アルタイの間へこうやってアルツ山脈とって、アルツボグドの南側の狭間ではとって天気予報でも使われているだろう。そのアルツ山脈というのは南側に、そのシャル・ホルス（黄色い竹）というウルシュー・バクシが作られた寺院があるんだよ。この寺の僧たちを捕まえて行ったが、逃げてそこに隠れていたんだというよ。こうして祝福を与えて、最後に祝福を与えて名前をつけた子どもが私なんだというよ。そうやって私にバドマーレグゼンという名前をくれたんだ。そうして私は49年にね、うちの人たちはみんなレグゼンとは呼ばない、言うのがむずかしかったんだろう、みんなバドマーと、両親も兄弟たちも呼んでいたんだ。おい、バドマー、バドマーと、いつもバドマーと言われていた。そして学校に入学したところ、その名前でバドマーレグゼンと書いたんだよ。そうすると、そのあばたのパボーという先生が、彼は僧だった人だ、僧になってモンゴル文字などを学び、後になって学校の先生になった。昔のモンゴル文字を知っているけれど、新しい文字を書く教師になった人だよ。そして、パボー先生が「だめだ、これは僧の戒律の名前だ、これはだめだ」と思ったんだろうか、レグゼンと名前を書いてしまった、こうしてバダムレグゼンになった。バダムレグゼンというのはこのパボー先生がくれた名前だ、このレグゼンのまま生きているよ。それ以後の書類すべて、軍隊の登録などもすべて、卒業証書もみんな、国民パスポートまでもレグゼンで書かれるようになってしまった。もともとはというと、ウルシュー・バクシのくれた名前はバドマーレグゼンという僧の階位の名前をくれたんだ。それをどうやって知ったのかというと、70いくつかになって、こうやって僧になって、僧の戒律を受けただろう。私に僧の戒律をくれた師はというと、今バヤンホンゴルにいるんだ。バヤンホンゴルのエルデネ何とか、その郡中心に行ってしまったんだ、ここにいたんだけれども、行ってしまった、プレヴダワーという高位の僧だよ。ガンダン寺にある仏教大学の教師だった。国立中央図書館で15年、中央委員会の何かで働いていたんだという、プレヴダワーという、今はバヤンホンゴルにいる。そのプレヴダワー先生が私に仏法の戒律を与えてくれた。そのときに「おお、もともとバドマーレグゼンという仏法の戒律名をもった人だね。まあいいよ、1つの戒律をもら

っているけれども、まあ名前をつけるきまりだからね」と。そしてこういう四角に書いたものの上に賽を投げて、どの上に止まるか、それで名付けるものなんだよ。それによってバダムドルジという名前、戒律名をバダムドルジ、こう名付けてもらったんだよ。まあバダムという名前は私にずっとついてくるものだったんだろうね。

D：小学校ではどんな勉強をしましたか？

B：ああ、小学校ではね、その時代というのは、モンゴル語、3年生から始まってモンゴル文字を教えていたよ、ウイグル式モンゴル文字。そして理科。今もこういう授業を教えているだろうよ。歴史を教えていた、匈奴や何かと、そういうものを教えていたよ。そして私たちというのは、3、4年生になるときは何人かの先生が教えるようになっていたよ。アルハンガイ県のサムボーという先生、アルハンガイ県のハイルハン郡の人だった、サムボー先生。ああ、そして後になって、私が4年生を卒業するとき、同郷の人で、テムチギーン・ゴンチクスレンという人が、後になって、軍隊の検察官などになった、人民革命党を捜査すると言っていた、党の検察で働いていたゴンチクスレンというその先生が、49年、私が4年生を卒業するとき、教師として働いていた。今、思い出してみると、私が勉強する趣向というのは、文学、この方面に興味を持つ子どもだった。私はというと、詩などはすぐに暗記してしまう。その子ウマがどうしたとか、すべて、ダシゼヴェグの、センゲーの作品のすべて、今でも私の記憶からなくなることはないんだよ。いつも彼らの詩を読むんだ。いつも子ウマが…などの詩。こうして中学に入ることになると、今度は「セクス・ツァガン・ボグド」、 「朝鮮の運命」などという、とても美しい詩があるだろう。これらの詩を読む、暗唱する。国営農場で農業技師として働いているときまでも、私は芸術を好んだ。国営農場で詩や歌のコンクールをするというと、そこでガルヴァーの作った「スフバートル兄へ」というパルチザンについての美しい詩がある、それを読んで、まるで情景が見えるようだと言われて、表彰されたものだよ。今でもその詩は、人が学んだものというのはいつまでも忘れることはないよ、死ぬまで一緒というように消え去ることはないんだよ、まったくね。記憶が弱くなった、忘れっぽくなったといっても、学んだものというのはまったく消え去るということはない。何であってでも脳の中にありつづけるものなんだよ。そういうことで私は歴史に興味を持つ、文学に非常に興味を持つ。ああ、映画や文学、舞台もみる。そして詩はというとこうやって書くこともする。そして新聞や雑誌、ラジオなどに文章を書いていたよ。最近では批評文などを書こうとしているよ。何かいいことを見つけて書こうとしてもそれが見つからなくなっているんだよ。いつも何かを批判する、間違っていることを見つけ出してそれを世に出したくなっているんだ。今ではそんなふうになってしまっている、それらを書く人と人に嫌がられるだろうよ。

この博物館について、見つけて読んでみなさい、2007年の「ジンダー」紙の第7号

に載っているよ。「エルデネゾー寺院は存在すべきかどうか。エルデネゾー寺院は存在すべきか、あるいは博物館であるべきか」というタイトルだよ。大きな批評文を書いて、そのために裁判や何やということになってね、名誉回復しろとってね。いろんなことをやったんだろうよ、その人はね。今年、3体の金の仏像を盗んで貨車と取り替えて2年6ヶ月刑務所に入ったとか。そういうことらしいがね。

D: あなたの食事などはどんなふうでしたか、小学校にいるとき、何を食べていましたか？

B: ああ、まあね、そのころというのは、子どものための学校の燃料、食事代とって、少し裕福な人びとに割りふっていたんだよ。それで彼らは生徒たちの食事代を持ってくる、食料を持ってくるんだよ、家畜や肉をね。燃料も持ってくる。うちのゴビのあたりというと、まあザクzag (サクサウルの仲間、学名は *Haloxylon ammodendron*) がたくさん生えているからね。そしてゴビの人たちは抱えられないほどたくさんのザクをもってきて、それを山積みにしてね、この建物くらいの高さにザクを山積みして、置いていたんだよ。

D: 食事はどんな食事だったんですか。野菜や乳製品などはありましたか？

B: おお、その時代に野菜なんてあるものかい。野菜というと、その時代知りもしないよ。うちのボグド山の尾根には、食事に入れるいい野菜が生えるんだよ。野生のネギなどがたくさんあるよ。モンゴルでは珍しいビタミンAの含まれた野生のネギがどこにあるかという、わがボグドの地にあるんだ。ズーンボグド、バロンボグドに生えるものなんだよ。ほとんどが野生のネギ、人びとはそれを何袋も学校に持ってくるんだよ。野生のネギを使った食事、ポーズや麺の入った汁など、野生のネギを入れるんだ。そしてその時代というのは、ゴビの白いカモシカ、黒い尾のカモシカなどがたくさんいて、禁猟などはなかった。そしてボグド山の尾根というのは野生のヤギや野生ヒツジがいる。その時代、それらの野生ヤギ、ヒツジの猟を行ってその肉を山積みにはしていたよ、頭部は別にしてね、学校に持ってくるんだ、子どもたちの食事用にね。それは、それは、おいしいスープ、忘れられないくらいおいしい食事が出たものだよ、その時代。それらを屠って、ウシを屠って、ヤクを屠って、その時代、食料というのは十分な良い時代だったんだよ、言葉もないくらいだよ。そして他にもアーロールやエーズギー、ツァガン・トス。その時代というのはネグデルなんかはなかった。みんな個人の経営体だったから、自由だったんだよ。

3 僧侶たちの運命

D: その時代、転生者などはいなかったんでしょうね？

B: おお、そういうものは、いてはならないよ。僧たちはみんな罪を負って、10年の刑などを受けて、その後、還俗してしまった、そういう僧たちだよ。だが、一部には取

り残された僧たちもいた。私の故郷にはたくさんいたよ。今、私は、これこれ、こういう僧があそこにいたと、名前をあげることができるよ。その時代に私の知っていたのは、わが一族の1人、父の実兄でセンゲラヴダンという非常に知識のある僧がいた、センゲラヴダンという。ラヴジェンというと、どんな位だったのかわからないが、そういう人がいたんだよ。彼はインドなどにも行っていたんだという、とても博識な人だった。そしてこの老人は隠れ潜んでいて、捕まらずに残されたんだと話していたよ、父がね。時々うちに来るんだ。自分の家はなく、子どももいない、その時代僧たちはそんなふうになっていた。そして兄弟たち、故郷の兄弟たちと暮らして、そうして亡くなっていったんだ。

さあ、その他にバルハーン・ヴァーンチクという老人がいた。さっきのゴンチクスレン先生の兄にあたる人だったよ。テムチギーン・ヴァーンチクという人だった、あだなはというとバルハーンという。テムチギーン・ヴァーンチクというとても優れた老人だったよ、その人は。この老人は今でいう本当の民主主義者だったんだ。そしてその時代という、1951年にモンゴル人民共和国の小国会とって選挙が行われた。それで、うちの10年制の建物を3年6ヶ月で作った突撃建設者ゲスレンギーン・シャルというウブスハンガイ県のゴチン・オス郡出身の人が〔立候補して〕いた。私はというと51年という学校をやめてしまって、田舎で2年暮らしていたときだったよ。その時代、10世帯の宣伝員というのがあった。その選挙でゲスレンギーン・シャルが立候補して、私はその10世帯の宣伝員をして、党の宣伝員をして回っていたんだよ。それでよく知っているんだ。で、そこに行くと、ヴァーンチクさんにはたくさん犬がいて吠えて、それに噛まれそうになってねえ、そして、〔ヴァーンチクさんの家で〕その選挙、憲法の2つをこうやって話したんだよ。すると彼はそれをさげきってこういうことを言うんだ。人民国会の議員というのは無知だろう、何も知らないだろうとこう言っていたんだ、このヴァーンチクさんは。子どもだと思って私たちを下に見てそう言ったんだらう。その後、その人は言葉が過ぎて、最後には党員たちにまでそういうことを言って、不適切な言動を行ったという罪に問われて10年の判決を受けて、刑務所に入って戻ってきたんだよ、ヴァーンチクさんは。こういう例があった。

たくさん僧がいたよ、わが故郷には。多くの僧侶たちが大きな寺院にいたんだというよ。そしてそれらの多くは無実の罪を着せられて殺されてしまったんだよ。最後にウルシュー・バクシ、さっき話しただろう、こうして連れて行かれ、連れて行かれていなくなってしまったんだよ。こうしてまあ、残った者たちはというと、さあ待てよ、ここの扉の所に座っている、このナツァクドルジはというと、父親はオヤングの寺院にいたというよ。そして私がここに入ったあと、亡くなった。この寺の統括役をしているんだよ、ナツァクドルジという人がいる。そのナツァクドルジの父はバルチン・オンザド（読経を導く役僧）とってオヤングにいた、オンザドをしていた人

だよ。このナツァクトルジの妻の父はわがボグド出身の人だった、僧侶だよ。えらい僧侶だった。ゴンガー・ゲツェル（僧の階位名）といって、ゲツェルという階位を持つ人だった。ゴンガー・ゲツェル。彼らはというと10年の刑を受けた人たちだよ。その兄はロボン（導師）・センゲといって、このハラホリンにずっといて、亡くなったよ。ロボンはわがホトクトの寺院の導師だった。センゲといって、わがボグド郡の最初の郡長だよ、そのセンゲ導師は。彼らはこうやって残されたんだよ。逮捕されずに残されて、顔を変えて、モンゴル人民革命党の忠誠者として、還俗してね。少なくとも郡長まで務めていた。だからなのだろうか、わがホトクトの寺院の経典などは、このナツァクトルジの所にある、17箱の経典がある。それからホトクトの寺院のマンダラを捧げる珊瑚や真珠の鐘なども彼の所にある。そこに大事に保管されている。このロボン・センゲ、ゴンガー・ゲツェルという兄弟の2人はそれらを惜しんで、そのボグドのドラーンハイルハン山という大きな洞窟がある。今年も80周年記念で作家たちを案内してきたところだ。その洞窟に経典などを2つに分けてフェルトにくるんで、ゴンガーが刑務所に行く前に持ってきて隠したんだ。そして牢で8年7ヶ月刑期を過ごして戻ってきて、その後、何年になってか、行って見てみると、外側は蛾か何かにか食べられてしまっていたが、内側は無事で、経典などはそのままの姿だったという。そして後になって、センゲさんがハラホリンにやってきた、ここで小麦工場で働いていた。小麦や飼料を運んでいるとき、ここらではこの34番基地とっていただろう。ここにこうやって人に運ばせて、そして保管していたんだそうだ。この統括役になった理由もまたそういうことに関係するんだろうよ。

この寺院の管長というのは、シャンハのパローン・フレイ寺院の出身の人ではなく、ダワー・ゲレン（修道僧）という人の息子、ヒシクトという人だよ、わがこの本堂の管長は。ダワーギーン・ヒシクトという人、父はダワー・ゲレンという人だった。こうしてこの師はこれ〔古い経典が隠されていること〕を知って、この堂塔を設立するときに、この古い経典、政治、仏教の古い歴史書などが必要だといって、そういう物がない堂塔を建設してどうするというのか、そうだろう？ これら経典はというと、みんな博物館にあって、国家の資料として国の管轄下に入ってしまったんだよ、すべて国の物。1冊の経典もここから持ち出す権利はない、国家財産だったよ、その当時。そこで、このこと〔古い経典が隠されていること〕を知った師がナツァクトルジを連れてきて、統括役に任命したんだよ。私はこれらを、歴史書などを研究する過程で知ったんだ。それだけではない、マンダラを捧げるときの珊瑚や真珠の鐘までもあるし、一部の経典はここにあるようだよ。私などはよくは知らないがね。本物の仏教大学の学生、上級の学生が学ぶチョイルという名の経典などもあると言われているよ。私はその箱を開けてみたわけじゃないけれど、17箱の経典があるんだよ。

D: その時代、無実の罪に問われたことについて、あなたが子どものとき、一般に僧た

ちをああした、こうしたと人びとは話していましたか？

B：ああ、いっぱい話していたよ。小さい頃のことというのは忘れられないものだよ。こうやって、ああやって戻ってきた、こうした、ああした、こうしていたなどと話されていたよ。例えば1つの例をあげるとすると、ウルシュー・バクシを捕まえて連れて行った年、7月に捕まえて連れていたんだというよ。バクシがいた家の、隠れていた家の人というのは辮髪のセンゲドルジという、わがボグドに辮髪のセンゲドルジさんという人がいた、もう亡くなったよ。そのセンゲドルジさんの子どもたち、その親族は今もボグドにいるよ、この前ガイタヴの80歳記念で行ったときも、辮髪のセンゲドルジと話していた。彼らの所に黄色い竹（葦）の指輪があったんだというよ。辮髪のセンゲドルジさんの黄色い竹という指輪が。

それで、7月に、2頭のウマに乗った銃を持つ人たちがやってきて、連行していったんだという。辮髪のセンゲドルジさんの所にいたバクシが捕まったあと、10日くらいがすぎただろうか、その年はとても雨の多い年だったとボグドの人たちは話していた。ずっと雨が続いて、このあたりで洪水がおきて、家も家畜も、木も石もみんな流されて、たくさんの家や家畜が洪水にみまわれた、大雨の年と名付けられたくらいだ。そんなふうだったんだよ。それはなぜなのかというと、ゴビのたった1人のホトクトがこんなふうに乗って無実の罪を着せられたから、その土地の神様、仏様がこういう荒々しい所行をしたんだろう、そう年配の人たちは話していたよ、僧だった人たちだよ。ああ、それは本当だったんだらうと、今、私は理解しているんだ。

その上、こう話されていた。ウルシュー・バクシの前身は、わが故郷に2回生まれた人なんだというよ。前身はというと、今年、私はそこに行って今うちにある写真を撮ってきたんだ。その時代に描いていた作品を調査して、写真を撮ったんだ。そして、その人が信仰していた海拔3000何メートルの頂上に到達して、国旗を立てたんだ、写真を持っているよ、登ってきたんだよ、今年、74歳の人間がボグド山の山頂に登ってきたというのは普通のことではないよ。私はこれを仏の正しい道に入った聖僧、聖僧の威光が私に乗り移った結果だと私はこのように理解しているよ。私の家に行って話すことはたくさんあるよ。すべての写真を撮ってある、そして写真を印刷してある。うちの息子はアリオンボルトとって、TB9でマーケティング部長をしているんだよ。アリオンボルトは2人いるが、B.アリオンボルトというマーケティング部長の方だ。アリオンボルトがそのカメラを持って行ったよ、ディスクにコピーするといってね、もうしただろう。でも私は全部印刷させたんだよ、全部ある。

ところで、その前身はツェレンヴァーンチクという人だったんだという。そのツェレンヴァーンチク様の仏を私は見つけたんだ。そしてツェレンヴァーンチクという人が石で作った、何の石かはわからないが、龍を作って、そのオラードウシの山脈の上に持って行って置かせたんだ、ヤクやウシに積んで運ばせたんだ。そのオラード

ウシ山脈はボグド山の山頂、海拔3796メートル。そこから296メートルこちら側に、この上に寺院を建設したならば、それはすばらしい堂塔、寺院ができるだろう、そういう平地がある。そのオラードウシ山脈の上に持って行って置くようにと、運ばせたんだよ。そのオラードウシ山脈の上にこのツェレンヴァーンチクの、最後のウルシユー・バクシが信仰していたオボーが今もある。

さあ、そして私はそのオラードウシ山脈、そのオボーに行ってまつりの儀式をおこなったんだ。内務省の4人の大佐と一緒に登った。その1人の大佐はというと、バローンバヤン・オランの出身の人だよ。このツェレンヴァーンチクの、先代の土地の人、その血統の人が同行しているんだ。そこの人たちというのはツェレンヴァーンチクを仏さまのようにして、銀の枠組みをもつ小さな首飾り、そういう仏像を作っていて、その大佐の首にもそれがあつたよ。こうしてその龍の石の所に行ったんだよ。その龍はこんなふう大きく作られていて、これを運ぼうとすると、こちら側のプフ山脈という高い山脈がある、そこをヤクカウシが運ぶ以外に方法はない。そのの上からヤクカウシを暴走させて、石を落とすためにね。高い山からこうやって飛び落として、こうやって下の谷に止まったんだろう。その止まった場所はそのままだよ。それはまるで化石のようになった龍、足、前、側面には模様があり、腹部の側面にはうろこというんだらうか、手の側などはそのままの形で残っている。いったいどうやって作って、どうやってそこに置いたのだらうか、非常に興味深いよ。そしてどんな石で作ったのだらうか。化石化した龍のようになっているんだよ、一見するとね。だが化石化した龍ではない、作られたことははっきりしている。そしてその龍を運ばせて、そこに飛んで落としたということは真実なんだ。その龍は今もそこにあるよ。ああ、それを修復して、ハタグなどを結び、お金やアーロールなど乳製品を供えてね、この歴史を消し去ってしまうところだったんだからね。全部修復をして、お金を集めて、ガラスケースの中にまつて、横の下側には四角の平らな石を持ってきて、それに五徳のような脚のある平らな机のようなものを作らせて、そこにお供えを置くようにする。こうしてその四方には木を植えて、それにハタグを張り巡らせて囲おう。こんなふうには保護しようとするとき会を結成したんだ。都合のいいことにウブルハンガイ県の自然環境を所管する長はバヤスガランとって、わがボグド出身なんだよ。彼はそう、フレー・ハドの温泉で内務省の人たちと休暇をとりにしてね。ちょうどいい人たちが出会ったものだよ。

それで、その自然環境担当のバヤスガランと内務省の4人の大佐、私たちは全員で、こうやってウマで旅をしたんだ。うちの弟妹たちがその南側の谷に暮らしているから、私はウマの料金等は支払わなかったよ。1頭のウマを借りるのに20,000トゥグルグかかるんだよ。それにタルバガンのポートク（はいだ毛皮の中に焼いた石と肉を詰め、全体を丸焼きにした料理）を作らせると20,000、いや15,000トゥグルグ、作って持つ

ててくれるんだ。こういうところにもビジネス、市場経済というのは広まっているんだよ。8つのゲルを建てていたよ、そのバロンバヤン・オラーンの人だという。トイヴという名前の人だったよ、その人がなかなか快適な、ツーリストなんかという名前だったかね、宿泊所というようなものになっているんだが、それは正しいことだよ、こうやって人びとに自分の故郷を見せて、こうやっているのはとてもよいことだよ。そうして「今、私たちでこの土地の同好の会を結成しよう、バヤスガラン長、あなたがいるんだから、今すぐここを保護地としてください。」ということになった。後になって、8月ごろに郡の役所で会って、細かい話をしたんだよ。こうして保護地にしたんだよ。ボグドの寺院や本堂までも盗掘者が掘り返しているんだよ。そこからは堂塔のあれが出てきているよ、水道のボイラーがね。ひどくたたき壊してしまっているよ、鐘までもたたき壊されてしまっている。オチル（仏具、金剛杵ヴァジュラ）は今うちの家にある。大きいよ、とても大きくて、そうこれくらいのものだよ。それから、このくらいの粘土などで作られた、それはとてもすばらしい作りなんだよ、そんな仏像、粘土のね。それら粘土や塗料などはみんなうちの土地から取れるものなんだよ。この堂塔の。1770年に本堂を建設するときはどうやって塗料を作っていたのか、その技術を今、復元することはできないんだ。ただそこにだけある。今国連（ユネスコ）にこの寺院についての報告を出しているんだよ。国連からはすべてを確認したけれども、塗料のことはわからず進んでいないんだよ。どうやって塗料を作ったのか、とてもおもしろいだろう。それは漆だといわれているんだよ。これをどうやって作り出したのか、その時代にどうやって作ったのかということは謎なんだよ。それ以外の塗料や土はこのあたりに全部ある。わが故郷にあるものでその寺はすべて作られていたんだよ。

D：あなたが小さい頃、僧たちをこうやって捕まえた、寺院をこうやって壊した、こんな人がこのようにやってきて壊したという、そういうことが話されていませんか？

ああ、話されていたよ。そうわがホトクトの寺の東側に、アイラグ（馬乳酒の意味）の丘（峠）と言われている所がある、東側だ。そのアイラグの丘の上に大きな、今で言うZIS5（旧ソ連製の大型トラック）のような大きさだったんだらう。そういう木の荷台のある、四角い、上には幌のついている、そういう大きな黒い車がやってきたんだという。そして寺の僧侶たちを、4、5人の銃を持った人たちがやってきて、寺にいた僧侶たちすべてを捕まえて、去って行ったんだというよ。そう語られていた。ああ、そのアイラグの丘の上というのは、こちら側からはモリ・チョロー（ウマ石という意味）と呼ばれている。峠といわれている、アイラグの丘はね。向こう側からはアイラグの丘、こちらからはモリ・チョローの峠といわれているんだ。その峠のちょうど道の横に、このくらいの、この半分くらいの石というのがあるんだよ、そこには大きなウマの足跡、小さな子ウマの足跡の2つがある。この上をこうやって通って、そ

それが今化石のようになって残っているものだよ。猪なんかの足跡もわかるんだよ。そういう2つの足跡がある場所だ。

そこに彼らを、そのあたりに捕まえて連れてきたんだといわれているよ。ひどいことには、高位の僧たちは逃げてしまっていて、小さな男の子たち、中下位の僧たちが「どこに行ったらいいんだろう」ととどまっている間に捕まってしまったといわれているんだ。それは本当にそうだったんだろうよ。そして、そのあたりをどうやって通っていったのかということが、また不思議なことなんだよ。そのアイラグの丘をどうやって超えたのか、信じられないよ、車が越えたとはいね。そこは車どころか、ウマで通るのも困難な場所なんだよ、そこを車が通ったんだという。今では馬力のある車やバイクがあらこちらを通って、道をつけてしまったがね。だが、そのあたりは地震で土地が崩れてしまっているというよ、1957年の地震でね。

D: あなたが小さい頃、こうやって捕まったあと、戻ってきた僧たちは普通の人の格好をしていましたか？

B: ああ、普通の姿だったよ。そういう1人の老人がいた、ペルレーグンテヴという。ペルレーグンテヴさんは捕まって、そのあと戻ってきたんだという。10年の刑を受けて、刑期を終えて戻ってきたんだ。この西側に、バローンズーン・ゴヨーという場所があるんだよ。ダラントゥルーニー川の東側だ、ズーンゴヨーという場所もあった、バローンゴヨー、ズーンゴヨー。ズーンゴヨーにそのペルレーグンテヴさんという1頭のラクダをもつ老人がいた、ゴヨー〔ゴビに生える植物〕が生えていた、そういう場所だった。そうして、あとになってね、どうなったのかだれも知らないんだ、そのラクダはメスだったという、人がオールガでつかまえて、連れて行ってしまったと聞いたよ。そうして戻ってこなかったんだろう。ペルレーグンテヴさんはそうしてどこで亡くなったのか、わからない。私はその時代学校に入るといって、故郷から出てしまっていたからね。私は69年に農牧上級学校（大学）に行って、無実の罪を着せられて戻ってきて、そうして県都に行き、そしてハラホリンに、北側に暮らすようになってしまった者だからね、それ以後どこにも行かなかったよ。ただ78年にトゥグルグに、マザル地帯という、その中心に行って、そこで暮らして、そのあとこちらのハラホリンに戻ってきたんだ。それ以後、ずっとハラホリンに暮らしている、そういう人間なんだ。

D: その時代、それで普通の僧たちは？

B: 年をとった人たちはそうしてどうなったのか、知らないよ、私が小さい頃知っていたことというのはそういうことだった。

D: 普通の僧たちは、そして妻子を持つようになったんですか、一部は妻子を持たずにいたんでしょうか、どうだったんですか？

B: おお、私の知っている僧たちは、妻子を持った人はほとんどいなかった、ヴァーン

チクさんにもいなかった。だいたい弟妹たちと一緒に暮らしていた。そして彼らはみんなヴァーンチクさんの名前を名字にしていた。デムチクという人がいたよ、兄の。デムチキーン・ヴァーンチク、デムチキーン誰々と、たくさんいたよ、あとになってヴァーンチクという名字をみんなが名乗っていたよ。

それからベルレーさんの弟という妻はいなかった、そうだった。それ以外に逮捕された僧たちでは、ああ、バザルーフ先生は妻子を持っていた。ああ、他にも妻子のある人はいたよ。サヤンニャンボーという人、とても高位の僧だったという。それなのに、後になって党の長、ずっと党の長を務めていて、後になってボグドで僧になったんだ、サヤンニャンボーという人だ、今、息子はボグドの僧になっているよ。アマルトクトヒーン・サヤンニャンボーという人がいたよ。ホブド郡から始まって党の長を務めて、サヤンニャンボーさんは何年党の長をしていたんだろう。42年といったかな。最初の党の長をしていたんだよ。そして後になってボグドで僧になって、そうして亡くなった。その後、息子はドゥゲルとって、ボグドで僧をしている、ドゥゲルを見つけるのは簡単だよ、ボグドでただ1人の僧だからね、後になって妻をもった。バボー先生は僧で後になって妻を持ったんだよ、また。さあ、他にうちのあたりでというと、ガルサンダルギアという僧だった老人がいたね。偉い僧、ホトクトの寺にいたというよ。このガルサンダルギアという人は私の妻の兄にあたる人だよ。この人はあの人たちの兄にあたる人だよ、私の話しているラドナーバザルのね。ラドナーバザルの兄だ。センゲトゥヴという国家計画委員長だった、ラクチャー長の次席をしていた、今も元気だよ94歳になっているだろうか、今はバヤンホシヨーに住んでいるよ。ハニン・マテリアルの辺りのアパートに住んでいる。禿げのセンゲトゥヴさん、実の兄はという禿げのセンゲトゥヴさんという人がいた、ラドナーバザルの兄ガルサンジャムバーと〔もう1人の兄か?〕。この僧は妻子もなく、本当の僧そのまま生きた人だよ、そして後になって、64年、69年に私が農牧上級学校にいたとき、野菜の栽培係として働いていたよ。私の野菜畑で働く人の中にはいい僧たちがいたよ。ああ、それからアジンムフという先生がいた、ああ、あの人、彼らも僧だったのかな、後になって経典を学んだのだろうか。ノゴーン・ダンガルという老人がいた。このハラホリンで妻子を持っていた。奥さんは亡くなって、子どもたちはここに今も暮らしている。ノゴーン・バンザル〔ダンガル?〕さんという人がいたよ。ギヤナバサルという人もいた。何人かの僧たちがいたんだよ。彼らは経典を読んでいたよ、行くと経典を読んでいた。私はその経典を取り上げて、高僧から与えられた経典を道に投げ捨て、取り上げた経典を破りすててね、「あんたたち、野菜に水をやれ、そんなにすごいものだったら、雨を降らせてみろ」と罵倒していたんだよ。今思うと、そんな風にするものではなく、それは何の経典なのか、どんな歴史のある本なのか、内容を話させて、チベット語の1つや2つ、文法などを習っておくべきだったんだよ。今になって自分

で勉強しようとするのとどれほど大変か、後悔しているんだよ。一部のそういう、いい僧たちがいたんだよ、彼らのことを忘れてしまっていたよ。私の今度出来上がってくる本の中に、それらはみんなあるよ。写真付きで出ている。写真を見つけて、その本の中に書き入れたんだよ。

- D：昔僧だった人びとは秘密で経典を読んだり、法要などを行っていたんでしょうか？
- B：ああ、彼らはというと少なくとも法要を行っていたよ。行ってみるとね、そのガルサンセンゲー兄の小さなゲルの中でね。そしてそのガルサンセンゲー兄というのはズボンをはかない人だったんだよ。そのスカートのような、僧が着る、何といったっけ、ドンゴグ、そういうものを着ているんだ、ずっとね。そして経典を読んでいる、そういう人だった。
- D：地元の人びとは秘密で訪れて、経典を読ませたり、物事を尋ねたりなどしていたんでしょうか？
- B：もちろんそうしていたよ。うちかというとボグドの郡の中心地にあったんだ、ダルハン（鍛冶屋）のラーゲリ（共同生活所）とって、何人かの僧たちがいたよ、うちのボグドには。そこにドゥゲヤという僧がいた、人の運勢をみる人だった。ヘンティドルジさんという1人の老人もいた。うちのヴァーンチク兄、おお、ヴァーンチク兄を忘れるところだった。ヴァーンチク兄はウルシュー・バクシの仏教の先生だったんだよ。ああ、チョイセンゲーという老人もいた。トラクターの運転手だったボディゲレルの父親のチョイセンゲー。とても優れた僧だった。私はチョイセンゲーさんの所に、ゴチン・オス（郡）、トゥグルグ（郡）にいるときにバイクで訪ねて行って、2、3日泊まったよ。耳が聞こえなくてね、大変だよ、それで紙に書いてくれるんだ、新しい字でね。ヤンビーダルジル（経典の1つ）という本を読んでもください、ああ、私を書きます、こういう感じでね。今、うちの納屋の中にあるよ、78年にチョイセンゲーさんが読んでくれて、私を書き留めたものだよ、ははは、ヤンビーダルジル。
- D：チベット語ですか、モンゴル語ですか？
- B：チベット語で読んでくれるんだよ、もちろん。私はそれをキリル文字でノートにこうやって書き取るんだ。私はだいたいその時代、僧たちに読んでもらって、自分はチベット語は知らないからね、いつも読んでもらってキリルで書き取ってね、それを暗記していたんだ。ツァガンシュヘルト（仏陀の著作、さまざまな外からの悪い物から身を守る経典）、アリオン・サン（死の穢れ、すべての穢れを清める経典）、ヒーモリーン・サンなどかというと、私は自分でキリル文字で書き取ったんだ、そして覚えて読んでいたんだ。

4 社会主義時代の占星術

占いはというと、私が13歳のとき、それもまたウルシュー・バクシの本当の占い師、

占星術師だったんだよ、黄色いアディヤという僧はね。やんちゃな者はいろんな物に首を突っ込むというように、私は動き続けているんだよ。49年に私は13歳のとき、その人から占いを習ったんだ。小学校を卒業して、田舎に出たんだよ、夏にそっちの方にね。そしてうちはそのバヤンツァイルのドゥルルジ（山や丘の突起の鞍部）と呼ばれている所にあった、かなり多くの家々がそこで夏営していたんだ。すると、あるとき雨が降り始めて、空が真っ黒になってかなり雲行きが怪しくなった。私はヒツジの放牧に出ていたんだ。ショボー・バースト〔地名〕というその南東の岩の所だ。狼がたくさんいる所なんだよ。「おまえ、雨の中で狼に人の家畜をとられちゃいけないよ。バドマー、よくみはっているんだよ」といつも母が私に注意していたんだよ。バルジン夫人とって、うちの北側に国家優秀遊牧民になった有名な女性がいた。その女性はとても優秀な遊牧民だったんだよ。「さあ、バドマー、お前は草原で寝てしまって家畜をなくしてはいけないよ。この呪文を覚えなさい、お前は物覚えがいい子どもだから。これは狼の口が動かなくなる呪文だよ」といって、私に呪文を教えてくれたんだ、そのバルジン夫人が。そしてそれをいつも唱えていたんだよ。そして、その日、こうして放牧にでていると、空が暗くなってね、昼になっているのもわからないくらい暗くなった。家畜を家の方に集めて連れて行こうとしていたんだ。すぐにとにかく集めて連れて行こうとしていた。うちの北側にアルタンテヴシ〔地名〕という埋葬をする窪地があった。そこに連れて行くぞと子どもたちを脅すときに使うくらいで、死者を置く所なんだから、気味が悪いなんてもんじゃない、本来ならば近寄らないんだよ。だがそのとき、一部の家畜がそこに行ったように思ったんだ。家から近かったから、戻ってくるだろうと思って、そのままにして戻って、家に戻ってくると、雨が降ってきた。すると、犬が吠えてね、西の方からウマに乗った長い合羽を着た、茶色い帽子をかぶった老人が西の方からやってきていた。その人がバルジン夫人の所にやってきた。私は知りたがりだったから、誰が来たのか、走って見に行っただ。すると、硬貨を置いて、占いをしているんだ。「何て不思議なことだろう、ここから遠くない場所に狼がやってきているぞ」とその人は言うんだ。そのバルジン夫人はお茶をやかんに注いでいた。私はというとはこんな薄い白いシャツ、下は短いズボン姿だった。その時代、裸でも走ったもんだよ、私たちというのは。家の中では年配の人のいうことを聞きなさい、年配の人たちの前後を走るな、出て行け、と追い出されるものだったよ。それで、ゲルの中でその四角い机の後ろに立って見ていると、バルジン夫人は柄杓を取って私に投げつけて、「このバドマー、出て行きなさい」というんだ。失神しそうになるよ、両親や大人たちのことを、私たち子どもたちはとても恐れていたからね。放牧に出て寝ているもんならば、見つけられたら蹴られ殴られていたよ。そういうしつけが行き届いていた時代だよ、私たちはね。そして、さあ、出て行けと言われたが、そこにまだとどまっていると、その家のナサントクトフという娘がいてね、私と一緒に

に学校を卒業した子だよ、その子が使っていたんだろうか、木の棒があった。それで殴って追い出そうとされたんだよ。それで走って外に出てみると、10頭くらいのヒツジやヤギの中に、1頭の動物が動いている、私は狼というのを見たことがなかったんだよ。ウマに乗って追い払おうとすると、こちらに襲いかかろうとするんだ。それでヒツジたちを何とかまとめて連れてきた。声を出そうにも恐ろしくて声が出ない。ふう、ひいというだけだよ、声が出ない、涙で顔がぐちゃぐちゃになって、嘔吐しそうになった。狼を初めて見たんだからね、狼と蛇の2つは恐ろしい動物だよ、声が出ない。そうしていると、おい、こらーっというので、振り返ってみるとバルジン夫人が横にやってきている。狼は睨みつけるようにして2回振り返ると去って行った。家畜の所に行きなさい、おまえは何をしているんだ、みんな狼にやられてしまったんじゃないのかといわれた。そうして家畜を集めてみると、1頭もやられていない、全部のヒツジに狼の涎がついているだけなんだ。それは顎が動かない狼だったんだろうよ。それがなぜ動かなかったのか、本当にその人が教えてくれた呪文によって動かなかったのかもしれないし、あるいは突然くぼみに寝転んでいたら、家畜がやってきて驚いて顎が動かなくなったのかもしれない。非常に飢えた野生の動物は突然家畜がやってくると、突然それを見ると顎が動かなくなるというんだ。だから動かなかったのかもしれないね。2つ考えられる、そうだったんだろう。そして、それを予言したアディヤさんは本当の占い師だと思ったんだ。

うちの母には9個の硬貨があったんだ。うちの父はというと家畜を追い立てて連れて行く人だった、トーヴァルチン（家畜を追って連れて行く人）だったんだよ。37年間家畜を追って、亡くなったんだよ。その両親も占わせるんだ、いろいろな占い師にね、硬貨を使う人も使わない人もいた。それで私は母に言ったんだ「お母さん、その9つの硬貨を私にください。私はアディヤさんに占いを教わりたいんだ」とね、「おお、そうしなさい。アディヤさんは本当の占い師だよ。そうしたらいいよ」といつてくれた。そして硬貨を持って、バルジン夫人の所に行った。でもそれをいえずにいたんだ、恥ずかしがり屋だったからね。「奥さん、奥さん、アディヤさんに硬貨の占いを教えてもらいたいんだ、どうしよう、話してくれませんか」といったんだ。「おお、そうしなさい、バダムは物覚えのいい子どもだから、きっと覚えられるよ。ねえ、アディヤ、うちのこの子、バダムにその占いを教えてやってよ、ねえ」と。だが渋っているんだ。「さあねえ、師と弟子になるといっても、好きなときに好きになっていいもんじゃあないよ」というんだ。そういわれて私はじっと我慢して、小さな頭を机にこすりつけたよ、こういうとき、私はいつも机をこすっていたんだ。さあ、どうしよう、教えてもらえないんだ、どうしようね。「さあ、お前、教えてもらおうというならば、師弟の関係になって、良い日に礼に従った贈り物を持って教えてもらうものだよ」というんだ。「ああ、そうしたら私はどうしたらいいんでしょうか、アディヤさん」と

いうと、「自分で考えなさい、どうやって教えてもらうかをね」というんだ。「お金はあります」といって例の硬貨を見せた。「それはお前にとって必要だろうよ。しかし、他に、師匠になってもらうんだから、師匠に贈り物を持ってきて教えを請うものだろうよ」というんだ。師弟の関係になってから、それを教えるという。こうして母の所に走って行き、こう言われたと話した。すると母は木箱の中を探してね、すると古いサムバイ（薄くて安い絹織物）を取り出した、その上、10トゥグルグをね、昔の10トゥグルグ札だ。「さあ、この10トゥグルグとこの布を持ってアディヤさんの所に行きなさい、お前は学べるよ、できる子だよ。さあ」というんだ。こうして喜びいさんでもどって、ハダグの上に10トゥグルグをのせて、こうやって渡したんだよ、正座してね。大喜びだったよ。そして頭の上に、懐から出した数珠で、祝福を与えられたんだ。「さあ、座りなさい、お前はどのくらい記憶力がいいんだい」というんだよ。「私は物事を簡単に覚えることができます」と返事をした。「ああ、それでは硬貨を出しなさい」といって、例の硬貨を取り出させて机に置かせ、寺、モーロンフ、ザスラン、などと9つの名前を教えてくれた。「さあ、この9つの名前を覚えたかい」3回いわされているあいだに覚えたよ。「さあ、ではそれを筆頭にする硬貨が出るんだよ」といって、筆頭になる硬貨は、最初のこれはここに、これが筆頭だよという。こうやって硬貨をどうやって見てすぐ理解するか、どうするのかを私に教えてくれた。私に教えてくれたあと、先生は何かを手に握りしめたんだ、そして、学んだならば、私の手の中にあるものをあててみなさい、私は何かをつかんでいるからという。何かを手に握って、私に占わせたんだ。私はまったく初めて学んでいるものだから、どうやってそんな簡単にあてることができるだろうか。まったく解くことができなかったんだよ、それでしかたなくあてずっぽうに言おうとした。「感情で当てるのではない、その硬貨の上にある、それを読み取って解き明かすんだよ、違うものだよ」といって、こうやって、こうやって解け、今でいう技術を教えてくれたんだよ。そして「では、人に物を握らせて、占ってきなさい、それを解きあかすことができれば、お前は占い師になれるんだ。」こうして、私は子どもたち、友だちの所に行って、物を握らせて、最初は外れて、外れて、そして近づいて、また外れて、近づいて。最後には人が無くした家畜などを占ってね。

こうやって私は13歳のときにアディヤさんから教えてもらって占いをしていたんだよ。こうやってずっと占い師をしているんだよ。後になって社会主義、共産主義時代というのは、長や何かの役目につくために、その硬貨を母の所に置いて行ったんだ。64年に故郷に残して行ったんだ、母にね。64年じゃない、嘘をいったよ、61年に家に戻ったんだ、ボグドから、私はブルド郡で農業技師をして戻ったんだ。その家に戻ったとき、母は私に硬貨を出してくれたんだ。そして、私は秘密にしてね、常に秘密で占っていた。特に青年同盟長などをしているときなどは、ひた隠しにしていたよ。こ

うして、90年の民主化になって、僧や宗教などが出てくるようになって、私は定年になった、そして野菜を栽培した。国営農場の野菜畑で、国の功労技師だった、今は亡くなっただろうよ、国営農場にいたツェレンナドミド長が私にニンニクを栽培してくれと言ってね、うちの国営農場では何年もやってみたけれどニンニクを栽培できなかった。お前ならできる、ゴビヤハンガイで野菜を栽培していた者なんだ、ニンニクを植えてみてくれという。そこで、私は0.5ヘクタールの畑でニンニクを栽培した。そして、そのころ、飛行機が行方不明になったとって、百万トゥグルグの賞金がかけてあるとってね、嘘か本当か、そんな賞金をかけて探しはじめているというんだ。私にはだいたいのがわかっていたんだよ。すると国営農場長だったツェレンナドミドさんは私を3回試したんだ。1回目は私が自転車で走っていると、おおい、おおい、そこの若い、という。こっちに来いというので、行ってみた。どうしたかという、その時代というのは国営農場の農地の私有化とか何とかいって、みんな私有化されていた時代だったんだよ。それで私有化で得た2歳ウマとその母ウマがいなくなった、群の所に行ったんだろうかというが、群には戻っていない。さあ、お前は占いをするだろう、占ってみろというんだ。ああ、これは私を試しているんだなあ、まあとにかく占ってみよう、占って見たところ、群にいるという。ああ、私をただ試したんでしょ、いなくなったのならば、群にいるものでしょよ。あなたはこうしてください、私と違って自転車に乗るような人じゃない、長なんだから。69（旧ソ連製ジープ）やいろいろな車を持っているんだから、それに乗って、ウマの群れの所に行ってみなさい、そこにありますよ。こういってね、そうやって話は終わったんだよ。

次はというと、畑というのはこのあたりの南側にあったんだよ、うちのこのあたりにね、うちは郡の中心地に近い所にある。うちはここで長年暮らしているよ。そしてそのとき、畑の柵の中の栽培用の小屋で野菜を根分けしていたんだ。すると野菜の見張りをしているツェンドという人がいた。その人が、おおい、うちの会計士たちは県都へ報告を出しに行ったんだ、昨日出発したんだがまだ着いていない。夜にたくさん雪が降った、まだ着いていないんだ、あなた、占ってみてくださいよ、事故にあったんじゃないだろうか、と言うんだ。おお、そうしよう、占ってみよう。私が占ってみるから、そのあいだにもう一度あちらに電話してください、こう言ったんだ。そして占ってみると、もう到着していると出た。私を試しているんですか、彼らはもう到着していますよと言った。いや、さっきかけたときには着いていなかったんだ、じゃあ電話してみようと言った、到着していたんだろう、こちらには何の連絡もない。それで行って聞いたところ、おおバダムレグゼン、彼らは到着していたよ、さっき着いたとっていたといわれた。これが2回目だよ。

3回目はというと、ある日、物置にしている貨車の所で野菜畑で働く者たちが食事をしようとしていたんだ、すると農場長がやってくる。時々一緒に食事をしたものだ

よ。そして長や私たちは例の飛行機についていろいろ話をして、畑の労働者たちは私にいろいろ占わせて、手に何かを握ったり、一部は握らなかったり、女たちはいろんなことを相談して、そうしていたんだ、長もそこにいた。そして、おお、例の飛行機を占わせるのを忘れていた。その飛行機がどこにあるか占えたら、お前を本当に会社の、当時は会社になっていたんだよ、会社の占い師にするぞ、というんだ。例のダシツェレン・オチルバトの占い師にしたようにね。そういつていたんだ。そういえば、あなたはこの前、2回も私を試しましたよね、でも2回とも私にはわかっていましたよ。そのウマたちは群の所に行っていたこと。その長たちは到着したということ。さあ3回目だ、今度当てたならば、あなたはいったことをちゃんとおこなってくださいよ、約束は果たしてくださいよ、と。嘘をいわないでくださいよ。会社の占い師にするなんてね。〔約束を果たすかどうか〕見せてもらいますよ、といったんだ。それで私は占っていったんだ、おお、見つからない、生きているものは何もないとね。とてもたくさんの氷や水のある険しい山の場所、どこなのかはわからない。わかるものなら何という山にあるといたいよ、でも知らないものは仕方がない。山がちな所のように、こちら側には誰もいない。近いうちに見つかる。そうしたところ、本当に何という山だったのだろうか、私はこうやって占ったんだよ。その後、私は長から遠ざかって、いくらかの給料を与えて会社の占い師にしようといっていたのに。ああ、お遊びをしかけて笑い者にしていなくなったよ。そんなことがあった。こうやって90年に、いや90年じゃない、70歳になって、2004年というね、99年に私は僧になったんだよ、5年目を迎えていることになるね。

D：あなたに占いを教えたアディヤという人は僧だったんですか？

B：僧だったよ。僧であったとき、そのウルシュー・バクシの占い師だったというよ。そのチョイセンゲー、ヤムビーダルジルの2人はというウルシュー・バクシの占い師だったんだという、後の時代のね。

D：あなたの家ではあなたが小さい頃、仏教を信じていましたか？

B：うちでは信仰といってもそんなたいしたことはなかった、しかし母の信仰していたノゴーン・ダリ・エヘ（緑ターラー仏）という仏画はあった、小さなね。そして、私はそのノゴーン・ダリ・エヘ、それによってひどい目にあっただよ、それをもちだして、4つに折り畳んで、そのかわりに元帥の写真を入れたんだ、チョイバルサン元帥。

D：額縁にですか？

B：額縁に。チョイバルサンの、その時代将軍、例の元帥の服装をしたとても素晴らしい写真があったんだ。

D：あなたの硬貨は今、本堂にあるんですか？

B：硬貨、ああここにあるよ。

D：ああ、そうですか、それで？

B：それで、私はその母の、その先生が教えてくれた硬貨を何年も保管していた。いけないことというのはとても不思議なものだね。去年、私はあそこに行ったんだ、中国へね。オタイグムベン、それから北京、フフホトと行って戻ってきたんだ。戻ってきてウランバートルで少し遊んでいて、明日になって戻ろうとしていたところ、その4区の終点の所に私の1人の弟（もしくは妹）の家がある。家に行ってみると、収入や何や、いろいろなことがうまく行かないという、それでそのヤンビーダルジルを読んでやり、経典をあけてやってね、その後、戻ろうとして夜になってしまったので、ミクロバスに乗ったんだ。それでそのカギタバコ入れの袋を膝において、こうやって置いて、細かいお金がなかったから、5000トゥグルグを払ったんだ、車掌にね。それなのにおつりをくれないんだ、それでののしりながら言ったんだ。そのために忘れてしまったんだ。降りるときにそのカギタバコ入れの袋、占いの貨幣、お金とパスポートは別で5000トゥグルグ、いや10,000トゥグルグ入っていて、その5000を払って、後の5000トゥグルグの入ったそのカギタバコ入れの袋、貨幣をこうやってなくなってしまった。

D：あなたはそのダリ・エヘを、お母さんのダリ・エヘを取って、チョイバルサン元帥の写真を入れたといいましたよね。

B：そうだよ、それによってとても不吉なことになった。仏の罰があたるものだ。仏の。

D：どこに置いたんですか？

B：木箱の上に折り畳んでおいたんだよ。

D：ああ、木箱の上に？

B：木箱の上にそのままそれを取り出して、伸ばして置いたりせずに、4つ折にして、紙を折ってそのまま置いたんだ。小さな子どものすることだよ。その時代というのは無宗教の宣伝が広まっていた、それはそれは強いものだったんだよ。それ〔このエピソード〕というのは50何年だったのだろうか、49年に学校を卒業して出たんだから、50年だっただろう。そうしてひどい目にあっただよ。そのせいで19歳になった娘を失った。こうやって考えてみると、仏のあれだよ、仏のお守りを粗末にした、まさにそれによって罰を受けているんだ、今もそれから逃れられないんだよ。恐ろしい、仏のそれは恐ろしいものなんだよ。うちの長女に大きくなった息子がいる、その子は精神病だ。今21歳になる、いい青年だよ。5、6年生まではまったく普通だった子が、6年生になる年に突然いなくなったんだ。ウランバートルでマンホールに入ってね、1ヶ月探しまわって見つけて連れ戻した。すると精神に障害がおこって、それで疾患を負ったんだという。今は時には普通、時には病気なんだよ。

5 文化躍進運動

D：その時代、家々では仏を秘密で信仰していたんですか、一般的にわかるようにまつって信仰していたんでしょうか？

B：おお、どうやってわかるようにまつるものかい。特に文化躍進運動の時代というのは、特に仏教の経典などいうまでもなく、アルヒを蒸溜する樽まで罪に問われていたというんだから、考えてみたまえ。それで蒸溜をすることもできず、樽を壊していたんだよ。うちのボグド郡はというと、郡のネグデル長シャラヴチョクドンという、北朝鮮で大使館の書記をしていて戻ってきたというよ、党の推挙で行った人、後になってボグドから国会議員になった人だよ。そのシャラヴチョクドンが蒸溜する樽を壊させていたリーダーなんだよ。それで私は、その木の樽を壊させるというのならば、あなた方はベルゼーンテン（堅い水を通さない布）で蒸溜の容器を作ればいいといって、そのやり方を人びとに教えてあげていたんだよ、ベルゼーンテンで作らせて、秘密でアルヒを蒸溜していたんだよ、青年同盟の長だったときにね。そのシャラヴチョクドンと私はというと絶対にそりが合わないんだ。それはというと、私を党に入らせなかった、党のメンバーにしなかったというのはシャラヴチョクドンが私を邪魔したんだよ、党委員会のメンバー、郡、ネグデル長だったんだからね。ああ、党の人たちはまた別だよ、同盟委員会の長にはしてくれたんだからね。

D：あなたはなぜ党に入ろうとそう望んでいたんですか、当時？

B：党に入る興味があったんだ、少しでも党の仕事をしているんだから、入党したいという考えだった。残念なことに取らなかった。それはまた理由があったんだろうよ。今思うと入らなくてよかったと思っているよ。まあね、もし入党していたとしてもそこから出てしまった人というのはいっぱいいるからね。そんなことになっただろうよ。

D：小さい頃、あなたは仏教を信じて、拝んでいましたか？

B：おお、私はとても信仰心があったよ。だからその経典などをキリル文字で書いて…。

D：それは若いときですか？

B：もちろん若いときだ。

D：どのくらいですか？

B：30何歳だっただろうよ。30何歳だった。64年に私はというと青年同盟長だった、ボグド郡の同盟委員長といって6年務めたんだよ。

D：ああ、同盟委員長だったとき、あなたはそのチベット語の経典を読ませて？

B：それはそれより後だよ、その時代は北側の、そのヴァーンチク兄にヒーモリーン・サン、マンハンなど簡単な…。

D：なぜあなたはその時代に興味をもったのですか？

B：後の経典は別として、私は70年以降、ソイゾン・ドゴ（人名）から教わり始めて、書いたり読んだりするようになったんだ。

D：あなたはなぜ興味をもったのですか？ 経典に。

B：それはまあ、うちの先祖にそういう僧侶だった者たちがいたから、もともとそうなることになっていただろう。私はそう考えているよ。私の父は、そのウルシュー・バクシの所に行き、子どもを名付けてもらってきた、これがまず第1、第2にはウルシュー・バクシの乗るウマをね、とても不思議な人だったんだよ、うちの父はというと、すばらしい側対歩のウマを好んでね、今でいう趣味のようなものだよ、今でいうそういう趣味を持った人だった。そして、ウルシュー・バクシのお乗りになっていた、白檀の机に乗っているかのように〔すばらしい乗り心地の〕、淡黄色のウマがいたんだという。その淡黄色のウマはというと、50頭の子ヒツジを持つヒツジ、10頭の子ウシを持つヤクと交換して得ていたというんだ。そういう変人だったんだらう、たった1頭のウマを50頭の子ヒツジと取り替えていたんだからね。その時代というのは、家畜が非常にたくさんいて、ただだったんだらうよ。10頭の子ウシを持つメスのヤク。そして、ウルシュー・バクシのそのヤクを、私の祖父にあたる人がいた、ツェムベルという人がヤクの放牧をしていたんだというよ、家畜のね。そして従者、マイダル仏の儀式のときに、マイダルのウマ、額の白いウマが儀式に使われていたんだよ、その額の白いウマというのは、僧たちは手綱を持つことはなく、一般の人が手綱を持って歩かせるという、そういうきまりだったんだというよ。そのとき、私の祖父が、ツェムベルという人が、頭の大きいツェムベルという人は、僧ではなく一般人だったんだ。それでマイダル仏の儀式が行われるときには、マイダルのウマを必ず、そのツェムベルが手綱を持って連れてくると決まっていたんだというよ。

そしてまた、その上に不思議な話がある。不思議といっても、本当のことだよ、今年、そこに行って写真なんかを取ったんだ。というのは私のその伯父、伯父じゃない、その祖父はというと、殺されたんだというよ、呪詛されてね。そこにはあの人の家があつてね、このエルデネゾーにある大きな建物、堂塔の仏像などを修理した人、レンツェンドルジという人がいた、一緒に働いていたシャラザやその他の人びとがいつも話していたよ、芸術のレンツェンドルジという人をね。子どもたちは今このハラホリンにいるよ。そのレンツェンドルジさんの親戚の人たちがいたんだ、兄の家の者だろうか、2人の僧がいたんだ、インドに行った。インドに行って、7年間勉強し、そして学校を卒業して戻ってきたんだという、故郷に戻ってきた、その師が送ったんだというよ。彼らの師というのはウルシュー・バクシの下の階級の、何とかいう堂塔の指導者だったんだよ。そしてその2人の僧は7年たって戻ってきた。戻ってきてどうしたかということ、その堂塔の今でいうオンザト（読経を導く役の僧）というんだらうか、2人ともそういう立場の僧になったんだというよ。その僧たち、2人の僧の学んだ経典と、わがウルシュー・バクシの経典の2つは、いつも対立したんだというよ。一方はゾド、ルージンという経典（苦しみを和らげるための経典）を学んできた2人、バ

クシはというと法要で今読んでいるチョイルという名の経典、今私たちが読んでいる経典の側の人だったんだからね、私たちの大部分はボグドの弟子、ホトクトたちというのはツォクチン・ホルルだよ。さあ、こうやっているうちに、2人の師は弟子たちを高位の僧にしてね、寺院の、座を争うというような状態になったんだ。こうやってお互いに黒（シャマニズム）だ黄（仏教）だといって、今もそういうことがいわれているだろう、寺の中がそんなふうになったんだよ。こんなことになって、ウルシュー・バクシはその下の師に対して、少しこういうことをしたんだろう、ちょっと制限をかけた、いいかえれば正しい道に戻そうと、圧力をかけたんだろうよ、そうすると、そちら側の師の僧は完全に反旗を翻して、呪いというのか、そういう悪の側の経典を持ち出して、その2人の弟子に呪詛を行わせたんだよ。すると、うちのホトクトの寺院の周りには狂犬や、狼などが走り込んできて、ウルシュー・バクシのゲルの屋根に爪を立てて、もぎ取って壊し、また、側にいる僧たちにさまざまなことで危害が加えられ、危険が降り掛かってきたんだという。こうして、彼らはわかったんだというよ、その僧がこういう呪詛を行っているんだということを。そうしてその2人の僧を捕まえて、彼らを西の、今私が話している、そのペルレーグンテヴ、さっき話しただろう、例のメスラクダもっている、その家の向こう側にくぼんだ場所がある。そこに連れて行き、刑罰のための箱に閉じ込めて、例の頭だけ出す穴がある刑罰を行う箱、2つの箱に2人の弟子を詰め込んで、隙間には砂を詰め、身動きできないようにして「さあ、いえ、誰にどんな呪詛をしたのか、お前は何をしたんだ？」と尋問した。そういう刑罰をおこなっているときに、例のマイダル仏の儀式が行われる時期になって、明日それがおこなわれるということになり、うちのその祖父を呼んだんだという。そして翌日、マイダル仏が降臨するという。その前夜、やってきて泊まるものだったというよ。さあ、ツェムベルがやってくる。1頭の黒いウマに乗ってやってくるから、柵を見なさい。ウルシュー・バクシの所の隣に住んでいたんだというよ。ウルシュー・バクシの所は西側にゲルの跡地など、先日写真を撮ってきたよ。記念にお供えを置いたよ。その祖父の家は東側にあって、そこにはこういう2つの高い土壁があって、東側にはそのツェムベルおじいさんのゲルの跡地がある、今もそのままあったよ。

そして、その正面には黒いウマがつけられていて、バクシは弟子たちに説法していたよ。そして翌朝になって、マイダル仏の儀式が行われる日になった。そのウルシュー・バクシの従者、マイダルのウマの轡を取る役のツェムベルは亡くなってしまっていたんだ、死んでいたんだという。家で死んでいたんだよ。呪詛だよ、その2人の恐ろしい弟子たちの。それで、その2人を箱詰めしたまま尋問したんだという。彼らは1人は罪を認め、1人は認めなかったというが、処刑されたんだ。その場所にはその木の箱、彼らの骨がある、今でもあるんだよ。彼らをそこで処刑したんだ。ああ、その2人の魂はというと、耳のない尾のない2頭の狼になって、戻ってきた。

その寺にマーニトさんという人がいたよ。それ以後、マーニトさんがオマー・ホム・バザル・バニ・ホム・パドという経文を石の上に彫って、碑を創作したんだ。経文が書いてあるよ。そのマーニトさんの碑のある丘の東側にボルガスト火山がある。そこには経典にある「ボーヴォン・チョロー」というまた伝説がある。ここには石で作った物があるが、そこには木で作られた、そういう男性器の形をした物があったんだ。それを1947年、私がボグドの小学校で学んでいるときに、ハルラーニー・トゴーチという人がいた。今もボグドに住んでいるよ、70歳を越えた老人だ。他にスレンガーという人もいた、そのスレンガーはヤクにぶつかられて、ずっと前に亡くなったよ。その2人が例の性器の形のオリヤス *Ulias* の木（ヤマナラシの仲間、学名は *Populus*）を切り倒して、下部を一方に、上部をもう一方に、ヤクの上の鞍に結びつけて、持ってきて、ボグドの学校の燃料にするために薪にしてしまったんだよ。おお、本当に、その時代、私は子どもだったから、何もわからなかったけれど。今歴史がわかるようになって、さっき突然思い出したよ。そういう2つの丸いクルミのようなものだったよ、オリヤス、それを切り倒して小学校の燃料に使ってしまった。今思うとそういうことだったんだろうよ。

そうして、そのボルガスト火山にその尾のない2頭の狼となって戻ってきたんだというよ。そしてその頃、寺の僧たちがほとんど性病にかかってしまったんだ、若い僧たちは寺の外に、女たちを連れて行って、そのボルガスト火山の所でいろんなことをしていたんだというよ。するとその2頭の狼がやってきてその女たちを食べるんだ、そういう恐ろしいことがおこったんだ。そこで、火で浄めのお祓いをして、そのオリヤスで性器の形のものを作り、そこでまじないをして、その2頭の恐ろしい魔王を滅ぼしたんだというよ、その2頭の狼はそれほど恐ろしい存在だったんだよ。その恐ろしい時代の始まりが、祖父ツェムベルが彼らの呪詛で死んだことだったんだよ。

D：その2人が呪詛したんですね。

B：そうだ。それを今年、去年、故郷へ行ったときに、1人の親戚の80歳を越したお姉さんがいる、そのお姉さんがそうやって〔祖父は〕亡くなったんだそうだと話していたんだよ。それを私は心中で詳しく調査してみたら、きっと明らかになるものだと思うんだ。それで今年になって、故郷へ戻ったとき、それを調べるために何日間かを費やした。私は聖なる僧のそこに行って、そこからバローンボグド、バローンボグドからズーンボグドに入って、バイクやウマで旅をしたんだよ。そして、その歴史を調査したんだ、著書の中に書こうとして調査したんだ、写真なども撮って来たよ。それで、その歴史などかなり多くのことを知って戻ってきたんだ。それらを話す、知識のある兄弟たちは亡くなってしまった。いい時代になってきた今、たった1人年を取ったお姉さんが残っているよ。彼女はそうやって話していたんだ、それで、こんな、こんなことだった、こうしたんだという、これをあなたは聞きましたか、これを知っ

ている人は今この土地に誰がいるのか、教えてください、と私は行ってね。今年、私は子どもと一緒に故郷を訪れて泊まって、いろいろ調査をしたんだよ、たくさん話をしてね。ほとんど私たちの世代はいなくなってしまって、歴史を知る人はほとんどいなくなってしまった。高齢の人たちはいなくなってしまっているんだ。

D：信仰に対して少し寛容になったというのは、いったいどの時代からでしょうか、昔、社会主義の時？

B：おお、それはあれからだよ、民主化の、90年以後、寛容になったんだよ。それ以前というのはまったく閉ざされていたんだ。特にゴビの方というと、そういう知識のある僧はいなくなった。経典を持つ、仏教を信仰する家もなくなった。文化躍進運動の時代、すべてを持って行って、さあお前は仏を持っているか、経典を持っているか、と行ってね。特に党のメンバー、同盟のメンバーはというと、それを最も調べて、弾圧していたんだよ。なぜかというと、私は自分が青年同盟長をしていたから、このことを詳しく知っているんだよ。

D：仏教の信仰物があれば、これを没収しますか？

B：ああ、まあそれを没収しなくても、私の場合は、あなた方、こんなふうに出してはいけないよ、といていたよ。ツァガン・サルの日や、縁起のいい日などには出して拝みなさい。その他のときは常に隠していなさい。隠すときにはこうやって木箱の中に入れて、上から服を置いて、こんなふうにはしてはいけないよ。木箱の中に隠し部屋のようなものを作りなさい、あいだに横板を入れて、2つに仕切るんだ。このくらの木、それで上に仏や経典などを入れて、下側にその他の物を入れなさい。それで仏をまつりに行くときなどは、こうやって天窓も積んで、ラクダの上にその仏の入った木箱などを持って行きなさい。次のラクダの上に子どもや何かを乗せて持っていくものだったんだよ、わがゴビの者たちというのは、そうやって移動していたんだよ。その伝統はそのままにしなさい。私はアルヒを蒸溜する樽を壊せというときに、ベルゼンテンで樽を作るアイデアを出していたというくらいの者だったんだからね、私はボグドで多くの人にベルゼンテンの樽を作って、蒸溜をさせていたんだよ、工場だね。うちかというとボグドでヤクを飼っていた。そして工場で搾乳する。その時代というのはみんなネグデルに渡してしまった、ネグデルの家畜だよ。個人形態の家畜というのは、ゴビでは何頭まで、ハンガイでは何頭までと決められていたんだからね。それ以上になって家畜は社会の物として持って行かれる。そうだったんだよ。公務員たちというのは、家畜を持つことはできない。乳が配給される、肉も配給される、税も割り当てられる。私はというと、同盟長だったときに、公務員だといって、家畜を持ってなかったんだよ。ある年に1頭のウマ、父がウマを数えられて私の所にやってきた、私はどうしたんですか、このウマはどうしたんですかと、その家畜頭数調査の結果をもみ消すようにまでしていたんだ。大変な時期だったよ、そんなふうだったんだ。

6 民主化後の宗教実践

D：今、あなたは仏教がどのように、どんなふうに広まっていると考えていますか？

B：おお、今はとてもいい時代だよ、その点ではね。今年の秋に国会で仏教について取り上げて話し合われようとしていた。バドラー議員などがいろいろな人から意見を募集したんだ。それに私は意見を送ったよ。それから新聞にも送ったんだよ。それは載らなかったがね。だが、この秋の国会では、宗教問題について話し合われなかった、こうして過ぎ去ってしまった。それで、この前、私はウランバートルに治療をしようと思ったんだ、でも〔その宗教に関する仕事は〕できなかった。1週間、いろいろな所で検査やその結果を診断させようとして、診断が出たあと、12日間入院して、出てきてからこちらに急いで戻らなくてはならなくなって、ばたばたして、できなかった。本来、私はこの宗教を秩序のあるものにしたんだよ。チョイ師の所に一度行ってみようかと思っている。今はこういう分け隔てのない宗教の統一された機関というのはないんだよ、モンゴルには。宗教のそういう統一された機関はない。あなたはなぜそんなことをいうんですか、といわれれば、これはこういうことなんだよ。この堂塔を建設させようと私は県の県知事の所に走って行って、意見を述べようとしたんだけど、県知事はいないという。そのときというのは、県知事はエルデネビレク知事だった。今は大使か何かになってしまっているよ、ロシアで。テムベレリン・エルデネビレク。そのエルデネビレクの所に行ってみたところ、そいつはというとその他5人と一緒にアルヒを飲んでいるんだよ。それで私はウブルハンガイから直接省に行って、省に行ったところ、建設させないという、それで、私はそれを不服として「ジンダー」紙に投稿した者なんだよ。さあ、このように動いてみて、宗教の機関はいつどこにあるんだろうと、こうなったんだ。だが、まったく存在しないんだよ。チョイジャムツはどんな僧か。ガンダン寺の、モンゴルの宗教界の中心ガンダン寺のハムバ（管長）というだけであって、モンゴルの仏教の統一センターの、いいかえれば会長ではない。そういうものはないんだよ。さあ、そういう宗教の統一した機関というものもない。それを作り、故郷の代表である国会議員たちが言っているように、すべての郡に1つの寺、すべての県は堂塔のある1つの寺院を持つようにすべきだと考えている。

さあ、この上に話すとすると、少しは知識のある人びとが信者たちの資金で裕福になって、それで何とか基金だの何とか導師などという名前でもいろんな宗教家が出てきている。本当に心を砕く人というのは、宗教の教義、言い換えれば宗教の専門の教育を受けた人であって、そういう人が大勢いるんだよ。そう理解したんだ。こうして、私はどこに行ったかという、ソニンバヤル師の所に行った。そこに行くと、私は例の本、それによって最初知り合ったんだよ。その『満月』という本を1冊、黄色いハタグに包んで行って、初めてソニンバヤル師と会って、師弟になったという、こうい

ういきさつがある。次にはどうしたかという、L.フレルバートル、優れた学者だよ、モンゴルを引っぱっているただ1人のチベット語の翻訳家というフレルバートルさんだよ。家にまで行ったんだよ、「モスクワ」地区にあるんだよ。家に行って、棟の玄関で同じようにハダグを捧げて会って、こういうことをしています、こういう経典を研究して、こうやって私はウルシュー・バクシについて調べようとしていて、こういう人びとがたくさんいますということなどを話した。この人を、こういうホトクトたちを今明らかにしよう、13人のホトクト。わがウルシュー・バクシは13人のホトクトの1人なんだよ。2つの印璽を持つウルシュー・バクシというのは、ダライ・ラマから授けられた印と、ボグドハーンの印をもつ、印璽をもつ方と呼ばれているんだ。2つの印をもつ（共載、チンギス・ハーン一族の系譜で、かつダライ・ラマの系譜であること）僧というのは、わがゴビのその方なんだよ。ウルシュー・バクシなんだ。これを今、世に出そうとしている人はモンゴル国にはいないんだよ。私はというと、力が及ばないんだ、チベット語など、宗教の知識が不足していて、これを今どうしようかと思っている。どうやって研究したらいいのか、これをあなた方のような人びとが研究して世に出してください、私はいろいろ調べて、それを提供することはできるから、そう思ったんだよ。すると、あの人、ディラヴ・ホトクトについて書いた、その本を私に下さった。今も持っているよ。ソニンバヤル師もまた1冊の本を下さった。ドンドゴビのホトクトたちについて。清朝に支配されていた時代のモンゴル支配、清朝支配によるモンゴルという。そして、これを読んでみなさい、ディラヴ・ホトクトについて。あなたはこれを読んで、同じような形式でその師について調査をしなければならぬというんだ。そして私はそれ以後、一昨年、1人の親戚の年老いた兄がなくなって、その葬儀に行って、親戚の姉と会って、話を聞き出したというのがそれなんだ。そして今年、フレルバートル師がされたようなこういう調査をしなければならぬ。少なくとも、その寺の所に行き、ゲルの跡を見た。本堂は掘り返されていた、こういうものを見つけたと話しているのはそういうことなんだ。こういうことなんだよ。

D：今ホトクトや転生者などを明らかにさせていますよね、わが国では？

B：そうだ。

D：あなたはそれを明らかにするのは適正だと考えていますか？

B：おお、これは適正なことだよ。現代の科学ではこのように話されているんだよ。魂というものはある、そうだろう、魂があるのだから、仏はいる、証明されているんだよ。どんな名前だっただろうか、大きな世界的な特別の科学、魂研究という大きな科学が開かれて世に出てきたんだよ。そこではこう定義されているんだよ。魂というものは存在する、魂というものは、魂と思考力、魂には思考力がある。人がこうやって生きていて、生きていてあいだ、人は運命があるといわれている。生きていてあいだ、人の魂は威光と運命の2つで成り立っている。死んでしまうと、魂は体から抜け出る

んだ。魂がどうなるかという、思考力は魂の中に存在するんだという。男性の魂は蛇の頭をした、こういう人の頭の形をして蛇の尾をした精子の形をしている。女性の魂は頭の形をしたこういう卵子の形だという。こうしてその精子の中に魂と思考力は一緒にあるんだ。それで男女の精子と卵子が一緒になって子どもができあがる。その子どもを作り上げる、最初の受精卵の中に思考力が宿っている。これをどうやって証明していたかという、世界で有名なモーツァルトというのは、4歳の子どものときにどうやって世界のクラシック音楽を書くことができたんだろうか。4歳の子どものときにどうやって。これを研究したんだよ。この魂の研究ではね、現代の世界的な研究者がね。そのモーツァルトの父は偉大な音楽家だった。母もまた音楽家、声楽家だった。この世界的なレベルでこの子どもはこうやって作られ、その2人の魂がこうやってそこに入ったんだよ。モーツァルトの魂にどうやって入ったのかという、父は音楽を創作し、奏でている、母もまた歌を歌っている。その子どもはその魂と思考力の2つがあったからこそ、それを聞いていたんだよ。受精卵のときからそれをこうやって聞いていたから、4歳のときにこの素晴らしい、世界でも有名な音楽を創ることができたんだという。

さあ、このように偉大な研究者たちはみんなこうやって研究し、その成果を出したんだよ。こういうことだと、研究を世に出してきたんだ。これは真実だろうよ。こう考えると、この転生者というのは、みんなそういう人びとだということになるよ。その魂が出て、ある場所のどこかにたどり着くんだ。昔のホトクトたちは、こういう伝説、歴史をこうやって聞いて学んでいたんだ。小さい子どものころに、年配の人びとが話していたんだ。1人の転生者についてとても素晴らしい話があった。それはこのゴビのドクシン(凶暴な)ホトクト・ダンザンラヴジャーの転生者だったんだよ。それは5世のときに無実の罪に問われた人なんだ。そして6世の転生者はというと、これなのか、7世の転生者、8世の転生者というのが、そのダンザンラヴジャーの7か8世の転生者というのが、このわが故郷の、そのツェレンヴァーンチク・グーシ(僧の学位の1つ)、ウルシュー・バクシの2人だと考えられているんだよ。その7世、8世の転生者は常に自ら明らかになったものなんだよ。なぜかという、第8代ボクド・ハーンと清朝皇帝の2人は、ダンサンラヴジャーが5世の時に罪を着せて、処刑してね、砂の上でむち打ちにして消し去って、再度転生を認めないと、こうやって捨て去ってしまったんだよ。こうして次の転生はというと、みんな自ら自分で明らかにして[誰かに承認されるわけではない]いたものなんだよ。その6世の転生のことを私に話してくれていたんだと、今、私は思っているんだ。とても美しい伝説だったよ。それは私にとって、まさに6世の伝説だった。それを話していたことを思い出したよ。そうして、そのころに私が思うことといたら、いつもそういう後の転生者のことだったよ。彼らの生まれる場所は、いつもひどく貧しく、財産もなにもない、夫のいな

い孤独なそういう女性の所に行って、生まれてくるものなんだよ。常にそうやって生まれている。そうして、その6世の転生者はというと、ゲルに生まれたんだ。その7世はというとそうやって生まれて、ツェレンヴァーンチクという人はわが寺院で5歳のときに転生が明らかになって、南へ送られて、それはどこなのか、インドだったろうか。そして10歳になって、わがホトクトの寺院というのはずっと後に建設されたんだというよ、ボグドの寺は。私には設立の年月の記録がある。そしてそこにそのツェレンヴァーンチクの転生を明らかにさせて、そこに配したんだよ。その人は長生きはしなかったんだという、それで亡くなって、次の化身はというとウルシュー・バクシというのは、ウブルハンガイ県のボグド郡の第2バグ、フルフレーの谷に生まれた人なんだよ、わが故郷の地に生まれた方なんだ。フルフレーの谷に生まれたゲルの跡が今もあるよ。

D：するとウルシュー・バクシというのはノヨン・ホトクトの、次の、次の化身？

B：そうそう、そういうことなんだというよ。

D：その伝説というのはどういう意味の伝説なのでしょう？

B：それは言い伝えのようなものだよ。6世の化身について私だけが知っているだろう。これは6世の化身についてなのか、7世の化身なのかはわからないんだよ、推測しているんだ。それはというとこれはこうしたものだ、それはこうやって5世を認めないといって、こうやって捨て去ったなどと、私は6世なのだろうかと考えていると、ゴビの地に巡り会わせただ。

ゴビに、その旗というのは、今で言うバグ。バグ長たちというのはザンギと呼ばれていたんだよ。ザンギのツェデヴという人がいた、そのツェデヴの使用人、20歳を越えたくらいの若い女性、孤児でヒツジを放牧するそういう使用人の娘がいた。そして、その女性が妊娠し、1人の男の子を産んだ。さあ、その息子が3歳のとき、小さいときにその若い母が亡くなってしまった。そして、その3歳の子どもがそのツェデヴの所に残されたんだ。こうやってツェデヴに残され、3歳の子どもなのにヒツジの放牧をしていたんだという。さあ、こうやってヒツジを放牧していたところ、ある日、狼がやってきて、その聖なるものに捧げたヒツジ（首などに絹布を結んで聖別した）を取って行ってしまったんだよ、狼が走ってきてね。こうして、その聖なるものに捧げたヒツジをその子は狼に獲られてしまって、夜になって怯えながら戻ってきたんだろうよ。すると、そのツェデヴの妻はというと、非常に厳しく気性の荒い人で、その子をいつも叱り飛ばし、殴ったりしていたんだという、非常に意地の悪い、子どもを生まない人だった、そういう性悪な女だったんだよ。今でいうと夫人とでもいうんだろうか、その人を。その子の母が20歳を越えたくらいというんだから、その夫人はというと40歳にはなっていただろうよ、髪を真ん中からわけて結い上げた夫人と呼ぶべき人だっただろう。そしてその子どもがこうやって夜に戻ってきた、ツェデヴはラクダ

などを集めてくるといって出て行ってしまっていたんだよ。その子が戻ってきて、狼に食べられてしまった、何もできなかった、どうしようもなかったと言ったという。すると、その夫人はというと、子どもを叱り飛ばし、ヒツジやヤギの乾燥した糞を投げつけて、春だったという、そして「ヒツジを支払え、それができないんだったらうちから出て行け、仏に捧げたヒツジを連れていってどうしたんだい、狼に与えてしまうなんて、何ということをしたんだ、この下僕め」と。こうして子どもは出て行かされたんだろう、目に乾燥した糞が入って涙がこぼれ、目から涙を流してそうやって出て行ったんだ。こうして夜になった。ツェデヴがラクダを集めて戻ってきて、食事をしようとしていたという。その時代の家々は蓋のない五徳のかまどだったんだよ、食事をかまどの上で作っていた。そしてその時代というのは扉などはなく、垂れ下がった覆いだった、その垂れ下がった覆いのフェルトの右側が開いたように思った。そして何だろうと見てみると、その子どもが例の狼を捕まえてきている。「さあ、これ、これがヒツジを持って行った奴です」という。

D：ええっ、3歳の子どもが？

B：そうだ。するとそのツェデヴはというと、これは普通ではない子どもだということ薄々感じていたんだ。そしてツェデヴは特に気性も荒くないどちらかというと温厚な人だった。ツェデヴはこれは普通に人間ではないなあ、その力を見せている、さあ、この子をどうしたものだろうかと思った。その夫人はというと灰をまき散らしてその子を追い払って、お前はうちに2度と顔を見せるな、足を踏み入れるなという。これは化け物だよ、不吉だ、こういう奴だよ、母親もいなくなってしまう、いったい何の役にたつものか。さあ、出て行けと灰を投げつけて、灰を人に投げつけるなんて、最もひどいことをしたんだよ。そうしてその子は泣きながら去って行った。こうやって歩いて行ったところ、その子はというと、春は放牧に行くための内側に毛のついたデールを作ってもらっていたんだ。それを着て、モンゴル靴を履いていただろう。そして風のあたらない暖かい場所に行こうと、ゴビのザク、トーロイの木（ゴビに生えるポプラの一種、胡楊）がびっしり生えている茂みの中に入ってそこで眠ろうとしていて、その茂みの木の根元の所に行くと、人が1人座っていたんだという、バダルチン（托鉢僧）だった。ああ、そのバダルチンはこんにちはとか、何かいいながら、夕方、夜近くなってこんな子どもが近づいてきたので、気味悪く思っていたんだよ。亡霊か何かだろうか、なぜこんな所にいるんだろう、子どもらしい、白いデールを着てモンゴル靴を履いている、まさに子ども、男の子だ。なぜこんな夕暮れに子どもが歩いているんだらうと、恐ろしさと驚きが入り交じっていたんだ。そして挨拶をしたという。すると私はこうやってツェデヴという人のヒツジを放牧している、そしてこうやって今日こんなことがあって、狼がやってきて、ヒツジをとられて、それで狼を捕まえたけれど、聖なるものに捧げたヒツジを狼に食べられたらといって追い出さ

れて、こうして眠る所もなくなって、行く家もなく、両親もなく、こうして暖かい所を求めてやってきたんです、という。「それじゃあ、今から私たちは2人で生きていこう、どこに行くときも2人でいこう、お前は私の子どもになって、2人で一緒に托鉢をして生きていこう」「あなたはどこから来てどこに行くんですか?」「おお、私はこっちの方に、エルデネゾー寺院に行って、托鉢をし、経典を学んで、こうやってまた戻って寺院の近くに行こうと思って歩いているんだよ」「あなたはどこの寺の何と言う人ですか?」「私はトソン・ノヨン・ホタク寺の、ほぼ僧だった人間だよ、それで今はこうやって…」それはというと、そのさっき話した人だよ。ツェレンヴァーンチク。ツェレンヴァーンチクの寺の人ということだったんだ。その時代そのように言われていたんだよ。つまりそのツェレンヴァーンチクの時代にツェレンヴァーンチクの伝説が生まれたと私は推測しているんだよ。

それでこっちに向かっている僧だよ、と話した。さあではこれから2人でいこう、とにかくこうやってここでお互いに体を寄せ合って眠ろう。こうしてそのバダルチンは、「私のこの托鉢の荷の中にわずか1杯だけの米がある、私は雪か水を探してこよう、お前は木から枝を取って、そのあたりの木を折って火をくべていなさい」といって、火打石を渡して、水を取りに行くといって出かけたんだよ。こんな小さい皿のようなものだよ、その当時、そういうかまどがあったんだよ、そしてそれに水を入れるために持って出かけたんだ。そして、水を汲んで戻ってきたところ、その子どもは何もしておらず、木や枝を折って薪を作ることもせず、ただ座っているんだという。「何をしているんだ、この木を折って火をつけなさい」といっただろう、火をおこさないなんて、何をしているんだ、お前は」とすると「いえ、別にただ…」とそういっているだけだった。そこでバダルチンは、自分で木から枝を折ろうとしたんだ。「おおい、待って、待って、あなたは何で困った人だろう、待ってください」とその子は言って、顔色を変えて泣きそうになって、手の指を引っぱり、木を折らせようとしなかったという。さあ、こうして折るのをやめたそう。そうして、落ちている1本の木を見つけて、火打石で火をつけようとしたけれども、まったく火がつかないという。前にこうやって火をつけようとしたら簡単についていたのに、そのときはどうやってもできない、つかないんだよ。それで諦めたんだ。さあ、これはやってはいけないことなんだろうと思い、じゃあどうしようか、どうしたらいいんだろうか、こうやって、空腹のまま寝るしかないのだからと考えていた。するとその子は「もう一度行って、水、雪を、もう少しそれをここに集めて、きれいな場所に。もう一度ここに集めて持ってきてください」といって、その荷の上に持って来た水をそれに置かせて、そしてもう一度取りに行かせたんだ。そして行って戻ってきてみると、なんと、デルス *ders* (イネ科の仲間、学名は *Achenatherum splendens*) を燃やして、ご飯を炊き上げて、こうしているんだという。椀などに盛って用意されていた。どうやってそうしたのかはわ

からない。ベレース（蒸し米，砂糖入り）という私たち僧侶が食べるご飯がこうやって用意されていた。デルスがいっぱい燃やしてあったという。いや，デルスなどまったくないこの場所でどうやってそれを見つけたのか，不思議なことだと驚いたんだというよ。そして食べてみると，非常においしいご飯だったという。そしてそのバダルチンはというと，僧，バダルチンとはいえ，悪い僧ではなかった。だから向こうからこうやって出会ったんだろうよ。こうしてこの子は普通の子どもではない。最初はデルスだと思ったものはお香になっていたという。これはある方の生まれ変わりだろう，いったい誰の生まれ変わりなんだろうと，そのバダルチン（托鉢僧）は信じて理解したんだという。そしてその子どもの言うとおりにしていたという。はい，わが子よ，わが子よ，と。そしてそのご飯を食べてしまって，眠ることになった。ああ，ノミがいるだろうよ，まあ仕方ない，2人でこうやって抱き合って眠ろう，寒くないならばどうだっていいだろう。2人でこうやって眠ろうと言った。そして一度，目が覚めてみると熱気で非常に暑いくらいなんだという。これはどうしたことだろうと思って見てみると，ミンクの毛皮を被っている，ミンクの毛皮はとても暖かく，暑がって2人ともはねのけていたんだ。ああ，私は何てすばらしい生まれ変わりとお出会ったんだろう。さあ，この子を失ってはいけない，ずっとついて行こうと思ったんだ。そして，朝起きてみると，その子どもはデールを被っていて，ミンクの毛皮などは消えてしまっていた。なくなっていたんだという。そして，さあ起きよう，明るくなった，家々の近くに行こうと起き上がったんだという。そして歩いていくと，こんな大きいトルコ石が地面から突き出ているという，球のように丸い，緑のトルコ石。おお，何て大きな宝石を見つけたんだ，何て美しいんだといって，バダルチンは縫い目の裂けた古びたモンゴル靴で蹴り飛ばして，そうやってそれを取ろうとして，荷に入れようとしてね，欲という感情，それはあるものだろうよ。するとその子どもが，「おおい，待って，待ってください。あなたはいつもしてはいけないことをしようとする，何て困った人なんだ，やめなさい」と，こういうんだよ。それでバダルチンは取るのをやめたんだ，その子どもの言葉に従って。どういうことなんだろうと，驚いていたんだという。木の枝は折らせない，2番目にはその石。そうやって歩いてきたところ，ある集落の端に入ったんだという。その集落の端にある家に立ち寄ろう，と。そして少しの塩や何か托鉢をしてそこからもらうことにしよう，荷の中に入れようとバダルチンはそういったんだ。こうして，ある家に立ち寄った。すると，1人の女性が鶏を焼いていたんだという。するとその子どもは顔色を変えた，恐ろしい顔になったという。「行こう，行こう」という。バダルチンはゴンチクという人だった，そうゴンチクという名前だったんだよ，そのバダルチンは。ゴンチクさん，行こう，行こうと。こうやってね。さあ，こうしてその家を出たんだよ，2人は。その子どものいうことに従って出て行ったんだ。すると，出ようとしていると外から黒い犬が走り込んで

て、その鶏肉を食べてしまったんだという。するとその女性は怒って、呪いながらハサミをつかんで犬を追いかけたんだという、それを後ろから見ていると、後ろ脚を強打して折ってしまったんだという。脚を折られてその犬はキャンキャン鳴きながら、すみかの方へといなくなってしまったという。そして、その子どもはというと、大泣きして、とても奇妙な様子になった。とにかくすぐに行こう、こんな所から、私たちはすぐに行きましょうと、こうして出発したんだ。さあ、こうやって3番目はどういう意味があったんだろうか。

そして、その2人は谷を下って、こうやって平地に出る丘の斜面の所にやってきた。「さあ、大きな平地に出たら私たちは2人とも凍え死んでしまうよ。このあたりでとにかく夜を過ごそう」とね。こうして、崖になった所を見つけて、枯れ草がボール状になったものが風に吹きとばされて集められた、そういう崖の下で眠ろうとしていたんだ。だが例のミンクの毛皮の外套を被っていれば凍えることはない、さあ眠ろうと話していた。こうして気がつく朝になっていたという。そしてさあ、出発しようとしたところ、その丘の上にたくさんのテントや馬車が集まっているという。ああ、ここにはたくさんの人びとがいたんだなあ。夜にやってきて泊まったんだろう。昨日の夜、私たち2人が来たときには見かけなかった、気づかなかったんだろうか。すると、その子は「さあ、これは大変なことになる。彼らに知られてはいけない。さあ私を丘の上に乗せてください」という。こうして峡谷を登って、山を越えて、上の方を歩き、峠を越えて、「急いでください、逃げましょう、彼らに知られてはならない。もしも知られて捕まったならば、あなたは私と一緒にいたということで大変なことになる」と、その子はこういうんだよ。そして、その子どもを枯れ草で隠して、そして上へ上へと必死になって山を越え、峠の上に出たとき、騒ぐ声が出て、たくさんのウマに乗った人びとがやってきて、そのゴンチクを捕まえて、ウマに乗せ、2本の足をくりつけて、そして丘の上にいる人びとの所に連れて行ったんだという。こうして、非常に大きな天幕の中に連れて行かれると、その中には高位の太った僧が座っている。そのゴンチクを連れてきた僧たちは一番下の方に座っていた。その僧は「さあ、例のバダルチンを捕らえて連れてきました、もう少しのところで逃げられるところでした。丘の上、山の上から見つけて来ました」と言ったんだという。その僧は「さあ、そこに座りなさい」と座らせたという。他の人びとは天幕から出て行った。そして、どこの何という者なのか、どこに行って、何を見たのかと尋ねられた。南側に行ったことを話し、その子どもと一緒にだったことは話してはならないといわれたので、それは話さなかったんだという。すると、1ヶ月歩く場所をあなたはわがホトクトと一緒にしたね、3歳の、こういうデール、衣服をまとった、顔はこういう、と、まさにその子のことを述べたんだという。1ヶ月歩く場所をあなたは一緒に連れていました、その子どもをどうしたのか。どこに捨ててきたんだ、どこに迷わせたんだ、どうしたんだ、と。

人殺しをしたとして、ひどい目にあわせようとしたんだ。だが、バダルチンはその子が話してはならないと言ったから、話さずにいた。「私は知りません、私はそれを見たこともない、私と一緒にいったなどと、そんなことは知りません。そういうホトクト、生まれ変わり、そういう方が、私のような運に見放された人間にどうやって見えるんでしょう」と答えた。すると、「嘘をつくな、お前、お前は振り返って話し、手や指を動かしていただろう、嘘をつくんじゃない。お前はその子をどこで殺して捨ててきたんだ、どうした」といって、最後には人殺しの罪で処刑するといわれたんだ。解放しようとはしない。

こうして夜になった。ゴンチクは用を足そうとしたという。そしてこういった「さあ、私は一度外に出て用を足したいんです。こんな徒歩で何もないバダルチンがこんなたくさんのウマに乗った人びとから逃げるなどとはできないでしょう。私は服の中に用を足すようなことはしたくない、外に出て用を足してもどってきます」と。すると出る、という。こうして出たところ、例の子どもが外にやってくる。そして、「さあ、あなたは用を足して、中に戻りなさい。そして戻るときに、例の子どもがやってきたと言ってください。師の子どもがやって来たと言ってください、私は後から入ります」という。こうして少し離れた所で用を足し、戻って入ってきて、さあ、先生と言った。ああん、と言ったとき、その子どもがやってきた、入って来たと言ったゴンチクが言った。彼の後ろから子どもが入って来た、ほぼ同時に入って来たという。姿が見えたり見えなかったりそんなふうに姿を現したんだという。すると、その高位の僧がそれを見て「ああ、師匠」と飛び上がり、その子の前に言って、頭を地面にこすりつけて転がると失神してしまった。するとそのゴンチクは「さあ、みなさん、来てください、外に誰かいるならば、入ってきてください、先生が気を失っています。」すると、人びとが入って来て、そうして水などを口に含めて体をさすったりしたところ、気がついたんだらう、気がついたんだ。その子どもはその寺の本当のホトクトで、ゴビに転生したんだ。そこにいるということがわかって、探しだしてそれを認定しようとしていた人びとだったんだよ。そして彼らは経典の力で呼び起こそうとしたんだ、狼が走って来てその聖なるヒツジをとった理由は、その力が遣わしたものだらうと私は考えているんだよ、そうだらう。それを遣わして、そこから追い出させる口実を作ったんだよ。そして、こちらにやって来て、その寺の僧たちと出会わせたんだよ。なんてすばらしい巡り合わせだらうか。こうやって見つけて連れていき、認定したんだよ。そして認定するときにはそのゴンチクは右腕として、高位の僧になった、このホトクト・ツェレンヴァーンチクのね。そしてどうしたかという、ゴンチクはその3回の出来事について尋ねたいと思っていたんだよ。そして尋ねると、さあ、お前と私の2人が最初に出会った所で、木で火を起こそうとしたのにそれをやめさせた理由。それは地に住む主の目をつぶそうとしていたということなんだよ。第1番目はそうい

うことだった。そして第2番目にある石にであって、それを取ろうとしたのをやめさせたのはなぜか。ああ、それは地下世界の堂塔の屋根を蹴っ飛ばそうとしていたからだよ。それで私はやめさせたんだよ。さあ3番目は、ある家にはいつて鶏の肉を焼いていた。犬が入って来てこうしていたのはどういう理由だったのか。その鶏というのはその家の子どもだったんだよ。以前子どもが妖術によっていなくなってしまった、鶏にされていた、その子どもを捕まえて食べようと、焼いて食べようとして殺して焼いていたんだ。それでその犬はというとその(焼いていた)女性の母親だったんだよ。そして母が実の子どもの肉を食べようとしていると知って、取って逃げようとしているときに、母親の足を強打して折ってしまったんだよ。そんな家に私たち2人はいいわけがないだろう。こういうことだったんだ。

こうしてみると、ラヴジャーはこの5世以後、常に自ら明らかにさせて、こうやって明らかになっていたんだよ。そして、この6世は、このツェレンヴァーンチクというのはこのようにして認定されたんだ。そして7世はというと、この前の方がこのように認定されたことから、わが故郷に生まれ、ウルシュー・バクシ、ソノムツェレンという名前で転生したんだ。そういうことなんだと私は考えているんだよ。そしてそれを研究しようとしたが、今年はできなかった。来年、ハマル寺に行く。ハマル寺に行ってね、テムチク寺に行く。このハマル寺、テムチク寺に行ったら、必ずこれらの証拠が見つかる、私はそう思っているんだ。

D: ああ、5世のノヨン・ホトクト?

B: 5世はボグド、清朝が消し去ってしまったんだ。5世の書かれた書を私はもっているよ。なぜこのように移動することになったのかというと、わがこのエルデネゾーに原因があるんだよ、それはね、移動する理由は。これはというとこのオメイン谷のボーヴの石、ああその上にオムの字〔チベット仏教でもっともよく唱えられている真言のオム・マニ・ペメ・フムの最初の言葉〕、その黒い頭部にこれらを作らせた人なんだよ、このラヴジャーは、5世だったときにね。そしてトゥヴフンの寺に行った。トゥヴフンに行っって13日、14日だろうか、半月くらいだろうか、ご病気になってそこで過ごしているときに、その女性器の形をした物、そのトゥヴフンの峠の上にある仏、ダル・エへの木、その最初のホトクトが作られていたすべての物を見て行く間に、「ウレムジーン・チャナル」の歌がひらめいたんだという。ロヴサンダンザンという僧、4人の女性と一緒に6人でやってきたんだ、うちのこのエルデネゾー寺院に。やってきて、そこから108の姿のツァムを踊らせて、最初のダンシク・ナーダムを行わせて、側対歩のウマの競馬をさせていたんだ、今そこに記念石がある、競馬を行った場所にね。ここで、モンゴルでダンシク・ナーダムというものは最初ダンザンラヴジャーが始めさせ、それ以後ダンシク・ナーダム、今のハラホリンで4年に1度、競馬が行われているんだよ。これはこういう起源があるものだよ。ダンザンラヴジャーはこうして、

「ウレムジーン・チャナル」という歌は、そこから最初できたものなんだよ。そしてその4人の女性はというと、みんな妻ではなく、女性の僧、修道女たちだったんだ。〔ダンザンラヴジャーは〕その「ウレムジーン・チャナル」をひらめき、僧の葡萄酒、アイラグの入った大きな容器を〔不思議な力で〕置かせる、そういう人だったんだというよ。酒を飲む、だがそれで酔っぱらうということはない。なぜかという、それを聖水に変える、そういう力をもったそういうホトクトだったんだよ。そうして8代ボグドハーンというと、聖水を変化させる、アルヒを変化させて聖水にする、そういう力はなかったんだ。そういう点で負けていたんだ、そしてそれがもとになって、お互いに険悪になり、憎み合う仲となったことから、5世のときに清朝皇帝と一緒にあって、罪を被せたんだ。

そして、ここからこうやってトゥヅフに行って、トゥヅフからホジルトに行ったんだよ。ホジルトに行って、ホジルトからバルジドマーという女性を、本当の心の連れ合いとして得て、このホジルトからバルジドマーという女性を連れてきたんだよ。後になって、8世ボグドハーンの時代に、年寄りのくせに若い女を連れ込んでいるのだ、酔っぱらいだの、狂人だのと、いろいろなあだながつけられているとき、そのバルジドマーをダ・フレー（首都）に行かせようとしたところ、〔ボグドハーンは〕入らせない、トーラ川の岸辺から故郷へと戻らせたんだというよ。そのバルジドマーに捧げる歌が最近出ただろう。最近出たんだよ。つまりこれは全部本当のことなんだよ。そしてその先、ウブルハンガイから先へ行き、タラクトへと入った。フレムトにはいり、フレムトからドンドゴビに行き、こうしてドンドゴビのオンギ寺に行って、そこから故郷へ戻ろうとしているときに、本当に不浄になってしまったんだよ。そのバルジドマーを連れてきた、このことからおこったのだろうか、私の推測だよ、誰にもわからないんだから。なぜそんな力のある人が突然不浄になるのか、とても不思議なことだろう。そしてアルヒを飲むと酔っぱらうようになり、随行していた僧ロヴサンダンザンを刺してしまったんだよ。ロヴサンダンザンはなくなってしまった。このことについては2人の研究者が2通りのことを書いている。ダムディンスレン氏の書いたのは、わがこのエルデネゾーが6年間、干害になり、ネズミに食い荒らされ、7世の座主ダグヴァダルジャーの時代には経典の上をネズミが走り回っていたというんだ。その南側のシャル・ホンホル（黄色い窪地という意味の地名）では女性の病気、はしかが発生して、多くの女性たちが出産できなくなった、子どもが早世してしまうという恐ろしい災難が起こった。そこで8世ボグドハーンがやってきて、これを、ボーヴ石を作り、そこにオムの字を置き、8世ボグドハーンがこれをおこなわせたんだという。だが、そのネズミはいなくならず、災難も取まらない、こうしてどうしようもなくなったときに、ダンザンラヴジャーを招いたんだ。ダンザンラヴジャーはここにやってきて108のツァムを踊らせ、ナーダムを行わせ、雨を降らせて、ああ、そのウルシュー・

バクシが捕まったときの水害のようになった。そしてすべてのネズミが水に流されて、いなくなってしまった。こうしていい時代がまた戻って来たんだよ。こうやって戻る時、そこでそのように不浄になって酔っぱらい、横にいた僧を殺したとアルタンゲレルは書いているんだ。そのラヴジャーの研究者。ああ、ダムディンスレン氏はというと、その災害について、褐色のウマ、茶色いウマに乗った人がエルデネゾーの横を通っていた。おお、このエルデネゾーの中には魔物がいる、これを捕まえて消すようにと横を歩いていた僧ロヴサンタンザンに命令し、ロヴサンタンザンはそれを捕まえてオスウシにつき殺させたという。そのオスウシにつき殺させるとはどんなことだったんだろうねえ。そのことから刀で突き殺したと、それを8世ボグドハーンは、ラヴジャーは退廃した、乱れた、経典を忘れたとって、このように人を殺したと、清朝皇帝に進言したところ、その時代というのは首を切って処刑することなどはなく、砂地で手足を引っばって縛り付け、ゴビで手足を延ばさせて縛り付けて、そこに鷺などがやってきて生きたまま内蔵をえぐり、そうやって渴き死なせたのだというよ。

D：ホトクトの寺院というのは今のどの県、どの郡にあるのですか？

B：うちのかい？ うちのホトクトの寺かい？ ボグド郡だ。

D：ウブルハンガイの？

B：そう、ウブルハンガイのボグド郡。おととしの夏、テムチク寺から大勢の僧たちがやってきたんだ、テムチク寺というのはバヤンホンゴルの。ウムヌゴビのハンホンゴルだったか、ハンボグドだったか、そこにあるんだよ。そこから12人の僧が来たというよ。やってきてそこで儀式をおこない、灯明などを灯した。ハタグを置いてね、ウルシュー・バクシのゲルの跡で行ったんだよ。その本堂でそうしたんだよ。こうやってみると、やはりこのラヴジャーの後の生まれ変わりなんだとこう私は考えているんだよ。

D：ノヨン・ホトクトであって、その後ツェレンヴァーンチクになって、ウルシュー・バクシ？

B：するとこの6世はというとテムチク寺で認定されたんだろう。7世はというとうちのこの、7、8世はここで認定されたのだろうと私はこのように推測しているんだ、私のような推測好きはね。だからこのテムチク寺に行ってみたいものだよ。ああ、ハマル寺にも行きたいというのは、そのことを確証したいからだよ、ハマル寺にはバートルなど、アルタンゲレルなど、私の知り合いの人びとがいるからね、そのフレルバートルさんに、彼らと会って、この歴史家と話して、こうやって研究してみたら、いろいろなことが出てくるだろう。私が行くことだけが残されているよ。だがね、行くとするといつも自費になるんだよ、年金の9万2400トゥグルグをもらっているにすぎず、できもしないのに本などを創作していたりしているからね、趣味だよ、私の趣味だからね、まあ仕方ない。人の脳の中にあるものは自ら取り出さないと、死んだら終わっ

てしまうものだから。あるものをこうやって本にして残すことは、後の世代にもとても必要だからね、こういうことなんだ。私はこう考えているんだよ。そうだろう。そうして、こうやっていろいろなことをしている者なんだよ。さあ、こんなところだろうか。

D：ありがとうございました。

Ⅲ ボルジゴンさん

父の名はデムベレル。1941年、ハラホリン生まれ。現在は1,000頭以上の家畜を所有する、裕福な遊牧民。2009年12月のインタビュー時点で68歳。社会主義時代、小麦粉工場の溶接工や国营農場で家畜放牧を担当していた。インタビューの内容は、小学校、軍隊を経て溶接工となり、民主化後に成功している人生全般にわたる。インタビュー時間は約3時間。

B：ボルジゴン

D：ルハグワテムチグ

1 幼少期

D：では、あなたのお名前は何とおっしゃるんですか？ どの出身ですか？

B：私はもともとこの地域の者だよ。もともとここにはシャンハというソム（郡）があったんだ。その地域の者だ。このあたり、この家の近く、10、20キロメートルの範囲の中で生まれ育った者だよ。私はボルジゴンという。

D：何年生まれですか？

B：1941年。

D：それではちょうど戦争が終わったころ。

B：戦争が始まったころだよ。第2次世界大戦が始まったころに生まれたといえるね。

D：そうですね。あなたの生まれた場所はこの辺りなんですか？

B：そうだよ。ずっとハラホリンの周囲に、こうやってうちのソムというのは本当にこのあたり、ここなんだよ。

D：そして、小さいころ過ごされたんですね。ご兄弟はたくさんですか？

B：兄弟はというと、本当の兄弟の中で1人は小さいころに亡くなったんだというよ。いや、2、3人なのかもしれない。とにかく、3人、4人兄弟だったんだけれども、1人の弟（もしくは妹）が1959年に1年生が終わったときに亡くなってしまった。そのあとは3人兄弟になった。うちの2人の妹たちはウランバートルにいるよ、そして私はここに暮らしている。

D：あなたのご両親はどの地方の出身ですか？

B：この土地の者だよ、もともとこの者だ。

D：それでは、あなたは小学校というこのあたりの学校に通ったんですか？

B：そうだよ、この小学校に通った。1949年に入学して、そして53年に小学校を卒業して、そして私は祖父母のところで育ったんだよ。その後、祖父母はかなり高齢になってしまった。70歳を越えただろうか、70歳にはならなかっただろうか、今の私くら

いの年齢にはなっていたらうよ。そういう年齢の人たちだったんだ。2人は私を自分たちの元から行かせたくなく、私はというところに行こうとしていた。そして祖母がちょうどその学校が始まる時に「モゴイトの温泉」に、温泉の水を飲む治療に行ったんだ、14日間行ってしまったんだ、家畜を連れてラクダでね。そのあいだに走って行って、学校に登録をしたんだよ。そして、戻ってきて、8月25日に登録して、学校に通うことしていたんだけど、祖母が帰ってこない。「お祖母さんが帰ってこないならば、おまえは行ってはならない」と禁止されてしまった。そうこうしているうちに9月の何日かになってしまった。こうやって私は学校をやめたんだよ、行き遅れたことから学校を辞めることになったんだ。

D：小学校というのは何年生まででしたか？ 当時は？

B：4年生までだよ。4年生まで学んで、4年生卒という学歴になるんだ。

D：そして、ソム中心地にやってきて、その学校に入るんですか？

B：そうだよ。ここの南シャンハの中心地、このあたりの定住地のシャンハ・ソムというのがね、南のシャンハというところに学校があったんだよ、うちのソムには。その寺院というのはソムの中心地にあった、かなり多くの家々もあったよ。それから私が学校にいたときは、アルテリ（手工業生産組合）という1つの組織があった。一般に主な公的機関というとそのアルテリというものだったよ。そして、そのアルテリは、以前シャンハ寺院にいた僧侶たちに仕事を与えたんだ。そこではいろいろな鉄を使った製品を作る、木工品を作り、靴を作る。モンゴル靴、鞍褥、そしてだいたい日用品なんかを多く作っていたんだよ、アルテリというのはね。一般に国内の生産、今現在わが国で話されているところの、中小の生産工場という、それにあたるよ。物入れの大箱や容器、ゲルの木製部品、フェルトも作る。そういう組織だったんだよ。その後、それを、ああしたんだ、ホジルト・ソムに移転させ、向こう側の「岩のアルテリ」というのと、それとうちのシャンハ・アルテリを統合して拡大させて、そして移転して行ってしまった。でも、そのあともこのソムはまだそのままあったんだよ。そして、56年にこのハラホリン国営農場が設立されて、そして2年たったころだっただろうか。シャンハ・ソムを閉鎖して、ハラホリン国営農場に統合したんだ。こうしてハラホリン・ソムになったんだよ。そういうことだった。そのころ、私たちはまだ小さかった。私は国営農場が設立される時には15歳だった。両親2人の庇護の下にあったよ。両親はもともと田舎で家畜を飼っていた遊牧民だったから、ネグデルの家畜を放牧して、その後は国営農場の家畜を放牧していたんだよ。私はその両親と一緒に暮らしていて、かなり大きくなって兵役に就くことになって、軍隊に行ったんだよ。ウランバートルで第7建設大隊というのがあった、後になって肉・小麦コンビナートの拡張部を建設したんだ。小麦コンビナートのこちら側の一部分があるだろう、その24番の、それを私たちが作ったんだよ。そして肉コンビナートの拡張もまた同時に行っていた、そ

こでも働いたよ。そして、除隊になる前、自動車修理工場で3ヶ月働いて、そして7月に除隊になった。除隊して戻ってきて、ここの、ハラホリンの小麦工場があるだろう、今はもう残骸だけになっている。そこにやってきて働いたんだ。故郷に幸運にも求人があって、その時代というのは選択肢はないからね。軍隊を出たとき、ちょうどその時期だったんだよ。除隊になる若者たちはみんな建築現場で働いていた。とてもたくさんの若者が兵役に就いていたんだ。そして、その建築現場にいた若者たちはそのまま建築業に残る、そういう傾向だったようだ。そして、あちらこちらの建築分野へと就職していたんだ。工場や生産業へと就職していた。そうしていると、主にハラホリン出身の若者たちを募集していると、ここからも人材が送られていったという、私は知らないけどね。ハラホリンというだけで大喜びで故郷へと向かうことになったんだよ。そしてここに戻ってきて、ハラホリンの小麦工場で20何年、22、23年働いたんだよ。こうしてそれで、ああ、そうだ、後になって88年から始まって、工場の補助産業の家畜を担当することになって。まあ工場で働くようなもんだよ、そうだろう。自分もまた両親がね、母は高齢になって、父は亡くなってしまった。こうして何頭かの家畜を見る者もない。こうして工場で働いているのもよくないと思って、母親の傍にしようかとね、家畜を放牧しながらね。こうして田舎に出て、そしてそれ以後、家畜を放牧して、20年くらいになるよ。88年以後。まあねえ、家畜は50頭ほどの小型家畜がいたよ、20頭くらいのウシ、20頭くらいのウマがあったよ、両親の残した家畜。それらを合わせて放牧をしていて、その後補助産業の家畜がなくなり、今は個人の家畜だけが残っているよ。今も飼っているよ、88年からね。去年だか、おとしだか、1,000頭家畜を所有する遊牧民という称号を持ってね。

D：おお、1,000頭。

B：こうして生きているよ。今もね、力や何やは少し衰えてきて、行き渡らなくなっているから、子供たちを頼って生きる以外に私たち2人に何もできはしないからね。子どもたちがソムの中心地にいるのに、私たち2人が家畜のいる田舎に残っていても仕方ないだろう。私たち2人をソム中心地で暮らすようにいうんだよ。そういうわけで、ここに暮らしているんだよ。

D：小さいころ、小学校で学んでいるときは寮に暮らしていたんですか？

B：寮で暮らしていた。知人や親戚がいるならば、その家で暮らすよ。私たちは寮でね。1年、最初の年はおじいさんがいたんだ、私の祖父の弟。そのおじいさんのところに4、5人が下宿していた。そして次の年には、少しいろいろわかってくるようになったから、学校に暮らしてもいいと、できると思ったんだろう、こうして寮に入ったんだよ。3年間寮で暮らしたよ、まあ人の下になることもなく、それで成績も優を取ったりしてね、そういう生徒だったよ。もしもその後いろんな学校に行ったら、何かを得たと思うよ。まあ仕方ないよ、こうやって学校を卒業して…。

D：そのころ、子どもたちは、この辺りの子どもたちを集めて、学校に通わせていたんでしょうか、どこからやって来ていたんですか、子どもたちは？

B：シャンハにかい？

D：ええ。

B：おお、当然そうしていたよ。そのソムの就学年齢のすべての子どもをね。そして、一部はまた学校から逃げるんだよ。

D：映画に描かれているように？

B：映画に出ているように。それは本当の生活なんだよ。そして、逃げ出してしまう、先生は後から追いかける。例のウルトゥ（ウマの乗り継ぎ駅）のウマに乗って行くんだよ。そして回って行って追いかけて、追いかけて、見つけてくるんだ。一部は逃げおおせる。私はそうやって逃げ出したりはしなかったよ。許可を得て休んで家に戻って、そのまま2、3日過ぎてしまうことはあったけれどね。

D：何歳の子どもたちを最初、学校に入学させていたんですか、そのころは？

B：8歳で入学させる。そして12歳で4年生を卒業する。うちのこのあたりでは、中学がないんだよ、ホジルトにはある。大体私たちがそこに通っているときは、7年生までだったよ。そして、そのあとまもなく10年生になったと思う。そこへうちのソムの者たちは行くんだよ、故郷や家から遠くに行くことになる。人びとは、草原で〔集落から〕少し遠く離れて暮らしているから、いったいどこに学校があるものかと、子どもを学校に通わせるのを好まなかった。田舎に連れて出て、子どもに仕事を手伝わせるという、そういう考えがより強かったのかもしれないよ。だから、一般に、シャンハからは、私の世代から、私のクラスからは、多くの子どもたちが次の学校には行かなかった、2、3人の子どもが行ったんだよ。そして他はというとみんな草原に出ってしまったよ、男女関係なくね。

D：その時代、先生たちはどこから、都会からやってきた人だったんですか？ それとも地方出身の人だったんですか？ 先生たちは。

B：ああ、だいたい私よりも少し上の世代の先生は、地方出身の人たちだったといわれているよ。私が通っているころはというと、だいたいはウランバートルからやってきた人たちただだろう。このホジルトからもやってきて、先生になっていたようだよ。ホジルトは中学があったから、7年生を卒業した生徒で優秀な者を先生にしていたんだよ。そういう子どもたちなどがやってきていた。私が4年生を卒業するときには、ズーンバヤン・オラーン出身の1人の若者が教鞭をとっていた。彼は10年生を卒業して、教師になろうとしていたけれども、遅れてしまったとか、何か支障があったらしく、ここにやって来たんだと、そういう背の高い若者が来て、先生になっていたんだ。その人の前には1人のオプス出身の背の低い色の白い先生がいた。師範学校を卒業したらしかったよ、ウランバートルからやってきていた。そして、その人はまもなく半

年だっただろうか、1年にならないうちだったよ。秋にやって来て10月の末、11月になるかならないか。アイマグの中心地に移動してしまったんだ。人員が減らされたとか何とかかだったんだらうか、アイマグから私たちに手紙を書いてくれてね、私たちはその先生がとても好きだったんだよ。最初はとても厳しくて、怖い感じだった、私たちは4年生だったんだよ、とても厳格なようだったと思い出されるよ、でも慣れてしまうと本当にいい人だったんだ。それで、行かせないってね、私たち子どもたちは周りに群がってつきまとして行かせないってね、そうしていたんだ。その人は人の心をつかむ、人を惹きつけるそういう人だったように思うんだよ。でも、そうして行ってしまったんだよ。今ではどこに行ってしまったのかわからないよ。

D：若い人だったんですか？

B：若いよ。卒業したてで、21、22歳だろうか、そう20歳だっただろうか。15、16歳で8年生を卒業して、大学に行っただらうと思えばね、そうだらう。そのくらいだらうと今では想像しているんだ。そういう人だった、こうして行ってしまった。その後、ホジルトからまた違う人が来て先生をしていた。ホジルトからだいたいやってくるものだったよ。ホジルトは10年制の学校があったからね。一部はまた師範学校に進んでいただらう。うちのソムにはそういう者はいない、やっと3年に1人くらい7年生を卒業してくる、それはとても珍しい、そういうものだったよ。

D：だいたい何人くらいの先生がいたんですか、そのころ？

B：シャンハの小学校には4、5人の先生だよ。4学年に1人ずつの先生、そして時には1つの学年に2クラスなどがあった、そして校長先生が1人、5、6人それ以上はいないよ。

D：4クラス？

B：4クラスそして…。

D：1つのクラスにだいたい何人の生徒がいますか？

B：まあねえ30人くらいの子どもたち。

D：おお、結構いますね。

B：かなり多いよ。そして学年が進んでいくうちにやめたりして、4年生を卒業するころには20人くらいの子どもが卒業する、そういうものだっただらう。

D：男女は？

B：男女はだいたい人数において同じくらいだったよ、特にどっちが多い少ないと違いがわかるようなものではなかったね。

D：男女が同じクラスで一緒に勉強しますか、それとも女の子たちだけのクラスがあったんですか？

B：いいや違うよ。そんな余裕はなかったよ。私が学校で勉強しているときは、うちのクラスは朝早く授業が始まっていたよ、早い授業。そして後になって、また小さな校

舎やなんかが作られたんだ。そしてみんな一緒に次の年からは建物に入ったんだよ。

D：寮では男の子、女の子一緒に暮らすんですか？

B：違う、違う。寮は男女別々だよ。それぞれ1つずつのゲルに暮らすんだ。

D：ゲルに？

B：そうだよ、ゲルに暮らすんだ。そして、ゲルには火をつけたり管理したりする人がいる。そして、その管理人が2、3つのゲルの竈に火をつける、深夜には暖めるために薪をくべて、そしてアイマゲの…それはというと暖炉がある。その暖炉に薪を入れて、そして火をおこしているんだよ。

D：1つのゲルに何人の子どもたちがいますか？

B：10人以上、10人を越えるくらいの子どもたちがいたかなあ、当時は。ゲルの中で円になってベッドを置いていたんだよ。私が寮に入るとき、そのときには建物になっていてね、建物になってよりよく学ぶことができたと思うよ。建物の寮に私たちを住まわせていたんだよ。私が1年生に入るときは寮はゲルだった、そして、寮のゲルの中のベッドに座って勉強をする、ベッドの上に座って丸まって座って勉強しているんだ。

D：へええ。

B：ベッドの上では反対を向いて書いていて、振り返って黒板の方を向いてね、そういうものだったよ。1年生のときは。

D：学校もゲルで。

B：そう。クラスもゲル。1年生では、1つのゲルに入りきれなかったよ。そして、2年生に入るときにみんな一緒に建物の校舎に入ったんだよ。寮までも建物になった。そういうことになったんだよ。今となっては建物をどうやって作ったのかということとはよくわからないよ。とにかく建物が作られて、完成していたんだよ。

D：そのときにはモンゴル文字（ウイグル式縦文字）で授業をしていたんですか？ キリル文字ですか？

B：いいや、49年というとキリルになってしまっていた。キリルで授業をするよ。4年生で少しモンゴル文字を教えていたようだよ。そして、私が4年生を卒業するときには、それを教えるのをやめたんだよ。その年は教えなかったんだらう。削られたのかもしれないね。

D：モンゴル文字を？

B：そう。

D：ああ、それでは、そのときには完全にキリルで教えるようになっていたんですね。

B：そう、キリルで教えることが完全に始まっていたんだ。60何年にはとにかくキリルで教えるようになったんだらう、よくわからないよ。その前の時代にはモンゴル文字で教えていたんだらう。7、8歳年上の人たちはモンゴル文字を知っているんだよ。ということは1、2年前からキリルを教えたんだらう。

D：当時、子どもたちを学校にやるのが、かなり嫌だったようですね、親たちは？

B：うちのこの辺りはかなり嫌がっていたね。その他の場所がどうだったかは知らないよ。

D：知り合いの兄も話していました、嫌がっていたとね。

B：それは家の仕事を手伝わせようとしてね、一番大きな理由はというと。例のネグデルなんかはまだ作られていなくて、そして個人の家畜を持っている。子どもたちをその働き手にしようといっていたんだろう、もっとも大きな理由はそれだよ。

D：その当時は、どんな授業があったんですか？

B：4年生まではというと、まあねえ。歴史、地理がある。算数、モンゴル語、文学そういう感じの授業を受けていたよ。地理の授業の中で、世界についての授業というのがあったことを覚えているよ。それ以外には何があったかな。他にもいくつかの授業があったんだ。体育もあった。自転車に乗るという授業もあったね。

D：モンゴル語、文学というと、だいたいどんな授業だったんでしょうか？

B：モンゴル語、文学はだいたいあれだよ、物語・伝説とか、そしてその当時というのは今のようにそれほどモンゴル国の作家の作品というのはあまりなかったんだよ。だからそういう物語や伝説、なぞなぞやなんか、そういうようなものを習っていたと思うよ。ああ、今思い出すと、ときどき、教科書にタウヴァーという作家の何だっけ、バーストという作家の作品とか、そういうとても短い子ども用の文章など、そういうものがあったように思うよ。作者の名前や何かが文章の上に書いてあるんだ。こういう人が書いたとかは私にもわかったよ。わかる子どもたちは理解していた。でも、子どもたち全員が、すべてを理解していたかどうかはわからないね。とにかく、先生が質問するときに、真っ先に答えるのはそれで、そういうものが書いてあったね。

D：その時代、例のスカーフなんかをつけていたんですか？

B：ああ、もちろんつけていたよ。スカーフをつける。青いダーリムバ（綿）のデールを着るんだよ、男の子は。女の子は、そう緑のデールを着る。いわゆる制服だよ。そしてダーリムバで作ったかばんを背負って、本をそこに詰め込んでもっていくんだよ。

D：男の子はどんな色のデールを着ますか？

B：青のダーリムバ。女の子は緑。

D：ああ、別なんですね。デールや何かは両親が用意してくれるんですか？

B：そう。そのあそこからは出してくれるものはないよ、シャンハ（郡）から出してくれるものはない。両親が作ってくれるんだ。

D：食事はどうしていたんですか、両親が用意してくれるんですか、それとも国から？

B：ああ、食事はくれる。両親から食料をもらう。肉や何かを持ってきたんだ。一般的に肉をもらうよ。寮の子どもたちの食事とって。小麦粉や麦はどうしていたんだろうか、よくわからない。とにかく肉はもらっていた。それ以外に国からどんな方

策が取られていたのかはわからないね。お金に関してどういうやり方をしていたのかもよくわからない。お金や小麦粉、米なんかをくれていたのだろうか、それともただ小麦粉、米を支給していたのか。それらは今ではわからないよ。

D：1日に3回、食事をくれますか、どうでしたか？

B：くれるよ。朝はお茶、昼は1品食事が出る。夜も何かしらの食事を食べるよ。

D：そしてその食事というのは、どんなものだったんでしょうか、その時代？ 朝食、昼食というと。

B：朝食にはマントウが1つ付いたか何かだったよ。だいたいマントウや何かだね。パンなどというものはなかっただろう。そして米とか。肉の食事としてはあれだよ、ゆでた肉がよく出たよ。キャベツやジャガイモの入った食事もある。キャベツは食べられなかった。ジャガイモは食べるよ。キャベツを残していたよ、子どもたちは、そうやっていたんだよ。1人の少し年配の料理人が作っていたんだけど、キャベツなんかをどうやっていたのか…料理できなかったんだろうと思うよ。だから、野菜を分厚く粗く切っていて、子どもたちは固くて食べることができなかった。それを残して…。

D：スープの食事はありますか、それとも炒めた料理ですか？

B：スープのあるものだよ。だいたい炒め物なんかは食べないものだろう。寮にかなり多くの子どもたちがいただろう、40、50人くらいの子もたちがいた。炒め物や何かが出ることは…時にはあっただろうけれど。そのシャンハの、今ある3つの寺院の建物のこちら側に1つ2つ小さいのがあった。その1つが子どもたちの、子どもたちの食事を作る台所になる場所だったんだよ。その南側の平らなところが校舎などだった。そして、そこから行列して戻ってきては食事をして、そしてまた行列して戻っていく。そういう感じだったよ。

D：あなたは学校に入る前に、キャベツやジャガイモを食べたことがありましたか？

B：まったく食べたことがなかったよ。ジャガイモというのがあるらしいというくらいだよ。うちでは伯父と祖母と私の4人が1つのゲルで暮らしていた。その伯父さんが何個かのジャガイモを持ってきていたように思うよ。だけど、どうやって食事を作るのかわからない。食事に入ると悪くないものだと人びとがいうんだってね。そこのアルテリではジャガイモを栽培していたんだ。そのアルテリのジャガイモを持ってきていたんだろう。アルテリはまた少し野菜を栽培していた。1ヘクタールに少し足りないくらいだっただろう。うちのこの柵の大きさくらいの、四角形の場所で野菜を作って、キャベツやジャガイモなんかを栽培していた。そこには中国人が…いたのかもしれないね、今思うと。中国人、モンゴル人、またカザフや何かがいたんだ。昔ここに住み着いた昔からの中国人が10人くらいいたんだろう。土地を耕すことや何かとって、学校の子もたちを集めるんだよ。今思うと、生徒たちに施しをしようと考えた人だったんだろう。ナムスライさんといって、1人の老人が1人1人の子ど

もに1つずつのイエベン（月餅），かなり大きいんだよ，このくらいのイエベンをくれる。こうやって並んでいて，こうやって分けてくれる，そうやっていたよ。少し仕事をしたその駄賃としてね，その人にとっては徳を積むということだったんだろうね，そうだろう。このイエベンをもらうのがうれしくてね，またそこに行って働くんだよ。

D：ナムスライさんという人は中国人ですか？ モンゴル人ですか？

B：彼はずっとアルテリで働いていた労働者だよ。そのアルテリから出たことがない。そのイエベンは…。

D：あなた方はどんな仕事をしていたんですか？

B：ああ，それはまあねえ。一番大変な仕事にはみんな行かないんだよ，春に畑を耕作する，シャベルで掘り返して根っこや何かを取り除いて，捨てていたんだよ，石を拾っていたんだ。そのくらいのことだよ，私たちの仕事というのは。

D：寮の食事で子どもたちは満腹になりましたか，少し足りないくらいだったんでしょうか。あなたはどうでしたか？

B：だいたい，そうだねときどきは空腹だったね。でも大丈夫なときもある。そして，ソムの中心地に知り合いの家などに寄るんだよ。立ち寄ると，ときどきエーズギー（加熱凝固チーズ）などをくれる，少しアーロール（酸凝固チーズ）もくれる，1つ2つポールツォク（揚げ菓子）もくれる。それをすばやくつまんで，そして行くんだよ。でもいつも尋ねるわけじゃないよ。ときどきそういうことがある，そういう生活だったよ。

D：授業は朝始まりますか，午後から始まりますか。何時から何時まで，どんなふう授業がおこなわれていたんですか？

B：朝9時に始まるよ，そのころはかなり長い時間授業があったんだよ，4時くらいまで授業があった。

D：そうですか，長いですね。

B：そうだね。今思うと，そのシャンハの下の方に「下のセンター」というのがあったんだ。それは本物のバロン・フレ（西の寺院）だというよ。そこには多くの家があり，そして，子どもたちの大部分がそこからやってくる。朝薄暗い中，やってくるんだよ，上の方に向かって，騒ぎながらかたまってね。夕方になって太陽が沈んだころに帰って行ったように思うよ。そうすると，5時近くになっていたに違いないよ，戻るときには。子どもたちだから，道草をして，遊んだり，相撲を取ったり，とてもゆっくり歩いていくに違いないからねえ，彼らは。

D：黒板というと，こういう足のついた黒板でしたか？

B：いいや，違うよ。壁に取り付けた，この写真のようなこういう大きさの黒い色の黒板があったんだ。壁にかかっている。

D：北側の部分ですか，どの部分にですか？

B：どこということではなく、ある片側に向けられている、建物だから、どこにあっても関係ないよ。その光の加減や何かを先生が考えてつけていたんだろう。

D：ゲルではあなた方はこうやって、例のベッドの上に座って？

B：そうだよ、ベッドの上に座って、黒板は北側に。そして、両側からこうやって円になって座っていた、こうやって黒板のほうを見るんだよ。

D：先生はチョークで？

B：先生はチョークで書く。

D：あなた方はノートや紙の、そのころノートや鉛筆というのは十分だったんでしょうか、その時代？

B：そうだね、それほどあふれかえっているというほど十分ではなかっただろうよ。私たちの時代は、でもそれほどいろいろなものを書いてはいないんだよ。新聞の端とかいろいろな印刷物の上に書いていたということがいわれている。私たちはそれほどではなかったよ。だいたいノートや本、紙を与えてくれていた。買っていたということはいくぶん知らないね。先生がくれていたんだろう。そしてノートの上に書く。ペンや鉛筆で、1年生のときは鉛筆で書く。2年生からはインクのペンで書く。インクはこういう液の入った容器、円錐形で下側も丸くなっていて、内側にくぼみのあるガラス容器を見たことがあるかい？ あなた方は？

D：さあ、よく知らないです。

B：そして、こういう丸い、こういう今ここにあるとすると、こうやって下側にこのくらいまでの円錐形で、くぼみがあって、そして、ペン先だけが入るくらい隙間が1つ開いている。そして、それにインクを入れるんだ。それというのは、斜めにしたとしても円錐のあいだからインクがたくさん出てなくなることはない、ひどく左右に振ったりしない限りね。うまくこうやってまわして置くと、その円錐がぐるぐる回るものだった。そういう目的のものだったんだろう。落ちたとしても起き上がって、ほとんどインクが出ることがない。そういう容器があった、そしてそれを布の袋に入れて、こういう取っ手のついた。そして、それを持って登校する。そしてそのインクが終わると、先生がまた袋に入ったインク入れを持っていて、そこから私たちの容器に入れてくれる。そしてまたそれが終わる…。後になって、インクつきの鉛筆というのがあった。それは例の紫色の水に溶かすと、紫色のインクになる。例のインクの紫というだろう、そういうインクになった。そして、それをまたそれぞれが折れたのや何かをくれと頼むし、削る。削ってつくるものだった、そういう感じだったんだよ。

D：そのころ、成績をつけるときは、今の優や不可というような、5や3というようなそんなつけ方をしていましたか？

B：そうだよ。そういう成績だった。5、4、3、2というような。

D：その当時というのは、子どもたちは、年長の人たちが話すとき、年上の人たちをと

でも怖がっていたと聞きました。そうだったんですか、当時は？

B：おお、もちろんそうだよ。そして一般に従順な態度であるように見えることに努力するんだよ。年長の人たちがいるときというのはだいたい大丈夫なんだよ。その視線が外れるとふざけたり、もみあったり、いろいろなことをするんだよ。そりゃあねえ、子どもだからふざけないわけがない。でも、年長者を怖がっていたよ。だいたい年長者は少し行儀の悪い子どもたちをしかりつけるんだ。人の子も自分の子もない「おまえはなんていたずらなんだ！何をしているんだ？ こうするものなのかい。こうしてはならない」というようにいろいろなしつけの言葉…そういうことから恐れるんだよ。子どもだからね、怖がって当然だよ。すべての人がだめだというんだから、子どももね。人がみんなだめだというんだから、子どもであっても、またこれはだめなんだなということを理解するだろうよ、普通。そうだから、子どもたちや若者たちの教育というのはだいたい1つの状態、水準だったよ。人にあつたら挨拶をきちんとする、礼儀正しく社会で生きていく、そういうことを学ぶだろう、学んでいたんだよ。それは、だいたいはいいいことだよ。過剰に教育されて、ありがとうやごめんなさい、というような言葉はないけれども、ちゃんと社会で生きることができたんだから。

D：だいたい、そのごめんなさい、ありがとう、というのはロシアから入ってきたようですね。

B：ああ、外国から入ってきたものだろう。もちろん、うれしい場合にはまた *gyalailaa* (満足ですの意味) とか何かいっていたようだね。

D：ありがとうというのは、最近になっての言葉かもしれませんね、満足ですと昔はいついたんですか？

B：そうだね、満足ですといついたんだらう。満足ですとね、他にはええと何だったっけ。まあよくなりました、よくなりましたなんていうことをいついたんだらう。それというのは、喜んだことを記念する、喜んだことを表明していたんだらうね。また他に *bashiij* という語句がある。そこにはこうしたことを *bashiigaad* (喜んだ) といいつて、*bashiilaa daa* とか何とかね。それを私はスパシーバという言葉から派生した言葉ではないと考えている。そのように派生して、*basiiba* になって *bashiiba* になって *bashiilaa* になって。

D：あなたの世代ではロシア語を勉強していたんですか、小学校のときに？

B：小学校では習わないよ。中学で勉強する。

D：ロシア人はいたんですか、この辺りに？

B：いや、いないよ。一般的にいないねえ、いなかったよ。でも地図を作る人たちがいたようだよ。ときどきロシア人かなんか鼻の高い人がウマに乗ってね、長い木を持って通っていたようだよ。そういう人を見かけることがあった。私たちがその人に近づくことなんてないよ、失神しそうになっていたよ、ロシア人が通ったりすると。

D：怖がりますか？

B：怖いよ、逃げるね。

D：違う色の人だから？

B：違う色の人だから怖がっていたんだろねえ、彼が私たちが怖がらせることなんかはないんだからね。違う色の人で、また恥ずかしがっていたんだろよ。そうそうロシア人を見かけることはない。

D：ロシア人に対して、だいたい人びとはどんな感じだったんですか、当時は？

B：まあねえ。ロシア人だなあと。それほど悪い感情はなかっただろうよ。大丈夫だよ。だいたいその当時はうまく宣伝をしていたんだ。一般的にわが国はロシアというとい国、いい人びとだと信じていた。頭の中にだいたいそう入力されていたから、それを否定して、嫌悪してみるようなそういうことはなかっただろう。そういう意味からも、だいたいロシア人はいい人だと考えていたんだ。こういう悪いことをしたんだということとか、その時代、働いていた人びとはそういう悪いことをするような人たちではなかったんだろ。人の国にいて、多くの中で働いている人というのは、まっとうに生きるもんだよ。それにそうだね、教養のある研究者たちが来ているんだろ。土地の写真を撮って、それは絵を描いていた人たちだと思うよ。高いところに上っては木を持ち上げたりしてね、そうやっていたんだよ。そうして何人かで働いていたんだよ。そういう光景が今も心に残っているよ。

D：その当時、あなた方はお金を持っていましたか、店から何か物を買う？

B：子どもたちが？

D：ええ。

B：一般にそういうのは珍しいよ。まあ田舎から両親や何かが来る時に、少しね、3、5トゥグルグをくれる。それを、今思うと。命のように大切にするんだよ。そしてときどき飴や果実、後になって干しすももなどが入ってくる。そう、イエベンもある、それらの中から買うんだ。イエベン1つ20ムング。1トゥグルグで5つのイエベンをくれるんだよ。今のこういう小さいイエベン。1トゥグルグで5つ買える、それならまあまあだろう。こうして、そのもらったお金をくずして、40ムングで1回に2個、そうでなければ20ムングで1個、こうやって少しずつ食べるとすると、5トゥグルグではかなりの個数になるよ、そうだろう。

D：40ムングで…。ああ、それで2個買って、なるほど食べるんですね。ばら売りでは1つを20ムングで売っていたんですね。飴や果実なんかはロシア製の物があったんですか？

B：ロシアの物だよ。ロシアの飴で、1kgはそんなにたくさんじゃあなかったように思うよ。kg売りの飴があった。それはというと私たちはいつも好きなように買うことはできない。お客さんが来たとき、くれる場合もある、それ以外でも、食べてもそれで

満腹になることはないよ、お腹をいっぱいにするのであれば、例のイエベンやタンゾール（小麦粉をこねて丸めて焼いたもの）など、そういうものをくれるんだよ。

D：当時はロシア製のモノポリというそういうウオッカがありましたか？ そういうふうによく聞くんですけど。

B：それは私はよく知らないよ。モノポリというものについて人が話していたよ。私が子どものときあったのかどうか。一般にウオッカを飲んだというと、マナホアルというのを買って飲んだと年配者は話していたよ。最初マナホアルというのが出てきて、そして後になって、ウオッカ。ウオッカをマナホアルと呼んでいた。そうっていたよ。

D：私の聞いたところでは、最初に入ってくるときには身体に、健康に良いとって、これを置いて、給料としてくれていたと聞きました。そういうことを聞きましたか？

B：ああ、それはああだろう、ウランバートルで給料をもらう職場ではそういうことがあったんだろう。田舎ではそんなことはなかったよ。近くの店にウオッカが入ってくるには来ていたし、それを買って飲む。私が学生のころはだいたい15トゥグルグくらいだったと思うね。

D：かなり高いですね。

B：そうだよ、15トゥグルグ。そして後になって値上げして、値上げして60何年か70年代には27、28トゥグルグになっただろう、そして30になり、そして上がり続けて、今では4万、5万トゥグルグに落ち着いているようだね。

D：あなたが小学校に通うとき、両親はこういうタルニなんかを唱えていなさいとか、魔除けのお守りなどをつけてくれて、送り出していましたか、どうでしたか？

B：いいや、しなかったよ。だいたいそういうことを恐れていたよ。好きなようにそういうことはできなかった。うちの両親は党员だったんだ。立場を考えるとそういうことをしてはならなかったんだよ。党员であるくせに子どもにお守りや何かをつけていると批判されるだろう。処罰されるよ。だから、そういうことはできなかったと思う。

2 社会主義時代の信仰と習慣

D：あなたが勉強しているとき、子どもたちでお守りなど、そういう秘密のものを持っていたりする、そういう子どもたちはいましたか？

B：知らないねえ。まったくそんなものを持っているのは見なかった。当時は寺院などが破壊されてかなりの年月がたった、どこでも僧たちを逮捕して、処刑したり脅したりしていた。そのころというのはかなり恐れていたよ、仏教や宗教的なものをひどく恐れるようになっていた、思うように明らかにそれをするにはできなかったよ、そういう状況ではなかっただろう。

- D：家々では一般に仏、ほかの家に行くとそこに仏や崇拜物を見かけましたか、どうでしたか？
- B：あるよ、仏はあった。家ごとに仏はあった。50、50何年からはまた仏などを隠させる、脅す動きがでてきただろう。そして、一部は隠しただろう。一部はそうしないでいて、そしてどうしたんだろう、なくなっていったんだろう。
- D：仏や崇拜物を持っていたというと、灯明25（旧暦の冬の最初の月の新月から数えて25日目に多くの灯明を灯すことで、徳を積むことになるという）とか、ドゥイツェンの日（春の最初の月、新年の1日から15日のあいだ）など、拜んだりしていたんでしょうか？
- B：もちろんそうしていたよ、それはどんな家であっても家の中では王のようなものなんだから〔何をしてもいい〕ね、ドゥイツェンの日なんかには、家々に党の代表者〔宗教関係の行為を禁止して回る係の人〕が座っているわけでもないんだから。とにかくそこでは灯明を灯す。また年配者たちはみんな唱える経典などを知っていて読経をすることができる、だから、それを読経するんだよ。
- D：その時代、僧の服装をした人たちはいたんですか？
- B：いなかったよ、まったくいなかった。僧のデールを着た人はいなかった。
- D：アルテリで働いていた僧たちは、髪の毛をのばしていたんでしょうか、それとも剃ったままでしたか？
- B：普通に剃っていて、そのままにしていたよ。ハリマク（男性の短髪）なんかにはしない。
- D：一部の人は妻子を持っていたんですか？
- B：ああ、そうだよ、妻子を持つ人は持っていた。そしてだいたいは還俗してしまっていたよ。
- D：そして、仏や崇拜物をおまつりするときには、以前、僧だった人びとを呼んできて、読経させていたんでしょうか、どうだったんでしょうか？
- B：秘密裏に連れてきて読経させる。隠れて連れてきては相談をする。うまくいかないんだけど、私はどうなっているんでしょう、何がおこっているんでしょうなどということを探ねるんだよ、また、尋ねようという人のところに行って、尋ねる。相談する師があって当然だろうよ、そうだろう。それというのも、すべての人を洗脳して、その代わりに新しい脳にするわけではないんだから。みんなの中に信仰や崇拜といったものはずっと存在していたんだよ。
- D：オボーなどをまつるという儀式はおこなわれていましたか、その当時？
- B：その時代はなかったよ。オボーをまつるということはまったくなかった。この90何年から始まったんだよ。ずっと昔はまつっていたんだという、拜んでいたという。そして、その伝統を最近からまた再開したんだよ。それ以外、私の世代というのは、そ

ういう理解はないね。ただ年配者たちは話していたよ、オボーのナーダムに行って相撲を取って優勝した、またとても力強くなったように思うよ、というようなことをね。オボーのナーダムの思い出や昔話はたくさんあるよ。あそこでこうやって競馬をして、優勝した、オボーのナーダムで、というような昔話はたくさんある。ただ、私の世代ではオボーはまったくまつっていなかった。オボーはまつるものだという理解はあった、だが、どうやってまつるのかはまったく知らなかったんだよ。

D：アルテリでは僧たちが働いていて、また中国人も働いていた。ほかにどんな人たちが働いていたんですか？

B：ああ、まあね、女性たちがいたと思う。手縫いでの仕立てや白い靴底の革靴（繊細な作り的高级ブーツ）なんかを作る女性たちがいた。後になって、柔らかい裁縫になっただろう。シャンハのアルテリはだいたい柔らかい裁縫（布などを縫う）ということではなかったようだよ、固い裁縫（皮革などを縫う）、そして、木や鉄。ホジルトに合併した後、ホジルトでは柔らかい物の裁縫があったと思う。

D：別の場所では僧たちのアルテリとって、完全に別だったようですね、そんな感じだったんですか？

B：知らないねえ。そのように公には設立したんだろう、シャンハのアルテリはというと。僧たちのアルテリとして設立して、そして後になって、入る人は入り、働きたいという人が働いて、そうしていたんだろうよ。だいたい最初はというとその僧たちのアルテリだったんだろう。それ以後、私が子どものときというのは、それを僧たちのアルテリとはいわなかった。そのように呼んでいなかった。そうすると、最初設立するときには大勢の僧たちがやってきていたようだから、僧たちのアルテリを設立したんだろう。

D：あなたが小さい頃、だいたい僧というとだいたいこういう人たちだという、そういう想像やなんか、そういうものはありましたか、あなたには？

B：あるよ。あるある、もちろんだよ。知っている。うちの家から上の方というのは、1, 2人の僧がいたんだよ、年とったね、1人は例のボグド・ハーンのを管理していた僧だったということだった。

D：象を？

B：そう。

D：へえ。フレー（今のウランバートル）にいたということですね。

B：そう。ボグド・ハーンのフレーにいたんだよ。そして、その象などが死んだんだろう、後になって、宗教もなくなってしまったんだろうからね。そしてうちのこのあたりにやってきた人だというよ。それがだいたいどこの地方の出身者だったのかはわからない。私たちはオドゴイと呼んでいた。僧侶だよ。小さなゲルにいてね。3つのハナ（壁）のあるゲルだったよ、3つのハナのね。また妻が1人。妻は別に住んでいる。

また1, 2人子どもがいたでしょうか。そして彼らを置いて行ってしまうそういう僧だったよ。うちの家ではご近所としてサーハルト関係（ヒツジの搾乳を共同でおこなう）にある人だった。とても優れた人だと信仰のある人びとなどがよくやってくるんだ。田舎だから秘密でね、どこからでも関係なくこっちへ、もともとこちら側の丘を超えてやってくる。あちらこちらからたくさんやってくるんだ。主にこの東から多くやってくる。そんなだったよ。それから、オルホン川の北側に私たちが師と呼んでいた人がいた、また優れた僧だった。ほかにもまた優れた僧はいただろう、どこにだってね。そして、それらはとにかく優れた僧だったんだろうよ。だから牢から逃れられたということだろう。生き延びられたということだろうよ。だいたい非常に優れた学者だったとみんな噂していたんだよ。

D: あなたの家には仏や崇拝物があつたんですか、あなたが小さいとき？

B: ああ、うちにかい…まあねえ、何かいろいろな真鍮の金色のそういう仏像なんかはなかったよ、普通の仏があつたね。何だっけ、2つのこういう描かれた仏があつた。

D: それではあなたの両親は党员だった、でも、信仰はあつたということですよね？

B: あることはあつたよ。だいたい特に隠すというようなことはない、普通にしているようにしてどうしたんだろうね。後になって、人びとがどうかしたのか、また物を入れる大箱の中にしまったんだろうかね。

D: その時代、それでは灯明なんかをあげたりしましたか、家で？

B: ああ、あげるよ、あげる。

D: あげますか？

B: よくあげるよ。

D: 経典などはあつたんですか？

B: うちの父には経典などはなかったよ。ただ最初の…小さい本があつた、弟のところを持って行ったんだろうね。例のモンゴル・ドルジゾドヴ（Sanskrit: Vajracchedika sutra）があつた、それは私がもらったよ。そしてまた Ish Uzuulsen（将来を祈る）という経典といって、またモンゴル語の小さな本、Bogdiin lunden（ボグドの将来を祈るという本）、それも私がもらった。ほかにはそんなにたくさんのはなかっただろう。

D: あなたのお父さんはまた党员だったから、外見はそれほど信仰があるようには見えなかったんですか？

B: 見えなかったよ、秘密だ。

D: 一般に宗教への信仰はあつたんですか？

B: ああ、だいたい持っていたよ、それを。また秘密裏に読経させる、オポーなどの上に行つては経典を読ませるんだよ。また家では「4人の僧の食事、読経させて食事を供する」というものがあつたよ。宗教のそういう…4人の僧に読経させる、そういうことをしていたんだよ。そういうことが一般におこなわれていたんだ。だいたいお

こなわない年はない。ときにはシャンハの寺に行っておこなわせる。4人を集めて、僧を1つのゲルに集めて、読経してもらって、そしてお供え物や何かを整えていた。それもまた秘密でするほかなかったよ、党员だからね。一見革命家だったから。そうして、まあ党员として生きていたんだろうよ。だいたいそういうことだったんだ。

D：指導の仕事はしていたんですか？

B：いいや、遊牧民だよ。除隊になってきて、バグ長、シャンハの組合長や何かの仕事をしていて、自分もそれほど好きではなかったのか、草原に出て、家畜を飼う遊牧民になった。

D：あなたのお母さんはこういうタルニ（呪文）などを教えてくれていましたか？

B：いや、いや。だいたいうちの両親は私に特にこれとって教えてくれなかったよ。私は学校に入る前、5、6歳、6歳頃だっただろうか、祖父のところに行った。そして祖父母がダリ・エヘ（ターラー神、それを敬う経文）を教えてくれて、半分くらい教わっていた。そして全部は覚えられなくて、半分覚えていたもんだよ。タルニの半分。学校に入ると、本当の赤、革命少年になってしまっただけで、それで忘れてしまった。

D：チベット語で覚えたんですか、モンゴル語で覚えたんですか？

B：チベット語。

D：あなたは祖父母ととても近しかったんですか。

B：そう、祖父母の下で育ったんだよ。14歳まで祖父母のところに行った。そして後になって生まれた家に戻って、大人になったということだよ。14、15歳になって生まれた家に戻ったんだよ。

D：祖父母は仏など何かを信仰して、何かをしますか？

B：ああ、あるよ。うちの祖父はまたモンゴル文字を知っていたようだ。教えの本なんかをモンゴル文字で読むんだよ。とてもよく暗記している。経典をそれほど見るわけではない。自分の覚えているものをそのままね。2、3の仏画をもっている。だいたい清朝に仕えていた人だった。僧にはならなかったけれどね。そういう人だったんだよ。辮髪をしていてね、丸く一部の髪を残した辮髪。

D：その前側？

B：そう、前側は髪を剃っていた。剃ったところより後ろは辮髪、3つ編みにして、毛先を革ひもで結んで、その髪を背中側に投げるようにすると振り子のように揺れたものだよ。そういう人だったよ。またかなり長生きしたね。90歳近くになって亡くなったよ。87歳くらいにはなっていただろう。落馬してね。もともとウマがとても好きな人だったというよ。70何歳のときに落馬して怪我をして。そして今思うと、この大腿骨の入るそのくぼんだ骨、そこを骨折したようだった。そして何の治療もできなくてね、ほとんど死にかけてたんだよ。20年近く寝たきりだったよ、でも看護がよかったんだろうね。

D：その時代、病院はどのような、現代のロシア医学が入ってきていましたか、あるいは僧たちがまた人を診ていたのでしょうか、どうだったんですか？

B：医学が入ってきていた、もちろん入っていたよ。ソムの医者として準医師がいた。そしてだいたいはそのソムの医者が来るものだよ。それ以外にはまあチベット医療、伝統医療などを知っている人たちが何人か、そういうことをしていたと思う。それはでも、明らかなものではなく、秘密でするんだよ。もし知れたら民衆を感わしたといわれるからね。そういうことだった。

D：パンなどは後になって入ってきたんですか？

B：そうだよ。パンはまあ50年、50何年になってパンを食べる、知るようになったんだよ。50年代にはソムの中心地や定住地、うちのシャンハなどは比較的規模の小さいところだから、パンなんかを作っていたかどうか、よくわからないよ。菓子類などは作っていたよ、アルテリでね。パンを作っている、アルテリのパンとっていたというようには覚えていないよ。知らないね。ホジルトなどにはパンがあったよ。ホジルトから持ってきていたよ。

D：最初に食べたとき、どうでしたか、珍しかったですか？

B：ああ、とてもおもしろかったね、とてもおいしかった。お菓子ということだよ。今のパンや菓子パンなんだよ。そしてそれを切って分けてくれる。また菓子パンを食べているということだからね。

D：小学校で学んでいるとき、宗教は悪、僧たちは悪であるなどという、そういうことは教えられますか？

B：ああ、もちろんそういわれていたよ。そして、この聖俗封建諸侯の、敵の残党だとか何とかね。ちょっとだめな者をしかりつけるんだよ、長たちは。だいたい仕事をしない、こんな失業者なんか、そういう者たちを叱るんだよ。まあねえ、人によるんだよ、それは。その人自らの姿がどうかでね。ちょっとふさわしくない人が長になるといって、またとても危険だからね、だいたい。いつの時代にもどこでも。経験のある、ふさわしい性質の、また深く物事を考える、そういう人が一般に指導者であるのが私は正しいと思う。その性質がふさわしくない人というとねえ。だいたい政府でも敵に、民衆にも敵となってしまうよ。

D：自分も敵に？

B：自分でも敵にね。その性質がふさわしくない、そういう人というのはとても困ったものなんだよ。物事の最初に叫んで叱りとばしてね。

D：アルテリの僧たち、彼らが僧であったということを知っていたんでしょう、あなたが小さいころというのは？

B：もちろん知っていたよ。

D：それでは彼らのことを、僧だといって嫌っていましたか、その人びとを？

B：いいやそんなことはないよ。まあねえ、彼らというのは同郷の僧たち、兄弟や親戚などで、こうやって一緒に、田舎でもどこでもこうやって暮らしていたんだよ。血族なんだよ、彼らは。そして私などは「ああ、この悪い僧たち、封建領主などめ」というように見ることは私にはできないんだよ。何々さん、誰々さんというようにね。もともと僧だったけれども今は還俗した。そう思っていただけだよ。もともといた兄弟たち、知人、同郷の年配者と見る以外に彼らを階級で見るということはなかった。

D：一部の僧たちは独身を通して、そういう僧たちもいたんでしょうか？

B：ああ、もちろん、たくさんいたよ。妻をもたず、独身を通じた人たちがいたよ。大勢いた。

D：私が聞いたところによると、秘密で読経する、人に知られないようにと真っ暗な深夜などに読んでいたといいます、そうしていたんでしょうか？

B：そう、そう。それは本当だよ。深夜に扉を閉じて、柵の扉に鍵をかけ、ゲルの扉にも鍵をかけて灯明を灯し、そしてお香を焚く。そして読経して座るんだよ、彼らは。そしてその日に何を讀むのか、彼らには讀むべき定められたものがあつたんだろう。それは毎日讀むべきもの、そういう師からもらつたそういう經典があつたようだよ。それを毎日讀む。そして、それをすべて讀むために、人が行き交わない、人びとの姿が消えた、休息している時間だから、それを讀んでいたんだよ。うちのこのシャンハの寺にはその当時僧たちがまた日中の法要として毎日、法要をおこなう、常の法要というものがあつた。それはだいたい途切れることなく讀経していたと、寺院を復興するときに、そのように話されていたよ。1つのゲルに入ってしまった、まったく途切れることはなかったとね。それはとても驚くべきことだよ。そして彼らは、その宗教儀礼に使用する道具、仏や崇拜物などを、一般にこうしてたくさん残していたようだ。個人の物もたくさんあつただろう。仏のある家庭はたくさんあつたんだからね、そうだろう。その時の寺の物から取つて残した、繊細な神聖なものを取つて残したようだね。そしてその時に、今こうやって再建するときに、それらをさまざまな方面から持ち寄つて、こうやって仏や崇拜物としてまつることになつたんだ。もちろん失われてしまったものは非常に多く、数知れないよ。

D：あなたが小さい頃、ここの寺院、西のシャンハの寺院の遺構などがあつたんでしょうね、そうでしょう？

B：そうだよ。その下のセンターというのはその下に、今ある寺よりもその下の川の端の平らな場所に西の寺院というのがあつたんだ。それは一番大きな寺だよ。そこはというと、いくつもの堂塔があつたんだよ。今こうやってヒツジの放牧をしているときに見てみると、多くの堂塔の痕跡がある。私が学校にいるとき、その北側には3つの仏塔がこうやって破壊されて捨てられていた、こうやって盛り上がったものなどがあつたんだよ。そしてほかの堂塔はというと、だいたい土台から何もかもがなくなつて

いたんだ。そして、その黄金の真鍮の仏像などがあちらこちらに横たわっている。こうやって手足をもぎ取られた、頭なんかも打ち壊されていた。たくさんあったものだよ、私が小さいころ、学校で学んでいるころには。ここかしこに横たわっていた。今ではまったく破片すらも見かけないね。最近、90何年に大がかりに掘り起こしたらしいよ。そして、さまざまな土で作った仏像、完全な形のものはない。ただこういう小さな袋を入れてそれに入れて歩く、小さなものなんかは完全な形で見つかったらしいよ。そういうものは見つかった、どうやって見つけたかという、その堂塔を燃やして、地面を掘ってその残骸をそこへ捨てたんだという。その焼けこげた残骸から人びとが見つけたらしい。そして、行ってそれを見てみると、灰のついた木の焼け残り、そして灰、そして土で作った仏像などは燃えてしまった、そういう泥炭があったらしい。塗料はなくなってしまった、少し大きめのさまざまな仏像は手足、いろんな部位など、こうやって切れ切れになった仏前に捧げる布が、こうやってちぎれた切れ端があるんだ。そしてそのすべてをこうやって引きちぎり、切り刻むようにして火に投げ入れ、穴を掘って、一部はそこに埋めたんだ。一部はこうやって外を飛び落ち、その上に砂がかぶってなくなってしまったようだ。そんなふうだった。一般に大規模な破壊がおこなわれたんだよ。経典はすべて飛び散り、飛び散り、なくなってしまったんだ。

- D：当時子どもが生まれるとき、名前などをつけるときに僧たちに見せる、あるいは名前をもらっていたんでしょうか、どうだったんですか？
- B：ああ、もらうよ。知識のある人のところに行ってもらうんだ。それはまた聖者である昔からの僧であった優れた人からもらうんだよ、人びとが優れているという人からもらうんだ。私の両親はもらっていた…たぶんそうだっただろう。またそれも好きなように自分たちで与えるものではないよ…。だいたい何々さんから名前をもらおう、誰々さんからお香を焚いて祈祷をしてもらって、そうしてもらおう。その人がもし時間があればやってきて、お香を焚いて祈祷をして、名前を与え、そして帰っていく。もしも来ることができないようならば、その人のゲルでお香を焚き、名前をもらって帰る。そうしていたよ。
- D：人が亡くなったという、また、葬いの儀礼のアルタン・サヴ（直訳すれば、金の容器という意味）を開く（死亡の理由や埋葬方法などの助言を受けることをアルタン・サヴを開くという）など、そういうことがおこなわれていたんですか？
- B：そうしていた。おこなわれていたよ。秘密でね、おこなっていた。そういう習慣は捨てなかったよ。アルタン・サヴを開く、そして方向を定める、葬りに出立する日時などはそういう人を訪ねて聞くんだ。そしてシャンハへ行くんだよ。この地方の者は、オルホン川の北側に仏画家という1、2人の僧から聞いていたんだらう。そして時にはシャンハへ行く。そうしていた。だいたいそのアルタン・サヴを開く、そのさまざま

まなことがおこると、普通の人間が考えて、あそこに葬ってしまうというようなことはありえないよ。必ず、そうした方がいい、その人のところに行ったほうがいい。必ずうかがいをたてて、その答えを得る、そういうものだったようだ。どうだったのかよくはわからないよ、でも人びとは好きなように葬儀などをしてはいなかっただろう。一般にアルタン・サヴを開かせるといっていたよ。そうしたんだと話していた。開く人びとをそこから、大きな寺院から探してきて、昔はそういう人がたくさんいたんだから。そうだろう。一部はできないというけれども、だいたい多くはそうできていたんだよ。その習慣は途切れてはいなかっただろうね。

D：人を葬るとき、その墓になる土地をこうやって掘って埋葬していたんですか、一般に昔はどうしていたんですか。それとも直に遺体を置いていたんですか？

B：風葬だよ。だいたい土地を掘ることはない。直に置くんだよ。そうするもんだ。

D：いつからこのように（土葬）するようになったんでしょうか？

B：だいたい50年代末、60年代の初めごろから始まったんだろう。50何年からだいたい、このあたりにも、また人を葬るための場所があった。そこにいくつかの穴を掘らせて、亡くなった人を埋葬するように、とされていた。でもほとんどはそこに埋葬しなかった。その穴は今でもそこにあるよ。だいたい、50何年から始まった仕事だよ。それ以前はそうだね…私が学校に通っているときには、草原にそのまま置いていたよ。私は53年に卒業した。小学校を。その当時はだいたい風葬だった、それ以後まもなく、ソム中心地などの人びとは土葬するようになった。草原部に、遠く離して、人から離れているものならば、直に置いていた（風葬）よ。そうだっただろうと私は思っている。

D：その時代というのは、何年だったか、チョイバルサン元帥がツァガン・サル（旧正月）のはじめに亡くなったのは、何年だったんですっけ？

B：それは53年だったか、52年だったか53年だったか。ちょうどツァガン・サルのときか、大晦日に亡くなったんだろう。

D：そのようですね。

B：大晦日に亡くなった。私はツァガン・サルになるといって、家に戻っていた。私のクラスの先生が後からやってきて、私を連れ戻しに来たんだ。ツァガン・サルはおこなわないという、そういう話が出ていた。ツァガン・サルになってすぐあとに、私を連れにきたんだらうか、先生は。ちょうどツァガン・サルの日には連れて行かなかったよ。ツァガン・サルの後、行ったんだらう。そしてバグの会議をおこなって、その道中バグの会議をおこなっているといっって、そこに立ち寄って、先生たちが私たちを連れて、戻ったことを覚えているよ。

D：あなたは家に戻ってしまっていた、そうしたら、先生が後から連れに来た？

B：そう。先生が後から連れにきたんだ。

D：ツァガン・サルは一般におこなわせないといっって。

B：そう。そしてすべての家々でツァガン・サルをおこなわせないとってね。そして、そのときには元帥は亡くなっていたんだろう。その間、先生が連れに来るときには、私はすでに正月の行事を済ませていて、さまざまな家に挨拶に行ってしまった、全部終わっていたようだね。なぜなら、ツァガン・サルをおこなわず、私を連れていってしまったというならば、かなり記憶に残っているはずだよ。それは残っていないんだ。ただ先生について行ったということを知っている。だから特にどうということなく過ぎていったに違いないね。

D：小さいころ、ツァガン・サルになるのはうれしいことでしたか？

B：うれしかったよ。そしてツァガン・サルを指折り数えて待つんだよ、日を数えて待つんだ。そう総じてうれしいものだよ。今でもいいものだよ。今になってもツァガン・サルはいいものだよ。そうだろう。モンゴルの伝統的な民族の祭り、ナーダムよりも上の祭りだろうね、そうだろう。ナーダムはまあねえ、さまざまなときにおこなわれていた。もちろん、喜び楽しむものだったよ。でも、これのようにこうやって大昔から定められた月日でおこなわれてきた祭りは1つだけなんだからね。昔はというと、ナーダムは、昔は七旗のダンシク・ナーダムがおこなわれていた。それは何月の何日という定まったものではなく、季節の状況を見て夏の盛りの良い時期や、主に秋におこなわれていた。また清朝皇帝の支配下の政権でのナーダムというのもそうやっていた。ああ、旗のナーダムというのも人びとの仕事のない時期を考えて、またおこなわれていた。とするとどれもツァガン・サルのように大昔から伝統として受け継いできたものではないんだよ。ツァガン・サルは昔から、ツァガン・サルは何年から始まっておこなわせたんだろう。チンギスが一番初めにそうしたので、それ以前は秋におこなっていたといわれているよ。秋におこなっているときにもまた新年の挨拶をし、ツァガン・サルがおこなわれていたんだ。その後、春の初めの月の新月の日におこなうとチンギスが最初に始めたのではないだろうかとは私は思っているよ。それ以前は秋など、さまざまな時期にそれなりにおこなっていたんだろう。そして後になってチンギスが春の初めの月の新月の日をツァガン・サルとして、このときにおこなうようにと定めたのではないかと私は思っているんだよ。そうだろう。それ以後どうあれ800年これをおこなっている。そうだろう。そうすると一般に最も大きな祭り、これは新しい年を迎える喜び、前年の成果を記念し、兄弟がともに会い、両親を訪ねて挨拶をおこなう、敬意を表するんだよ。だいたい挨拶をおこなうというのは相手を尊敬するということだよ、そうだろう。

D：ヨールカ（新年のお祭り）というそういう祭りはいつから入ってきたんでしょうか？

B：それもまた50何年に入ってきたようだよ。私が学校にいるとき、またヨールカをおこなっていた。先生たちが冬のおじいさんになって、何人かの子どもたちが例の動物、熊になって、何人かの子どもたちが熊やうさぎなど、十二支になるんだよ。そうやっ

ておこなっていた。山から杉の木を持ってきて、若い杉の木を切ってきてね。それを飾っておこなうんだよ。50何年から始まった。このあたりではそうやって始まった。

3 第2次世界大戦後の生活

D：戦時中は、戦争をしているときは、戦争をしているということを小さいときにわかっていたか、大人たちは話していましたか？

B：私は41年に生まれたから、45年には4歳の子どもだよ、何もわかりはしないよ。でも、その独立を勝ち取ったモンゴルのすべての民衆が署名をしたと、書いたといっただよ、45年に、そうだろう。それをうっすらと覚えている。人びとを集めて、私はこの子よりも、その男の子よりも小さかったんだよ。この子は今6歳、これよりも小さかった。そして人びとを集めてそうしたんだ、女性たちは指にインクをつけて、それでこうやって紙に押させていたのを覚えている。私はそれを見てとても驚いていたんだよ。真似をして押そうとしていたらしい。見ていたんだろうね、それを同じように押そうとしている人なんかを見ていたことが頭に浮かぶよ。だいたいまあ、物は不足していたよ、47、48、49年まで、そして50年代近くまで物は少なかったんだよ。飲食物、小麦粉や米なんかは今と比べると同じではないよ、不足していた。小麦粉を買うというと、袋買いをする人は珍しかった。5、10kgを買えたんだ。一般に5、10kg、袋ごと売るようなそんな大量の小麦粉は組合にもなかったんだ。すべての世帯が小麦粉を袋ごと買うというようなことはできなかった。それで5kgの小麦粉、少し余裕のある人は10kg。それと米を1、2、3kg。砂糖はほとんど使わない、甘くおいしいものはいつも買うことはできないんだよ。ツァーガン・サルのはちまきに入れて使うんだ。普通するときにははちまきもそれほど作ることはなかった。余裕のある人びとは作っていたんだろう。余裕のない者ははちまきを作ることはできなかったよ。家畜はというとだいたいどの家庭でも少なかった。今と同じように世帯ごとに10頭のヒツジなんてことはいわないよ、200、300頭なんてこともいわない。10、20頭の家畜だったよ。それはやっと生活できるくらいだった。その上に税金というものがある。隠すなんてありはしない、羊毛や剛毛、角や蹄、毛、皮、全部番号がついていたんだよ、その時代は。それを納めようと大変な苦勞になる。全部取られるんだ。1歳のヒツジやウシからも取るんだ。ヤギのすべての皮、1歳ヤギの皮まで徴収する。すべての家畜から取れるものを、ほとんど全部取り上げるんだ。そしてああ、私は覚えているよ。最初の5カ年計画というものだったんだよ。こうだったんだ、家畜を所有している人は一時期こういう目にあった。ああ、それは計画ではなかったか、党の政策がおこなわれたんだ。最初、羊毛やカシミアの徴収に所有家畜が少ない者はとても苦しんでいたんだよ。その上肉を取るんだよ、また。あなたの家は何頭のヒツジがいるから何kgのヒツジ肉を、何頭のウシがいるから何kgのウシの肉を、頭数で定めた数値があった。頭数を掛

けてその量の肉を徴収する。羊毛やカシミアも同じだ。そうするとそれを納めきれない。そうやって納めきれないでいると、それに罰則を科す、できなければ。そして罰則としてまたその分徴収をする。こうしていて問題がおこってくると、再度また法律を新しくして、実施し始める。すると、どうなったかという、家畜を所有している人民は家畜の頭数統計をして、こうやっていくつかに分けて、2、3に分けてグループを定める。最も多いグループは1人から以前は1kgの羊毛を取っていたのを2kgにする。中間は減らす。その下のグループは少し減らすんだ。そして家畜をそうやって定める。そうなるとその多くの家畜を所有している人たちというのは…もともと困難な状況の上に徴収が増え、そうして圧迫されていくんだ。こうやってほとんどがネグデルに入るという理由はそういうことであつたんだよ、そういうことから入っていたんだ、主に家畜を持っていた人びとはね。なぜかというとその公的な規則に抵抗できなくなった。そして罪のある家畜（聖俗封建層や裕福な人の所有財産に対して罪が着せられた。後述）、罪のある家畜から…。そういう言葉さえできてきたんだよ「罪のある家畜から逃れよう。ネグデルに入ろう」そういう文句までがでてきたんだ。そうだった。最初はこうだったんだ、最初の5カ年計画はこういうものだったんだよ。今年わが家では5頭のメスヒツジがいる。そして1頭のヒツジを例としよう。5頭のメスヒツジは春、子どもを産む、5頭の子ヒツジが生まれる、そうだろう。こうやって10頭のヒツジを持つことになる。そうすると10頭のヒツジの。前年、秋が近づくときに、秋を迎える9月1日に家畜の頭数計算がおこなわれていたんだ。そうして数上あつた家畜を翌年に割り当てを取るときには子畜の分も一緒に取るんだ。こうやって少ない家畜を持っていた世帯は、こうやってどうしようもなくなってしまったんだよ。それ以外にある程度多くの家畜を所有していた、余裕のあつた人たちというのは、またそれに耐えることができる。そして耐えて、その家畜のすべてを納めていると、貧しい者たちは巻き添えになることから「この金持ち連中、どうしたってだめだ。これらを何とかしろ。こうやってグループを定めて、そして罪のある家畜にしてしまえ」とね。そして罪ある家畜になって、それらから脱するために、ネグデル化運動を拡大させて、政府から、党政府からネグデル化運動が拡大されてね。そうして、入るものは入る、入らないものは…。だいたい自発的な考えをもとにというスローガンだったんだよ。でも自発的な考えをもとにしていたら加入しないから、強制していたんだ。それは例の家畜の、家畜から取れる利益を徴収するという活動上、だいたい羊毛の上でまさにおこなわれたんだ。例をあげるならば、わが家、本当に生きた例としてわが家がある。祖母はかなり多数の家畜を持っていた家なんだよ、それが納める羊毛が不足したとする。割り当てられた羊毛はどうやっても到達できやしない。こうやって、裁判にかけられる。裁判所が呼び出して、そして判決を受ける。そして罰金を払い、そしてさらにその不足した羊毛を出せというんだ。それを払うことになった。こうやっ

て何とかそれを納めるようにする。そして3頭の種馬があった、そこから1頭を羊毛代として払ったんだ。

D：ああ、換算してですね。

B：換算しているんじゃないよ。その羊毛としてウマを、10kg羊毛が不足したとして1頭のメスウマ、太ったよいメスウマ、10kgの羊毛分として引き渡す。そこでオールガ（馬取り竿）を持って行き、1頭のメスウマを捕まえて渡す。こうやっていて1頭の種馬の群れすべてをなくしたんだ。こういう例がある。そして、例の罪のある家畜となるわけだ。わがシャンハにはまたネグデルを作ってくれないんだよ。それで祖母はというと、さあこれらを政府に渡そう、ただで、もうやめよう、とにかく早く政府に渡してしまって、苦しむのはやめようといってね。そうしているとシャンハにネグデルが作られた、そして、ホジルトにも作られるという。ではホジルトに行ってみよう、そのネグデルに入ろう。こうしてホジルトに行ってみたところ、そのソム行政は許可をくれないんだよ。そういう大変な目があった。そして後になってからネグデルが作られて、56年にネグデルが作られて何頭かの家畜を渡して一息ついたんだよ。そういうことが起こった。その最初5カ年計画では、今いない家畜の税がいくらだと、そうやって払わされて本当に大変だった。次のそのグループもまた大変だった。だいたい大変じゃないものなどないんだ。みんなだいたい困窮し、疲れ果てていたんだよ。それに一次産品の価格は非常に悪かった。50何年ごろというのは、1kgはだいたい3、4トゥグルグだったんだよ、今となってはよくわからない、おそらくね。かなり後になって60何年ごろに90トゥグルグになっただろう。50何年ごろというのは価値がなかった。羊毛、カシミアなどは価値がなかったんだよ、肉といっても公的な規則で買い取っていたからね。公的規則の割り当てという名前があったからね、それは、紙の上にそういう名前のついた公的規則の割り当て。それは厳めしいものだよ。それが後になってネグデル社会になって、家畜はまあ定まった頭数の家畜を持つ、そしてネグデルはハンガイでは50頭、ゴビでは75頭だったか、そのあいだの地帯で75頭だったのだろうか。ハンガイは50頭だったよ。世帯ごとにそういう家畜の割り当てがされたんだよ、60何年にね。そしてうちの国营農場、国营農場は、ネグデルではない。そうだから協同組合や国营農場の労働者、遊牧民であっても、すべてその所轄下にある者は16頭の家畜が割り当てられる。それよりも多くなった場合、さまざまな物を取る。それがなければその資産として納める、そういう規則だった。それほど厳しく取り立てて納めたということはないだろうよ。まあねえ、人びとはまた生きた人間だから、人にはやり方ってものがあるというよ、うまくやるんだよ、そうだろう。柵のすきまに入れるとか、隠してしまってね、映画なんかで木を引きずって隠したウシが出て来るだろう〔映画「ウマを持ちたい」の1シーン〕。その映画は事実を元にしたんだだろうよ。そういうことだったんだよ。もしも、ただ所有している家畜をそのまま数えるんだとした

ら（上限がなければ）、なぜそれを人から隠して、こうするものかね。それはということもしも見つければ処分といって、罰金を取られ、牢屋に入る、そういうものだったよ。そうしていた。その後、60何年に私が大人になって働いているときというのは、原材料の価格は少し上昇したんだよ。でもどうってことはなかった。1kgのカシミア、1級のカシミアが90トゥグルグ何ムング、そういう値段になっていると話されていた。90トゥグルグというと、その当時、角の丸い段茶を1つ全部かうことはできない。角の丸い段茶は10トゥグルグそれくらいだった。まあ9kgの小麦粉を買うね。小麦粉は1kg1トゥグルグだった。そのくらいじゃあ、何も買えやしないよ。

原材料は今、だいたい北（ロシア）か南（中国）か国境を越えて交代で輸出するようになった。時にはいい値段で出しているようだよ、南へは。昔、北へは原材料はまたそれほど有益に出していなかっただろうと私は思っているよ。だいたい最も安い価格でね…衛星国としてモンゴルは原材料の基地だったんだろうと今は考えている。そんなに公的な貿易をしていなかった。でも、社会主義はまたモンゴルを援助していたんだよ、また文化をもたらしただ、モンゴルを文明化したんだよ。文明化についてはよくおこなったよ。悪くはなかった。だが、その道は完全、すべてが完全ではなかった。わがモンゴルが自らそんなふうだったからそういうことになっていたんだよ。ずっとそうだっただろうよ。

4 軍隊の生活

そして私は62年に軍隊に入り、そして秋にベトナムに贈与家畜というのを送ったんだ、ヒツジを。それに行っただよ、秋に。私が行くときというのは、またモンゴル人民共和国軍の政治管理局、軍指導本部からさまざまな命令をもらって、注意警戒をしてね。その時代は例の中国赤軍の革命というのが始まっていたと思う。「あなた方は非常に注意して行きなさい」とね。そしてまたその上に中国インドの2国が戦争をしていた。そういう時期にあたったんだ。「あなた方は自由気ままにあちらこちらに行ってはならない、非常に注意して行きなさい」と命令されていた。「だいたい中国という国は発展が遅れていて、大変粗野なものだよ。あなた方はそこに文化を運んで行く者たちだ」とこういわれていたもんだよ。本当はというと、私たちが彼らの生活の中に入っていくわけではなし、鉄道でこうやってヒツジを積み込んだ商品用の貨車に乗り込み、あれこれといっていると到着しているんだから。生活などを知ることなどはできやしない、わかりっこないよ。でも、物事はその端々から見えるものなんだよ。ある駅に着いてそこに降りたときだよ。エレーンに最初に行ったときにある若者がこっちにやってきた。警官なんだろうか、彼と少し話をした。彼は「私はモンゴル人だ」という。中国人だろうという。「違う、私はモンゴル人だ、私はナムスライという、私はモンゴル人だ」。本当に民族的な思想を持った男のようだったよ。そして、その

先、またジネンという駅について、家畜たちの貨車を交換した。そのために待っているときに、私たちというのは緑色の軍服のオーバーオールで、昔でいうならば Terminal という、Terminal という形ではなく戦車の緑、そういう服だった。2種類の素材があったよ、その時代。そういうオーバーオールを着ていたら、人びとがこうやってきて、2人の内モンゴル人がやってきたんだ。彼らは私たちのオーバーオールをほしがるといったらなかったよ。ずっと横にいて、何ていいベルトなんだろう、とかいってね。だいたいその着ていたものなどはとても立派なものだったよ。中国人というと荷物を運ぶときにはいつも肩の上のにのせるんだよ。背負い、こうやって持つということはない。いつも肩の上でこうやって天秤棒で担いでいる。だいたい2つの肩に継ぎ当てのない中国人なんかはいないんだよ。そして肩を手でばんばんとたたいて走っている。10、20、30、40人いたんだろうか。その中国人はみんな同じ人民服だったよ。

D：青い？

B：青い綿のズボンとシャツの。ほかの服はなかったようだったよ。みんなそんなふうだった。そうだったよ。一般に貧しかった。そして、その鉄道の駅で停車すると、まず家畜に水をやるんだ。井戸からバケツで水を運んでくる。彼らから2、3人が人員を出させて助けさせるんだ。多くの貨車へ水をくませて運び込む。そのときに見ていると、だいたいその着ている服などはかなり貧しい感じだった。ああ、例の缶詰。私たちの食事はというとだいたい乾燥した食事（携帯食）で、井戸から持ってきた水を飲むんだ、軍人だからね。乾燥したものを食べるんだ。缶詰や乾パンそういう携帯食が支給される。そしてその缶詰を食べ終わって、その缶を道中の駅に投げ捨てるんだよ、ホームにね。そして見ていると、誰も彼も、缶を拾わない者はないよ。また、草をヒツジに与える、干し草を束ねたプレスの鉄。それもまた外に投げ捨てる。それを見つけた者がまた必ず拾って持ち帰る。彼らは踏みつけてその上を踏みつけて歩いていくとか、横にこうやって足で蹴って気にもかけないというようなことはない。彼らにとって役に立つものなんだろう。必要だったから拾っているんだから。物は不足しているということだよ。そうだっただろう。そんなふうだったよ。そのあと、私たちは中国の向こう、Dusyani という場所に到着してヒツジを引き渡して、そして戻ってきた。戻ってここへは11月7日にその武漢という非常に大きな都市がある。その中で市場に行ったんだよ。そのときわが国では10月革命の記念行事の時に、旗やポスター、建物ごとに旗が飾られている。そしてそんなふうになっているだろうと、その都市で歩いてみたけれど、まったく1つの旗も見かけないんだ。中国も本当の共産主義国家だよ、そうだろう。それでもそういう旗や何かはまったくないんだよ、10月革命記念日に。総じて貧しかったよ。今は映画や何かで見ると驚くようになってきているけれどね。その後、北京では戻るときに3泊した。和平ホテルという10何階建ての建物がある、11、12階建てだよ。そこに3泊して、皇帝の冬の宮殿、動物園などを見学したよ。1

日目は買い物，市場があったようだよ，穴の店といわれていたんだ，地下にずっと続いているんだ。地下というと壁などはなく，ハラホリンの市場くらいの大きさがある。それほどではなかったかな。とにかくそういう地下に入って歩いて，歩いて，どの方向からでも関係なく出られる，こうやって自由にね。扉などはないんだ。そういうところで1日ぶらぶらしたよ。そしてまた観察すると，北京ではやはり人びとは少しいい身なりをしている，地方に行くとはそれはひどいものだった。地方では秋になって収穫をする時期，冬用に収穫をしているようだった。例の手押し車で，その上に落ちそうになるくらいこうやって積み上げている。そしてこうやって，並んで車を引いて歩いている。わが国でウシの車を集めて，こうやって列にして行くだらう。まさにそれのようだったよ。そしてそれが列になって，鉄の車輪がカタンカタンと音をたてて，そしてそれを待って立ち止まる。そんな風だったよ。

D：どのくらいのヒツジだったんですか？ 何頭ですか？

B：1,000頭。うちのこのあたりの土地の1,000頭を届けたんだよ。1つの貨車に72頭，ときには73頭などを1つの貨車に入れてね。2つの扉のところをこうやって鉄の格子を作って，両側にヒツジを入れて，水桶を置いて，こうやって草の上で過ごしていたんだよ。そうして，夜寝るときには，扉を閉めて寝る。日中はというと，若かったし，見る物すべてに興味深くて，その中に座っているということはなかったよ。扉の草の上に窓を開けて，そこに出て立っているんだ。そして周りを眺めて，あちこちで見たことのない場所，国の興味深い自然など，都市や集落，人びとの生活そういうものを眺めていたんだ。だいたい明るくなってから暗くなるまで，ヒツジに草を撒いて与えて，そして外を眺めていた。そうやって行ったんだよ。

D：何人が行ったんですか？

B：20何人だよ。だいたい長や兵士すべてあわせて30人近くだっただらう。

D：へえ。

B：1個部隊，1つの梯隊で派遣されたんだ。前年も同じように届けたというよ。家畜を。2年目のときに私たちが行ったんだよ。それが何年派遣されたのかは知らない。何回か届けたよ。1年に何度かね。ツェデンバル書記長がベトナムを訪問して，10万頭のヒツジをプレゼントしたんだ。それを届けたというわけだよ。

D：それはどういう意味のヒツジですか？ 何のためのヒツジだったんでしょうか？

B：普通の繁殖用，家畜にする。そういう用途のヒツジだよ。

D：ベトナムに，あなたは中国を経由して，ベトナムに入ったということですよね？

B：ベトナムには入っていないよ。わが国でいう，今の中国のザミン・ウデのようなところだよ。その国境のこちら側…そこに行き，引き渡して戻ったんだ。それはなぜかという，前年，私はまだ軍隊に入っていなかった。うちの父はバグの上級の宣伝員で，バグの新聞を配る。そしてたくさんの新聞がやってくるんだ。それは党の「ウ

ネン（真実）」紙から「労働」紙、「若者の真実」紙。そしてウブルハンガイの「労働のために」紙、このようにたくさんの新聞。それらを私は読みに読むんだ。すると、ある新聞上にアメリカの何という新聞だったか、モンゴルの10万人の兵士がベトナムに入ってきたと書いてあるんだよ。書いてあった。それはその4面にね、この資本主義国というのはたいした奴らだ、いつも嘘を書くものだ、そうやって家でほかの子どもたちと、同年代の者たちで話をしていたよ、こう書いている、ああ書いているとね。それが後になってわかったんだよ。10万頭のヒツジをベトナムに送り届けたのを、10万人の兵士と間違っ書いてたんだ。もちろん軍服を着た兵士たちが届けたよ、そのヒツジを。軍服で届けてあげた。そこでわが軍を見て「うわあ、10万人の軍隊というのはこれだろう」と書いたに違いない。誇張したんだ。私はそう思ったよ。そしてその後、翌年になって、私たちが同じようにそういう白い布で縫ったこういう前に少し前の部分が長い白い帽子をかぶって、軍であることを隠していたんだらうよ、意図としては。そしてその他、服はというと何もせずに、特にどうこうしたということはない。その他は通常通り。知られないわけがないよ。そして農牧大学の学生というんだぞと、そういわれて出発したんだ。一応秘密にして行動しているんだよ。将来、いろいろなことをいわれないためにね、また兵士を入れたとまた書くのではないかと恐れていたんだらうよ。だから国境を越えず、国境上で引き渡して戻ったんだよ。その10万人の兵士ということが、今も私の頭から消えない、忘れられないね。

D：そうですか。とてもおもしろいですね。その時代、中国とは悪くない関係だったんでしょう？

B：悪くないよ。でも少し不和になりかけた、始まってしまっていたんだよ。不和になり始めていた。そういう見方を恐れて、でもそれほどひどくはなかった、大丈夫だよ。そして、その時代というのは中国は建築現場にいた中国人労働者たちを引き上げさせる、そうした時期だったよ。一般に少し不和になっていた時だった。「はい、ツェデンバルは悪い、悪い」一部の中国人はためいきをついてそういつていた。軍隊でも建物の鉄骨建設作業などで2、3人の中国人が短期で何日か、難しい仕事でうまくいかなかったため連れてきてやらせていたんだらう。働いていたんだ「ああ、ツェデンバルは良い、毛沢東は悪い」と私たちはそういつてね。その私たちと一緒に働いていたその年配の40、50歳くらいの人だっただらう、年配の人だったように思うよ。40、50歳くらいだったようだ。ちょうど労働年齢のそういう人がいた。彼らは怒って、親しくしない。そんなふうだったよ。

D：仲のよかった時期には、毛沢東の歌などさえも歌わせていたといいますよね。

B：ああ、学校のコンサートなどで歌うんだ。「東の方から太陽が昇る、中国に毛沢東が生まれた」と声をはりあげるんだよ。それをよく歌っていたよ、歌のコンサート…子どものコンサートというと、さまざまな恋愛の歌なんかは歌わない。他の歌を歌う。

例の政治の、レーニン先生、父チョイバルサンというような歌。詩もあった、そういうような詩を朗読する。そういうふうだったよ、一般にね。今は子どもたち、幼稚園の子どもでも愛の歌を歌っているよ、そうだろう。

D：あなたはウランバートルにいるとき、ガンダン寺に行きましたか、行ってみましたか？

B：行ってみましたよ。軍隊のときには まあね、ガンダンに行ったことがある。私の世代というのは軍隊も開放的でね、そういう、豪放な感じだった。私の世代はね。うちの大隊はまたかなり豪快な隊だったよ。ただ殴り合いや喧嘩などはないよ、私の世代は。それぞれが相手に勝とうとしたりはない。ただ、外に出かけてはいなくなる、そういうくせがあった。私もその1人になったよ、外出してね、少し退屈すると外にでる。土曜や日曜などには。時には仕事をさぼる。そしていなくなってしまう。夜になると帰ってきて寝る。土曜日や日曜日などには、知り合いの家などに泊まると、また続けて泊ってね。そして戻ってくる。そんなに遠くには行かないよ。市内で…ウランバートルも今思うと家も少なく、楽だったよ。時折行く店がある。そこに入ってはいろいろなものを見ては目を楽しませる。兵士が物を買ってもしかたないだろう。ときどき飴や果実を買うくらいだ。いろいろなアルヒやワインもその当時飲むわけでもないから、特に何もないよプーシグ（Belomorkanal, Kazbek など、ロシアのフィルターのないたばこ）を買って、それを吸って格好をつけるのが主だったね。その時代はまたたばこを吸う年代だったんだ。中国に行ってそこでたばこを覚えたんだよ。小さい頃というのは好奇心で父のたばこを隠れて吸っていた、ヒツジの放牧に行行って吸っていたんだ。後になって、たばこをやめて、そして軍隊に入った。たばこをやめて行ったのに、その日の Puushig といって割り当てでもらうんだよ、吸おうが吸うまいが。それを中国人に見せては驚かせていたよ、貨車の入り口に立って、それを口にしてね。そして、人がやってきて、その人のことが気に入ったらそれをあげる。中国ではプーシグはなかったんだよ。みんな巻きたばこだ。このプーシグというのはあれだよ、ロシア固有のものだったんだよ。その他の国のことは知らない。それを、女性がいたら呼んでは、これ〔をあげるよ〕、といってあげる、人が歩いていたらこれ、といってやる。彼らはとても興味を示して、こうやってのぞいて見て、穴を見て、もらってとても喜んだよ。そうしていて、また少したばこをやめかけていた。でも、後になって、まあねえ、兵士というのは吸わない人もいれば吸う人もいる。お互いに呼んでは「たばこを吸え、君、さあ、これ」といってね。そして、また冬の寒さの中、土木仕事をしている、そこには体を温めるという場所がある。そこに入って座ると「おまえ、ここから取って吸え」という。そしてくだらない話などをしては座り、暖まるという目的でそれを少し吸ったりしていると、だいたい喫煙の道に入っていくんだよ、それは。

D：たばこはロシアから入ってきていたんですか？ 例のパイプたばこは？

B：そうだよ。ロシアから入ってきていた。50何年、50年代に中国からパイプたばこというのが入ってきていた。それは緑のパイプたばこ、緑色のとても油っばいそういうたばこだった。そして、油は入れ物の外側の紙や、その中のビニールなどから染み出していた、そういうたばこが入ってきていたんだ。もっと昔には大昔の老人たちとはいうと、大昔の中国パイプというものを好んで求める。それはかなり目の細かい油っばいもので、つまむと固まってしまう、そういうたばこだったことが思い出されるよ。そういうものを吸っていたんだらう。一部の人は咳が出るってロシアの赤いたばこを吸う。ほとんどはその中国パイプたばこから離れていって、かなり年月がたったようだ。そしてその後49年に人民共和国として革命国になってね、中国は。そして私たち両国と仲良くなって。後には商売や取引などいろいろなものが発展してきて、商売上、そのたばこなど様々な物資、中国製品がたくさん入って来るようになったんだよ、その時代は。そして大量の中国製品で満たされたんだ。中国の絹・ちりめんといって、妻子たちは中国の絹やちりめんを着飾るんだ。そして一般に中国の絹・ちりめんなどはロシア製のものよりも質がいいといわれていたんだよ。私などはどうなのか知っているわけじゃあないがね。質がよくて中国製品はすばらしいという。昔のものはよかったと、また不満そうにもいう。後になると、だいたいロシア製の質がよくなったんだよ、そうだろう。

D：そのようにいわれていますね。

B：そして鉄はというと中国製の鉄はだいたいそのうちに折れてしまうことが多く、硬度が低い、そういう鉄だよ。それに比べてロシア製の鉄は硬度が高く、鋼鉄が多い、そういう鉄なんだよ。ロシア鉄はいいといわれていた、そうだったんだよ。

D：あなたがウランバートルでガンダン寺に行ったとき、どんな様子でしたか。その時代、法要などはおこなわれていたんですか、そのあなたがいたころは？

B：もちろんおこなわれていたよ。今とまったく同じ、ずっと同じようだったよ。まあおもしろそうだというそういう感じで見に行ったんだよ。祈ろうなどとは思わないよ、若かったからね。また、宗教は不必要だという考え方が身についていたからね、高慢な感じでね。まあ一度は入ってみよう、そういう感じで行ったんだ。だいたい今の、今あるこれと同じだったよ。

D：若者や年配の人びとが法要をしていたんでしょうか、若者がいたんでしょうか、そのとき？

B：仏教学校が設立されていたよ。

D：はい。

B：それでその若い仏教学校の学生がいた。彼らが参加していたよ。年配の人たちはかなりいたよ、ほとんどが年配者だった。そして後になって、その仏教学校が作られて、若者が入り始めたんだらう、仏教学校で学んでいるってね。何年に設立されたの

か今わからないけれどね。仏教学校で勉強しているという若い僧にたくさん会ったよ。そんな感じだった。

D：その若者たちは外を歩くとき、僧の服装で歩いていたんですか、あるいは普通の服だったんですか？

B：一部は僧の格好だったよ。僧の格好で歩いているから、ああ、僧だとわかったんだよ、もしも普通の格好でいたらわかりっこないからね。僧服を着ていたんだよ。

D：ダライ・ラマが初めてモンゴルを訪問したとき、あなたはそのことについて知っていましたか？

B：噂に聞いていたよ。そのときは草原にいたんだよ。最初だけでなく最後のときも、だいたい行って見たことなどないんだよ。テレビで見るだけだ。

D：内モンゴル人はモンゴルに対してどんな感じだったんですか、あなたが行ったとき？

B：とても親しく感じていた、モンゴルに対してとても親近感を感じているようだったよ。そして、私はモンゴル人だといって、ふるまってくれるんだよ。一般にとっても親しく感じているようだったよ、たくさんの人にあっただけど、ほとんどがね。

D：あなたの世代は内モンゴルについてどういう理解をしていたんですか、当時の人びとは一般に。

B：一般に、内モンゴルはまあねえ、わが同じモンゴル人、分断された一部が内モンゴルだといわれていた、そういう理解があった。後になって、例の文革が起こって、モンゴル人たちをひどく迫害して、ひどいことをされたようだと言われたり、書かれたりした。それは真実だっただろう。小説までもが出たよ。『踏むべき土地のない足』という何という作者のものだったかねえ、そういう小説なども出版されたよ。内モンゴルのある知識人…さまざまな迫害にあって、外国に逃れ、最後には戻って来るといって、そういう小説だった。それはわがモンゴルの、こちら、ゴビが舞台だといったけれどね。そういう『踏むべき土地のない足』という本が70年代に出たんだよ。読んでいたんだけど、今は忘れてしまった。私は小麦工場の労働者だった。そしてそこに行くところある若者が本を読んで座っている。私の同年度の兵士、職人をしている彼が部屋に座っている。本を読んで座っているんだよ。何の本だろう、と見てみると、その本なんだ。それでそれを取り上げて「おい、その本、俺が今読んでるんだ」「すぐに返す、もってくるから」といって〔取り上げた〕。そして夜通しそれを読んだよ、眠らずに読んだ。朝の8時になって、読み終わった。お茶を飲んでそれを返しに行った。

D：その当時、たくさん本を読んだんでしょう？

B：ああ、私はたくさん本を読んだよ。本から離れない。また多くの本を持っていた。後になって田舎に出て、ソムの中心地に置いて行った、それでなくなってしまった。なかなかいい、すばらしい小説など、いろいろな本、かなり多くの本をもっていたんだよ。労働者だった者としてはかなり多くの本を持っていた。

5 文化躍進運動

D：昔、文化躍進運動というものがおこなわれましたよね？

B：ああ、そうだよ。それはまあねえ。それは正しい活動だったよ。

D：それはどんなものだったんですか？

B：それはまあ、遅れた状況からの脱出だよ。一般に遅れていたからね、私たちというのは。たとえばゲルを塗装する、そして埃や汚れを洗わせる、そういう活動だよ。それはだいたい正しい活動だった。必要な活動だったと私は思っている。一部の粗野な感じの人びとはつらかっただろうよ、50何年には。それを消し去る文化躍進運動というのがおこなわれたんだ。それというのはかなり家庭や人びとを清潔にし、かなりよくなったんだよ。それは仕方ない、必要な活動。私が小さい頃、私は祖父母と暮らしていたと話しただろう。うちの祖父母の2人は結婚して最初に持ったゲル、それでずっと暮らしていたんだよ。それを新しくする、建て替えるというような考えはない。必要がないからね。建てることができている、暮らせている、とね。そして竈ではなく、昔ながらに火をそのまま燃やしていた、竈はないんだ。そうするとゲルは煙にまみれていて、煙にまみれ続けて、天井のオニ（屋根棒）などはねえ、例えば移動するときにオニをこうやって取り外す。そうすると煙のあれが手にくっついてね、こうやってべちゃべちゃとくっつくんだよ。ずっと煙の中であって、こんなに分厚くその汚れがくっついているんだよ。そしてゲルのフェルトのツァヴァグ（天井の内側の覆い）がある、内側の。それは煙の汚れがついて黒く、分厚く固くなってしまっている。そんなふうだったんだよ。そして、そういうことから抜け出すために、それらを洗わせ、削らせてまた洗わせる、そしてできる者はペンキを塗る、余裕のある者は塗装するんだ。そしてそうやっているうちに、すべてを塗装するようになって、天井のツァヴァグはまた洗ってね、すこしきれいになって柔らかくなる。そうしているうちに清潔になっていく。そして内側の白い覆いの布をつけるようになる。外側にも白い覆いの布をつけるようになる。それはまた、そうだね、生活は向上している、向上しているということだよ、それは。どれほど貧乏そうでも、また向上していたんだよ。またできる者はベルジェーフ（雨を通さない生地）を持つようになる。最初、一時期このベルジェーフの覆いが出る前、このあたりではハンガイ地帯だから杉をこうやって薄く切って、1.5cmだっただろうか。そのくらいに切って、板の壁といって、ゲルの外側を巡らせて…立ててこうやって四角にして固定する。第一には雨や砂から覆いを守っているんだよ、第二には覆いの布がよくない、粗悪な布だったんだ。こうして板の壁というそういうものが使われていたんだよ。60年まで使っていただろう。64年、65年くらいにそうこうしてそれはなくなっていったんだ。そうだったんだよ。生活の向上に従って、また人の生活が少しずつ少しずつ。『清きタミルの流れ』（長編小説）にあるだろう。誰々のゲルが最初は茶色だったのが、後になって天井が白くなって、

最後には外側すべてが白くなって。それはだいたいそういう活動になったんだよ。また、皿やお碗を洗わないんだよ、年配の、そういう少し粗野な人たちは食べるたびに皿やお碗を洗ったりはしなかったのを、洗うようにさせてね。そして一般に下着はつけなかったのを、下着のシャツを着るようになり、パンツをはいていなかったのをはくようにさせて…。そして布団には白いシーツをつけさせるようになって。私たちが文明化した活動だったんだよ、それは。大きな成果をもたらしたんだ。私たちはそのおかげでとても文化的になり、かなり清潔になった。その後60年代くらいまで続いたよ、その文化躍進運動は。また、本を読む。また後になって少しましになってくると、人びとがましになってくると、文化的な面に入り、本を読ませる、読んだ本の要旨、記録をさせるようになった。名前などを書かせて、順番にしてこうやって書かせるような様式になって、人びとをまた検査するんだよ。60何年のころには、またそういうふうになった。それでみんな本を読み、こういう本を読んだとってね。だからまたそれもよかったんだよ、そうだろう。検査してまた、力づくで強制的だとはいっても、また正しい問題だったんだよ、それは。人の頭に本が入る。本を読んだ人というのはまた何らかの見解を持つことになる。本のあちら側こちら側にある意味は人にたくさんのものを与えてくれる。ああ、そしてその時代というのは文学は一般に、生活を学ばせた、良い悪いを教え、学ばせる、そういう作用をしていたんだよ。それはまた正しいことだよ、人の教育にはとても必要だ。その当時、いろいろな悪いことなどは映画などには出てこない、小さな劇などには出てこない。「ああ本当によかった、よくぞ敵を殺した」というように、そういう悪いものを見ると、影響されて人の気持ちにもそういうものが入ってくるんだよ。一部の人が、一時期、だいたい映画を見て、それを見て、真似して事件をやったんだという、一時期ラジオでよくいわれていた。だが、今はそれはなくなった。そうこうしていてやめたんだろう、本当になくなったのか誰も知らない、わからないけれどね。

6 民主化後の生活

D：80年代末、90年代初め民主化運動がおこったとき、あなたはどう思っていましたか。このあたりの人びとはだいたいどんなことを話して、あなたはどう思っていたんですか？

B：最初はというと、私はソムの中心地に行ったんだ。そうして、テレビを持っている家に入ったところ、テレビにそれが映っている。最初の民主連盟の最初の集会だといって。おそらくほぼ最初のことだっただろう。かなりはじめの方の。そういうことがテレビで流れた。そこにうちの工場長がいたんだ。「違う、これはなんと奇妙なことだ、何ていうことだ」。私は少し、驚いて「私たちというのは民主化した国家だろう、私たちは民主国家だといっているのに、民主化した中にまた民主化するといっている、

これはいったいどういうことなんだろうか」, 私はこう考えていた。そして, そこである知識人の若者から, 彼は若いからまた民主化の空気が入りきった人だったんだろう。もともと, うちの工場で管理職などだった技師だった人だよ。後になって, ウランバートルで高い職務をおこなうようになったんだ。大統領顧問になったようだよ, エンフバヤルのときにね, 今はやめただろうよ。今は定年退職しただろう。その人が「違う, これはだいたい信仰を禁止してしまって, すべての人から信心や信じることをなくして, こんなふうにしてしまったから, 今こういういろいろなことが起こってきたんだ。いろいろな事件が起こるようになったんだ。お互いを尊敬しあい, 信仰し, これはいい, これはいけないというそういうものがあるようになれば, たぶんよくなることだろう」と話していた。そして民主化運動の彼らに親近感を持って, それはよくなるよ…考えていたんだろう。だいたい人びとはさまざまな見解をしていたよ。一部は革命党…これよりすばらしいものはどこにあるのか, 一部は「革命党はもういらない, 私たちの祖先を虐殺した, 銃殺した。うちの家畜を没収した, こうした」というていた。彼らはさまざまなやり方で遊牧民の家畜を50頭の家畜だけを残して, すべての家畜を持って行ったんだ。それはすべての遊牧民にとって, また大きな衝撃になったんだよ。そのあと, それを取り戻して, 家畜をもらって, 放牧をしているんだ。また, ネグデルの賃金というものをもらう。それはたいしたことはないよ。一般にどのくらいもらっていたんだろうね。だいたい50, 60トゥグルグ。そしてかなり多かったとして120くらいをもらえたんだ。私は今, ネグデルでかなり長い年月家畜の放牧をした。すべての家畜を渡して, そして国营農場になったんだ。1年に何頭かの弱い子ヒツジを成育していた, ある春にね。そして, 無事に育てて引き渡した。そうしていたよ。とても大変だった。だいたい家畜の利益や何かは私たちの時代というのは, 社会主義時代というのは, 家畜を放牧して, 搾乳をしても, その労働の賃金は安かったんだよ。だいたい低い…まあ国营農場はネグデルに比べると給与がある, 国营ということからも高い給与だった, 300, たくさんの家畜, 1000頭近く放牧すると, 700, 800トゥグルグをもらっていた。そんなふうだったよ。国营農場はよりよかったんだ。そして私は第5級の溶接工だった, 小麦工場では上級の部類だったんだよ。第6級はもらわなかった。第5級で働いて, そして辞めたんだよ。8, 9級だったかな。遊牧民になることにしたんだよ。そして出るときには私はその級に応じた給与, すべての勤務時間を働くと, 毎月530いくらかの, 560トゥグルグくらいをもらっていた。時間が少ない場合は, 400トゥグルグくらいをもらうんだよ。それは労働者の給与としては悪くなかった。上の方の給与だよ。うちの妻は, また商業機関でまた長年働いた。販売係から経理まで勤めたんだ。また400トゥグルグくらいをもらっていたよ。ある月には900トゥグルグを超える給与, ある月には800トゥグルグを超える給与をもらう, 2人ともそういう給与所得者だったんだよ。それが, 2人で, 突然遊牧民になって, 田

舎に飛び出したんだよ。人びとはいろんなことをいっただろう。この2人のようにばかな者はいないよ、とね。そして草原に出て家畜を飼って。ウシを得た。3頭の乳牛を搾るんだよ、妻は。私はまたそれ以外に自分の7、8頭の乳牛がいる。それらを妻は1人で搾る。私はその何頭かのウシと格闘してね。ウマ、ヒツジは…だいたいウシが合っていたんだろう。乳牛やメスウシ（出産していない）を持っていて、80頭のウシがいたんだろうか、100頭近くのウシがいたんだろうか。そして最初の月の給与をもらう日になった。さあ、かなりたくさんもらえるだろうと思って、走って行ったんだよ。もらってみると、放牧と搾乳で合わせて200トゥグルグに満たないんだよ。

D：国営農場の家畜を飼って？

B：小麦工場の補助産業だよ。そして少し不愉快に思ったもんだ。200トゥグルグに満たないお金のしかならないんだ。わずか200トゥグルグ。その上家畜から取れる利益を利用するといっても、それはそんなにもうかるものではない。そういうものだった。でも、一度決めて辞めると行って出て家畜を飼うことになった、遊牧民になったんだから、また戻りますとはいわなかった。私は47歳で遊牧民になったんだよ、まだ若かった、そして3年がたって、民主化の風が吹いてきて、農場になって、例の多くの子どもを持つ女性たちをまとめて早期退職させたんだよ。そして例の定年の年齢の人たちを年齢制限を低くして、たくさんの人を失業させたんだよ。それに入ることになってしまった。私も50歳になろうとしていた。50歳でネグデルで働いていた者、50歳になると定年退職するように、という法律が出た。それならば早く退職して、年金をもらおうとね。そして走って行って、小麦工場に行って給与のあれやこれやを集めて書き込んだ。そして、会計から給与などの表が出てきて。そして年金が決められたんだよ。91年に入っていた。91年に50歳になっている、そして700トゥグルグを超える年金。貨幣が倍になっていたからね。（為替相場の自由化で通貨の切り下げがおこり、急激なインフレとなった）。もともとは300トゥグルグくらいの額で、それでも多い年金だよ、高い額だった。とにかくそういう金額が決められたんだ。まあいいだろうよ。自分の名前でこういう金額の年金が決められた、その上に自分の名前の上に家畜が移され、他に年金をもらって、こうやって家畜を飼ってずっと暮らすんだ。そうしていたところ、例の20号決定が出た、後になって、ときどき年金は増額するのに、私ののは増やされない。どうしたんだろうと思った。それは個人で何頭かの家畜を所有しているからなのか、田舎にいるからなのか。さまざまな方法で申し立てて、わずかな回数、増額された。そして最後には81,000になって、最近のこの均等というやり方で95,000になってね、そうになっているよ。私はひどく損をして残されたんだよ。その高い給与のときには下へ下へと下げられて、妻と私は2人して下げられた。わずか81,000トゥグルグをこうやって、こうやって下げられるんだよ。その訳はわからないんだ。

D：そして、例の家畜の私有化とって、あなたに家畜を個人財産としてくれたんです

か？

B：いいや。

D：くれなかったんですか？ それではあなたは自分の力だけでこうやって1,000頭所有の遊牧民になったんですね。

B：私には、そう、例の補助産業の家畜を少し分け与えた、くれたよ。いや、違う、補助産業の家畜はくれなかった、いや、遊牧民に1、2頭のウマ、3頭のヒツジをくれたかな。ヤギはなかった、そうだったよ。そしてうちの国営農場は、全く何もくれなかった。国家の核となる群れ、例の改良したものだったから。ヒツジはというとハンガイ種のヒツジになっていた。そしてその時代の長はなぜ、このあたりの民衆もまた、それらを分け与えろ、もらおうと追求するということはしなかった。いい争いもしなかった。そんなふうだったよ。その農場の家畜の…そのあと個人の会社になって分割して、いくつかの会社に分かれてしまってね。それらが家畜を分けて。遊牧民は前のように給与をもらって、その上に家畜をもらって、よくなるだろうと思っていたのに、そうはならなかった。そしてだいたい遊牧民はというと家畜を分け与えろ、おまえたち、これをよこせ、などとそうやって叫び立ち上がりはしなかった。だからまったく分け与えられず、そうして過ぎてしまったんだよ。そして過ぎていって、後になっていろいろなルートから、その会社などはあちらこちらに売り払ったんだろう。一部は移動させたらしい。ある長やその部下、いろいろな人が隠れて取ったようだよ。こうやってなくなってしまった。ハラホリンの者たちはそんなふうだったんだ。最も子どもが多い、最も長い年月家畜を飼った遊牧民たちには16頭の家畜を与えたんだ、国営農場は。私は小麦農場の者だったから、ただ1頭のウマ、2、3頭のヒツジ、こうして終わっていったんだよ。そんなふうだ。だからハラホリンはまったく家畜を私有化しなかった。このハラホリンの家畜というとだいたい民衆が自分たちの力で、自分たちの力だけで育てているものなんだよ。ネグデルはというと、その後、持っていた家畜をそのまま取って残したんだよ。うちはというとこちら側でホジルト・ソムと隣接している。私はちょうど境にいて、今は家畜をあちらこちらに移動させている者なんだよ。そしてこちら側の人びとというと、見ていると、こうやってこんな家畜をもらった、そしてそのたくさんの子どものものをまとめて、上から追加してもらって、こんなふうにもらっているんだよ。ハラホリンはそういうことなどはない、こうして終わってしまった。

D：ネグデルの家畜はそうやって分散して？

B：そうだよ、人びとに行き渡ったんだろうよ、民衆に。国営農場の家畜はだいたい消費されてしまった。さまざまな2、3の会社だろうか、いくつかの会社に分かれた。そしてその会社が分割して。そしてそれを売り払って、あちこちに渡して、いろいろなことがあったんだろうよ。私たちは中に入ってそれを見たわけじゃあないよ。で

も、そういわれていたよ。そうやって終わったんだよ。

D: では、国営農場は家畜を配分してくれず、ネグデルは遊牧民に配分してくれたんですね。

B: うちのハラホリンはくれなかった。その他の国営農場がどうだったのかは知らないよ。ハラホリンは…。

D: このあたりはそうだったんですね？

B: このあたりのは、まあねえ、遊牧民に16頭をくれただろう。それ以上はなかった。

D: 社会主義時代、放牧地の分配、今では放牧地の奪い合いなどが起こっていますが、そういうことがあったんですか、一般に放牧地についてはどうでしたか？

B: いいや、その時代というのはいたいね、一般に国営農場の家畜だけがいる。国営農場の家畜はまた頭数制限があった。個人の家畜というとそれはない。世帯ごとに16頭の家畜。そんな数では何もおこらないよ。そうして、中心地に暮らしている者たちはほぼ家畜を持っていない。私のように地方の者たちは少しの家畜を持っている。彼らは両親や兄弟のところに家畜を預けていてね。少し遠いところから来た者たちはそんなに家畜を持っていないよ。

D: 今では家畜の放牧地の問題が出ていますね、一般に人びとは奪い合っているんですか、どうですか？

B: 問題になっているよ。うちのこのあたりではそれほど奪い合いにはなっていないよ。でも、一般に家畜の放牧地は問題にあっている。そして放牧地は不足してきている。家畜が非常に増えた、一番の原因は家畜頭数が非常に増加したことだ。ヤギがととも増えた。

D: ああ、ヤギはお金になるといって？

B: そうだよ。一般に家畜は増える方向、多すぎるんだ。だから家畜の放牧地の問題は困難になっている。

ああ、それで家畜私有化のときにはもらわなかった、以前あった家畜を育てて、そうやって暮らして来たんだよ。

D: そうですか。あなたにはどんな家畜がいますか？

B: そうだね、ウマ、ウシ、ヒツジ、ヤギがいる。

D: 家畜の牧草地は今、大変な状況になっていますか？

B: 大変だよ。一般に降雨が少なくなっているからね、よくない傾向になっている。うちのこのあたりは、ハンガイの草原地帯なんだよ、ハンガイ地帯。それなのに、少し早魃が続くと、草が生えないんだ、よくない傾向だ。そして90何年には砂漠化、それが北側に広がってきている。何年後かにはハンガイ地帯に進んで来ると新聞に書いてあるのを読んだよ。このあたりはさすがにならないだろうけれど…。

D: そうでしょうね。

B：そのように私は思っているんだよ。でも、とても早く、目に見えて、砂漠化している。昔生えていた植物、草、花など、知っているそういう草や植物が今はなくなっているんだよ。すべて消えてなくなってしまうている。今このあたりではツァヒラーという、テヒ・トホイという家畜をよく太らせる草、それは敷物を敷いているように生えていたんだ。それもまた今ではまったく見かけなくなった、そういう例があげられるよ。

D：それはどうしてなくなっているんですか？

B：まあね、湿り気がないからね。

D：ああ、雨などが降らない。

B：降雨がなく、乾燥してくると、草は水分や湿気を余分に使うんだよ。そして一般に湿気のない乾燥に強いロー *luuli* (アカザの仲間、学名は *Chenopodium*)、シャリルジ *Sharilj* (ヨモギの仲間、学名は *Artemisia*) そういうものが生える状況になっている。だが、一部ではローリ、シャリルジさえも育たない。ローリ、シャリルジが生えているというのは、どういうことかという、ハムフル *Khamkhuul* (オカヒジキ、アレチヒジキの仲間、学名は *Salsola, Corisoermum*) という草〔灌木〕がある。それがより多く生えるんだ。それは家畜が食べるには太くて固い。非常に空腹な家畜ならばそれを食べるだろうよ、それでも一応家畜のエサにはなるんだろう。一般に細いよい草は生えてはいるようだけれども、それはとても少ないんだよ。そして生えている場所の土地の広がり、植物の広がりについていうならば、アニス *Alirs*, (コケモモ、学名は *Vaccinium vitis-isoaea*) の葉っぱのようにこうやって密に生えるんだ、うちのこのあたりではそういうふうには生えていた。それが今では、茂みが少しずつ5、10cm くらいの距離でぼつぼつと生えているだけだよ。そしてそのあいだには土が出てしまっている。そして強い風がふくと、土が舞い上がる、地面に湿気がないから砂が舞い上がってね、風が吹くたびに草の周りの土が風で飛ばされて。そして、生えている草の根が出てきてしまう。生える生命力も弱くなる。そして生えなくなる。溝やくぼんだ場所などの上側は砂で覆われてしまい、植物は砂を突き破って出ることができない、そしてそこもまた砂になっていく。

7 民主化以降の宗教復興

D：ここのシャンハの寺院はいつ再興されたんですか？

B：シャンハの寺院、今ここにある寺院は最近再興されたんだよ。最初にはその「パロオン・フレ (西の寺院)」という、それはというと初代ボグド・ハーンが11歳のときに作られたというよ、そう話されているようだよ。そして後になって、ある貴族の僧が今ここにある堂塔などを建設して、そこに自分も暮らしていた、そういう寺なんだよ。それより前のパロオン・フレというのは、今は跡だけがある、それ以外は何

も残っていない。

D：1990年以降、再興されたんですか？

B：再興された。ここでは3つの堂塔が再建されているよ。もともと完全に破壊されてはいなかった。真ん中の、3つの堂塔の真ん中側のものは、こういう高い、2層のそういう構造なんだよ。私が学校で学んでいるころは、屋根を外して捨ててしまっていた。後になって、こうやって屋根をかぶせて、こういう丸い屋根にして1層にしてね。1層にしたのにこうやって板で屋根を作って、そして、その後は組合の商品倉庫や、原材料の倉庫にしてしまったんだ。そしてその3つの堂塔は、組合の所有物として残されたんだよ。そうやって残っていて、その後、ネグデルが解体されて国営農場と合併した。シャンハもほとんどソム中心地という意味を失ってきて、ブリガードの中心地のようになってしまったんだよ。そんなふうになっていたんだ、住民たちは高齢の、その昔は僧だった人たちで、いつのころに住み着いたのか、そういう年をとった人たちがいたんだ。後になると、生活のために仕方なく、彼らの子どもたちはソムの中心地に移っていく。そして、それに従って、またいろいろな物の近くに暮らすために、こうやって移動しつづけて、人が減り続けて、そして下の堂塔はなくなってしまった。その上の中心地というのは、ブリガードなどの中心という形で、まだ状況はそう悪くなかった。後になって、例の寺院を復興させることになって、復興された。その端の2つの堂塔はまだ無事だったが、真ん中のものは屋根が壊れてしまっていた。そして2つの小さな端の堂塔を少し修復して、そしてそこに入って法要や読経を始めたんだ。その後、その真ん中の堂塔を以前の状態で再建して、そして3つの堂塔になったんだ。これはまあ大丈夫だろう、まさか壊れることはないだろうよ。こちら側のそれは、私がさっき話した、寮の子どもたちのあれだったんだよ、台所だったという2つの小さな堂塔だった。その2つは後になって、ネグデルの倉庫にしてしまっていたんだよ。そしてそれがどうなったのかは、まったくわからない。どうしたんだろうかという、ハラホリンへと運び、そしてハラホリンに建てていた建物へと壊して運んで、そしてレンガは利用して、礎石はというと、このクラブ（集会所）の玄関の階段があるんだ。これはそのシャンハ寺院の堂塔の礎石、そしてエルデネ・ゾー寺院の礎石などなんだよ。これらを持ってきてこうやって利用したんだ。

さあ、そのシャンハ寺院は後になって、80何年、70何年になって、外側というと、生レンガのこういう石造りの壁があったんだ。外側には鉄飾りのあるこういう青い石で作られていた。そして中には生レンガの石で作った、そういう壁を持っていた。それまでも取り壊してね。ここに、うちのこのあたりに、後になって功労建築者になった人がいた、ここにいた、建築のゴンボという老人がいたんだ。彼がこの建築の仕事をしていた、ほとんどの破壊作業をしたんだろう。そして、こちら（ハラホリン）に運んで来たんだ、党指導部がそうしろといったんだろう。その時代というのは党が真

っ先に語られる、そして国というのは後で語られるもんだった。その宗教の教えを普及させているものを破壊しろ、といったんだろう。そして破壊して、そして運んで、運んで。もともとこれはネグデルの中心地だったんだ。感じのよい管理部や何かのある、比較的大きなクラブを持っていて、丸太で建てられていた、細い若い木で建てられた、大きな、田舎のソムとしてはとても立派な、感じのいいクラブなどがあった。そして学校など、いろいろなものがすべてあったんだよ、ネグデルの中心なんだからね。そうだった。そして、例の国営農場と合併したことで、後になって、それらすべてを壊して、どこに運んでいくのか、あちらこちらに運び去って、そうしてなくなってしまったんだ。そして後になって寺院が再建されて、また人びとも多く住むようになって、今では1つのバグの中心地になっているんだよ。そしていろいろな子どもたちを寺に入れて、またかなり規模も大きくなって、一時期を思うとまた人びとも暮らすようになった、それなのにまた再び移動してしまったよ、こちらに戻ってね。そこに今は店が1軒あるだろう。そこはここよりも値段が高いよ、ここから運んでいくものだから。あれやこれやいろいろ障害になるものがあるんだ。そして今はわずかな世帯、20いくつもの世帯があるようだよ、ひどいね。20軒くらいの家があるようだ。そんなふうになってしまったんだよ。

D：再興された寺は、今、活動していますか？

B：活動しているよ、少ない人数で。10何人かの僧、登録上は20何人の僧がいるんだよ。年配者はそこに住持しなくなった。比較的若い、若者や子どもたちがいる。昔そこにいた、最初に寺に入っていた者たちは今は偉い僧になって、ウランバートルに行ってしまった。ほとんどが都市に。一部は仏教学校の教師にまでなっているようだよ。一部はいろいろな寺にいるんだろうよ。そうだろう。今ではここは僧になって住持するには、世間から隔離された場所だろう。進歩やさまざまな物からも遠い。恒常的に電気はあるから、テレビなどはある。そして、その僧というのは寺に住持して、こうやって法要をおこなって、こうやって暮らしている。もらえる給与やお金はわずかだよ。2万、3万トゥグルグあるかどうか。そんな状況で若者たちがどうやってここに定着するっていうんだ。その上、妻子を持った、子どもができた。自分を養い、その上家族を養うためのお金が必要になってくる。そうしてウランバートルに行ってしまうんだよ。ゲセル寺の近くにたくさん住んでいるというよ、うちのこのあたり出身の僧たちが。そしてあちらこちらでいろいろな寺に住持するんだという。なかなか優れた僧たちがいるんだよ。

D：あなたは時々寺院などに行って、読経させますか？

B：させるよ。

D：どこに行って読経させますか？

B：シャンハで読経させているよ。ここ（ハラホリン）でも読経させる。2カ所だね。

シャンハツまりバロン・フレというの、私の先祖たちが暮らしていた寺、小さい頃仏弟として暮らしていた寺。

D：あなたの？

B：父や兄たち、先祖たちはこの寺に暮らしていた。そういう意味で、私はまたここに行く。だいたいがうちの所属していた場所だからね。ここに（ハラホリン）に行くというのは、ここに定住しているという理由から。どちらにも同じように参拝するよ。

D：今はまた社会主義時代を思えば、宗教や信仰は少しは広がってきましたよね。

B：おお、広がったよ。宗教はきまり通り進んでいけばそれはそれでいいと思うよ。一部ではまた少し誤って進んでいるといたくなるようなことも見かけるがね。宗教という名前を使っている者がいるのはどうしたもんだらうかね。いろいろな寺に所属せずにいる僧がいるようだね。彼らはまた、自分の個人的な利益を見て、でもまあ、自分たちのできることをしているんだらうけれどね。だからそういう僧のところに人びとが通っているということなんだらう。もしも、何も知らないとしたら、人びとがどうして通うものだらうか。でも、私の考えでは一般にある寺院の所属になって、そしてそこで経典を読み、信仰しているのが、本来は適しているように思うんだよ。私としては少し批判的に見ているよ。一部は個人の利益や興味ばかりを考えているんだらうか、でも、自分ができているのなら、まあ、それでいいのかもしれないね。彼らはまったく住持する場所がないんだらうよ。市場経済化したからこんなことになっているんだらうよ。

D：今、この僧たちは仏教の、一般に仏教についてあれこれあるんでしょうか。さまざまな教えなど、今人びとに布教するなど、そういうことをしているんでしょうか？

B：行かないよ。うちのこのあたりでは、そういうことはしていない。民衆が自ら、自らの信心で寺に行き、徳のための法要をさせて、助言をもらって、こうやっているんだよ。

D：あなたは仏教というと、こういう宗教なんだという、どういう理解をしていますか？

B：ああ、まあねえ。これはだいたい仏教というのはもっとも慈悲深い、もっともそういう宗教だよ。また科学ということもできる、仏教とはそういわれているが、それは本当だろう。だいたいどの宗教でもいいんだよ。ときおり本や何かで宗教の教えなどを見かけて、ときどきそれをめくってみると、人の幸せのためにと、すべての宗教はそういうよいもののようなだよ。そしてだいたい『オチル・オクトロクチ』というアメリカのある仏教者が書いた本がある。昔の『ドルジゾドヴ』だよ。それを自ら翻訳したんだよ。『ドルジゾドヴ』を利用して、非常に成功している。これは最上のものだと、そういわれている。この仏教の本というのは、モンゴル語で読むと私たちは理解できない。大きな哲学の非常に深い意味のある本、それはほとんど理解できない。少し筋を追ってみて、追いかけて、先に進む人ならば、理解できる。私のようなこうい

う一般民衆はまあねえ、正しい宗教だと思っている。だが、一般にどの宗教であっても、人の幸せのために祈るものだよ。それをおこなう方法が違うんだと、その人は書いていたよ、遂行させる方法がね。だいたいモンゴル人は仏教を信じているのが正しいことだと私は思っている。いろいろな宗教が入って来ているよ。いろいろな宗教が入ってきたといわれている。例のイスラム教などがあるのかどうか、よく知らないよ。キリスト教はかなり入ってきているようだね、いろいろと。

D：そのようですね。今ではかなり入っていますね、また。

B：そう、かなり入ってきているというようにいわれているようだね。引きつける方法がいろいろあるんだろうよ。どうかというと、例えば家のない人、飢えた、貧しい人たちを連れてきて、食事を与えるんだ。またああいうこともするらしいよ、体の不自由な人たちをかなり集めさせているというようだ。そういうことで人を引きつけている。仏教などはそういうことはしない、自らの信仰心で人びとがやってくる、そしてまあこれでいいと考えているんだろうよ。そのキリスト教を信じている人びとはまた強固な信仰を持っているようだね。うちの妹の2人の子どもは話すことができないんだよ、ウランバートルにいる。その2人はキリスト教の教会に通っているらしい。仏教はいらないんだという。1人はキリスト教を特によく学んでいるようだよ。自分の頭で物を考えることができているんだからね。彼らから得られること、得ることが1つある。その1人の息子が結婚して、家を持った。ウランバートルにいる。そこに訪ねて行ったんだよ。だいたい人はそれぞれ違っているものだ。その若者たちはみんな話すことができない、例の体の不自由な人たちの学校にいて、そしてそこを卒業した男の子たち、女の子たちなんだよ、大勢のそういう話すことのできない子たちが来るんだ。そして後で、彼らを入らせるんだよ。普通の人たちと一緒にさせると彼らは何もできなくなってしまう。そしてクラスメートは結婚式の一番後になって全員で入ってきた。彼らというのはこうやって、大勢で笑っているんだ。私はというと横で話すこともできない。入ったとしても何にもできない。ときどきそこに行く、あちらこちら行くんだ。彼らはみんなで一斉に笑ってね、とても楽しく、お酒を飲まない、まったく飲まないんだ。そして飲み食いして、ジュースなんかを飲んで、そしていい食事を作って食べて、そして騒いでいるんだよ。酒は飲まない、酒は悪だと、まったく飲んではならないんだよ。少しは飲むかもしれないけどね。彼らというのはその中で1人飲むことなんてできない、でも、外では飲むんだろうよ。とにかく常には飲まない。彼ら若者たちはとてもいい、一番重要なのは酒を飲ませないことだ。自らの気持ちを禁じる、アルヒは必要ないと、そういう理解が生まれたように思われたよ。それはまたいいことだよ、それはまた適しているよ。聞こえない者たちがアルヒを飲んでいろいろなことになっていくとしたら、どうなるだろう。とても知恵のある学のある者であってもアルヒにおぼれてしまうとどうなっているか、そうだろう。そう思えば、

彼らをまた1つ正しい道に入らせたんだと、私は良いことだと思っているんだよ。他のことは何もわからないよ、聖書などはわからない。それどころか自分の宗教の経典すらも知らないんだからね。

D：田舎などでも今キリスト教の人びとがいますか？

B：いないよ。うちのこのあたりは、この中心地には1つあれがあるというよ。キリストのそういう支部や何かが。教会といっても普通の柵で囲まれたもの、そういうのがあるんだというよ。どんなものがあるのか、私は興味がないんだよ。知らない、ただそういわれているよ。教会なんかを回ってどうこうする、そういうのがあるようだね。

D：多くの宗教がはいってきていますね、モンゴルに。

B：モンゴルにはいろいろな宗教があるようだ。よくいわれているのはモハメドだったか、イスラムだね。知っているのはキリストとイスラムの2つだけだね。4、5つくらい宗教が入っているそうだね。それらやその他のものがどのくらい入ってきているのかはよく知らない、違いはよくわからないよ。イスラムはカザフ族が信仰しているというね。

D：一般に、さまざまな宗教があったほうがいいんでしょうか、あるいは以前のように仏教だけがあったほうがいいのか、どうなんでしょう、あなたはどう思いますか？

B：まあねえ。折り合ってね、宗教間でうまく適合して、よい関係を築いて、上下になることなく、同じレベルで、そうやっているならば、それらを厳しく追い払ったり禁じたりすることはないだろうよ。ただ、様々な宗教的な分裂や争いなどについていろいろなことがいわれている、そんなことになってくるのだったら、またよくないことになるよ、そうだろう。そうすることなく、みんな同列でこうやっているのだったら、何もすることはしない。そのまま一緒に存在していればいい、それをあれは悪い、これはいいというように、追い出したりする必要はない。私にとっては必要ないね。また1つの亀裂を生むことになるだけだろう、そうだろう。

D：あなたの世代では、結婚するとき両親が引き合わせてくれていたんですか、自分で見つけていたんですか？

B：自分で見つけるよ、自分で。その時代というのは両親が関与することはない。私たちの時代というのは、そういうことはとてもオープンだったんだよ。いろいろな金持ち、貧乏の違いなどもない。みんなできる程度と同じような結婚式をしていたんだ。もちろん、金持ちの人たちはいたよ。でも、うちの田舎ではだいたいと同じような生活レベルだったんだよ、帽子を着ているものは帽子を着ているもの、少ないものは少なく、多いものは多く、貧乏は貧乏だった。でも、そこに特に禁止したり、障害になるようなことはなかった、この人と結婚しろ、絶対にこれだという、そういうものはなかったんだ。そして、自分たちの気持ちが一致すれば必ず…それは、今はそのころとは違うようで、金持ちは貧乏人とは結婚させないというような、そういうことが都

会ではとても顕著なものなのじゃないのかい。映画などでみていると、本当なのだろうと思われるよ。それらは空想で作られてはいない、物には必ず元がある。フィクションでないならばね、そうだろう。フィクションならば違うだろうけれどね。今テレビでやっている「困難なクラス」という番組、これもそういうものが現れているようだよ。

D：そうですね、それは。

B：それは本当だろう。一般に田舎の子どもたちには特に関心をもたないかもしれない。いや、関心を持ったとしても、都会の人びとはさまざまな見方や考え方が、田舎の者とだいたい合わないんだよ。違うんだよ。田舎の者たちは一般に同じようなものだから、大丈夫だよ。物ごとに裏がなく、人として悪くなっていない。物事をいろいろ差別して見たりしない、そういうことはあるだろうよ。物ごとを区別してあれだこれだ、貧乏金持ちなど、いろいろなことすべてを区別するようなことはしない。さまざまに何かを利用する、利用しよう、そういう気持ちはない。都会の若者たちを見てみると、一部は利用して、利益がなくなればそれが友達でも、夫でも、妻でも、捨ててしまおうというような考えになってしまっているんじゃないだろうか。

D：ええ、そういうことを見かけますね、また。

B：そういうことを見かけられているようだねえ。それはだいたい間違った育て方だよ。財産というのは恐ろしいものだからね、仕方がないのか、今は人が金持ちになって生活する、金持ちの人はよく見える。よく見えない人などはない。いい生活をするためには何が必要か、金。じゃあお金をどうやって得ようかという問題が起こってくる。そしてその問題が出てくると、非常に間違った方法で得ようとする。私ならば、今お金が必要になると、さあ、どうしよう、何をしてお金を得ようかと考える。だが、今の一部の人びとはどうやって何とかうまい手で人からいくら借金できるか、そういう考えをしている。何かをしてお金を得ようというそういう考えがないんだ。年寄りの私が少し何かをして何ができるだろうか。工場を設立しようとしてもできない、何かをすとしたら、少し皮をなめすくらいだろう。それから手で何かを作るよ、作ろうというならば作るよ。柔らかい石があったら、それを彫刻することができる。でも、それをどこに持って行って売ることができるだろうか。もともと私はやるとなれば、悪くないものを作ることができる。かなりの物を作ることができるよ、また。鉄でも、薄い鉄ではまた第5級を持っているんだよ、また悪くない鍛冶だよ。軍隊にいるときに学んだんだ。そしてこの小麦工場で溶接工の横で一緒に働いていて、それをマスターしたんだよ。通風口の計算で、ほぼ最初から線を引いてきたならば、次の物はこんな感じだと作ってつなぐことができる。いろいろな調整などもすることができる。溶接は人に負けないくらいすることができるよ、また。でも今私にするべき何があるというんだ。私は年寄りで、冬の寒い時期に外や道路に座りたいわけではない。もしも

今40, 50歳くらいならば、溶接の小屋を作って、物の溶接をするならば、私のところに人がやってきて、仕事をさせているだろう。人に負けない溶接ができるんだからね。今70歳になっている者が、どうやって今それをする事ができるだろうか、そうだろう。もちろん、若者の中でも一部はそうやっているだろう。ただ、みんながみんな、これをすれば5, 10トゥグルグを得られるから〔働こう〕というような考えは、今なくなっているよ。どうしたら簡単にお金をもうけられるか、とね。簡単にお金を得る、いい暮らしをする、アルヒを飲む、いいタバコを吸う、そういうようなことを考えている。そしてそれをどうやって獲得しようか、でもそれに到達する何の考えもない。

D: この地域にホトクトや転生者といわれた人がいたんでしょうか、人びとが話していた、地方の人たちの話の中でいわれていた?

B: うちのこのあたりではいなかっただろう。この2つの寺院の上位の僧たちはとても優れていたと話されていたよ。私のさっき話した2人の僧がいたという、その1人はホトクトや転生者というような名前ではなかっただろう。でもとても優れた僧だったといわれている。ガンダン寺などにいた非常に博識な学者僧だったといわれていた。今となってはわからないよ。よくわからない。おそらくそういう人がいたんだろうよ。ただ普通の、何々ホトクトなどという名前は特になかっただろう。おそらくね。ここにあるいい伝えがあるんだよ。「エドギーン・ゲレン (修道僧)」というある修道僧がいたんだという。うちのあるあたりのこの近くの南側にエドギーン・エンゲルという場所がある。そこに1人の修道僧がいたといわれている。そういう伝説があるんだよ。彼はかなり貧しい生活をしていて、年老いた親と2人で暮らして、5頭のヤギを持っている、そういう暮らしをしていた人だったんだ。いつの時代だったのか、どの時代にいた人なのか、伝説になってしまったらしく、詳しくはわからないんだ。そしてボグド・ハーンが彼を呼び出したという。そして2人で、年寄りと一緒に5頭のヤギを引き連れて、ボグド・ハーンの前(首都)に行ったんだろう。進んで行き、ボグド・ハーンの前に着いて、5頭のヤギの乳を搾ってタラグなどを作って、それを少し集めて分けておいたんだ。小さな革袋のようなものがあつたらしく、その小さな入れ物に入れて持って行った。そのタラグをガンダンの容器に入れたところ、その容器にいっぱいになったという、その容器が。ほんの少しのものをこうやって入れたところ、いっぱいになった、そうなんだというよ。とても不思議な力のある人だったといわれているよ。それは、まだ例の弾圧の時代だろうか、何かで捕まって釈放されたのだろうか。どうしたのか、とにかく何か罪を犯したらしい。役人が捕まえに行つたところ、あちらこちらにそのエドギーン修道僧が座っているという。あそこにもその人、ここにもその人、あちらこちらにたくさんのこのエドギーン修道僧が現れて座っているのだという。そして、どれも捕まえることができない、役人は仕方なく戻って行ったという、そういう伝説がある。伝説だよ。ここから北の山裾に、少し

こういう高い、山の山裾に、こういう小さな丘のような、小さな突起の、岩がその頂上にある、そういう山裾のある場所に、こういうオポーがある。それがその人の遺骸だろうと、そういわれているんだよ、そのように語られている。そして、その人がいつの時代に生きていたのかはわからないんだ。

D：エドギーン修道僧。さあ、それを研究してみる必要がありますね。どんな人だったんでしょうか、その人は？

B：そして、そのボグド・ハーンのところに行ったのだというよ。経典を読み、そうすると人びとは魔法見せろといったんだという。ボグド・ハーンはその人の力を知っていたけれども、その他の人びとはよく知らなかったことから、特に気にならなかったという。その他の僧はよく知らなかったんだらうよ。そして、あなた、さあ、魔法を少し見せてくださいという、その人はオンザドのような大声で読経したんだという、驚くような大声でどんなリズムだったんだらうか、寺院の屋根がこうやって割れるように震えて、また上から埃などが落ちてきてね。ああ、もういい、もうやめなさい、とボグド・ハーンはそういったんだというよ。そんなふうだった。語られているよ。彼はでも、特に学問を追究して、本などを書いたなど、そういうことはしなかった人のようだ。だが、その人が他に何をしていたのか、誰も知らないんだからね。とにかく、そういう魔術を持った者、違う力のある人だったんだよ。そうだろう。そう語られているんだよ。

D：他にそのように語られている、地方でいい伝えられている、そういう僧や転生者はいたんでしょうか？

B：知らないね。特に知られていないよ。

D：最近になって、こうやって、オポー（土地の神）や水などをまつると、雨が降ったりしますか。一般にそれと関係がありますか、ないですか？

B：いいや、でも少しは降ったりすることもあるようだよ。

D：まつると？

B：ああ。まつっていると、だいたい少し20、30分後に少し雨が降りそうになる、少なくとも少し風が出て、一瞬、天から強く雨などが石をばらまくように落ちてくる。そうしていると、ああこれは間違っただらうかという、またみんな笑ったりする、そんなものなんだよ。でも、少しは物が降ってくる。降ることは降る。たくさんではなく、少しのもの、少しではあるけれども物を見せてくれているようだよ。それはまた、だいたいまあそれでいいとしているんじゃないだらうかという気持ちが生まれているんだよ。

D：あなたは家で灯明やお香をあげますか？

B：あげるよ。モンゴル語でならば、モンゴル語の経典があれば、それを読む、モンゴル語で読むんだよ。

D：おお、どうやって学んだんですか？

B：自分で、独学でね、試して努力していて学んだんだ。

D：社会主義時代に？

B：そうだよ。草原に出たあと、かなり努力した、まあまあよく読むことができるよ。モンゴル語の経典もまた難しい、一部はね。バリーン・オロイン・ノム（木版経典）は前にあるna, gaの句点がない、そういうものなんだよ。読んでみて、少し見ていてこうしていると、慣れてくると読むことができる。手書きの本は、そういう句点がないけれども、また人が書いた物は違う。その時代というのは、キリルのようにこの字のあとには必ずこういうものがなくてはならないという、そういうものはない、人がそれぞれ自分のやり方で書く。時にはあれだよ、名詞は同じ読み方をする語だから、同じように読む語があるんだよ、そういう語はというと、それらすべてを分けて書く。それはというと字を違えて書いてある、そういうものだよ。そしてそれらを、私はというと辞書があるわけではないから、同じようにこうやって書くことはできない。でも、読むことならば、こうやって同じ読み方をする語だから、読めるよ。そして、それ以外にもいくつかの経典を書き写したんだ、まあ、興味があったからね、趣味というかね。冬になるとテレビなどもないし、ラジオを聞くくらいだよ。ラジオを聞くんだよ、私たちは。ラジオは一般に最もたくさん情報を与えてくれるものだよ、テレビよりも多くね。そして日中、仕事をして座っているときに、ラジオから放送が聞こえてくる…耳をすませて座っているんだよ。情報を得る。そしてラジオが終わったあと、ロウソクの火をつけてめがねを掛けてそしてそれらを書き写すんだよ。そう、いくつかの経典、アルタンゲレル（Suvarna-prabhasottama-sutra）、バンズラクチ（Pancharaksha）、タラヴチムベ（Sanskrit: Arya-ghanaja-mahabhricaphulukarma-avirnasodhaya-bhudharakusumasancaya-sutra）、ダラブジャヴ、そしてナイマン・ゲゲーン（八陽経）など、いくつかの経典を書き写したんだよ。時々風を通す、でもそのすべてを読むことはないよ。今では快楽に陶酔して、テレビにうつつを抜かして、まったく本を読むことができないんだ。本はたくさん持っていたんだよ、私は非常に読書をする者だった、でも今は読まなくなってしまった。ああ、無駄なアメリカや韓国映画を見て、それはというと人が殺しあって、罪悪を集めてね、こいつを殴ってしまえ、こいつを殺せ、とね。だいたい体と言葉と心の3つの罪悪というのは、心の罪悪を集めているということだよ。10の黒い罪悪というと、この3つの上にあるんだという。これはというと、舌には4つの罪悪があり、心体には3つずつの罪悪がある。こうやって10の黒い罪悪、この体から出ているんだというよ。そうするとそのテレビを見て、これを殺してしまえと座っているというのは心の1つの罪悪を犯しているということになるんだよ。仏教の経典はわが国の昔の名訳者の僧侶たちがすばらしい翻訳をおこなった。その翻訳した経典はまさに母語で、母国とする人が著したように書いてあるんだよ。

彼らというのはだいたい賢明な知者だったんだろう、本当にすばらしいものなんだ。

D：今の、昔のモンゴル語から新しいモンゴル語へと置き換えると、また現代の人びとは理解できないといいます、そういう話もありますよね？

B：そうだよ、そのまま字を置き換えただけならば理解できない。意識して、ダムディンスレンが元朝秘史を現代モンゴル語に置き換えたようにうまく、そうやって訳したならば理解できるだろう、精選されたモンゴル語にね。そうすると、その翻訳者の力量、知識が問題になる。今、仏の教えとって、エンフバヤル（元大統領）の翻訳があるだろう。それを読むと、まったく、仏教の教えがまったくとっていいほど聞こえて来ないんだよ。読んでみるとキリスト教の聖書、聖書を翻訳したようだ。

D：ああ、なるほど。

B：翻訳がそのように不完全なんだよ。仏教の経典というのは、読むと流れるようになってくるんだよ。それが、この使われている言葉や語句はというと（ひどい）、それは何ら学歴のない私のようなものが翻訳しているんじゃない。そうだろう、学者で優秀な人だろう、翻訳を専門とする学者なんだろう、エンフバヤルは。それなのに非常にできの悪いものなんだよ。聖書を読んでいるかのように思われてね、そう感じられるんだよ。ああ、だがアメリカ人の僧の書いた本、これはこのように見えたよ、モンゴル人が翻訳したようだ、それはということなかなかよく翻訳されていたよ、いい翻訳だった。

D：そうですね、キリルで書かれた経典も必要ですよ、また？

B：ああ、そうだよ。必要だね。だいたい宗教を信じようというならば、信仰を持つとしていなければ、経典を知らないことが妨げになっている面がある。それはあるだろう。モンゴル語になっている経典はまた理解できない。だいたい仏教の経典がキリル文字で書いてあったとしても、理解できないよ、哲学の本などは理解できない。少し平易にした教理の本ならば、さまざまな教訓がたくさん載っているんだよ。それならば理解できる。『バダムサンボー師の教訓』という小さな本がある。それはというとほとんど詩歌だよ。そして、その人が善悪どのような道をとるべきか、完全な教えの本だよ。こういうときはこのようにおこなう必要がある。大体は教訓なんだ。そしてまた、詩歌ともいえる。そういう非常にすばらしい翻訳がある。バダムサンボー師という人は10何世紀の時代の人だよ、ほぼ、チングスの時代の人だろうか、そういうチベットの人だよ。それより前の時代かな。いつも私は覚えられないんだ。とにかく、その人の書いたものをモンゴル人が翻訳したのがある、それは驚くべき翻訳だといつもそう思うんだよ。ただのモンゴル人がその人の名前を書いたとしたら、彼は詩人としてもまた優れた人だよ。どこを取ってみてもすばらしいんだ。

D：では、いいインタビューでした。本当に感謝します。

B：ああ、少し話しすぎたかね。いろいろな種類のテーマに関して話したね。

D：そうでした。

B：仏教など。

D：でも、とても興味深かったです。このすべてがまたモンゴルの歴史として残りますね。

B：社会主義時代というのは、だいたい資産を持つというような理解はない。ただまあ、そういう賢い知恵の回る人たちなどはそれを築いていたんだろう。もしも資産を持っている人たちがいたら、軽蔑して、「この悪い強欲者、どん欲、そいつは欲張りだ」という感じで批判する。長たちはもっとひどい対応をする、このどん欲な奴め、とね。ああ、ほとんどみんなそういう風な反応でね、そうだったんだよ。そしてまあ、一般的に500以上、500トゥグルグ以上の給与をもらって、一ヶ月生活する。70トゥグルグの布というのがあった、60年代に。他にもいろいろ高価な布がある。これで男たちは着飾るんだ。絹やちりめんは10いくら、20いくら、30いくらという絹がある、女性たちはこれで着飾る。それらを買って、そして食料や燃料を準備する、こうして十分に生活していたよ。楽しく暮らそう、そういう考えだったよ、私たちというのは。だいたいそうやって若い時代を過ごした。今の人たちはというと、少しお金を得ると、それよりもっと稼いで、こうしようと考えている。一部の人は得ようとして必死になって、いろいろなやり方で努力している。一部はまあいいやといって、あるままに、私のような者はそのまま、得られたお金を丸ごと使って何とか暮らしている。そうしてね、この2つの社会（社会主義から資本主義）になって、全く逆の社会になってから、私たちというのは、一時期ひどく衝撃を受けたんだよ、一般に。今でもその衝撃から抜け出せないでいる。一部、生活があまりよくない者というのは、とても貧しく、貧困状態だろう。どうしようもなくなって、彼らはマンホールなどの穴に入って、子どもたちを道に捨ててしまうだろう。疲れ切った者のすることだよ。

D：あなた方の時代は冬の食料の準備や、搾乳した家畜の乳などを、個人的に利用していましたか、どうでしたか？

B：ああ、もちろんそうしていたよ、それは。私のように田舎に親戚などがいて、両親に何頭かの家畜があるならば、自分たちでそれを食べるよ。そしてまた、自分の物だけで足りなければ、国营農場から決裁させる。ヒツジやその他家畜を決裁させて食べる。遊牧民は、国营農場の労働者は、ウシやウマを決裁させて食べるんだよ。その帳簿はどうなっていたのか、そこで決裁させて、ウマをつないでおく綱から選んで連れてきて、そうして食べるんだ、そういうものだった。食料不足といえば特にあふれるほど豊かではなかったけれども、でも特に欠乏して困窮するほどではなかったものだよ、だいたい。食料不足ではあるけどね。モンゴル国というのは人が飢え死にしたことのない場所なんだよ。この何頭かの家畜、これがあるからね。ああ、特別なあるたとえ話を話そうか。2人の貧乏人が1人の金持ちの家畜を放牧していた。その2人

には持っている物は何にもない。そして、ヒツジが出産する時期に、その家の家畜を飼う仕事をしていた。その2人はとても努力してヒツジに子どもを生ませて、育てている。その金持ちは思った。「さあ、この2人にはまったく食べるものがない。この2人は今、私のヒツジから食べているんだろう。飼っているヒツジの中から少し弱いものを屠って食べたに違いない。他に食べるものがないんだから、何を食べるというのか、この2人は。何もいわないということは絶対に食べている」。こうして、ある深夜、彼らのところに行ってみた。夕暮れに行くと、ゲルの外で耳を澄ませていると、天井から煙がくすぶり、食事を作っているようだ。「やっぱりそうか」と思った。こうしてまた耳を澄ませると2人が話している。「おまえとおれは徳のある人の力で楽しく暮らしているなあ」と2人が話している。「さあ、この2人はまさに食べようとしている、今ふん捕まえてやる」とね。駆け込んでいった。そうすると、どうだったかという、子ヒツジを産んだヒツジの羊膜をゆでて食べているんだ。そして「徳のある人の力で俺たち2人は楽しく暮らしているなあ」と。人の心というのはそれほど美しいものなんだよ。その飼っている家畜を殺して食べる、そこからごまかすというような、そういう気持ちはないんだよ。そういう良い心を持っている。そして、その金持ちは喜んで「さあ、おまえたち、これを取れ」と、そのまま与えたんだというよ。このようにモンゴル人は飢え死にすることはないんだよ。また他にもこういう話がある。2人のモンゴル人が中国に行き、どうしたのだろうか、乗るウマをなくしてしまったんだ。そうしてこちらに向けて2人で中国から歩いて戻ってきて、そして南ゴビに至った。2人は空腹で死にそうになっていたんだというよ。食べるものはなく、どうすることもできず、飢え死にしそうになっていたらしい。そうやって進んでいったところ、1つのウマの頭部、遺骸の頭に出会ったという。そして、それを拾い、少し火をおこして、その骨をこうやって火の上で持っている、骨が焼けて、下から熱くなってきた。熱せられて、こうしていると、その脳みそにほほ火が通ってきた。そして2人はそれを食べたところ、体に力がわいてきたんだという。ということはそれこそ、一番よくない部位の肉でもそういうものなんだよ、そうだろう。脂味のないよくない部位の肉でも食べれば力がわき出るといふ。そういうものなんだよ。だいたい、自分たちにとって生来適した食べ物というものがある。私などは昆虫を食べることはできない。モンゴル人はだいたい食べる物の種類は少ないんだよ、そうだろう。いなごでもバッタでも、さまざまな虫や蟻でも、食べられるといわれている。本や物語の中でも書かれているだろう。そうだけれども、わがモンゴル人はそれらに関心を持って食べようとはしないんだよ、そうだろう。そうだね、ヒツジ、ウシの肉、そしてさらに太って脂肪のついたものを食べる、痩せたのは食べない。ロバの肉を食べると聞いたことがあるかい？

D：まったく聞いたことがないです。

- B：そうだね。モンゴルに文学があったとき、中国はまだ貧乏だったんだろうか。読んでことのある話があるんだ。ある貧しい中国人が1頭のロバを持っていた。そしてそのロバは年を取って、そして痩せ衰えて死んだという。すると、その人はその肉をいろいろな野菜と混ぜてゆでて、長い時間沸騰させた。それはバンタンになって、煮込みになるだろう。そんなふうになってきたところで、たくさん野菜、調味料を入れたんだよ。そしてその後、そうしてね、また食事を作る能力があったんだろう、それを売って来たんだという。料理を作ってそれに箸をつけて陶器に入れて、人に料理を作ってそれを売ってお金を取る。箸を入れてかき混ぜてみると、その料理はとてもおいしくできていたんだろう。私などはロバどころかウシが死んでもそれを捨ててしまふよ、そうだろう。もしもその人のように考えて、わが国の人たちが死んだウシの肉を、入ってきているいろいろな調味料を加えて、そうして雑炊のようなものにして、調味料を入れたならば、その話の料理に劣るものはないよ、そうだろう。そうやって生活すれば、モンゴル人が生活するならば、食べるものはたくさんある。自分たちが使わない、できないのであって、ないことはないんだよ。怠け者なんだ、本当をいうと怠け者だよ、今の若い者は。もともと怠け者、非常に怠けもの。できあがった、完成した物で生活しようというふうにいるようだね。私は今そのように思っているよ。
- D：今というのは田舎から、どういうんですかね、遠く田舎で家畜を飼っていた人がソム中心地へ移動し、ソム中心地からアイマグ中心地へ、アイマグ中心地から都会へと移動する、そういうことになっていますね。
- B：そうだよ、そうだ。中心地や定住地の近くにいれば、体も楽で、楽しく幸せに暮らせる、という考えでいるんだよ。
- D：田舎で家畜を飼うことが大変になって、人びとは移動してきませんか、どうして人びとは移動しているんですか？
- B：一般的には大変なことは大変だよ。だいたいきつい仕事だよ、家畜の仕事というのは。まったく自由もなく、暇もない。ああ、季節がよく、夏の豊かな時期になって、家畜は太って、こうやってアイラグや乳製品が豊富になっている時は、遊牧民ほど人の中で豊かで幸せな者はないように見える。ここでじゃんけんをしてアイラグを飲んでいる、あそこで宴会をしている。そうだろう、飲み食いして遊興しているんだよ。さあ、そして困難な時期が来る、いろいろな吹雪にも見舞われる、自分の飼っているヒツジも死んでしまう。家畜をなくさないためにと、それが生活すべてなんだからね。そして、一部は凍死する、迷って死んでいる。さまざまなことが起こるんだよ。そうでなければ、凍えて帰ってくる。それは大変なんだよ、そうだろう。そして、毎日仕事がある。泥や土を掘る、家畜の糞を掃除する。干し草や飼料を準備する。家畜の仕事というのは、今日こうやって、やってしまったから終わるということはない、明日、それをまたするものなんだよ。こうやって毎日繰り返しおこなう。ほぼ一生、その仕

事を繰り返すんだということだよ。終わった仕事というのは存在しないんだよ、家畜の仕事はね。そういうものなんだ。だから第1にそうになっている。第2には、まあ生活のあれだよ、ただ家畜の仕事が苦痛だからとか、いつも楽を追いかけているというわけではないだろう。これにはまた多くの面がある、多くの方向から見なければならぬ。子どもが学校に通うため。生活する権利がよりよく得られ、お金も得られる、また商売をすれば少しはいい暮らしができるなど、様々な理由で彼らは移動しているんだろう、そうだろう。生きる権利だよ、それは。ただ1つ今お金を得ようと、楽をしようと動いているのではない。だいたい生きる権利をもって生活する、また幸せのために努力して移動している人びとなんだよ、彼らは。そうじゃなく、ただ楽な生活、ただお金を得て、食べようというそうして移動している人たちではないよ、大体は。だが、その中には若者たち、彼らはという考えのない、ただ楽な生活をしようという若者たちがいるよ。それを私は批判しているんだよ。そうではなく、移動という、また少しいい場所に移動する、そうだろう。今、西部のアイマグの人たちは大勢移動している。それは市場へと近づき、もう少しいい生活をしようというんだ。あそこには家畜はある、でも市場がない。肉を売る、市場がないんだよ。アイマグ中心地、ソム中心地の2つはすぐに需要を満たしてしまふ、それで終わりだよ。そこで車に積んで走って行く。夏の時期ならば道中で売れてなくなる、でも、冬の時期は肉がいろいろな方向から入ってきて集積してしまうため、値段が安くなってしまふ。ガソリン代が出せなくなる。そんなことから、家畜を持っている者は、家畜を追いつつやっつて移動しているということだよ。そうだろう。そういうことだよ。

D：またその上に、子どもたちが都会へと、学校に行く。彼らに従って、また都会へと移動しているようですよ？

B：ああ、そうだよ。彼らに従って行く。そしてその子どもたちは都会で妻子を持つ。夫を持つ。そこに溶け込むことになる。そうなる彼らに近づいて行くより他に仕方がない。

D：今では100いくつとか、200だとか、大学がウランバートルにあるんですよ。技術学校はなくなってしまいました。

B：だいたい大学を卒業する。本来大学で学んでいる人というのは長になるべくそこで学んでいるんだろう。長になる、よい給料の仕事に就く。でもそういう仕事は見つからないんだよ、そういう市場はないんだよ、そうだろう。最初はみんな学校へ。今ではまあ専門学校、カレッジなどができているよ。それは本来必要なものだよ。非常によく専門を身につけた労働者というのは、長よりも多く給料をもらう、もらうものだろう。それを理解する必要があるよ、若者たちは。そして彼らというのはまた人と同じものを欲しがる習性がある。例えば中くらいの成績の子どもがいるとする、そしてその子が中くらいのレベルの大学に入ったとすると、それを見て、私もそこに入る、

私はその子より劣っているものなんてないと思う。(その親たちは)おまえはその建築専門カレッジにいけ、そいつ以下になってどうする、というこういう気持ちが生まれてくるのではないかと私は想像しているんだよ。

D: そうですね、そういうものがあるでしょうね。

B: そう。私は他よりもできるはずだと思う。そうして、2, 3の大学を卒業して、職がないんだ。それで両親が何頭かの家畜を売ったお金、両親の年金のお金、それを渡すけれど、流れてなくなってしまう。そいつはというとまったくお金を稼がないんだよ。2, 3もの大学を卒業したという、無職。頭の悪い者というのはどれほど学校に行ったとしても、学んだことをその頭で利用する、それを使う方法は見つからないんだよ。そして、それより少しましな者はまあ生きていける。そして、コネのあるものならば、ある仕事に入って、そこに寄生して生きていくことができるだろう。でも、引っ張る者のない、知人のない私のような田舎の者たちの子どもは、どれほどまあまああの成績だったとしても、特別に優秀でなければ何もできないんだよ。就職している者はというと、優という成績を持って職についている。それは。先生にいくつか物をつかませて、そして1つでも優という成績をつけさせて、そしてそれを持って行っているんだよ、他の人と同じようにね(成績表では優)。いったい雇う側はその成績を信じている人がいるのかどうか。とても厳しいもんだよ、そうだろう。

D: あなたの子どもたちの中では、1人が今、田舎で遊牧民をしているんですか？

B: そうだよ。1人の子どもが遊牧民になった。一番勉強ができるのを遊牧民にしてしまったんだよ、私は。そしてその他はこのソム中心地にいるんだよ。1人はソムに、1人は都会に。2人の娘がいる、1人はエルデネトで、1人は韓国に行っている。去年から。「早く戻ってこい」と叱っているんだ。戻ってこない。「お金を稼ぐわけでもなく、ただ、そこでぶらぶらしているのだったら、早く戻ってこい」。もともとはこのハス銀行の、融資の専門職員として働いていたんだ。そうしていると、突然私は行くことになったとあって、そして引っ越しをして、そして突然行ってしまった不孝者なんだよ。それを私たち2人が最初から知っていたならばね。夜になって突然、今日明日にも行くことになったとあって、ある夜仕事を引き継ぎするといつて、そして一晩中座って仕事をまとめて、朝になってウランバートルに向かって行った。母親は仕方なく、一緒にウランバートルへ行ったよ。そして泊ってその翌日飛んで行ってしまった、そういう奴なんだよ。そうってしまった以上、今は何もできない、私たち2人はどうすることもできず、なくしてしまったようなものだよ。去年の冬、ツァガン・サルのおかげで戻ってきて、何日か泊って、そしてまた戻って行ったんだ、また延長させたといつて、行ってしまった。そのあとは、時々仕事を変えたと聞く。どうやって生きていいのかねえ、今。「向こうで仕事があるようなないような、ぶらぶらしているならば、戻ってこい」と私は叱るんだよ。でも、まあ、自分でわかっているだろう

うよ。無駄なことを話しても何もならない，そうこうして過ごしていくんだらうよ。

D：今日は吹雪になるといいましたが，大丈夫なようですね。

B：大丈夫だね。少し南側だろう。うちのこのあたり，ウブルハンガイの北の端は，吹雪だといっても，少し弱いんだよ，そして…西の谷間からこうやって過ぎていくんだよ。そしてウブルハンガイの南側を回って，こうやって通過していく。だからウブルハンガイといわれているんだよ。そして，夜になるとまた天気が変わるだろうね。だいたいわが国の天気予報というのは優れているよ。外れることは少ないね，だいたい当たる。天気予報をよく聞いている必要がある。

D：昔は遊牧民カレンダーというものがありましたよね。

B：ああ。遊牧民カレンダーという，季節ごとの手法，時期や日を示した，年月日，曜日があって，それらを示したカレンダーだよ。今の物のようにさまざまな情報はなかった。そして，いい日を見つけるといって，カレンダーから探しても，まったく見つからない。ある人がいっていたんだという。よく見るという人が「カレンダーをよく見る」というと，「ああ，おまえは仕事をしないね」といわれたという。いろいろな仕事。どういうことかという，日を見て，いい日を見つけようとする，いい日というのは見つからないんだよ。するとその仕事をするのができないということだろう。ああ，これには悪い日，それは悪い日だ，それはこういうことをする日だといって。結局仕事ができないということなんだ，そんなことがいわれていたというよ。

D：でもあなたもまた重要な日は見るんでしょう？

B：ああ，見るよ，でもまあねえ。

D：これはバトフー議員ですか？

B：バトフー議員のカレンダー。

D：このあたりから選出されたんですか？

B：そうだよ。選挙の年はカレンダーがたくさんになるよ。いろんな種類のカレンダー。

ああ，話しすぎて，火も消えてしまった，話しすぎたようだね。

D：たくさん興味深い話をされましたよ，あなたは。

B：まあね。時間があれば話すことはあるんだよ。さあ，これでよかったかい？

D：十分です，良かったです。

Ярилцлага

I Бадамханд

Б : Бадамханд

Д : Лхагвадэмчиг

1 Удам гарал

Б : Бичихийн бол энэ ширээний энд...

Д : Өө зүгээр болно.

Б : Одооны бид нарын үед чинь, одоо нэг хэсэг үе энэ шашин гээч юмыг чинь юу яадаг байв. Харанхуй дундуур, та нарын одоо жоохон байхад чинь ийм мэтийн байхад чинь одоо юугий чинь...

Д : Та ийшээ суу. Хаана суух вэ та?

Б : Яахав ээ би ингээд.

Д : Даарахгүй юу?

Б : Даарахгүй ээ.

Д : Ийшээ суухгүй юу таны алдар нэр хэн бэ?

Б : Бадамханд.

Д : За хэний Бадамханд аа?

Б : Дамбын Бадамханд.

Д : Өөрийгөө та... Хаана аль, нутаг хаагуур вэ танайх?

Б : Одоо юу?

Д : Ер нь бол.

Б : Ерөөсөө яг эндхийн хүн. Манайх чинь энүүхэн энэ, би Зуугийн хойд талын энэ Ханджамцын суварга бий, энэ суварганы энд гарсан юм гэнэ лээ. Яг л гарсан нутаг дээрээ байгаа хүн.

Д : Аан, хэдэн онд мэндэлсэн бэ та?

Б : 43.

Д : Өө за тэгээд тэрнээс хойш энэ нутагтаа л?

Б : Аа тийм тэрнээс хойш энэ нутагтаа л ингээд л. Хөдөө л жаахан байхдаа ч одоо яахав, хөдөө байж байж байгаад л үйлдвэрээс тэтгэвэрт гараад л. Одоо 68 тай ч билүү. Одоо хүртэл тэгээд л ингээд л нутагтаа байгаа л юм даа. Манай аав ээж энэ тэр чинь өнөө юуны... Манай аав ээж энэ тэр юу нь, дээд өвөг мөвөг нөгөө дандаа тайжууд байсан юм гэнэ лээ, тайж удамтай улс. Тэгээд л энэ Зуугийн ламтан... Энэ хойд сүмийн дэнж гээд сүм гээд ярьдаг даа. Энэ сүмийн, тэр сүмийн лам энэ тэр манай аавын хамаатан хүн, ах нь энэ манай аавын тэр ээжийнх нь ах энэ тэр байсан юм гэнэ лээ. Тэгээд оточ маарамба, одоогийн энэ Зуугийн ганц өмнөө барьдаг тэр оточ маарамба чинь, маарамба нь бас хамаатан байсан гэсэн. Тэгээд энэ бүгдээрээ татагдаад

яваад өгсөн.

Д : Та багадаа энэ сургууль соёлд суусан уу?

Б : Үгүй, ерөөсөө суугаагүй. Миний үед чинь тавин хэдэн онд чинь сургуульд бараг суулгадаггүй байлаа шүү дээ. Сургуулиас гаргасан хүн чинь нэг эвтэй зальтай хүн л байдаг байсан байх. Хүүхдээ сургуулиас гаргасан хүн чинь.

Д : Та эцэг эхээсээ хэдүүл вэ?

Б : Би хоёулаа. Миний дүү хотод яг над шиг нэг өвгөн бий. Цэргийн газар олон жил ажилчихсан, тэндээсээ тэтгэвэрт гараад... .

Д : Танай ах бол сургуульд суусан, суугаагүй юу?

Б : Манай тэр дүү юу, суусан. Тэр надад дорхноо сургуульд суусан. Тэр цэргийн газраар яваад, тэндээс тэтгэвэртээ гараад... .

Д : Та бол аав ээжтэйгээ л хамт?

Б : Би бол аав ээжтэйгээ л хамт... .

Д : Мал?

Б : Тийм мал маллаад л, малтай ойр хэдэн малтайгаа тэгээд л байдаг. Тэгсээр байгаад л одоо өдий хүрлээ дээ, одоо харанхуй. Ном сурсан ном ч байхгүй, яахав.

2 Хархорины Сангийн Аж ахуй байгуулагдсан нь

Д : Тэр үед чинь, нэг хэсэгтээ бол нэгдэлжих хөдөлгөөн гараагүй байсан юм уу?

Б : Өө тийм, гараагүй байсан, нэгдэлжих хөдөлгөөн гараагүй. Нэгдэлжих хөдөлгөөн чинь манай энд 59 онд ялсан шүү. 59 онд бүгдээрээ, 58 оноос эхлээд 59 онд бүгд нэгдэл болоод, Шанхайн нэгдэл болоод. Ямар нэртэй байлаа даа, “Энхтайван” ч билүү дээ нэрийг нь ч мартчихжээ, эмээ нь. Тэгэж байгаад тэгээд 60, 61 онд байна уу энэ... 60 онд 58, 59 онд энэ атар эзэн тийм атар хагалаад, тэгээд 60 онд САА бий болж, САА руу нийлээд тэгээд энэ Хархорин САА. Тэгээд л манайхан чинь одоо хэдэн малаа нэгдэлд өгөөд, нэгдлээс нэг хэдэн цөөхөн юмтай үлдсэн нь САА сүүлд нь хамж аваад тэгээд, нэг хэсэг чинь ер мал ч байхгүй, малтай хүн ч байхгүй. Төвийнх нь ажлаа хийгээд хөдөөнийх нь малаа маллаад яахав тэгээд тэрүүгээрээ болдог байлаа шүү дээ. Тэгээд сүүлд нь нэг 78 онд билүү дээ энэ манай САА нэг хамчихсан юмаа. Юу ч үлдээхгүй хамчихсан юм, 10 толгой мал ч үлдээлгүйгээр хамчихсан юм. Тэрнийг л тийн манай САА-аас өөр газар аваагүй, ганцхан энэ САА-н нугалаа байсан гэж боддог юм би. Тэрнийг тэгээд л манай хархориныхон чинь одоо гэтэлчихсэн юм аа, хэдэн мал хэдхэн юмтай болох гэж байтал нь эргүүлж дахиж хамаад.

Д : Буцааж малыг нь аваад уу?

Б : Тийм. Буцааж малыг нь аваад зуухан мал үлдсэн юм.

Д : Малыг нь яасан юм бол?

Б : Тэгээд малыг нь нэгдэл рүү зарчихсан юм байгаа юм.

Д : САА-н мал?

Б : САА өнөө өөрийнхөө мал гэж аваад л. Тэгээд л энэ юуны нэгдэл рүү аваачиж зараад л, тал талын нь нэгдэл рүү өгөөд л тэгээд устгасан юм. Тэгээд манай САА-ыхныг нэг гэтэлчихсэн юм байгаа юм. Одоо ингээд харсан чинь, одоо та нарын бүртгэл тооцоонд ч гэсэн юу байгаа биз дээ, нэгдлүүдийн малчин байсан улсууд хамаагүй илүү олон малтай. САА энд ажилчин аж ахуйд байсан улсууд мал хуй гэхээр юмгүй байгаа биз дээ, хамгийн бага нь байгаа шүү дээ манайхан чинь нэг тэгэж хамчихаад.

Д : Нэгдэлжих хөдөлгөөн гарахад ер нь хүмүүс дуртай байсан болов уу, ямар байсан бол?

Б : Аа, зарим нь жигтэйхэн дургүй. Тэгэхэд чинь би одоо нэг нэгдэлжих хөдөлгөөн гарахад чинь би 16, 17-той байсан юм уу овоо болчихсон байсан шүү. Зарим нь жигтэйхэн дургүй, зарим нь өө яахав яахав одоо түмнээ дагахаас гээд тиймэрхүү л байсан юм. Олон түмнээ дагахаас биш одоо ганцаараа онцгойроод хаачих вэ гээд зарим нь, зарим нэг нь нөгөө дээр нэг коммун гээд юм болсон болтой юм байна лээ, аа тэрүүн шиг юм болгох нь гээд л жигтэйхэн дургүй байдаг байсан.

Д : Тэгээд танай аав ээж малаа САА-д?

Б : Тийм, тэгээд САА-д өгөөд л аав ээж чинь тэгээд л.

Д : Тэгэхэд танай дүү бас сургуульд сурч байсан?

Б : Тэгсэн манай дүү тэгэхэд чинь сургуульд сууж байгаад, энэ Шанхад чинь 4-р анги төгсдөг байсан юм. Хужирт руу сургуульд сурч байсан юм. Тэгээд Хужиртад очоод 7 төгсөөгүй байхаа. Хужиртад 7 төгсдөг л байсан юм байгаа юм. Тав зургаад суулуу даа. Тэгээд гарчхаад хөдөө нэг жаахан байж байгаад тэгээд САА-д нөгөө трактор комбайны жолооч болоод, тэгээд хэдэн жил трактор барьж байгаад, тэгээд л цэрэгт яваад л цэргийн хүн болсон юм даа.

Д : Бага залуу байхад ер нь ямархуу ер нь юу хийх вэ? Өглөө хэдэд босоод...?

Б : Өглөө ер нь бага залуу байхад чинь, малтай байхад чинь өглөө болвол, одоо үнээ мал саадаг байхад одоо бодвол гурав муравт босдог байсан биз.

Д : Бүр тийм өглөө юу?

Б : Тийм, одтой л байдаг байсан шүү дээ. Нөгөө үнээгээ саах гээд л. Энэ нэгдэлжих хөдөлгөөн ялахаас чинь өмнө завод гэж авдаг байсан юм. Заводын сүү гэж авна. Үнээтэй улсуудаа цуглуулчихаад. Тэгээд үнээгээ саах гээд босно доо хөөрхий. Дуудаад ид дуудаад ид босгоход чинь од гялалзаад энд тэндгүй одтой. Тэгээд боддог юм гурав юм уу дөрөв мөрвийн багцаанд л байсан байх гэж. Тэгээд л босоход чинь энд тэнд энд тэнд шар шар хийгээд л, нөгөө шөнийн дуу барьдаг болохоороо үнээгээ шар шар хийгэл саагаад байдаг. Би ямар сайндаа одоогийн энэ хүүхдүүд босохоо больсон, одоо тэгэж босвол үхнэ гээд тэгэж байгаа юм.

Д : Орой хэд гээд унтах вэ?

Б : Орой бүр бүрий, бүр бүрэнхий болгож байж унтна. Орой болохоор чинь өнөө өөрснөө ч тоглоно. Өнөө сүү саалиа өгчихөөд, нөгөө өдрийн тугал малтай хөөцөлдөөд, өдөр нь бараг зав муутай. Одоо бодвол өдөр урт байсан юм өө, одоо чинь жил шиг байсан юм. Тэгэж байгаад оройхон сэрүү орохлоор өөрснөө ч тоглоно. Тэгээд орой нилээн орой унтна. За за үдшийн бүрий өнгөрөөж унт гээд хэвтүүлэхгүй. Үдшийн бүрийгээр хөнжилд оронд хэвтэх гэж байна гээд. Тэгээд өнөө бага байхад чинь дөнгөж нэг л сайхан нойр аваад унтангуут л дуудах шиг болдогсон. Тэгэж л босдог байсан юм даа бид нар чинь. Би ч одоо тэгээд их олон хүүхэдтэй, залуу бага жоохон, би ч их жоохноосоо үнээ саасан хүн байгаа юм. Жоохноосоо тэгэж өглөө эрт босдог, орой тийм орой унтдаг. Тэгээд сүүлдээ ажил хийгээд, улсын ажил хийх, хувийн бас нэг яахав дээ бас нэг мал, монгол хүн малд цуцдаггүй болохоор нэг үнээ юухантай энэ төвд. Нөгөөдүүлийгээ амжуулах гээд л зургаагаас хэтэрнэ гэж байхгүй дээ. Заримдаа зургаа болгоод, заримдаа арай болгохгүй л босно. Өвөл өвлийн чинь зургаа бол их эрт шүү дээ, зун ч яахав нэг нар гарчихсан байдаг юм.

Д : Ямар тоглоомоор тоглох вэ? Яаж тоглох вэ ер нь, тэр үед хүүхдүүд?

Б : Бид нар уу? Өө, тэр үед чинь тэгээд л усны зах мах тэгэххийгээд л юухан хийхэн, жижгүүд нь байхдаа бол нөгөө чулуу ясаараа л. Арай томрохоороо л арай ч тэгэхгүй, нэг юм тоглох ч юм олодохгүй бүгд сууцгаагаад л, ер нь тэгээд л тэр хоорондоо тэгээд нэг болдог л байсан юм байгаа биз.

Д : Чулуугаар нөгөө гэр эд нэр бариад л уу?

Б : Тийм нөгөө гэрээ бариад л, яснуудаар өнөө малаа хийгээд л, ингээд өрөөд л бид нарын тоглоом чинь одоо тийм л юм байсан шүү дээ.

Д : Эрэгтэй хүүхдүүд нь бас гэр эд нэр барих уу?

Б : Барина, барина. Эрэгтэй эмэгтэйгээрээ нийлээд тоглоно, болоогүй. Эрэгтэй нь малдаа явна, малдаа явж байгаа юм гээд л тоглоно. Тиймэрхүү л тоглоомтой байсан юм даа, бид нар чинь. Тэгээд хаяа нэг эрээн шаазангийн хагархай олдно, тэр бас их гоё оо. Маний тоглоом чинь тийм юм байсан юм. Одооны хүүхдүүд их гоё юм үздэг болоод юм ч тоохоо больсон.

Д : Тэр үед хүүхдүүд орой эд нэр, үлгэр эд нэр нутгийн хөгшчүүл эд нэр уншиж өгөх, ярьж өгөх үү?

Б : Үлгэр нэг юм үлгэр оньсого ярьж өгнө. Оньсого таалцна. Тэгээд нөгөө шагайгаараа тоглоно. Тэгээд нясалцана, тэгээд л алаг мэлхий өрнө. Тэгээд янз янзаар тоглоно. Бид нарын чинь тоглоом одоо шагай л, шагайгаар тоглоно. Том жижиггүй тоглодог байсан байхаа. Яадаг л байсан шүү дээ, цагаан сараас хойш л хотоо малтчихаж байгаад л, хотондоо адсага дэвсчихээд тойрч сууцгааж байгаад л шагайлцдаг л байсан шүү дээ, том жижиггүй л. Зэндмэнэ гэж нэг юм байдаг байсан юм, бид нарын үед харин. Тэр

зэндмэнээрээ тоглоно.

Д : Зэндмэнэ чинь нэг модон?

Б : Модон тэгээд л амьтны дүрстэй тоглоом, тэрүүгээр тийм нэг даалуу шиг ингээд дарж тоглодог, нийлүүлж. Нэг тийм юмаар тоглодог юм манайхан.

Д : Хөзөр гэж юм?

Б : Байхгүй. Хөзрийг ерөөсөө үзэхгүй (тоглож үзээгүй). Маний багад чинь тэр зэндмэнэ л гэдэг байсан.

3 Социалист үеийн хоол унд

Д : Тэр үед хоол унд ямархуу байсан юм бол, одооных шиг энэ тэр ногоо могоо иддэг байсан уу?

Б : Өө байхгүй. Ногоо идэж ерөөсөө мэдэхгүй. Тэр үед чинь ногоо байтлаа гурил ч олдохгүй. Гурил чинь ингээд нэг өрхөд, нэг өрхөд нэг 3 хил нарийн гурил энэ цагаан гурил, 2 хил бүдүүн гурил гээд нэг өгдөг. Тэр нь өрх өрхөд гээд нормтой. Тэр нь одоо бодоход энэ хивэг л байсан юм шиг санагдаад байгаа юм. Хөндлөн хөндлөн ийм модтой нэг тас хар юм ирдэгсэн бүдүүн гурил нь гээд, тэгээд л тэр чинь тийм л юм өгнө бидэнд. Нөгөө өрхийн “өө агентад гурил ирж гэнэ, өрхийнхөө юуг авна” гээд л явна. Заримдаа арай ахиу ирвэл, нэг 5 хил олддог байсан юм, гурил нь. Тэгээд иддэг юм юу гэхээр цагаан тос, тэгээд нэг ааруул эззгий тийм л юм иддэг. Орой болохоор махаа чанаад л идчихнэ. Өглөө болохлоор тосоо цайнд хийж уучихаад л малдаа яваад өгнө. Ааруул эззгий нэг, хүүхдэд бол ааруул эззгий өвөрт нь хийж өгөөд л тэгээд л явуулна. Орой ирээд л, орой ирэхэд чинь нэг хярамцаг ч хийчэхсэн байж магадгүй, нэг толгой шийр ч чаначихсан байж магадгүй, нэг тийм л дандаа махан хоол иднэ.

Д : Ер нь хэдийнээс энэ төмс ногоо орж ирсэн юм бэ?

Б : Энэ төмс ногоо чинь миний мэдэх бол юу л яасан юм даа, нэгдэлжих хөдөлгөөн ялаад 62 оноос л эхэлж орж ирсэн юм, тарьж эхэлсэн юм даа, энэ төмсийг чинь. 58, 59 онд ч нэг байна уу нэг үзэгддэг байсан юм, идэж ерөөсөө мэдэхгүй. Тэгээд уул нь юунд болвол 60, 59, 60, 61 он энэ тэрд энэ САА бий болоод ногоогоо тариад л тэгээд энэ байцаа төмс чинь жигтэйхэн их болоод. Төмс ч одоо жигтэйхэн гоё шаргалтсан ийм юмнууд, хөрс нь (хальс) шинэ гоё байдаг байсан байгаа биз. Байцаа энэ тэрийг чинь авчраад мөнгөгүй өгнө, буулгаад буулгаад өгчихнө. Нөгөөдөхийг идэж мэдэхгүй яаж иддэг юм бүү мэд гадаа л хэвтэж байна. Хот мотоор бөөнд нь өгөхлөөр ядаж мал нь идэхгүй, байцаа майцаа чинь өнхрөөд л байж байдаг сан. Тэгээд нөгөө төмсөө, байцааг ч бүр мэдэхгүй, төмсөө хааяа нэг идэх гэнэ. Тэгэхлээр өнөө төмсөө хөшиглөөд нөгөө хоолондоо хийгээд, нөгөө хоолтойгоо хамт буцалгаад гаргачихна. Түүхий байлгүй яахав дээ, тэгээд болдоггүй дэмий эд гээд ерөөсөө идэж чадахгүй. Сүүлдээ л энэ нилээн сүүл рүү манайх бол төвд

орж ирээд л, манайх чинь 63 онд төвд орж ирсэн айл байгаа юм даа. Тэгээд тэрнээс хойш бас л идэж чаддаггүй байсан. Тэгэж байгаад төвд ч орж ирээд л хүүхэд шуухад ч олон болдог 65, 6, 7, 8 онуудад 70-аад оноос эхлээд ногоогоо идэж сурч байгаа юм даа. Одоо бол би ногоонд жигтэйхэн дуртай, эд нартай ногоотой хоол идэх юмсан гээд л байх нь тэр.

Д : Будаа гэж ер нь байсан болов уу даа?

Б : Шар будаа л байдаг байсан юм. Цагаан будаа чинь ёстой нүдний гэм байсан байх даа тэр үед. Тун цөөхөн үзэгддэг байсан. Жоохон нэг, жоохон юм, тэр цагаан будааг ерөөсөө идэхгүй ээ. Манай ээж л лав, манайх чинь одоо, би чинь ганцаараа өссөн хүн байгаа юм даа. Ганц айлын ганц. Манай тэр дүү бас ганцаараа. Манай аав ээж 2 төрсөн ах дүү хоёр байсан. Тэгээд өөрөө манай тэр намайг өргөж авч байсан эх хүүхэдгүй, аав болохлоор хоёрхон хүүхэдтэй. Тэгээд нөгөө хоёр хүүхдээ нэг нэгээр нь аваад л, тэгээд хоёр гэрт ганц ганцаараа өссөн. Цагаан будаа гээд жаахан юм байна, тэрнийгээ нэг хааяа нэг “өө миний хүү ханиад хүрсэн юм шиг байна будаа чанаж өгнө” гээд жоохон хийчэхээд буцалгаад л байх буцалгаад л байх. Тэгэж тэгэж нэг тийм нэг ханиад хүрсэн үед л өгдөг байсан шүү дээ, цагаан будааг. Шар будаа харин байдаг байсан юм.

Д : Хэрэгтэй байж дээ ханиаданд тэр тэгвэл?

Б : Тэр хэрэгтэй байсан хэрэг хөө. Хөнгөн хоол гэж өгдөг байсан юм уу, тэгэж л өгдөг байсан юм. Шар будаа харин байна аа, шар будаа авч иддэг байсан.

Д : Чихэр жимсний юм юу байх вэ?

Б : За тэр чинь ер нь бараг үзэгдэхгүй. Одоо бидний багад чинь домбон чихэр гээд нэг том цагаан чихэр байдаг юм, шахмал. Тэгээд мөсөн чихэр байна. Цаастай чихэр ерөөсөө үзэгдэхгүй. Хааяа нэг хотоос энэ тэр хүн ирвэл нэг чөмгөн чихэр гээд нэг ийм урт нэг хатуу чихэр авчирч өгнө. Намайг бага байхад одоо би тийм л чихэр үзэж байсан. Домбон чихэр гээд нэг тийм том том юм, том том ийм чихэр байдаг байсан юм аа, элсэн сахар шиг. Тэгээд шахчихсан л байдаг байсан байх, тэгээд жигтэйхэн хатуу. Сахар байна аа, савтай сахар ётон.

Д : Орос юм уу?

Б : Орос, ётон нь бол. Нөгөө домбон чихрээ хуваах гэж хүүхэд тойроод шавчихаад, хормойгоо дэвсчихээд нэг алх хутга хоёртой л ингээд л нүдээд суудагсан.

Д : Аа өөрсдөө юу?

Б : Хүүхдэд өгөх гэж байгаа. Том улсууд нь төв орсон ч байдаг юм уу, яасан ч байдаг юм ирээд л нөгөө хүүхдэд хувааж өгөх гэж байгаа, нөгөө домбон чихрээ. Тийм л чихэр байдаг байсан юм. Элсэн сахар гэдэг чинь бол ерөөсөө үзэгдэхгүй байсан. Байдаг л байсан байхдаа тэр, хэн мэдэхэв авдаггүй л байсан.

Б : Үзэм харин хааяа үзэгддэг байсан. Сүүлд жаран он, 60,70,59,60-аад оны үед, 60,61 хоёр оны үед харин хятдаас нанжин чавга нар хамба энэ тэр чинь орж ирдэг байсан. Энэ чинь их гоё амттай байсан юм... Одоо байчихсан юм шиг л байна. Тийм юм энэ хятдаас орж ирдэг байсан юм, хятдаас авчирдаг байсан юм, хужаагаас. Тэгээд овоо л өнөө дайн байлдаан зогсоод нэгдэлжиж бариад л гайгүй сэргээд л юм авчирч байсан хэрэг байх даа. Машин техник тээх (зөөх) болж байсан юм байгаа биз. Тийм л юм ярьдаг байсан юм даа, манайхан. Бид нар ч одоо тэгээд тэгэж л өссөн улс даа. Ийм л юм идэж ууж өссөн юм. Хярамцагийг их иднэ. Гэдэс дотор. Тэгээд толгой шийр их иднэ.

Д : Хярам их, цай их уулгадаггүй байсан гэж ярьдаг юм байна лээ?

Б : Цай нээх уулгахгүй.

Д : Тэр нь ямар учиртай юм бол?

Б : Тэр ер нь хэн мэдэхэв. Хүүхэд цай их уух, за яагаа ч үгүй шар элбэчихнэ гэж байдаг байсан юм. Хүүхэд цайгаар яадаг юм, яагаа ч үгүй шартай болно гээд. Тэрнийг л дотор юугаар л нэг (гэдэс) өөрчлөгддөг байсан байх аа.

Д : Харин тийм цай уулгадаггүй л байсан гэж ярьдаг юм байна лээ.

Б : Тийм цай нээх уулгахгүй хярам л өгнө. Тэгээд тэртэй тэргүй хавар зун болохоор нөгөө айраг таргандаа цадахаар уухгүй л дээ хөө.

Д : Ер нь бол зуны улирал бол мах идэх үү, идэхгүй юу?

Б : Үгүй, борц хийх гэж байхгүй. Хавар ингээд л одоо хавар хэдий багцаатай ч байдаг байсан юм (хэзээ юм бол?) хэн мэдэхэв үүц гээд нүүц гээд л нэг боочихсон мах хагалаад л ногооноор л байсан шиг санагддаг юм (fresh), яасан мууддаггүй байсан юм. Тэр их сайн боодог байсан байх даа, үүц гээд нэг боочихсон мах гаргаж ирээд л тэрийгээ чанаад л иднэ л дээ. Чанаад л айл амьтанд өгөөд л, тэр айлынхаа улс амьтанд өгөөд л, манайх үүцээ хагалсан юм гээд л. Тэрнийг дуусахаар тэгээд л мах авна. Зун ч харин ёстой нэг идэхгүй дээ махыг.

Д : Махсах уу?

Б : Зунсах ч уу махсана аа. Зунсах ч юмгүй дээ. Одоо ингээд яахлаар чинь хавар одоо, тэр үед чинь цас ч их орно, шинээс хойш, цагаан сараас хойш чинь мал төллөөд ирнэ. Мал төллөхөөр газар цоохорлоод, цас цоохорлоод, ингээд цоохор болчихлоор чинь, тэгээд малаа төллөхөөр чинь. За будааны сүү гарлаа гэнэ. Тэгээд нэг уураг чанаж идээд л, будаанд сүү хийж идээд л ер нь тэгээд л махнаас хөндийрч байгаа юм даа. Хааяа нэг тэр, хааяа нэг ээ, нэг их хүйтэн бороотой нэг, дээр ч одоо бороо их ордог байлаа даа. Тэгээд нэг их хүйтэн бороо хэд хоногоор цутгаад байхлаар нэг цус уушиг.. Яагаад борц хийдэггүй байсан юм бол оо, борц ерөөсөө хийдэг байсан юм. Өөх мөөх нь ийм том, өөх хөшиглөөд л бантан хийнэ. Өө тэрний гоё гэж. Өнөө махны бараа хардаггүй болохоор.

Д : Арвайн гурил энэ тэр гэж байсан болов уу? Замбаа?

Б : Арвайн гурил чинь манай энд байдаггүй байсан юм. Тэр замбааны гурил гэдэг чинь энэ говь руу л байдаг байсан гэсэн. Тийм, намайг бага байхад арвайн гурил гэж манай энд чинь нээх үзэгддэггүй л байсан юм даа. Хойно сүүлд бол жаахан орж ирж л байдаг байсан болтой. Тэр замбага гэдэг энэ тэр чинь энэ урагшаа говь руу л байдаг байсан юм гэсэн.

Д : Та мал дээр байж байгаад тэгээд үйлдвэрт ажилд оров уу?

Б : Тийм. Тэгсэн. Би тэгээд мал дээр байж байгаад, САА-д нэг 2 жил хонь маллаад, тэгээд үйлдвэрт ороод, тэгээд үйлвэрт л ажиллаад, үйлдвэрт 30 шахуу жил, 30-аад жил ажилласан даа. Тэгээд тэндээсээ тэтгэвэрт гараад л.

Д : Үйлдвэрт гээд, юуны үйлдвэр байсан юм бол?

Б : Гурилын үйлдвэр. Энэ гурилын үйлдвэр чинь дээр (олон жилийн өмнө) баригдсан шүү дээ, манай энд. Тэгээд л энэ САА-тай чинь бараг зэрэгцэж шахуу баригдсан юм байгаа юм. Гурилын үйлдвэр баригдаж, нэг ойр хавийн улс амьтныг ажилтай болгож байлаа шүү дээ. Хаа байсан тэр л (их хол) Гучин (Гучин ус сум) энэ л Богд могоос(сумын нэр) чинь улсууд ачиж ирээд л, ажилчид ажиллах гэж ирээд л. Малчин ч болгоод тракторын жолооч болгоод л, ажилчин болгоод л үйлдвэрт ажиллуулаад л.

Д : Ихэвчлэн залуу хүмүүс байсан байх даа?

Б : Дандаа залуу хүмүүс, дандаа л миний үеийн залуучууд. Тэгэхэд ч залуу жоохон, дөнгөж хорь гарч байгаа залуу.

4 Социалист үеийн баяр наадам, сүсэг бишрэл

Д : Тэр үед одоо бага (таныг залуу байхад), бага үед баяр наадам гээд л юм болох уу? Ямар ямар баяр болох вэ?

Б : Өө болно. Наадам. Наадам болно доо. Наадамнаас өөр баяр ер нь байхгүй дээ. Наадам болдог байсан юм. Хааяа нэг сонгууль болно, сонгууль болохоор чинь нөгөө сонгуулийнхаа гэрийг юун дээр авчраад, Зуу (Эрдэнэзуу хийд) дээр авчраад хэд хоногийн өмнө барьчихдаг юм. Тэгээд дотор нь шатар даамтай, тэрний юу муутай (юу ч байж магадгүй), ийм радио нөгөө нэг 52 (РОДИНА-52) гэдэг юм байдаг байсан даа, тийм радиотай, тэгээд ингээд нэг самбар энэ тэр. Тэрүүнийг л үзэх гэж нэг юм болно л доо. Тэгээд тэр нь бас их хөөрхөн нэг сонгуулиа хийчихээд нэг морь уралдчихна, бас нэг шатар даамны тэмцээн явуулчихна. Нэг бөх барилдчихна. Тэгээд наадам л байсан юм даа. Наадам чинь сайхан л болдог байсан юм. Өө бид нар чинь, одооны хүүхдүүд бол яасан бол доо. Өглөө эрт босоод өнөө үнээгээ саачихаад, одоо эндээс энэ урагшаа Шанх руу явна тэгээд. Тэгээд үнээгээ саачихаад, нарнаас өмнө сүүгээ өгчихөөд л (тушаачихаад) нөгөө наадмандаа явна даа хөөрхий, мордоод л давхичихна. Цөмөөрөө мордоод л. Тэгээд орой ирээд л үнээгээ сааж сүүгээ өгчихөөд л маргааш өглөө нь дахиад л явна. Гурван өдөр болно,

наадам их гоё болдог байсан шүү дээ, гэрийн? наадам. 3 өдөр болдог, тэгээд нэг 2 өдөр нь хүүхдүүдээ явуулчихна. Гурав дах өдөр нь аав ээж явнаа, настайчууд. Тэгээд одоо бодохноо(бодохлоор) нөгөө 3 дах өдөр явдаг нь архи айраг хамаг юмаа, 3 дах өдөр нь нөгөө хурааж (цуглуулж) уудаг байсан байх. Би тэгэж боддог юм. Тэгээд л наадам гэдэг юм болно доо.

Д : Цагаан сар?

Б : Цагаан сар уу. Нэг хэсэг болгодоггүй байсан шүү дээ. Нэг хэсэг цагаан сарыг чинь, намайг бага байхад хийлгэхгүй, золгуулахгүй. Тэгээд л өнөө бурхан тахил идээ будаагийн чинь засуулахгүй. За авдрандаа ийм энгэртэй авдрандаа хийж байгаад л, орой үдэш нэг юм авдраа онгойлгоод л зулаа өргөдөг энэ тэр л байсан шүү дээ.

Д : Цагаан сараар уу?

Б : Тийм. Нэг хэсэг их хэцүү байдаг байсан шүү дээ, намайг жоохон байхад. Ямарсайндаа одоо тэгэхэв, тэр багийн ухуулагч гээд юмнууд нь яасан ч онгиороо юмнууд байдаг байсан юм. Байнга давхиж ирээд яахгүй (ядаргаатай), байрин чөлөөгүй (үргэлж) давхиж ирээд өнөө тавагтай идээ будаа, бурханы тахил шалгаад болохгүй.

Д : Тэр чинь одоо хэдээд оны үе вэ?

Б : Тэр чинь одоо жаран хэдэн оны үе л байгаа юм даа. Тэр чинь бүр жаран 64,5-н онд ч байна уу, 62,3-н оны үеийн юм байгаа юм даа. 60 оны... Тэгээд 58,9 н он 57,8-н он энэ тэрд бол бүр золгуулахгүй ээ. Сүүлд нь 50 он нилээн гарснаас хойш нэг нэгдэлчдийн баяр гээд ажилчин хүн хийж болохгүй, энэ нэгдлийн малтай улсууд цагаан сар хийдэг юм. Тэгсээр тэгсээр л нэг юм сүүлдээ цагаан сар хийлгэдэг болсон.

Д : Тэр үед бол та бол цагаан сар хийж чадахгүй нь байна шүү дээ тэ?

Б : Чадахгүй. Бид нарыг чинь ажилчин гээд цагаан сар хийлгэхгүй гээд юу яахгүй.

Д : Зулын 25 гэж хийдэг байсан уу, тэр үед?

Б : Би чинь харанхуйгаар явсан болоод зулын 25-ныг чинь мэддэггүй байсан. Хойно л зулын 25 гэж... Настай улсууд тэр зулын 25-ныг хойно, нилээн хойно зулын 25-ныг. Бусад газар хийдэг л байсан байх даа. Би чинь ерөөсөө тэр харанхуйгаар явсаар байгаад сүжиг муутай хүн шүү дээ.

Д : Таныг бага байхад танайд бурхан шүтээн байдаг байсан уу?

Б : Байдаг байсан. Бурханаа нуучихдаг. Бурхан ил тавихдаар өнөө юу гэж загнаад, ямар юм гэдэг билээ, өнөө барьж явчих гээд болохгүй, шашины үлдэгдэл гээд, шарын шашны үлдэгдэл гээд. Тэгээд феодалын үлдэгдэл гээд бурхан тахил ил байлгахгүй. Бурхан тахил чинь харин намайг жоохон байхад энэ хадны хөндийгөөр л их байдаг байсан юм даа. Хадны хонгил ном энэ тэр чинь, юм бурхан. Тэгж л нуудаг байсан байх.

Д : Орой морой бурхнаа гаргаж бас нэг зул хүж өргөх үү, үгүй юу?

- Б : Аа тийм. Нэг ингэсэн авдарандаа залчихаж байгаад орой авдрынхаа өнөө нүүрийг онгойлгочихож байгаад нэг зул мулаа өргөчихнө.
- Д : Орой болгон өргөх үү?
- Б : Орой болгон өргөнө. Тэрийгээ бол орой болгон өргөөд, өглөө бол дээжээ өргөчихнө. Тэгээд бушуухан хаагаад цоожилчихно.
- Д : Бусад айлууд ямар байсан бол?
- Б : Мэдэхгүй одоо, бусад айлууд ямар байсан юм одоо, бага байсан болохоор одоо тийм. Манай л айл байдаг айлууд лав дандаа тиймэрхүү л байдаг байсан.
- Д : Сахиус эд нар зүүх үү хүүхдүүд, зүүхгүй юу?
- Б : Зүүнэ ээ. Нэг ийм ийм юм. Бурхан сахиус энэ тэр, нэг юм булигаар шидчихсэн сахиус энэ тэр олоод зүүлгэчихдэг л байсан юм, бага байхад. Тэрнийг нь арай шалгадаггүй шиг байсан юм байлгүй тийм ээ, том жижиггүй тийм бурхантай.
- Д : Тарни эд нар зааж өгөх үү, одоо ийм айж ичвэл?
- Б : Зааж өгнө. хээр гадаа явахдаа айж ичвэл энийг уншиж байгаарай, одоо цагийн цөвүүнд энийг уншиж байгаарай энэ тэр гэж зааж өгнө өө.
- Д : Аав ээж зааж өгөх үү?
- Б : Аахан. Аав ээж зааж өгнө, өөр хэн зааж өгөхөв дээ.
- Д : Тэр үед ер нь лам хүн гэж байсан юм болов уу?
- Б : Байхгүй, лам хувцастай хүн ерөөсөө үзэгддэггүй байсан, лам хүн бол хааяа байх нь байсан юм шиг байгаа юм. Гэхдээ бол хувцсыг өмснө гэж байхгүй дандаа л зүгээр ийм хар хувцастай.
- Д : Тэгээд мал маллаад л?
- Б : Мал маллаад л зүгээр энгийн, тийм байхгүй бол нөгөө феодалын үлдэгдэл гээд бариад яваад өгнө.
- Д : Эхнэр хүүхэдтэй байх уу, үгүй юу?
- Б : Эхнэр хүүхэдтэй, авгай хүүхэдтэй цугаараа авгай хүүхэдтэй, юунаас гараад л хүрэнээс гараад л авгай хүүхэд авчихсан байдаг байх. Цугаараа л авгай хүүхэдтэй тийм улсууд хойно. Энэ шашин дэлгэрсэн хойно л энэ хүрээ юу, Зуу энэ тэрд л нил суучихсан байгаа юм даа. Тэгэхлээр зэрэг нил л номтой л улс байсан шиг байгаа юм.
- Д : Тэр хүмүүс одоо нууцаар ном энэ тэрээ уншдаг байсан болов уу?
- Б : Аа уншдаг, тэр шөнө уншдаг байсан. Шинээс хойш л лав (цагаан сар) настай хүн их авчраад, бүр шөнө болсон хойно л өрхөө дөрвөлжилчихэж байгаад л ном уншуулдаг байсан юм даг. Өрх татаатай үгүй бол хүн ороод ирэх юм уу, яах юм. Тэгэж шөнө орой л тэгэж нэг уншдаг байсан, дуу чимээ тэр юунаас л яадаг байх.
- Д : Ламаас хааяа юм хум асуух, асуудаг байсан юм болов уу, яадаг байсан юм бол?

Б : За тэгээд асуух нь асууна. Тэгэхдээ тэр асууж байгаа хүн өөрөө чинь, нөгөө асуулгаж байгаа хүн ч тэр их нууц аятай байж л асуухгүй бол, “өнөө тэр түрүүнээс тийм юм асуугаад мэргэлж байна” гээд ингээд ховлочих юм болвол аль аль нь өнөө хэрэгт унана. Нууц тэгэж л асууж сураглаж байсан дээх нь, сүүл рүүгээ тэгээд арай гайгүй шиг...

Д : Хэдий үеэс ер нь гайгүй болсон юм бол? Ер нь хэдий үеэс бурхан шүтээнээ ил тавьдаг болсон бол, айлууд?

Б : Овоо бүр гайгүй л 70-он шахуулж байж л нэг айхаа байсан юм шүү. Тэрнээс өмнө ер нь бурхан шүтээн яахыг чинь, ер нь тэгээд жаахан айдаг л байсан. Хүний ном мом уншуулах, тэр урьж залах, адис сан тавиулах эд нараас чинь их айна аа. 70-аад он шахуулж байж л нэг арай нэг гайгүй болж, нэг гайгүй болсон юм байгаа юм даа.

Д : Далай лам монголд айлчилахад, айлчилж байхад та тэрийг дуулж байсан уу? Хөдөө байхдаа 60 хэдэн оны далан хэдэн оны үед?

Б : Би тэгэхэд чинь төвд ажил хийдэг байсан.

Д : Та тийм юм дуулсан уу? Тэгэхэд далай лам ирж гэнэ, монголд ирж гэнэ гээд тийм юм дуулж байсан уу?

Б : Аа дуулж байсан. Хотод юу яагаад, далай лам ирээд. Тэр чинь одоо далан хэдэн он байсан юм уу, далаад он байсан юм уу. Нилээн дээр шүү дээ, далай лам хотод морилж ирж гэнэ. Юу хаачихсан, Гандангийн дэнж багтахгүй болчихсон, автобус унааны зам хаагдчихсан байна гэж ярьж байсан. Тэгээд нөгөө буд тарни, будаа ингээд цацахлаар нь тэрнийг нь түүх гэж дарагдаж байна гэнэ энэ тэр гээд л яриад байдаг байсан.

Д : Тэрийг бол одоо, нөгөө нэг тэр үед чинь ямар хүмүүс байсан бэ? Шашингүй үзлийг тэгдэг намын дарга нар энэ тэр байсан юм уу?

Б : Аа нөгөө намынхан.

Д : Тэр хүмүүс бол шашны эсрэг нилээн сурталчилгаа явуулна биз?

Б : Аа зөндөө, зөндөө явуулна. Шашныг чинь дандаа муу хэлчихнэ. Мунхруулга гээд, өчнөөн жил 200-аад жил ч бил үү дарлуулсан гээд л, эд нарыг чинь тэр муу хэлэх ч бүр жигтэйхэн муу хэлнэ. Бүр 80-аад он гартал муу хэлчихсэн хэвээрээ л байдаг байсан. Тэгэж тэгэж л сүүлдээ овоо гайгүй болсон юм байгаа юм.

Сүүлдээ нэг цагаатгал гарваа даа. За тэгээд тэрнээс хойш л арай нэг муу хэлэх нь гайгүй, өө нэг асууж сураглахаар айж ичих нь ч гайгүй.

Д : Танайд ном судар байсан болов уу?

Б : Манайд ном судар байсан л юм байгаа биз, би яачихсан юм мэдэхгүй.

Д : Ном судраа яадаг байсан бол, лам эд нэр авчирч уншуулдаг байсан юм болов уу, зүгээр л?

Б : Ээ дээ, бараг уншуулахгүй дээ. Хааяа нэг хэрэгцээтэй тэр нэг, жилд нэг уншуулдаг ч байсан юм уу, нэг тийм уншуулдаг судар байсан байх.

Тэрнийгээ л хааяа нэг уншуулна. Тэгээд сүүлдээ манайх чинь судартай л байсан айл байгаа юм. Тэгээд ч би хөндийрөөд, өнөө айлын хүн болоод яваад өгсөн. Яасан ийсийн тэгээд байхгүй л болчихсон байх юм байна лээ. Ном нь ч байхгүй, бурхан ч байхгүй аль аль нь байхгүй. Тэр бодвол манай ээж л “аа юухэв” гээд нэг байсан нь болгочихсон байх (алга болгочихсон), зууд өргөчихсөн ч юм уу, яасан юм.

Д : Та бол залуудаа энэ буддын шашны талаар юу гэж боддог байв?

Б : Ёстой юу ч боддоггүй, нээрээ л тийм худлаа л юм байдаг гэж боддог юм. Өнөө мань мэтэд л ярихлаар л дандаа худлаа юм ярьдаг юм чинь. Одоо яахав дандаа л мунхруулдаг, чухам л феодал зеодал элдэв хоёроор л ярьдаг юм чинь. Нээрэн тийм л юм байдаг юм л боддог байсан би чинь.

Д : Артель хаана байсан юм бэ?

Б : Артель уу? Энэ Хужиртад “Хужиртын артель” гэж байсан юм. Энэ Шанхад одоо энэ “Шанхад доод төв” гэж байсан юм. Тэнд бас нэг артель байсан юм. Гутал хийнэ их гоё монгол гутал хийдэг.

Д : Артельд лам нар нилээн ажилладаг байсан болов уу?

Б : Настай л энэ тэр улсууд л ажилладаг байсан юм, тийм байх аа. Сүүлд л үлдсэн хэд нь л лам нар байсан юм даг, энэ Шанх дээр л ажиллаж байсан улсуудын, Хужиртын артельд бол би үнэндээ орж үзээгүй. Хужиртад байдаг байсан, “Хужиртын артель” гээд л. Хужирт чинь ер нь нилээн дээр чинь артельтай, амрагч рашаан сувилалтай, бас тэрүүхэн хавьдаа овоо том сум байсан байх шүү.

5 Соёлын довтолгоон

Д : Соёлын довтолгоон гэж байх үед ямархуу байсан бэ, тэр соёлын довтолгоо?

Б : Өө тийм, соёлын довтолгоо гэж байхад чинь бүр том болчихсон, бүр том хүүхэн. Соёлын довтолгоо ч ёстой нэг үзүүлж өгдөг байсан, сүйд хийнэ гээд. Соёлын довтолгоо, гурван яамны үзлэг гээд. Соёлын довтолгоо ирнэ гээд, гурван яамны үзлэг гээд л.

Д : Соёлын довтолгооноор юу хийх вэ?

Б : Тэр ч их юм хийлгэнэ ээ. Хүн болгон тус тусдаа хөнжилтэй, тус тусдаа хоёр хоёр ээлжийн орны даавуутай, хоёр хоёр ээлжийн хөнжлийн даавуутай, тэгээд яг бэлэн угаачихсан одоо ингээд байж байна. Хоноцын хөнжил гэж бас тусдаа, бас өнөө илүү даавуу юунууд. Тэгээд л өнөө усанд ордог алчуур ванн, тэгээд өнөө хөлийн алчуур энэ тэр гээд хүн болгон нэг нэгтэй. Тэрчээ одоо нэг алж өгдөг байсан. Олон хүүхэдтэй ажлын хажуугаар чинь. Шөнө ядахдаа ингээд муу хүүхдүүдийн гутал тараагаад унтахын ч арга байхгүй. Шөнө орж ирнэ энэ тэр гээд. Шөнө орж ирж үзнэ харна. Тэр үед муу гарвал яана яана гэдэг байлаа, мэдэхгүй. Арай шоронд хийнэ л гэгээгүй шүү дээ. Тэгдэг байсан шүү дээ, тэр соёлын довтолгоон чинь. Тэгээд л нөгөө

- хүүхдийн тоглоомын булан, номын булан, номын сан, ариун цэврийн хэрэгсэл байхгүй юм байхгүй. Тэгээд энэ багананаас нэг нэг дэвтэр зүүчихнэ. Тэгээд л нөгөө дарга, нөгөө хороон дарга орж ирээд л нөгөөдөхийг чинь, долоо хоногт арай л 2 орж ирдэггүй байгаа даа. Үзээд л муу бол өнөө дэвтэр дээр муу байна гээд тавьчихна, сайн гайгүй шиг байвал гайгүй гээд тавьчихна. Тэгээд энэ баганын дээд талын энэ тархи, энэ тоононы дотор талаар эд нэр чинь хөвөнгөөр ингэж үзээд л, яасан хэнхэг улс юм бол. Хөшигний хоолой эд нарыг чинь ингэж арчиж үзээд л тоос гарч байвал муу.
- Д : Энийг одоо хөшиг тагчихсан байдаг, тэр соёлын довтолгооны үеэр оруулж ирсэн зүйл үү, айлууд нэг хөшиг татдаг шүү дээ?
- Б : Тийм, энэ орны урд уу? Тэр чинь өөрсдөө л тэр үеэс гоёж л, гоё л байсан. Тэгээд өнөө айл болгон ийм будагтай гэр биш. Тэр соёлын довтолгоо чинь айл болгон шахуу өнөө бор гэртэй, нөгөө униа угаана, өнгө орох гэж байхгүй. Хусаад л байна хусаад л байна, тэгээд нэг угааж арчаад унь тооноо угаагаад л. Тэр соёлын довтолгоо хэцүү байдагсан, хэцүү юм шиг л санагддагсан.
- Д : Урьд нь бол тэгээд хүмүүс яг хэрэглэдэг байсан уу, тэр даавуу энэ тэрээ. Эсвэл зүгээр хадгалчихаад байж байдаг байсан юм уу?
- Б : Хэрэглэнэ ээ. Олуулаа улс чинь одоо тэгээд л нөмөрч унтаад л өнөө хөнжил юм аа нэмээд л байна, нэмлээд л байна. Тэгээд л өнөө наадуулыг нь нэг юм цэвэр авч байна, гэнэт орж ирээд шалгаад үзэхлээр.
- Д : Цагаан толгойтой ор байсан юм болов уу, модон ор байсан юм болов уу?
- Б : Модон ор голцуу, тэгээд нэг ийм хөх толгойтой, ногоон толгойтой орнууд байдаг байсан юм. Олдож байгаа гоёлын ор нь тэр. Энэ цагаан толгойтой ор чинь тэр орнуудын сүүлд орж ирсэн юм байгаа юм. Манайх төв орж ирээд нэг хөх толгойтой ор тавьчихаад л нэг модон эрээн нөгөө... байсан, жигтэйхэн гоё юм шиг л санагдаж байсан. Одоогоороо манайд байдаг юм, утаа болчихсон. Хөдөөнийх нь бол тийм ор байхгүй. Их гоё нь нэг тийм эрээн нүүртэй ортой, тэгээд дандаа нэг тийм вандан. Вандан гээд нэг ийм хөл хийгээд засчихсан байцгаадаг байсан юм.
- Д : Эвлэлийн гишүүн болох ёстой?
- Б : Аа эвлэлийн гишүүн байна, үйлдвэрчний гишүүн, үйлдвэрчний гишүүн бүр заавал байх ёстой.
- Д : Намын гишүүн заавал байх ёстой юу?
- Б : Аа намын гишүүн арай заавал үгүй. Тэр их сайн ажилтай, ном эрдэм сайтай сайн ажилтай улсууд намын гишүүн байна. Намын гишүүн болоход чинь их маягтай байдаг байсан байх өө. 3 жил дагалддаг, яадаг яадаг гэлээ. 3 жил дагалдан хийж байж намын гишүүн болдог байсан юм гэсэн.
- Д : Тэр үед цалин хөлс амьдралдаа хүрэх үү?
- Б : Хүрнэ. Цалин харин хүрнэ шүү дээ, мөнгө нь юутай, үнэлгээ юу сайтай.

Мөнгө чинь өнөө мөнгө шиг байсан юм, тэр үед чинь. Тэр үед чинь тэгээд хүрдэг байсан юм. Манаач нэг 100, манаач чинь нэг 120, манаач цэвэрлэгч энэ тэр чинь нэг 120 цаасны цалинтай, зарим ахлах эд нар нь арай бас нэг 180 мая, тэгээд энэ үйлдвэрт болвол... будаа тэр юу муугаар нь техник дээр ажиллахлаар гайгүй авна. 350,400 илүү авна. 400 цаас 350 цаас. Тэр үеийн 400 цаас 350 цаас энэ тэр чинь одоог бодох юм бол их юм авдаг мөнгө шүү дээ, их юм авдаг мөнгө. Манайх чинь бид 2 хоёулаа норм хийгээд, би ч өөрөө норм хийдэг, талийгаач ч норм хийдэг, бид 2 харин цалин их авдаг байсан. Тэгээд хүрдэг л байсан.

Д : Бараа таваар ямар байсан бол, гайгүй элбэг үү?

Б : Өө, бараа элбэг, бараа чинь харин гайгүй шүү. Бараа чинь харин гайгүй элбэг байдаг байсан юм. Даалимба маалимба, даалимба ямбуу энэ тэр гээд.

Д : Оросын юм байх уу эсвэл?

Б : Оросын юм байна, дандаа оросынх. Даалимба, ямбуу, тэгээд энэ сатин жигүүн. Одоо ерөөсөө аль нь ч үзэгдэхээ байсан.

Д : Хятад бараа?

Б : Одоо хятад бараа л элбэг.

Д : Хятад бараа тэр үед байсан уу?

Б : Хятад бараа, торго ирдэг байсан. 18-ын торго, 36-ын торго гээд нэг гоё гоё торго, одооны энэ үнэтэй торгонууд байсан. Орос чинь торго муутай газар байгаа юм шүү дээ. Оросоос бол тийм их гоё торго ерөөсөө ирэхгүй. Оросын тэр хамгийн гоё торго нь зөөлхөн нэг иймэрхүү торго байдаг байсан. 22-ынх гээд л. Тэгээд янз янзын дурдангууд их ирнэ, оросоос. Оросынх л гэдэг байсан юм, хаанаас ч ирдэг байсан юм хэн мэдэхэв. Тэгээд тийм бүдүүлэг бараа л их ирнэ дээ. Бид нар ямар тэгж одооны хүүхдүүдтэй адил гоёх биш. Ямбуу даалимбаараа дээл хийгээд өмсчихнө. Гадаа гарахлаараа жигүүн сатинаараа дээл хийгээд өмсчихнө. Аа тэгээд томхон болоод нэг гайгүй их гоёхлоороо нэг торго шоргохоноор дээл хийгээд өмсчихнө. Бид нарын өмсдөг хувцас чинь торго гутал хоёр л байдаг болохлоор хэрэглээ багатай байж дээ. Харин янз бүрийн тэр бэлэн хувцас ховорхон.

Д : Үйлдвэрт орос мэргэжилтэн энэ тэр гэж байсан юм болов уу?

Б : Үйлдвэр чинь өнөө унгарынх болохлоор унгар мэргэжилтнүүд байдаг байсан. Энэ чинь унгар үйлдвэр байсан шүү дээ.

Д : Өө, тийм үү.

Б : Тийм. Тэгээд унгарын мэргэжилтэнүүд байдаг байсан юм. Хоёр гурван унгар байдаг байсан, венгрүүд.

Д : Тэд нар бол энэчээ бүр ингээд?

Б : Тийм, бүр тэр дотор нь тэр байртай, дотроо байрлачихсан. Тэгээд л өнөө ээлж ээлжээ дагаад л өдөр шөнөгүй тэр үйлдвэр дотор явж байдаг, нөгөө заагаад, нөгөө үйлдвэрээ юу яаж өгч л, зааж өгч л.

Д : Орчуулагчтай байсан байхдаа, одоо бодвол?

Б : Аа, тэр орчуулагч байсан л байх даа. Тусгай нээх юм байгаагүй байхаа. Нэг юм дохиод хийгээд тэгэж байгаад. Тэгээд удахгүй тэр хэлийг нь сурчихдаг юм байна лээ шүү дээ, цуг ажиллаж байгаа улсууд нь болохлоор. Энэ чинь унгарынх болохлоор унгар байдаг байсан юм. Тэр урд цахилгаан станц чинь нөгөө юунууд байдаг байсан юм, польшууд байдаг байсан юм. Польшийн тусламжээр баригдсан гээд. Энэ спиртын үйлдвэр эд нарыг чинь...

Д : Малчны хүүхэд эд нар пионерт элснэ эд нар гэж тийм юм байсан болов уу?

Б : Бүгдээрээ пионерууд. Пионер биш хүн гэж нэг байхгүй, цөмөөрөө пионер.

Д : Сургуульд явсан, яваагүй хамаагүй?

Б : Сургуульд явсан, тэр суруульд явсан яваагүй хамаагүй, тэр сургуульд суусан л бол пионер, нөгөө улаан бүчээ зүүгээд л, дээлэн дээрээ зүүчихээд л.

Д : Та зүүж л байв уу?

Б : Ямар форм зорм гэж байх биш, мань мэтийн үед бол дээлэн дээрээ зүүчихээд л.

6 Ардчилсан үеийн шашин шүтлэг ба аж байдал

Д : Энэ нутагт тийм алдартай лам хуварга энэ тэр хүмүүсийн түүх, үүх түүх эд нэр гэж бас байдаг л байх даа?

Б : Аа, байдаг байсан байх. Ёстой мэдэхгүй юм байна. Ямар сайндаа харанхуй дундуур явсаар байгаад харанхуй ирсэн хүн байж байдаг. Үүх түүх юм байдаг л байсан байх. Манай энд нэг “Орхоны багш” л гэж нэг ганцхан хүн байсан юм, ганцхан настай хүн байдаг байсан юм даа, тэр дээшээгээ (голын эх руу ч юм уу ярьж байгаа бололтой).

Д : Та бол одоо тэгээд хэдийнээс бурхан шүтээнээ ингээд залж, залж ирэв?

Б : Үгүй яахав нөгөө нэг ил гараад ирэхлээр... Манайх чинь тэгээд ер нь бурхангүй байсан айл байгаа юм. Тэгэж байгаад сүүлдээ саяхан л энэ, юунаас л нэг, 90-ээд оны үеэс л нэг бурхан залдаг болоод байна.

Д : Тэр лам чинь одоо ямар лам юм бол оо?

Б : Аль лам?

Д : Тэр, цаад талд байгаа фото зураг?

Б : Үгүй, энэ чинь энэ манай хүүхдүүдийн эцэг, аав эцгийн зураг.

Д : Аа, за за.

Д : Би лам хуварга хүн болов уу...

Б : Лам биш.

Д : Аа, одоо энэ бурхануудыг сүүлд залсан уу?

Б : Тийм, сүүлд л... Бурханыхаа нэрийг ч мэддэггүй шүү дээ. Сүүлд л хүүхдүүд...

Д : Судар эд нараа сүүлд залсан, танайд байсан судар уу?

Б : Манайх ерөөсөө сударгүй байсан. Энэ чинь нэг нь манай нэг хүүгийнх юм байгаа юм. Дээд томын тэр 2 жоохоныг нь өнөө нэг 2 хүүхэд, лам хүүхэд байдаг юм, тэр 2 нэг нэгээр нь өгсөн юм.

Д : Аа хүүхэд, лам хүүхэд байна уу (танай хүүхдүүд дотор)?

Б : Манай нэг хүргэн лам юм байгаа юм. Юуны, Зуугийн лам. Сударгүй айл байдаггүй юм гэж лам, тэр арай томхныг нь... Тэр жоохоныг Гомбоо өгсөн юм, манай нэг хүүгийн хүүхэд бас Зууд суудаг лам, тэгээд өгсөн.

Д : Та бол хүүгээ лам болгоход нь дуртай байв уу?

Б : Өнөө юу юм чинь. Тэр наад бага нь бол манай хүүгийн хүүхэд. Тэр том нь бол манай хүргэн байгаа юм. Энэнд дургүй хаанаас байх вэ л дээ. Тэд нар тэгээд тус тусдаа өөр өөрснийхөө дуртай дуртай юмандаа явж байгаа улсыг чинь.

Д : Та бол одоо өдөр болгон Зууд өргөх үү (идээний дээж, зул тахил г.м), эсвэл нөгөө дүйчин өдөр дээр өргөдөг юм уу?

Б : Аа, нэг юм хааяа хааяа өргөнө. Энэ өнөө буян нь дийлээд заримдаа мартчихаад байгаа юм. Санаа нь бол өдөр болгон өргөх санаатай.

Д : Энэ Шанхын хийд хэзээ нээгдсэн юм бол, ер нь?

Б : Энэ Шанхын хийд чинь одоо хэзээ сэргэж нээгдсэн юм...? Саяхан шүү. Нээх удаагүй шүү. 92, гурван оны үед л.

Охин : Нөгөө нэг манай аав 94 онд ойчсон, тэгэхэд дөнгөж сэргэж байсан, 94 онд ном уншуулах гээд...

Б : Өө, тийм талийгаачыг ойчоод юу яахад Шанх дээр очоод бас... Тэгэхэд л дөнгөж сэргэж байсан юм, 92 гурван онд л сэргэсэн.

Д : Тэгэхэд бол нилээн настай хүмүүс хуралд байсан байх даа?

Б : Тийм, гайгүй настай улсууд байсан юм. Одоо настай хүнгүй болсон юм байна лээ. Тэгээд л чааваас даа, өндөр настай болцгоогоод түрүүч тэгээд... Одоо бол хүүхдүүд л голцуу байдаг юм шиг байна лээ.

Д : Одоо энэ Зууд настай лам хуварга хүн байдаг юм болов уу?

Б : Зууд ер нь цөөхөн шүү. Зуу ер нь настай лам гэж хүн ер нь байхгүй. Дандаа л залуу лам. Ер нь Зууд чинь настай лам, ер нь л байхгүй дээ.

Д : Таны үеийн хүмүүсээс лам болсон хүн байдаг болов уу?

Б : Байдаг л байдаг юм аа, хааяа нэг. Одоо ч байхгүй ээ. Миний үеийн хүн, улсаас лам болсон хүн тун ч цөөхөн дөө. Урд Шанхад Шихийхаян л ? байдаг юм. Энэ Зууд ер нь байдаггүй байх өө, юм үзэгдэхгүй юм. Маниас үеийн арай өндөр настангууд нь, настай лам нар нь настай тийм улсууд байдаг юм. Тэгээд хойд үеийнх нь одоо тэгээд нэг гучин хэдээс л доош хорин хэдтэй л та нар шиг ийм хүүхдүүд л лам нар л байх. Манай Зуугийн чинь хамба нь залуухан шүү дээ, гучин хэдтэй л хүн байх. Нөгөө Пүрэвээ чинь арай 40 хүрээгүй биз дээ. Хүрчихсэн үү, ай?

Охин : Хүрчихсэн, 42- той.

- Б : Өө. Тэгвэл Пүрэвээтэй чацуу юм байна, манай Пүрэвсүрэнгэй чацуу юм гэсэн (чацуу юм байна). Их хамба нь... Бага хамба нь бүр залуухан.
- Д : Энэ Зуугийн уу?
- Б : Тийм, бүүр залуухан.
- Д : Хоёр хамба байна уу?
- Б : Хоёр. Их хамба нь зайлуул, лагшин жоохон чилээрхүү байдаг болтой юм, хааяа хааяа суугаад, хааяа хааяа чадахгүй.
- Д : Та бол энэ сүм хийдээр орох уу?
- Б : Орно.
- Д : Ямар үеэр орох вэ, одоо хурал ном уншуулах гэж орох уу?
- Б : Хурал ном уншуулах гэж орно. Тэгээд хааяа нэг дүйцэнгээр энэ тэр очоод мөргөчихдөг юм. Одоо өөрөө бие тааруухан чадахаа байчихсон байгаа юм. Энэ Зуугийн их гэсгүй, их гэсгүй нь тэр манай хүргэн юм байгаа юм.
- Д : Аан, хэн гэдэг хүн байдаг юм бол?
- Б : Эрдэнэчулуун. Их явдаг юм даа, хот хүрээгээр (Улаанбаатар).
- Д : Одоо хотод явж байна уу (хотод байгаа юу)?
- Б : Явж байгаа, одоо хотод.
- Д : Баасансүрэн гээд нөгөө хамба нь байгаа?
- Б : Тийм.
- Д : Хотод явж байх шиг байна лээ бас.
- Б : Аан. Баасансүрэн тэр хоёр, Баасансүрэн манай хэн хоёр чинь чацуу юм гэсэн шүү дээ.
- Д : Аа лам хоёр уу (хүүхэд нь)?
- Б : Лам хоёр чацуу. Нэг нь нэг ах гэл үү. Чацуу л юм гэсэн. Тийм одоо хотод явж байгаа. Урагшаа энэ Утаагүмбэн мүмбэн их явдаг юм аа, манай тэр хүргэн чинь.
- Д : Энэчээнээ лам болсон хүн үү эсвэл?
- Б : Тийм энд лам болсон, бүр жаахнаасаа л болсон.
- Д : 90-ээд он гараад нэг бага насны хүүхдүүд лам болж байсан тэр үед?
- Б : Ай тийм, тэр үеэр л лам... .
- Д : Тэр үед яагаад тэгэж жоохон хүүхдүүд лам болж байсан юм болоо?
- Б : Хэн мэдэхэв. Нээх их ламд л дурладаг байсан юм. Одоо ч гэсэн жаахан банди нар лам больё гэх сонсогдож байх юм байна шүү дээ.
- Д : Өөрсдөө юу?
- Б : Өөрсдөө. Энэ лам л их аятайхан санагддаг байлгүй. Манайхнаас л тэр манай хүүхдүүдийн жаахан банди нар, банди энэ тэр зарим нь лам болох юмсан гэж байх юм байна лээ. Манайхаас тэр манай нэг хүүгийн хүүхэд Зууд лам юм байгаа юм. Бас нэг хүргэний хүүхэд бас лам.
- Д : Энэ дээр нөгөө нэг (энд) өөр, одоо чинь 90 оноос хойш бурханы шашнаас өөр бас шашинууд байна, одоо хүмүүсийг...?

Б : Өө энд байгаа, энд нөгөө нэг юу гээд Есүс гээд нэг юм байгаа.

Д : Аа за.

Б : Дуулуулаад л. Нэг юм байдаг юм байна лээ, энүүхэнд.

Тэр Есүс бол нилээн удаж байгаа шүү, нилээн дээхнэ орж ирсэн. Одоо байдаг байх аа, байдаг юм шиг байна лээ. Байгаа байгаа.

Д : Хүүхэд залуучууд очдог юм болов уу?

Б : Өө хүүхэд залуучууд анх ирэхэд зөндөө очдог байсан. Одоо чухам мэдэхгүй яадаг юм бол доо. Манай эндээс чинь одоо тэр юу болчихсон залуучууд бишгүй л байдаг юм байна лээ шүү дээ, ажилчин ч гэдэг юм уу, даамал ч гэдэг юмуу (дарга). Тэр чинь тэгээд анх эхлээд ном тараагаад, гудмаар гудамжаар явж байгаа хүүхдүүд, энэ хашаа завсар мавсараар энэ тэр жижиг ном өгөөд л энэ тэр байдаг байсан. Одоо харин байсан (больсон) юм шиг байгаа юмаа. Хоол унд өгөөд л энэ тэр байдаг байсан юм гэнэ лээ.

Д : Энд нэг сургууль байдаг юм байна шүү дээ тэ, шашны?

Б : Тийм, тэр лүү юу, шашны дээд сургууль байдаг юм. Тэрний чинь захирал хийдэг юм, манай тэр хүргэн. Энэ Зуугийн лам нар чинь юу яадаг юм байна лээ шүү дээ, давхар давхараар нь хийдэг юм байлаа шүү дээ, ажлаа. Нөгөө улсаас цалин мөнгө гэх юм байдаггүй байх, юугаараа л болдог болохлоороо (өргөл барьц).

Д : Социализмын үед ер нь шашныг их хяхаж хавчдаг байсан юм болов уу, яадаг байсан юм бол?

Б : Харин зөндөө хавчдаг байсан юм, энэ шашныг чинь. Социализмын үед чинь харин нэг үзүүлж өгнө, энийг чинь хавчих гэж. Ямар сайндаа л асууж сураглаж чадахгүй болох вэ дээ. Хааяа нэг лам, хааяа нэг гайгүй хүний хүүхэд шуухад асуумаар болохлоор чинь нууж хааж шөнө орой үдэш л асууна болохоос биш тэгээд хамаа намбаагүй (замбараагүй) нэг очоод асуучихгүй. Тун үгүйдээ нэг... Ардчилал гараад яг илэн далангүй болсон юм чинь. Тэрнээс өмнө нууц л байдаг байсан шүү дээ.

Охин : Би их сайн санаад байдаг юм. Наян хэдэн онд л лав манай ээж аавыг бурхнаас, Цэрэннадмид дарга, тэр үед л далд хийгээрэй гээд байсан санагддаг юм.

Б : Харин тийм. Тэгэхэд чинь харин наян хэдэн он энэ тэр чинь бурхныг чинь гаргуулахгүй шүү. Их нууна аа, тэрийг чинь. Чийдэлэг хүртэл энэ (таньдаг хүн) Даваасүрэнг нөгөө нэг өвдөхөд Шанх руу очиж асуух гээд л (ламаас) шөнө явж байсан шүү дээ. Нилээн урд шүү дээ тэр чинь. Шөнө асуучихаад эргэж ирж байсан юм. Айгаад байх юмаа гээд, тэр асуусан хүнээ айгаад байх юмаа гээд тэгэж байсан. Шанхад очиж асууж байсан, тэнд ламтай байсан. Нутгийнхан бол мэднэ, сайн хүн гэдэг ээ. Хэрэв ил мэдвэл өнөө феодал зеодал гээд өнөө сүйд хийх юм байгаа биз.

Д : Овоо эд нар тахидаггүй байсан байх даа?

Б : Аа, үгүй. Овоог тахина гэж, овоо тахилга гэж байдаггүй байсан. Ардчилал гараад л энэ овоогий чинь хаа сайгүй тахидаг болсон. Түүнээс биш тэр овоо тахих барих тийм мэтийн юм ер, тэр тахиж байвал бариад авах байлгүй, аваад явчих байлгүй. Тэр үед чинь нөгөө нэг өөрийн хөрөнгө гэх юм байхгүй болохлоор ажлаас хөөнө гэж их далайлгадаг байлаа шүү дээ. Ажлаас чинь хөөнө гээд, дарга нь хөөнө гээд.

Д : Зүгээр арц хүж уугиулна гэж байх уу, тэр үед?

Б : Аа, уугиулна. Арцыг чинь болохлоор, арцаа уугиулж бай гээд байна шүү дээ. Юу яадаг гээд 100 метрийн дотор ариутгаж байдаг гээд, арц уугиулж бай л гээд байдаг юм. Арцыг харин уугиулахад зүгээр.

Д : Тэгээд өөрсдийгөө одоо нөгөө нэг ингэж утдаг эд нэр тийм арвил хийх үү?

Б : Арвил уу? Өөрснөө арвила, хийхээр болбол болохгүй юм байгаа биз. Лав л хүүхэд эмнэлэгт хэвтээд гаднаас арц оруулахлаар “Шанхынхан ингэдэг” гээд аашилчаад байдаг байсан юм даа, арвиллаа гээд аашилчаад(загнаад) байдаг байсан. Би өнөө нэг Зул(хүүхэд нь) хэвтчихээд, нилээн хойно шүү дээ, 1-р ангид сууж байсан юм, тэгээд өөр нэг таньдаг өөрийнхөө нутгийн тийм жижүүр, сувилагч жижүүр хийж байхад оруулахгүй бол(арц), оруулахгүй шүү дээ. Шанхынхан ламаа шүтдэг, арц орууллаа гээд.

Д : Тэгвэл нэг сан, арц хүж бол уугиулчихдаг л байж.

Б : Тийм уугиулна. Тэгээд хойно (later) энэ ардчилаас чинь хойш ёстой нэг айхаа больсон юм даа, бурхан тахил лам хуварга яаж ч байсан нэг айхгүй.

Д : Сүсэгтний холбоо гээд л нэг юм гарч байсан даа тэ, 90 ээд оноос чинь хойш?

Б : За тийм.

Д : Тэр хүмүүс эд нар ирж бас сүмийг дэмжсэн байх даа?

Б : Аа, тийм байх даа, би нээх сайн мэдэхгүй юм.

Д : Таныг бага байхад судар ном ингээд, гэрээ тойрч ингэж гороолж тийм зан үйл хийдэг байсан уу?

Б : Хийнэ, орой үдэш болохлоор үдэш л гэрээ ингээд, судраа бариад гэрээ эргэдэг (тойрдог) байсан.

Д : Тэрийг нь хүүхэд нь барьж эргэх үү, эсвэл том хүн нь эргэх үү?

Б : Бид нар өөрснөө л эргэдэг байсан, тэгээд яадаг байсан юм мэдэхгүй. Бүсээ бүсэлчихээд, малгайгаа өмсчихээд их ёстой эргэнэ тэр чинь. Хэд ч эргэлт хийдэг, тэгээд дүнгэр дүнгэр гээд л эргээд байдаг байсан юм. Маань тарниа уншаад л эргэдэг байсан байлгүй.

Охин : Зууд тэгээд ерөөсөө лам хүн байхгүй байсан юм байх даа?

Б : Байгаагүй. Энэ Зуу чинь ерөөсөө бүр нурчихсан байсан. Энэ суварга одоо энэ гадаад талын суварганууд цөмөөрөө толгой байхгүй. Ашиглахгүй ингээд тэгээд нураачихсан. Тэгээд энэ чинь сүүлд нь далан хэдэн оноос эхэлж засаад, музей болгож байгаа гэж засаад, музей болгоно гэж гоё засаад. Тэгээд

музей болж байсаар сүүлдээ ламтай хуралтай болсон юм.

Д : Энэ хурлын лам нар эндхийн хүүхдүүд үү, эндхийн лам нар уу, эсвэл?

Б : Ер нь л эндхийнх. Манай энд Зууд чинь олон ламтай, намар хурал мурлаар бол зөндөө олон ламтай болчихдог юм, хурал дүйцэн, дүйцэнгийн хурлаар бол их олон.

Д : Хүүхэд эд нараа нэр өгөхөд бас нэг хуучны лам хүн дээр очиж нэр эд нараа авдаг байсан уу, өөрсдөө л өгчих үү?

Б : Авна. Өөрснөө голцуу өгнө, тэгээд авна, тэгээд настай хүнээс авдаг байсан. Нууцаар очиж авна. Манай талийгчийн хамаатан юм гэнэ лээ, нэг их сайн лам л гэж ярьдаг юм. 1-р хороонд байсан юм гэсэн. Даваасүрэнгийн (хүүхэд) нэрийг тэр ламаас авсан юм шүү дээ. Тэгээд л Анжаа дээр л оч гээд манай талийгчийн ээж нь За чи Анжаа дээр л оч, тэгээд орой сэмхэн шиг л очоорой. Тэгэхэд чинь өнөө жаран хэдэн он, 62 он байсан бил үү, нилээн оройхон шиг л очоорой. Нэрийг нь асуучихаад л өлгийний өнгийг нь асуучихаад л. Их сайн хүн (мундаг) гэдэг л байсан юм. Тэгээд тэр хүнээс л авсан юм. Тэгээд “Даваасүрэн” нэр өгчихөөд, шар юмаар өлгий хий гэж хэлчихээд “За за одоо тэгээд сүүлчийнх нь чи өөрөө л өгөөд байгаарай (дараагийн хүүхдүүддээ өөрөө нэр өгөөрэй), Өшөө хүнээс асуухын хэрэггүй шүү. Гаргасан гариг дээр нь сүрэн нэмээд л өгөөд байгаарай. Ямар л гаригт гарна, тэгээд л дээрээс нь сүрэн нэмээд л өгөөд байгаарай”, тэгэж байсан гэсэн.

Д : Хүн нас барахад бас алтан сав эд нарыг нь бас нууцаар нээлгүүлдэг байсан юм болов уу, яадаг байсан юм бол?

Б : За нээлгэдэг байсан юм. Нээдэг хүн ч ёстой ховорхон доо. Ганц хүн л, Шанхад л ганцхан хүн нээдэг байсан юм гэнэ лээ. Тэгээд сүүлдээ энүүгээр нээдэг хүн байсан л байх. За бараг нээлгэхдүй дээ, тэрнээс их айна. Тэр алтан сав нээлгэж, явж мэдэгдвэл болохгүй гээд л.

Д : Хүн одоо өнгөрөхөд яаж хөдөөлүүлэх вэ зүгээр л, өдөр судраа харахгүй зүгээр л хөдөөлүүлчих үү?

Б : Өдрөө харна. Өдрийн зөөлөн, гаригийн зөөлнийг харалгүй яахав. Хараад л тэгээд, тэр ч одоо өнөө... .

Д : Өөрсдөө харах уу?

Б : Өөрсдөө л нэг өнөө даваа баасан гэдгээрээ тоолж байгаад л. Тэгээд намайг бага байхад чинь нээх юм ч болдоггүй байсан шүү дээ. Үхэр тэргэн дээр ч юм уу тавиад л яваад өгдөг л байсан.

Д : Ил тавьдаг байсан юм уу?

Б : Ил тавьдаг байсан. Тэр үед чинь олон хүний ч хэрэггүй, тэгээд нэг ганцхан хүн л яваад өгнө. Хүү нь ч юм уу тэр өөрийх нь дотны хүн ч юм уу, тусгай тэгэж гаргадаг ч хүн байна. Тийм нэг ганцхан тийм хүн, ганцаараа тэр үхэр тэргээ хөтлөөд л яваад өгнө.

Д : Тэгээд яахав зул мул бас барих уу?

Б : Өө барьна. Зулаа өргөнө, зулаа өргөж ном маань юугаа уншилгүй яахав өөрснөө.

Д : Тэрийг нь бол нээх хорьдоггүй байсан юм байх даа.

Б : Тэрийг нь мэдэгдэхгүй л, нууцаар л. Тэрийгээ бол нэг их тэгэж дэлгэрэнгүй мэдэгдэхгүй.

Д : Ёолк гээд нэг баяр чинь одоо хэдийнээс орж ирсэн юм бэ, монголд?

Б : Нилээн дээр орж ирсэн юм даа. Манай энд л лав САА дөнгөж байгуулагдаад байгуулагдсныхаа жил л ёолк хийж байсан. Чухам монголд, тэр хот мотоор хэдийд орж ирснийг нь мэдэхгүй.

Д : Яаж тэмдэглэдэг байсан юм бол, одоо нэг кинон дээр гардаг шиг л өвлийн өвгөн эд нар гэдэг байсан юм уу?

Б : Өө тийм. Өвлийн өвгөн, тэгээд л өнөө юутай нэг цасан охидуудтай бүжгээ хийнэ. Өвлийн өвгөн нь нээх цагаан таяг тулсан сахалтай өвгөн л байдаг сан. Тэр үеийн чинь ёолкны чимэглэл энэ тэр гэж янзын юм байнаа. Утас ингэж татаж байгаад, хөвөнг ингээд имэрч, тэгээд нэг цаасаар нэг хэл мэлхэн хяргаад? Будаад будаад давхарлаад. Гинж минж, цаасаар ингээд гинж хийдэг байсан, та нарын үед ч хийдэг байсан даа. Манай хөдөөд л лав хийлгэдэг байсан. Одоо юунд яадаг бол, цаасаар ингэж өнгө өнгөөр будаж гинж хийдэг. Одоотой адил тийм гоёл засал байхгүй.

Д : Энэ ногоон мод бас оруулж ирэх үү?

Б : Энэ ногоон модоо болохлоор өнөө уулнаас авчираад. Харин одоо энэ сүүлдээ модтой болоод уулын мод авахаа больсон юм шиг байна. Уулнаас ногоон модоо олж ирнэ.

Д : Тэр нь бол айл болгон тэгэх үү, эсвэл зүгээр?

Б : Үгүй, айлууд бол хийхгүй. Зүгээр л энэ САА-н албан газрууд л хийдэг.

Д : Айлууд бол ер нь тэмдэглэдэг байсан уу?

Б : Тэмдэглэнэ. Тэгэхдээ тэгж нэг их сүртэй тэгэж ёолк молк засахгүй. Сүүл рүүгээ л 90-ээд оны үе, 90-ээд оноос хойш л хүүхэддээ л ёолк засах ёстой л гэж засдаг болсон. Би ч тийм мэтийн юманд муу, манайх бол ер тэгэж ёолк молк засах юм болдоггүй байсан.

Д : Тэр үед орсууд байсан юм болов уу ер нь Хархоринд?

Б : Байхгүй байсан байх. Орос гэж ер нь юм мэдэгддэггүй байсан, ер нь юм үзэгдэггүй.

Д : Хятдууд?

Б : Өө байхгүй. Хятдууд чинь энэ шуудуу барьж байгаад, шуудуугаа барьж дуусчихаад, хуу хамаад хөөгөөд гаргачихсан. Энэ урагшаа энэ, манай Хархоринд бол хятад ерөөсөө байгаагүй байх. Хааяа нэг үгүй ганц нэгхэн хөгшин луухаан л юу байсан юм гэхээс биш ерөөсөө. Энэ урагшаа энэ Шанх руу л хөгшин тийм ганц хоёр хөгшин хятдууд байдаг байсан. Тэр чинь өнөө энүүгээр ингээд байсан хятдыг нь нөгөө гамин цувах гэж нэг юм болоод

тэрэнд тараад, тэр нь үнсэн товрого хийчэхээд, үлдсэнийг нь хамаад аваад явчихсан юм гэнэ лээ, ерөөсөө дийлэхгүй.

Д : Аа бүр дээр.

Б : Бүр дээр.

Д : Хорин хэдэн онд уу?

Б : Тийм тэгээд хятадгүй болгоод. Тэгээд үлдсэн хятдыг нь энэчээ намайг нэг жаахан байхад одоо, тавин хэдэн онд байсан юм тэгээд, муухан мэддэг юм. Тэгээд үлдсэн хятад энэ хотоор дүүрэн хятад л гээд байдаг байсан юм. Үлдсэн хятдыг нь хуу хамаад хөөгөөд гаргачихсан юм. Тэгээд овоо хятадгүй болчихсон байсан. Одоо л хятад элбэгшиж байгаа болхоос биш. Хятад эзэлвэл ч горьгүй улс юм гэсэн дээ базарвааний хум пад.

Д : Оросуудад их сайн байсан биз тэр үед?

Б : Аа оросуудад сайн байсан. Оросыг магтаад л байдаг байсан. Оросыг янзын магтна. Манай орос ах нар гээд л магтаад байх нь тэр.

Д : Ер нь хүмүүс одоо манайхан их архи ууна гээд л байх юм, тэр үед ер нь архи их хэрэглэдэг байсан юм уу, яадаг байсан юм бол?

Б : Барагтай л хэрэглэхгүй архийг чинь. Архи чинь ховорхон ч одоотой адил ингэж ийм орос архи мархи чинь ер нь тун ховорхон шүү дээ. Хааяа л нэг нэг манахуал (монополь) гээд нэг хааяа сургийг нь нэг... За даа нэг найр хурим хийж байгаа айл бол нэг хоёр шил юм уу тийм л архитай байдаг байсан. Манахуал л гээд манахуал л гэдэг байсан юм тэр нь тэгээд тийм юу байдаг байсан юм уу, яадаг байсан юм. Тэгээд л өнөө монгол архи, нэрмэл, нэрмэлийн айрагтайгаа л. Цагаан сар мараар чинь болвол энэ орос архи чинь байхгүй шүү дээ. Тэр монгол нэрмэлийн энэ ч их жоохон, нэг айлд нэг яахав боллоцгоогоороо тэгээд 2 литр ч юм уу, нэг гурван литр ч юм уу тэр хярааны л нэг тийм, нэг ваар маарандаа нэг тийм архитай. Тэгээд л айргаа ууна. Одоотой адилхан эмх замбараагүй байгаагүй. Тун ядахнаа нэг ингээд суусан ч эрэмбээрээ сууна. Тэгээд хамгийн настай нь хамгийн дээр нь насныхаа яг эрэмбээр. Тэгээд л бага хүүхэд шуухдууд чинь тэр доогуур тэгээд. Тэр архи дарсаа уухлаараа гучаас доош насны хүнд өгөхчихгүй. Тэр хойгуур тэр хэдэн донхойсон өвгөнүүд л хоорондоо тэрнийгээ ууна.

Д : Энэ үйлдвэрийн ажилладаг эд нар бас нээх уухгүй юу?

Б : Тэр үед бол уудаг л байсан, гэхдээ одоотой адил ийм их зүг замбараагүй хавтгайрахгүй. Хааяа л нэг баяр ёслолын үеэр л нэг чиг чиглэлээрээ яахав нэг цех цехээрээ яахав нэг нийлдэг нэг нь нийлнэ. Тэрнээс биш ингэж хавтгайраад л жигтэйхэн уугаад байхгүй. Ер нь архи чинь гайгүй л байсан юм, ойрын нэг хэдэн жил л бүр алийгаа алдаад байгаа юм. Архи нь ч элбэг болсон юм, мөнгө нь ч элбэг болсон юм даа. Мөнгө чинь тэгээд нэг ховор юм шиг болж ирээд элбэг юм шиг байх юм байна шүү дээ, одооны чинь мөнгө.

Д : Тэр үед залуучууд одоо нэг гуч дөчөөд насны эр улс ч юм уу ингээд юм хум асуух болвол бие биенээсээ сайн таньдаг лам үздэг хардаг хүн байна уу, тэгээд бие биенээсээ бас жоохон сураглаж асуух уу?

Б : Аа, тэгнэ. Тэгэж байгаад ер нь тэгээд аав ээж голцуу асууж өгнө дөө. Өөрснөө ч ер нь нэг их явахгүй. Тэгээд нэг дөч эргэм насны гуч, нэлээн гарсан энэ тэр улсууд чинь тэр найр майран дээр хааяа юу яадаг шүү дээ. Одоо бага байхад чинь юу уухлаараа архи уухлаараа одоо томчуул нь энүүгээрээ суучихна, хааяа аягатай архи ирэхлээр нь нилээн ингэж хүн хүн лүү ингэж байгаад л нуудаг байсан байлгүй. Том улсууд руугаа нилээн хялалзаж байгаад л уучихаж байдаг сан. Тийм л дэгтэй байсан юм. Одоо болвол энэ хүүхдүүдэд ч дэг алга, эд нар ч дэг байхгүй. Архийг чинь тэгэж хавтгайрдаггүй байсан юмаа. Сүүлдээ л ахисаар ахисаар ахисаар одоо ч бүр алиа алдсан болтой юм. Одоо нэг солонгос кино чинь гэж бас нэг архины, энэ нэг хүүхдүүдэд нэг архины юу байх юм, архины эх үүсвэр тавьж өгдөг кино байх юм. Одоо энэ солонгос ингээд харж байхад чинь тэр жоохон жоохон охидууд л тэр чинь байнга л архи уугаад байна. Шал согтуу тэгээд архи уугаад тэгэж согтоод ойчихоор нь нэгийгээ үүрээд гүйгээд алга бочих юм. Энэ солонгос кино гэж бас нэг архи уух үүсвэр тавьж тавигдаж байхын гээд. Тэгээд л жаал тэгэж байгаад л нэгийгээ хүзүүн дээрээ тавиад л алга болчих юм.

Д : Тэр үед гэр бүл болоход аав ээж нь танилцуулдаг байсан юм уу аль эсвэл, өөрсдөө хоорондоо танилцаад сууцгаадаг байсан юм?

Б : Үгүй, үгүй. Өөрснөө л хоорондоо нэг юм танилцсан болоод л нуугдаад л, ухаан алдчихна тэр чинь, жигтэйхэн айна.

Д : Аав ээж нь бас нэг хүн амьтанаас нас жил нь болсон уу үгүй юу гэж хүн амьтнаас бас асуудаг байсан болов уу?

Б : Мэдэхгүй, асуудаг л байсан байхдаа, чухам яадаг байсан юм бол, мэдэхгүй юм даа одоо. Өөрснөө л нэг. Тэр аав ээжийгээс чинь бүр ухаан алдчихна, жигтэйхэн айна. Нуугдаж л нэг юм нууцаар л...

Д : Танай талийгаач хүүхдүүдийнхээ нэрийг өөрөө л өгсөн үү?

Б : Өөрөө л өгсөн.

Д : Хүн амьтнаас асуугаагүй юу?

Б : Үгүй дандаа л өөрөө өгдөг байсан.

Айна ичнэ ч гэж жигтэйхэн, ичимхий ч байдаг байсан юм байлгүй ээж ааваасаа айна. Нөгөө танилцах гэж байгаа хүнээ харахлаар ухаан алдчихна. Тиймэрхүү л байсан юм даа бид нар чинь. Тэгэж яваад л нэг юм танилцаад.

Д : Бэр гуйх гэж байсан юм болов уу?

Б : Тэр бэр гуйх чинь тэр юутай улсад л байсан байх. Тэр нөгөө нэг баян ноёд моёд тийм л удам залгадаг улсад л байсан байх. Маний үед байгаагүй юмаа тэр чинь, маниас өмнө л байсан байх. Маний чинь үед чи мэдэх үү юу яадаг

л байсан шүү дээ. За өнөө шөнө, өнөө шөнө нэг морь хөтлөөд ирнэ, тэгээд шөнө төдийгий л багцаанд гараад ирээрэй гээд л. Яг энэ хувцас дээлтэйгээ ч хамаагүй гараад л нөгөө хоёр морьтой энэ жалганд л зогсч байна. Би лав тэгэж байсан юм. Дээл хувцасаа авч чадвал, өдөр энэ тэр ээжийн чинь чөлөө заваар дээл хувцасаа авч чадвал өмсчихнө, чадахгүй бол тэгээд нөгөө гэрийнхээ дээлтэй.

Д : Аа тэгээд тэр хүнтэйгээ яваад өгөх үү?

Б : Тэгээд л өнөө морио унаад л яваад өгнө.

Д : Тэгэж уулзаж байгаа юм уу, эсвэл гэр бүл болж байгаа юм уу?

Б : Гэр бүл болж байгаа юм. Аав ээжээсээ нуугаад. Тэгээд хойноос очоод хөөгөөд ирэхийг нь яахав бас тэгээд.

Д : Аав ээж нь гадарладаг л байсан байх даа?

Б : Мэднэ л дээ тэрийгээ, мэдэлгүй яахав. Тэгээд нэг өдөр үзүүлдэг байсан байлгүй бодвол. Заавал аваачдаг ёстой гээд ардаас очоод хөөгөөд аваад ирнэ.

Д : Хурим найр хийнэ, хийхгүй юу?

Б : Зун бол хийдэг л байсан байлгүй. Би ч хурим найр ч гэж мэдэхгүй хийж ч байгаагүй. Өвөл ч байлуу даа, өвөл байсан санагдаж байна. Нэг тавагтай идээтэй тэгээд намайг очиход нэг тавагтай идээтэй, ээж нь нэг мах чанаад л тавьчихсан л байсан даа. Талийгаач ээждээ ч хэлээгүй гэсэн. Тэгсэн энэ орой болсон хойно энэ 2 морь эмээллээд эмээлтэй морь хөтлөөд явчихлаа, яах гэж байгаа юм болов оо гэж нөгөө айлынхаа хүнээс асуусан юм байлгүй, талийгаачын ээж нь. Тэгэхлээр наадах чинь Бадамхандыг л авчрах гэж байгаа байлгүй гэсэн. Тэгэхлээр нь нээрэн тэгэх гэж байгаа юм байхдаа гээд л нэг цай чаначихаад хүлээгээд байсан чинь байдаггүй нэлээн орой болсон байлгүй тэр бодвол. Өвөл байсан юм, тэр чинь өвөл байсан санагдаад байгаа юм. Бага ч байсан юм даа зайлуул.

Д : Гэр барьж өгөх үү?

Б : Барьж өгнө. Манайх чинь гэртээ байж байгаад, тэгээд энэ жоохон бор гэртээ байж байгаад л сүүлдээ өөрснөө гэр барьж авсан.

Д : Үйлдвэрт ажиллаж байсан хүмүүс болохоор дотуур байр майр гэж байсан юм уу аль эсвэл?

Б : Байхгүй дандаа л өөрснөө л гэртэй. Сүүлд нэг үйлдвэрийн байр гээд нэг юм байдаг байсан. Байранд орох дургүй бас тэрэнд. Байранд нэг их дасаа ч үгүй болохлоор.

Д : Халуун байдаг байсан юм болов уу, яадаг байсан юм бол?

Б : Хүйтэн байдаг байсан юм болов уу. Өвөл байрныхан хөлдөж үхэх гэж байдаг л гэж яриад байдаг байсан юм. Халаалга муутай л байсан байх. Сүүлд нэг тийм үйлдвэрийн байр ажилчдын байр гээд нэг хоёр давхар юм байдаг байсан. Тэрүүнд нь нэг хэдэн айл байх. Цөөхөн тэр айл нь өвөл хөлдөж үхэх гээд байдаг л юм ярьдаг байсан шүү дээ. Хүйтэн байдаг байсан, халаалга

муутай. Тэгээд сүүлд нь ардчилал гараагүй юу, яагаав өнөө хувьчлаад. Тэр ч ёстой нэг хүний байранд байх чинь дэмий золиг байлээ дээ. Нөгөө хувьчлаад хөөгөөд гаргачихсан. Тэгээд нөгөө байранд байсан улс чинь түрүүн сайн ч муу ч нэг ийм овгор юмтай байсан бол нөгөөхийгөө байхгүй болгочихсон гэвдэж байсан шүү дээ хөөж гаргачихаар л.

Д : Хувьчлалын нэг цаас гэд нэг юм өгсөн үү?

Б : Аа тийм нэг юмнууд өгсөн. Хувьцаа гээд нэг юмнууд өгсөн. Манайд одоо юу нь байгаа шүү дээ, нөгөө хөх тасалбар нь байгаа.

Д : Аа нэг юм далбаатай юу (төрийн далбаа)?

Б : Жижиг ягааныг нь зарчихсан, тэр дор нь зарчихсан. Тэр юугы чинь хэзээ ч л устахгүй үрэгдэхгүй, хүүхэд шуухад үрийн үед наадах чинь үнэт цаас л гэж өгсөн шүү дээ, анх өгөхдөө бол. За тэгээд тэрний учрыг нь ч олохгүй юм яадаг ч юм тэр нь, манайд зургаа долоо ч байгаа. Одоо л харин нэг хувьцаа гэж яриад байх юм. Энэ одоо авдаг газар байдаг юм бол энийг өгөх юмсан гэж хааяа би бодож байдаг юм.

Д : Ардчилал ер нь гарч байхад хүмүүс ер нь ам ямархуу байсан юм бол?

Б : Аа янз янз л байдаг байсан. Зарим нь дайн байлдаан байхгүй сайхан цаг эргэлээ л гэж байдаг, цаг сайхан эргэлээ л гэж байдаг. Зарим нь ч аа энэ цаг төр 60 настай л юм гэнэ лээ, 70 насалчихлаа 10 жил илүү насалчихаад эргэж болчихсон л гэж ярьдаг байсан.

Д : Ярьдаг хүмүүс нь болохлоор ямар одоо ямархуу хүмүүс ярьдаг байсан юм?

Б : Настайвтархан улсууд л ярьдаг байсан. Одоо маниас л дээш л нэг тэр үед нэг 40, 50 энэ тэр хүрсэн. 50 гарсан 60-аад насны энэ тэр улсууд байдаг байсан. Анх эхлээд хувьсгал ялж (1921 он) энүүгээр чинь лам нарыг сүйтгэж байхад цаг нь болсон юм яахав. Энэ төр ч яахав дээ богинохон настай төр нэг 60 настай төр байгаа юм гэж лам нар тэгэж байсан юм гэнэ билээ. Харин 70 насалчихлаа энэ тэр гээд улсууд тэгэж л ярьдаг байсан шүү дээ. 10 жил илүү насалчихлаа энэ тэр гээд. Зарим нь сайн цаг ирлээ гэж яриад л зарим нь муу цаг ирлээ гэж яриад л байдаг байсан, хүн хүн тэгэлгүй яахав дээ.

Д : Танд юу гэж санагдаж байсан?

Б : Би ч одоо сайныг нь ч мэдэхгүй мууг ч мэдэхгүй. Яадаг юм бол доо л гэж бодож байсан шүү дээ. За аль нь ч яахав дээ нээх их зовохгүй болвол аль ч төр нь яахав л гэж боддог.

Д : Тэр үед малчид өөрсдийн дураар нэг идэшний юм гаргачих эрхтэй байсан юм болов уу?

Б : Өө эрхтэй. Идшээ бол нэг юм идчихнэ.

Д : Сүү саалиа?

Б : Сүү саалиа нь ч. Сүү саалиа яахав нөгөө зун өнөө норм сүүгээ өгчихнө заводад. Тэгээд тэрнийгээ давчихвал тэгээд өшөө өр байхгүй. Дээр чинь нөгөө ноос үс авдаггүй юмгүй байлаа шүү дээ, бүгд нормтой хялгас ноос

- хөөвөр малаас юу л гарна, арай л баасыг нь авахгүй. Тэр сүүгээ заводынхаа сүү сүүгээ л зунд нь өгөөд давчихвал тэгээд өшөө өргүй л дээ.
- Д : Өөрсдөө бол нэг цайгаа сүлчих сүүтэй юм уу?
- Б : Аа сүүтэй. Нэг юм цайгаа сүлээд таргаа бүрээд идээд байна. Тэр чинь тэгээд хонь ямааны сүү авахгүй. Ганцхан үнээний сүү л авдаг байсан.
- Охин : Сүүлдээ хонины сүү гэж өгдөг байсан тэ?
- Б : Тийм. Өнөө юу...
- Охин : Бид нарыг жоохон байхад чинь хонь саалгадаггүй байсан шүү дээ.
- Б : Тэгэхэд чинь саалгадаггүй байсан юм, та нарыг бага байхад. Тэгээд сүүгээ нөгөө нэг юу болоод, өө золиг ямар юм билээ дээ нөгөө, мань мэтийн чинь байж байгаад тарцдарсан чинь.
- Охин : Өө САА юу, юу юу компани уу?
- Б : Өө тийм. Компани болоод л хонины сүү авдаг болсон.
- Д : САА чинь компани болсон юм уу?
- Б : Тэгсэн юм. САА тараад л компани болоод л. Тарахаараа тэгээд компани болчихоод, өнөө юугаа хониныхоо сүүг авдаг болсон юм. САА чинь өөрөө болвол өнөө меринос хонио саалгана ч гэж байхгүй, сүү сааль ч авахгүй.
- Д : Махны чиглэлийнх үү, үс ноосных уу?
- Б : Ноос махны чиглэлийнх байсан, их л ноос гардаг хонь байсан юм. Ноос л их гардаг хонь байсан юм. Дээд талын хониноос 5 кг энэ тэр гардаг л юм гэнэ лээ. Битүү ноос одоо энэ зурагтаар хааяа гарч байх юм байна лээ. Маллаж дадаагүй болохлоор маллахад мөн хэцүү мал шүү дээ.
- Д : Тийм үү, монгол нөгөө малтай?
- Б : Аа монголтой зүйрлэхгүй. Төл нь жигтэйхэн хэврэг.
- Д : Билчээрийн мал биш үү?
- Б : Тэжээлийн.
- Д : Та чинь тэгээд энд ажиллаж байгаад л тэгээд л тэтгэвэртэй гарчихсан уу?
- Б : Тэгсэн. Энэ үйлдвэрт яаж байгаад л ажиллаж байгаад л тэгээд тэтгэвэртээ гарсан.
- Д : Малчид бол нэгдэлд ажиллаж байсан малаа хувьчлаад авчихсан?
- Б : Хувьчлаад авчихсан.
- Д : САА-хан бол?
- Б : САА-хан болохоор САА-нхаа мал авчихсан чинь сүүлд нь харин тэр өнөө нэг компани болоод, тэр компанид ажиллаж байсан нэг мал маллаж байсан харин малаа авсан, цөөхөн тэд нар нээх базаахгүй.
- Д : Үйлдвэрт ажиллаж байсан улсууд харин тэгээд юм үлдээгүй?
- Б : Юу ч өгөхгүй. Үйлдвэрт ажиллаж байсан улсууд, үйлдвэр албан газарт мал өгөхгүй гээд өгөхгүй. Үйлдвэр албан газраас өнөө малыг чинь авах болохлоороо үйлдвэр албан газрын ажилчид гээд САА-н нэг 16 толгой мал үлдээнэ, манайхыг болохоор аравхныг үлдээнэ, тэгээд хамаад авчихсан.

Д : Та одоо бол малтай байна уу?

Б : Аа одоо хөдөө нэг хэдэн юм бий, хүүхэд маллаж байгдга юм. Арай ч шөл тасраагүй бас.

Д : Та бол энчээнээ л суурин л байгаад байна уу?

Б : Тийм. Суурин л. Би чинь хөдөө л байдаг байсан юм. Ноднингоос хойш бие тааруухан. Тэгээд хүүхдүүд одоо хөдөө яах юм ээж дулаан төвд бай гээд төвд орж ирсэн юм. Зун болохоор хөдөө гарна. Бие гайгүй байвал, өөрөө бас бие тааруухан. Нэг бага хүүхнээрээ өргүүлэх гээд энэ хүүхнийг сургуульгүй болгочихоод сууж байгаа хүн дээ би. Тэгээд алс нь яах юм байгаа юм. Жилийн чөлөөг авахуулаад өргүүлдэг хүн болоод л.

Д : За би одоо ингээд хөдөлье дөө. За баярлалаа.

II Бадамрэгзэн

Б : Бадамрэгзэн

Д : Лхагвадэмчиг

I Удам гарал

Д : За таны алдар нэр хэн бэ?

Б : За миний нэр Бадамрэгзэн гэдэг хүн. За би Өвөрхангай аймгийн Зүүнбогд сум гэж одоо бол Өвөрхангай аймгийн Богд сум гэж байгаа, тэр нутгийн хүн байгаа юм. За жинхэнэ үүсэл түүх гарал, дээр үеийнхээ юмнаас авч үзэх юм бол Ламын гэгээний гаралын хүн. За яагаад Ламын гэгээний гарал гэсэн бэ гэхлээр зэрэг Баянхонгорын Баруун Богд, Өвөрхангай аймгийн Зүүн Богд гэдэг чинь Ламын гэгээний хошуу нутаг. Их Богд Бага Богд гэж хоёр хайрхан уултай. Тэр Бага Богд нь болохоор Өвөрхангайн Зүүн Богд уул Арц Богд гэж яриад байгаа шүү дээ. Тэр Арц Богдын хүн би. Тэгээд гарал үүсэл, овгоо, удам судраа хөөх юм бол миний эцгийн талд энэ наймдугаар Богдын Шавь хошуу гэж явжээ. Энэ Сайнноёнхан аймгийн хошуунд орохгүйгээр шууд наймдугаар Богдод харьяалагдна, Шавь хошуу гэж явсан байна. Тэр Шавь хошуу нь бол одоо, одоо орчин үеийн засаг захиргааны нэгж байдлаар аваад үзэх юм бол Өвөрхангайн Богд сум миний төрсөн нутаг. За дээр Ховд гэж байсан юм. Ховд нь нийлээд Богд болчихоод сүүлийн үед нэг болсон юм. Гучин-Ус сум, Төгрөг, Баруунбаян-Улаан, Хайрхандулаан гэх мэтчилэнгийн сумууд, одоо Нарийнтээл хүртэл орж байсан байгаа юм.

Шавь хошуу ингээд энэ Дунд Богдын Шавь хошуу гэж, тэнд Арцбогдын гэгээн гэж одоо түүхийн ном намтар дээр бичигдсэн байгаа. Тэр одоо наймдугаар Богдын богдуудын тухай тэр бурханч лам Пүрэвбатын бичсэн ном байна шүү дээ, тэн дээр байна лээ. Арц Богдын гэгээнтэн, Ламын гэгээний гэгээнтэн гээд хоёр гэгээнтэн байгаа. Тэр Арц Богдын гэгээнтэн гэдэг нь бол миний эцгийн талын удам судрын улсууд байжээ. Аа тэгэхдээр зэрэг би бол Дашпэлжээгийн Бадамрэгзэн гэдэг. За тэгээд тэр Дашпэлжээ гэдэг хүн бол Цэмбэлийн Дашпэлжээ гэдэг хүн. Тэр Цэмбэл гэдэг хүний, одоо сойвон гэж тэр үед хэлдэг байсан юм байна шүү дээ, тэр гэгээнтнүүдийн чинь одоо бараа бологч, ийм хүмсүүдийг сойвон гэж нэрлэдэг байжээ. Тэгэхээр тэр манай тэр Богдын гэгээнтэн, сүүлийн үед болбол Өршөө багш гэж манай говийнхон ахайлдаг, Баядын Сономцэрэн гэдэг хүний сойвон нь байжээ, бараа бологч нь байсан байна. За тэгээд тэр Өршөө багш бол 1937 оны долоон сард баригдаж яваад хэлмэгдсэн, ингээд хэлмэгдсэн ийм хүн. Говийн ганц нэртэй хутагт бол манайхны хүн байсан байна. Одоо манай нөгөө Насантогтох, Дамдиншарав гээд л гавьяатуудын чинь эцэг нь энэ Чимиддорж гэж хүн байсан, биш Чимидбазар. Тэр Чимидбазарын

Насантогтох, Дамдиншарав гээд л байгаа шүү дээ. Тэгэхээр тэр Чимидбазарын өвгөний ах нь болох хүн байсан байгаа юм тэр Өршөө багш бол, Богдын Сономцэрэн гэдэг хүн байсан. Тэгээд тэр хүний бол удам судрын сойвон Цэмбэл гэдэг хүний ач одоо би явж байгаа юм.

За би тэгээд ингээд одоо 74 настай, 1936 онд хулгана жил төрсөн, тэр Богд сумын нутагт. Ингээд тэр Өршөө багш гээд хийдийн ойролцоо, тэр Даваа гэдэг уулын ойролцоо. Ингээд би 70 насан дээрээ энэ Эрдэнэзуу хийдэд энд лам хувраг болж энэ бурхны мөр лүү орж ирлээ. Энэнээс урд нь бол социализмын үед мэргэжил агрономич мэргэжлээр газар тариалангийн үйлдвэрлэлээр явж, 37 жил би газар тариалангийн үйлдвэрлэлээр явж, ингэж явж байсан. За одоо ингээд лам болсон гэсэн ч би энэ үйлдвэрлэл ажлаа орхиогүй. Одоо энүүхэн урд дэнж дээр нэг километрийн зайтай тэр шуудуутай миний ногоо тарьна, газар байна. За тэгээд 2 га газар ингэж хоёулаа энэ газар эдлэмжийн хуулиар эзэмшиж аваад, 1га-д нь жил бүрд ингээд төрөл бүрийн ногоо тариад ингээд явдаг. Энэ ажлаа зогсоогүй юм байгаа юм. За ингээд сая атрын гуравдугаар аян буюу, 50 жилийн ойгоор саятай (саяхан) уулзаад, тэмдэглээд хоёр гуравхан хонож байна.

За тэгээд дээр нь ярихдаар зэрэг социализмын үеийн иргэн, тэр үеийн бүтээгдхүүн ч гэлээ гэсэн би МАХН-д хоёр гурван удаа элсэж орох гэж үзээд намайг аваагүй юм. Тэр нь ямар учиртай байсан юм бол оо гээд, одоо эргээд бурхны ном мөр лүү ороод ингээд ном үзээд ирэхлээр зэрэг, тэр мань одоо тухайн үед нөгөө нэг зураг төөрөг гэж бидний ярьдгаар бол тэр лүү орж болохгүй хүн байсан юм байх аа. Энэ нь ингээд цагуураа зураг төөрөг намайг оруулахгүй ингээд салгаад байдаг байсан байжээ гэж, би одоо бол номын мөр лүү ороод гэгээрээд дөхөхийн хойно үе дээр ингээд эргэж ойлгож байна, ингэж боддог юм тийм шахуу байсан болов уу гэж. Аа гэлээ гэсэн хэдий ч тэр үед чинь, одооны энэ ардчилагч бил үү энэ үзлийн, ялангуяа энэ бурхны ном энэ гэгээнлэг мөрийн хүмүүсүүд бол тэр үед чинь ерөөсөө хурал цаглаан дээр шударга юм хэлж ч болдоггүй, нүд үзүүрлэгддэг, хавчигддаг ийм байлаа. Тэр үед болвол бурхан, манай нутагт болвол бурхан ном судрыг бол их хавчдаг, ер нь маань энэ тэр уншиж хэлүүлдэггүй, мэрэг төлөг онгод элдвийн юм тавиулдаггүй, бурхан шүтээнтэй айл байлгадаггүй, ийм хэсэг байлаа. Ялангуяа 1970 хэдэн оны үед чинь бол би бас МАХН-д дайчин туслагч бөгөөд МХЗЭ-ийн хорооны дарга гэж сумын, нэгдлийн агрономич гээд. Би чинь тэр үед 1964-1969 он хүртэл би тийм дарга цэргийн алба хийж ажиллаж явлаа. Тэгэхэд намд элсэх гэж хоёр гурван удаа оролдоод ерөөсөө ч аваагүй. Ер нь ч хурц тийм араншинтай хүн юм би төрөлхийн. Шударга бус юмыг үзэж чаддаггүй, юмыг үнэн мөнөнөөр нь зөв шугамаар нь хийчих л юмсан, ном уншаад өгсөн ч нэг хөөрхий энэ хүнд нэг буян болох талаас нь. Нэг би буруу зөрүү хэлсэн байлаа ч гэсэн, миний цаад сэтгэл оюунаас

гарч байгаа энэ номын авиа энэ хүнд зөв тусах болтугай гэж номыг уншиж бодож биширч явдаг. Энэ үзэл маань тэр үед дарга нартай таардаггүй байсан байх, ингээд намд аваагүй байхаа.

За тэгээд би амьдралын хугацаандаа МАХН-д, Өвөрхангай аймгийн намын хороонд хоёр ахиж лут хэлмэгдсэн. 1969 онд би ХААДС-д мэргэжил дээшлүүлэх гээд би явлаа, дунд нь хүртэл агротехникч мэргэжилтэй байлаа. Тэр үед 62 онд би Дорнодын ХАА-н техникум төгсөөд агротехникч мэргэжлээр би Дорнод аймгийн Матад суманд ажиллаж байгаад, эргээд намар нь Өвөрхангай аймагт ирж, Өвөрхангай аймгийн нутагт Арвайн талыг чинь анх атарчилж, тариаланг тариулж ингэж явж байсан анхны агрономич хүн байгаа юм. Тэгээд 69 онд би дээд сургуульд явлаа. Тэгээд 1969 онд ХААДС-д яваад очоод сурах гэтэл, 10 сард Өвөрхангай аймгийн намын хороо I-р нарийн бичгийн дарга Лхамхүү гэж хүн байсан тэр үед. Лхамхүүгийн гарын үсгийн цахилгаан ХААДС-ийн захирал Жамьянжав багш байсан, Жамьянжав захирлын референтэд цахилгаан иржээ. Хуулийн байгууллагад шилжсэн тул буцаан ирүүл гэсэн байдаг. “За та яв, 14 хоногийн дотор энийг шийдвэрлэж аль” гээд. За ингээд 14 хоногт шийдвэрлэнэ гээд, эргээд баахан костюм пиджак болоод л оюутан болсон хүн чинь байдгаараа (чадлаараа ганган) тийм болсон явсан чинь. Нөгөөдхөөсөө эргэж зарж нэг зардал болгоод, тэр үед чинь жаран хэдэн цаас байсан шүү дээ, Өвөрхангай хотын хооронд. Тэгээд нэг юм эргэж ирсэн чинь аймгийн намын хорооны товчооны хурлаар ороод сургуулиас хасаад хаячихдаг юм. Тэгээд намайг аваачаад Өвөрхангай аймгийн усжуулахад, нөгөө тэр үед чинь нөгөө говийн чинь ус худаг гаргана, ус цэг цахилгаан хайгуул гэдэг байсан. Би чинь тэгэхдээ нөгөө нэг заавал өнөө чинь босгосон худгийг нь хамт хариуцдаг байсан. Тэр ажлыг нь л хийнэ, зүгширчихсэн. Тэгээд оросуудтай ойр зуурын, тэр үед чинь орос хэлтэй хүн гэж говьд чинь байдаггүй байсан юм байхгүй юу. Тэгээд ямар ч байсан нэг ойр зуурын үг хэл, яриа хэлвэл нэг ойлгочихоод байдаг болсон байсан юм байх. Тэгээд намайг тэр усны аж ахуйд хүчээр өгөөд, нэгдсэн нэг тэр үед чинь тэгэж ярьдаг байсан шүү дээ, тийм байдлаар бас тушаал гаргаад тэгээд өгчихсөн. Ингээд 69 онд ХААДС-аас ингээд, дээд мэргэжлийн ангийг ингээд умаа хум болгоод хаячихсан. Нэг ингэж том хэлмэгдсэн.

За тэгээд дараагаар нь би чинь ингээд л ХААДС-аас ингэж хусгагдаж, аймгийн намын хороогоор мултлуулчихаад нөгөө усжуулахад ажиллаж байснаа, хавар нь олонтойгоо. Тэгээд 70 оны хавар ирээд би, энэ гавьяат агрономич Аюур гэж дээр үеийн миний танил ийм хүн байсан. Аюураараа одоо арын хаалгадах гэж ярьна даа, одоо бидний хар яриагаар бол ингэж явж, энд би энэ 2-р тасаг гэж одоо энэ зам мөр дээр (явах зам дээр), тэр тасаг дээр нь үтрэмийн эрхлэгч хийж ажиллаж байж байгаад, 75 оны хавар “Хужиртын Рашаан сувилал мэргэжлийн хүн эрээд (хайгаад) байна”. САА-н

намын хорооны дарга Рэнцэн дарга гэж хүн байсан, бөөрөнхий Рэнцэн гэж хүн байсан, маний бад ми хум болсон. Тэр бол аймгийн намын хорооны II-р нарийн бичгийн дарга байсан хүн, Лоохуузын асуудалд холбогдоод столоос нь (ширээ) захиа гарлаа гээд зайлуул, тэгээд САА-н даргаар энд томилогдоод ирчихсэн байсан. Рэнцэн дарга маань дуудаж “Та Хужиртад оч. Нэг сайн хүн олоод аль гээд байх юм, та таарна” гэж. Тэгээд би Хужиртын рашаан сувилалд 75 онд очоод, 78 он хүртэл би Хужиртын рашаан сувилалд 65 градусын халуун рашаанаар 5 м оргилдог рашаан регистр хийж, шилэн хүлэмж байгуулж, тэнд помидор огурцыг чинь тариад л, цагаан халат өмсчихсөн хүн би. Төв Хорооны дарга Дүгэрсүрэн гуай, аймгийн Намын хорооны дарга Гүнчин гээд гэж байлаа. Аа тэгээд Улаанбаатар хотын Намын хорооны I-р нарийн бичгийн дарга Алтангэрэл, энэ улсууд ингээд Хужиртын амралтанд, сайд нар ирж амарна. Тэгэхэд чинь эмч шиг цагаан халат өмсчихсөн хүн, дээр нь улайсан помидор огурцыг чинь бариад, ингээд буудалд нь хүргэж өгч ингэж ажиллаж байсан. Тэгэж байтал ХААЯ-ны сайд чинь тэр үед хэн байлаа, орлогч сайд ирж амарч байж таарчихсан. Нөгөөдхийгөө барьж орж баригдаад, тэгээд намайг энд улсын байгууллагад энэ юу гэсэн үг вэ ийм чадалтай хүн байх. Тэр үед чинь Төв Хорооны IV-р бүгд хурал гэж болж, энэ хүнсний программ гэдгийг чинь дэвшүүлсэн юм шүү дээ. Малаа өсгөх, махыг одоо бага болгож ногоо могоо ихэд л тариалах. Ингээд улсын сектор хамгаалагч гээд намайг, Өвөрхангай аймгийн Төгрөг сум, Тогтуун дарга гэж аймгийн ХАА-н дарга байсан, одоо бол нас барчихсан байна лээ, ум мааний бад ми хум. Тэр Тогтуун дарга эд нар намайг аваачаад шууд татаад, Өвөрхангайн Төгрөг сум, одоо Мазрын хоршоолол гэж яриад байгаа. Сая Мазрын 2 хоршоолол бий болчихсон байна, сая энд улсууд ирж байна лээ, сая 50 жилийн ойгоор. Манай Өвөрхангай аймгийн хэмжээний атрын 50 жилийн ойг тэмдэглэсэн шүү дээ сая, аймгийн хэмжээгээр. Ингээд хоёр гуравхан л хонож байна тэрнээс хойш. Тэгээд тэд нар ирлээ тэгээд.

Би тэгээд Мазрын тэнд очиж өсгөж, 78 онд би тийшээ очсон. Тэгээд 78 оноос тэнд 85 он хүртэл ажиллаж байгаад, 85 онд хүнсний зорилтот программ гээд ингээд л өрнөсөн. Ёстой өнөө албан байгууллага газаргүй ногоо могоо янз бүрийн юмыг чинь тарих болохлоор би 1200 хоригдолтой энэ хорих анги, Хархорины хорих ангид би 85 оны найман сард хорихын агрономич хийсэн юм. Тэгэхэд ганц ширхэг төмс булж идэхийг мэдэхгүй 1200 хоригдолтой Хархорины хориход би ирээд. Одоогоороо байна, тэгээд буулгаад эвдлээд сүйдлээд хаячихсан л даа, надаас хойш тэтгэвэрт гарснаас хойш, гэхдээ ор нь байгаа юм. Шилэн хүлэмж байгуулж хорихыг ногоотой болгоод, тэгээд л энэ хөдөө тариа тарьсан ногоо ч тарьсан. Тэгээд ингэж ажиллаж байгаад л би 93 онд тэтгэвэртээ гараад л. Тэтгэвэрт гарснаас хойш хувиараа ногоо тариад л ингээд л явж байгаа юм. Тэгээд 70 насан дээр чинь

болж энэ хийдэд сураад л, одоо тэрнээс хойш лам хүн явж байна. За ерөнхийдөө миний амьдралын товч түүх бол ийм түүхтэй хүн. За одоо лам номын мөр лүү ороод дөрвөн жил ном үзэж сууж явж байна. Аа тэгээд одоо бол би мэргэлнэ, төлөглөнө. За тэгээд одоо тэр нөгөө юуныхан яадаг шүү дээ, нөгөө Дашцэрэн мэрэн тэргүүтэй тэр жил яваад л байдаг ямар юм бил ээ. Тэрүүнд чинь оролцъё гэж бодоод л байдаг юм. Тэгээд боломж нь олдож өгөхгүй юм, тэгээд л өнгөрөөд л байгаа юм. Аа тэгээд ер нь яахав түмэн (хүмүүс) болвол юм юм мэргэлүүлээд, ямар ч болов худлаа хэлээд л явуулчихаагүй болтой юм шиг байгаа юм. За 1-рт ийм. 2-рт бол одоо би энэ ямар ч номыг бол шууд барьж аваад л уншина. Судрыг бол одоо шууд. За тэгээд жаахан мөр гэж ярьдаг юм байна даа, энэ орчуулга энэ л оролт гээд. Нас энэ ойрдоод муудчихдаг юм байна аа, жар дал гараад ирэхлээр чинь хүн одоо тэгээд л муудчихдаг золиг юм. Тэгээд тэн дээрээ болвол нэг сайхан орчуулга хийж чадахгүй л байгаа юм. Гэхдээ яахав орчуулаад гаргачихсан багш нарын сайхан номнууд их болжээ. Тэд нараасаа үзээд цээжлээд, одоо бол би Цагаан дар эх, Ногоон дар эх, Хийморийн сан, Аян замын ерөөл гэх мэтчилэнгийн чухал гүрмийн номнуудыг бол шувт монголоор уншаад л араас нь төвдөөр уншиж өгөөд яваад байдаг.

Д : Өө за.

Б : Энийг одоо та ингэж бай гэж. Би энийгээ Сонинбаяр багш дээр очсон байхгүй юу, Сонинбаяр багш дээр очиж танилцаад. Тэгээд “би ингээд одоо иймэрхүү лам болох гээд болчихоод ингээд явж байгаа, багш аа одоо би яах вэ ингэх нь зөв үү, зөв үү буруу юу” гэсэн чинь, “Өөх ёстой зөв шүү дээ, хамгийн зөв наад, харин та битгий залхуураарай ядарлаа гэж битгий бодоорой. Улдаар монголоор бол араас нь заавал төвдөөр уншиж өгч бай” гэж надад ингэж айлдсан юм. Тэгээд би одоо тэгээд л мэддэг орчуулгыг нь хэлж өгснөөр нь бол эхлээд монголоор эсвэл араас нь төвдөөр уншаад сууна. Энэ хурал дээрээ ч би бас тэгдэг.

Д : Өө за.

Б : Одоо та нар ингээд ороод л ингээд Аян замын ерөөл уншуулья гээд ингэхэд чинь. Тэр ч битгий хэл би англи хэл дээр Хийморийн сан уншдаг гээд л бод.

Д : Өө за.

Б : Тийм, Хүнээр орчуулуулаад, ингээд Хийморийн сангаа англи хэл дээр буулгуулаад, тэгээд өнөө сонирхсон хүн уншуулах гэсэн хүн ирвэл би англиар уншаад өгчихдөг юм. Нөгөөдхийгөө англи хэлтэй хүн дээр уншаад ямар нь буруу хэлж, аль нь алийг нь яаж авиаг нь, ямар үсгийг нь яаж дуудах вэ гэдгийг нь хэлүүлээд нөгөө улсуудаар ингэчихсэн, тэгээд уншиж өгч байдаг. Тэгээд одоо сүүлийн үед уншуулаад байдаг хүн, англи хэлээр уншдаг хүн орж ирэхгүй болохлоор чинь. Тэр чинь тэгээд байнга байгаад байхгүй болохлоор чинь аягүй бол мартах тийшээ хандана гэдэг болчихдог юм байна

шүү дээ. Тиймэрхүү жишээний. Тэгээд ингээд л лам мөр хөөгөөд л явж байна. За тэгээд одоо энэ дээр тэгээд өөрөөс чинь асуух ярих юмнуудаа, одоо ямар учиртай юм. Тэрийгээ одоо ярь даа. Би өөрийгөө одоо бол ингээд яахав товч танилцуулчихлаа.

2 Бага насны амьдрал

Д : Таныг бага нас хаана өнгөрөв?

Б : Миний бага нас. Би 1945 онд юу яалаа. Өвөрхангай аймгийн манай тэр Богд сум гэдэг чинь анх, анхны бага сургууль байгуулагдлаа. Би чинь Богд сумынхаа анхны бага сургуулийн шавь хүн. За надтай хамт одоо Эх Нялхсын Эрдэм Шинжилгээний Хүрээлэнгийн эрдэмтэн 8 улсын хэлтэй, 42 анагаахын эрдмийн ном бичсэн Жанчивын Раднаабазар гэж миний нэг сайхан ангийн найз одоо байна, амьд мэнд явж байна. Тэгээд эрүүл мэндийг хамгаалах олон улсын ажил хийж явлаа. Тэгээд дээр нь Цэдэнбал дарга, Батмөнх даргын эмч хийж явсан, II-р эмнэлэгт урдаа барьдаг эмч хийж байсан Гүнтэвийн Гайтав гэж одоо амьд мэнд байгаа. Аа дээр нь МУ-ын анхны ХААЯ-ны анхны ойн инженер хийж байсан Санчиров гэж хүн одоо амьд мэнд байгаа. Өчигдөр хүртэл утсаар ярьж л байна. Баруун Баян-Улаан явлаа, аймаг дээр байгаа гээд. Сая хотод зайлуул олж уулзсан. Тэр юун дээр Драгон дээр Өвөрхангай явах гэж байгаа. Намайг тэнд байгаа гэж яаж мэдсэн юм, утасдаад тэгээд тэнд очиж уулзсан. Тэгээд олон жил уулзаагүй байсан, хөөрхий минь тэгээд тэр Санчиров гэх мэт, мэтчилэнгийн ангийн найзууд бол одоо, одоо амар мэнд сайхан улсууд явж байна аа.

Тэгээд би 1945-1949 он хүртэл Богд сумын бага сургууль төгсгөсөн. Аа ингээд 49 оноосоо хөдөө гараад, тэр үед чинь Өвөрхангай чинь нөгөө, нөгөө шуудангийн машин гэдгийг чинь 49 онд хүлээж авсан шүү дээ. Тэр үед чинь шуудангийн машин ирээгүй, өртөө гэдгийг халж байгаа гээд яригдаж байсан үе. Тэгээд тэр үед манай чинь Богд сум чинь Өвөрхангай аймгийн төвөөсөө 210 км, тэгээд чинь 210 километрийн чинь 30 километрт нэг өртөө байсан юм. Долоон өртөө газар мориор дамжиж сургуульд хүүхэд явдаг байсан.

Тэгээд би тэр үед нэг жоохон бацан(жигжиг хүүхэд), уул нь морь унаад давхиад байдаг байсан даа. Тэгээд тэр яг явахын үе дээр тийм учир зураггүй байсан юм болов уу. Хүний айлд зарагдаж өнөө нэг хэдэн цаас олох л гэж тэр үед чинь, мөнгө гэдэг чинь ховорхон байсан юм. Тэгээд айлд зарагдаж, нэг долоо хоног зарагдаж хонийг нь хариулаад өдрийн нэг цаасаар хариулж өгч байгаа юм. Тэгээд долоо өдөр, нөгөө 14 болоод нөгөө арван цаас олоход, арван цаас болвол. Тэгээд Өвөрхангай тэр өртөөний зардал мардал, тэр сургуулийн ном хэрэглэгдэхүүн ингэж би явж байсан чинь моринд чирэгдээд, тэгээд хөлөө гараа, нэг жаахан хөл нялцайлгуулаад, тэгээд дөрөөнд нь нөгөө шөвгөр гутал зоогдоод. Тэгээд бие муудчихаад яг явж чадаагүй, тэгээд

Өвөрхангайн арван жилд явж чадаагүй үлдчихсэн юм. Аа тэгээд л энэ Гайтав майтав, Санчиров эд нар бүгд яваад өгсөн. Би тэгээд хөдөө гарчихгүй юу. Тэгээд 49-51 он хүртэл гурван жил би хөдөө, хөдөөний ард хүн байлаа. Тэгэхдээ манайх амьдрал ядуу байсан, тэр үе чинь нэгдэл гээч юм үүсээгүй байлаа. Тэгээд би баян айлын сарлаг үхэр хариулж, Богдынхоо хярд гурван жил хүний үхэр хариулж өвөлжиж, бас л одоо өнөө тэр үед чинь амьдралд өнөө зарцлагдах гэдэг чинь айлын цагаа уухын арга тийм л байж дээ. Тэгээд би 700 сарлаг үхэр хариулж байв, ээжтэйгээ хоёулхнаа. Дандаа дүгрэг орой байгаа шүү дээ, богдын тэр хяр гэдэг чинь ямар гэж бодож байна. Тэгээд би, хүн гэдэг чинь ерөөсөө юу ядаг юм байна. Энэ жил би, одоо надад ёстой бүр киноны зураг шиг зурагнууд бүгд байгаа. Тэгээд энэ жил нутаг руугаа явъя, үхэхээсээ өмнө явъя гэж яваад, бүүр одоо тэр манайхан байсан газарт. Тэр Цогчин дуган, Цогчин дуганы тэндээс ховор бүтээгдэхүүн тэр ховор авчирч байсан. Би тэр бурхныг нь одоо зураг нь байгаа, аймгийн музейд авчирч өгч байсан байхгүй юу. Одоо тэрнийхээ зураг, тэр үед тоохгүй мэдэхгүй явж байсан улсууд, одоо эргээд намайг орох дээр “пээ тийм байна, тийм ховор байсан байна, тэрийг би тэнд үзсэн юм сан, одоо байна уу үгүй юу” гэж хөөцөлдөж, аймгийн музейнд бүр фондонд орчихсон байж байгаа. Тэгээд тэрнээс чинь зураг аваад би чинь.

Одоо би чинь одоо яруу найраг, би чинь амьдралдаа одоо дөрөв таван ном биччихээд байгаа хүн шүү дээ. За тэгээд хамгийн эхнийх нь 1997 онд бил үү, Цэгмэдийн Гайтав төрийн яруу найрагч, Цэгмэдийн Гайтав чинь бид чинь нэг нутгийн улсууд, бас нэг анги. Аа тэгээд тэр Гайтавын 70 насны ой гэж хийсэн юм аа, арван жилийн өмнө. Энэ жил 80 насны ой хийсэн, тэгээд би 70 насанд нь уригдаж очлоо. Тэгэхэд нэг жижиг шүлгийн түүвэр анхныхаа номыг бичиж очсон юм, “Хээр хоносон сар мэт” нэртэй. Аа энэ жил 80 насны нь ойд бас уригдаж сая яваад, намар 9 сарын 19-нд уригдаж нутагт нь очоод, тэр буйр дээр нь хөшөө мөшөө босгож. Монголын зохиолчид аймгийн юутай хамтарч ингээд сайхан 80 насны ойг нь тэмдэглээд, кино хийж, баримтаг кино хийсэн, хүмсүүдтэй. За тэгээд тэрүүнд зориулаад нэг жижиг ном биччихсэн бас одоо, тэр нь ч голдуу Гайтавын жижиг ном орсон, голд нь нэгхэн хэсэгт нь өөрийнхөө.

За дараагийх нь мянга есөн зуун ерэн биш хоёр мянга хэдэн онд билээ тэр, Хархорины 50 жил болсон байхгүй юу. Тэр 50 жилийн ойгоор “Тэргэл саран” нэртэй ном бичсэн, “Тэргэл саран”. За энэ дээр бол одоо “Умайн амын домог”. За тэгээд энэ, энэ Орхоны хөндий гээд энүүгээр байгаа САА. Яагаад энэ Орхоны хөндийд САА байгуулах болсон юм гэдэг шалтгааныг XIV-р зууны үеийн түүхээс гаргасан товч түүхийн намтартай. Тэгээд Хархорины САА 50 жилд яаж хөгжсөн түүхийг бичсэн дээр нь гурван бүлэг юм байгаа юм. Хамгийн эхнийх нь миний шүлэг яруу найраг, тэгээд

дараачийх нь Хархорины түүх, энэ Орхоны хөндийн товч түүх. Аа гурав дах нь болохоор “Өвөрхангайн газар тариалангийн түүхэн өгүүллэг” гэсэн сэдэвтэй гурван бүлэг, ийм хөөрхөн жижиг “Тэргэл саран” гэдэг ном, их хөөрхөн ном болсон.

Аа дараачийнх нь болохлоор уржнан гэж ярих нь. “Түүхийн дурсгалт Орхоны хөндий” гэдэг ном бичсэн. “Түүхийн дурсгалт Орхоны хөндий” гэж. Аа наадхыг чинь би МАХН-ын байранд хэвлүүлэх, 1000 ширхэгийг хэвлүүлэх гээд өгөв өө. Нэг сая гурван зуун хорин мянган (1,320,000) төгрөг та авчирч өгөөд номоо авна гээд ингэдэг. За нэг сая гурван зуун хорин мянган (1,320,000) төгрөгийг нь би, тэтгэврийн наян дөрвөн мянгатай (84,000) байсан өвгөн чинь яаж нэг сая гурван зуун хорин мянган (1,320,000) төгрөг олох вэ. Тэгээд л одоо ингээд түмнээс чинь гуйлга гуйгаад, ялангуяа өнөө Их хурлын чинь өнөө наймаас чинь гуйлга гуйгаад л. Би Лүндээжанцан дээр л ороогүй юм байгаа юм, тэр их буруудсан, буруудсан байна лээ. Хамгийн гол уулзах гуйх хүнтэйгээ уулзаагүй байсан байна лээ, одоо эргээд бодож байхад харамсч байна. Тэгээд нөгөөдүүл нь ардчилалынхныг чинь, би чинь өнөө ардчилалын хүн юм чинь ардчилалынхаа дөрвөөс гуйгаад л, эд нар үгүй гэх хүн байгаагүй зайлуул. Цаад МАХН-аас гарсан Чинзориг, нөгөө хэний хүү энэ тэр гурваас нь бол уулзсан, өгнө гээд л байсан. Сонгуулийн дараа сонгуулийн дараа. Тэгээд сонгуулийн дараа явж би нөгөөдхийгөө, мөнгө зардлаа яах гэж чадаагүй байж байтал 7 сарын доргион, 7 сарын доргионоор байхгүй нөгөө бүх юм чинь, МАХН-ын байранд шатаа, умаа хум. Гуравхныг гуйж авсан байхгүй юу, “аа би нэг гурвыг авъя”. За нэгийг нь би Зохиолчдын хороонд аваачиж үзүүлсэн, Зохиолчдын хорооноос хэвлэхэд туслалцаа тав арван цаасны юм байна уу үгүй юу. Аа нэгийг нь би нутаг руугаа авч явна, Найгалд хүртэл үзүүлээд л гуйлга гуйгаад л, Их хурлынханд үзүүлнэ гээд л ингээд л нэг хоёр дах нь. Аа гурав дах нь ингээд энэний дундуур ингээд яваад байсан. Манай багш л авсан даа сүүлд нь найруулж. Найгал ч үзэж л байсан.

Тэгээд олдохоо байчихсан, алдчихсан байхгүй юу даа. Аа нэг нь бол одоо надад явж л байна аа. Монголын зохиолчдын холбоонд (МЗХ) өгсөн нь байгаа. МЗХ ноднин өвөл 80 жилийн ойгоо тэмдэглэлээ шүү дээ. Тэгээд 80 жилийн ойгоор би уригдаж очиж МЗХ-ны гишүүн болгоод, надад “Тэнгэрлэг удам” гэдэг тийм өргөмжлөл тэмдэг гардуулсан. За энэ ном бол энэ одоо надад, “Орхоны түүхэн дурсгалт хөндий” гэдэг дээр бол одоо Хар балгас, Хөшөө Цайдам, аа хойшоогоо тэр Архангайн Хотонт руугаа Дойтын толгой. Аа энэ Орхоны хөндий гээд байгаа. Улаан хадны агуй гээд ерөөсөө тэр Дойтын толгой, Улаан хадыг бол хэн ч судлаагүй, явж зургийг нь авч өөрөө түүхчилж судлаж. Тэгээд л ерөөсөө энэ Орхоны хөндийд ямар түүх соёл байна, бүгдийг нь оруулахыг оролдсон доо. Их аятайхан ном болсон юм

байгаа юм. Тэгээд одоо надад нэг хувь нь байна. Аа “Тэргэл саран” гээд нэг ном болсон. Аа тэгээд сая би Атрын 50 жилийн ойгоор бол дөрөв дэх ном бол Гайтавын 80 жилийн ойтой холбогдуулаад “Арц Богдын хүү Арвайн талын тариаланч агрономич” гэж өөрийгөө их өргөмжилсөн ном бичсэн. “Тэгээд одоо энэ сая нэг дэх өдөр хэвлэлээс гарлаа. Охинд чинь нэг хувийг нь өгөөд явууллаа. Та тэрийгээ үзэж редакторлаад засах юм нэмэх юм юу байна вэ, эргээд явууллаа. Тэгээд бид нар хэдэн хувь хэвлэх вэ, хэдий хэмжээний мөнгө гарах вэ гэдгийг чинь мэдэгдье” гэсэн байна лээ. Өчигдөр манай охин ирэх л ёстой юм хотоос, алга ирсэнгүй, өнөөдөр ирж байгаа юм болов уу даа. За нэг иймэрхүү жишээтэй байгаа юм. Тэгээд би энэ Эрдэнэзуугийхаа одоо, Эрдэнэзуу ч орсон, Цогчин дуган нь ч орсон. Орхоны хөндий номондоо. Тэгээд энэ дээр бол манай Эрдэнэзууд одоо ингээд тогтоочихсон. Эрдэнэзууд чинь, бас энэ Орхоны хөндийд чинь нэг хувилгаан байсан байна. За тэр хувилгаан болвол хамгийн эхлээд энэ одоо Архангай аймгийн Лүн сум гэж тэр үед хэлэгдэж байсан байгаа юм, орон нутгийн нэгжээр. Архангай аймгийн Лүн сум. За энэ Лүн сумын нутаг одоо Эрдэнэ-Уул гэж энэ хойно энэ Намага гэж яриад байгаа юм. За наана нь Эрдэнэ-Уул гээд байна, уул нь Лүн толгой гэдэг байсан байгаа юм. Толгой нь уул болцроод, уул нь толгой болцроод, одоо орон нутагт сүүлийн үед ингэж хэллэг нь өөрчлөгдчихөөд байгаад байгаа юм. Сая энэ хавар энэ Лүн толгойд бол, одоо Лүн хайрхан дээр суварга бүтээсэн, нутгийн ардууд сайхан суварга бүтээсэн, энэ жил бол тахиж байсан. За тэр Эрдэнэ-Уул гэдгийг яагаад би онцолж хэлээд байгаа юм гэвэл, Эрдэнэ-Уулын энд чинь VII-р цоржтон Дагвадаржаа гэдэг хувилгаан хутагт төрж байжээ, энэ Эрдэнэ-Ууланд. За энэ чинь VII-р төрсөн тиймээ. За эний чинь түүх шаштирыг нь аваад үзэх юм бол 1700, 1500 оны үеэс эхлээд л явчихна шүү дээ, 1500-1700 оны үед явчихна. За энэ үед 1770 он гэхдээр зэрэг, 1770 он гэхдээр зэрэг манай одоо миний судалгаа одоо энэ болчихоод байгаа өдөр хадаг хүрээлсэн хүрээ байна шүү дээ, энд цогчин хурал. Эрдэнэзуугийн гол одоо шүтээн одоо орчин үеийн хэлээр бол парламентийн байр гэсэн үг. Цогчин хурлын чинь 1770 онд энэ 7-р цоржтон Дагвадаржаагийн чинь үед бүтээн байгуулж байсан байна, босгож байсан байна, таван жилийн хугацаатайгаар. 70-75 он хүртэл барьж 75 онд одоо эхэлж үйл ажиллагаа нь эхэлж байсан байна. Аа тэгээд энэ цогчин хуралд чинь бол зуун найман цамтай, монголд байхгүй их олон цам харайдаг байсан. Тэр цам нь бол одоо Автай сайн ханы буурин дээр цамнадаг, дэглэдэг. 1937 он хамгийн сүүлч хүртэл цам харайж байсан. Одоо эднийд байгаа шүү дээ. Тэр бичлэг нь эднийг байгаа, кино бичлэг орос хүн авч байсан юм байна лээ. За ийм цогчин хурлыг бол ингэж үүсгэж байсан ийм түүхтэй юм байна.

За тэгээд дараагаар нь энэ долдугаар цоржтон Дагвадаржаа төрөл арилжаад

(нас барах), одоо ингээд дараагаар нь төрөх нь хаана төрсөн гэхлээр Архангай аймгийн Хотонт сумын нутаг тэр Хөгшний гол гэж ярьдаг юм, за тэнд төрсөн байгаа юм. За Гончигжалцангийн түүх шаштир намтар удам судар нь бүгд судалгаа, бас тэр Ламын овоо гэдэг нэртэйгээр энэ “Орхоны хөндий” номон дотор байгаа, гарсан байгаа. Аа тэгээд энэ одоо манай энэ урлагийн одоо агуу бүтээгч хүн дээ, Лүнгийн хүн шүү дээ хэн гэж, Чуваамид гуай бол тэр Ламын уул Баянгол ууланд байдаг. Тэр Гончигжалцан гэдэг хүн, сүүлчийн хувилгаан Гончигжалцан гуай чинь бас л 1937 онд явж 12 сарын 3 нд буудуулчихсан байгаа юм, далан хэдэн насандаа. Гончигжалцан гуай бол энд төрсөн хүн юм. Тэгээд тэр хожим хойд Баянголын энэ бол тэр Ламын овоо гэж тэнд одоо овоо тахилгат хийж шүтэж ингэж ирсэн байна. Аа тэгээд энэ наана нь энэ бага олон суврагууд бий. Энэ агуйд ингээд олон газар энэ Гончигжалцан гэдэг хүн бол одоо энэ, одоо энэ Далай ламын хүртэл дүр нь байгаа юм. Тэр бүр юу хийлгэж байсан байна, Манбадацан, эмийн Манбадацан, одоо Нацагдорж гуай Улаанбаатарын тэрүүн шиг чинь Манбадацан энд чинь хүртэл байгуулж байсан. Тэгээд энэ одоо энэ дотор одоо энэ нуур байна. Автай хааны нуур гээд. Тэгээд л одоо энэ зүүн хойд талын буланд байгаа зээргэнэ. Тэгээд л энэ одоо 4 зуугийн хавтгай дотор чинь одоо төрөл бүрийн эм санд ордог ургамлууд эд нар авчирч үрийн модыг нь тарьж, тарьж байсан байна шүү дээ. Энэ дотор бүр одоо жишээ нь орчин, одоо сүүлийн үеийн экологи өөрчлөгдөөд гарахаа байчихсан байна, намайг ирээд сууж байхад чинь улаан ногоо цагаан төмс байна шүү дээ, улаан цэцэгтэй төмс хүртэл энд ургадаг байсан. Тийм энэ хашаан дотор. Тэгээд одоо байгаагаас бол их хэл ам хамгаалдаг юм. Тэр зүүн хойд талын буланд хонин зээргэнэ, говьд ургадаг хонин зээргэнэ тэр чинь бол одоо хар тамхины хольцын ургамал гэж. Говьд ургадаг ямаан зээргэнэ, хонин зээргэнэ гээд. Хонин зээргэнэ хүртэл авчирч тариад. Янзын сайхан амттай улаан жимс гарна. Энэ буланд байна, тэр лүү хойд талын буланд. Жишээ нь одоо ийм сайхан түүх манай энд байна өө. Энийг одоо судлаж ингээд гаргадаг бичдэг, энийг өөднө татдаг тийм хүн үгүй болчихсон юм байна. Тийм юманд баахан улсууд мөнгө хаяад л төсөл авсан улсууд. Яг үнэнээсээ юм хийх хүн гэж ховорхон болчихсон юм байна дөө. Би ч яахав үзэл бодол энэ тэр өөр хүн болохоороо. Одоо ч өөрөө дотроо л бодож явахаас цаашгүй, ад үзэгдэх. Аягүй бол хорлогдчихож ч мэдэхээр болчихсон цаг юм даа. Тэгээд л одоо яахав болж өгвөл энэ дуганыг л босгочихвол. Тэр нэг түүхэнд нэг дүрсээ юмаа үзүүлчихээд үхэх юмсан гэж бодож байна. Аа тиймэрхүү л юм байна дээ.

Д : Бага сургуульд одоо та дотуур байранд сууж байв уу?

Б : Өө би дотуур байранд. Тэгэхэд чинь 1945 онд чинь гэр, тэр чинь таван ханатай гэр ч гэж байхгүй байж дээ. Дөрвөн ханатай гэр л байсан юм даа.

Хоёр гэр л бариатай. Нэг гэрт нь гал тогоо гээд л хоол ундаа хийнэ. Нэг гэрт нь болохлоор хүүхдүүд нь байдаг. Тэгээд л ширдэг дэвсчихсэн дээр нь ганц гудастай. Тэгээд л тэн дээр чинь одоо хөнжил мөнжил ч гэж юм байхгүй шүү тэр үед чинь. Тэгээд л өнөө үстэй дээлээ нөмрөөд л. Тэр чинь үстэй өмдтэй байлаа. Тэгээд л өнөө үстэй өмд чинь бөөстнө. Өнөө дээл чинь бөөстнө. Тэгээд л үстэй өмдөө хөлдөө сийгээд л дээлээ нөмрөөд л нөгөө ганц том гудсан дээр чинь тэгээд л унтацгаадаг. Өдөр нь болохлоор гудсаа эвхчихээд л, тэгээд өвөр дээрээ тавьж, тал дэвтэр өгнө тэр үед чинь, 49 оны үед чинь дэвтэр олодохгүй үзэг харандаа байхгүй. Тэгээд Богдын хярд ургадаг тавилан гэж голоороо нүхтэй ийм урт мод байдаг юм, одоо энэ Богдын цаана ургана, тавилан гэж нэрлэдэг. Тэр тавилангийн чинь түүж авчраад, тэгээд нөгөөдөхөөр тугалга, манай чинь одоо бол чулуу гэж их байдаг юм байхгүй юу. Одоо чулуун нүүрсний нөөцтэй газар л тэр бал чулуу байдаг юм байлгүй. Тэр бал чулууг чинь авчраад хэсэг хайлдаг, хайлгадаг байсан юм. Хайлуулаад өнөө тавилангийн чинь голоор цутгачихдаг. Тэгээд нөгөөдхөө үзүүрлээд ингээд харандаа хийчихдэг. Тэрнээс гадна манай тэр одоо суманд газар хөдөлгөөн, 57 онд газар хөдлөөд байхгүй болчихсон юм. Одоо сумын төв балгас болчихсон байна лээ. Шаварлаг тэр үед чинь дандаа шавар барилгатай байлаа шүү дээ. Тэгээд тэр уулын ус авдаг тэр Улаан эргийн хавиар ингээд зос шороо гээд тэр улаан зос шороог зуураад, нөгөө дээр үеийн одоо нэг цөгц юм уу даа, одоо энэ бурхны голгүй цөгц, эдий хэрээний цөгцүүд, манайд тэр балгас чинь ойрхон гучаад км тэр уулынхаа энгэр дээр байдаг юм байхгүй юу. Тэгээд тэр балгаснаас л олж ирж байсан гэж бодож сууна. Маш олон тийм цайны цөгц, ёроолыг нь аваачаад ингээд цагаан төмрөөр ингэж ёроол хийгээд, тэгээд нөгөө лац гээд нэг юм байж, лац хайлуулаад ингээд лацдачихсан. Тэгээд нөгөө улаан цойвоогоо (зос шороон бэх?) хийчихсэн. Тэгээд нөгөө тавиландаа, утсаар бооно, утсаар ингээд боочихсон, нөгөө төмөр үзэг. Хумбан цагаан таван хошуут гээд тэр үед дээр үед чинь төмөр үзэг байлаа шүү дээ. Тийм үзэг аваачаад ингээд утсаар боочихсон, тэгээд өнөө улаан шороондоо дүрээд бичдэг. Одоо тэгэж бичдэг байсан. Одоо Раднаабазар, Гайтав бол одоо хотод байж байна, эд нарт очоод ингээд л ярих юм бол наадахыг чинь яг л ярьна.

Цоохор Бавуу гэж бидний багш байсан юм, лам хүн байсан юм гэнэ лээ. Тэгээд миний нэрийг болвол одоо ламын сахил өдөр тутам уншдаг, ламын сахилдаа Бадмаарэгжэн гэж дуудагдаж байгаа юм. Тэгээд орчуулахдаа зэрэг Цэцгийн язгуур гэсэн үг, Лянхуа цэцэг гэсэн үг. Тэр Арцын нуруу гэж 180км урт уул байдаг шүү дээ, Бага Богдынхоо урд талаар ингээд, Говь-Алтайн уул руу ингээд Арцын нуруу гэж Арцбогдын өвөр хоолой гээд л цаг агаараар зарладаг шүү дээ. Тэр Арцын нурууны чинь өвөр тэр Шар хулс гэдэгт Өршөө багш бүгэж байсан юм байна даа. Энэ хийдийн лам нарыг бариад

аваад явчихсан, тэгээд л зугтаагаад тэнд бүгэж байсан юм байна л даа. Тэгэхэд нь авчирч адис авахуулж, хамгийн сүүлд нь адислаж, хамгийн сүүлд нэр хайрласан хүүхэд би юм гэнэ лээ. Тэгээд надад Бадмаарэгжэн гэж нэр өгсөн байсан. Тэгээд би 49 онд, манайх чинь дандаа Рэгжин гэж хэлдэггүй, хэцүү байдаг байсан юм уу, яадаг байсан юм Бадмаа л гэж аав ээж ах дүү нар маань хэлдэг байсан. Хөөе Бадмаа, Бадмаа дандаа Бадмаа л гэж дууддаг байсан. Тэгээд сургуульд суусан чинь нөгөө нэг нэрээрээ Бадмаарэгжин гээд бичүүлэхгүй юу. Тэгсэн чинь тэр цоохор Бавуу гэдэг багш өөрөө лам хүн байсан юм. Тэгээд гараад нөгөө бичиг үсэг, өнөө хуучин монгол бичиг мичгийг юм хараад сүүлийн үед нөгөө, юу яахдаар зэрэг сургуулийн багш болсон. Тэгээд наадах чинь хуучин монгол бичиг бичигтэй ч, шинэ үсэг бичигтэй болчихсон хүн байсан. Тэгээд Бавуу багш маань “үгүй энэ ламын сахилын нэрийг юухэв, энэ болохгүй” гэж бодсон юм уу яасан юм, Рэгзэн гээд нэр биччихсэн, тэгээд Бадамрэгзэн гэж. Бадамрэгзэн гэдгийг энэ Бавуу багшийн өгсөн нэрээр л Рэгзэн гээд яваад байна. Тэрнээс хойш бичиг бүх юм, одоо цэргийн бүртгэл муртгэл бүх юм, диплом миплом бүгд, одоо иргэний паспорт хүртэл Рэгзэнгээр явдаг болчихсон. Уул нь болвол Өршөө багш нь хайрласан нь бол Бадмаарэгжин гэдэг ламын зэргийн нэр өгсөн юм. Тэгээд яагаад тэрнийг мэдэв гэх дээр зэрэг, ерэн биш нөгөө далан насан дээрээ ингээд лам болоод ламын сахил авахгүй юу, тэгээд лам болоод ламын сахил авахгүй юу. Надад ламын сахил өгсөн багш бол одоо энэ Баянхонгорт байгаа. Баянхонгорын Эрдэнэ ямар юм билээ, тэр суманд явчихсан байх, манай энд байж байгаад явсан юм, Пүрэвдаваа гэж хамба хүн. Энэ их сургуульд багш байсан, Гандангийн. Номын, Сталингийн номын санд 15 жил, энэ Төв хорооны юун дээр ажилласан юм гэнэ билээ, Пүрэвдаваа гэж хүн одоо Баянхонгорт байгаа. Тэр Пүрэвдаваа багш маань номын сахил хүртээсэн. Тэгэхэд “өө тэртэй тэргүй Бадмаарэгжин номын сахилын нэртэй хүн байгаа юм даа. За яахав яахав нэг сахил авч байгаа юм чинь, нэр хайрлах бас номтой (ёстой) юм чинь”. Тэгээд ингээд нэг дөрвөлжин бичсэн юман дээр шоо хаяж, тэгээд тэр шоо нь юун дээр бууна тэр нэрийг хайрладаг юм байлаа шүү дээ. Тэгээд яахав Бадамдорж гэдэг нэр, сахилын нэр Бадамдорж, ийм нэрлэхээд байгаа юм. Ерөөсөө л заавал Бадам нэр л надад явах ёстой л юм байна лээ.

Д : Бага сургуульд ямар хичээл үздэг байв?

Б : Өө бага сургуульд чинь одоо, тэр үед чинь за тоо монгол хэл, гуравдугаар ангиас эхлээд хуучин монгол бичиг зааж байсан юм, уйгаржин монгол. Тэгээд л байгаль судлал. Одоо ийм л хичээлүүд л ордог байж дээ. Түүх зааж байсан юм байна, Хүннү Сүннү гээд л бас нэг тийм юм заагаад байдаг байсан шүү. Тэгээд биднийг чинь гурав дөрөвдүгээр ангид орох үед л харин хэд хэдэн багштай болж байсан байгаа юм. Архангай аймгийн Самбуу гэж,

Архангайн Хайрхан сумын хүн ирж байсан, Самбуу багш байсан. Аа сүүлд нь намайг дөрөвдүгээр анги төгсөхөд, манай нутгийн хүн байгаа юм, Дэмчигийн Гончигсүрэн гэж, энэ сүүлдээ энэ цэргийн прокурор прокурор байсан, сүүлдээ энэ МАХН-ын хянан шалгах гэж байсан, намын хянан шалгахад ажиллаж байсан Гончигсүрэн гэж тэр багш 49 онд дөрөвдүгээр анги төгсгөж багшилж байсан. Тэгээд би бодоход миний хичээл хийх хобби ерөөсөө энэ уран зохиол, энэ тал руу ер нь их хоббитой хүн байжээ. Тэгээд би ерөөсөө тэр чинь, шүлэг ер нь дор нь цээжилчихдэг. Тэгээд л тэр унага мунага бүх юм, одоо Дашзэвгийн Сэнгээгийн зохиосон бүх юм, одоогоороо миний цээжинд ердөө мартагддаггүй юм. Тэрийг байнга л шүлэг уншина. Юу болох дээр зэрэг унага мунага гээд л шүлэг. Тэгээд л дунд сургуульд ороод л ирэх дээр чинь зэрэг одоо л “Сэгс Цагаан Богд”, “Солонгосын заяа” гээд л нээх гоё шүлэг байдаг шүү дээ. Энэ шүлгүүдийг чинь уншдаг, уран уншлага. Өө энэ САА-д агрономич хийж байхдаа хүртэл, би чинь урлаг. САА-н аварга шалгаруулж байгаа гээд л дууны аварга шүлгийн аварга гээд шалгаруулахад чинь, энд чинь тэр хэний Гарваагийн зохиосон “Сүхбаатар ахдаа” гэж энэ партизануудын тухай гоё шүлэг бий, тэрийг чинь уншаад дураих шиг боллоо гэнэ, шалгарчихдаг л байлаа. Одоо тэр шүлэг нь бол, тэр одоо хүний сурсан юм гэдэг бол хэзээ ч мартагддаггүй, үхэн үхтэл хамт байна уу гэхээс арилах гэж байдаггүй юм шүү дээ, ерөөсөө. Ухаан, ой тоо муудна уу гэхээс тэр сурсан юм бол арилна гэж ерөөсөө байхгүй. Ерөөсөө юу ч сурсан ялгаагүй тархинд нь байдаг ёстой байдаг юм байна. Аа тэгээд тэрний үр ч байдаг юм болов уу. Тэгээд би энэ түүх сонирхоно, урлаг уран зохиол их сонирхоно. Аа кино зохиол бичих гэж үзлээ, жүжиг бичих гэж үзлээ. Тэгээд шүлэг шүлэгнүүд болвол яахав бичээд л ингээд. Аа тэгээд л сонин сэтгүүл радио хэвлэлд юм бичдэг байсан. Одоо тэгээд сүүлдээ огт мэдэхгүй шүүмж бичих гээд. Бичихээрээ нэг одоо ч нэг сайн юм олоод бичих юм олдохоо байсан юм байна шүү дээ. Дандаа шүүмжлэл юм уу, дандаа нэг тийм болохгүй юмыг гаргаж бичмээр л юм. Одооны чинь юм тиймэрхүү болдог болчихсон юм даа, тэрнийг нь бичихлээр хүнд ад үзэгдэнэ.

Одоо би энэ музейн чинь тухай чинь та нар олж үзээрэй, 2007 оны “Зиндаа” сонины No.7 дээр байгаа шүү. 2007 оны “Зиндаа”, “Зиндаа” сонины No.7 дээр байгаа. “Эрдэнэзуу сүм хийд байх ёстой юу. Эрдэнэзуу сүм хийд байх ёстой юу эсвэл музей байх ёстой юу” гэсэн гарчигтай байгаа. Том шүүмжлэл бичээд наадахаас чинь болж шүүх мүүхэд энэ тэр гээд, нэр алдраа сэргээлгэнэ гээд наад чинь. Их л юм хийсэн хүн л юм байна лээ. Энэ жил гэхэд л гурван алтан бурхан хулгай хийж вагоноор солиод хоёр жил зургаан сар шоронд ороод. Гэх жишээний л. Хачин юм.

Д : Таны хоол унд ямархуу байв, бага сургуульд байхад хоол унд юу иддэг

байв?

Б : Өө яахав тэр үед чинь хүүхдийн сургуулийн түлээ, сургуулийн хоолны мөнгө гээд жаахан чинээлэгдүү амьдралтай улсуудад ноогдуулан өгдөг байсан юм. Тэгээд тэд нар чинь сургуулийн хүүхдийн хоолны мөнгө авчирч өгнө, хоол авчирч өгнө, мал махаа. Түлш түлээ авчирч өгнө. Манай говьд чинь бол яахав дээ заг их юм чинь. Тэгээд л говийнхон чинь тэвэр тэнгээрээ заг авчирч өгөөд л, овоотол овоотол энэ баруун байшин шиг чинь заг овоолоод хаячихсан байдаг байсан юм.

Д : Хоол ямархуу хоол байх вэ. Одоо ногоо цагаа юм байдаг юм уу?

Б : Өө тэр үед чинь үхсэн юуны ногоо. Ногоо гэдэг чинь тэр үед чинь мэдэх ч үгүй. Манай Богдын хярд чинь болвол өнөө хоолонд хийх сайхан ногоонууд бол ургана шүү дээ. Зэрлэг сонгино монгино чинь хаачих вэ. Ёстой монголд ховорхон “А” витаминтай зэрлэг сонгино чинь хаа байна, манай Богдын нутагт. Манай Зүүн Богд, Баруун Богдод, чинь ургадаг байсан байхгүй юу. Тэгээд л голцуу зэрлэг сонгино, өнөө улсууд чинь тэгээд хичнээн шуудайгаар нь авчраад өгчихнө. Тэрнээс чинь зэрлэг сонгинотой хоол, бууз сайхан гурилтай хоол чинь зэрлэг сонгинотой. Тэгээд тэр үед чинь говийн цагаан зээр хар сүүлт гэдэг чинь элбэг, хорио байхгүй. Өө тэгээд л Богдын хяр чинь янгир аргаль. Тэр үед чинь янгир аргалыг чинь алж авчраад л дүнхийтэл нь, толгойг нь бас л тусад нь авчраад өгчихнө, сургуулийн хүүхдийн хоолонд. Янзын сайхан хар шөл, янзын салахгүй хоол хийдэг байлаа шүү дээ, тэр үед чинь. Тэгээд л тэрнийгээ төхөөрөөд л, үхрээ төхөөрөөд л сарлагийн үхрээ төхөөрөөд л, тэр үед чинь бол унд гэдэг чинь сайхан байсан үе юм даа, хоол ундаар бол ярих юм байхгүй. Тэгээд л өнөө нэг ааруул эззгий, тэгээд цагаан тос. Тэгээд тэр үед чинь нэгдэл нийгэм гэж байгаагүй. Дандаа хувийн аж ахуй байсан учраас, чөлөөтэй, тийм байдаг байжээ.

3 Лам нарын хувь заяа

Д : Тэр үед одоо бол лам хуврага гэж байхгүй байсан даа?

Б : Өө тийм юм байхгүй ёстой бүгд тийм. Лам нар бол одоо ингээд нөгөө ял зал яваад ингээд, арван жил мил аваад эргээд, ингээд ижилчихсэн тийм лам нар. Тэгээд зарим нь дарагдаагүй үлдсэн лам нар бол байсан. Манай нутагт бол их байсан. Одоо би бүр тэр тийм тийм лам тэнд байсан, тийм лам байсан гээд л нэр усаар нь хэлсэн ч тэр бол бүгд байна. Аа тэр үед бол миний мэдэх, одоо манайхны нэг аавын төрсөн ах нь Сэнгэравдан гэж их том номтой лам хүн байлаа, Сэнгэравдан гээд. Равжин гэж одоо ямар цол байсан юм мэдэхгүй юм, тийм хүн байсан гэж байгаа шүү дээ. Тэр бүр Энэтхэг мэнэтхэг ч явж байсан юм гэнэ лээ, их номтой хүн. За тэгээд энэ өвгөн их нуугдана, нуугдаж байсаар баригдалгүй үлдсэн юм гэнэ билээ гэж ярьдаг байсан юм,

манай аав. Хааяа нэг ирнэ тэгээд. Орон гэр ч байхгүй үр хүүхэд байхгүй, тэр үеийн лам нар чинь тийм болчихсон байсан. Тэгээд ах дүү нараар, нутгийн ах дүү нараар амьдраад л явдаг, тэгэж явж байгаад зайлуул өнгөрсөн.

За дээр нь Балхаанваанчиг гэж өвгөн байсан юм. Одоо саяхан тэр Гончигсүрэн багшийн чинь ах нь болох өвгөн байсан юм даа. Дэмчигийн Ваанчиг гэж хүн байсан, хоч нь болохоор Балхаан гэж. Дэмчигийн Ваанчиг гэж лут номтой өвгөн байсан, наадах чинь. Хо энэ өвгөн бол одоогоор бол жинхэнэ ардчилагч хүн байж. Тэгээд тэр үед чинь 1951 онд Ардын улсын бага хурал гэж сонгууль явагдлаа. Тэгээд манай 10 жилийн барилгыг гурван жил зургаан сард барьсан, ударник барилгачин Гэсрэнгийн Шар гэж Өвөрхангай аймгийн Гучин-Ус сумын харьяат хүн байсан, тэр Гэсрэнгийн Шар. Би чинь нөгөө 51 он гэхэд чинь сургуулиас гарчихсан хөдөө хоёр жил болчихсон байж байсан үе шүү дээ. Тэгээд арван гэрийн ухуулагч гэж бий. Наад сонгуулийг чинь Гэсрэнгийн Шар сонгууль өгч байгаа юм гэж арван гэрийн ухуулагч хийж, намын ухуулагч хийж явлаа шүү дээ. Тэгээд сайн мэдэж байгаа байхгүй юу. Тэгээд л очоод энэ Ваанчиг гуайн чинь нохойд нь уруулчих гээд л нөгөө сонгууль, үндсэн хууль хоёрыг ингээд л ярьна аа. Тэгэхдээр чинь зэрэг урдаас ингэдэг байхгүй юу. За тэр Ардын их хурлын депутат гэдэг чинь харанхуй юм даа, харанхуй юм гэж шууд ингэж асуудаг байсан, энэ Ваанчиг гуай. Тэгээд өнөө хүүхэд элэг барьж тэгдэг байсан. Нөгөөдөх нь ам нь даварсаар байгаад, сүүлдээ нөгөө намынхантай чинь яриад, ам цуурсан хэрэгт арван жилийн ялтай яваад ирж байсан шүү дээ, Ваанчиг гуай. Жишээ энэ.

Олон лам байсан манай нутагт. Тэгээд л хөөрхий минь бас их л олон лам нар сайн нь том хийдэд байсан юм байна лээ. Тэгээд л их олон лам нар хэлмэгдэж байхгүй болсон юм байна даа зайлуул. Хамгийн сүүлд Өршөө багш, би түрүүн яриад л байгаа юм, тэгээд л яваад л яваад л тэгээд байхгүй болсон юм байна лээ. Тэгээд яахав, тэгээд үлдсэн улсууд нь бол яахав, манайхнаас чинь одоо за байз, одоо энэ манай тэр үүдэнд сууж байгаа энэ Нацагдоржийн чинь аав нь Уянгын хүрээнд байсан юм байна лээ. Тэгээд намайг энд байж байхад нас барсан. Манай гэсгүй хийдэг юм шүү дээ, Нацагдорж гэж хүн байгаа. Тэр Нацагдоржийн аав нь Балчин унзад гэж Уянгад байсан, унзад хүн байгаа юм. За энэ хэний, Нацагдоржийн авгайн эцэг нь манай Богдын хүн байсан, бас лам. Их том лам аа. Гунгаа гэцэл гэж, гэцэл цолтой хүн байсан. Гунгаа гэцэл гэж байсан. Эд нар бол 10 жилтэй яваад ялаа эдлэж байсан улс л даа. Энэний ах нь ловон Сэнгэ гэж манай энэ Хархоринд байж байгаад өнгөрсөн. Ловон бол манай хутагтын хийдийн ловон байсан. Сэнгэ гэж манай Богд сумын анхны засаг дарга, наад ловон Сэнгэ гэдэг чинь. Эд нар бол ингээд үлдчихсэн байхгүй юу. Баригдахгүй үлдээд зүсээ хувилгаад л, МАХН-д үнэнч гээд хар болно гээд ингээд л.

Ямарсайндаа бол засаг дарга хүртэл хийж байсан. Тэгээд энэ болов уу, манай хутагтын хийдийн ном судар одоо манай Нацагдоржийнд байна, арван долоон авдар ном судар байгаа юм. Тэр нь одоо, хутагтын хийдийн нөгөө мандал өргөдөг шүр сувд хонх монх нь эднийд байна. Хадгалалт хамгаалалтанд байж байгаа. Энэ ловон Сэнгэ гуай, энэ Гунгаа гэцэл ах дүү хоёр одоо хямгадаж, тэр манай Богдын Дуулаанхайрхан уул гэж том агуй байдаг юм. Энэ жил хүртэл сая 80 жилийн ойгоор зохиолчдыг очиж үзүүлж яваад ирсэн. Тэр агуйд хоёр хэсэг эсгийнд боогоод энэ Гунгаа шоронд явахаасаа өмнө аваачаад хийчихсэн. Тэгээд шоронд найман жил долоон сар болоод ирэхэд, ирсэн хойноо хэдэн онд ч юм очиж үзэхэд, гадна тал нь юунд идэгдчихсэн, эрвээхэйн дотор тал нь эрүүл, доторх ном судар нь яг хэвээр. Тэгээд сүүлийн үед энэ чинь, Сэнгэ гуай чинь Хархоринд ирчихээд, дээхэн үед энд очиж өөрөө гурилын үйлдвэрт ажиллаж байсан. Гурил тэжээлээ зөөж байх үед манайх чинь энэчээ 34-р бааз гэж явлаа шүү дээ. Тэгээд энүүгээр ингээд мань хүн бас авчраад, энд ингээд яахав хадгалчихсан байсан юм байна лээ. Тэгээд энэ гэсгүй болгодог учир нь ч бас. Юу ч байхгүй энэ чинь.

Тэгээд манай энэ юу, багш хамба чинь бол энэ Шанхын Баруун хүрээний гадны хүн, Даваа гэлэн гэж хүний хүү Хишигт гэдэг хүн байгаа юм манай энэ цогчин дуганы хамба бол. Даваагийн Хишигт гэдэг хүн Даваа гэлэн гэж байсан. Тэгээд энэ багш энийг мэдээд энэ дуганыг үүсгэн байгуулахад энэ хуучин ном судар, төр шашны хуучин түүхийн судар хэрэг болно гээд, тийм юм байхгүйгээр энэ хоосон дуган босгоод яах юм тийм ээ. Энэ бүх юм чинь бүгд музейн улсын фондонд улсын мэдэлд орсон юм шүү дээ, бүгд улсын, ширхэг ч юм судар ч энэнээс авах эрх байхгүй, улсын өмч нь дээр. Тийм зорилгоор энүүнийг мэдээд багш бол Нацагдоржийг авчирч гэсгүй болгосон юм. Би энүүнийг бол түүх намтар судлаж явдгийн хувьд мэдчихээд байгаа юм. Тэр ч битгий хэл уянгын мандлын шүр сувд хүртэл байна, зарим ном нь энэдээнээ байгаа юм шиг байгаа юм. Тэгэхдээ бид бол мэдэхгүй. За ёстой нөгөө жинхэнэ, нөгөө их сургууль л тэр шашны дээд сургуульд л оюутнууд, дээд оюутнууд үзэх Чойрын номнууд байна л гэцгээгээд байгаа юм. Би ямар тэр авдартай судар баримтуудыг нь задалж үзсэн биш. Арван долоон авдар ном судар байгаа юм даа.

Д : Тэр үед хэлмэгдүүлэлтийн талаар таныг бага байхад ер нь лам нарын ингэсэн тэгсэн хүмүүс юм ярьдаг байсан уу?

Б : Өө зөндөө л ярьдаг байсан. Багын юм чинь санаанаас мартагдахгүй ч юм байна. Тэгэж тэгэж яваад ирсэн, тэглээ ингэлээ, тэгэж байлаа, тэгээд л ингээд тэгээд л ярьдаг л байсан. За зүгээр захын жишээ ярихад л Өршөө багшийг бариад явчихсан жил, долоон сард барьж аваачсан юм байна лээ шүү дээ. Тэгээд тэр байж байсан айлын, бүгэж байсан айлын хүн нь гээг Сэнгэдорж

гэж, манай Богдод гээг Сэнгэдорж гуай гэж байсан, нас барчихсан. Тэр Сэнгэдорж гуайн хүүхдүүд ойр төрөл нь одоо Богдод байна л даа, сая Гайтавын нааар явахад байж л байна, гээг Сэнгэдорж гэж. Тэднийд шар хулсан бөгж байсан юм байна лээ. Гээг Сэнгэдорж гуайн шар хулс гэж бөгж байсан.

Тэгэхэд долоон сард, тэгээд хоёр морьтой буутай хүн ирээд барьж аваачаад, аваад явчихсан гэж. Тэгээд гээг Сэнгэдорж гуайн тэр багшийг бариад явсны дараахан, нэг арваад хоносон ч юм уу үгүй ч юм уу, тэгээд л их борооны жил гэж манай богдынхон ярж байсан. Үргэлжилсэн бороо ороод л, тэгээд л энэ хавиар чинь усны аюул болоод л, айл амьтан мал хуй мод чулуу чинь урсаад л, өчнөөн мал өчнөөн хүн амьтан айл усанд үйж усны аюулд урсаад л, их борооны жил нэрлэчихсэн. За нэгдүгээрт тэгэж байсан. Тэр нь яаж байгаад тэгсэн бэ гэхдээр зэрэг, говийн маань ганц “Хутагт” одоо ингэж яваад, тэгээд хэлмэгдсэн дээрээ л (учраас) тэр газар нутаг лус савдаг нь, одоо бурхан хүрээ хийд нь тийм араншин гаргасан байхаа, настайчууд тэгэж ярьдаг байсан, одоо лам нар байсан улсууд. Аа тэр бол үнэн юмаа гэж би одоогоор бол ойлгож мэдэж байгаа юм.

За тэгээд дээр нь ингэж ярьдаг байсан. За Өршөө багшийн түрүүчийн дүр нь манай нутагт хоёр төрсөн хүн юм байна лээ шүү дээ. Түрүүчийн тэр дүрийг нь бол энэ жил би явж, одоо манайд байгаа зураг хөргийг нь олж ирлээ. Аа тэр үед бүтээж байсан бүтээлүүдийг нь судлаж зураг хөргийг нь авлаа. Аа тэр сүсэглэж байсан тэр далайн түвшнээс дээш гурван мянга хэдэн зуун метрийн тэр оргилд хүрч, төрийнхөө далбааг хүртэл хатгаад, одоо надад зураг нь хүртэл яваа, яваад ирлээ шүү дээ энэ жил. Далан дөрвөн настай хүн тэр Богдын тэргүүн дээр гараад ирнэ гэдэг чинь зүгээр нэг жирийн хэрэг биш. Би энд болвол бурхны зөв зам руугаа орсон гэгээнтэн, тэр гэгээнтэн хутагтын бүрэлбаа увидас надад шингэсэний үр ач гэж би ингэж ойлгож байна. Одоо манай гэрт очоод ярих юм бол бүр сайхан ярих юмнууд бол байна л даа. Бүх зургийг нь аваад ирсэн, фото зургийг нь угаалгачихсан. Тэгээд манай хүү чинь юунд ажилладаг юм шүү дээ, Ариунболд гэж ТВ-9-ийн Маркетингийн албны даргыг хийж байгаа шүү дээ. Хоёр Ариунболд бий шүү дээ, Б. Ариунболд гэж Маркетингийн албаны дарга нь. Ариунболд тэр аппаратыг нь авсан, миний хүү дискэн дээр бичнэ гэсэн, бичсэн байх. Гэхдээ би бүгдийг нь угаалгасан, бүгд байгаа.

Тэгэхэд тэр түрүүчийн дүр нь Цэрэнваанчиг гэж хүн байсан юм байна лээ. За тэр Цэрэнваанчиг гуайн бурхан, явсан бурхныг нь би олсон. Аа тэгээд наад Цэрэнваанчиг гэдэг хүн чинь чулуугаар, ямар чулуу хаанахын чулууг нь би мэдэхгүй, луу хийлгээд, тэгээд тэр Урандөшийн нуруун дээр аваачиж тавиулсан, сарлагийн үхэрт ачиж улсуудаар явуулжээ. Аа тэр Урандөшийн нуруу бол Богдын тэргүүн, далайн төвшнөөс дээш 3796м. Тэрнээсээ нэг

296м-ийн наад талд бол, тэн дээр одоо бол бүр хийд хүрээ байгуулахын бол, янзын сайхан дуган хүрээ байгуулагдхаар тийм хавтан байна. Тэр Урандөшийн нуруун дээр аваачиж тавь гэж явуулсан байгаа юм. Тэр Урандөшийн нуруу дээр бол, энэ Цэрэнваанчиг сүүлчийн багш Өршөө багшийн тахиж шүтэж байсан овоо бол одоо байна.

За тэгээд би бол тэр Урандөшийн нуруу, тэр овоон дээр очиж тахилга шүтлэгээ хийгээд. Тагнуулын газрын дөрвөн хурандаатайгаа гарсан. Тэгээд тэр нэг хурандаа нь болох дээр зэрэг Баруунбаян-Улааны хүн юм байна. Энэ хэний энэ Цэрэнваанчигийн түрүүчийн дүрийн талын хүн, удам угсаа хүн яваа юм байна. Тэгээд тэр тэднийхэн тэр Цэрэнваанчигийн бурханчилсан, мөнгөн хүрээтэй жижигхэн хоолойноос нь зүүдэг тийм бурхан тэр нөхрийн хүзүүнд явж байгаад, тэр луун чулуун дээр очиж гарч ирж байгаа байхгүй юу. Тэр лууг ийм том ингэж ингэж хийгээд, ингэж явуулаад тэгээд энэ талын Бөхийн нуруу гээд өндөр нуруу байна, сарлаг үхэр явахаас өөр арга байхгүй. Тэгээд тэн дээрээс өнөө сарлаг үхэр туйлаад, нөгөө чулуу нь ингээд ойчихгүй юу. Ойчихдоо зэрэг өндөр уулнаас ингээд нисээд, доод хөндийд нь очоод тогтчихсон байж байгаа. Тэгээд тэр тогтсон газраа одоо байж байна. Тэр жигтэйхэн чулуужсан луу, тэр хөл өөдөө хажуу талынх нь хээ, одоо тэр хэвлий талын өнөө сарвуу гэх юм уу, гар тал эд нар нь тэр чигээрээ л байж байна. Тэгээд яаж тэгэж хийлгэж тэгээд явуулсан байгаа юм, их сонин байгаа юм. Тэгээд ямар чулуугаар хийлгэж байсан юм. Чулуужчихсан луу шиг л юм байгаад байгаа юм л даа, ингээд харах л юм бол. Аа тэгэхдээ чулуужсан луу биш, хийлгэсэн нь бол ойлгомжтой байгаа юм. Тэгээд тэр луу явуулаад, тэгээд нисээд тэнд ойчсон гэдэг нь бодит үнэн. За тэгээд тэр одоо тэр чулуун луу болвол тэнд байж байна. Аа тэгээд тэрийг нь бол сайхан янзлуулаад, хадаг мадаг мөнгө цаас тос ааруул ерөөсөө түүхийг баллах дээр болж байсан байна лээ л дээ. Тэгээд бүгдийг нь сайхан янзлуулаад, мөнгө цаасыг нь цуглуулж, шилэн гуунууд дор нь тавиулаад, хажууд нь одоо газрын доод талаас нь сайхан дөрвөлжин чулуу авчруулж дор нь дөрвөн хавтгай чулуу тавьж байгаад тулга шиг ийм ширээ тавцан хийлгүүлээд, тэн дээр идээ будаа өргөж байна, тийм ээ. Аа тэгээд дөрвөн талд нь юу хатгуулаад, мод тэгээд нөгөөдөхөд нь хадгаар ингэж хүрээлүүлээд. Тэгээд ингээд хамгаалалтанд аваад, тэгээд нутгийн тэнд зөвлөл байгуулуулсан. Ашгүй тэр нь яахав гэх дээр зэрэг, манай Өвөрхангай аймгийн байгаль орчны дарга Баясгалан гэж манай Богдын хүүхэд юм байна лээ. Харин тэр Хүрээ хадын рашаан дээр тэр тагнуулын газрын хүнтэй амарч тухлаад. Бас их сайхан улсууд тааралдаад.

Тэгээд байгаль орчны тэр Баясгалан тэр тагнуулын газрын дөрвөн дарга нэмээд бид нар ингээд морьтой малтай. Манай дүү нар тэр урд хөндийд нутаглаж байсан учраас би болвол морины зардал мардал өгөөгүй. Нэг морь унахад 20,000 төгрөг авдаг юм байна. За тэгээд нэг тарваганы боодог нэг

хийлгэхэд бас нэг 20,000 төгрөг биш өнөө 15,000 төгрөг, тарваганы боодог хийж авчирч өгдөг юм байна. Тэгээд тэнд чинь ерөөсөө ингээд бизнес өнөө зах зээл чинь нэвтэрчихсэн юм байна. Найман гэр барьчихсан, тэгээд Баруунбаян –Улааны хүн гэнэ. Тойв гэдэг хүн, тэгээд бас нэг хөөрхөн өнөө жуулчны ямар юм гэдэг билээ. Отог гээч маягийн болгочихсон харин зөв л байна л даа, тэгээд улсуудад газар нутгаа үзүүлээд ингээд явж байгаа нь их сайхан байна. Тэгээд “бид хэд одоо нутгийн энэ нөхөрлөл байгуулья, Баясгалан дарга та байж байгаад одоо энийг шууд хамгаалалтанд ав”. Сүүлд найман сарын үеэр суман дээр бол конторт нь ирж уулзаад, бүр нарийн ярьсан л даа. Тэгээд энэ нь бол хамгаалтанд Богдын тэр хийдийг хүртэл, цогчин дуганыг хүртэл ухчихсан байна, бүр. Тэнд дотроос бол дуганы одоо юу нь гарч ирж байгаа юм, нөгөө сангийн войпор нь. Хага цохиод хаячихсан байсан, хонх хүртэл хага цохиод хаячихсан. Одоо очир нь манай энэ гэрт байгаа. Том оо ийм том сайхан, тэгээд бараг, одоо бараг одоо нэг ийм юм даа, төө. Нэг эдий хирээний шавар мавар, үгүй тэр ямар гоё хийж байсан байна аа, тийм бурхан багш, шавар. Тэгээд тэр хийж байсан шавар, будаг, дандаа манай нутгаас гарч байсан байна, одоо манай энэ дуган. Тэгээд 1770 онд одоо цогчин дуганыг бүтээхэд будгаа яаж хийж байв гэдэг технологийг одоо гаргаж чадахгүй. Ганцхан тэн дээр л байна. Одоо НҮБ-д одоо бүх юм чинь тэгээд гаргаж явуулж байна шүү дээ. НҮБ-аас одоо бол ганцхан бусдыг нь баталчихсан мөртлөө будган дээр очоод л суучихаж байна шүү дээ. Яаж хийж байсан юм бол их сонин байхгүй юу. Тэр маажин л гэж яриад байгаа юм, маажин гэдэг чинь одоо ямар юм, одоо алийг хэлээд байгаа юм. Энэ тэрийн л одоо яаж хийж байсан юм, тухайн үед нь ер нь яаж хийж байсан гэдэг нь л нууц байгаа юм. Тэрнээс биш будаг шороо бол манайд бүгд байна. Тэр нутгийнхаа юмаар л будгийг нь, манай хийд чинь бүтээж хийж байсан байна шүү дээ.

Д : Таныг бага байхад одоо яг лам нарыг ингэж баривчласан, сүм хийдийг ингэж нураасан, ийм хүн ингэж хүрж ирээд нураасан гээд тийм юм ярьдаг байсан уу?

Б : Өө тэр ярьдаг байсан. Тэгэхдээ тэр хүн нь лав л манай тэр Хутагтын хийдийн зүүн тал дээр, тэр Айргийн даваа гэж байдаг юм, зүүхэн талдаа. Тэр Айргийн даваан дээр нэг том, одоогоор ярих юм бол энэ ЗИС-5 л байсан юм шиг байгаа юм. Тийм модон тэвштэй, тийм дөрвөлжин тийм дээрээ бэрзэнтэн, даавуу ч байсан юм уу, тийм том хар тэрэг ирээд л. Тэгээд л хийдийн лам нарыг, дөрөв таван тийм буутай улсууд ирээд л, тэгээд хийд дээр байсан бүх лам нарыг барьж аваад л явчихсан юм гэнэ билээ. Ярьдаг байсан. Аа тэр Айргийн даваан дээр нь болох дээр зэрэг, энүүний талын дайны хирээний чулуун дээр, морь чулуу гэж нэрлэдэг юм байгаа юм. Тэгээд хөтөл гэдэг юм, хөтөл гэж тэр Айргийн даваа. Цаад талаасаа болохлоор

Айргийн даваа, наад талаасаа Морь чулуун хөтөл гэж, энэ талаасаа Морь чулуун хөтөл гэж. Тэр хөтлийн тэр яг замын хажууд энүүний нэг талын дайны чулуу байдаг байхгүй юу, тэн дээр л том адууны мөр жижиг унаганы мөр хоёр байдаг юм. Энэ дээр яг ингээд гишгээд, дээр нь одоо шавар мавар нь галбир малбир нь хүртэл шавар чулуун дээр гараад үлдчихдэг. Гахайн махайн мөр мэдэгдэнэ шүү дээ. Тийм хоёр мөр байдаг байсан юм.

Тэгээд тэрийг бол яг тэр хавьд ирж барьж аваачсан юм гэнэ лээ л гэж ярьдаг. Тийм байсан. Тэгээд л энэ буруудах нь, болох нь гэх дээр зэрэг тэр том лам нар нь зугтаагаад дайжаад явчихсан, жижиг банди нар нь доогуур зиндааны дунд хэргэмийн лам нар нь “за яваад ч хаачих вэ” гээд байж байгаад баригдсан гээд ярьдаг юм. Тэр бол үнэхээр ингэсэн гэсэн нь үнэн л юм байна лээ. Тэгээд яаж тэрүүгээр явж байсан юм гэдэг их сонин байгаа юм. Тэнд чинь машин байтугай морьтой явахад ч хэцүү л газар байгаа юм даа. Тэр Айргийн давааны тэнд яаж гарсан юм, итгэхгүй л байгаа юм, машин гарсан гэхэд. Одоо бол хүчтэй машин мотоцикл хаа сайгүй яваад зам гаргасан. Тэгэхдээ газар хөдөлгөөнөөс бас эвдэрсэн байгаа юм, 1957 онд газар хөдлөхөд.

Д : Таныг бага байхад тэгээд баригдаад ирсэн лам нар тийм энгийн дүртэй л байдаг байсан уу?

Б : Өө энгийн дүртэй байсан. Энэ хэн гэж нэг өвгөн байсан, Пэрлээгүнтэв гэж. Тэгээд Пэрлээгүнтэв гуай баригдаж яваад л ирсэн юм гэнэ лээ гэж. Арван жилээр ял аваад, тэгээд ял эдлээд ирсэн юм гэнэ лээ гээд. Одоо баруунтаа тэр юунд Баруун Зүүн Гоёо гэж байдаг юм л даа. Далан түрүүний гол, Далан түрүүний голын зүүхэнтээ, Зүүн Гоёод нь байдаг байсан, Баруун Гоёо Зүүн Гоёо гэж. Зүүн Гоёод нь Пэрлээгүнтэв гуай гэж нэг тэмээ чөдөрлөчихсөн л өвгөн л тэгээд л, гоёо ургадаг, байдаг байсан юм. Тэгсэн чинь зайлуул сүүлдээ ямар гээч ч бузар болсон юм хэн мэдэх вэ, тэр тэмээ нь ингэн тэмээ байсан юм гэнэ билээ, хүн уургалж яваад баригдаад явчихсан л гэж дуулсан. Тэгээд ирээгүй байх аа. Пэрлээгүнтэв гуай тэгээд хаана нас барсан юм мэдэхгүй. Би ч тэр үед нөгөө сургууль соёл гээд нутгаас гараад алга болсон л доо. Би чинь ерөөсөө 69 онд ХААДС-д явж нэг хэлмэгдэж ирээд, тэгээд л наашилчихаад л аймаг дээр, тэгээд л наашлаад Хархорин, тэгээд л хойшоо гарчихсан хүн шүү дээ, тэрнээс хойш хаашаа ч яваагүй. Харин 78 онд харин Төгрөгт нөгөө Мазрын бүс гэж төв рүү очоод л тэгээд тэндээ байж байгаад л, тэндээс наашаагаа Хархорин эргээд л ирчихсэн. Тэгээд л тэрнээс хойш Хархориндоо байж байгаа юм. Ийм хүн байгаа юм.

Д : Тэр үед чинь тэгээд энгийн лам нар?

Б : Настайчуул нь сүүлдээ тэгээд яасан гэсэн мэдэхгүй, намайг бага байхын мэдэхээр бол ийм л байсан юм.

Д : Тэгээд энгийн лам нар эхнэр хүүхэд авчихсан байсан уу, зарим нь аваагүй

байдаг байсан уу, яадаг байсан юм бол?

Б : Өө тэр миний мэдэх лам нар чинь ерөөсөө эхнэр хүүхэдтэй хүн байгаагүй, Ваанчиг гуай байгаагүй. Дандаа дүү нартайгаа эд нартайгаа байдаг байсан. Тэгэхдээ тэд нар нь дандаа Ваанчиг гуайгаар овоглочихсон. Дэмчиг гэдэг хүн чинь том нь, ямар хүн байсан юм бэ? Дэмчигийн Ваанчиг, Дэмчигийн гээд л баахан улс, сүүлдээ Ваанчиг гуайгаар овоглочихсон байдаг байсан шүү дээ.

За Пэрлээ гуайн дүү чинь ямарсайндаа авгай байхгүй тэгээд байж байгаад. Өшөө чинь баригдаж байсан лам нараас, үгүй лам байж байгаад, Базархүү багш авгай хүүхэдтэй. Үгүй авгайтай хүн байсан. Аа бас хэн гэж хүн байсан, Саяннимбуу гээд л бас их том лам байсан гэсэн шүү дээ. Тэгсэн чинь сүүлдээ намын дарга, насаараа намын дарга хийж байгаад хамгийн сүүлд нь Богдод лам болоод, тэр чинь Саяннимбуу, одоо хүү нь Богдын лам байдаг юм. Амартогтохын Саяннимбуу гэж хүн байсан юм. Ховд сум гэдгээс өгсүүлээд намын дарга хийгээд л, тэгээд л Саяннимбуу гуай чинь хичнээн жил намын дарга хийсэн гэдэг билээ. Дөчин хоёр жил гэдэг байх. Саяннимбуу гуай чинь анхны намын дарга хийж байлаа шүү дээ. Тэгээд сүүлдээ Богдод лам болоод, тэгээд өнгөрсөн. Тэгээд хүү нь Дүгэр гэж Богдод лам хийж байгаа, Дүгэрээ гэдэг юм, Дүгэрээ. Дүгэрээг андахгүй дээ, богдын ганц лам юм чинь тэгээд, сүүлдээ авгай авчихсан. Бавуу багш чинь лам сүүлдээ авгайтай болчихсон байсан бас. За байз өшөө чинь манайхаас чинь өө Галсандаргиа гэж нэг лам өвгөн байсан юмсан. Том лам, Хутагтын хийдэд байсан гэсэн. Энэ Галсандаргиа чинь манай хөгшний ах нь болох хүн байгаа юм. Наадах чинь тэр Галсандаргиа гуай бол энэ хэн эд нарын ах шүү дээ, одоо миний яриад байгаа Раднаабазрын чинь, Раднаабазрын ах нь. Одоо халзан Сэнгэтүв гэж улсын төлөвлөгөөний комиссын дарга байсан, одоо энэ Рагчаа даргын орлогч, одоогоороо байгаа 94 хүрч байна уу, одоо юунд бий Баянхошуунд байгаа. Ханын материалын тэнд орон сууцанд байдаг юм. Халзан Сэнгэтүв гуайн насан дээр байхад чинь Сэнгэтүв гуай чинь, юу гэдэг билээ, ах нь төрсөн ах нь халзан Сэнгэтүв гэж хүн байгаа, Раднаабазрын ах Галсанжамбаа гэж. Энэ лам бол ёстой авгай хүүхэд байхгүй, ёстой лам чигээрээ явж байгаад л, тэгээд сүүлийн үед жаран дөрөв жаран есөн онд намайг ХААДС-д, миний ногоочноор ажилллаж байсан. Миний ногоон дээр хэсэг сайхан лам нар байсан юм шүү. Тэгээд хэн гэж бий Ажинмөнх, Ажинмөнх гэж багш байсан юм. Энэ чинь сургуульд ч багшилж байсан юм, наадах чинь бас. Галсандаргиа, Ажинмөнх, аа хэн, аа тэд нар ч лам байсан юм болов уу, зүгээр сүүлийн үед ном үзэж байсан юм болов уу. Ногоон Дангар гээд нэг өвгөн байсан юм. Энэ Хархоринд авгай хүүхэдтэй, авгай нь өнгөрсөн энд хүүхдүүд нь одоо энд байгаа. Ногоон Банзар гуай байсан юм. Гянабазар гэж байсан. Хэсэг лам нар байсан шүү. Ямарсайндаа ном уншаад

л наадуул чинь, очиход чинь ном уншаад л. Нөгөөдөхийг нь шүүрч аваад л нөгөө дээд ламын мөр дээр хаячихна, нөгөөдөхийг нь шүүрч аваад л цаадах дээр нь хутгачихаад, номыг нь хутгачихаад. “Та нар ногоо усал, тийм сүрхий юм бол бороо оруулаадах та нар” гэж өвчигнөж явсан толгой байгаа юм. Одоо бодоход пээ тэгэж байхын оронд наадах чинь ямар ном юм, ямар тамгатай түүхтэй юм, цадгийг нь яриулаад, ганц нэг төвд үсэг мүсэг дүрэм заалгаж байхгүй байсан юм гэж. Эргээд өөрөө юм сурах гэхээр өөрийгөө яаж байх юм, цэгнэж бодож байх юм. Хэсэг сайхан лам нар байсан шүү дээ, хөөрхий алив наадхыг чинь мартчихаад байх юм. Одоо миний энэ ирэх гэж байгаа номон дээр наадах чинь бүгд байгаа. Зурагтайгаа гарна. Зургийг нь олж аваад тэр номон дээрээ оруулчихаад байгаа юм.

Д : Дээхнэ энэ лам байсан хүмүүс нууцаар ном энэ тэр уншиж хурал ном хурдаг байсан болов уу?

Б : Аа эд нар чинь тэгээд ямарсайндаа тэгээд л хурдаг л байсан байна шүү дээ. Яваад очиход л тэр Галсансэнгээ ахын жижигхэн гэрт. Тэгээд тэр гэрт л манай Галсансэнгээ ах чинь өмд өмсдөггүй хүн байсан байх шүү. Нэг юбка шиг юм лам хүн өмсдөг юу гэдэг билээ, юу гэдэг билээ, Донгог тийм юм өмсчихсөн, ерөөсөө тэр. Тэгээд номоо уншиж л байсан байна л даа.

Д : Нутгийн хүмүүс бол нууцаар очиж ном эд нар уншуулах, юм хум асуух юм байдаг байсан уу?

Б : Өө байлгүй яахав. Өө тэгээд манайд чинь Богдын төв дээр чинь, Дархны лагерь гээд хэдэн лам нар байдаг манай богдын. Тэн дээр ч Дүгэяа гээд лам байлаа, хүний төөрөг зураг үздэг байлаа. Хэнтийдорж гуай гээд нэг лам өвгөн байлаа. Манайхны Ваанчиг ах, бас Ваанчиг ахаа мартчихаж. Ваанчиг ах бол Өршөө багшийн бурханч лам байлаа. Аа Чойсэнгээ гээд өвгөн байлаа. Миний тракторын жолооч байсан Бодьгэрэлийн аав нь Чойсэнгээ гуай чинь. Ёстой лут ламтан. Би Чойсэнгээ гуай дээр бол бүр Гучингийн, Төгрөгт байхдаа бол мотоциклтой давхиж очоод хоёр гурав хоноод л. Дүлийн даан ч зовлонтой дүлий, тэгээд цаасан дээр бичиж өгнө, шинэ үсгээр. Та тэр Янбийдалжир гэдэг номыг дуудаж аль, би бичиж авъя гээд л ингэдэг байхгүй юу. Одоо Чойсүрэн гуай, одоо миний өнөө пин дотор яваа, 78 онд Чойсэнгээ гуай дуудаж өгөөд, би нөгөөдөхийг нь бичиж авч байсан юм байна лээ. Хо хо хо Янбийдалжир.

Д : Төвдөөр үү, монголоор үү?

Б : Төвдөөр хэлж өгч байгаа байхгүй юу, төвдөөр хэлж өгнө. Би нөгөөдөхийг нь кириллээр дэвтэр дээр ингээд бичиж авч байгаа юм. Би ер нь тэгээд тэр үед дандаа лам нараар дуудуулж, өөрөө төвд мэдэхгүй юм чинь, дандаа тэр лам нараар дуудуулаад л (уншуулах), кириллээр бичиж аваад л, тэгээд л өнөөхийгөө уншаад, цээжлээд л явдаг. Цагааншүхэрт, энэ юу Ариунсан эд нар, Хийморийн сан эд нарыг чинь бол би өөрөө кириллээр бичээд авчихсан,

тэгээд цээжилсхийгээд уншиж явдаг байсан.

4 Социалист үеийн зурхай

Б : Мэргийг бол би арван гурван настайгаасаа, тэр бас л Өршөө багш нь жинхэнэ мэргэч, зурхайч байсан юм байна лээ, шар Адьяа гэдэг лам. Сахилгагүй хүн саваагүй хүн гэдэг чинь юм болгонд салбаганаж явдаг. 49 онд би арван гурван настайдаа заалгаж байсан байгаа шүү дээ. Бага сургууль төгсөөд л хөдөө гарсан, зун тийшээ. Тэгээд манайх тэр Баянцайрын дөрөлж гэдэг дээр нилээн хэдэн айл айл зусч байхгүй юу. Өө тэгсэн чинь бороо ороод л, тэнгэр бүрхээд л их эвгүйрхээд л. Би хонинд явж байгаа юм. Тэр Шувуубааст гэдэг тэр урагшаа зүүнтээ хад. Чоно ихтэй л дээ. “За чи бороонд амьтан хүний мал чононд авхуулав аа. Ээ Бадам аа чи сайн харж байгаарай миний хүү” гээд л ээж маань захиж байсан. Балжин ахай гээд манай ард талд улсын сайн малчин нэртэй нэг авгай байна. Тэр авгай бол лут, ёстой малчин хүн байсан. “За Бадам аа чи хөдөө гадаа унтаж байж мал л алдав. Чи энэ тарнийг тогтоогоод, чи ойтой хүүхэд. Чи ер нь ном амархан тогтооно. Чонын аманд зууруулдаг тарни” гэж надад тарни хэлж өгч байдаг, Балжин ахай. Тэгээд тэр нөгөөдөхийг нь туж уншиж явдаг байсан байгаа юм. Тэгээд тэр өдөр тэгэж явж байгаад овоо бүрхээд л, өдөр үд болж байгаага ч мэдэхгүй таамаглаад л, хонь мал гэр рүүгээ цувахлаар нь тэгээд явуулчихгүй юу. Тэгээд юу хуйгүй хамаад л мал явчих вий гээд л хамаад л, тэгээд яваад байсан чинь. Манайхны ард талд Алтантэвш гээд хүн тавьдаг хонхор. Пээ тэн лүү та нар явав гээд айлгана шүү дээ, хүн тавьдаг газар луу чинь ёстой халдуулахгүй (ойртуулахгүй). Тэгээд тэр лүү л хэсэг мал даваад орчих вуу, яав нэг л гэсэн шиг санагдсан юм. Тэгээд яахав алехануур гэртээ ойрхон юм хүрээд ирэх байх даа бас гэж бодогдоод л, тэгээд хүрээд ирсэн чинь бороо ороод уналаа. Тэгэж байтал нохой хуцах юм, баруун талаас бор морьтой нэг юүдэн цув юүдэн, гээд нэг складан цув гээд тэр үед чинь нэг улаан малгайтай байдаг байлаа шүү дээ. Тийм юм өмссөн бор морьтой өвгөн нал нал гээд шогшоод, манай ард талын Балжин ахайнд буучихдаг юм байна. Тэгээд ахайнд буучихсан. Би болсон хойно төдхөн тэсэхгүй гүйгээд л орлоо. Тэгсэн чинь зоосон төлөг ингээд тавьчихсан ингээд байж байна аа. Үгүй бас жигтэйхэн юм аа гээд л ингээд байх юм. Холгүй л ойрхон, нүднээс далд хээрийн нохой ирээд байна даа одоо гэж байна шүү. Тэгсэн чинь л Балжин ахай нөгөө цайгаа уудлах гэж байсан хүн чинь, дээгүүрээ нэг муу ийм цасармаг цагаан цамцтай ийм богинохон өмдтэй ингээд л байж байсан. Тэр үед чинь шалдан л гүйнэ шүү дээ бид нар чинь. Айл амьтан болвол настай улсын үгэнд ор та нар, настай хүний ар өврөөр гүйлээ, гар гээд хөөдөг байхгүй юу. Тэгээд л дөрвөлжний ард зогсож байгаа юм чинь. Тэгсэн чинь өнөө шанагаараа аваад хаядаг. Энэ муу Бадамаа явсан юм байгаа юм,

явахгүй юу чи гээд л. Ухаан алдчихна, ээж аав тэр хэн гуайгаас ч бид чинь айна шүү дээ. Хэн гуай ч ирээд хөдөө мал дээр яваад унтаж байх юм бол зодьё нүдьё гэж. Тийм хүмүүжил тийм сайхан байлаа шүү дээ бид нар чинь. Тэгээд л год гээд л гарч байгаа юм чинь. За тэр лүү яг тэнэчээ гэж байна. Хаяанд нь бас жаахан барьдаг байсан юм уу, тэр Насантогтох гэж байсан надтай хамт сургууль төгссөн охин нь байсан юм, тэр нь барьдаг байсан юм болов уу нэг мод байна. Нөгөөдөхийг нь бариад ирээд нүдчихэж байгаа юм чинь. Гүйгээд л гарсан чинь, хөө нэг арав гаруй хонь ямаа л янзын амьтан л, дотроо бол юм үзээгүйшүү л дээ, би бол чоно гэдгийг чинь хараагүй байсан байхгүй юу. Өө нөгөөдөх чинь мордчихсон гараад очсон чинь хүрч ирээд л бөөгнөрлөө, тэгээд л дайрах юм. Тэгээд л зад үсрээд орох юм, тэгээд тойрч давхиад л хураагдаад л. Дуугарах гэсэн чинь үстэй толгойны үс босчихож байгаа юм шиг болоод л, хоолой дуугарч болдоггүй шүү. Хэ хү туу л гэх гээд байгаа даа, ерөөсөө дуу гарахгүй, нүднээс нулимс гарч байгаа юм шиг болоод л арзайгаад л, дотор хачин болоод. Чоно эхлээд харахад чоно могой хоёр л хоёр талд янзын амьтан байгаа юм, ерөөсөө дуугарч болдоггүй. Тэгэж байтал хөөе туу гээд л эргээд харсан чинь Балжин ахай л хажууд. Тэгсэн нөгөөдөх чинь нээх их дургүй нь хүрсэн царайтай нэг хоёр эргэж хараад л алхаж явна. Чи явахгүй юу хөөе наадахыгаа чоно хөөгөөд ирж байгаа юм ураад хаячихсан байх л гэж байна. Тэгээд л бүгдийг нь хөөгөөд л бужигнуулаад л ирсэн чинь, нэгийг нь ч ураагүй баахан хонийг маань шүлсдэж шүлсдчихсэн байсан. Тэгсэн тэр эрүү нь, эрүү нь зуурчихсан амьтан байсан байна лээ л дээ. Тэгээд тэр нь яагаад эрүү нь зуурчихсан байдаг юм, үнэхээр хөгшний зааж өгсөн номонд тэгэж болж зуурсан уу, аа яахав тэн дотор хэвтэж байсан чинь гэнэт дээрээс нь мал ороод ирэх дээр зэрэг тэгдэг гэнэ шүү. Их өлссөн хээрийн амьтан чинь гэнэтхэн юм дээрээс нь ороод ирэхээр, гэнэтхэн юм харагдахаар эрүү нь зуурчихдаг гэнэ. Тэр тэгсэн гээд зуусан байж ч болно. Хоёр талтай л даа, тэр бол тэгэж байсан. Тэрийг би тэгээд л за Адъяа гуай ёстой ганц сайн мэргэлдэг юм байна.

Тэгээд манай ээж нэг есөн зоос одоо байдаг. Тэгээд манай аав чинь мал туугаад л явж байдаг, мал туугаад л явчихдаг, мал тууварчин хүн байсан. 37 жил мал туусан зайлуул мани бадми хум, үхэн үхэтлээ. Тэгээд аав ээж ч мэргэлүүлнэ, тэгээд өнөө эзэнгүй болохлоор муу ээж минь гэхээр л зоостой хүн явна зоосгүй хүн явна. Тэгээд тэгдэг байсан байхдаа зоос надад есөн зоос байсан. Тэгээд л ээждээ хэлнэ. “За ээж ээ та есөн зоосоо өг, би Адъяа гуайгаар зоос заалгая” гэдэг юм байна. “Өө тэг миний хүү тэг. Ёстой Адъяа гуай чинь ёстой мэргэн хүн дээ, миний хүү тэг тэг” л гэж байна. Аа зоосыг нь аваад л орлоо. Ороод л хэлж чадахгүй байгаа юм, их даруухан тэгээд тэгээд ямааг нь оруулж өгөнгүүтээ баярлаж байгаа юм чинь тэгээд л. “Ажаа ажаа, ажаа ажаа Адъяа гуайгаар зоос заалгамаар байна, яахав та хэлээд аль”

гэсэн чинь тэгэж байна шүү. “Өө тэг миний хүү, Бадам ч ёстой сурна даа одоо их ойтой хүүхэд байгаа юм чинь ёстой сурна даа. Хөөе Адьяа чи манай энэ дүү хүү энэ Бадамд наад мэргээ зааж өг хө” л гэж байна. Тэгсэн чинь үнэрхэж байна. “За тэгээд багш шавь болно гэдэг чинь дуртай өдрөө дураараа орж ирдэг юм биш” гээд л гэж байна. Тэгэхээр би жаахан гөлийгөөд л, жоохон толгойгоо шилээ л маажна л даа, тэр үед чинь дандаа л шилээ мааждаг байлаа. Шилээ мааждаг л ингээд л. За одоо зааж өгөхгүй нь дээ, яана аа гэж бодоод л. “За хө чи нөхөр заалгая гэж байгаа болвол чи багш шавийн барилдлага болж, өдөртэй судартай, өргөлтэй барьцтай заалгадаг юм хө” гэж байна. “Өө тэгвэл тэгээд яах вэ би, Адьяа гуай” гэсэн чинь. “Өөрөө л мэд дээ чи юугаа барьж яаж заалгах юм” гэж байна. “Зоос ч байна л даа” гээд нөгөөдхийгөө үзүүлэв. “Наадах чинь байгаад юу болох вэ наадах чинь ч хэрэг болно. Гэхдээ өшөө багш болж байгаа юм чинь багшдаа юм өгч барьж байж заалгана шүү дээ” гэж байна. Багш шавийн барилдлага болж байж наадхыг чинь заана гэж. Аа тэгэхээр нь ээждээ гүйгээд орлоо, ингэж байна гэсэн чинь. Авдраа ухаад л уналаа муу ээж минь, тэгсэн чинь хуучны нэг самбай гаргаж ирдэг юм, арван төгрөгтэй дээр нь дээр үеийн улаан арван төгрөг. “За миний хүү энэ 10 төгрөг энэ самбайг бариад Адьяа гуай дээр ор, миний хүү сурна, сурах хүү байгаа юм. За” гэдэг юм байна. Тэгээд эргээд л бөөн баяр нөгөө нэг хадган дээрээ арван цаасаа тавиад л ингээд л өглөө шүү, сөхөрч сууж байгаад. Бөөн баяр болоод л. Аа толгойн дээр эндээсээ эрхи гаргаж ирээд л адислацих юм. “За суучих, за хө чи аль зэрэг ойтой вэ” гэж байна шүү. “За би ч юмыг амархан тогтоодог юм шүү дээ” гээд л тэглээ. “Аа чи зоосоо гарга” гээд л өнөө зоосоо гаргуулаад л энэ дээгүүр ингэж тавиулчихаад л сүм муулонх заслан гээд л, есөн нэрийг чинь хэлж өгч байна. “За энэ есөн нэрийг тогтоов уу”. Гурав хэлүүлэн байгаад тогтоочихлоо. “За тэгвэл наана чинь толгой зоос гэж гардаг юм” гээд л, толгой зоосыг нь эхний энийг чинь толгойд, энэ чинь чиний зоосны толгой зоос нь байна. Ингээд зоосыг яаж нүдлэх вэ яах вэ гэдгийг надад зааж өгч байсан. Тэгээд би чинь, тэгээд надад зааж өгөөд л, юм атгана өөрөө, за чи сурсан бол миний атгасан юмыг хэлнэ дээ хөө, би нэг юм атгана. Тэгээд юм атгаад мэргэлүүлж байгаа юм. Би чинь анх сурч байгаа болохлоор би чинь яаж амархан хэлэх вэ дээ. Тайлж чадахгүй байхгүй юу, тэгээд яахав тэгээд ингээд таамаглаад л. “Сэтгэлээрээ таамагладаг юм биш наад зоосон дээрээ байгаа доороо авчирч байгаад тайлдаг юм хө, аа өөр байна даа” гээд л тэгэж байсан тэгээд л ингэж ингэж тайл, одоогоор бол технологийг нь зааж өгч байна шүү дээ. Зааж өгөөд л, тэгээд л “за чи ерөөсөө хүнээр л юм атгуулаад л мэргэл гээд, атгасан юмыг л мэдвэл чи тэгээд л мэргэчин болно шүү”. Тэгээд би нөгөө хүүхдүүд дээрээ тэгээд л найзууд дээр юу яагаад л, юм атгтуулаад л эхлээд буудаад л буудаад л, дөхүүлээд л алдаад л дөхүүлээд л. Сүүлдээ амьтны алдсан мал

хуйг мэргэлээд л.

Тэгэж би 13 настайгаасаа Адъяа гуайгаар заалгаж мэргэлж байсан юм. Тэгээд л ерөөсөө тэгээд насаараа мэргэч болоод л. Сүүлдээ социализм коммунизмын үед чинь нөгөө дарга хэргийн алба хийгээд л явах дээр зэрэг, нөгөөдөх муу ээжид минь гэрт минь үлдсэн. Тэгээд тэр мэргийг 64 онд нутагтаа үлдээгээд муу ээжийгээ. 64 оны биш ээ. Тэр чинь худлаа яриад байна, 61 онд ирээд л гэрээ Богдоос, би Бүрд суманд агрономичоор ирж байсан. Тэгэхэд би гэрээ авч ирэхэд ээж маань надад тэр зоосыг гаргаж өгч байсан. Тэгээд би нуугаад л дандаа нууцлаад мэргэлээд явдаг их нууц. Тэгээд л ялангуяа залуучуудын дарга марга хийж байхад чинь тэрийг чинь бүр нууц. Тэгээд явж байгаад нөгөө 90 оны ардчилал үүсээд л, лам шашин гараад ирэх үед чинь ногоон дээр би чинь тэтгэвэртээ гарчихсан, тэтгэвэртээ гараад тэнд ногоо тарьна. Тэгээд САА-н ногоон дээр одоо энэ гавьяат механикч байсан, нас барчихсан байна уу даа САА-д байсан Цэрэннадмид дарга намайг сармис тарьж аль, манай САА гучин хэдэн жил ажиллахад сармис ургуулж байсан түүх байхгүй. Чи чадна, говь хангайд ургамал тарьж байсан хүн чи сармис ургуулаад аль хө гэж. Тэгээд би ногоон дээр нэг 50 сот хагас га газар сармис ургуулж. Тэгээд тэр үед чинь нэг онгоц монгоц алга боллоо гээд, 1 сая төгрөгийн болзол гарч байгаа гээд л, үнэн худал нь мэдэгдэхгүй баахан юм тавиад л мэргэлж эхлэв ээ аваад л байлаа. Тэгсэн чинь мэдсэн гадарласан л байна лээ. Тэсэн САА-н дарга байсан Цэрэннадмид дарга намайг гурван удаа сорьсон юм. Нэг ингээд би унадаг дугуйтай явж байсан чинь хөөе, хөөе залуу гэнэ. Хөөе залуу нааш ир хүрээд очсон. Яах гэсэн юм гэсэн. Үгүй энэ хувьцаанд орсон тэр үед чинь САА тариа хувьцаа гээд бүх юм тарчихсан, хувьд гарчихсан байлаа шүү дээ. Хувьцаанд авсан нэг даага гүү хоёр алдчихлаа, ижилдээ очсон юм уу гэсэн чинь ижил энэ тэр лүүгээ ирээгүй байна. Алив чи мэргэн хүн байна, очоод чи мэргэлээдэх гэж байна. Аа энэ чинь намайг сорьж байгаа юм байна, за яаж ч байсан мэргэлье гээд мэргэлээд өгсөн чинь, ижилдээ байгаа гэж байна. Аа та намайг зүгээр сорьсон байх, нэг үгүй бол ижилдээ оччихсон байгаа. Ижилдээ л байна. Та юу яа, надтай ядилхан явган унадаг дугуй унадаг биш том дарга хүн чинь. 69 машин янз бүрийн унаад явсан, очоод та адуунд нь очоод үз л дээ, байж л байна. Ингээд л, тэгээд л өнгөрсөн, тэгээд мэдсэн ч юм уу үгүй ч юм уу, тэгээд л өнгөрлөө.

Тэгсэн нь дараахан нь ногоо чинь энүүхэн урд байсан л даа, одоо энүүхэн урд шүү дээ, манай тэнд байсан юм, ингээд нүүгээд л төв рүү орчихоод байгаа юм. Манайх чинь энд олон жил болсон. Тэгээд ногооны хашаан дээр би нөгөө карбинканд ногоо үрслэг хийгээд л байж байсан. Тэгсэн ногооны манаач нь Цэнд гэж хүн байсан, ум ма ни бад ми хум одоо нас барсан. Тэр Цэнд дуудаад дарга ярья гээд байна. Аа тэгсэн чинь, хөөе манайханы

нягтлангууд аймаг руу тайлан гаргана гээд явсан өчигдөр гарсан байдаггүй. Өө нээх цас орчихоод хоносон, өглөө байсан юм. Байдаггүй, одоо та үзээдхээч яачих вэ энэ чинь, аваар осол болчихдог юм биш байгаа даа гэж байна. Өө за тэгье тэгье би үзээдэхье дээ. Би үзээд яая, та хувцсаа солихдоо эргээд утасдаарай, тэгээд л тэгэж байна. Тэгээд мэргэлсэн чинь ирчихсэн л буугаад байх юм. Үгүй та намайг сориод байна уу яагаад байна, наадуул чинь ирчихсэн л улсууд байна шүү дээ, ирчихсэн л байна. Үгүй түрүүн ярихад ирээгүй байсан юм даа, үгүй би гаръя даа одоо ирчихээд байгаа юм болов уу даа, тэгээд л алга болчихсон. Тэгээд очоод асуусан чинь хөөе Бадамрэгзэн нөгөө улсууд чинь ирчихсэн байна, сая ирлээ гэж байна шүү, ирчихлээ гэж байна шүү. Тэгээд 2 дах нь энэ.

Гуравдах дээр нь нэг өдөр ингээд вагончиктой хоол моолоо идэцгээх гээд л ногоочид байж байсан, дарга давхиад л хүрээд ирдэг юм. Хааяа нэг ирж хоол иднэ л дээ, ногоочид дээр. Тэгсэн дарга өө бид нар нөгөө онгоцны чинь тухай дэмий яриад л, ногооныхон чинь над дээр мэргэлүүлээд л ингээд л тэгэхийгээд л юм атгаад, зарим нь ч юмгүй мэргэлүүлээд, авгай нар юм хум асуугаад тэгээд л байцгааж байсан, дарга байж байсан. Үгүй мартсан бол тэр онгоц мэргэлээдэх. Тэр онгоцыг мэддэг юм бол чамайг ёстой, компаний, тэр үед чинь компани болчихсон байсан үе компаний мэргэчин болгоно л гэж байна. Нөгөө Дашцэрэнг Очирбатын мэргэчин болгочихсон гэдэг шиг. Тэгэж байна шүү. За ёстой та түрүүнд нь хоёр удаа намайг сорьсон, хоёуланг нь би мэдсэн байсан шүү. Өө тэр адууны дээдталд очсон байна, байж гэж байна гэж. Тэгсэн нь тэгсэн. Тэгээд тэр дарга нар нь хүрээд ирчихсэн байна гээд. Тэгээд гурав дах нь за одоо мэддэг юм бол та одоо хэлсэн амандаа хүрч идсэн амандаа сав болно шүү та. Та худлаа хэлээд тэгдэг шүү. Аа компаний мэргэчин болгоно гээд л. За гэрийг чинь харна шүү. Тэгээд би хэлсэн өө олодохгүй амьд юм юу ч байхгүй. Маш их мөстэй устай уултай газар, би ямар газар нутаг мэдэх биш. Мэддэг бол би тийм ууланд байна гэж хэлмээр байна, тэгээд мэдэхгүй юмыг чинь яахав дээ. Уул уустай газар юм уу наана чинь нэг ч хүн байхгүй. Олдно мөд олдно. Тэгсэн нээрээ ямар уул гэлээ дээ би чинь тэгээд л харж л байсан. Тэгээд дараа нь би даргыг цаашлуулаад л, за яасан хэдэн цаасны цалинг өгч компаний мэргэчин болгох гээд байна. Аа тоглоом хийгээд л хөхрөөд л алга болдог. Тэгэж л явдаг байсан. Тэгээд л 90 онд тэгээд л, үгүй 90 онд юу байх вэ 70 насан дээрээ, түрүүний тэгдэг чинь. 2004 он гэдэг чинь тэ. 99 онд л би чинь лам болсон шүү дээ, тав дах жилээ л тэгээд явж байгаа юм байна л даа.

Д : Танд мэрэг заасан Адъяа гэдэг хүн лам хүн байсан уу?

Б : Лам хүн байсан. Лам ламдаа бүр тэр Өршөө багшийн зурхайч байсан гэж байгаа шүү дээ. Тэр Чойсэнгээ, өнөө тэр Ямбийдалжир хоёр чинь Өршөө багшийн зурхайчид байсан юм гэнэ лээ, сүүлийн үеийн.

Д : Танайх таныг бага байхад бурхан шүтээнтэй байсан уу?

Б : Манайх бурхан шүтээн гээд нээх юм байгаагүй, гэхдээ ээжийн нэг шүтээн Ногоон Дар эх гэж байсан, жижигхэн. Тэгээд би тэр ногоон дар эхийг нь бас тэрнээс чинь болж баларсан, нөгөөдөхийг нь аваачиж гаргаад дөрөв нугалж эвхээд оронд нь маршалын зураг хийчихгүй юу, маршал Чойбалсангийн зургийг.

Д : Жаазандаа юу?

Б : Жаазандаа. Чойбалсангийн тэр үед чинь генерал өнөө маршалын хувцастай их гоё зураг байсан юм.

Д : Таны зоос хурал дээр яваа юу?

Б : Зоос уу, аа энд яваа.

Д : Өө за за. Аан тэгээд?

Б : Тэгээд би тэр муу ээжийнхээ, тэр багшийн зааж өгсөн зоосыг хичнээн жил хадгалж явсан. Ноднин, болохгүй юм гэдэг чинь их сонин байдаг юм байна лээ. Ноднин би юу явлаа л даа хүүхээ, хятад руу. Өнөө Утай юу гүмбэн, тэгээд Бээжин Хөх хот гээд яваад тэгээд ирсэн юм аа. Ирээд хотод жаахан тэнэж явж байгаад, маргааш буцна гэж байсан чинь, тэр 4-р хорооны (хороолол) эцэст манай нэг дүүгийнх байдаг юм. Гэртээ ирээд бас нэг орлого морлого янз бүрийн юм болохгүй болоод байна, тэр Янбийдалжир уншиж өгөөд, ном уншиж өгөөд яваач гэхлээр нь орой очих гэж үдэш яарч явснаа микрт суугаад, тэгээд тэр хөөргөн даалингаа өвөр дээрээ гаргаж ингэж тавиад, өнөө задгай мөнгө байхгүй бүхэл 5000 төгрөг гаргаж өгөх гээд, гаргаж өгсөн юм кондукторт. Тэгээд нөгөөдөх чинь хариулт өгдөггүй, тэгээд би нөгөөдхөө хараад явсан. Тэгээд мартчихаж. Тэгээд буухдаа аваачаад нөгөө хөөрөг даалин, зоосоо тэгээд мөнгөө паспорт тусдаа тавхан мянган төгрөг байсан юм. Арван мянган төгрөг байсан юм, тавыг нь аваад тавыг нь буцаагаад. Тэгээд 5000 төгрөгтэйгөө хөөрөг даалин зоос, тэгээд байхгүй.

Д : Та нөгөө Дар эхийг нь, ээжийнхээ Дар эхийг аваад маршал Чойбалсангийн юуг тавьчихсан гэсэн шүү дээ.

Б : Харин тэгээд тэрнээс чинь болоод их юм эвгүйтсэн. Бурхан одоо тэгээд одоогоороо юм гарч ирээд л байдаг юм, бурхны юм.

Д : Та хаана тавьчихсан юм бэ?

Б : Авдар дээрээ эвхээд л тавьчихгүй юу.

Д : Аа, авдран дээрээ юу?

Б : Авдран дээрээ зүгээр тэрийг гаргаад, тэнийлгээд тавихгүй би чинь нугалж дөрөв нугалж, цаас нугалж байсан тэр чигээрээ. Багын нөгөө хүүхэд зангийн. Тэр үеийн юм чинь шашингүйн суртал нэвтрүүлэг айхтар байсны чинь гай юм даа. Тэр чинь тавин хэдэн оны үед л байх, 49 онд сургууль төгсөөд гарсан болохоор 50 онд байхаа. Тэгэж баларч байсан юм. Тэгээд тэрнээс чинь болоод ерөөсөө, 19 настай нэг сайхан охиноо алдлаа. Тэгээд

үзэхэд л бурхны юм байна аа, бурхны сахиусаар оролдсон, яг л тэрнээс болоод тэгээд одоогоороо салахгүй л байдаг юм. Айхтар, бурхны юм гэдэг чинь айхтар байдаг юм байна лээ шүү дээ. Одоо тэгээд манай хамгийн том охины нэг сайхан банди байдаг юм, мэдрэлийн өвчтэй. Одоо хорин нэг хоёр хүрч байна, сайхан банди. Тийм одоо тэр тав дугаар анги хүртэл зүв зүгээр байсан хүүхэд чинь зургаад орох жилээ л гэв гэнэтхэн алга болчихдог. Улаанбаатар луу траншейнд очоод, сар гаруй эрж байж олж авчирсан. Тэгсэн чинь мэдрэлд нь гажиг ороод тэгээд, тэгээд тэнд согог байсан юм байна лээ. Тэгээд л одоо заримдаа эрүүл, заримдаа өвчинтэй тэгээд л.

5 Соёлын довтолгоон

Д : Тэр үед айлууд бурхан шүтээнээ нууцаар шүтдэг байсан уу, ер нь ил тавиад л шүтдэг байсан юм уу?

Б : Өө яаж ил байхав. Ялангуяа соёлын довтолгооны үед чинь болвол маш их бурхан ном судраа, тэр ч бүү битгий хэл бүрхээрийг хэлмэгдүүлж байсан гээд л бод л доо. Тэгээд тогоо нэрдэггүй, бүрхээр эвддэг байлаа шүү дээ. Манай Богд сумын чинь сум нэгдлийн дарга Шаравчогдон гэж, Солонгост элчингийн нарийн бичгийн дарга байж байгаад ирсэн юм гэнэ лээ. Намын ингээлтээр очсон хүн, сүүлдээ Богдод их хурлын депутат болж байсан хүн. Тэр Шаравчогдон бол ерөөсөө бүрхээрийг эвдүүлж байсан толгой шүү дээ. Тэгээд би, тэр модон бүрхээрийг эвдүүлээд байдаг юм бол, та нар бэрзээнтэн бүрхээр хий гэж хүртэл айлуудад бэрзээнтэн бүрхээр хийх аргыг зааж өгч, бэрзээнтэн бүрхээр хийлгэж нууцаар тогоо нэрүүлж явсан би, залуучуудын дарга байхдаа. Тэр Шаравчогдон бид хоёр бол ёстой хэзээ ч нийцэхгүй. Тэгээд гол нь тэгээд намд авдаггүй байсан, намын гишүүн болгоогүй гэдэг чинь Шаравчогдон намайг болгодоггүй, намын товчооны гишүүн, сум нэгдлийн дарга гээд л. Аа намынхан бол өөр л дөө, намынхан болвол ямарсайндаа эвлэлийн хороон дарга болгож байх вэ дээ.

Д : Та яагаад намд элсэе гэсэн тийм хүсэлтэй байсан юм бэ, тэр үед?

Б : Ер нь бол намд л орох сонирхолтой, нэгэнт л намын ажил хийж байгаа юм чинь намд орох л бодолтой байсан. Даанч аваагүй. Авдаггүй байсан юм. Тэр нь тийм л учиртай байсан юм байлгүй. Одоо бодоход ороогүй нь ч болж гэж бодож байна. Үгүй яахав дээ орсон ч байсан зүгээр намын батлахаа өгөөд аль гарсан улсыг тэр гэх вэ. Тийм л байж л байгаа юм чинь.

Д : Багадаа бол та ер нь бурхан шүтээд мөргөдөг тийм байсан уу?

Б : Өө би их сүсэгтэй байсан шүү дээ. Ямарсайндаа тэр номуудыг тэгээд л кириллээр бичиж.

Д : Тэр бол залуудаа юу?

Б : Залуу байхгүй яах юм.

Д : Хэдий хэр?

Б : Гучин хэдэн настай л байхгүй юу. Гучин хэдэн настай л байсан байна. 64 онд би чинь залуучуудын дарга, Богд сумын эвлэлийн хороон дарга гээд 6 жил хийсэн шүү дээ.

Д : Аа эвлэлийн хороон дарга байхдаа та тэр төвд номыг хэлүүлээд?

Б : Юу тэгэхэд чинь, тэрнээс хойш, тэр үед чинь яахав хойд тэр Ваанчиг ахаараа хийморийн сан, манхан ойр зуурын тийм юм... .

Д : Яагаад та тэр үед сонирхсон бэ?

Б : Сүүлийн номуудыг бол болвол би далан хэдэн оноос хойш, тэгэж ерөнхийдөө сойзон Догоогоос эхэлж бичиж уншиж явдаг байсан юм.

Д : Та яагаад сонирхсон юм, бурханы номыг?

Б : Үгүй яахав дээ тэр манай удамд тийм бурхны улсууд байсан учраас л, цаанаасаа л тэгэж зураад байсан байгаа юм. Би тэгэж бодоод байгаа юм. Манай аавын чинь, тэгээд манай аав чинь тэр Өршөө багш дээр очиж нэр хайрлуулж авсан нэгдүгээрт, хоёрдугаарт бол Өршөө багшийн унадаг байсан морийг нь. Их сонин хүн байсан шүү дээ, манай аав чинь их сайхан жороо морь гэдэг тийм, морины хоббитой одоогоор бол одоогоор тийм хоббитой хүн байж. Тэгээд Өршөө багшийн унадаг байсан тэр зандан ширээ болсон шарга морь байсан гэж байгаа юм. Тэр шарга морийг нь тавин хургатай хонь, арван тугалтай сарлаг үхрээр авч явж байсан гээд л бод. Тийм сонин хүн байсан байгаа биз, нэг морийг тавин хургатай хонь гээд байгаа шүү. Тэгээд тэр үед бол мал элбэг байсан үнэгүй л байсан байх. Арван тугалтай сарлагийн үнээ. Тэгээд Өршөө багшийн тэр сарлаг үхрийг нь манай тэр аавын, миний одоо өвөө аав болох хүн байна шүү дээ, одоо Цэмбэл гэдэг хүн сарлаг үхрийг нь маллаж байсан юм гэнэ лээ, малыг нь. Тэгээд сойвон бараа бологч, тэгээд л Майдар эргэхэд л Майдарын чинь тэр морь, халзан морь гэж гардаг шүү дээ (бурхны), тэр халзан морийг чинь лам хүн хөтөлдөггүй, хар хүн (энгийн хүн) хөтөлж гаргадаг учиртай зурагтай байсан юм гэнэ. Тэгээд манай тэр өвөө, тэр Цэмбэл гэдэг хүн болвол, данхар Цэмбэл гэдэг хүн болвол хар хүн байсан юм байна. Тэгээд Майдар болоход Майдарын морийг заавал тэр Цэмбэл, манай тэр өвөө хөтөлж гаргадаг тийм учиртай байсан юм билээ.

Тэгээд энэ дээр бас ярих юм бас сонин юм бий. Сонин ч яахав үнэн түүх, энэ жил би явж газар мазрыг нь үзэж зураг мургийг нь авсан. Тэгсэн чинь манай тэр Бандахайн, Бандахай яахав миний тэр өвөг эцэг бол хорлогдож үхсэн байгаа юм, хараал. Тэгсэн чинь манай тэндэхийн, одоо тэр хэнийхний л юм байгаа юм даа, манай энэ Эрдэнэзуугийн энэ энэ дотор байгаа олон том барилга, үгүй энэ дуган юуны бурхан шүтээн энүүгийг зассан хүн байгаа юм. Уран Рэнцэндорж гэж байсан юм, энэ Хархориныхон Унхаа мунхаа энэ Шарав гээд л, Зуугийнхан чинь явж байсан улсууд хамт ажиллаж байсан улсууд ярьдаг байсан, уран Рэнцэндорж гэж. Одоо хүүхэд мүүхэд нь

энэ манай Хархоринд байгаа юм. Тэр Рэнцэндорж гуайн талынхны хүн байсан юм байна. Тэгээд Рэнцэндорж гуайн ахынх нь юм уу хоёр лам шавь байдаг, Энэтхэг явжээ. Энэтхэгт яваад тэр долоон жил сурдаг, одоо тэр сургуулийг нь дүүргээд ирсэн байна даа, нутагтаа ирээд, багш нь явуулсан юм байна л даа. За тэгээд тэрний багш нь болох дээр зэрэг бол Өршөө багшийн хажуугийн доод талын зиндааны ямар нэгэн нэг дуган муганы ахлагч байсан юм байлгүй. За тэгээд тэр хоёр лам 7 жил болоод , яваад ирж. Ирээд яасан бэ гэх дээр зэрэг тэр дуганыхаа их том голч молч одоо юу ч байдаг юм, одоо унзад мунзад ч гэдэг юм уу тийм лам болоод л хоёулаа суудаг юм биз дээ. За тэгтэл тэр лам, хоёр ламын сурсан ном манай Өршөө багшийн ном хоёр зөрчилддөг юм байна аа. Нэг нь бол зод лүүжин ном сураад ирсэн тэр хоёр, аа багш болвол Цогчингийн одоо чойр, одоо бидний уншиж байгаа ном талын хүн байсан байна шүү дээ, манай ихэнх нь Богдын шавь хутагтууд чинь бол цогчин хурал. За тэгээд ингээд тэгэхдээр зэрэг нөгөө багш нь хоёр шавиа том лам болгож, тэр хийдийн одоогоор ярих юм бол ширээ сандал сэнтийний булаацалдаан маягтай юм болсон байгаа юм. За ингэх дээр зэрэг нөгөө хоорондоо харын шарын гээд, одоо энд явагдаж байна шүү дээ, яг энүүн шиг маягийн юм манай хийд дотор гарсан, гарчээ. За ингээд гараад болохоо байхдаар нь зэрэг нь нөгөө Өршөө багш нөгөө багш нь жаахан юу хийсэн юм байна л даа, жоохон хавчих одоо одоогоор ярих юм бол зөв зам руу нь оруулах гэх тийм шахалт хавчилт дарамтын юм ирэхдээр зэрэг, нөгөө багш лам нь бүр эсрэг болоод хувираад, одоо тэр хараал ч байдаг юм уу ямар ч ном байдаг юм тэр талын ном аваачиж, нөгөө хоёр шавиараа хийлгүүлээд. Тэгээд манай Хутагтын хийдийг чинь бүр галзуу нохой, одоо чоно галзуурч давхиж ирж, Өршөө багшийн гэрийн өрхийг эд нар чинь маажиж мулталж хаяаад, тэгээд хажуу талын лам нар одоо олон юунуудаар нь тийм аюул гамшиг гарч дайрсан байхгүй юу. За ингээд нөгөө нөгөөдөх нь ингээд зарим улсууд нь одоо мэдээд нөгөө ламыг, одоо тийм хараал жатга хийлгэж байна гэдгийг мэдээд. Тэгэх дээр нь зэрэг нөгөө хоёр ламыг чинь барьж аваад, тэгээд тэр одоо тэр баруун, миний яриад байгаа тэр Пэрлээгүнтэв, би түрүүн ярилаа шүү дээ нөгөө ингэн тэмээтэй, тэр цаад руу зуух гэж байна. Тэр зуух руу аваачаад хийж, мөглөн, нөгөө толгойг нь гаргаад авдарлачихдаг тийм хоёр авдранд хоёр шавийг нь аваачиж хийгээд, тэнд аваачиж хийгээд л, тэгээд завсар нь элс хийгээд л ингээд элс хийгээд чигжээд л “За хэл хэнд ямар хараал хийсэн чи яасан бэ?” Өө тэгэж байх үед манай тэр Майдар ирэх болоод одоо маргааш ирнэ гэж байхад манай тэр өвөөг дуудсан байна л даа. За одоо маргааш Майдар ирнэ гээд. Ерөөсөө Майдар ирэхэд л урд хоног нь ирж хонодог л юм байна л даа. Тэгэх дээр зэрэг За Цэмбэл ирж байгаа. Нэг хар морь унаад л ирдэг байсан юм байна . За тэр хар морьтойгоо ирнэ шүү тэр, хашааг нь хараад байгаарай.

Өршөө багшийнхтай хамар хашаанд байсан юм байна л даа. Өршөө багшийнх баруун талд нь гэрийн буйр муйр нь энэчээ хүртэл яваа тэр, сая зураг мургийг нь аваад ирсэн. Гэрийн буйран дээр нь юм тавиад, тэгээд тэр манай өвөөгийнх нь зүүн талд нь ийм хоёр шовгор хэрэм, зүүн талд нь манай тэр Цэмбэл өвөөгийн буйр нь байна, байж л байна.

Тэгээд тэр үүдэндээ хар морь байж л байна, шавь нартаа айлдаж байсан байгаа юм тэр нөхөр. Тэгээд л маргааш өглөө нь Майдар болно гэсэн чинь. Пөө нөгөө багшийн чинь сойвон, нөгөө Майдарын морь хөтлөж ирсэн Цэмбэл чинь өнгөрчихөөд хоносон байна, үхчихсэн байна гэнэ. Тэгээд үзсэн чинь нээрээ гэртээ өнгөрчихсөн байна. Хараалч, нөгөө хоёр айхтар хүн чинь. Тэгээд л ганцхан манай тэр, тэгээд л тэр нь, тэгээд л тэр хоёрыг мөглөнд хийж байцаадаг юм байна. Тэгээд тэд нар чинь зарим нь улайгаад зарим нь улайхгүй тэнд егүүтгэгдсэн. Тэгээд одоо тэр газар нь тэр мод, тэр авдарны мод, тэр нөхдүүдийн яс чөмөг байна, одоогоороо байна шүү. Бүр тэгээд тэнэчээ хөнөөсөн юм байна. Аа тэгсэн тэр хоёр нөхрийн чинь сүнс нь болохоор чихгүй сүүлгүй хоёр чоно болж ирж, болж ирээд.

Тэгээд тэр манай хийдийн Мааньт гуай гэж бий. Тэд нарын юунаас хойш Мааньт гуай маанийг бүтээсэн юм. Мааньт гуайн зураг одоо маанийн хөшөөтэй нь надад байгаа. Тэгээд Мааньт гуай тэр умаа хум базар бани хум пад гэж бичиж байна. Тийм ном чулуугаар, тийм байна. За тэгээд тэр Мааньт толгой зүүн тал руу Бургаст хавцал гэж хавцал байдаг юм. Тэнд бол манай номын “Боовон чулуу” гэж бас домог түүхтэй. Тэгээд тэнд нь бол манай энд бол чулуугаар хийсэн байгаа юм. Аа тэнд болвол улиасаар хийсэн, тийм бэлэг эрхтэн байсан байгаа юм. Тэрийг нь 1947 онд намайг Богдын бага сургуульд сууж байхад Харлааны Тогооч гэж одоо Богдод байгаа, дал гаран настай өвгөн байгаа. Сүрэнгаа гэж байсан юм, тэр Сүрэнгаа нь сарлагийн үхэрт мөргүүлээд дээр үед нас барчихсан юм. Тэр хоёр нөгөө тэр боовон улиасыг чинь хөрөөдөөд, хушган талыг нь нэг талд нь, нөгөө дээрэнхийтэй талыг нь нэг талд нь ингэж ганзагалаад, сарлагийн үхэр дээр ачаад Богдод, сургуулийн түлшинд хагалаад өгчихсөн байна. Нээрэн миний бодоход нэг тийм, одоо тэр үед хүүхэд болохоор ямар юмаа мэдэхэв дээ. Одооны түүхчдийг мэдэх дээр зэрэг сая санаанд орж ирж байгаа юм. Нээрэн тийм хоёр бумбайсан нэг хачин хушга шиг ч юм шиг тийм улиас тийм урт улиас байсан, хөрөөдөөд сургуулийн түлшинд хэрэглэж байсан. Одоо санах нь байгаа юм. Тэгээд л аваачаад өгчихсөн байдаг юм байна.

Тэгээд тэр Бургаст хавцалд тэр сүүлгүй хоёр чоно болж ирээд. Тэгээд тэр лүү чинь одоо хийдийн лам нар бузартаад л ид үе болж явах үед чинь, нөгөө залуу лам эд нар чинь өнөө хийдийн гадуурх борчуул эмс охидуудыг авчирч, тэр бургаст хавцалд янз бүрийн юм болно. Тэгэхдээр зэрэг нөгөө хоёр чоно чинь давхиж ирж идэж, тэр эмэгтэй хүнийг, тийм аюул гарсан юм байна.

Тэгээд тэнд сор залаад, тэгээд тэр улиасаар тийм чулуу хийж, боовон юу хийж дом тавьж, тэр хоёр айхтар эрлэгийг чинь сор залж аваачиж, чухам яаж устгасан юм, устгаж нөгөө хоёр чоныг чинь тэгэж нэг том гамшиг аюул гарч байсан юм байна. Тэгээд тэр гамшигийн үеийн эхлэл тэр манай өвөг эцэг гэдэг тэр өвгөн Цэмбэл өвөө бол тэр хараал жатгаар явчихсан.

Д : Тэр хоёр хараачихсан юм байна шүү дээ.

Б : Тийм. Тэрийг бол энэ жил, уржнан нутаг руугаа явахдаа манайхны нэг настай одоо ная гарчихсан эгч хөгшин байгаа юм, тэр эгч хөгшин болвол тэгэж өнгөрсөн юм гэнэ лээ шүү гэж яриад л өнгөрсөн байхгүй юу. Тэгээд би тэрийг дотроо нэг тийм юм нарийн судлавал гарч ирэх юм байна даа гэж бодоод өнгөрсөн. Тэгээд энэ жил би нутаг руугаа явахдаа зориуд бүр олон хоног хугацаа. Би чинь Ламын гэгээний юунд яваад л, Ламын гэгээнээсээ Баруун Богд, Баруун Богдоосоо Зүүн Богд ороод, тэгээд л мотоциклтой морьтой тэгээд л аялсан хүн байхгүй юу. Тэгээд энэ түүхчдийн баахан юм судлаж, яагаад гэхээр энэ номондоо бичиж судлаж ирсэн, зураг хөргийг нь авч ирж ийм байгаа юм. Тэгээд энэ түүхчдээр тэмдэг юу судлаж нилээн юм мэдэж ирлээ би. Тэрийг чинь ярьдаг номтой ах дүү нар байхгүй. За яахав сүүлийн үед юм сайхан болоод ирэхдээр ганц настай хөгшин эгч үлдсэн. Тэр маань одоо тийм юм ярьж байсан даа одоо, ингээд ингээд ийм байна, ингэлээ ийм байна, энийг одоо та дуулж (сонсох) байсан уу, одоо энийг мэдэх хүн одоо нутагт хаана хэн байна та зааж аль гэж энэ жил би жаал очиж хонож байгаад байцаалт хийж баахан юм ярьж. Тэгээд голцуу бид нарын үеийн улсууд байхгүй болчихож, ерөөсөө түүх мэдэх хүн байхгүй болчихож. За одоо тэгээд настайчууд байхгүй болчихсон юм байна.

Д : Бурхан шүтээнээ шүтэх арай нэг зөөлөрсөн үе нь хэдий үеэс арай зөөлөрсөн юм бол, хуучин социализмын үед?

Б : Өө энэ чинь ерөөсөө л энэ юунаас л хойш ингэж байгаа юм шүү дээ, ардчилалын ерэн оноос л хойш зөөлөн боллоо шүү дээ, энэ чинь. Тэгэхээс өмнө чинь ерөөсөө хаагдмал байсан шүү дээ. Ялангуяа говь руу бол одоо тийм юм мэддэг лам ч байхгүй болсон. Номтой судартай бурхантай айл ч байхгүй болсон. Соёлын довтолгооны үеэр бүгдийг нь аваачаад за бурхантай юу, судартай юу номтой юу, ялангуяа намын гишүүд эвлэлийн гишүүд чинь болвол тэрийг чинь ёстой дээд зэргээр хавчдаг шалгадаг байлаа шүү дээ. Яагаад бэ гэхээр би өөрөө залуучуудын эвлэлийн хорооны дарга явсан учраас энийг чинь бүр тодорхой мэднэ шүү дээ.

6 Ардчилалын дараахь бурханы шашны үйл ажиллагаа

Д : Одоо бурхан шүтээн байвал хураагаад авах уу?

Б : Өө тэр чинь зүгээр одоо ерөөсөө хураахгүй ч гэсэн та, би бол одоо та нар битгий ингэж ил байлгаа. За яахав цагаан сарын өдөр бэлэгтэй дэмбэрэлтэй

өдөр гаргаад гаргаад залчих. Бусад цагт нь дандаа далд байгаа. Далд байлгахдаа та нар тэгэж авдарныхаа доор хийгээд, тэгэж дээрээс нь өмд гутлаа хийгээд ингэж болохгүй шүү. Та нар бол авдрандаа өрөө хий, дундаа өрөөтэй банзан, хоёр талд нь хөндлөн мод энүүн шиг ийм мод, тэгээд дээр нь бурхан ном сурдаа залаад, доод талд нь бусад юмаа хий та нар ингэж. Тэгээд бурхан тахилаа ингээд явахдаа, та нар тооно ачаад явдаг тэмээн дээрээ тэр бурхантай авдар мавдраа залж авч явж бай та нар Дараачийнх нь тэмээн дээр хүүхэд шуухад пүүгээгээ авч явдаг юм байгаа биз. Манай говийнхон чинь тэгэж нүүдэг шүү дээ. Тэр уламжлалаараа л байж байг. Ямарсайндаа би бүрхээрээ эвдчихээд болохоор зэрэг бэрээнтээр бүрхээр хийх санаачлага гаргаж бэрээнтэн бүрхээр. Би Богдод олон амьтан бэрээнтэн бүрхээр хийлгэж, одоогоороо нэрүүлж л байсан, заводоор. Манайх чинь Богд сарлагийн үхэртэй. Тэгээд завод саана. Тэр үед чинь бүгд нэгдэл рүү өгчихсөн, нэгдлийн мал. Хувийн аж ахуй чинь говьд тэдэн толгой, хангайд тэдэн толгой гээд ингээд заачихсан байлаа шүү дээ. Илүү гарсныг нь нийгэмчлээд л авчихдаг. Тийм л байсан шүү дээ. Албан, төрийн албан хаагч нар бол малтай байх арга байхгүй. Сүү оногдуулна, мах оногдуулна, албан татвар оногдуулна. Би чинь эвлэлийн хороон дарга байхад чинь төрийн албан хаагч гээд малгүй л явдаг байлаа шүү дээ. Нэг жил ганц морио, аав маань морь тоолуулаад ирчихсэн, би юун морь юм бэ яасан юм бэ гэж тооных нь үеэр цагаачлах хүртэл байж л байсан. Хэцүү байдаг байлаа шүү дээ, тийм л байдаг байсан.

Д : Одоо бол та бурхны шашин сайхан дэлгэр, ямархуу яаж дэлгэрч байна гэж боддог вэ?

Б : Одоо бол одоо сайхнаараа, ганцхан энэ дээр харин нэг ийм айхтар юм, би энэ одоо энэ жилийн намар энэ чинь чуулганаар бурхны шашны асуудлын тухай авч хэлэлцэх юм гэж байгаа юм. Гээд Батхүү эд нараас санал онол авсан. Тэн дээр би санал онолоо явуулсан. Аа тэгээд ч сонин бас нэг юм явуулсан юм би. Тэгээд тэр гарсан ч үгүй. Тэгээд энэ намрын чуулганаар чинь шашны асуудал хэлэлцсэн ч үгүй, тэгээд таг чиг өнгөрлөө. Тэгээд би саяны энэ хотод нэг эмчилгээ хөөцөлдөж явлаа л даа, хувийн ажлаар чадсангүй. Долоо хоног гадуур шинжилгээ онош нь тодруулах гэж явж байгаад, тэгээд тодорсон хойно нь арван хоёр хоног хэвтээд л тэгээд л гараад наашаагаа яран явах хэрэг гарч, тэгээд л гадуур дотуур явж, наана уу цаана уу гээд чадсангүй. Уул нь би. Үгүй энэ шашныг цэгцтэй болгомоор байна. Чой багш дээр нэг орчихдог юм уу гэж бодогдоод л. Тэгээд одоо чинь ингээд илэн далангүй шашны нэгдсэн байгууллага гэж байхгүй байна шүү дээ, монголд чинь. Шашны тийм нэгдсэн байгууллага гэж байхгүй байна. Яагаад та тэгэж хэлж байгаа юм бэ, яагаад ингэж байгаа юм гэх дээр зэрэг энэ чинь юу юм байна. Энэ дуганыг бариулах гээд би өнөө нэг түрүүн сүсэг нөгөө

юугий чинь яахад, аймгийн дарга дээр давхиж очоод санал оруулсан чинь аймгийн дарга бариулахгүй гэсэн. Тэгэхээр нь аймаг яваад очсон, тэр үед чинь Эрдэнэбилэг дарга байсан. Одоо энэ элчин юунд оччихсон байна лээ, орост. Дэмбэрэлийн Эрдэнэбилэг гэж. Тэр Эрдэнэбилэг дээр орсон чинь, энэ нөхөр чинь таван энэтэй архи уусан юм энэ тэр гэж. Тэгээд би шууд Өвөрхангайгаас яам ороод, яаман дээр очоод яасан чинь бариулахгүй байна гээд, тэгээд би тэрнээс үүдээд “Зиндаа” сонин дээр юм биччихсэн хүн шүү дээ. За ингээд явах дээр зэрэг шашны байгууллага нь хаанаа байдаг юм бэ гээд явахгүй юу. Тэгсэн чинь ерөөсөө байхгүй юм. Чойжамц чинь ямар лам бэ. Гандагэгчилэн хийдийн, монголын шашинтны төв Гандангийн хамба болохоос биш монголын бурхан шашны нэгдсэн төвийн өөрөөр хэлбэл захирал биш ээ. Байдаггүй юм байна байхгүй юм байна лээ. За тэгээд дээрээ шашны нэгдсэн байгууллага гэж байдаггүй. Байхгүй дээрээс жалга довны их хурлын депутатууд гэлээ гэх шиг сум бүгд нэг сүмтэй, аймаг бүгд нэг дуган хийдтэй болох нь гэж үзэж байдаг.

За тэндээр энэ дээр ярихдаар зэрэг жаахан номын мөртэй хүмүүсүүд тэр шашинтан сүсэгтний хөрөнгөөр хөлжиж авч, тийм ч сан тийм ч ловон гэдэг нэрээр баахан шашны хүмүүсүүд ингээд гарч ирчихээд байна. Жинхэнэнэ санаа зовсон хүн болох дээр зэрэг шашны ном ёсны эрдэм мөр, өөрөөр хэлбэл шашны тийм мэргэжил боловсролтой хүн тоотойхон байгаа юм биш үү. Ийм ойлголтыг авсан. Тэгээд би тэн дээр яасан бэ гэхдээр зэрэг, би Сонинбаяр багш дээр орсон. Ороод би тэгээд тэр ном, тэр ажлаар тэр чинь тэгэж анх уулзаж танилцаж байсан. Аа тэр “Тэргэл саран” гэдэг номоо нэг шар хадагтай барьж аваад, анх удаагаа Сонинбаяр багштай танилцаж, ингэж багш шавь хоёр бололцож ингэж байсан түүхтэй юм. Дараагаар нь яасан бэ гэх дээр зэрэг нөгөө Л. Хүрэлбаатар, агуу эрдэмтэн хүн байгаа шүү дээ, монголын урдаа барьдаг ганц төвд орчуулагч чинь Хүрэлбаатар гуай шүү дээ. Бүр гэрт нь очсон би “Москва” хороололд байдаг юм байна лээ. Гэрт нь очиж орцны нь үүдэнд нөгөө номоо бас хадагтай барьж танилцаж, үгүй ээ ийм юм хийгээд ингэж ном судлаад, ингэж мэрийгээд зүтгээд явна, тэгтэл энэ юм чинь ийм байх юм аа. Хүрэлбаатар гуай за яахав энэ хамаагүй, одоо би энийг одоо багшийнхаа (Өршөө багш) тухай одоо энэ олон ийм хүн байдаг юм байна. Энэ хүнийг одоо хутагтуудыг одоо тодрууля арван гурван хутагт. Манай чинь арван гурван хутагтуудын нэг нь шүү дээ. Хоёр тамгатай Өршөө багш чинь Далай ламын тамгатай, Богд ламын тамгатай сунтаг гэж ярьдаг юм. Хоёр сунтагтай лам чинь нэг нь манай говийн наад багш чинь шүү дээ, Өршөө багш байхгүй юу. Энийг одоо гаргаж ирж байгаа хүн монгол улсад байхгүй. Энийг би одоо, миний чадал хүрэхгүй юм, төвд хэл мэл хүрэхгүй шашны мэдлэггүй энийг одоо яах вэ гэж. Яаж судлах вэ энийг одоо та нөхдүүд судлаад одоо гаргаад өгдөг юм байна, би одоо сураглаад олоод

өгөх юм ямар байна гэж бодсон байхгүй юу. Тэгээд хэн гуай тэр Дилав хутагтыг чинь гаргасан юм байна лээ шүү дээ. Монголын анхны ерөнхий сайд байсан Дилав хутагтын тухай бичсэн. Тэр номоо надад өгсөн. Одоо надад бий. Сонинбаяр багш ч бас нэг ном өгсөн. Дундговийн хутагтуудын тухай. Манжийн үеийн монголын эрхшээлийн, манжийн эрхшээлийн үеийн монгол гэсэн. Та энийг үзээд Дилав хутагт. Та энүүнийг үзээд загвараар тэр багшийгаа судалгаа хий гэж. Тэгээд л би тэрнээс хойш уржнан нэг хүний, нэг ах өвгөн нас бараад тэр ажлаар яваад л нь би эгчтэйгээ уулзаад цухас дууллаа гэдэг чинь тэр. Тэгээд энэ жил нэг удаа явлаа гэдэг чинь, тэр хэний Хүрэлбаатар гуайн гаргасан ийм юм судлах ёстой. Ямарсайндаа тэр хийд дээр очлоо, гэрийн буйр үзлээ. Цогчин дуганыг нь ухчихсан байна, тэндээс тийм юм олж авлаа гээд яриад байдаг чинь тэр. Тэгэж л явж.

Д : Одоо хутагт хувилгаадыг тодруулаад байгаа шүү дээ, манайхан чинь?

Б : Тийм.

Д : Тэгэхлээр та бол энэ тодруулах нь зүйтэй гэж үзэж байна уу?

Б : Өө энэ чинь зүйтэй шүү дээ. Одоо чинь сүүлийн үеийн шинжлэх ухаан чинь одоо ингэж яриад байна шүү дээ. Сүнс байна, тиймээ, сүнс байгаа юм чинь бурхан байна, баталчихлаа шүү дээ. Одоо бараг ямар нэртэй гэнэ вэ, бүр том дэлхийн нийтийн том тусгайдаа шинжлэх ухаан, өнөө нэг сүнс судлалын чинь тухай том шинжлэх ухаан нээгдэж гарчихаад байна шүү дээ. Энэ дээр болвол ингэж байна шүү дээ. Сүнс гэж байна, сүнс гэдэг бол сүнс сэтгэхүй хоёр, сүнсэнд сэтгэхүй байна гэж. За ингээд хүн амьд явж байгаад, амьд яваа насандаа хүн хийморь сүлд гэж яриад байгаа юм. Амьд яваа насандаа ингээд амьсгалж яваа үедээ хүний сүнс нь бол сүлд хийморь хоёр юм. Үхчихдэгээрээ зэрэг биенээсээ гараад сүнс гээд болоод явж байна. Сүнс нь яаж байна гэхдээр сэтгэхүй тэр сүнсэн дотор оршиж байна. Аа тэгэхдээр зэрэг яаж байна гэхдээр эмэгтэй хүн гэдэг бол хүний, эрэгтэй хүн гэдэг бол сүнс нь бол нэг ийм могой толгойтой, үгүй хүний хэлбэр толгойтой могой сүүлтэй нэг ийм эс байна, эр эс байна. Аа эмэгтэй хүн дээр очих дээр зэрэг нэг ийм өндгөн эс хүн толгойн хэлбэртэй ийм юм эс байна. Тэр хэн тэр эсэн дээр сүнс сэтгэхүй хоёр хамт байна. Аа эрэгтэй хүний тэрэн дээр сүнс сэтгэхүй хоёр хамт байна. Ингээд сая эр эм хоёр эс нийлснээс хүн хүүхэд одоо бүрэлдэж үүсч байна. Тэнд тэр хүүхэд бүрэлдэж эхийн хэвлийд бий болоход яаж байна, нөгөө л сүнс тэр дотор ороод сүнсэн дотор сэтгэхүй явж байна. Энийг юугаар батлаж байна вэ гэхлээр зэрэг, дэлхийн Моцарт гэдэг дэлхийн дөрвөн настай хүүхэд, дэлхийн сонгодог хөгжим яагаад бичив ээ. Дөрвөн настай хүүхэд яагаад бичив. Энийг судалсан байна шүү дээ. Одоо энэ өнөө сүнс судлалын одоо энэ орчин үеийн юм дэлхийн эрдэмтэд чинь. Тэгэх дээр зэрэг Моцартын эцэг бол агуу хөгжимчин байсан. Эх нь бол бас хөгжимчин бөгөөд дуучин байсан. Тэгээд энэ дэлхий хэмжээнд тэр л энэ

хүүхэд ингээд бүрэлдээд, тэр хоёр сүнс ингээд орчихсон байгаа. Моцартын сүнс бол орчихсон байж байх үед яаж байна гэхлээр эцэг нь хөгжмийн зохиол одоо тоглож байдаг, эх нь бол одоо хөгжим дээр дуулж байдаг. Тэр хүүхэд тэр сүнс сэтгэхүй хоёр байсан учраас тэрийг сонсч байсан байна. Тийм дээрээс тэгэж тэр үеээсээ эхэлж, тэгэж ингэж ингэж сонсч байсан учраас дөрвөн настайдаа сая хөгжмийн сонгодог бүтээл, дэлхийд алдартай хөгжим бичсэн байна гэж.

За, тэгээд л одоо нэг том эрдэмтдийг чинь бүгд ингэж судлаж гаргасан шүү дээ. Ийм байна гэж ийм судалгаа гаргаж ирж байгаа юм. Тэгэхлээр энэ бол үнэн байгаа юм. Тэгэхлээр энэ хувилгаанууд гэдэг чинь бүгд л ийм улсууд байхгүй юу. Тэгээд л нөгөөдөх нь сүнс нь яваад л хөөрхий минь тэгээд нэг газар хаа хүрдэг юм дээ. Дээр үеийн хутагтууд л одоо энэ домог түүхийг нь ингээд л сонсоод л ном ч үзэж байлаа. Жаахан хүүхдүүд байхад чинь ахмад хүмүүс ярьж байсан. Нэг хувилгааны дүр нэг сайхан юм ярьж байсан. Тэр бол одоо энэ говийн догшин хутагт Данзанравжаагийн дүр байсан байгаа юм шүү. Тэр тав дугаар дүр дээрээ хэлмэгдсэн хүн шүү дээ энэ чинь. Тэгээд зургаадугаар дүр нь энэ юм уу, долдугаар дүр, наймдугаар дүр чинь тэр Данзанравжаагийн долоо найм дугаар дүр чинь л манай энэ хэн тэр түрүүний Цэрэнванчиг гүүш, Өршөө багш хоёр чинь гэж үзээд л байгаа юм шүү дээ. Тийм долоо наймдугаар дүр нь дандаа өөрөө тодруулж байсан дүрээ. Яагаад вэ гэхдээр зэрэг найм дугаар Богд манжийн хаан хоёр чинь Данзанравжааг тавдугаар дүрээс хэлмэгдүүлээд егүүтгээд л, нөгөө элсэн дээр ингэж цовдолж устгаад л, одоо ахиж битгий дүр тодруул ингээд л хаагаад хаячихсан байгаа юм. Тэгээд дараачийн дүрүүд нь яахав дандаа өөрөө өөрийгөө тодруулж явж байсан байгаа юм. Тэгэхлээр тэр зургаадугаар дүрийн надад үлгэр бол ярьж өгч байсныг бол одоо би одоо бодоод байгаа юм. Их гоё үлгэр байдаг юм. Тэр бол надад яг одоо зургаадугаар дүрийн үлгэр ирсэн. Тэрийг л ярьсан юм байна гэж бодоод байгаа юм. Тэгээд тэр, тэр үедээ тэр чинь миний бодох юм бол дандаа тийм хойд талын дүрийг нь ингэж. Тэгээд төрөхдөө дандаа нэг ядарсан, ядмаг тиймээ, өмч хөрөнгөгүй ганц бие өнчин өрөөсөн тийм эмэгтэй хүмүүст очиж төрдөг байсан байга юм. Дандаа тэгэж төрж байдаг. Тэгээд тэр зургаадугаар дүр чинь бол одоо бас гэрт төрсөн байгаа юм. За тэгээд тэр долдугаар дүр нь болох дээр зэрэг болвол тэгэж төрөөд л, Цэрэнванчиг гэдэг хүн чинь манай хийдэд таван настайд нь урагш нь тодруулж явуулаад л, одоо тэр хаана ч юм Энэтхэгт ч юм уу. Тэгээд 10 настайд нь манай хутагтийн хийд чинь түүр хойно байгуулагдсан юм байна лээ шүү дээ, манай тэр Богдын хийд чинь. Наад дээр чинь байгуулагдсан он сар нь ч бий. Тэгээд тэн дээр тэр Цэрэнванчиг дүрийг тодруулж суулгаж байсан. Тэгээд их наslaагүй хүн байна лээ л дээ, тэгээд өнгөрөөд л дараачийн дүр нь болох дээр зэрэг Өршөө багш чинь, одоо манай

Өвөрхангай аймгийн Богд сумын 2-р баг, баг гэж тэнд тэнэ лүү, Хүрхрээгийн аманд төрсөн хүн байна лээ шүү дээ, манай нутагт төрсөн хүн шүү дээ. Хүрхрээний аманд төрсөн буйр нь одоогоороо байна.

Д : Тэгэхээр ер нь Өршөө багш бол ноён хутагтийн хойд хойд дүүрүүд?

Б : Хмм, тийм тийм л юм байлээ л дээ.

Д : Тэр домог гэдэг нь ямар учиртай домог юм байдаг юм бол?

Б : Тэр үлгэр шиг юм. зургаадугаар дүрийн би л л мэдэх. Энийг бол зургаадугаар дүр нь юм уу, долоо нь ч юм уу мэдэхгүй л байгаа, тааж л байгаа хэрэг л дээ. Тэгэхээр энэ бол ингэсэн байгаа юм, тэр чинь тэгээд л тавдугаар дүрд нь тодруулахгүй гээд л ингээд л хаячихдаар зэрэг л, би зургаадугаар дүр нь юм уу гэх дээр зэрэг гэж бодохдоор зэрэг говь нутаг нь таараад байгаа юм.

Энэ байсан юм байна л даа, говьд тэр нутгийн нөгөө хошууны чинь одоо, одоогоор бол баг, багийн дарга нарыг чинь занги гэж нэрлэж байсан шүү дээ. Занги Цэдэв гэж хүн байсан байгаа юм, тэр Цэдэв зангийн энэ зарц нь нөгөө хорь гаран насны залуу эмэгтэй, өнчин тийм хонь малыг нь хариулдаг тийм зарц охин байсан байна л даа. Тэгээд тэр эмэгтэй жирэмслээд нэг хүү төрүүлжээ. За тэр хүү нь 3 настай үед нь жоохонд нь нөгөө залуу эх нас барчихсан. Тэгээд 3 настай өнчин хүүхэд наад Цэдэвийнд үлдэхгүй юу. Ингээд Цэдэвийнд үлдээд 3 настай гэхгүй, юу хонийг нь хариулдаг байсан байгаа юм. За тэгээд ингээд хонийг нь хариулаад нэг өдөр хонь хариулаад явж байтал, хээрийн нохой чоно давхиж ирээд нөгөө сэтэрлэсэн хонь аваачаад, сэтэртэй хонь аваад явчихгүй юу, чоно давхиж ирээд. За ингээд нөгөө сэтэртэй хонийг нь өнөө хүүхэд чинь чононд бариулчихаад ингээд орой айсан эмээсэн юм ирдэг юм биз дээ. Аа тэгэхдээр зэрэг тэр Цэдэвийн авгай бол их ширүүн хатуу одоо тэр хүүхдийг их аашилдаг, ер нь гар хүрдэг их дээрэлхэдэг, ааш муутай тийм хүүхэд гаргаагүй хүн байсан, тийм заваан завхай тийм хүүхэн байсан байна. Одоо авгай л гэж ярих байхдаа тэр чинь. Тэр цаадах нь хорь гаран гэж байгаа юм чинь, тэр авгай үгүй ядаж нэг дөч хүрсэн ч юм уу, үсээ хагалчихсан авгай л гэж ярихаар хүн байсан байх л даа. Тэгээд нөгөө хүүхдийг чинь ингээд орой, нөгөө Цэдэв нь тэмээ малаа цуглуулах гээд явчихсан байхгүй юу. Нөгөө хүүхэд ирээд, одоо ингээд тэгээд чононд бариулаад яаж ч чадсангүй, ёстой нэг завхарсан юм гэж гэж л дээ. Тэгэхээр нөгөө авгай чинь нөгөө хүүхдийг чинь аашлаад, шар бууцаар булаад, хавар юм байна, тэгээд “одоо чи тэр хонь төлж аль, үгүй юм болвол чи манайхаас яв зайл очиж очиж чи сэтэртэй хонь бурханы морь мал аваачиж яахдаа яадаг юм, чононд өгөхдөө яадаг юм, өөдгүй зарц чи”. Тэгээд өнөө хүүхэд нь яваад өгдөг юм биз дээ, одоо мэлмийнд нь шар бууц орчихсон юм чинь уйлагнаад, нөгөөдхөө нухлаад нулимс асгаад ингээд яваад өгч. Тэгээд орой үдэш болж байсан. Цэдэв тэмээгээ хураагаад ирчихсэн хоол

унд болох нь болоод байж байна. Тэр үеийн чинь айлууд задгай тулгатай л байна шүү дээ, хоол унд нь тогоон дээр байж л байна. Гэтэл тэр үеийн чинь айл ямар юмны модон хаалга байх вэ, нөгөө үүд, унжаатай үүд, үүдний баруун талын хатавч сөхөгдөх шиг болно. Тэгээд нөгөөдүүл чинь юу вэ гээд харсан чинь нөгөө хүүхэд чинь нөгөө чоныг чинь барьчихсан. “Энийгээ ав, энэ л тэр хонийг чинь аваад явсан даг” гэж.

Д : Аахан, 3 настай хүүхэд үү?

Б : Тийм. Тэгэхдээр зэрэг өнөө Цэдэв нь энэ ч ер нь зүгээр биш хүүхэд гэдийг, гадарладаг байсан байгаа юм. Тэгээд Цэдэв нь бол их ширүүн дэггүй ерөнхийдөө тэгээд л аяар нь байдаг. Тэгээд Цэдэв нь болвол энэ ч ердөө зүгээр хүн биш байгаа юм даа, тийм чадлаа харууллаа, за энийг одоо яадаг санж вэ гэсэн чинь. Хөө нөгөө авгай чинь үнсээрээ булаад (үнс цацаад) хөөгөөд, Чи манайд одоо эргэж битгий босго алхаж ир. Энэ болвол тийм ороолон чөтгөр ороолон, муу ёрын, ийм дээ л эхээ харахаа больсон юм, ямар өөдтэй юм байх вэ. Яв зайл үнсээр булж өгөөд, үнсээр хүн булдаггүй юм гэдэг чинь тэрэндээ байгаа юм, базарваань хамгийн муу юм. Тэгээд нөгөө хүүхэд чинь уйлаад л тэгээд л тэгээд яваад өгчээ. Тэгээд ингээд явж байсан чинь одоо нөгөөдөх нь хавар, нэг хонь малд явдаг үстэй дээл хийж өгсөн байсан юм байна л даа. Зайлуул нэг монгол гуталтай муталтай л байсан байх. Тэгээд яахав дээ нөмөр дулаан бараадъя гээд нэг говийн заг тоорой (мод) битүү шугуйн дотор орж ирж хонох гээд явж байтал, нэг шугуй модны ёроолд очсон чинь нэг хүн сууж байна гэнэ, бадарчин. Аа тэгээд тэр бадарчин ингээд сайн байна уу майна уу, шөнө үдэш ингээд хүүхэд хүрээд ирэхлээр, нөгөө бадарчин чинь айж л дээ. Хий (хоосон) юм байдаг юм болов уу, яахаараа ингэдэг билээ, хүүхэд л юм байна л даа, цагаан дээлтэй монгол гуталтай аргагүй л хүүхэд, эрэгтэй хүүхэд. Яахаараа ийм үдэш ингэж хүүхэд явдаг юм бол оо, айх гайхах зэрэгцжээ. За мэндэлж гэнэ. Тэгсэн чинь За би ингээд нэг Цэдэв гэдэг хүнийд нэг хонь малыг нь хариулдаг юм, тэгтэл ингээд өнөөдөр ингээд, чоно ирээд, ингээд сэтэртэй хонийг нь өгчихөөд, тэгээд юу гэж тэрийг аваачиж өгөөд гэхэв дээ, тэгээд сэтэртэй хонийг нь чононд өгчихөөд хөөгдөөд, тэгээд орох оронгүй очих айлгүй, аав ээжгүй тэгээд нөмөр бараадаж явж байна аа гэж. Тэгээд нөгөө хүүхэд нь юу яадаг юм байна. За миний хүү тэгвэл одоо хоёулаа л амьдрана даа, хаа ч очихоороо хоёулаа хамт явъя, чи миний хүү бол хоёулаа ингээд хамт бадарчлаад л ингээд яваад байя. За тэгээд та хаанаас хаа хүрч явж байгаа юм. Өө би ийшээ одоо ингээд, Зуу ороод бадарчлаад ном эрдэм сураад, одоо эргээд л одоо хийдийн бараа харах гээд л явж байна даа. Та одоо хаанахын хүрээний хаанахын хүн юм бэ. Би Тосон ноён хутаг хийдийн энэ лам шахуу хүн, тэгээд би одоо ингээд. Тэр нь юу гэхдээр зэрэг одоо, одоо энэ өнөө түрүүний хэлдэг хэн билээ. Цэрэнваанчиг. Цэрэнваанчигийн хийдийн гэсэн байгаа юм

шүү. Яг тэр үед тэгэж хэлж байсан байгаа юм. Тэгэхдээр тэр Цэрэнваанчигийн үед л Цэрэнваанчигийн домог гарсан л гэдэг би таамаг бодоод байгаа юм шүү дээ.

Тэгээд тийшээ явж байгаа лам аа гэж. За тэгвэл одоо хоёулаа юу яаая аа, ямар ч байсан ингээд одоо энд бие биенээ бараадаад хоноё. Тэгтэл нөгөө нэг бадарчин за хоёулаа юу яаая миний энэ үүргэвчинд нэг ганцхан аяга будаа яваа, би яваад нэг цас ус олоод ирье, миний хүү энэ модноос хугачиж бариад энэ сайхан, цаад модноосоо хугачаад гал гаргаж бай гээд хэт өгөөд, тэгээд ус цас олж ирнэ гээд явдаг юм байна, нөгөө бадарчин. Нэг жижигхэн таваг шиг юм, тэр үед ийм тогоо байдаг байсан юм байна л даа, тэгээд тэрийгээ бариад ингээд яваад өгч, ус олох гээд. Тэгээд нөгөөдөх нь цас аваад ирсэн чинь нөгөө хүүхэд нь юу ч хийгээгүй, мод түлээ ч хугалаагүй, зүв зүгээр байж байна гэнэ. Үгүй чи яадаг хүүхэд вэ, энэ модноос хугалаад гал гарга гээд тэгэж байхад гал гаргаж байхгүй яасан юм бэ чи. Өө яах юм зүгээр гээд тэгэж байна гэнэ. Тэгэхээр нь өнөө бадарчин чинь нөгөө модноос чинь хугалаад унасан чинь. Хүүе байг байг та, та яасан хачин хүн бэ та, байг л дээ та царай зүс нь хачин болоод уйлах гэж байгаа юм шиг болоод, гар хуруу нь татаад ингээд нөгөө модыг нь хугачуулсангүй гэнэ. За ингээд болиулчихаж гэнэ. За тэгэхээр нь мань хүн сулаас нь ганц мод аваад, нөгөө муу хэтээрээ гал гаргах гээд ингээд үзээд байсан чинь ерөөсөө уугидаггүй гэнэ. Ерөөсөө уугихгүй, түрүүнд нь ингээд гал гаргахаар уугиад байсан, ер үед бол ерөөсөө яагаад ч болохгүй, гардаггүй шүү. Тэгээд чадахаа болчихож. За энэ чинь болохгүй юм байх нь гэж бодоод, за яадаг юм билээ, одоо яахав дээ, ингээд л хоосон өлөн хонохоос биш гэж бодогдоод л. Та яваад ахиад ахиухан ус энэ цас чинь юу болдог юм. Ахиад, наадахыгаа энд бөөгнүүлээд аятайхан цэвэрхэн газар юм. Ахиад, наадахыгаа энд бөөгнүүлээд аятайхан цэвэрхэн газар тавьчих гээд нөгөө үүргэвчний юун дээр нь тавиулчихаад тэгээд ахиад бас явуулчихаж. Тэгээд яваад хүрээд ирсэн чинь, пөө баахан дэрс шатаачихсан будаа агшаачихсан өнөөх чинь байж байна гэнэ. Аяга маяганд нь хийгээд тавьчихсан. Яаж хийж яаж хийсэн мэдэхгүй. Бэрээс одоо бидний ламын будаа ингээд тавьчихсан. Баахан дэрс асаачихсан байна гэнэ. Үгүй энэ дэрсгүй газар ямар дэрс яагаад гараад ирэв, сонин юм гээд гайхаж гэнэ. Тэгээд идсэн чинь бурамтай сайхан будаа байна гэнэ. Тэгээд өнөө өөрөө лам хүн тэгээд харахад хариугүй нэг бадарчин ч гэсэн бас нэг муу бадарчин биш. Муу лам биш явсан байна л даа. Тиймээ цаанаасаа тэгж таарч байхгүй юу. Тэгээд энэ хүүхэд бол жирийн хүүхэд биш. Эхлээд дэрс гэж ойлгосон байгаа юм, хүж байх гэж. Энэ бол нэг хүний хувилгаан л явна гэж, хааныхын хувилгааны дүр юм бол оо хөөрхий, мань хүн биширч мэдсэн байгаа юм. За тэгээд нөгөө хүүхдийн чинь үгнээс гардаггүй. Тэгээд ерөөсөө за миний хүү, миний хүү гээд л. Тэгээд л нөгөө будааг нь идчихээд унтах юм болж дээ. За

өвөө нь бөөстэй адуутай шүү дээ яахав. Хоёулаа ингээд өвөр түрийндээ ороод л даарахааргүй бол, одоо яахав. Өө яахав яахав. Зүгээр зүгээр хоёулаа тэгээд л унтъя. Өө тэгсэн чинь нэг сэрсэн чинь халуу оргиод л жигтэйхэн байна гэнэ. Энэ одоо юу болдог юм бол гээд ингэсэн чинь хө нөгөө булган дах нөмөрчихсөн, булган дах хоёулаа хаячихсан, булган дахтай л өө зүгээр халуу дүүгээд л. Аа би ч нэг сайхан хувилгаантай таарч дээ, тааралдаж дээ. За энэ хүүхдийг чинь нэг алдахгүй дагаад байя гэж. Тэгээд л өглөө боссон чинь нөгөө хүүхэд нь дээлээ нөмрөөд, нөгөө булган дах мах ч байхгүй. Тэгээд л байж байх юм гэнэ. Аа тэгээд за даа хоёулаа босъё, гэгээ орлоо, айл амьтан бараадъя хоёулаа явъя гээд явдаг юм байна даа. Тэгээд л ингээд явж байсан чинь нэг ийм том ногоон оюу чулуу газраас цухуйж байх юм гэнэ, бөмбөрцөг шиг ногоон оюу чулуу. Хөөе том оюу оллоо ямар гоё юм бэ гээд нөгөөдөх чинь ханзарчихсан муу монгол гутлаараа өшиглөөд л, ингээд авах юм бодоод аваад л үүргэвчиндээ хийх гээд л өнөө шуналын сэтгэл гэдэг тийм байдаг байх даа. Тэгсэн нөгөө хүүхэд чинь хөөе байг байг та. Та дандаа болохгүй юм хийж байх юм яасан хачин хүн бэ та боль гээд ингэдэг юм байна. Тэгэхээр нь нөгөөдөх чинь больчихож нөгөө хүүхдийн үгэнд ороод. Ерөөсөө л ороод яваад байгаа шүү дээ тэр чинь, тэгээд л больчихож. Ямар учиртай юм гайхаад л байхгүй юу. Тэгээд мод зулгаалгахгүй, хоёр дах одоо тэр чулуу шив. Ингээд л одоо хаашаа явж байсан чинь нэг суурин газрын зах руу ордог юм байна. Тэгээд тэр суурин газрын зах руу ороод хамгийн наад захын айлд нь оръё хоёулаа. Тэгээд нэг жаахан давс мавс нэг юухан хийхэн юм гуйж олж авъя хоёулаа, үүргэвчиндээ хийе хоёулаа, бадарчин хүн чинь тэгдэг юм байна. Тэгээд л орж. Өө тэгсэн чинь нэг хүүхэн тахиа шарж байх юм гэнэ. Өө тэгсэн чинь нөгөө хүүхэд чинь царай зүс нь хачин болоод л, аймшигтай болоод л. Явъя явъя явъя. Гончиг гэж хүн байсан гэж байгаа юм, тэр Гончиг гэдэг бадарчин байсан. Гончиг гуай явъя явъя гээд л ингээд л. За ингээд л гараад л явдаг юм биз дээ хоёул, нөгөө хүүхдийн үгнээс гарахгүй яваа шүү дээ. Тэгсэн чинь гаръя гэж байтал гаднаас хар нохой гуйж орж ирээд нөгөө тахианы махыг чинь аваад л иддэг юм биз дээ. Тэгсэн нөгөө хүүхэн чинь хараал тавиад л хайчаа бариад л элдсэн чинь, араас нь харж байсан чинь хойд хөлийг нь хуга цохиод хаяж гэнэ. Хөлөө санжигнуулаад л нөгөө нохой чинь тэгээд л гаслаад тиймээ нутаг хавь руугаа алга болж гэнэ. Тэгээд нөгөө хүүхэд чинь бүр уйлаад л бүр жигтэйхэн хачин болоод. Шалавхан явъя ийм юмнаас түргэхэн хоёулаа гээд тэгээд явдаг юм байж. За ингээд 3 дах нь ямар учиртай юм бол.

За тэгээд тэр хоёр тэр хөндий уруудаад ингээд яваад тал бэл дээр ирсэн гэнэ. За ер нь их тал руу гарахлаар хоёулаа хөлдөж үхнэ. Энэ хавьд ерөөсөө хоноё хоёулаа ингээд. Тэгээд нэг мухар эрэг олоод, баахан хамхуул болчихсон тийм мухар эргэн дотор хонодог юм байна. Аа тэгээд одоо за энэ чинь ямар

булган дахаа нөмөрвөл даарах юм биш. Тэгээд л хонож гэнэ. Тэгээд л нэг мэдсэн чинь өглөө болчихсон байна гэнэ. Өө тэгээд л за явья хоёулаа гээд л гарсан чинь, бүр тэр дэнж дээр баахан асар майхан морин тэрэг болцорсон байна гэнэ. Үгүй энэ чинь баахан улс байсан юм байна. Шөнө ирж хонож дээ. Өчигдөр орой бид хоёрыг ирэхэд чинь харагдаагүй дээ, анзаараагүй юм болов уу. За даа одоо жинхэнэ бишид лээ. Одоо энд ерөөсөө мэдэгдэж болохгүй. За та намайг дэнж дээр хүргээд аль. Тэгээд энэ жалгаа өгсөөд энэ сувгаа өгсөөд, энэ уулаа даваад дээгүүр гүйгээд хөтөл даваад шалавхан яв, зугтаа ерөөсөө эд нарт мэдэгдэж болохгүй шүү. Хэрвээ мэдэгдэж баригдвал та надтай хамт яваа гэж болохгүй шүү. Ингэдэг байна аа. Аа тэгээд нөгөө хүүхдээ хамхуулаар дарчихаад, тэгээд л дээшээ зүтгэсээр уулын даваад л хөтөл дээр гарч явтал, шуугилдаад л баахан морьтой улсууд хүрч ирээд өнөө муу Гончигийг чинь барьж аваад л, мориндоо мордуулаад л хоёр хөлийг одоо ергүүлж хөтлөөд л, тэгээд л өнөө дэнж дээр байсан улсуудаас хүрээд ирдэг юм байжээ. Тэгээд хүрээд ирсэн чинь их том эрээн асар дотор аваад орж, тэгсэн нь тэн дотор нэг том шаахалзсан лам сууж байна гэнэ. Аа тэгтэл өнөө аваачсан лам нар нь, шавь нар нөгөө хамгийн доод талд байсан лам: “За нөгөө бадарчинг чинь бариад ирлээ, хариугүй алдчихдагийн даваан дээр ингээд уулан дээрээс олж ирлээ” гэж байна гэнэ. За наанаа суу та гээд суулгаж гэнэ. Нөгөө улсууд нь гараад явж гэнэ. Аа за хаанахын хэн гэдэг хүн бэ, хаагуур явав, юу үзэв юу харав гээд л асуудаг юм байна. Аа манай хүн урагшаа явснаа яриад л, нөгөө хүүхэдтэй яваа гэдгээ хэлж болохгүй гэсэн учраас хэлэхгүй л байгаад байсан. Тэгсэн чинь за сарын газар та манай хутагттай хамт явсан та, гурван настай тийм дээл хувцас хунар зүс царайг нь яг хэлэх юм гэнэ. Сарын газар та дагуулаад явж байсан, тэр хүүхэд яачихав. Хаана алаад хаячив чи, хаана төөрүүлчихэв чи, яачихаад ирэв. Өө ёстой хүний амь тулгаад хоргоогоод байдаг. Тэгээд мань хүн хэлж болохгүй гэсэн учраас хэлэхгүй л байгаад, үгүй би мэдэхгүй ерөөсөө надад үзэгдэж харагдаагүй, намайг дагаад явж байсныг нь би мэдэхгүй. Тийм хутагт хувилгаад тийм хүн бол надад юу гэж аз нь хаясан хүнд яаж харагдах вэ. Өө чи битгий худлаа яриад бай, чи эргэж хараад яриад гар хуруугаа хөдөлгөөд тэгээд яваад байсан шүү дээ. Харагдаагүй байтлаа тэгж харьцдаг юм уу, чи битгий худлаа яриад бай. Чи тэр хүүхэд хаана алаад хаячихав чи, яав чи гээд л сүүлд нь хүний аминд бүр есөн эрүү тулгаж байна гэнэ. Явуулдаггүй гэнэ ерөөсөө. Тэгээд л үдэш шөнө болдог юм байна. Мань хүн чинь морь харах болж гэнэ. Тэгэхлээр нь хэлж дээ “За би нэг гарч морь харья ламтан. Муу явган нүцгэн бадарчин энэ олон морьтой хүнээс зугтаад хаа холдох вэ. Би ямар хувцсан дотроо морь харалтай биш, би нэг гарч морь харчихаад ирье” гэж. Гар гэж гэнэ. Тэгээд гарсан чинь нөгөө хүүхэд гадаа нь ирчихсэн байна гэнэ шүү. За за яахав та морь харчихаад ирээд ор. Орохдоо өнөө хүүхэд

ирлээ гэж хэлээрэй. Багштан хүүхэд ирлээ шүү гэж хэлээрэй, тэгээд би араас чинь орё гэж байна гэнэ. Аа тэгээд тийшээ явж морь харчихаад эргэж орж ирэхдээ За багштан гэж гэнэ. Аан л гэж гэнэ. Хүүхэд хүүрээд ирсэн шүү, хүүхэд ирсэн шүү гэж гэнэ. Тэгтэл араас нь нөгөө хүүхэд ороод ирж, бараг л зэрэг л ороод ирсэн байна л даа. Харагдах харагдахгүй мэт юм болгочихсон байсан юм байгаа биз. Тэгээд нөгөө багш нь харсан чинь тэн дээрээс чинь: Ээ багштан минь ухасхийсэн чинь тэр урд нь очоод түг гээд л түс гээд л өнхрөөд ухаан алдчихаж. Тэгтэл өнөө Гончиг “үгүй та минь ээ яваарай бариарай, гадаа хүн амьтан байвал та нар яваарай наашлаарай багштан болохоо байлаа”. Тэгээд нөгөө улсууд нь ороод ирдэг тэгээд л балгаж барихаар ухаан ордог юм байгаа биз дээ, ухаан ороод л. Тэгээд л тэр хүүхэд бол тэр хийдийн жинхэнэ хутагт, тэр говьд очоод төрчихсөн байсан байна. Тэр нөгөө тэнд байна гэдгийг нь мэдээд олж тодруулах гээд л явж байсан улсууд байгаа юм. Тэгээд тэд нар чинь номын чадлаар дуудаад, тэгээд л тэр нөгөө хээрийн амьтан давхиж очиж сэтэртэй хонийг нь барьдаг учир чинь тэндээс явуулсан байх гэж бодож байна, тиймээ. Явуулаад тэгээд тэндээс хөөлгөж гаргадаг нь шалтаг мөн үү. Тэгээд наашаа яваад тэр хийдийм лам тэнд явж байхыг бас тааруулж байна шүү дээ. Юм их сайхан шалтаг байгаа шүү дээ. Тэгээд энэ одоо ингэж олж аваачаад тодруулсан байгаа юм. Тэгээд тодруулахдаа наад Гончиг чинь баруун гарын их том лам болсон, энэ хутагтийн Цэрэнванчиг чинь. Тэгээд яасан бэ гэхээр зэрэг нөгөө гурван зүйлийн юмыг асуух юмсан гээд л бодоод л явдаг байхгүй юу. За чи бид хоёр эхлээд таарахад ингээд мод ингээд, ингээд одоо гал гаргах гэсэн чинь нээх болчихсон тэр ямар учиртай юм. Өө та лусын сав нүдийг чинь сохолчихно шүү дээ гэсэн шүү дээ, ингэж байсан байгаа юм. Нэгдүгээрт ингэсэн байгаа юм. За хоёрдугаарт нэг чулуу таараад авах гэсэн болиулсан, тэр яагаад. Аа та доод тивийн дуганы оройг өшиглөх гээд байсан шүү. Тэгээд би болиулсан шүү дээ. Аа гурав дах нь тэр айлд ирээд тахианы мах шараад ингээд тэгээд байсан. Тэр нохой орж ингээд тэгээд байсан тэр ямар учиртай юм. Тэр тахиа чинь хүүхэд нь байсан байна. Тэрүүнд хүүхдийг нь илбэдээд байхгүй болчихсон, тахиа болсон чинь хүүхдээ барьж идээд, шарж идэх гээд, алчихаад шарж байна. Тэгэхдээр зэрэг тэр нохой чинь эх нь байна. Тэр авгайн эх нь байна. Тэгээд эх нь хүүхдийнхээ махыг идэх гэж байна гэж мэдээд авч зугтааж байхад нь эхийнхээ хөлийг хуга цохиод хаячихаж байна шүү дээ. Тэгээд тийм айлд чинь сууж дохиж та бид хоёр тэгэж байж болох уу гэж. Ингэж байсан байна.

Тэгэхээр энэ болвол одоо Равжаа бол одоо ерөөсөө тэр тавдугаар дүрээсээ хойш дандаа өөрийгөө тодруулж явж ингэж явж байсан байгаа юм. Тэгээд энэ зургаадугаар дүр чинь энэ Цэрэнванчиг чинь тэгэж тодорч гарч ирж. Тэгээд долдугаар дүр дээрээ болвол яахав энэний түрүүнд нь бол тодорсон

учраас аа энэ манай нутагт төрж, Өршөө багш Сономцэрэн гэдэг нэрээр гарч ирсэн. Ийм юм аа гэдгийг би үзээд байгаа юм. Тэгээд наадахыг чинь би энэ жил чадсангүй. Ирэх жил би Хамрын хийд орно. Хамрын хийд ороод Дэмчигийн хийд орно. Энэ Хамрын хийд Дэмчигийн хийд рүү очсон байхад энэ заавал гарч ирнэ, би бүр тэгэж бодоод байгаа юм.

Д : Аа тавдугаар дүр нь ноён хутагт?

Б : Тавдугаар дүрийг чинь бол одоо Богд манж ингээд сүйтгээд хаячихсан. Тэрийг нь тавдугаар дүрийн нь шаштир бол надад байна. Яагаад ингэж ингэж нүүдэг болсон юм гэхдээр зэрэг манай энэ Эрдэнэзуугаас үүсэлтэй шүү наадах чинь, нүүдэг шалтгаан. Энэ чинь энд энэ Умайн амны чинь Боовон чулуу, аа тэр дээр ум үсэг, тэр хар толгой дээр эд нарыг чинь хийлгэсэн хүн шүү дээ, энэ Равжаа чинь тавдугаар дүрэн дээрээ. Тэгээд Төвхөнд очсон. Төвхөнд очиж арван гурав дөрвөн хоног юм уу хагас сар хэрээтэй юм уу биеийн чилээ гаргаж тэнд байж байх үедээ тэр эхийн умай, тэр Төвхний хөтөл дээр байгаа Очирваань, өнөө Дар эхийн мод, тэгээд л одоо тэр анхны хутагтын хийж байсан бүх юмыг чинь үзэж явж байхдаа “Үлэмжийн чанар”-ын онгод орж байсан байгаа юм. Тэгэхэд Лувсанданзан гэдэг лам дөрвөн хүүхэнтэй зургуулаа ирсэн юм, манай энэ Эрдэнэзууд. Ирээд эндээс чинь Зуун наймыг цамнуулаад, анхны Даншиг наадмыг хийлгээд, жороо морь уралдуулаад, жороо морь уралдуулж байсан одоо тэнд хөшөө чулуу нь байна, уралдаж байсан газар нь. Тэгээд тэнд монголд Даншиг наадам гэдэг чинь анх Данзанравжаа эхлүүлж, тэрнээс хойш Даншиг наадам одоо Хархоринд дөрвөн жилд нэг удаа хурдан морь уралдуулж байгаа шүү дээ. Энэ чинь ийм үүсэл түүхтэй юм байгаа юм. Данзанравжаа тэгээд Үлэмжийн чанар бол тэндээс эх гарч ирсэн гэж байгаа шүү дээ. Тэгээд тэр дөрвөн хүүхэн болвол дандаа авгай биш ээ, дандаа лам хандмаа нар, гэлэнмаа нар байсан байгаа юм. Аа тэгээд тэр Үлэмжийн чанарын онгод ороод л тэр чинь лам сархад сөгнөөд л тавьчихдаг тийм хүн байсан байгаа юм шүү дээ. Тэгээд л ууж байдаг, тэрэндээ согтох барих юм байхгүй. Яагаад гэхээр тэрийгээ рашаан болгоод хувиргачихдаг тийм эрдэм чадалтай тийм хутагт байсан байна шүү дээ. Тэгэхэд наймдугаар Богд болвол тэр рашааныг чинь хувиргаад, одоо архийг чинь хувилгаад рашаан болгочихдог тийм чадал байгаагүй. Тэрүүн дээрээ ялагдаж байсан, тэгээд тэрнээсээ үүдээд хоорондоо бие биенийгээ үзэж чадахгүй өс хонзон санасан ийм улсууд байсан учраас тавдугаар дүр дээр нь манжийн хаантай нийлээд егүүтгэсэн.

Тэгээд эндээс ингээд Төвхөнд очоод, Төвхнөөс Хужирт очсон байгаа юм. Хужиртад очоод Хужиртаас Балжидмаа гэдэг эмэгтэйг ёстой жинхэнэ сэтгэлийн хань болгож, манай Хужиртаас Балжидмаа гэдэг эмэгтэйг олж аваачиж байсан байгаа шүү дээ. Тэгээд яахав тэгээд сүүлдээ нөгөө наймдугаар Богдын үед чинь шар шувталсан этгээд мэтгээд чухам хөлчүү голчуу, галзуу

малзуу ч гэнэ үү, янз бүрээр нэрлэж ингэж байж байх үедээ Балжидмаагаа Да хүрээ орох гэсэн нь оруулаагүй, Туул голын хөвөөнд ерөөсөө нутаг руу нь буцааж байсан байгаа юм. Тэгээд Балжидмаадаа зориулсан дуу саяхан гарч ирж байна шүү дээ. Сая гарч ирж байна. Тэгэхээр энэ бүхэн үнэн байгаа юм. Тэгээд цаашаагаа Өвөрхангайн цаашаа яваад Тарагтад очсон. Тарагт Хүрэмт ороод, Хүрэмтээс цаашаагаа Дундговиор ороод, ингээд Дундговийн Онгийн хийд ороод, цаашаа нутаг руу явж байх үедээ ёстой жинхэнэ бузар нь гарсан байгаа юм, бузартчихсан байгаа нь. Тэр Балжидмааг авчихсан энэнээс болсон болов уу даа, миний таавар шүү зүгээр хэн мэдэх вэ. Яагаад тийм чадалтай хүн гэнэт бузартав аа, их сонин байгаа байхгүй юу. Тэгээд архиндаа одоо жинхэнэ согтуурхах гээч нь болоод хажуудаа явсан Лувсанданзан ламыг хутгалчихсан байгаа юм. Тэгээд Лувсанданзан нь нас барчихгүй юу. Тэгээд энийг болвол хоёр эрдэмтэн хоёр янзаар бичжээ. Дамдинсүрэн гуайн бичсэн дээр бол манай энд энэ Эрдэнэзуу чинь зургаан жил ган гачиг болоод, хулганад идэгдээд, тэр долдугаар цогчин Дагвадаржаагийн үед ном судран дээгүүр хулгана давхиж байсан гэж байгаа юм. Тэгээд урд талын энэ Шар хонхорт чинь эмэгтэй хүмүүсийн өвчин, нөгөө улаан бурхан гарч маш их эмэгтэй хүн төрж чадахгүй, хүүхэд эндэж жигтэйхэн гамшиг болж байсан. Тэгээд наймдугаар Богд ирээд энийг чинь Боовон чулуун хийгээд, тэн дээр ум үсэг тавь энэ тэр гэж наймдугаар Богд бол энийг хийлгэж байсан юм билээ. Тэгээд тэр оготно устаагүй, ган гачиг нь тайлагдаагүй, тэгээд болохоо байхаар нь Данзанравжааг урьж ирүүлээд, Данзанравжаа чинь энд ирж Зуун найман цамыг нь цамнуулаад, хурд наадам хийгээд, хур бороо оруулаад, пөөх ёстой нөгөө Өршөө багшийн чинь усны аюул шиг аюул болсон гэж байгаа юм. Тэгээд бүх хулгана чинь усанд урсаад тэгээд байхгүй болгочихсон. Тэгээд нэг сайхан цаг эргэж байсан гэж байгаа юм. Тэгээд буцаж явахдаа тэнд тэгэж бузартаж согтуураад хажуудаа явсан ламаа алчихсан гэж Алтангэрэл бичиж байгаа юм. Тэр Равжаагийн судлаач. Аа Дамдинсүрэн гуай болвол энэ тэр аймшгийг чинь энэ хүрэн морьтой хээр морьтой хүн зуугийн хажууд явж байсан. Хөө нөгөө зуугийн чинь дотор нөгөө ороолон чинь одоо энийг барьж устга гэж хажууд явсан Лувсанданзан ламд үүрэг өгч, Лувсанданзан лам барьж авч бух олиулсан гэж байгаа юм. Тэр бух олиулах гэдэг нь ямар юм байдаг юм бол оо. Тэрүүгээр дүрж алсан гэж тэгээд тэрнээс үүдээд яахав гэхдээр зэрэг наймдугаар Богд Равжаа болвол одоо шарыг шувталсан одоо хөлчүүрхсэн номоо урсан, тэгээд хүний амь егүүтгэлээ гэж манжийн хаанд айлтгаад. Манжийн хаан егүүтгэхээсээс нь тэр үед чинь цаазалдаггүй барьдаггүй, тэгээд элсэн талд дөрвөн мөчийг нь тэлж, тэгээд говьд явж тэнд нь тэлүүлэн тэгээд тас шувуу ирж амьдаар нь элгийг нь авч, тэгээд хатаж үхсэн байгаа юм шүү дээ.

Д : Хутагтын хийд чинь одоо одоогийн аль аймгийн аль суманд нутагт байна

вэ?

Б : Аль манайх уу. Манай хутагтын хийд үү? Өө Богд сумын.

Д : Өвөрхангайн?

Б : Тийм Өвөрхангайн Богд сумын. Ноднин зун Дэмчигийн хийдээс баахан лам нар ирсэн байна лээ. Дэмчигийн хийд чинь бол Баянхонгорын, Өмнөговийн Ханхонгор билүү ямар билээ, Ханбогд бил үү тэнд байдаг юм байна шүү дээ. Тэндээс арван хоёр лам ирсэн байна лээ шүү дээ. Ирээд тэрүүгээр аравнай тавиад, тэр зул мул өргөөд. Хадаг тавиад Өршөө багшийн буурин дээр очсон байгаа юм. Тэр цогчин дуган дээр яасан байгаа юм. Тэгээд үзэхээр л би арга байхгүй энэ Равжаагийн сүүлчийн дүрүүд бол мөн юм даа гэж үзэж байгаа юм.

Д : Ноён хутагт байж байгаа л Цэрэнваанчиг болоод л Өршөө багш?

Б : Тэгэхээр энэ зургаадугаар дүр нь бол Дэмчигийн хийд дээр тодорсон байх. Долдугаар дүрд бол манай энд, долоо найм нь энд тодорсон байх гэж би болвол ингэж таамаглаж сууна, над шиг нээх таамагч хүн. Тэгэхээр л одоо нэг Дэмчигийн хийдэд очмоор байгаа юм. Аа Хамрын хийд очмоор байна гэдэг чинь бататгахгаад байгаа юм. Хамрын хийд дээр бол Баатар маатар гээд, Алтангэрэл мэрэл гээд миний танил эчнээ танилцсан улсууд гараад байгаа, гээд тэр Хүрэлбаатар гуайгаар яагаад тэд нартай уулзаад нэг энэ түүхчид дээрээ яриад ингээд судлахаар, тал талаасаа юмнууд бол гарч ирнэ ээ, арга байхгүй гарч ирнэ. Одоо миний явдаг л байна даа. Тэгээд явахаар чинь дандаа өөрөө зардлаараа явна, тэтгэврийн 92,400-тай, хажууд нь тэгээд чадахгүй хэвтэж ном бүтээл туурвих гэж байгаа гээд ингээд хоббитой, миний хобби юм даа яахав. Хүний тархинд байгаа юмыг бол өөрөө аваад л үхээд дуусгачихна. Байгаа юмаа ингэж ном болгож үлдээх болвол өөрт болоод хойч үед их хэрэгтэй, ийм байгаа юм. Тэгэж би ингэж боддог юм. Ерөөсөө тийм биз дээ. Тэгээд ингээд ингээд үзээд байгаа хүн дээ, хүүхээ. За нэг иймэрхүү л байна.

Д : За гялайлаа.

Ш Боржигон

Б : Боржигон

Д : Лхагвадэмчиг

1 Бага насны үе

Д : За тэгээд таны алдар нэр хэн билээ? Аль нутаг?

Б : Аа би ерөөсөө л энэ нутгийн хүн. Ерөөсөө энд Шанх гээд сум байсан юм.

Энэ л нутгийн хүн. Энүүхэн галынхаа энүүхнээд 10-аад 20-оод км дотор өсөж төрсөн хүн. Би Боржигон гэдэг хүн.

Д : Та хэдэн онд мэндэлсэн бэ?

Б : 41 онд.

Д : За яг л дайн дуусаад.

Б : Дайн эхэлж байхад. 2-р дайн эхэлж байхад төрсөн юм байх даа.

Д : За тэгээд та. Танай нутаг энэ хавиар байна уу?

Б : Тийм ерөөсөө л Хархориныгоо тойроод л, ингээд манай сум чинь бол ерөөсөө энэ, энэ л дээ.

Д : За тэгээд бага насаа, ах дүү олуулаа байв уу?

Б : За би чинь ах дүү, өөрөө төрснөөсөө нэг багадаа нэлээн өнжчихсэн гэсэн, Хоёр гурав ч ч өнжчихсэн ч юм уу. Гурвуулаа дөрвүүлээ маягтай байсан чинь нэг дүү 59 онд 1-р ангиа төгсөөд бас эндчихээд. Одоо нэг гурвуулаа л байдаг юм. Манай хоёр дүү хүүхэн хотод байдаг юм, тэгээд би энд.

Д : Танай аав ээж энэ нутгийнх?

Б : Энэ нутгийнх ерөөсөө энэ нутгийнх.

Д : Та багадаа тэгээд бага сургуульд энэ тэрд явав уу?

Б : За энэ чинь одоо сургуульд би суусан юм. 49 онд нэг суугаад тэгээд 53 онд бага сургууль төгсөөд, тэгээд би өвөө эмээ хоёр дээрээ өссөн хүн байгаа юм. Тэгээд өнөө хоёр нилээн өндөр настай болчихсон. 70 гарчихсан ч байсан юм уу, арай 70 гараагүй болов уу, одоо л миний насан дээр гарчихсан байж дээ. Тийм насны улсууд байсан юм. Тэгээд өнөө хоёр чинь намайг явуулах дургүй, тэгээд би болвол явах гээд байдаг. Тэгээд эмээ маань яг тэр сургууль цуглах үеэр “Могойтын рашаан”-д очиж рашаан уух гэж яваад, нөгөө арван дөрөв хоног явж байсан юм байхгүй юу, тэр нь мал тэмээтэй л явж байсан. Тэгээд тэр хоорондуур нь давхиж очиж сургуульд бүртгүүлчихээд. Хүрч ирээд 8 сарын 25-нд очиж бүртгүүлчихээд, сургуульдаа сууна гээд байсан өнөө эмээ ирдэггүй. “Эмээгээ ирэхгүй бол чи явж болохгүй” гээд хориглоод хаячихна. Тэгээд байж байтал 9 сарын хэдэн болчихолгүй яахав. Тэгээд л миний сургуулиас гарах, тэнд хоцорч гарчихсан юм байгаа юм.

Д : Бага анги гэдэг маань хэддүгээр анги хүртэл байдаг байсан юм бэ тэр үед?

Б : 4-р анги хүртэл. 4-р анги хүртэл сураад л, 4-р ангийн боловсролтой болсон

болоод л.

Д : Тэгээд одоо сургуульд төв дээр ирж суух уу?

Б : Тийм энэ урд Шанхын төв, манай суурин Шанх сум гээд, урд Шанх руу энэ дээр байсан юм, манай сум чинь. Тэр хийд чинь сумын төв байсан юм, гайгүй олон айл бараатай. Бас намайг сууж байхад чинь (сургуульд) артель гэж нэг байгуулга байсан юм. Ер нь голлох албан байгууллага нь тэр артель л байж дээ. Тэгээд тэр артельд бол хуучин Шанхын хүрээнд сууж байсан лам нарыг ажилтай болгоод. Тэнд тэгээд баахан төмөр хийх нь хийнэ (төмөр эдлэл), мужаан хийх нь хийнэ, гутал хийнэ. Монгол гутал, тэгээд л гөлөм, тэгээд ер нь ахуйн хэрэгцээний юм, их юм хийж байсан юм шүү дээ артель гэдэг чинь тэр. Ер нь дотоодын үйлдвэрлэл, одоо манай ярьж байгаагаар өнөө жижиг дунд үйлдвэрлэл гэдэг нь тэр байж. Авдар сав гэрийн мод, бас эсгий хийнэ. Тийм байгууллага байсан юм. Тэгээд сүүлд нь өнөөхийг чинь юу яагаад Хужирт сум руу нүүлгэхэд, цаанаас нь “Хадны артель” гээд манай эндээс лав Шанхын артелиг нэгтгээд томруулаад, тэгээд нүүлгээд явчихсан юм. Тэгээд манай сум чиг л байж л байсан. Тэгээд 56 онд энэ Хархорины САА байгуулагдаад, тэгээд хоёр жил болсон юм уу даа. Тэгэхэд л Шанх сумыг татан буулгаад Хархорины САА-д нийлүүлчихсэн юм. Тэгээд Хархорин сум болчихгүй юу. Тийм л учиртай юм. Тэр үед чинь бид нар бага шиг байж. Би чинь САА байгуулагдхад чинь арван тавтай байсан. Тэгээд аав ээж хоёрынхаа юунд л явж байсан (нөмөрт). Аав ээж хоёр маань ерөөсөө хөдөө нэг малтай малчин улс, нэгдлийн мал маллаж байгаад, сүүлд нь САА-н мал маллаж байгаа юм л даа. Би тэр нэг хажуу хавирганд л явж байгаад (аав ээжийнхээ), овоо том болоод цэрэгт явахаар болоод, цэрэгт яваад. Хотод барилгын 7-р батальон гэж байсан, сүүлд нь мах гурилын комбинатын өргөтгөл барьж. Гурилын комбинатын энэ талын нэг хэсэг байна шүү дээ нэг хорин дөрвийн, тэрийг чинь би барилцсан юм. Тэгээд Мах комбинатын өргөтгөл бас зэрэг явж байсан юм, тэнд дээр бас ажиллаад. Тэгээд сүүлд нь халагдхынхаа хойно нь Авто засварын завод дээр 3 сар ажиллаад л, тэгээд 7 сард халагдсан. Халагдаж ирээд энэ юунд Хархорины гурилын үйлдвэр гэж байлаа даа, одоо ч нэг нурам л үлдээ шив. Тэнд ирж ажилласан юм. Нутагт нэг азаар санал, тэр үед чинь бас юу яахгүй ээ. Цэргээс халагдахад тэрхэн үед нэг тохиолдсон юм. Цэргээс халагдаж байгаа залуучууд чинь цөмөөрөө барилга дээр байсан. Маш их олноор нь цэрэгт татсан юм. Тэгээд өнөө барилга дээр байсан залуучуудыг чинь барилга дээр нь авч үлдэх тийм чигтэй байсан байх. Тэгээд өнөө ийм тийм нь барилгын салбар луу чинь санал авч байсан. Үйлдвэр аж ахуйн газар луу ч санал авч байсан. Тэгээд харин Хархорины голдуу хүүхдүүдээс санал авна гээд эндээс боловсон хүчин оччихсон, би ч танихгүй, Хархорин гэх дээр л бөөн баяр нутаг руугаа л наашаа явж байгаа юм даа. Энд хүрч ирээд Хархорины гурилын үйлдвэрт

хорин хэдэн жил хорин хоёр гурван жил ажиллав уу даа. Тэгээд л юугаар, аа байз тэр чинь юу байхав даа нэг, сүүл хэрд нь 88 оноос эхлээд үйлдвэрийн туслах аж ахуйн мал хариулаад. Яахав үйлдвэртээ л байгаа юм чинь тийм ээ. Өөрөө ч бас нэг, аав ээж хоёр маань ч, ээж минь ч настай болчихлоо. Аав маань бас өнгөрчихлөө. Тэгээд хэдэн мал нь байхгүй. Энэ дээр байх бас нэг онцгүй. Тэгээд ер нь яахав дээ нэг энэ хэдийнхээ дэргэд байдаг ч юм уу... мал маллангаа тийм ээ. Тэгээд хөдөө гараад тэгээд тэрнээс хойш мал дээр маллаад, мал маллаад нэг хорин жил боллоо доо, 88 оноос чинь хойш. Яахав ээ мал нь, тавиад бог мал байсан байх, хориод үхэр хориод адуу байсан даа, аав ээж хоёрын үлдээсэн. Тэрийгээ нийлүүлж малласаар байгаад сүүлдээ ч туслах үйлдвэрийн мал алга боллоо, одоо хувийнхаа өнөөхтөйгөө л үлдлээ. Аа маллаж байгаа, ноднин уржнандуу 88 оноос нэг мянгатын нэр зүүчихээд.

Д : Өө, мянгат.

Б : Тэгээд л явж байгаа юм. Одоо ч тэгээд бас нэг чадал тэнхээ бас нэг жоохон хүрэлцэх муухантай, тэгээд энэ хүүхдүүдийг чинь, сүүлийн дүнд нь харахаас бид хоёр л явахаас. Мал дээр бид хоёр үлдэж тэднүүд орж ирэлтэй нь биш. Бид хоёрыг л яв гэх юм. Тэгээд яваад энэ дээ сууцгааж байна.

Д : Бага байхад, тэр бага сургуульд сурч байхад дотуур байранд суудаг байсан уу?

Б : Дотуур байранд. Танил ах дүүтэй юутай нь бол айлд суучихна. Биднүүд бол дотуур байранд. Нэг жил, эхний жил нь өвгөн байсан юм, манай өвөөгийн дүү. Тэр өвгөнийд нэг дөрөв тавуулаа сууж. Тэгээд хойтон жил нь арай бас нэг юм мэддэг болоод сургуульд сууж одоо боллоо гэж үзсэн байх, тэгээд байранд суулгасан юм.

Гурван жил байранд суугаад яахав ээ бас нэг хүний дор орчихгүй, бас нэг онц монц гараад энэ тэр тийм сурагч байсан даа. Олон сургуулиар явсан бол арай ч хоосон байхгүй байсан байх. Яахав дээ тэгээд сургуулиа төгсчихөөд...

Д : Тэр үед одоо хүүхдүүд нь энэ хавийн хүүхдүүдийг цуглуулаад суулгадаг байсан юм болов уу, хаанаас ирдэг байсан юм бол хүүхдүүд нь?

Б : Шанх дээр үү?

Д : Тийм.

Б : Өө тэгэлгүй яахав. Тэр сумын бүх хүүхэд л сургуулийн насны бүх хүүхдийг л. Тэгээд зарим бас зугтаана, оргоно босно.

Д : Нөгөө кинон дээр гардаг шиг үү?

Б : Кинон дээр гардаг. Тэр чинь яг амьдрал юм шүү дээ. Тэгээд л оргоод явчихна, багш нь хойноос нь явна. Өнөө өртөө улааны морь унаад л явна даа. Тэгээд л тойруулаад л хөөгөөд л хөөгөөд л олж ирнэ. Зарим нь тэгэлгүй (зугтна). Би бол тэгэж оргож босч яваагүй ээ. Чөлөө мөлөөгөөр ирчихээд харин нэг хоёр гурав хоногоор унжчих тал бол байдаг.

Д : Хэдэн насны хүүхдүүдийг анх сургуульд авдаг байсан юм, тэр үед?

Б : Найман настай л авна. Тэгээд арван хоёртой дөрөвдүгээр анги төгсөөд л. Манай энд чинь дунд сургууль байхгүй, Хужиртад дунд сургуультай. Уг нь тэнд маниусыг явж байхад нэг долдугаар ангитай байсан байх. Тэгээд удахгүй ерөнхийдөө арав болсон байхаа. Тэр лүү манай сумынхан явна даа, нутаг орон ч хол байх. Тэр хөдөө жаахан алслагдмал, тэгээд хаашаа ч байсан юм бэ, хүүхдээ нэг сургуульд суулгах дур муухантай. Хөдөө авч гарч л тус нэмэр болгох л иймэрхүү сонирхол арай давамгай байсан юм шиг байгаа юм. Тэр ч учраараа ер нь тэгээд Шанхаас болвол маний үеийнхнээс лав л бол манай ангиас болвол олон хүүхэд сургуулиар яваагүй, хоёр гуравхан хүүхэд л явсан байдаг юм. Тэгээд бусад нь дандаа хөдөө гарчихсан, эр эмгүй.

Д : Тэр үед багш нь одоо ямар, хот мотоос ирсэн хүн байсан юм уу, орон нутгийн хүн байсан юм багш нар?

Б : Аа тийм ер нь тэгээд надаас арай түрүүхэнд бол орон нутгаас улс энэ тэр байсан л гэж ярьдаг юм. Намайг байхад бол ер нь тэгээд л хот хүрэннээс ирсэн хүмүүс л байсан байх. Энэ Хужиртаас ирсэн бас багшилж байсан юм шиг байгаа юм. Хужирт чинь энэ дунд сургуультай болохлоор юу яадаг, долдугаар анги төссөн хүүхэд, сайн сурлагатай нь багш болчихдог байсан. Тийм хүүхдүүд энэ тэр бас ирж байсан. Намайг дөрөвдүгээр анги төгсөхөд бас нэг Зүүнбаян-Улааны нэг залуу багшилж байсан. Тэгсэн нь аравдугаар анги төгсөөд багш болоод явах гэсэн чинь хоцорчихоод гэл үү нэг л саад учирсан юм шиг байгаа юм, тэгээд ирж байгаа юм гэж нэг тийм өндөр залуу ирж багшилж л байсан юм. Тэгээд тэрний түрүүнд нь нэг Увсын нэг намхан шар багш байсан юм. Багшийн сургууль төгсөж ирж байсан байх, хотоос ирж байсан юм. Тэгээд тэр удалгүй хагас жил болов уу үгүй юу, жил ч болоогүй шахуу юм байна аа. Тэр чинь намар ирэхээр 10 сарын сүүлч 11 сар хүрсэн юм уу үгүй юу. Тэр аймаг руу шилжээд явчихсан юм тэр. Хасагдал масагдалтай байсан юм уу, тэгээд бас аймгаас биднүүдэд бичээд л, биднүүд жигтэйхэн сайн тэр багшид. Анх л их ширүүн айхтар юм шиг, дөрөвдүгээр ангид байсан юм тэгээд, их л хатуухан шиг л байсан санагдаад өнөө багш чинь, дасчихаар чухам. Явуулж өгдөггүй өнөө хүүхдүүд чинь хуйларч дагаж гүйцгээгээд энэ тэр, тэгэж л байсан юм. Тэгээд тэр хүний юуг л сүрхий олдог сүрхий хүн байсан байх гэж боддог юм. Тэгээд явчихаж байсан юм байгаа юм. Тэгээд одоо чухам хаа ч явсан юм мэдэхгүй.

Д : Залуу хүн байсан уу?

Б : Залуу. Дөнгөж төгсөөд л хорин нэг хоёртой юм уу, тийм хорьтой ч байсан юм уу. Нэг арван тав зургаатай долоо найм төгсөөд сургуульд яваа биз бодвол, тийм ээ. Тэгсэн л байх гэж одоо тааж боддог юм. Тийм л хүн байсан, тэгээд явчихаж байсан юм. Тэгээд Хужиртаас бас нэг улс ирж багшилж байсан юм. Хужиртаас ер нь ирдэг байсан. Хужирт өнөө арван жилийн сургуультай энэ тэр. Зарим нь бас багшийн сургууль руу явчихаж байсан

- байх. Манайх бол тийм юм байхгүй, арай гэж нэг гурван жил долоо төгсөөд л ирэх, тэр нь их ховорхон тиймэрхүү л байж дээ.
- Д : Ер нь хэдэн багш байсан бол, тэр үед?
- Б : За шанхын бага сургуульд бол дөрөв таван багш л. Дөрвөн анги нэг нэг багш, тэгээд заримдаа нэг нэг анги нэг хоёр бүлэг энэ тэр байсан, тэгээд захиралтай нэг, тав зургаагаас хэтрэхгүй л дээ.
- Д : Дөрвөн ангитай?
- Б : Дөрвөн ангитай тэгээд л.
- Д : Нэг ангид ер нь хэдэн хүүхэд байх вэ?
- Б : Аа яахав нэг гучаад хүүхэд.
- Д : Өө за нилээн.
- Б : Нилээн овоо. Тэгээд яахав унжиж сунжирсаар байгаад нэг, 4 төгсөхдөө 20 гаруй хүүхэд энэ тэр төгсчихдөг тийм л байсан байх.
- Д : Эрэгтэй эмэгтэй?
- Б : Эрэгтэй эмэгтэй ерөнхийдөө, тэгээд тооны хувьд ойролцоо тэгээд л нээх олон цөөнийг нь ялгаж мэдэхээр ч үгүй байж дээ.
- Д : Эрэгтэй эмэгтэй нь цугтаа нэг анги байх уу, эсвэл эмэгтэй хүүхдүүдийн анги?
- Б : Үгүй. Тэр бол тийм бололцоо ч байгаагүй. Намайгий чинь сургуульд суухад манай анги бол эрт орж байсан, эрт хичээл. Тэгээд л сүүлдээ бас нэг жижигхэн барилга марилга барьсан юм болов уу даа. Тэгээд бас нөгөө цөмөөрөө хойтонгоос нь байшинд орсон юм байгаа биз.
- Д : Дотуур байранд бол эрэгтэй эмэгтэй хүүхдүүд хоёулаа л хамтдаа л сууна?
- Б : Үгүй үгүй. Дотуур байр бол эрэгтэй эмэгтэйгээрээ тус тусдаа, нэг нэг гэрт.
- Д : Аа гэрт?
- Б : Гэрт сууна. Гэрт сууна, тэгээд гэрийг галладаг манаач галч байлаа. Тэгээд манаач галч л тэр хоёр гурван гэрийг галлаад л, шөнөд нь галлаад л тэгээд аймгийн... Нөгөдөх чинь пийшинтэй, пийшинд нь мод түлээд л тэгээд л галлаад байна даа.
- Д : Нэг гэрт хэдэн хүүхэд байх вэ?
- Б : Арав гараад, арав гаран шахуу хүүхэд байсан юм уу тэр чинь. Тойруулаад л ороо засчихсан байдаг сан. Би чинь байранд суухад, харин тэр байрны байшинтай болчихоод, байр бас арай илүү сурсан юм байлгүй дээ. Байшинд биднүүд байрлаж сууж байсан юм. Намайг нэгдүгээр ангид ороход бол байранд гэртээ, тэгээд тэр байрныхаа гэрт орон дээр сууж байгаад л хичээлээ хийчихнэ, орон дээр нь бохирч сууж байгаад л.
- Д : Өө за.
- Б : Орон дээр нь л буруу хараад бичээд байна, эргэж нэг самбар луугаа хараад л, нэг тиймэрхүү байсан л юм нэгдүгээр ангид.
- Д : Сургууль нь гэрт.

Б : Тийм. Анги нь бас гэрт. Нэгдүгээр ангид ерөөсөө нэг байрны хүрэлцээ муутай байсан юм. Тэгээд хоёрт орохлоор цөмөөрөө л байранд байшинд л орчихсон байсан юм даг. Дотуур байр хүртэл байшинд орчихсон байсан. Тэгэхлээр тэр л юм байсан хэрэг байх. Одоо чухам нэг ингэж бариад тэгэж бариад гэдгийг сайн мэддэггүй юм. Тэгэхдээ л байшин барьчихсан байсан.

Д : Тэр үед чинь монгол бичгээр ордог байл уу? Кирилл ордог?

Б : Үгүй. 49 онд чинь кирилл болчихсон байсан. Кириллээр орно. Дөрөвдүгээр ангид нэг монгол бичиг зааж байгаа болтой л байдаг л байсан юм. Тэгээд намайг дөрөв төгсөхлөөр кирилл орохоо байчихсон. Тэр жил нь заагаагүй өнгөрчихсөн юм байгаа юм. Тэр бас л хасагдсан байлгүй.

Д : Монгол бичиг үү?

Б : Тийм.

Д : Аа тэгвэл тэр үед кириллээр заалгаад бүр эхэлчихсэн.

Б : Тийм кириллээр заагаад бүр эхэлчихсэн байсан. Жаран хэдэн оноос кириллээр заасан юм мэдэхгүй дээ. Түүрүү үед нь бол монголоор зааж байсан байх. Долоо найм ах улсууд монгол бичигтэй л байдаг юм. Тэгэхлээр ганц хоёр жилийн өмнөөс л кириллээр заасан байх даа.

Д : Тэр үед одоо хүүхдээ сургуульд өгөхдөө нилээн дургүй байж дээ айлууд?

Б : Манай энэ хавьд л лав жоохон дургүй л байсан юм. Бусад газар ямар байсан юм мэдэхгүй.

Д : Манай бас ах ярьдаг юм, дургүй л байсан юм гээд.

Б : Тэгээд тус нэмэр л хийлгэх гээд хамгийн гол нь өнөө нэгдэл мэгдэл ч болоогүй, тэгээд хувийн малтай, тэгээд өнөөхдөө л ажиллуулах гээд л хамгийн гол нь л тэр.

Д : Тэр үед одоо ямар хичээл ордог байсан юм бол.

Б : За дөрөвдүгээр ангид гэхэд яахав дээ. Түүх газарзүй орно. Тоо монгол хэл уран зохиол тиймэрхүү л хичээлүүд орж байсан юм. Газарзүйн хичээл дээр дэлхийн хичээл гэж ордог байсан санагдах юм. Тэгээд өөр юу билээ дээ. Бас хэд хэдэн хичээл ордог байсан юм. Биеийн тамир гэж орж байсан. Дугуй бас ордог байсан юм.

Д : Монгол хэл утга зохиолоор ер нь ямархуу хичээл ордог байсан юм бол?

Б : Монгол хэл утга зохиол ер нь яахав дээ, тэгээд үлгэр мүлгэр, тэгээд бас нэг тэр үед чинь одоо бас нэг нээх их монголын зохиолчдын зохиол гэж ер нь ховор байлаа шүү дээ. Тэгээд нэг тийм үлгэр мүлгэр оньсого тиймэрхүү л юм орж байсан байх. За хааяа нэг одоо санахад бас нэг сурах бичгэн дээр нэг Тарваагийн юу ч билээ, тэгээд Баастын энэ тэр гээд нэг тийм богинохон богинохон хүүхдийн өгүүллэг мөгүүллэг тийм юмнууд л байдаг байсан юм даа. Зохиолчын нэр өнөө өгүүллэгийн дээд талд л байх. Би бас ойлгочихсон нэг ийм л хүн зохиосон энэ тэр гэж. Ойлгочихсон л явдаг хүүхдүүд бол. Тэр болгон ойлгосон хүүхэд бас тэр болгон байсан ч юм уу. Багшийг л асуухад

- хамгийн түрүүнд хэлж энэ тэр, тэгэж л энэ тэр байсан юм даа.
- Д : Тэр үед нөгөө галстук энэ тэр зүүдэг байсан уу?
- Б : Аа зүүлгүй яахав. Галстукаа зүүчихнэ. Хөх даалимбан дээл өмсчихнэ эрэгтэй нь. Эмэгтэй нь юу яана, ногоон дээл өмснө. Форм л юм даа. Тэгээд нэг даалимбан цүнх үүрээд л номоо чихэж аваад л туучихна даа.
- Д : Эрэгтэй нь ямар өнгийн дээл өмсөх вэ?
- Б : Хөх даалимба, эмэгтэй нь ногоон.
- Д : Аа бас өөр. Дээл хувцсыг бол аав ээж хийж өгөх үү?
- Б : Аан. Тэр юунаас бол гарах юм байхгүй л дээ, Шанхаас болвол гарах юм байхгүй. Аав ээж нь л хийж өгнө.
- Д : Хоол унд яадаг байсан, аав ээж бэлддэг байсан юм уу, засгаас?
- Б : Аа хоол өгнө. Аав ээжээсээ хоол авна. Мах зах л авч байсан юм. Ер нь мах авна л даа. Байрны хүүхдийн хоол гэж. Гурил будааг нь чухам яаж байсан юм мэдэхгүй юм одоо. Ямар ч байсан мах л өгч байсан. Өөр цаана нь одоо ямар арга хэмжээ явж байсан юм бүү мэд. Мөнгө төгрөг ямар арга хэмжээ явж байсан юм бүү мэд. Мөнгө төгрөг гурил будааныхыг нь өгч байсан юм уу, зүгээр гурил будааг нь дааж байсан юм уу. Тэрийг болвол мэдэхгүй л юм байна.
- Д : Өдөртөө 3 удаа хоол өгөх уу, яах вэ?
- Б : Өгнө. Өглөө цай өгнө өдөр нэг хоол идчихнэ. Орой ч бас нэг хоол идчихнэ дээ.
- Д : Тэгээд одоо нөгөө хоол унд нь ямархуу хоол унд байсан юм бол, тэр үед?
- Өглөөний унд өдрийн хоол гэж.
- Б : Өглөөнийх чинь одоо нэг мантуутай юу байсан юм дээ. Мантуу зантуу л ер нь. Талх малх гэж нээх юм байгаагүй байх өө. Тэгээд л будаа мудаа. Махан хоол юу нь ирнэ, заримдаа бүхэл мах ирдэг л байсан юм. Байцаатай төмстэй хоол хийнээ. Байцаагийг нь идэж чадахгүй. Төмсийг нь бол идчихнэ. Байцаагийг нь авчихаж байгаад хүүхдүүд тэгээд л байдаг байсан юм. Нэг настайхан хөгшин тогооч нь хийдэг тэр байцаа майцаагийг нь яадаг ч байсан юм... чаддаггүй байсан байх гэж боддог юм. Тийм учраас бүдүүн бүдүүн ногоогийг чинь бүдүүн бүдүүн хэрччихсэн, өнөөхийг чинь идэж чаддаггүй. Тиймэрхүү л байдаг байсан юм. Тэрийг нь үлдээд нэг...
- Д : Шөлтэй хоол байх уу, эсвэл хуурга муурга байх уу?
- Б : Шөлтэй, ер нь хуурга муурга идэхгүй шүү дээ. Тэр ч одоо байранд овоо хэдэн хүүхэд байсан байх, дөч тавиад хүүхэд байсан. Тэр хуурга муургыг чинь хийвэл... байдаг байсан байх. Тэр Шанхайн тэр одоо байгаа гурван дуганы чинь энэтээ талд нь бас нэг хоёр жижигхэн байсан юм. Тэр нэг хүүхдийн, зүгээр нэг хүүхдийн хоол хийдэг гал тогооны газар байсан юм. Тэр урд талын хавтгай чинь сургууль мургууль юм. Тэгээд тэндээс зогсож ирээд хоолоо идчихээд, зогсоод буцна. Нэг тиймэрхүү л.

Д : Та бол сургуульд ирэхээс өмнө байцаа төмс идэж байсан уу?

Б : Ёстой идээгүй. Төмс гэж зүгээр юм байдаг юм байна лээ гээд. Манай нутагт авга ах өвөө эмээ хоёр бид дөрөв л нэг гэрт байсан. Тэр авга ах л харин хэдэн төмс авчирч байсан санагддаг юм. Тэгээд яаж ч хоол хийсэн юм мэдэхгүй. Хоолонд хийвэл энэ их зүгээр юм гэнэ гэсэн гээд. Тэр артель төмс тарьдаг байсан юм. Тэгээд тэр артелийн төмснөөс л авч байсан байх. Артель бас нэг жоохон ногоо тарьчихдаг. 1 га арай хүрээгүй байсан байх өө. Манай энэ хашааны багцааны тийм дөрвөлжин газар ногоо тариад, байцаа төмс тарьдаг байсан. Харин тэнд болвол хятдууд... байсан болов уу гэж бодож байна, одоо. Тэгээд хятад монгол бас казакууд? байдаг байсан. Хуучин суурьшсан хуучин хятдууд арваад шахуу юм байсан юм байлгүй. Газар хагалах энэ тэр гээд сургуулийн хүүхдүүдийг бас цуглуулна. Одоо бодоход сургуулийн хүүхдэд буян санасан хүн байсан юм байх даа. Намсрай гуай гэж нэг өвгөн л хүүхэд бүрийн нэг нэг еэвэн, гайгүй томоо энэ багцааны еэвэн. Тэгээд жагсааж байгаад л ингээд тарааж өгдөг, тэгдэг л байсан юм. Жаахан ажил хийсний хөлс, цаад хүний болвол буянгийн ажил л байсан байхдаа тийм ээ. Энэ еэвэн авах дуртай, бас өнөө юун дээр нь очиж ажиллана.

Д : Намсрай гэдэг хүн нь хятад хүн үү, монгол хүн үү?

Б : Тэр ерөөсөө артель дээр л ажилчин хүн л дээ. Тэр бол тэр артелиас гараагүй байх, тэр еэвэн?

Д : Та нар ямар ажил хийдэг байв?

Б : Аа тэр яахав дээ. Хамгийн гол хэцүү ажилд нь тэр болгон ч очихгүй, хавар нэг газрыг нь хагалж гишгэх, хүрэээр гишгэх үндэс мүндэс тийм юмыг зайлуулж хаядаг байсан байх, чулуу шороогийг нь түүдэг байсан байх. Тэгээд л болоо л доо бидний ажил.

Д : Дотуур байрны хоол энэ тэрд хүүхдүүд цадах уу, бас арай цадахгүй юу бас. Та ямар байв?

Б : Ер нь тэгээд заримдаа өлөндүү л явна даа. Заримдаа ч гайгүй. Тэгээд л төв дээгүүр таньдаг айлаар орно. Бас нэг ороод ганц нэг хааяа эззгий мээзгий ч өгнө, нэг ааруул ч өгнө, ганц хоёр боорцог ч өгчихнө. Өнөөхийгөө тоншчихоод л тэгээд явчих энэ тэр. Тэр болгон ч ороод байхгүй. Хааяа хааяа тиймэрхүү л амьдралтай байж.

Д : Хичээл бол өглөө орох уу үдээс хойш орох уу. Хэдээс хэдэн цаг хүртэл яаж ордог байсан юм бол?

Б : Өглөө есөөс ороод тэр чинь гайгүй урт хичээллэж байсан байлгүй, дөрөв мөрөв хүртэл хичээллэчихэж байсан юм уу.

Д : Аахан, өө бас нилээн.

Б : Харин тийм. Одоо бодоход л тэр Шанхын чинь тэр доод талд нэг “Доод төв” гэж байсан юм. Тэр нь жинхэнэ Баруун хүрээ юм гэнэ лээ. Тэндээр олон айлтай, тэгээд хүүхдүүд ихэнх нь голцуу тэндээс ирнэ. Шөнө болвол, өнөө

болвол харанхуй л явна даа, дээшээ бол шуугилдаад л бөөнөөрөө тэгээд л. Орой тэгээд л нар мар жаргачихсан байхад л ирж байсан санагддаг юм. Тэгэхлээр тэр тав хүртэл шахуу болж байсан юм байлгүй ирэхэд л. Тэр хүүхэд болохлоор замдаа тоглож бариад ноцолдож бариад бас нилээн удаахан явж таараа л даа, тэр нөхөр.

Д : Самбар гэхээр ийм босоо хөлтэй самбар байх уу?

Б : Үгүй үгүй. Ханандаа хадчихсан одоо энэ зурагны хярааны л ийм хар самбар байдаг байсан юм. Ханандаа хадчихсан.

Д : Хоймор хэсэгтээ юу аль хэсэгтээ вэ?

Б : Аа яахав дээ аль нэг тал руугаа л харуулчихна, байшин болохоор хаана нь ч хамаагүй. Тэгээд нөгөө гэрэл мэрлийг нь харж байгаад л багш яадаг байсан байх.

Д : Аа гэрт бол одоо та нар ингээд л нөгөө орон дээрээ суучихсан?

Б : Өө тийм орон дээр суучихсан, самбар хойноо тэгээд л тал талаас ингээд тойроод суучихсан, ингэж хараад л ингэсхээд л.

Д : Багш бол шохойгоор?

Б : Багш шохойгоор.

Д : Та нар бол дэвтэр цаасны, одоо дэвтэр харандааны хүрэлцээ хэр зэрэг байсан юм бол, тэр үед?

Б : За тэгээд бас тийм ч халбиж цалгисан их ч байгаагүй байх. Манай үед бол арай ч нэг янз бүрийн юман дээр бичиж байгаагүй юмаа. Сонингийн зах янз бүрийн бор цаасан дээр бичдэг байсан гэж ярьдаг юм. Биднүүд бол арай тэгж үзээгүй. Ер нь тэгээд дэвтэр ном цаанаас тавьж өгдөг байсан байх. Нээх худалдаж аваад байсныгаа мэдэхгүй юм. Багш л тавьж өгдөг байсан байх. Тэгээд л дэвтэр дээр л бичнэ. Бал харандаагаар, нэгдүгээр ангид бал харандаагаар бичнэ. Хоёрдугаар ангиас чернилээр бичнэ. Чернил нь өнөө ийм шилэн сав, доошоо ийм конусан хонхортой нэг шилэн сав үзсэн үү, та нар.

Д : За, сайн мэдэхгүй байнаа.

Б : Тэгээд ийм дугаргий ийм, одоо энэ байлаа л гэхэд л ингээд доошоо энээ хүртэл ийм конус хонхорхой, тэгээд ганцхан юу үзэгний үзүүр л багтахаар тийм зайтай. Тэгээд өнөөхдөө чернилээ дүрдэг. Өнөөх нь болохоор нөгөө хазайж барихлаар конусныхаа юугаар бас хамаагүй асгаад байхгүй юм л даа, их зайлж барихгүй бол. Аятайхан ингээд эргүүлээд тавьчих юм бол тэр конусаа тойроод л ингээд байж байх. Тийм зориулалттай байсан байх. Ойчсон ч бол барагтай бол цөмөөрөө асгарчихгүй. Тийм савтай, тэгээд л өнөөхийгөө нэг даавуун уутанд хийгээд, ингээд сэнжтэй. Тэгээд л өнөөхийгөө бариад л тэгээд л явна л даа. Тэгээд л өнөө чернил дуусчихвал багш бас нөгөө ууттай чернилтэй, өнөөхөөсөө жоохон хийж өгөөд л өнөөх нь дуусчихна. Сүүлдээ хорын харандаа гээд нэг юм байсан. Тэр нь нөгөө ягаан

усанд уусна, ягаан өнгийн чернил болно. Өнөө чернилэн ягаан гэдэг шүү дээ, тийм чернил болно. Тэгээд л өнөөхийгөө бас бие биенээсээ хугархай мугархай гуйна, зорно. Зорж хийдэг тэгж л тиймэрхүү байсан даа.

Д : Тэр үед дүн тавихдаа одоо нөгөө онц муу гээд, тав гурав хоёр гэсэн тийм юм хэрэглэх үү?

Б : Тийм тийм. Тийм л дүнтэй байна. 5, 4, 3, 2 гээд л.

Д : Тэр үед чинь одоо хүүхдүүд, одоо нас жоохон ахимаг хүмүүс ярихдаа ахмад хүнээс их айдаг байсан гэсэн. Тийм байсан уу тэр үед?

Б : Өө тэгэлгүй яахав. Тэгээд ер нь л төлөв төвшин аятайхан харагдахыг л хичээнэ л дээ ер нь. Ахмад хүн явж байхад бол ер нь тэгээд гайгүй. Тэгээд нүднээс нь далд бол зүггүйтэх ноцолдох янз бүрийн юм бол гарна л даа. Тэрнийг болвол одоо хүүхэд юм болохлоор зүггүйтэлгүй л яахав дээ. Ахмад хүнээс бол айна шүү. Ер нь ахмад хүн бол ер нь жаахан эвгүйхэн яваа хүүхдийг бол загнана. Хүний өөрийн гэхгүй “Чи яасан задарсан тархи вэ! Яаж байгаа чинь энэ вэ? Ингэж явдаг юм уу. Ингэж болохгүй” энэ тэр гээд сургамжийн үг... Тэгэхлээр чинь айна шүү дээ. Хүүхэд юм болохлоороо айж л таараа шүү дээ. Хүн болгон болохгүй гээд байхлаар чинь хүн чинь бас нэг. Хүн болгон болохгүй гээд байхад чинь хүүхэд чинь одоо бас энэ чинь болдоггүй л ажиг байна гэдгийг ойлгоно шүү дээ, ер нь. Тэр ч учраараа бас нэг хүүхэд залуучуудын хүмүүжил ернхийдөө нэг төлөв төвшин тийм ээ. Бас нэг аятайхан хүнтэй нэг мэндэлчих, аятайхан биеэ аваад тийм юм сурдаг байх, сурч байсан байх. Тэгээд ер нь тэгээд гайгүй л дээ. Нээх боловсон баярлаад, уучлаарай энэ тэрээ гээд байхгүй хэрнээ тэгээд зөв л биеэ аваад явдаг байхгүй юу.

Д : Ер нь тэр уучлаарай баярлалаа гэдэг бол оросоос л одоо орж ирсэн юм шиг байгаа юм.

Б : Аа гаднаас л орж ирсэн хэрэг. Зүгээр яахав баярласан юу тохиолдсон үед бас нэг гялайлаа энэ тэр гэж хэлдэг л байсан байлаа л дээ.

Д : Баярлалаа гэж ер нь энэ чинь сүүлийн үеийн үг юм болов уу, одоо гялайлаа гэж хэлдэг байсан юм болов уу?

Б : Тийм гялайлаа л гэж хэлдэг байсан байх. Гялайлаа л гэж, өшөө байз юу билээ. Яахав дээ нэг сайхан боллоо. Тэгээд бас сайхан боллоо энэ тэр гэж ярьна л даа. Тэр чинь одоо нэг баярласныг л тэмдэг, баярласнаа л илэрхийлэж байгаа юм байна л даа. Заримдаа нэг башийж гээд нэг үг байдаг юм. Тэнд нэг яагаав башийгаад гэж, башийлаа даа энэ тэр гэж. Тэрийг би ер нь спасибо гэдэг үгнээс гаралтай үг биш байгаа гэж боддог юм. Тэгэж тэр нь санжраад (сунжраад) басийба болоод, башийба болоод башийлаа болоод.

Д : Таны үед чинь орос хэл үздэг байсан уу одоо, бага ангид байхад?

Б : Бага ангид үзэхгүй. Дунд сургуульд л үзнэ.

Д : Тэгэхэд ер нь орос хүн байсан уу, одоо энэ нутагт?

Б : Өө байхгүй. Ер нь байхгүй ээ, ер нь байхгүй. Харин нэг энэ нэг газрын зурагны улс л байсан юм болов уу даа. Хааяа нэг орос морос хамар дээгүүр энэ тэр морьтой яваад л нэг урт мод барьчихсан явж л байх шиг. Тэгээд тэр харагдаж л байна. Бид нар юун тэрүүнд ойртох, ухаан алдчихна орос явж байвал.

Д : Айх уу?

Б : Айна зугтаана.

Д : Одоо нөгөө өөр зүсний хүн болохоор?

Б : Өөр зүсний хүн болохлоор л айж байгаа юм даа тэр чинь, тэрнээс биш тэр ямар манийг айлгаж сандраах биш. Өөр зүснийх болохлоор бас нэг бишүүрхдэг байсан хэрэг л дээ. Түүнээс биш тэр болгон орос үзэгдэхгүй.

Д : Оросууд ер нь ямархуу байсан бол хүмүүс тэр үед?

Б : Яахав дээ. Орос л гэж байх. Тийм ч их буруу муу сэтгэлгээгүй байсан байх. Гайгүй. Ерөнхийдөө тэр үеийн суртал ухаалга сайн байж. Ерөнхийдөө манайхан чинь орос л гэж нэг сайхан улс, сайн улс гэж итгэчихсэн. Толгойд нь ерөнхийдөө тийм суулгачихсан болохоор тэрийг бол одоо буруушаагаад муухай хараад байх юм байхгүй байх. Тэр ч утгаараа ер нь тэгээд орос хүн бол сайн л гэж бодож явахаас биш. За энэ ч одоо тийм муу юм хийчихнэ ч гэдэг юм уу, тэр үеийн тэр ажиллаж байсан улсууд бол тийм буруу юм хийхээр улс байгаагүй байх. Ер нь тэгээд бас нэг хүний газар яваа, олон дотор яваа улс чинь бас нэг аятайхан л явна. Бас л яахав бас соёлтой эрдэмтэй л улсууд явж байгаа шүү дээ. Газрын зураг аваад тэр бол зураг зурж явсан л улс байх гэж боддог юм. Хамар дээр энэ тэр гараад л мод гозойлгоод л энэ тэр тэгээд л байдаг байсан юм. Тэгээд л хэдүүлээ ч явж байсан юм. Тийм дүр зураг л одоо сэтгэлд байх юм.

Д : Тэр үед та нарт мөнгө төгрөг гэж гар дээр бол юм байдаг байсан уу, дэлгүүрээс нэг юм хум авчих?

Б : Хүүхдэд үү?

Д : Тийм.

Б : За ер нь тун ховорхон. Яахав нэг хөдөөнөөс аав ээж энэ тэр ирэхдээрээ л нэг гурван цаас, нэг таван цаас өгнө. Тэрийг бол одоо амь мэт хадгална даа. Тэгээд л хааяа нэг чихэр жимс, сүүлийн үедээ нэг чавга мавга энэ тэр ирнэ. Аа нэг. ээвэн байна тэрнээс авна. Нэг ээвэн хорин мөнгө. Нэг төгрөгөнд таван ээвэн өгнө шүү дээ. Одоогийн ийм энэ жижигхэн ээвэн чинь. Нэг төгрөгөнд тав ирнэ, тэр чинь под (ок) биздээ. Тэгэхдээр чинь өнөөхийг чинь задлаад дөчин мөнгөөр нэг удаа хоёр, үгүй бол хорин мөнгөөр нэг ингэж цувуулж идэхлээр чинь таван цаас чинь овоо ажил болно доо тийм ээ.

Д : Дөчин мөнгөөр... аа тэгээд тиймээ хоёрыг аваад тийм ээ идчихнэ. Задгайгаар нь нэгийг нь хорин мөнгөөр зарж байдаг. Чихэр жимс гэхээр одоо орос чихэр

жимс байдаг байсан юм уу?

Б : Орос л чихэр жимс. Орос чихрүүд л тэгээд, нэг хил нь тийм олонгүй байсан байх өө. Хилийн чихир байсан юм. Тэрийг бол бид нар хамаагүй авч чадахгүй. Хүн амьтан айлчин гийчэн ирвэл өгвөл өгнө, тэрнээс биш идээд ч ер нь нэг гэдэс дүүргэх биш, нөгөө дүүргэдгээр нь тэр эзвэн танзуур манзуур тиймэрхүү л юм өгнө л дөө.

Д : Тэр үед чинь нөгөө оросын монополь гээд тийм архи байсан уу? Тэгэж дуулддаг юм.

Б : Тийм тэрнийг бол би мэддэггүй юм. Монополь л гэж ярьдаг л байсан юм. Би, чухам намайг яахад байсан юм уу үгүй юм уу. Ер нь тэгээд цагаан архийг бол авахлаар л манахуал авч уулаа л гэж хөгшчүүл л ярьдаг л байсан тэр. Анх л манахуал гэж гарч ирээд тэгээд сүүлдээ цагаан архи. Цагаан архи л манахуал гэж ярьдаг. Тэгэж л байсан.

Д : Миний дуулснаар анх орж ирж байхад нь биеийн, биенд их эрүүл мэндэд сайн энэ тэр гэж тавьж цалин малингаа тавьж өгдөг байсан гэж дуулсан. Тийм юм сонсч... .

Б : Аа тэр болвол яахав хотод л цалин авдаг газар л тиймэрхүү юм л байсан байх. Түүнээс биш хөдөө бол тийм юм байхгүй. Ойр дэлгүүрт цагаан архи ирэх нь ирнэ, авч ууна. Намайг сурч байхад ер нь арван таван цаас хавьцаа байсан байх шүү.

Д : Бас нилээн үнэтэй байж тийм ээ.

Б : Тийм арван таван цаас. Тэгээд сүүлдээ нэмэгдсээр нэмэгдсээр жаран хэдэн оны чинь үед 70-аад оны үед нэг хорин долоо найм болсон байх, тэгээд л гуч гараад тэгээд явсаар байгаад одоо дөрөв таван мянга дээр бууж байх шиг байна.

Д : Таныг одоо тэгээд бага сургууль руу явахад аав ээж ийм тарни марни уншиж бай ч гэдэг юм уу, зангиа мангиа гээд тийм юм зүүж өгч явуулж байсан уу, үгүй юу?

Б : Үгүй ээ үгүй. Ер нь тэгээд тэрнийг хийхээсээ айна л даа. Хамаагүй тэгэж чадахгүй. Манай аав чинь намын гишүүн хүн байсан юм. Тэрийгээ ч бодоод бас хамаагүй тэгж чадахгүй л дээ. Намын гишүүн хүн байж байж хүүхдэдээ сахиус махиус зүүлгэлээ гэж шүүмжлүүлнэ шүү дээ, тийм ээ. Арга хэмжээ авхуулна. Тийм учраас тэрийг бол тэгж чадахгүй байсан байх.

2 Социалист үеийн сүсэг бишрэл ба зан заншил

Д : Таны сурч байх үед хүүхдэд бас сахиус махиустай, тийм мийм нууц мууц авч явдаг тийм хүүхдүүд байсан болов уу?

Б : Ер нь мэдэхгүй. Ерөөсөө тийм юмтай юм үзээгүй. Тэр ч одоо тэгээд сүм хийд нь ороогдоод нилээн хэдэн жил болчихсон, лам нарыг тархай нэг (хаа сайгүй) баривчлаад маривчлаад, янз бүр болгочихсон айлгачихсан. Тэгээд

тэр үед чинь болвол нилээн айдастай, бурхан шашны юугаар болвол айдас ихтэй болохдээр хамаагүй тийм ил юм хийж чадахгүй л дээ, тэр бол тийм нөхцөл байгаагүй байх.

Д : Айлууд ер нь бол бурхан, айлд ороход бол ер нь бурхан шүтээн гэсэн юм бол ер нь бол харагдах уу, яах вэ?

Б : Байна аа, бурхан бол байсан. Айл болгон бурхантай байсан. Тавиад, тавин хэдэн оны үеэс л бас нэг бурхан мурхнаа далд хийлгэх, айлгаж ичээх ажил гар ч л байсан байх. Тэгээд зарим нь далд хийсэн байх. Зарим нэг нь ч хийгээгүй байж байгаад тэгээд л яасан байх даа, өнгөрсөн байх.

Д : Бурхан шүтээнтэй юм чинь тэгээд л нэг зулын хорин таван ч юм уу, тэгээд тэр нэг дүйцэн өдрүүдэд тэгээд тахидаг л байсан байх даа бодвол?

Б : Өө тэгэлгүй яахав, тэр чинь гэртээ болвол бас. Хар гэртээ хаан бор гэртээ богд гэдэг чинь болно шүү дээ, тиймэ ээ. Тэгээд л хүн байхгүй тийм дүйцэн мүйцэн өдрүүдээр чинь айл болгонд ямар төлөөлөгч сууж байх биш. Тэнд чинь тэгээд л зулаа өргөнө. Бас ч одоо ахмад насныхан бол цөмөөрөө л нэг амандаа хэлэх юмтай, уншдаг уншлагатай, тэрнийгээ уншчихна шүү дээ.

Д : Тэр үед одоо бол лам хувцастай хүн байхгүй байсан байх даа?

Б : Байхгүй ёстой байхгүй, лам дээл өмсчихсөн хүн байхгүй.

Д : Артельд ажилдаг лам нар бол одоо үсээ ургуулчихсан байсан уу, эсвэл зүгээр халзан л тийм л?

Б : Зүгээр яахав үсээ хусуулчихаад л тэгээд л явж байна. Халимаг малимаг тавихгүй.

Д : Зарим нь эхнэр хүүхэд авчихсан?

Б : Аа тийм эхнэр хүүхэд авах нь аваад. Тэгээд л ерөнхийдөө хар болчихсон.

Д : Одоо тэгээд бурхан шүтээнээ тахиулахад бол урьд нь лам байсан хүмүүсийг бас залж авчирч юм эд нар уншуулдаг байсан юм болов уу, яадаг байсан юм бол?

Б : Бас нууцаар авчирч уншуулна. Нууцаар авчирч юмаа асууна. Юм болохгүй байнаа гэхэд чинь би яагаад байна юу болчихов энэ тэр гээд асуух юмаа бол бас асуух гэсэн хүнээсээ очиж асууна. Бас багш байлгүй яахав тэр чинь тийм ээ. Тэрнээс чинь бүх хүний толгойг угаагаад, өмнө шинэ тархи хийчхэж байгаа биш тийм ээ. Цөмөөрөнд нь л сүсэг бишрэл болвол байж л байгаа.

Д : Овоо мовоогоо тахина гэсэн юм байсан болов уу тэр үед?

Б : Тэр үед байгаагүй. Овоо тахиж бол ерөөсөө байхгүй. Одоо энэ ерөн хэдэн оноос л эхэлж байгаа юм. Дээх нь бол тахиж л байсан гэсэн, тахидаг байсан гэсэн. Тэгээд тэр уламжлалыг саяхнаас л эхэлж байгаа юм. Түүнээс биш маний үед болвол тийм ойлголт байхгүй. Зүгээр л хөгшин улс ярьж байгаа нь, овооны наадамд очиж барилдаад түрүүлчихээд бас их бяргай болчихсон юм шиг санагдаж билээ ч гэж байх шиг. Овооны наадам дээр тэрүүнтэй барилдаад ойчлоо ч гэх шиг. Овооны наадмын дурсамжууд зөндөө л дөө.

Тэнд тэгэж ингэж морь нь уралдаж түрүүлсэн, овооны наадам дээр ч гэж байх шиг дурсамж болвол их л дээ. Зүгээр маний үед бол овоо ерөөсөө тахиагүй. Овоо тахидаг юм байна гэдэг ойлголт бол байна, чухам яаж тахидаг яадаг ийдэг, бүү мэд тийм л байсан.

Д : Артельд бол лам нар ажиллана, бас хятдууд ажиллана. Өөр бас хүмүүс ажилладаг байсан болов уу?

Б : Аа яахав эмэгтэй улс бас байсан байх. Зүгээр гар оёдол, цагаан ултай гутал энэ тэр хийдэг эмэгтэй улс байсан. Сүүлдээ зөөлөн оёдол моёдолтой болсон байх. Шанхынайн артельд ер нь зөөлөн оёдол байгаагүй байх аа. Хатуу оёдол, тэгээд мод төмөр. Хужиртад нийлснээсээ хойш Хужиртад бол зөөлөн оёдол байсан байх.

Д : Зарим газар чинь лам нарын артель гээд бүр тусдаа байсан юм шиг байгаа юм тийм ээ, тийм байсан юм болов уу?

Б : Бүү мэд. Тэгэж л албадан байгуулагдсан байх, Шанхыайн артель болвол. Лам нарын артель гэж байгуулагдаад л, тэгээд л сүүлдээ орох хүн ороод л, хийх гэсэн хүн хийгээд л тэгээд л болсон байх л даа. Ер нь анх нь болвол тэр лам нарын артель байсан байх л даа. Тэрнээс намайг бага байхад чинь одоо энэ лам нарын артель гэдгийг чинь дуулаагүй. Тэгэж ч дуулаагүй. Тэгэхдээ тэр анхлан байгуулахдаа тэр олон лам ирдэг шиг л байж л лам нарын артель л байгуулсан байх.

Д : Та бага байхдаа ер нь лам гэж ер нь тийм хүн байдаг гэдэг гэсэн тийм юм, одоо тийм төсөөлөл эд нар, тийм юм байсан уу, танд?

Б : Байна аа. Байнаа байна, байлгүй яахав. Мэднэ. Манай дээшээ чинь бас нэг хоёр ч лам хүн байсан юм, настай. Нэг нь тэр богдын зааныг хариулдаг лам байсан юм гэнэ.

Д : Зааныг нь?

Б : Тийм.

Д : Өө за. Хүрээнд байсан байх нь байна шүү дээ.

Б : Тийм. Богдын хүрээнд байсан. Тэгээд л өнөө заан маан ч өнгөрөө биз, сүүлдээ бурхан тахил ч хэрэггүй болноо биз. Тэгээд л манай энд ирсэн хүн байгаа юм гэнэ лээ. Тэр чухам, чухам нутаг нь хаанахын ч хүн байсан юм мэдэхгүй. Бид нар Одгой л гэх. Лам хүн. Аа нэг жоохон гэртэй. Гурван ханатай гэр байсан байх даа, гурван ханатай гэртэй. Бас нэг авгайтай. Авгай нь тусдаа. Бас чинь нэг хоёр ч хүүхэдтэй байсан юм болов уу даа. Тэгээд тэднүүдийг хаяад? явдаг тийм л лам байсан юм. Манайх одоо ойрхон айл аймаг саахалт л явдаг тийм л хүн байсан юм. Сүрхий сайн хүн л гэж улс амьтан мөргөлчин энэ тэр ер нь их ирнэ ээ. Хөдөө газар болохлоор нууцаар, тэгээд л яахав хаанаас ч хамаагүй энэ лүү л, угаасаа энэ руу даваад ч хамаагүй тэндээс ч ирнэ. Энд тэндээс их ирнэ. Энэ зүүн талаасаа голдуу их ирнэ. Тэгдэг л байсан. Голын хойд талд (Орхон гол) биднүүд багш шавь л

байсан, бас нэг мундаг лам байсан. Тэгээд бас л мундаг лам байсан байх ямар ч байсан. Тэгээд л одоо оргож босож тэгсээр яваад л гарчихсан л гэдэг юм (шорон). Тэгээд сайн болоод л толгой мултарч байсан байх. Ер нь их мундаг эрдэмтэй хүн гэж ярьцгаадаг байсан юм.

Д : Танайд бурхан шүтээн гэж байсан уу, таны бага байхад?

Б : Аа манайд аа... Яахав дээ, нэг тийм янз бүрийн гуулин шармал мармал тийм бурхан байгаагүй, зүгээр бурхан байсан даа. Нэг нь юу билээ дээ, хоёр тийм зурмал бурхан байсан.

Д : Тэгэхэд бол танай аав ээж бол намын гишүүн байсан, тэгэхдээ л бурхан тахил нь байсан л юм тийм ээ?

Б : Байж л байсан. Ер нь нээх нууж бариа ч үгүй тэгээд л ер нь байсаар байгаад яасан юм болов уу даа. Сүүлдээ нэг улс амьтан яагаад байхлаар нь бас нэг авдрандаа хийсэн юм болов уу.

Д : Тэр үед тэгээд зул эд нар бас гэртээ?

Б : Аа өргөнө өө өргөнө.

Д : Өргөх үү?

Б : Зөндөө л өргөнө л дөө.

Д : Судар ном байсан болов уу?

Б : Яг манай аавынд судар ном нээх байгаагүй юм аа. Зүгээр л анхны... жижгэвтэр ном байсан, энэ дүүгийнхээр рүү явдаг юм болов уу даа. (дүүгийнд байдаг юм болов уу). Өнөө монгол Доржзодов (Sanskrit: Vajracchedika sutra Мон: Очроор огтлогч)... байсан тэрийг нь би авсан. Тэгээд бас нэг Иш үзүүлсэн (ирээдүйг зөгнөсөн)... судар гээд бас нэг монгол жижигхэн ном, Богдын лүндэн (Богдын ирээдүйг зөгнөсөн тухай ном)... тэрнийг нь би авсан. Өөр нээх ч сүрхий ч нээх олон ч юу байгаагүй байх.

Д : Танай аав бас намын гишүүн болохлоор нэг, гаднаа харахад бол нэг сүсэг бишрэл бол нэг харагдахгүй юу?

Б : Харагдахгүй нууц.

Д : Ер нь сүсэг бишрэлтэй байсан юм болов уу?

Б : Аа ер нь бас хоосонгүй л дээ, тэр чинь. Бас нэг нууцаар ном уншуулчих, овоо мовоо дээр очоод ном уншуулчихна. Аа гэртээ нэг “Дөрвөн гэлэнгийн гүнцэг (хоол)өнцөг” гэж ярьдаг байсан юм. Шашны нэг тийм... дөрвөн гэлэн гээд л ном уншуулдаг л ажил байсан юм байна л даа. Тийм юм бол ер нь хийлгэдэг л байсан даа. Жилд ер нь өнжихгүй тэгээд. Заримдаа ч Шанхын хүрээн дээр очоод хийлгэчихнэ. Дөрвөн хүн цуглуулчихаад, нөгөөдүүлийг чинь нэг гэрт цуглуулчихаад, ном уншуулаад л тэгээд идээ будаа тэгээд л хийчихдэг байсан. Тэр бол нууц л явахаас, өөрөө болвол намын гишүүн. Нээх их хувьсгалч... байх... байхгүй? Тэгэхийгээд л яахав намын гишүүн гээд л явж л байсан байх л даа. Ер нь тийм л байсан даа.

Д : Удирдах ажил хийдэг... байсан уу?

Б : Үгүй үгүй малчин. Цэргээс халагдаж ирээд багийн дарга, нөгөө Шанхын хоршооны дарга энэ тэр нэг хийж байгаад, өөрөө ч дургүй байсан юм уу яасан юм, тэгээд хөдөө гараад тэгээд мал дээр малчин болоод.

Д : Танай ээж бол ийм тарни марни танд зааж өгөөгүй юу?

Б : Үгүй үгүй. Ер нь манай ээж аав чинь ер нь тэгээд надад нээх ном зааж өгөөгүй юм шүү дээ. Би сургуульд суухаасаа өмнө энэ тав зургаатай, зургаатай мургаатай байсан юм болов уу өвөөгийн дөхөө л байсан. Тэгээд өвөөгийн эмээ маань л дарь эх зааж өгөөд, нөгөө нэг дунд нь оруулж өгч байгаад. Тэгээд гүйцээж чадаагүй л цээжилчихсэн л явсан ухаантай байгаа юм, хагас тарни. Өнөө сургуульд суугаад л жинхэнэ улаан хувьсгалч болчихгүй юу. Тэгээд мартчихсан.

Д : Төвдөөр цээжлэсэн үү, монголоор цээжлэсэн үү?

Б : Төвдөөр.

Д : Та эмээ өвөө дээрээ нилээн их дотно?

Б : Тийм. Эмээ өвөө дээрээ өссөн. Арван дөрөв хүртлээ эмээ өвөө дээрээ байсан. Тэгээд сүүлд нь төрсөн гэртээ очиж эрийн цээнд хүрсэн ухаантай. Арван дөрөв тавтай л төрсөн гэртээ очсон байх даа.

Д : Эмээ өвөө бол одоо бурхан тахил одоо тийм юм шүтэж ер нь хийх үү?

Б : Аа байна, байна. Манай өвөө ч бас нэг монгол бичигтэй байсан юм шиг байгаа юм. Өө нэг сан ман тийм юмаа бол нэг монголоороо уншчихдаг. Өөрөө цээжтэй. Цээжээрээ л уншчихна. Номоо ч нээх хараад байх биш. Өөрийнхөө юмыг өөртөө тэгээд. Хоёр гурван бурхантай. Ер нь бол тэгээд төрийн хар хүн. Лам мам болж яваагүй. Тийм л хүн байсан байна лээ. Гээгтэй, тав гээгтэй.

Д : Нөгөө урд?

Б : Тийм урдуудаа халзан. Тэрнээс хойш гээгтэй, гурваар сүлжээд, үзүүр дээр нь сураар нь зангидаад л годойтлоо хойш нь чулуудчихна. Тийм л хүн байсан юм. Бас нэлээн эрт нас барсан. Ер шахаж байж өнгөрсөн байх. Наян долоо молоо хүрсэн юм уу. Морьноос ойчоод. Уг нь моринд их дуртай хүн байсан юм гэсэн тэгээд. Далан хэдтэй мориноос ойчиж гэмтчихээд. Тэгээд одоо бодоход энэ сүүжний өнөө ордог нөгөө бондгор яс, тэрүүгээрээ л хугарсан байсан юм шиг байгаа юм. Тэгээд ямар ч юу байхгүй тэгээд л, ер нь ер шахсан даа. Хориод шахуу жил хэвтэрт байж байгаад, тэгээд асаргаа сувилгаа сайтай байсан байх даа.

Д : Тэр үед одоо эмнэлэг ямархуу, одоо энэ одоогийн оросын анагаах ухаан орж ирсэн байсан юм уу, эсвэл лам нар бас ингээд л хүн амьтан үздэг байсан болов уу, яадаг байсан бол?

Б : Анагаах ухаан орж ирсэн, орж ирэлгүй яахав. Сумын эмч гээд бага эмч байна. Тэгээд ер нь сумын эмч л ирнэ л дээ. Түүнээс за яахав төвд эмнэлэг уламжлалт эмнэлэг бол мэддэгүүд нь ганц нэг юм хийлгэдэг л байсан байх.

Тэр бол тийм ил биш, нууц л хийнэ л дээ. Одоо ард түмнийг мунхрууллаа гэнэ шүү дээ. Тиймэрхүү л ажил.

Д : Талх эд нарыг бол талх, талх бол одоо сүүлд л орж ирсэн үү?

Б : Тийм ээ. Талх бол яахав тавь, тавин хэд оны үед бол талхыг иддэг мэддэг болчихсон байж л дээ. Тавиад оны үед арай төв суурин газар, манай Шанх дээр бол арай жижиг газар болохлоороо бас нэг талх барьж байсан юм болов уу одоо, би сайн мэдэхгүй юм. Нарийн боов моов хийдэг л байсан, артельд. Талх бариад, артелийн талх гэж байсныг би ерөөсөө санахгүй л байна. Мэдэхгүй. Хужирт энэ тэр бол талхтай л байсан. Хужиртаас бол талх ирдэг байсан.

Д : Анх идэхэд ямар, сонин уу?

Б : Аа сонин, гоё л доо тэр чинь. Нарийн боов л гэсэн үг. Одоо талх нарийн боов шүү дээ, ерөөсөө л. Тэгээд л өнөөхийг чинь зүсээд л хуваагаад л өгнө. Бас л нарийн боов л идэж байгаа гэсэн үг.

Д : Бага сургуульд сурч байхад шашин муу, лам нар муу эд нар гэсэн тийм юм ярих уу?

Б : Өө ярина, ярилгүй яахав дээ. Аа тэгээд энэ шар хар феодалууд эсэргүүний үлдэгдэл энэ тэр гээд л. Жаахан болохгүйгаа загнана шүү дээ, дарга нар. За ер нь тэгээд ажил хийхгүй одоо ингээд л ажилгүй энэ тэр, тиймэрхүүг нэг тиймэрхүүгээр л загнаж явна шүү. Яахав хүнээсээ болно л доо тэр чинь. Хүний өөрийн төрх ямар байна. Өөрөө нэг жаахан төрхгүй тааруухан хүн дарга болно гэдэг чинь бас их аюул байгаа юм, ер нь бол. Аль ч үед хаа ч гэсэн. Туршлагагай нуруутай, бас нэг юмыг бодож цэгнэдэг тийм хүн ер нь удирдагч байх надад бол одоо зөв юм. Ээ дээ тэр төрх муутай хүн гэдэг үү. Ер нь тэгээд төрийн ч дайсан ард түмний ч дайсан болчихно.

Д : Өөрийн ч дайсан?

Б : Өөрөө ч дайсан. Тэр төрх муутай, төрх муу хүн гэдэг их хэцүү. Юмний түрүүнд хашигчиж загнаад л.

Д : Артелийн лам нарыг бол лам нар байсан гэж мэддэг л байсан байхдаа тэ, та бага байхдаа бол?

Б : Өө мэдэлгүй яахав.

Д : Тэгэхлээр тэд нар одоо лам нар гээд дургүй байх уу, тэр хүмүүст?

Б : Үгүй үгүй тэгэхгүй л дээ тэр чинь. Яахав дээ тэр чинь нэгэнт орон нутагтаа байгаа лам нар, ах дүү амраг садан нь ингээд нийлээд л ингээд л хөдөө гадаагүй ингээд байгаа. Ижий ахайнууд шүү дээ тэр чинь. Тэгэхдээ мань мэт бол одоо “Аа энэ муу лам нар феодал энэ тэр” гээд л тэгэж үзэх юм бол маньд бол байхгүй шүү дээ. Тэр гуай энэ гуай л гэж явахаас. Уул нь лам байсан юм одоо гарчихсан юмю тийм л сэтгэхүй байхаас биш. Тэрийг бол үзэн ядах тэр, ангийн талаас нь тэр үзэн ядах тиймэрхүү асуудал бол байхгүй шүү дээ. Ерөөсөө л байдаг л ах дүү нар, таньдаг л нутгийн өвгөд

хөгшиг гэж үзэхээс биш тэрнийг бол тэр ангийн дугаараар харна гэж байхгүй.

Д : Зарим лам нар нь одоо ганц биеэрээ явсан, тийм лам нар эд нар байдаг байсан болов уу?

Б : Өө зөндөө байлгүй яахав. Авгай аваагүй тэр чигээрээ явсан улсууд байж л байна. Зөндөө л хүн байна.

Д : Миний сонсоход нөгөө нууцаар номоо уншаад, хүнд мэдэгдэхгүй гээд харанхуй шөнө мөнөөр л уншдаг байсан гэсэн, тэгдэг байсан юм болов уу?

Б : Тийм тийм, тэр үнэн. Тэр үнэн. Шөнө хаалгаа түгжчихэж, хашааныхаа хаалгыг түгжчихээд гэрийнхээ хаалгыг түгжчихээд л зулаа бариад л сангаа уугиулна. Тэгээд л номоо уншаад суучихна шүү дээ, тэд нар чинь бол. Тэгээд л тэр өдөртөө ямар унших вэ, тэр чинь нэг уншлага гэж байгаа юм. Тэр нь өдөр болгон уншиж байх тийм, багшаасаа авчихсан тийм ном байдаг юм шиг байна лээ. Тэрийгээ бол өдөр болгон уншина. Тэгээд л өнөөхийгөө гүйцээж уншихын тулд тэгээд нөгөө өдрийн хөл, хүн амьтны хөл тасраад ингээд амралтын цаг болохлоор чинь өнөөхийгөө уншаад суудаг байна л даа. Манай энэ Шанхын хүрээнд тэр үед чинь лам нар бас өдрийн хурал гэж өдөр тутам хурдаг байнгын хурал гэж байдаг юм байна. Тэрнийгээ бол ер нь таслаагүй уншиж байсан гэж ерөөсөө л сүм хийдийг сэргээхэд тэгж ярьж байсан шүү. Нэг гэртээ орчихоод л ерөөсөө таслаагүй гэж. Тэгэхээр л мундаг л байхгүй юу. Тэгээд л тэр шашны эдлэлүүд бурхан тахил эд нарыг чинь ер нь тэгээд л нилээн л авч үлдсэн байх. Өөрсдөд нь ч зөндөө л байсан байх. Бурхантай айлууд зөндөө л байдаг юм чинь тийм ээ. Тэр үеийн хийдийн юмнаас авч үлдсэн, нарийн нандин юм авч үлдсэн л юм шиг байгаа юм. Тэгээд л тэр үед чинь одоо ингээд л байгуулахад чинь, тэгээд л нөгөөдүүлийг чинь тал талаасаа авчирахад ингээд бурхан тахилтайгаа л болчихож байгаа юм. Сүйтгэсэн юм бол асар их, тоо томшгүй.

Д : Таныг бага байхад энэ сүм хийд, баруун Шанхын хүрээний туурь энэ тэр байдаг байсан байх даа тэ?

Б : Тийм. Тэр Доод төв гэдэг нь тэр доороо, одоо байгаа хийдээс энэ одоо тэр доод голын зах хавтгай дээр Баруун хүрээ гэдэг нь байсан юм. Тэр нь бол хамгийн том хүрээ нь л дээ. Тэнд болвол хичнээн ч дугана байсан юм. Одоо ингээд л хонь хариулж яваад харахад чинь олон дуганы буйр байгаа юм. Намайг сургуульд суухад тэр хойно нэг гурван суварга ингээд нураагаад хаячихсан, ингээд нэг овойж шовойсон юмнууд байдаг байсан. Тэгээд бусад дуганыг бол ерөнхийд нь ул мөргүй алга болгосон байсан шүү. Аа тэгээд л тэр алтан шармал гуулин бурхнууд энд тэндгүй л хэвтнэ. Ингээд л гар хөлийг нь тастчихсан толгойгы нь яачихсан цавч цохичихсон. Их байдаг байсан намайг бага байхад сургуульд сурч байхад. Энд тэндгүй л хэвтэж байна. Одоо бол ёстой үртэс ч үзэгдэхээ байж. Сая ерэн хэдэн оны үед нэг

бас баахан ухсан байх. Тэгээд янз бүрийн шавар баримал бурхан, бүтэн ч юм байхгүй. Зүгээр нэг ийм жижигхэн уут хийгээд зүүчихдэг, жижигхэн эд нар бүтэн олдсон л юм байна лээ. Одоо тийм мэтийн юмыг бол олсон, тэгэхдээ тэр яаж олдсон бэ гэхдээр тэр дуганыг шатаагаад газар ухаж байгаад булсан юм байна. Тэгээд тэр шатсан нуранги юунаас л улс олж авсан юм шиг байгаа юм. Тэгээд тэрийг нь одоо очоод харахад үнстэй модны хог мого, тэгээд л үнс тэгээд л тэр шавар бурхнууд чинь шатчихсан, одоо нэг ийм шавар байгаа шүү дээ. Будаг нь байхгүй болчихсон янз бүр арай том бурхныг чинь одоо гар хөл, одоо тэгээд янз бүрийн хэсэг мэсэг ингээд л тасарсан бадан мадан ингээд тасарсан иймэрхүү өөдөснүүд л байгаа юм л даа. Тэгээд цөмөөрөнг ингээд үйрүүлээд хэмхчээд гал руу чулуудаад, нүх ухаад л заримыг нь булаад л. Зарим нь ч яахав ингээд гадаа хийсч барьж байгаад л, тэгээд дээгүүр нь шороо бүрхээд л тэгээд л далд орчихсон юм шиг байгаа юм. Тиймэрхүү л. Тэгээд ер нь бол тэр асар их юм сүйтгэсэн. Ном бол одоо ерөөсөө хийсгээд хийсгээд хаячихсан шүү дээ.

Д : Тэр үед хүүхэд төрөхөд нэр эд нар өгөхөд лам эд нарт үзүүлж, одоо нэр авдаг байсан юм болов уу, одоо яадаг байсан юм бол?

Б : Аа авна аа. Бас нэг гайгүй хүнээс л очиж авна шүү дээ. Тэр чинь бас нэг сахил санваартай хуучин лам байсан сайн хүн гэсэн хүнээсээ л авна бас, арай гайгүй л гэсэн хүнээсээ л авна шүү дээ.

Аав ээж 2 болвол авдаг л... магадгүй л байсан байх. Бас тэр болгон хамаагүй өөрснөө өгөхгүй шүү... Ер нь тэгээд тэр гуайгаас л нэр авъя, тэр гуайгаар нэг сан тавиулаад тэр авчихъя. Аа нөгөө хүн хүрч ирээд л сан тавиад, чөлөөтэй гайгүй шиг ажил байхын бол хүрч ирээд л, сан тавиад нэр хайрлачихаад л яваад өгнө. Аа боломгүй шиг байвал гэртээ сан тавиад л нэрийг нь өгөөд л явуулна. Тэгээд л болоо.

Д : Хүн хөдөөллүүлэх одоо нас барахад гээд л бас, зан үйлийг нь алтан сав нээлгэх энэ тэр гээд л тийм юм болдог байсан юм болов уу?

Б : Болно. Болно болно. Тэр бол болно. Нууцаар болвол ерөөсөө тэгээд л. Тэрнийг болвол хаяагүй шүү. Алтан сав нээлгэх тэгээд зүг чиг гаргах, гаргах одоо өдөр судар цаг магий чинь одоо ер нь тэгээд хүнээс л очиж асууна. Тэгээд одоо Шанх руу л очно шүү дээ. Аа яахав хөдөөнийхөө энд байгаа э... Орхныхоо хойд талд бурханч гээд нэг тэр хоёр ламаасаа асуучихаж байсан байх. Аа тэгээд заримдаа Шанх руу явчихна. Тэгээд л байсан. Ер нь тэр болвол тэр алтан сав нээлгэх, тэр янз бүрийн юм болвол ерөөсөө хувь хүн толгой мэдээд, тэгээд тэнд аваачаад оршуулчихна гэх юм бол байхгүй. Заавал нэг тэр нь дээр, тийшээ явсан нь дээр. Заавал асуулттай хариулттай тийм л байсан байх. Ер нь одоо би мэдэхгүй байна даа, нээх тэгэж дур мэдэж яагаагүй байх. Ер нь алтан савыг нээлгэсэн л гэж ярьна шүү. Тэгэж гэнээ л ярьна. Нээдэг улсууд тэнд дотор чинь том хүрээ хийдээс тэр чинь авахуулаад

ер нь тэгээд урд чинь зөндөө л байгаа шүү дээ. Тиймээ. Зарим нь чаддаггүй юм аа гэхэд ер нь ихэнх нь чадаж л байгаа шүү дээ. Тэр бол ер нь тэгээд тасраагүй байх аа.

Д : Хүн хөдөөлүүлэхдээ одоо газар ингэж ухдаг байсан юм уу ер, нь ер нь дээхнэ үе яадаг байсан юм. Ер нь шууд л хөдөө хээр тавьчихдаг байсан юм уу?

Б : Хээр тавьчихна. Ер нь ухдаггүй. Ил л тавчихна. Тэгээд л ил тавьчихаад л.

Д : Хэдий үеэс одоо ингэж яадаг болчихсон юм бол?

Б : Энэ чинь ер нь тэгээд нэг тавин хэдэн оны сүүлч, 60-аад оны үеэс л эхэлсэн байх. Тавин хэдэн оноос ер нь юу яах гээд л, манай энд... чинь бас нэг хүн хөдөөлүүлдэг нэг газар байсан. Тэнд хүртэл хэдэн нүх ухуулаад л, өнөөдүүлдээ хүнээ авчирч хийгээрэй тэгэж л байсан. Тэрэнд чухам юм хийгээгүй. Тэр нүх одоо тэгээд байж л байдаг юм. Тэгээд ер нь тавин хэдэн оноос л эхэлсэн ажил. Тэрнээс өмнө бол ер нь тэгээд л... Намайг сургуульд байх үед бол ер нь л задгай даа. Би чинь 53 онд төгссөн. Бага сургуульд тэр үед ер нь бол ер нь задгай, тэрнээс хойш ер нь тэгээд удалгүй төв газрынх нь бас далд оршуулаад. Хөдөө холхон шиг хүн амьтнаас зайдуухан нэг нь бол ил л тавчихаж байсан. Тийм л байх гэж би бол бодож байна.

Д : Тэр үед чинь хэдэн онд Чойбалсан генерал (маршал) чинь нэг цагаан сарын эхээр больдог чинь, хэдэн оноос билээ?

Б : За тэр чинь одоо 53 он байсан юм уу, 52 бил үү 53 бил үү. Яг цагаан сараар, битүүнд ч нас барсан юм уу.

Д : Харин нэг тийм.

Б : Битүүнд нас барсан. Би л цагаан сар болно гээд харьчихсан байсан. Манай ангийн багш л хойноос очиж намайг авч байсан юм. Цагаан сар болохгүй гээд л болгохгүй гээд л тийм яриа гараад л байсан. Дөнгөж цагаан сар өнгөрсний дараахан намайг авсан юм болов уу, тэр одоо. Яг цагаан сарын өдөр л дагаж л яваагүй юм даа. Цагаан сарын дараахан л явсан байх даа. Тэгээд л багийн хурал хийгээд л, тэр замд нэг багийн хурал хийж байгаа гээд л, тэрүүгээр тойруулаад л багш нар дагуулаад л явж байсан санагдаж байна.

Д : Та бол гэртээ харьчихсан, тэгсэн багш хойноос ирээд авсан?

Б : Тийм багш хойноос ирээд авчихаж байсан.

Д : Аа цагаан сар ерөнхийдөө болгуулахгүй гээд.

Б : Тийм. Тэгээд бүх айл өрхийг цагаан сар болгуулахгүй гээд. Тэгээд тэр үед нь маршал өнгөрчихсөн байсан байхдаа. Тэр хооронд багш ирж авахад бол би аль хэдийнээ ажлаа гүйцээчихсэн айлаа хэсчихсэн, өнгөрсөн байсан байх. Тэрнээс нэг яг цагаан сар хийлгэлгүй намайг аваад явсан бол бас сэтгэлд нилээн юм үлдэх ёстой. Тэгээд тэр үлдээгүй байгаа юм. Зүгээр дагаад явж байсан санагдааг байгаа юм. Тэгэхлээр гайгүй өнгөрсөн... байлгүй.

Д : Бага байхад цагаан сар болоход сайхан уу?

Б : Сайхан л даа одоо ер нь. Тэгээд цагаан сарыг чинь тоолоод хүлээнэ шүү дээ, хоног тоолоод хүлээнэ. Тэгээд ер нь сайхан л даа. Одоогоор сайхан шүү дээ. Одоо ч гэсэн цагаан сар сайхан шүү дээ. Тийм ээ. Тэгээд ер нь монголын уламжлалт үндэсний баяр, ер нь тэгээд наадмаас илүү хамгийн түрүүний баяр байх шүү. Тийм ээ. Наадам бол яахав янз бүрийн үед болдог л байсан. Яахав баярлаж цэнгэж л байгаа юм л даа. Тэгэхдээ энүүн шиг ингэж яг эртнээсээ эхлээд тогтсон өдөр сараараа явдаг баяр бол нэг л байхгүй юу. Аа дээхнэ бол наадам бол, дээхнэ бол долоон хошуу даншиг гэж болж байж. Тэр бол тэдэн сарын тэдний өдөр гэсэн тогтсон юм байхгүй, улирлынхаа байдлыг харж байгаад л зуны дэлгэр сайхан цагт, ер нь намар голдуу байдаг байсан. Аа тэр арван засгийн наадам гэдэг бас тэгэж л байж. Аа юу нь хошуу наадам гэдэг нь бас тэрнийхээ чөлөөт цагийг хараад бас наадам хийдэг л байсан. Тэгэхдээ одоо энэ цагаан сар шиг тэр дээр үеэсээ уламжлаж ирсэн биш юм л даа. Цагаан сар бол дээрээс одоо цагаан сарыг хэдэн оноос эхэлж тэмдэглэсэн юм. Одоо Чингис чинь одоо эхлээд ямар жилийн, юу билээ цагаан сарыг яагаад Бөртэ үжин дээр золголоо гээд ингэдэг биз дээ, мөргөлөө гээд. Тэрнээс л бараг эхтэй байх. Тэр Чингис хамгийн анхлан тэгээгүй бол, тэрнээс өмнө намар хийж байсан гэж ярьж байгаа юм. Тэгэхлээр намар хийж байхад бас л золгож цагаан сар болж л байсан юм. Тэгэхлээр хаврын тэргүүн сарын шинийн нэгэнд хийнэ тэдэг чинь Чингис л анх эхэлсэн юм болов уу гэж бодоод байгаа юм. Тэрнээс өмнө бол тэр намар мамар янз бүрийн цаг улиралд бас хийдэг байснаараа хийж л байна. Тэгээд сүүлд нь Чингис хаврын тэргүүн сарын шинийн нэгэнд л цагаан сарыг одоо энд л хийж бай гэж ингэж тогтоосон юм байх л гэж би бодоод байдаг шүү дээ. Тийм ээ. Тэгээд тэрнээс л хойш одоо ямар ч байсан 800 жил энийг яаж байна. Тийм ээ. Тэгэхлээр ер нь хамгийн том баяр, энэ чинь одоо онд мэнд орсны баяр, ажил амжилтаа тэмдэглэж байгаа, ахан дүүстэй уулзаж учирна, аав ижийдээ очиж золгоно, өргөнө хүндэлнэ. Тэгээд ер нь золгоно гэдэг чинь хүндэлж л яваа үг шүү дээ тийм ээ.

Д : Ёolk гээд энэ баяр одоо хэдийнээс орж ирсэн бол?

Б : Өө энэ чинь бас л тавин хэдэн оны үед орж ирсэн байх тэгээд намайг сургүүльд байхад бас ёolk тоглох нь тоглож л байсан. Багш нар өвгөн болоод л хэдэн арай нэг юу хүүхдүүд нь нөгөөн амьтан баавгай болоод л хэдэн арай нэг юу хүүхдүүд нь нөгөө амьтан баавгай туулай муулай 12 жил болгох шиг. Тэгээд хийдэг л байсан. Уулнаас хуш авчирч, залуу хуш тасдаж ирээд л. Тэгээд чимэглээд л хийнэ ээ. Тавин хэдэн оноос л эхэлсэн. Манай энд л лав тэгэж эхэлсэн.

3 Дайны дараахь үеийн ахуй байдал

Д : Дайны үеэр бол та бол, дайны үед нэг ийм бас дайн болж байна энэ тэр гэж

бага байхад бас тэр мэдрэгдэх үү, том хүмүүс ярьдаг байсан уу?

Б : Би чинь тэгэхэд 41 онд төрсөн гэхлээр чинь, 45 онд дөрвөн настай хүүхэд юугаа мэдэх вэ зүгээр. Харин өнөө нэг тусгаар тогтносныг тунхаглаж монголын бүх ард түмэн гарын үсэг зурлаа гээд л, зурсан гээд л 45 онд, тийм ээ. Тэрнийг харин муухан санадаг юм. Тэгээд улс татаж ирээд одоо би энэнээс арай, тэр бандиас арай бага байж. Энэ одоо зургаатай энэнээс арай л бага байж. Тэгээд улс ирээд л нэг юу яагаад л, тэгээд л эмэгтэйчүүд нь хуруун дээр минь бэх түрхээд л зүгээр ингээд даруулаад байсан санагддаг юм. Тэгээд би өнөөхийг харж их шохоорхож байсан юм байх л даа. Энэ бас дарах гэж байх шиг байна. Бас л хараад байна энэ, бас л ижилхэн дарах гээд байгаа хүн юм энэ тэр гээд л харж байсан нэг тийм юм л санаанд төрдөг юм. Тэгээд ер нь бол яахав дээ юм ховор байсан, Дөчин долоо, найм, есөн он хүртэл чинь тэгээд 50-иад оны үед шахуу ховорхон байсан шүү дээ. Идэж уух юм гурил будаа эд нар чинь ерөнхийдөө тэгээд одоотой адилгүй ховор ховорхон. Гурил авна гэхэд чинь шуудайгаар нь авдаг хүн ер нь ховорхон шүү дээ. Тав арван хилээр л зөөгөөд байна. Ер нь тэгээд тав гурван хилээр л, шуудайгаар өгчих тийм их гурил ч бас хоршоонд байхгүй. Айл болгон л шуудайгаар гурил авна гэх юм бол тэр бол дийлэхгүй л дээ. Тэгээд л яахав таван хил гурил, тэгээд арай чадалтай нь нэг арван хил. Тэгээд будаа нэг хоёр гурван хил. За элсэн сахар бол бараг хэрэглэхгүй, амтлаг нарийн тансаг юм бол тэр болгон хэрэглэж чадахгүй л дээ. Цагаан сарынхаа боовонд хийчихнэ. Зүгээр энгийн үед бол бас боов ч нээх хийгээд байхгүй л дээ. Нэг чадалтайнууд нь хийдэг л байсан байх. Чадал муутай нь бол тэгээд, бол боов хийх чадалгүй шүү дээ. Өнөө мал чинь бол ерөнхийдөө хүн болгонд л цөөхөн. Одоотой адил айл болгон л арав хорь л гэж ярихгүй, хоёр гурван зуугаар нь ярихгүй. Арав хорин малтай л гэнэ. Тэр чинь амьдралд хүрч ядна. Өнөөх дээр чинь албан татвар байна. Аа юу ноогдол, үс ноос хялгас, за тэгээд эвэр туурай үс нэхий цөм тоотой тэр үед бол. Аа тэрнийг чинь гүйцээх гэж хэцүү юм болно доо. Бүгдийг авна. Тэгээд хурга тугалан дээрээс авна даа. Ямааны бүх арьс ишигний арьс хүртэл авна. Бүх л малаас гарч байгаа бүх эдийг бол бараг л цөмөөрөнг нь авна даа. Аа тэгээд тэнд одоо би санаж л байна. Анхдугаар таван жилийн төлөвлөгөө гэдгээр нь юм шиг л байна даа. Юу яасан юм, малтай улс нэг хэсэг юу яагаад. Аа тэр чинь төлөвлөгөө ч биш юм, улсын намын бодлого явагдсан юм. Тэгээд анх эхлээд өнөө ноос ноолуур юундаа арай цөөхөн малтайгууд нь нэрвэгдээд байдаг байсан байхгүй юу. Тэгээд одоо өнөө мах авна бас. Танайх төчнөөн хоньтой, төчнөөн хил хонины мах, төчнөөн үхэртэй, төчнөөн хил үхрийн мах яг тоогор нь толгойд нь тогтоосон юутай тоотой. Өнөөхөөр нь үржүүлээд л нөгөө махаа нэхнэ. Аа ноос ноолуурыг ч ижилхэн. Аа тэгээд өнөөх чинь хүрэхгүй. Тэгээд хүрэхээ байх дээр чинь зэрэг одоо торгоно үгүй бол. Аа

торгоод дахиад дээрээс нь авна. За ингэхдээр чинь зэрэг өнөөдүүл ингээд мөргөлдөөд ирэхлээр зэрэг дахиад нэг хуулийг шинэчлээд эхэлчихнэ. Тэгэхлээр нь яаж байгаа вэ гэхлээр малтай иргэдийг малыг тоолоод ингээд хэд хэд таслаад, хоёр гурав таслаад групп тогтоогоод. Хамгийн дээд талынх нь болвол нэг хүнээс бол хуучин нэг хил ноос авдаг байсан бол хоёр хил болно. Аа дундах нь багасна. Тэрний доод талынх нь арай багасгаад. Аа тэгээд мал махыг бол бас тэгэж тогтооно. За тэгэхдээр чинь зэрэг өнөө олон малтай улс чинь... . Өнөө байхгүй юманд чинь юм нэхээд, тэгэхээр чинь хавчигдна шүү дээ. Аа ингээд л тэгээд л ерөнхийдөө тэр нэгдэлд орохын учир шалтгаан бол тэрнээс болоод, тэрнээс болж орж байгаа юм, гол нь малтай улс. Яагаад гэвэл өнөө албан журмыг нь дийлэхээ больсон. Тэгэхлээр ялтай мал, за энэ ялтай малнаас. Ерөөсөө тийм хэллэг гарчихсан байсан “ялтай малнаас салъя. Нэгдэлд оръё” гэсэн тийм хэллэг гарчихсан байсан. Тэгэж л. Тэгээд хамгийн эхнийх нь болохтойгоо зэрэг юу байсан юм, анхдугаар 5 жилийн төлөвлөгөө гэдэг чинь байна шүү дээ. Энэ жил манайх таван эм хонь байна тийм ээ. За ганцхан хонин дээр жишье л дээ тийм ээ. Таван эм хонь хавар хургална, таван хурга гарна тийм ээ. Аа ингээд арван хоньтой болно зөв үү. Аа тэгэхдээр зэрэг арван хонины. Ноднин намар дөхөхөд чинь намарт ордог, 9 сарын 1-нд тоолдог байсан. Тэгээд тооны байсан малыг хойтон нь ноогдол авахдаа төлтэй нь хамт ингэж авна. Тэгээд нөгөө жижгүүд нь ингээд сүйрчихгүй юу. Тэгээд арай олон малтай, арай чадалтайгууд нь болохлоороо бас тэрнийгээ даадаг байхгүй юу. Тэгээд даагаад нөгөө мал бие чинь бүтэн даагаад яваад байтал, өнөөдүүл нь чирэгдэхээрээ “Энэ муусайн баячууд ерөөсөө болохгүй нь. Эднийг гүйцээ” Тэгээд групп тогтоогоод тэгээд ялтай мал болчихгүй юу. Тэгээд ялтай мал болоод, тэгээд өнөөхөөсөө хагацахын тулд, за тэгээд нэгдэлжих хөдөлгөөн өрнүүлээд, төр засгаас одоо нам засгаас нэгдэлжих хөдөлгөөн өрнүүлээд. Тэгэхдээр чинь зэрэг орох нь орно орохгүй нь... . Уг нь сайн дурын үндсэн дээр гэж лоозогноод байгаа юм. Тэгэхдээр зэрэг сайн дурын үндсэн дээр юм бол орохгүй болохлоор хавчаад байгаа юм. За тэгэхлээр өнөө малын, өнөө ашиг шимийг өгөх ажил дээр чинь тэгээд ерөнхийдөө ноосон дээрээ ял болж байгаа юм. Жишээ л татахад одоо манайх, өөрөө амьд жишээ бол манайх байгаа юм. Манай эмээ бол ихээ малтай овоо малтай айл байсан, тэгээд ноос дутчихгүй юу. Нөгөө ноос нь яагаад ч хүрдэггүй. Аа ингээд шүүхээр орно. Шүүхэд дуудагдаад одоо шийтгэнэ дээ. Тэгээд торгоод тэгээд дахиад өнөө дутуу ноосыг олж өг. Тэрний татвар гэнэ ээ дээ. Ингээд олж өгөхөөр болоод. Аа тэгээд гурван азарга адуу байсан, тэрнээс нэг азаргыг нь лав ноосонд өгсөн.

Д : Аа тэгшитгээд тийм ээ.

Б : Тэгшитгэж байгаа юм биш. Өнөө ноосонд адуугаа арван хил ноос нэг гүү,

тарган гүү тэгээд арван хил ноос тохоод ирнэ. Тэгээд уургаа барьж очоод нэг гүү барьж өгнө. Ингэж байгаад нэг азарга адуугаа дуусгаж байсан юм. Иймэрхүү л жишээтэй. Тэгээд л өнөө ялтай мал болно. Тэгээд манай Шанхад чинь нэгдэл бас байгуулагдаж өгдөггүй ээ. Өнөө эмээ чинь одоо энэ одоо энийг нэг засаг төрд нь өгье зүгээр, больё энийг одоо юүхэв зүгээр бушуухан тэр засагт нь өгчихөөд нэг яс амрая гээд. Ингээд Шанхад нэгдэл байгуулагдаж... тэгэхлээр Хужиргад байгуулагдахна байгуулагдахна гээд. Өө тэгвэл тэр Хужирт луу чинь орьё, тэр нэгдэлд нь л орьё. Ингээд Хужирт луу орохоор болсон чинь нөгөө сумын захиргаанаас зөвшөөрдөггүй. Ингээд тарчилчихна. За тэгээд сүүлд нь яахав нэг юм нэгдэл байгуулагдаж, 56 онд нэг нэгдэл байгуулагдаж өнөө нэг хэдэн малын чинь яс амарч байгаа юм. Тийм л ажил болсон. Тэр эхний тэр байхгүй малд төдий болно гэж... өгдөг юу бол бас аюултай. Дарааны тэр групп бас аюултай. Ерөөсөө л аюулгүй юм байгаагүй. Ерөөсөө тэгээд ер нь туйлдуулаад л. Аа тэгээд түүхий эдийн үнэ бас их муу л даа. Ер нь тэр тавин хэдэн онд хил нь бол ер нь гурав дөрвөн цаас байсан юм уу, одоо би сайн мэдэхгүй юм зүгээр. Нилээн сүүлд жаран хэдэн оны үеэр есөн цаас болсон байх. Тэгэхлээр тавин хэдэн онд бол юмгүй л байсан. Ноос ноолуур эд нар чинь юмгүй шүү дээ, мах ч гэсэн өнөө албан журмаар авч байгаа юм чинь. Албан журмын ноогдол гэж бүр нэртэй бүр тэр чинь өөрөө. Бичгэн дээрээ тийм нэртэй албан журмын ноогдол. Тэр чинь ер нь тэгээд сүрхий л дээ. Тэр чинь сүүлдээ нэгдэл нийгэм болоод л, мал чинь ч яахав тодорхой тооны тоо хэмжээний малтай тэгээд нэгдэл бол хангайд тавь, говьд далан тав бил үү, завсрын бүст далан тав бил үү. Хангайд тавь байсан байх. Өрхөд нэг тийм малын юу гарсан шүү дээ, жаран хэдэн онд. Тэгэхэд л манай САА чинь өнөө улсын САА бас явж, нэгдэл биш. Тийм учраас нэгдэл САА-н ажилчин малчин ч бай нийт л харьяалагдаж байгаа арван зургаан толгой ноогдно. Тэгээд тэрнээс илүү гарвал тэгээд янз бүрийн юм авна. Үгүй бол тэр санд тушаана иймэрхүү чигтэй. Нээх тушааж бариад ч байгаагүй байх аа даа. Тэгэхдээ яахав тэгээд улсад хүн чинь амьд хүн аргатай, бас аргалаад дарах барих тийм ээ. Нэг хашаа хороонд ч хийчэх ч юм уу, нуучих нөгөө кинон дээр модоо чирээд л ирдэг шүү дээ. Тэрнээс л үүдэлтэй юм шүү дээ. Ерөөсөө тийм л ажил. Тэрнээс зүгээр байгаа малыг зүгээр тоолоод л явчихдаг байвал юу гэж тэрнийг дараад л хүн амьтнаас нуугаад ингэж явхав дээ. Тэгээд тэр чинь хэрвээ баригдвал шийтгэх гээд л торгуулна, шоронд орно, тэгээд юм юмтай л даа. Тийм л байж. Тэгээд сүүл хэрдээ ч яахав дээ, тэгээд жаран хэдэн онд намайг одоо том болчихсон ажиллаж байхад бол түүхий эдийн үнэ арай өсөх нь өсчихсөн л байсан. Тэгэхдээ юмгүй л дээ. Хил ноолуур нэгдүгээр ноолуур нэг есөн цаас хэдэн мөнгө, үнэтэй болж байна гэж ярьж байсан юм. Есөн цаас гэдэг чинь нэг тэр үеэр бол нэг, дугуй булантай цай арай авч чадахгүй. Дугуй булантай цай

арван цаас тийм л байсан. За яахав нэг есөн хил гурил авах юм. Гурил болвол нэг нэг төгрөг байсан. Тэгээд ер нь юмгүй л дээ.

Тэгээд түүхий эд ерөөсөө хойшоо урагшаа хил руугээ ээлжлээд л гараад байх болж. За яахав заримдаа гайгүй гарч байгаа байх урагшаа. Хойшоо бол бас түүхий эд бол бас ч тийм хөөрхөн сайхан (ашигтай) явуулчаагүй байх гэж би боддог юм. Ер нь хамгийн хямд үнээр одоо бас... нэг хавсрага түүхий эдийн бааз байсан юм болов уу гэж би одоо боддог шүү их дээ. Түүнээс биш тэр нээх. За яахав ээ тэтгэх нь тэтгэсэн социализм бол, бас ч соёлжуулаад монгол орныг соёлжуулсан л даа. Соёлжихын хувьд бол сайн соёлжсон. их Ер нь гайгүй. Тэгэхдээ бас тэгшхэн юм болгон дээр тэгшхэн байгаагүй юм. Манайхан л байхгүй юу даа, ээ дээ бас хэдийний тийм байсан.

4 Цэргийн амьдрал

Б :Тэгээд би 62 онд цэрэгт яваад тэгээд намар нь энэ вьетнамуудад нэг бэлгийн мал гэж өгсөн юм, хонь. Тэгээд явсан юмаа намар. Манийг явахад чинь бас яахав дээ бас, армийн улс төрийн газар, тэгээд л армийн удирдлага штабаас янз бүрийн үүрэг даалгавар өгөөд л санамж сэрэмж авахуулаад л. Тэр үед бас нөгөө хятдын улаан хувьсгал гэдэг бас эхэлчихсэн байсан байх. “Тэгээд ер нь та нар сонор сэрэмжтэй яв”. Аа тэгээд бас дээр нь бас хятад энэтхэг хоёр байлдаж байгаа юм. Тийм үе таарсан. “Та нар одоо хамаагүй явж болохгүй, сонор сэрэмжтэй яв” энэ тэр л гэж захиж л байсан. “Ер нь бол хятад орон бол хөгжлөөр их дорой, их бүдүүлэг байгаа шүү, та нар. Та нар бол тэнд соёлыг л түгээж яваа улс” гэж ингэж захиж л байсан л даа. Тэгээд үнэндээ бас ямар бид нар ямар тэр амьдрал дундуур орох биш, төмөр замаар л ингээд хонь аччихсан таваарын вагонд суучихсан л тэр тэр гээд л хүрч байгаа юм чинь. Тэгээд амьдралыг бол яаж мэдэхэв дээ,мэдэхгүй шүү дээ. Тэгээд яахав тэр юм чинь нэг юмны зах бол бас захаасаа харагдна шүү дээ. Тэгээд нэг буудал дээр буучихсан байхад чинь. Эрээн дээр л анх эхлээд очиход чинь нэг залуу хүрээд ирж байгаа юм. Цагдаа юм л даа, тэгээд өнөөхтэй жаахан юм ярьсан. Тэр бол “би монгол хүн”. Хятад уу гэсэн чинь, “үгүй ээ би монгол хүн, тэгээд намайг Намсрай гэдэг би монгол хүн”. Жинхэнэ үндэсний үзэлтэй эр байх гэж байгаа юм л даа тийм ээ. Тэгээд цаана нь тэр юу, бас цаана нь нэг Зинэн гэдэг нэг буудал дээр очиж нөгөө малаа вогоноо замаа сольсон. Тэрэн дээр байж байхад биднүүд чинь нэг цэрэг ногоон комбинзонтой, одоо хуучнаар терминал?, терминал нь арай биш танк ногоон гэж байсан юм. Хоёр төрлийн материал байсан юм л даа тэр үед. Тийм комбинзонтой байхдаа нөгөө хүмүүс чинь ингээд байж байтал, бас нэг 2 өвөр монгол хүрээд ирдэг юм. Тэр миний комбинзонд шунаж байна гэдэг жигтэйхэн. Жаахан байж байгаад л, яасан энэ бас сайн... бөс вэ гээд л. Тэгээд ерөнхийдөө тэр өмссөн зүүсэн энэ тэр нь бол ер нь сүрхий л дээ.

Ер нь хятад хүн гэдэг чинь юмыг ачаа барааг зөөхдөө дандаа мөрөн дээрээ шүү дээ. Үүрнэ ингээд барьна гэж байхгүй. Дандаа л мөрөн дээрээ ингээд л дамнуурга хийчихсэн. Ер нь хоёр мөр бол нөхөөсгүй хувьтай мөртэй хятад бол байгаагүй. Шийдэв л гэж. Алгадаад л гүйгээд байна. Арав, хорь, гуч, дөч ч байдаг юм уу? Тэр нэг хятад хүн чинь нэг формтой байсан шүү дээ.

Д : Нэг цэнхэр?

Б : Хөх даалимбан өмд цамцтай. Өөр хувцас өмсгөл нээх байхгүй байсан юм байлгүй. Нэг тийм л юм байсан юм. Тийм л байдаг байсан. Ер нь тэгээд ядмаг байсан. Тэгээд одоо тэр төмөр замын буудалд зогсоол дээр чинь, зогсчихоод л бас мал хуйгаа услана. Худгаас хувингаар ус зөөнө. Өнөөхөд чинь бас тэндээс нь хоёр гурван хүн хүч гаргаад бас туслалцуулна. Олон вагоноос нөгөө ус зөөлцнө. Тэгээд л харж байхад чинь ер нь өмссөн зүүсэн талаар нилээн ядмаг талдаа. Аа тэгээд нөгөө консерв. Биднүүд хоол унд бол хуурай хэрэглэлтэй, худгаас авчирсан усаа уугаад л цэргийн хүн чинь одоо яахав дээ. Хуурай хэрэглэл идчихнэ. Консерв боов моов тийм юм л хуурай хэрэглэл тавьчихсан. Тэгээд өнөө консерво идчихээд л өнөө лаазаа замын буудал дээр чулуудчихаж байгаа юм л даа, зогсоол дээр нь. Аа тэгээд л яг харж байхад, хэн тэр лаазыг харнав тэр хүн бол авахгүй л тал гэж байхгүй. Аа нэг өвс хонинд өгдөг өвс боосон прессний төмөр. Аа тэрийг ингээд л гаргаад чулуудчихна. Хэн л тааралдна шүүрч аваад л яваад өгнө. Тэрнийг бол дээгүүр нь алхаад юм уу хажуу тийш нь ингэчихээд явна гэсэн ойлголт байхгүй. Тэр хэрэг л болдог биз тийм ээ. Хэрэг болдог учраас л авч байгаа юм. Юм ховор л байна гэсэн үг. Тийм л байх. Тэгдэг л байсан даа. Бид нар тэр хятдын цаад Дусянь гэдэг дээр очиж хонио тушаачихаад л тэгээд л буцаж ирсэн. Буцаад наашаа 11 сарын 7-нд тэр Ухань гэж нээх л айхтар том хот байгаа болтой. Тэрний дундаар л захаар нь явж байгаа юм уу. Тэгээд одоо манайхан чинь октябрийн баярыг чинь туг лоозон, байшин болгон л тугтай байна шүү дээ. Тэгээд тийм байдаг юм байх гээд тэр хотыг харж явтал ерөөсөө ганц туг л харагдахгүй юм. Тэгээд тэр бас юутай л бас жинхэнэ улаан улс шүү дээ тийм ээ. Тэгэхэд чинь тийм туг муггүй ерөөсөө харагдахгүй л юм байна лээ, октябрийн баяраар. Ер нь л ядуу байсан. Одоо бол энэ кино минон дээрээс харж байхад хачин юм билээ. Тэр Бээжинд нэг ирэхдээ нэг гурав хоносон. Тэр “Энхтайван” зочид буудал гээд арван хэдэн давхар барилга байдаг, арван нэг хоёр давхар барилга. Тэрүүнд нэг гурав хоноод, тэр хааны өвлийн ордон, зоопарк энэ тэрийг үзсэн юмаа. Нэг өдөр нэг дэлгүүрээр, уул нь зах л байсан юм шиг байна лээ л дээ. Нүхний дэлгүүр л гэж ярьдаг юм гэж байсан, үргэлжилсэн юм. Доогуураа бол хана туурга байхгүй, бараг манай хархорины зах дагуу шиг шахуу юм. Арай үгүй шиг л байгаадаа. Нэг тийм юм руу орчихсон явж явж л, аль нэг талаараа хашаа л хамаагүй гарна, ингэж чөлөөтэй хаалганууд гэж байхгүй. Тийм юмаар нэг

өдөр тэнэж байсан. Тэгээд л харж байхад ер нь бээжиндээ бол бас арай дээр хувцас хунар, тэр тэгээд хөдөө тал руугаа бол луг л даа тэгээд (хэцүү). Тэр чинь нөгөө намар ургац хурааж явсан цаг, өвөл хурааж байгаа юм шиг байгаа юм. Өнөө гар тэрэгнүүдтэй, өнөөх дээрээ нэвсийтэл ингээд аччихсан. Тэгээд ингээд л цуваад л нэг тэргээ чирээд явж байгаа юм. Манайхан нэг үхэр тэрг хөллөөд ингээд юу ячихаад ингээд цуваад явдаг шүү дээ. Яг л тэрүүн шиг. Тэгээд л өнөөх чинь цуваад, дугуй нь тачигнаад л өнөөхийгөө тэгээд л хүлээгээд л зогсно. Тийм л байдаг юм.

Д : Хэдий хэмжээний хоньтой байсан бэ? Хэдэн толгойны?

Б : Аа нэг мянган. Манай нутгийн нэг мянган толгой хүргэсэн байх. Нэг вагон яшикэнд л нэг далан хоёроор л, зарим нь далан гурав энэ тэр гэж нэг яшикэнд хийгээд л. Хоёр хаалганы түгжээгээр нь ингээд сараалж хийгээд л, хоёр тал руу нь хонио хийгээд л. Тэр дундах юунд нь өвс ингээд таазанд тултал нь, хоёр талд нь юу хийгээд онгоц тавиад л, тэгээд өнөө өвсөн дээрээ л амьдарч байгаа юм даа. Тэгээд яахав дээ шөнө унтахдаа хаалгаа хаачихаад л унтаад өгнө. Өдөр нь болвол залуу ч байж, юм ч үзэх сонирхолтой тэр дотор сууна гэсэн юм байхгүй ээ. Хаалга өвсөн дээр нь цонх онгойлгочоод тэн дэр гараад зогсчихно. Тэгээд л юм хараад л энд тэндэх үзээгүй газар орны сонин байгаль зайгаль, тэгээд хот орон суурин хүмүүсийн аж амьдрал тийм л юм харж суух юм чинь. Бараг гэгээ орсноос хойш л харанхуй болтол, тэгээд л нөгөө хониндоо нөгөө өвсийг нь цагчихаад л тэгээд л тэрнийг л харж явах. Тиймэрхүү л явсан даа.

Д : Хэдэн хүн явсан юм бэ?

Б : Хорин хэдэн хүн. Ер нь тэгээд дарга цэрэг нийлээд гуч орчим байх.

Д : Өө за за.

Б : Нэг штаб нэг цуваа л явж байгаа юм л даа. Урд жил нь бас нэг хүргэсэн юм гэнэ лээ. Юу, мал. Хоёр дах жилд нь биднүүд явсан байхгүй. Тэр хэдэн жил ч явсан юм мэдэхгүй. Хэд хэд хүргэлээ. Жилийн хэд. Юу, Цэдэнбал дарга вьетнамд айлчлаад зуун мянган хонь бэлэглэсэн юм. Тэгээд тэрнийг л хүргэж өгч байгаа юм.

Д : Тэр ямар учиртай хонь вэ? Яах учиртай хонь байсан юм?

Б : Зүгээр өсгөх, мал болгох. Тийм л учиртай хонь.

Д : Вьетнамд та тэгээд хятад нутгаар дамжаад Вьетнам орсон байх нь байна шүү дээ?

Б : Вьетнам ороогүй. Манайхаар бол одоо хятдын Замын-Үүд юм даа тэр. Тэр хилийн наана тэр... Тэнд би хүлээлгэж өгөөд л буцсан. Тэр яагаад вэ гэхлээр урд жил нь би цэрэгт яваагүй байсан байхгүй юу. Тэгсэн манай аав багийн ахлах ухуулагч, багийн сонинг тараана. Тэгээд баахан сонин ирнэ л дээ, тэр чинь тэгээд тийм ээ. Намын “Үнэн”-гээс авахуулаад “Хөдөлмөр” “Залуучуудын үнэн”. Аа тэгээд өвөрхангайн “Хөдөлмөрийн төлөө” ингээд л

баахан сонингууд. Өнөөхийг чинь би уншиж өгнө дөө. Тэгсэн нэг сонин дээр, америкийн ямар ч сонинд ч билээ монголын зуун мянган цэрэг Вьетнамд орж ирлээ гээд бичсэн байна. Бичжээ. Тэр нэг тийм юм дөрөвдүгээр нүүрэнд, үгүй энэ нэг хөрөнгөтөн улс гэдэг ерөөсөө янзын хүүрнүүд юмаа ёстой нэг, дандаа худлаа юм бичиж байх юм. Тэрэн дээр, гэртээ хүүхдүүдтэй л одоо үеийнхэнтэйгээ яриад тэгэж бичсэн байна ингэж бичсэн байна. Тэгсэн чинь тэр сүүлд ойлгохноо юу юм. Зуун мянган хонь вьетнамд хүргэж өгөхөөр болсныг зуун мянган цэрэг гэж даваадуулж бичээд. Уул нь цэрэг хувцастай цэргүүд хүргэж өгсөн юм байна, тэр хонийг. Цэрэг хувцастайгаа явж хүргэж өгсөн юм. Тэгээд манай цэргийг харчихаад “Өө өнөө зуун мянган цэрэг гэдэг нь энэ байх нь дээ” гэж бичихгүй юу. Тэгээд даваадуулах нь даваадуулсан. Тэгэхдээ миний хувьд. Тэгээд тэрнээс хойш хойтон нь болох дээр зэрэг, биднүүд чинь бас тийм ийм цагаан даавуугаар оёсон ийм тонгороотой цагаан малгай өмсүүлчихээд, тэгээд цэргийг л нууж байгаа юм биз дээ, ухаан нь. Тэгээд бусад хувцас бас юу яагаагүй тэр чинь нээх, сүрхий яасан юм байхгүй. Бусад нь хэвээрээ тэгээд. Мэдэгдэлгүй яахав дээ. Тэгээд хөдөө аж ахуйн сургуулийн оюутан гэж хэлээрэй гээд, ингээд явсан юм. Тэгээд ерөнхийдөө нууцалсан ухаантай явж байгаа нь тэр. Тэгээд цаашаа өнөөхөөс болоод, бас өнөө цэрэг оруулна гэж бас бичигднэ гэхээс айсан юм байгаа биз. Тэгээд ороогүй наад хил дээрээс нь өгчихөөд буцсан байхгүй юу. Тэгээд тэр зуун мянган цэргийг л лав тэр санаанаас гардаггүй юм, Зуун мянган цэргийн нэг нь болж явж.

Д : Тийм байна. Их сонин юм байна. Тэр үед чинь хятдуудтай бас гайгүй харьцаатай байсан байх даа?

Б : Гайгүй, тэгээд өнөө нэг бас нэг жаахан ам муруйчихсан, эхэлчихсэн байсан. Ам муруйгаад эхэлчихсэн. Бас нэг үзэл нь нэг айгаад. Аа бас нээх ч лутгүй зүгээр. Тэгээд л тэр үед чинь нөгөө хятад, барилга дээр байсан хятад ажилчид эд нарыг явуулна, буцаагаад тэгээд л байсан үе л дээ. Ер нь тэгээд жаахан эвгүй болчихсон үе юм. “Хай Цэдэнбал муу байна аа, муу байна аа” зарим хятдууд санаа алдаад тэгэж л байдаг сан. Цэрэг дээрээ бас нэг арматур энэ тэр дээр нэг хоёр гурван хятад цөөхөн хугацаагаар л хэд хоногоор л ажил нь бүтэхгүй авчирч хийлгэж байсан юм болов уу даа. Тэгэж л байдагсан. “Аа Цэдэнбал сайн, Мао муу” гээд л биднүүд бас тэгэж л. Тэгээд тэрчээ биднүүдтэй ажиллаж байсан тэр настайвтар хижээлдүү дөч тавиад л насны улс байхдаа, хөгшин улс л байх шиг байдаг байсан. Нэг л дөч тавь хавьцааны юм байсан юм байгаа биз. Хөдөлмөрийн насны тийм л улс байсан. Тэднүүд чинь уурлаад л сүйд болохгүй. Тэгэж л байдагсан.

Д : Нэг сайн үедээ чинь бүр Мао чинь, бүр дуу муугий нь дуулдаг байсан гэсэн тийм ээ.

Б : Өө сургуулийн концерт монцертон дээр чинь дуулна. “Дорно зүгээс наран

мандлаа. Хятадд Мао Зе Дун төрлөө” гээд л хангинуулж өгнө шүү дээ. Тэр бол ер нь тэгээд дуулж л байдаг дууны нэг концерт... Одоо хүүхдийн концерт болохлоор чинь янз бүрийн янаг амрагийн хайрын дуу бол дуулахгүй. Тэгээд өөр л дуу дуулна. Тэгэхлээр л тэр нөгөө улс төрийн Ленин багш, эцэг Чойбалсан ч гэж байх шиг тиймэрхүү л дуунууд. Шүлэг ч байсан тиймэрхүү шүлэг уншина. За нэг тиймэрхүү дээ ер нь. Одоо чинь бол хүүхдүүд цэцэрлэгийн хүүхэд ч хайрын дуу дуулаад л тийм ээ.

Д : Та хотод байхдаа гандангаар орж байсан уу, орж үзсэн үү?

Б : Үзсэн үзсэн. Цэрэг байхдаа бол тэр гайгүй гандангаар орж гүйнэ. Манай үеийн чинь цэрэг бас нэг задгайдуухан, тийм танхайвтар байсан юм. Миний үеийнхэн чинь. Манай батальон бас нэг тийм нилээн танхай болчихсон анги байсан юм. Зүгээр зодоон цохион байгаагүй юм миний үед. Бие биенээ дээрэлхнэ барьна гэж байхгүй. Тэгээд л гадуур тэнээд л алга болчихдог, нэг тийм өвчтэй. Тиймэрхүү л байсан юм. Тэгээд л бас л тэр мэрийн л нэг болоод л, гадагшаа гараад л, бараг жаахан уйдаад л гадагшаа гараад л. Хагас бүтэн сайнаар энэ тэр. Заримдаа ажлаа пялна аа бас. Тэгээд алга болчихно. Тэгэхдээ орой нь ирж хононо. Аа нэг хагас бүтэн сайн өдөр бол яахав бас нэг таньдаг айлдаа хоновол нэг хоночихоод л. Тэгээд хүрээд ирнэ. Тэгээд нээх хол явахгүй л дээ тэр. Хотоор бол... хот ч одоог бодвол сийрэгхэн ч амар ч байж. Хааяадаа ордог дэлгүүрүүдтэй. Аа өнөөхөөрөө орж жаахан юм хум нүдээ хужирлана. Цэргийн хүн чинь аваад байх ч юм юу байхав. Хааяа нэг чихэр жимсхэн. Янз бүрийн архи дарс ч тэр үед уух биш, гайгүй л дээ. Пүүшиг авч татаж нээх гангарах гээд л гол нь. Тэр үед бас тамхи татдаг л үе байсан юм. Тэр хятад руу явж байж л бас нэг эх суурийг нь тавьчихсан юм. Бага байхдаа нэг саваагүйтэж аавынхаа тамхинаас нууж авч татдаг, хонин дээр татдаг л байсан. Сүүлдээ хаячихаад тэгээд цэрэг явсан. Татдаггүй явсан чинь өдрийн нэг пүүшиг нормонд өгдөг байхгүй юу, татдаг татдаггүй. Өнөөхийг нь нөгөө хятдуудад гайхуулж байгаа гэж зууж вагоны аман дээр, яшикны аман дээр зогсчихоод. Тэгээд хүн иртэл тааралдахааар өгнө. Өө чухам хятад чинь өнөө пүүшиг байхгүй. Дандаа янжуур. Энэ пүүшиг чинь болвол ерөөсөө юу юм шүү дээ, оросын л юм байна лээ шүү дээ. Тэгээд ер нь бусад оронд мэдэхгүй. Тэгээд л өнөөхийгөө өнөө, хүүхэн ч байсан дуудаад л май гэж өгнө, нэг хүн ч явж байсан май гээд л өгнө. Аа өнөөдүүл чинь сонирхоод л ингэж шагайж хараад л, нүх рүү нь хараад л, тэгээд аваад л баярлаад л. Тэгэж байгаад бас нэг жаахан морио унах тал руугаа орж. Тэгээд сүүлд ч одоо яахав дээ, цэргийн улс чинь татдаггүй байхад татдаг бас байх... Бие биенийгээ дуудаад л “чи тамхи тат май май” гээд л. Тэгээд өнөө өвлийн хүйтэнд чинь газар шорооны ажил хийж байгаа, бас дулаацах байр нэртэй юм байх. Өнөөдхдөө ороод суухдаар “чи энэнээс тат” гээд. Тэгээд дэмий яриад суухаар, өнөө л дулаацахын юунд өнөөхөөсөө ганц нэг сорж

байгаад тэгээд ерөнхийдөө бас л тамхидаад ирж байгаа юм, тэр чинь тэгэж л.

Д : Тамхи одоо оросоос орж ирдэг байсан уу? өнөө дүнсэн тамхи бол?

Б : Тэгнэ. Оросоос л орж ирнэ. Тавин хэд, тавиад оны үед хятадас дүнсэн тамхи гэж орж ирдэг байсан. Тэр нь ногоон дүнс, тэр ногоон өнгөтэй их тостой тийм дүнс байсан. Тэгээд л нөгөө гадуурх боодлынхоо цаасыг, доторх гялгар цаас эд нараа нэвтэлчихсэн тос, тийм тамхи ирдэг байсан юм. Дээр үеийн бүүр хуучуул нь болохлоороо, их дээр үеийн нь хятад дүнс гэж бас сонирхож авна. Тэгээд нилээн тийм нягтдуу тослогтой юм болоод чимхэхэд нягтарчихдаг, тийм л тамхи байсан санагдаж байна. За тагдаг л байсан байх. Зарим нь болохлоор ханиалгадаг гээд улаан тамхи татна. Тэгээд ерөнхийдөө өнөө хятад дүнснээс хөндийрөөд, бас нилээн хэдэн жил болчихсон юм шиг байгаа юм. Тэгээд сүүлд өнөө 49 онд чинь өнөө ардчилсан улс гэж хувьсгалт улс болоод хятад чинь. Тэгээд манай хоёр сайн болоод. Сүүлдээ худалдааны арилжаа янз бүрийн юм хөгжөөд ирэхдээрээ, худалдааны арилжаа болох дээрээ нөгөө тамхи мамхи янз бүрийн бараа хятад бараа их орж ирж байгаа юм, тэр үеэс чинь. Тэгээд л зөндөө хятад бараагаар л бас хангагдсан даа. Хятад торго дурдан гээд л авгай хүүхэд чинь хятад торго дурдангаар гоёно. Тэгээд ерөнхийдөө хятдын торго дурдан эд нар нь бол оросынхоос илүү чанартай гэж ярьдаг л байсан шүү дээ. Бид нар бол ямар тэрнийг мэдэх биш. Чанартай хятдын юм сайхан гэж л ярих. Түрүүний хуучин гээд бас л сэтгэл дундуур л ярих. Сүүл хэрдээ одоо бол ер нь оросын юм л чанартай шүү дээ тийм ээ.

Д : Тэгэж ярьдаг бас тийм.

Б : Тэгээд төмөр нь л гэхэд хятад төмөр бол ер нь тэгэхийгээд хугарах талдаа, хат муутай нэг тиймэрхүү л төмөр. Тэгээд л орос төмөр бол хат сайтай, ган ихтэй тийм л төмөр байдаг юм байна. Орос төмөр сайн гэж л байдаг, тийм л байдаг байсан юм.

Д : Та Гандан хийдэд хотод ороход ямархуу байсан та, ямархуу байсан бол. Тэр үед чинь одоо хурал ном хурж байсан уу, тэр үед таныг байхад?

Б : Хуралгүй яахав. Одоогийн яг л энэ шүү дээ. Энэ л маягаараа, ерөөсөө л энэ маягаараа. Аа яахав сонирхох журмаар л орох юм даа. Мөргөж бариад явахаа ч мэддэггүй, залуу ч байж. Бас нэг шашин хэрэггүй гэсэн юм энэ дотор орчихсон тэр чинь. бас их сэхүүн маягтай. Тэгээд яахав нэг орж үзчихээд л, тэгээд л тиймэрхүү л явж дээ. Ер нь одооны л одоо энэ байгаа, ер нь энэ л байгаа.

Д : Залуу, настай хүмүүс хурж байсан болов уу, залуу хүмүүс байсан болов уу тэр үед?

Б : Шашны сургууль байгуулагдчихсан байсан.

Д : Өө за.

Б : Тэгээд шашны залуу сурагчид байсан, тэднүүд чинь ордог л байсан. Настай хүмүүс нилээн байсан шүү ер нь, ер нь нилээн түлхүү. Настай улсууд л ер нь байсан. Тэгээд сүүлдээ л тэр шашны сургууль байгуулагдчихсан, залуучууд орж эхэлсэн байх, шашны сургуульд сурдаг юм байна гээд л. Чухам хэдэн онд ч байгуулагдсан юм одоо мэдэхгүй зүгээр. Шашны сургуульд сурдаг гээд л залуухан лам зөндөө таардаг. Тийм л байсан л даа.

Д : Тэр залуучууд бол гадуур бол лам хувцастайгаа явах уу, эсвэл зүгээр энгийн хувцастай л явах уу?

Б : Заримдаа л лам хувцастайгаа явдаг л байсан шүү дээ, тэр чинь одоо. Лам хувцастай явахад нь лам байна гэж мэдэхээс, энгийн хувцастай яваагий нь бол юугаа мэдэх вэ. Өмсдөг л байсан байлгүй.

Д : Далай лам анх монголд айлчилж байхад та тэр талаар мэдсэн үү?

Б : Аа сураг л дуулсан юм. Тэгэхэд чинь одоо хөдөө ч байсан даа ер нь тэгээд. Анх байтугай сүүлийнхэнд нь ч одоо би ер нь очиж үзээгүй шүү дээ. Телевизээр л харж байхад.

Д : Өвөр монголчууд ер нь монголд ямархуу байсан бол, таныг тэгээд л явж байхад?

Б : Ер нь их элэгтэй. Их элэгтэй монголд, их элэгтэй юм шиг байдаг юм. Тэгээд би монгол л гээд өөдөөс дайраад байхаас. Ер нь элэгтэй юм шиг байна лээ, тэр олон хүнтэй уулзсан ер нь элэгтэй шүү.

Д : Таны үед бол өвөр монголын талаар ямархуу ойлголттой байсан юм бэ, манайхан ер нь?

Б : Ер нь одоо Өвөр монгол одоо яахав дээ манай монголчууд, нэг тасархай нэг хэсэг нь өвөр монгол л гэж ярьдаг ойлголт байхаас биш. Аа дараа нь яахав өнөө соёлын хувьсгал болоод л монголчуудыг их хавчиж гэнэ, их сүйд хийдэг нь байх л гэж ярьдаг бичдэг л байсан. Тэр ч үнэн ч байх. Бүр роман хүртэл гарч байв. “Гишгэх газаргүй хөл” гэж хэний зохиолчынх бил ээ. Нэг тийм роман эд нар гарсан юм шүү. Өвөр монголын нэг сэхээтэн хүн... янз бүрийн нөгөө хэлмэгдэлтэнд орж тэгээд гадаадад гараад л, сүүлд нь буцаж ирж байгаа билүү дээ, нэг тийм роман байсан юм. Тэр манай монголчуудын, наана говьд гэсэн биш байгаа даа. Тийм “Гишгэх газаргүй хөл” гэж ном далаад оны үед гарсан байсан юм аа. Тэгээд уншиж л байсан одоо мартчихаж. Манай нэг, би чинь гурилын үйлдвэрийн ажилчин байсан. Тэгээд тэрүүгээр ортол нэг залуу ном уншаад сууж байна. Манай оны цэрэг, бас нэг мастер хийдэг өнөөх өрөөндөө сууж байна. Ном уншаад сууж байна, өнөөх маань. Ямар ном вэ гээд үзсэн чинь тэр ном. Тэгэхдээр нь булааж аваад “Хөөе чи наад ном, би уншиж байна” “Үгүй үгүй би авчирч өгнө” гээд. Тэгээд л шөнжөнгөө уншаад л, нойргүй уншаад л. Өглөө ч найм ч болсон би ч дууссан. Тэгээд нэг унд уугаад л аваачиж өгч байсан юм.

Д : Тэр үед ном их уншина биз.

Б : Аа би их уншдаг байсан. Ер нь номноос л салдаггүй. Ном нилээн уншдаг. Гайгүй ч олон номтой болсон. Сүүлдээ нөгөө хөдөө гараад, төвд орхичихоод явчихсан., тэгээд үрэгдээд алга болсон. Гайгүй гайгүй аятайхан аятайхан роман моман янз бүрийн юм бол. Гайгүй овоо номтой болчихсон байсан юм аа, хэрэндээ. Ажилчин хүний хувьд болвол дажгүй л номтой болчихсон.

5 Соёлын довтолгоон

Д : Дээхнэ чинь нэг соёлын довтолгоон гэж нэг бол луу?

Б : Өө тийм. Тэр чинь одоо яахав дээ. Тэр бол зүйтэй ажил байсан юм.

Д : Тэр ямар учиртай юм байсан юм?

Б : Тэр яахав өнөө хоцрогдлоос л гаргах. Ерөнхийдөө бас хоцрогдмол л байж л дээ, манайхан чинь тэгээд л. Одоо гэр орныг нь будуулах, тэгээд одоо тоостой хиртэйгийг нь угаалгах тиймэрхүү л ажил л даа. Тэр бол ер нь зөв зүйтэй ажил байсан юм. Тэр бол ер нь их хэрэгтэй ажил байсан байх гэж би боддог. Тэгээд л одоо зарим бүдүүлэгдүүхэншгүүд нь бол явдалтай л байсан л даа, тавин хэдэн оны үед болвол. Тэгээд л тэрийг л арилгах соёлын довтолгоо гэж явуулж байсан. Тэрүүгээр болвол бас нилээн, айл амьтан бас нилээн цэвэршиж, нилээн бас өнгө зүс орж аятайхан болсон юм шүү дээ. Тэр бол аргагүй хэрэгтэй ажил. Тэгээд л одоо намайг бага байхад одоо, би өвөө эмээ хоёртойгоо байсан гэж ярьсан тийм ээ. Тэгэхэд чинь манай өвөө эмээ хоёр чинь л одоо анхлан айл гэр болоод л барьсан гэр тийм ээ, тэрэнтэйгээ л байгаа байхгүй юу. Тэрийг шинэчлэнэ барьна гэсэн тийм ойлголт байхгүй. Шаардлага байхгүй. Барьж болж байна, сууж болж байна. Тэгээд өнөө ил галтай байсан, зуух байхгүй. Тэгэхлээр өнөө юу гэдэг чинь, гэр гэдэг чинь утаа идээд, идсээр байгаад одоо тэгээд унь энэ тэр чинь одоо нүүхэд чинь болвол. Одоо ингээд унийг ингээд өлгөнө авна, тэгэхэд чинь одоо утааны чинь одоо юу гарт наалдаад, ингээд шав шав гээд наалдаад байна шүү дээ. Тэгтлээ одоо утаатай байдаг, бүр ийм өнгөр тогтчихсон утаа нь. Аа тэгээд л өнөө юу чинь, эсгий цаваг гэж ярьна, дотуурх. Тэр чинь дарайсан өнгөр тогтоод утааны. Тийм л байдаг байсан байхгүй юу. Тэгээд тэрнээс салгахын тулд тэрнийг чинь угаалгаад л, тэрийг чинь хусуулаад л угаалгаад л. Тэгээд чадалтай нэг нь будаг зос түрхээд л, чадалтай нэг нь будаг түрхнэ. Тэгэж байгаад ахин ахисаар байгаад бүр буддаг болоод л, өнөө цаваг дээвэр чинь бас нэг угаагдаад бас нэг арай хөнгөрнө. Тэгээд бас нэг дагаад аятайхан болж ирнэ. Тэгээд дотуур цагаан бүрээстэй болно, гадуур цагаан бүрээстэй болно. Тэгээд бас яах вэ тэгээд амьдрал дээшилж л байгаа юм, дээшлээд л байгаа юм тэр чинь. Хэдий тийм ядмаг юм шиг мөртлөө бас дээшилж л байсан. Тэгээд дээшлээд л байгаа. Бас чадалтайгууд нь бэржээнхтэй болно. Анх эхлээд нэг хэсэг бэржээнхэн бүрээс гарахаас өмнө чинь, манай энд чинь хангай газар болохдоороо хуш ингэж нимгэхэн зүсээд,

за нэг санж хагас (1.5см) байсан юм болов уу. Тиймээр зүсээд нэг банзан туурга гэж нэг гэрийнхээ гадуур нэг гэрээ тойруулаад... босгоод ингээд дөрвөлжлөөд тагчихна. Бороо шорооноос нэгдүгээрт бүрээсээ хайрлаж байгаа юм. Хоёрдугаарт бүрээс муутай, тийм бүрээстэй. Тэгээд банзан туурга гэж нэг тийм юм нэг хэсэг хэрэглэсэн юм. Жаран хэдэн он хүртэл хэрэглэсэн байх. Жаран дөрөв таван оны үед тэгэхийгээд л тэр бол алга болсон байх. Тэгэж л байсан юм. Тэгээд амьдрал дээшлэхийн хэрээр, бас хүнийн чинь амьдрал жоохон жоохноор. “Тунгалаг тамир” дээр гардаг шүү дээ. Хэний гэр анхлан бор байснаа, сүүлдээ хойд дээвэр нь нэг цагаан болоод, сүүлдээ гадуур нь цагаан болоод. Тэр тиймэрхүү л ерөөсөө нэг тийм л ажил болсон юм шүү дээ. Тэгээд л одоо аяга шаазангаа угаадаггүй хөгшин настай, тийм жаахан бүдүүлэгдүү тийм улс чинь бол тэр болгон аяга шаазангаа угаадаггүй байсан бол угаалгадаг болгоод. Тэгээд л ерөнхийдөө дотуур хувцас цамцгүй байсан бол цамцтай болгоод, дотуур өмдгүй байсан бол өмдтэй болгоод... Аа тэгээд хөнжилтэй болохлоор нь цагаан даавуутай болгоод л. Биднийг соёлжуулсан ажил юм шүү дээ тэр чинь. Бас их үр дүнгээ өгсөн юм. Тэгээд л тэрүүгээр чинь бас нилээн соёлжиж бас нилээн аятайхан болсон. Сүүлд нь яахав тэгээд жараад он хүртэл явсан даа, тэр соёлын довтолгоон чинь. Бас нэг ном унших. Тэгээд сүүлдээ арай гайгүй болоод, нөгөөдүүл нь гайгүй болоод ирэхдээр зэрэг соёл тал руугаа ороод ном уншуулдаг, уншсан номоо хөтөл, тэмдэглэл хийлгэдэг болоод. Нэр мэрийг нь бичүүлдээ ингээд, жагсаагаад ингээд бичүүлдэг шиг маягтай болгоод, өнөөхийгөө бас шалгаж үзэх маягтай тэгээд. Жаран хэдэн оны чинь үед бас нэг тиймэрхүү болсон юм. Тэгээд хүн болгон ном уншдаг, ийм ном уншсан гээд. Тэгээд бол болж л байгаа юм, тийм ээ. Шалгаад л тэр чинь бас, хүчээр хүч хэрэглэж байгаа ч гэсэн бас зөв л асуудал л даа тэр чинь. Хүний толгойд юм орно. Ном уншсан хүн гэдэг чинь бас юухан хийхэн ойлгохтойгоо болно. Номны цаад наад учрыг их юм өгнө шүү дээ. Аа тэгээд тэр үеийн чинь уран зохиол бол ерөнхийдөө тэгээд л нэг л юманд сургасан, ахуй амьдралд сургасан, сайн мууг заасан сургасан тиймэрхүү л ажил байлаа шүү дээ. Тэр бол ер нь тэгээд бас зөв талдаа, хүний хүмүүжилд бол их хэрэгтэй л юм. Аа тэгээд тэр янз бүрийн буруу зөрүү юмыг кино минонд гаргахгүй, жүжиг шийнд гаргахгүй. За тэгээд өнөө алаан хядаантай янз бүрийн юм чинь бол бас...

“Аа сайхан ёстой сайхан сайхан алж байна”. Тэгээд бас хүний энэ рүү зохих ёсоор бас буруу юм орж л байгаа. Зарим нь, нэг хэсэгтээ ч ер нь, одоо кино үзээд тэрнээсээ болоод хийж гэнэ гээд, бас нэг хэсэг радиогоор ярьдаг л байлаа. Одоо харин тэгэхээ болчихож. Тэгснийг нь хэлхээ болчихсан юм уу, үнэхээр болчихсон юм уу хэн мэдэх вэ, бүү мэд шүү дээ.

6 Ардчилсан үйл явц

Д : Наяад оны сүүлд тэгээд ерээд оны үеэр ардчилал гарах үед та юу бодож байв. Энэ ер нь хүмүүс ер нь юу яриад, та ер нь юу гэж бодож байв?

Б : За даа анхлан би нэг төв ороод ирсэн. Тэгсэн чинь телевизтэй айлд ороод, тэгсэн чинь телевизээр гарч байна. Анхны нэг ардчилсан холбооны анхны нэг цуглаан болох гээд. Ер нь л хамгийн анхны шахуу юм аа даа. Нилээн л эхний юм. Нэг тийм юм яриад. Тэгээд тэр манай үйлдвэрийн дарга байсан юм бас. “Үгүй энэ одоо ямар хачин юм бэ, хаашаа юм бэ”. Би чинь ер нь одоо тэгээд арай л, бас л гайхаад “Биднүүд чинь ардчилсан улс биз дээ, манайх чинь ардчилсан улс гэж ярьдаг шүү дээ. Ардчилсандаа бас ардчилсан гэж яриад байдаг, хаашаа юм”. Би бол ингэж бодож байлаа. Тэгээд тэрнээс түрүүнд нь бас нэг сэхээтэн залуугаас, бас тэр залуу болвол бас ардчилсан уур амьсгал орчихсон л хүн явсан юм байна лээ л дээ. Уул нь манай үйлдвэрт бас дарга эд нар байсан механик байсан хүн байгаа юм. Адаг сүүлд нь энэ хотод том алба хийгээд явдаг болчихсон байсан юм. Ерөнхийлөгчийн зөвлөх болчихсон байх аа, Энхбаярын үед сая, тэгээд одоо буугаа биз. Одоо ч тэтгэвэртээ гарч байгаа байх. Тэр хүн л “Үгүй энэ одоо ер нь тэгээд тахиж шүтдэг юмыг нь хаачихаад, ямар ч хүнд одоо ямар нэг итгэх итгэл байхгүй ийм болчихоор одоо энэ янз бүрийн ийм юм гараад байна. Бас нэг хэрэг төвөг гардаг л байсан даа. Тэрнээс болж тэгээд бие биенийгээ биширч шүтдэг тахиж, бас энэ нь болдог энэ нь болохгүй гэсэн нэг тийм юмтай байвал. Энэ бас харваас гайгүй болох л ёстой юм байгаа байх” гэж ярьж байсан юм. Тэгээд тэд бас сэтгэлд ойрхон, тэр л болох нь... бодогдож л байсан л даа. Ер нь бол улс янз бүрээр л үзэж байсан. Зарим нь бол хувьсгалт нам... Энэнээс сайхан юм гэж хаа байхав, зарим нь болвол “Аа хувьсгалт нам ч хэрэг байхгүй, манай өвөг дээдсийг хядсан алсан буудсан. Аа маний малыг хураасан ингэсэн” гээд л ийм л. Тэгээд цөмөөрөө сурсан зангаараа хэр байдлынхаа хэмжээгээр л тавин толгой мал үлдээгээд л, хамгаа малаа туулгаад л явуулчихаж байсан. Тэр бүхэн бол малчин хүнд бас л том цохилт л байхгүй юу, тийм ээ. Тэгээд яахав тэгээд л эргүүлээд л өнөө малаа аваад л маллаж л байгаа юм. Аа тэгээд нэгдлийн хөдөлмөр өдрийн хөлс гэж авна. Тэр юмгүй л дээ. Ер нь хаашаа ч юм авч байсан юм. Тэр нь тавь жаран цаас. Тэгээд нилээн олон молныг авсан нь зуун хорь морь авсан юм уу. Би одоо нэгдэлд нээх удаан жил мал малласан. Хамаг мал өгөөд тэгээд САА болсон доо. Нэг жил нь хэдэн баронк хурга хариулсан юм байгаа юм. Нэг хавар. Тэгээд л одоо гайгүй шиг... өгчихсөн юм. Тэгэж л байсан. Ер нь тэгээд хавьтай лут ч юм. Ер нь тэгээд малын ашиг шим нь юу бол бидний үед ч гэсэн, социализмын үед болвол одоо мал маллахад, сааль сүү саахад тэрний хөдөлмөрийн өнөө хөлс мөлс муу шүү дээ. Ер нь тааруухан... Үгүй яахав САА бол нэгдлийг бодвол цалинтай, улсын гэдгээрээ өндөр цалинтай гурван

зуу, тэгээд бүр олноор нь одоо мянга шахуу хүргээд маллавал долоо найман зууг авчихна. Тиймэрхүү л байсан. САА бол бас илүү байсан юм. Тэгээд би чинь одоо тавдугаар зэрэгтэй гагнуурчин, гурилын үйлдвэрт бол одоо дээд талын зэрэг дээ. Зургаадугаар зэрэг арай аваагүй юм байгаа юм. Тавдугаар зэрэгтэй байж байгаад гарсан. Тэр чинь найм естэй гарлуу даа. Мал дээр гарсан. Тэгээд гарахад чинь би нэг зэргээр цалин чинь, бүтэн цагтай сард бол нөгөө таван зуун гучин хэд, жаран хэд хүргэж авна. Цаг цөөтэй жил бол сард болвол яахав нэг дөрвөн зуу гаргаад авчихдаг тийм ээ. Тэр бол ажилчин хүний цалиндаа бол бас ч гайгүй. Ер нь дээд талын л цалин. Манай энэ хөгшин чинь бас худалдааны байгууллагад олон жил ажилчихсан. Худалдагчаас нь аваад нярвыг нь хүртэл ажилчихсан. Бас нэг дөрвөн зуу гаран цаас тоншчихно доо хоёулаа. Зарим сард нэг есөн зуугаад гаран цаас, зарим сард нэг найман зуу гаран цаас ингэж авчихдаг хоёр цалинтай хүмүүс байж байнаа. Хоёулаа гэв гэнэт мал малладаг болоод гараад ухасхийдэг байхгүй юу. За тэгээд улс ч янз бүрээр хэлсэн байх. Энэ хоёр шиг тэнэг амьтан байхгүй л гээ биз. Аа тэгээд л очоод малаа маллаа. Үхэр авлаа. Гурав гурван үнээ саалаа манай хүн. Би ч өөрөө бас нэг долоо найман үнээтэй. Өнөөх нь... Энэ чинь ганцаараа саана. Би өнөө хэдэн үхэртэйгээ тачигнаад л... Адуу хонь нь өнөө... үхэртэйгээ ер нь тэгээд таараад байх юм. Үнээ мүнээтэйгээ сувай үхэртэй, наяд үхэр байлуу, зуугаад үхэр байсан юм уу. Тэгээд эхний сарын цалин авах болоод л болов оо. За овоо л юм авах байх даа гээд давхиад очсон чинь. Авсан чинь өнөө хариулга өнөө саалтай нийлээд хоёр зуу хүрдэггүй цаас авдаг байхгүй юу.

Д : Тэгсэн чинь САА-н мал маллаад?

Б : Гурлийн үйлдвэрийн туслах аж ахуй. Тэгээд л ер нь жаахан эвгүй л санагдаж байв. Хоёр зуу гаран цаас л болсон байх. Тэр нь тэгээд нэг хоёр зуугаад цаас даа. Тэгээд малын ашиг шимийг ашиглаж юу яасны хөлс бол тун тааруу байхгүй юу. Тийм л байсан. Тэгээд яахав тэр чигтээ нэгэнт л гарна гэснээрээ гараад л малыг малласан, малчин болоод л буцаж очиж орё ч гэсэнгүй. Тэгээд би чинь дөчин долоотой хөдөө гарсан юм байхаа даа, тэр ч бас залуу л, тэгээд гурван жил болоход ардчилалын салхи үлээгээд л, ферм болоод иртэл тэгээд иртэл, өнөө олон хүүхэдтэй эхчүүдийг өнөө нэг олноор нь аваачиж тэтгэвэрт нь гаргаад л. Аа тэгсэн чинь өнөө тэтгэврийн насныхыг чинь насыг нь нааш нь татаад л баахан улс ажилгүй болсон шүү дээ. Тэрүүнд чинь орохоор болчихлоо. Би ч одоо тавь хүрлээ. Тавин настай ардын нэгдэлд ажиллаж байсан хүн, тавин настай гарна гээд тэтгэврийн хууль гараад. Тэгэхлээр нь бушуухан тэтгэвэртээ гараад овоо мөнгө авдаг амьтан. Тэгээд гүйлээ гүйгээд л гурилын үйлдвэрээр ороод л цалингийнхаа... энэ тэрийг шүүж байгаад л биччихлээ. Цалингийн жагсаалт гаргаж ирээд. Тэгээд л тэтгэвэр тогтоолголоо яахав. Гайгүй ээ 91 онд орж байгаа юм. 91

онд тавь хүрч байгаа юм, тэгээд долоон зуу гаран цаасны тэтгэвэр. Мөнгө нугларчихсан байсан. Уул нь бол гурван зуу гаруй цаас, тэр чинь бол өндөр тэтгэвэр л дээ, өндөр тэтгэвэр байгаа юм. Ийм тэтгэвэр тогтоолгочихлоо. За яахав болж байна. Тэтгэвэр тогтоолгохлоороо өөрийнхөө нэрэн дээр, өөрийнхөө нэрэн дээр малаа шилжүүлчихээд, өөрөө тэтгэврээ аваад л, ингээд л өнөө малыг чинь маллаад л тачигначихна. Тэгээд л байсан чинь өнөө хорь дугаар тогтоол гардаг, сүүлдээ бас нэг хааяа хааяа цалин нэмэх юм аа. Минийх нэмдэггүй ээ. Яасан бэ болсон чинь. Аа аминдаа хэдэн малтай ч гэдэг юм уу, хөдөө байдаг ч гэдэг юм уу. Янз бүрийн арга саам хэлээд ер нь их цөөхөн удаа нэмсэн. Тэгээд сүүлд нь өнөө хамгийн сүүлийн наян нэг дээр очиж, саяын энэ тэгшитгэл гэдгээр ерэн тав болоод л тэгээд л байж байгаа. Тэгээд бас намайг алаад хячихсан юм шиг байгаа юм. Тэр өндөр байхад чинь тэгээд л доош нь буулгасаар байгаад, манай хөгшин бид чинь хоёулаа тэгээд доошоо буусан. Энэ нэг муу наян нэгтэйгээ ингээд л, ингээд буулгаад ирдэг юм. Тэгээд учрыг нь олдоггүй юм.

Д : Тэгээд тэр малыг малчдад гэхэд л та тийм мал хувьчилж өгсөн үү танд?

Б : Үгүй.

Д : Өгөөгүй юу? Өө та чинь тэгвэл өөрийнхөө хүчээр одоо мянгат малчин болсон байх нь байна.

Б : Надад яахав, нөгөө мал дээр байсан нөгөө туслах аж ахуйнхаа малыг бас нэг тараасан шүү болж өгсөн юм аа, тэгээд. Үгүй туслах аж ахуйнхаа малыг ер нь тараагаагүй юм. Үгүй малчиндаа нэг ганц нэг морь, гурван хонь өглүү дээ. Ямаа байгаагүй юм, тэгэхэд чинь. Тэгээд манай САА, энэ хархорины САА чинь ерөөсөө тараагаагүй юм. Улсын цөм сүргийг чинь өнөө бас нэг сайжруулчихсан. Хонь нь болохлоороо “Хангай” үүлдрийн хоньтой болчихсон байсан юм. Тэгээд тэр үеийн дарга нь яагаад, эндхийн ард түмэн ч бас нээх тэрнийг хувааж авъя гэж нээх хөөцөлдөж нээх босоогүй. Хэрүүл хийгээгүй. Аа тэгдэг л юм байх. За яахав энэ хэдэн малын... ингээд хувийн компани болоод задраад, ингээд хэд хэдэн компани болж задраад. Өнөөдүүл нь малаа хувааж аваад, малчид өнөө... тэрүүн шигээ цалингаа аваад л ингээд л байх юм бодсон. Тэгээд ер малчид бол нээх малыг хувааж авна, та нар энийг өг энэ тэр гэж ер нь нээх тэгэж хашгичиж босч ирээгүй юм. Тэгээд ерөөсөө хуваагаагүй, тэгээд өнгөрсөн байхгүй юу. Тэгээд өнгөрөөд тэгээд сүүлдээ янз бүрийн шугамаар өнөөх... өнөө компаниуд нь ийш тийш нь зарсан байх. Заримд нь ч шилжүүлсэн байх. За тэгээд бас нэг зарим дарга цэрэг янз бүрийн юм нь сэмхэн авсан юм шиг байгаа юм. Тэгээд дуусчихсан. Тэгээд хархориныхон бол ер нь ерөнхийдөө юугаар. Хамгийн их олон хүүхэдтэй, хамгийн олон жил мал малласан малчингуудад нэг арван зургаан толгой мал өгсөн юм, САА. Би бол гурилын үйлдвэрийнх болохдоороо зүгээр нэг морь, хоёр гурван хонь тэгэхийгээд л дуусч байгаа юм даа.

Тиймэрхүү. Тэгээд хархорин бол ерөөсөө мал хувьчлаагүй юм байгаа юм. Тэгээд энэ хархорины мал чинь болвол ер нь тэгээд ард түмэн өөрснөө л, өөрснийхөө хүч чадлаар л өсгөж байгаа юм шүү. Түүнээс бол нэгдлүүд болвол ерөөсөө тэгээд байж байгаа малаа сүүлдээр нь, тэгээд тэр чигээр нь аваад үлдсэн шүү дээ. Манайх чинь энэтээ талдаа одоо энэ Хужиртын сумтай ингээд хиллэдэг. Би чинь одоо яг захад нь ингээд хамт байж, байгаа одоо малаа наашаа цаашаа... хүн байхгүй юу. Тэгээд энэ талын улсууд бол харж байхад, ингээд ямар мал авсан, тэгээд тэрнийгээ олон хүүхдийн бөөн бөөнөөр нь, тэгээд бүр дээрээс нь нэмж аваад, ингээд авчихаж байгаа юм. Хархорин бол тийм юм байхгүй, тэгээд л дуусчихсан.

Д : Тэгээд нэгдлийн малууд тэгээд үрэгдээд?

Б : Аа тийм тэгээд л хүмүүст л оччихож байгаа юм л даа, ард түмэнд л оччихож байгаа юм. Аа САА-н мал бол ерөнхийдөө үрэгдэх талдаа орчихсон. Янз бүрийн хоёр гурван ч компани ч билүү, хэдэн ч компани байж саллаа. Тэгээд өнөө компанууд чинь хувааж аваад. Тэгээд өнөөхийг чинь зарж үрээд, ийш нь тийш нь болгоод, тэгээд янз бүр болсон байх л даа. Тэрийг бол ямар бид дотор нь орсон биш. Тэгэж л ярьдаг юм байна лээ. Тэгээд өнгөрсөн юм аа.

Д : Өө тэгвэл САА чинь малаа яаж чадаагүй, нэгдэл л малчиддаа өгсөн юм байна шүү дээ.

Б : Манай Хархорин л лав өгөөгүй тэгээд. Бусад САА яасан юм бүү мэд. Зүгээр Хархорин...

Д : Эндэх бол тэгсэн юм байна тэ?

Б : Эндэхийх бол яахав малчиддаа нэг арван зургааг л өгсөн байх. Тэрнээс илүү гараагүй.

Д : Одоо билчээр булаацалдах, энэ тэр гээд тийм юм гарч ирж байна. Ер нь билчээрийн талаар тэр үед ямар?

Б : Тэр үед чинь ерөнхийдөө байсан шүүдээ. Одоо ерөнхийдөө одоо САА-н мал л байна. САА-н мал чинь бас тоотой хэмжээтэй байсан юм тэгээд. Амины мал гэхээр юмгүй. Айл болгон л арван зургаан толгой мал, ихдээ тэгэхлээр чинь юу болов. Тэгэхлээр чинь төвийнхөн мал байхгүй шахуу болдог. Тэгээд яахав мань мэтийн нэг нутаг орны ийм юмнууд бол хааяа нэг хэдэн малтай. Тэр нэг аав ээж дээр, ах дүү дээр л байна. Жоохон холхноос ирснүүд нь бол тийм мал байхгүй шүү дээ.

Д : Одоо бол малын билчээр асуудалтай юу, ер нь хүмүүс бас булаацалдах уу гайгүй юу?

Б : Асуудалтай. Тэгээд манай энд бол нээх булаацалдаад сүйд болохгүй. Ерөнхийдөө бол малын билчээр асуудалтай. Ер тэгээд билчээр бол хомсдож байна. Мал их өссөн, хамгийн гол нь мал их өссөн. Ямаа их өссөн.

Д : Аа ямаа ашигтай болохоор тэ?

Б : Аа тийм. Тэгээд ерөнхийдөө мал болвол олон талдаа, олдох талдаа. Тийм

учраас малын билчээр болвол хэцүү талдаа.

Аа тэгээд мал хувьчилж аваагүй урдны, байсан малаа л өсгөөд явж байгаа юм байна шүү дээ.

Д : Тийм. Ямар малтай вэ та?

Б : Аа яахав. Адуу үхэр хонь ямаа л байна даа.

Д : Малын билчээр бол одоо хэцүү болж байна уу?

Б : Хэцүү. Ерөнхийдөө тэгээд л тэнгэр хур бороогоо хайрлахгүй болохлоор ер нь тэгээд л хэцүү талдаа. Манай энд чинь болвол хангай тал байхгүй юу. Хангай газар шүү дээ. Тэгэхэд чинь ер нь жаахан л ган болох юм болвол, тэгээд л өвөс ногоо ургахгүй тэгээд ер нь хэцүү талдаа. Одоо ерэн хэдэн оны үед бас цөлжилт, ер нь одоо хойшоо болоод байна. Хэдэн жилийн дараа хангай руу одоо түрж орж ирэхнэ гэж хэвлэлд бичиж байгааг уншиж л байсан. Манай энд ч арай ч болоогүй байх аа... .

Д : Харин тийм байх тэ.

Б : Тэгж л би бодож байсан байхгүй юу. Тэгсэн чинь ерөөсөө л дорхноо одоо ер нь нүдэн дээр цөлжиж байна. Тэр дээр үед ургаж байсан тэр ургамал ногоо, цэцэг мэцэг ганц нэг таньдаг өвс ургамал чинь одоо байхгүй шүү дээ. Хуу тэр чигээрээ устаад алга болчихоод байна. Одоо манай энд цахираа л гэж ярих юм. Тэх тохой гэж мал их сайн таргалуулдаг тийм, ширдэг шиг л ургадаг байсан. Тэр бас одоо ерөөсөө үзэгдэхгүй, гэх мэтчилэн.

Д : Энэ юунаас болоод алга болоод байна?

Б : Энэ яахав чийг орохгүй.

Д : Аа хур бороо орохгүй.

Б : Хур бороо орохгүй, хуурайшаад ирэхлээр тэр ус чийг илүү хэрэглэдэг ногоо чинь, тийм ээ. Тэгээд л ер нь чийг ганг тэсвэрлэдгээр лууль шарилж тийм юм нь арай нэг ургах маягтай. Тэгээд зарим лууль шарилж ч бас ургахгүй. Лууль шарилж тэгэхлээр ургаж байгаа нь юу гэхдээр, энэ нэг хамхуул гээд нэг юм байгаа. Тэр илүү ургах юм. Тэр мал идэхэд бас л нэг бүдүү хадуун. Бүр өлссөн мал бол идээд л байгаа юм л даа, малын хоол болоод л байдаг байх. Тэгээд л ер нь тэгээд нарийн ширийн тэр нөгөө аятайхан байдаг байх. Тэгээд л ер нь их ховор. Аа тэгээд ургаж байгаа газрын бүрхүүл, ургамлын бүрхүүлийн хувьд ярихад чинь бол энэ юуны аньсны навч шиг л ингээд нил хавтгай л ургадаг, манай энд бол тийм л ургадаг. Одоо бол бут бутар, жоохон жоохон тэгээд тав арван санж ядахнаа тав арван санж зайтай ургаж байна. Тэгээд л тэрний хооронд чинь нэг шороо нь гарчихсан. Тэгээд л өнөө хүчтэй салхи үлээхээр чинь л өнөөхийн чинь шороо босоод л, тэгээд газар чийггүй болохлоор шороогий нь босгоод л, өнөөхийг чинь салхи гарахын тоолонд л өнөө өвсний чинь ёзоор аваачиж шороогий нь хийсгээд. Тэгээд л өнөө өвс чинь үндэс нь ил гарч ирээд л. Тэгээд ургах чадвар нь муудаад л. Тэгээд л ургахаа байгаад л. Тэгээд л зарим газраа болвол, зарим нэг хонхор

шуудуу тийм газрын чинь энгэр хэсгийг нь элсээрээ дараад л, тэгээд өнөө ургамал нь нөгөө нэг газраас нэвтэрч гарч ирж чадахгүй бас нэг шороо болж байна. Тэгээд янз бүрээр л.

7 Ардчилалын дараахь амьдрал

Д : Энд чинь Шанхын хүрээ хэзээ нээгдсэн бэ?

Б : За энэ Шанхын хүрээ, одоо энэ байгаа хүрээ бол сүүлд нээгдсэн юм байна лээ. Анхлан тэр “Баруунхүрээ” гэж тэр нь болохлоороо Өндөр гэгээн 11 настай байхдаа байгуулсан гэж, тэгэж ярьдаг юм байна лээ. Тэгээд сүүлд нь тэр ноён лам, нэг лам л тэр одоо энэ байгаа дугануудын чинь барьж, өөрөө тэндээ байршиж байсан, тийм хийд л дээ. Түүнээс анхлан тэр Баруунхүрээ гэдэг бол одоо буйр нь байгаа, тэрнээс өөр одоо юу ч байхгүй.

Д : Дахиж 90-ээд оноос хойш сэргээгдэв үү?

Б : Сэргээгдсэн. Энд чинь гурван дуган сэргээчихээд байгаа юм. Уул нь арай нураачихаагүй. Дунд талын, гурван дуганы дунд тал нь арай тийм өндөр 2 давхар нэг ийм байгууламжтай юм байна лээ. Тэгээд намайг сургуульд суухад оройг нь буулгаад хаячихсан. Тэгээд сүүлд нь ингээд бөөрөнхийлөөд ийм бөмбөгөр оройтой болгоод нэг давхрын болгоод... байсныг нь, тэгээд ингээд банзаар дээвэрлээд, тэгээд сүүлд нь хоршооны барааны агуулах, түүхий эдийн агуулах хийчихсэн юм. Тэгээд тэр гурван дуган нь хоршооны мэдэлд үлдээсэн юм. Тэгээд байж байгаад сүүлдээ нэгдэл ч татан буугаад САА-тай нийлж. Шанх ч ерөнхийдөө сумын төв гэдэг юугаа алдаад ирэхдээрээ зэрэг бригадын төв маягийн юм болсон юм уу даа. Тэгээд л нэг тиймэрхүү байгаад байсан, яахав оршин суугчид нь хэдэн настай өнөө хуучин лам нар байсан улсууд, хэдэн настай суурьшчихсан тийм хэдэн настайвтарууд нь байгаад байсан. Сүүлдээ аргагүй л амьдралын эрхээр өнөө үр хүүхэд нь төв ороод ирэх юм. Тэгээд өнөөдүүлийгээ дагаад тэгээд юм хуманд ойртох болоод, ингээд явсаар нүүсээр байгаад, хорогдсоор хорогдсоор байгаад тэгээд доод дуган нь алга болчихсон. Тэр дээр төв дээр болвол бас яахав нэг бригад мригадын төв маягтай, тэгээд бас нэг арай, арай дээр байж байсан. Сүүлд нь өнөө хүрээ хийдээ сэргээх болохлоор, сэргээх болоод. Тэр захын хоёр дуган нь арай гайгүй, дундах нь тэгээд оройг нь нураачихсан байсан. Тэгээд хоёр жижиг захын дуганыг нь жаахан сэлбээд, тэгээд орж хурал номоо эхэлсэн юм. Тэгээд дараа нь тэр дунд дуганыг нь хуучин байдлаар нь болгож сэргээлгээд, тэгээд нэг гурван дуган л байдаг юм. Энэ бол уг нь гайгүй, арай нэг нураачихаагүй бүр. Энэтээ талд нь тэр би түрүүнд ярьж байсан, дотуур байрны хүүхдүүдийн юу байсан гэж, гал тогооны өрөө байсан гэж 2 жижиг дуган байсан. Тэр хоёр нь сүүлдээ нэгдэл склад хийчихсэн байгаад л байдаг байсан. Тэгээд одоо ор сураг байгүй. Тэр нь яасан бэ гэхдээр зэрэг энэ Хархорин руу зөөгөөд, энэ хархорины энд барьж

байгаа барилга марилга энэ тэр рүү нурааж зөөгөөд л, тэгээд л туйпуугий нь ашиглаад, чулуун довжоо нь одоо энэ клубын үүдийн чулуун довжоо байна шүү дээ. Энэ чинь л одоо Шанхын хийдийн дугануудын довжоо тэгээд, энэ Зуугийн довжоонууд эд нар байхгүй юу. Энийг авчраад ингээд ашиглаад хийчихсэн юм.

За тэр Шанхын хийд чинь бүр сүүлд одоо наян хэдэн, далан хэдэн онд шахуу гадуураа нэг нимгэхэн тийм түүхий тоосгон хэрэмтэй байсан юм. Тэгээд одоо нэг төмрөөр дархалсан... шиг тийм хөх тоосгоор хийчихсэн. Тэгээд дунд нь түүхий тоосгоор яачихсан, тийм хэрэмтэй байсан. Тэрийг нь хүртэл нурааж аваад, тэгээд энд тэр нөгөө, манай энд тэр сүүлдээ гавъяат барилгачин байсан юм, энд байж байгаад, барилгын Гомбо гэж нэг өвгөн байсан юм. Тэр л энэ барилгын ажил хийж байгаа нь гэж ерөнхийдөө нураах ажлыг хийсэн байх. Тэгээд л нааш нь зөөгөөд л нэг болохгүй байна... нам захиргааны удирдлага тэгээ биз. Тэр үед чинь нам л гэж урдаар ярьдаг, тэгээд төр гэж л дараа нь ярьдаг л байв. Тэр юу шашин номын суртал нэвтрүүлж байгаа юмыг нураа л гээ биз. Тэгээд нураагаад л, тэгээд зөөдгийг нь зөөгөөд л. Уг нь энэ чинь нэгдлийн төв байсан юм. Хөөрхөн захиргаа махиргаатай гайгүй том клубтэй дүнзэн модоор барьчихсан, шургаагаар барьчихсан гайгүй томоо, хөдөө суман дээр болвол дажгүй хөөрхөн клуб млубтай. Тэгээд сургууль мургууль тэгээд л юм юм л байлгүй яахав дээ, нэгдлийн төв юм чинь. Тийм байсан. Тэгээд л өнөө САА-тай нийлсэн болохлоор сүүлд өнөөдүүлийг нь цөмөөрнг нь буулгаад, хааш нь ч зөөдөг юм тэгээд ийш нь тийш нь зөөгөөд л тэгээд үрэн таран алга болчихсон. Тэгээд нөгөө хийд байгуулаад л, бас нөгөө овоо улс суурьшаад л, одоогоор ч нэг багийн төв байгаа юм л даа. Тэгээд л байсан. Тэгээд бас бус хүүхдүүдээ хийдэд суулгаад л, гайгүй овоо болоод яах вэ нэг үеэ бодвол бас улс амьтан суугаад ингээд байснаа, тэгээд бас дахиад л нүүгээд л буцаад наашаа. Тэнд нь яахав одоо нэг дэлгүүр байх. Өнөөх нь эндэхээс илүү үнэтэй болчихно, эндээс зөөж очихлоор. За тэгээд юм юм л хашчих юм байна л даа. Тэгээд одоо нэг цөөхөн айл, хорин хэдэн айл байдаг юм уу хаашаа юм. Хориод л айл байдаг юм шиг байна лээ. Тийм болчихоод байгаа юм.

Д : Нээгдсэн сүм маань, одоо хийд маань ажиллаж байна уу, одоо?

Б : Ажиллана, цөөхөн хүн. Арван хэдэн лам нар, ер нь дансаараан бол нэг хорин хэдэн лам л байдаг юм шиг. Одоо тэгээд настайчууд нь сууж чадахаа больчихсон юм. Нэг залуувтар залуу хүүхдүүд нь, нөгөө хуучин сууж байсан, эхэлж сууж байснууд нь одоо том том лам нар болоод, тэгээд хот руу яваад өгсөн. Ихэнх нь хотод. Зарим нь бүр шашны сургуулийн багш ч болчихсон байх. Зарим нь одоо янз бүрийн хийдэд л байдаг болтой юм байна лээ. Тийм л байх. Тэгээд одоо ер нь энд лам болоод суугаад байна гэхлээр бөглүү газар тийм ээ. Хөгжил юунаас хол. Байнга цахилгаантай яахав,

зурагттай л байгаа юм. Аа тэгээд өнөө лам чинь өнөө хийдэд суугаад ингээд, хурал хураад ингээд суугаад байна. Тэгээд авдаг цалин мөнгө гэж өчүүхэн. Хорь гучин мянга байдаг юм уу хайшаа юм. Тэгэхлээр чинь өнөө залуучууд чинь яаж тогтох вэ дээ. Бас нэг авгай хүүхэд авчихсан, хүүхэд гарчихсан. Тэгээд өнөө өөрийгөө тэжээх гэр бүлээ тэжээх мөнгөний шаардлага гарна даа. Тэгээд л хот руу яваад өгнө. Тэр Гэсэр сүмийн тэнд нилээн байдаг юм гэнэ лээ, манай эндэхийн лам нар. Тэгээд л энд тэнд сүмүүдэд л суудаг юм гэсэн. Гайгүй гайгүй лам нар байдаг болтой юм байна лээ, уул нь.

Д : Та бол хааяа сүм хийд орж ном уншуулах уу?

Б : Уншуулна.

Д : Хаана очиж уншуулах вэ?

Б : Шанх дээр уншуулчихдаг юм. Энд ч уншуулна. Хоёр талд л даа. Шанх буюу Баруунхүрээ гэдэг чинь манай өвөг дээдсүүдийн сууж байсан хүрээ, багадаа шавилж сууж байсан хүрээ.

Д : Танай?

Б : Аав ах нар, одоо өвөг дээдсүүд энэ хүрээнд сууж байсан. Тэр утгаараа би бас энэ рүү явна. Ерөнхийдөө манайхны харьяалсан газар байхгүй юу. Энд энэ рүү очихлоороо энд оршин сууж байгаа гэдэг утгаараа. Тэгээд алинд нь ч ижилхэн очно л доо.

Д : Одоо ч бас социализмыг бодвол бас арай л өргөн дэлгэр болж дээ тэ, шашин шүтлэг.

Б : Өө өргөн л дөө. Хэлж байгаа хэргээр явсан бол болж л байгаа юм. Зарим зарим нь бас арай буруу яваад байна уу гэмээр байдаг л харагдаж л байдаг юм. Зүгээр наанаа нэр зүүчихээд л яваад байх ч хаашаа ч юм дээ. Янз бүрийн нэг сүм хийдэд харьяагдахгүй явж байгаа улс ч байх шиг л байх. Тэгээд өөрийн хувийн ашиг сонирхлыг хараад, тэгээд яахав өөрснөө чаддаг мэддэг л юм байна. Тийм учраас улс очоод байгаа тийм ээ. Тэгэхгүй, юм мэддэггүй бол юу гэж очхов дээ. Тэгээд ерөнхийдөө миний бодлоор болвол нэг сүм хийддээ харьяалагдаад, тэгээд тэн дээр номоо унших итгэлээ хийгээд явж л байвал уул нь зүгээр баймаар санагдах юм. Миний хувьд шүүмжлэлтэй хандахад. Аа тэгээд хувийн ашиг сонирхлоо хараад бас зарим нь яваад. Тэгээд өөрснөө чаддаг болохлоор болж л байгаа хэрэг л дээ тэр. Тэгээд бүр очих газаргүй байх л даа, тэгээд зах зээл болсон бол буруу үгүй гэх л байгаа тэ.

Д : Одоо энэ лам нар бурхны шашины, одоо ер нь бурхны шашины талаар ийм тийм байдаг юм шүү, энэ тэр гээд нэг тийм сургалт ч гэх юм уу, одоо сургах мургах тийм юм явдаг юм болов уу?

Б : Явахгүй. Манай энд бол тийм юм явахгүй. Ард түмэн өөрснөө л өөрийнхөө сүсэг бишрэлээр очиж буян номоо үйлдэж хурааж, зөвлөгөө өгч ингэж л явж байна.

Д : Та бол одоо бурхны шашин гэхээр одоо иймэрхүү шашин ном байна даа гэсэн ямархуу ойлголттой байдаг вэ?

Б : Өө яахав дээ. Энэ бол ер нь тэгээд бурхны шашин бол ер нь хамгийн нигүүлсэнгүй, хамгийн одоо юу шашин юм л даа. Бас шинжлэх ухаан ч гэж ярих болж дээ бурхны шашныг ер нь тэгэж ярих, үнэн ч байх. Ер нь тэгээд аль ч шашныг бол яахав дээ. Бүр хааяа нэг хэвлэлийн судар эд нартай тааралдаж байхад, хааяа нэг сөхөж харахад бас яахав хүний сайн сайхны төлөө л шашин болгон тийм л талтай юм шиг. Тэгээд ер нь “Очир огтлогч” гээд америкийн нэг буддын шашинтай хүн бичсэн нэг ном байна. Хуучин “Доржзодов” л доо. Тэрнийг ч өөрийг нь орчуулсан байна. Доржзодовыг ашиглаж их амжилтанд хүрсэн. Энэ бол одоо ерөөсөө хамгийн дээд л гэж тэгсэн байна. Тэгээд юу, одоо энэ бурхны шашны номыг чинь одоо монгол хэл дээр уншвал бид нар бас ойлгохгүй. Их гүн ухааны их лут агуулгатай ном, барагтай бол ойлгохгүй. Яг мөрийг нь хөөгөөд хөөцөлдөөд цаашаа явдаг хүн бол одоо ойлгодог. Аа яахав мань мэтийн ийм захын улс бол яахав дээ зөв л шашин гэж бодож явах. Тэгээд ер нь аль ч шашин байсан хүний сайн сайхны төлөө л явдаг номлодог. Тэрнийгээ гүйцээх арга ондоо юм гэж тэр хүн бичиж байна лээ, гүйцэлдүүлэх арга нь. Ер нь бол монгол хүн бурхныхаа шашныг шүтэж явах нь зөв байх гэж би бодож л явдаг юм. Янз бүрийн шашин орж ирэх юм. Янз бүрийн шашин орж ирлээ л гээд байгаа юм. Тэр лал мал нь чухам нээх байдаг юм уу үгүй юм уу мэдэхгүй юм. Христ л нилээн орж ирж байгаа юм аа даа янз нь.

Д : Харин тэгэж. Тэгэж л одоо ер нь л нилээн орж ирж байна даа бас.

Б : Тийм нилээн орж ирж байгаа юм шиг л яриад л байх юм. Тийм татах арга ихтэй юм байна л даа. Яаж байна гэх дээр зэрэг нөгөө орох оронгүй өлссөн ядарсан юмнуудыг аваачаад хооллож ундалчихдаг. Бас нэг юухан ч хийлгэчихдэг юм уу даа, тэгээд илүү дутуу улсыг нилээн цуглуучихдаг болтой юм. Тэрүүгээр их татдаг юм байна. Манай бурхны шашин бол тэгдэггүй, тэгээд л яахав өөрснийнөө сүсэг бишэрлээр хүрч ирээд л тэгээд болоод байна гэж үздэг юм болов уу даа гэж. Тэгээд одоо тэр христ шүтсэн улсууд бол одоо бас их лут шүтлэгтэй юм шиг болтой юм шиг байгаа юм. Манай нэг дүүгийн хоёр хүүхэд хэлгүй байдаг юм хотод. Тэр хоёр тэр христийн сүмд явдаг болтой юм. Бурхны шашин хэрэггүй л гэнэ. Аа нэг нь бол их сайн болтой юм. Бас л толгойд нь юм хийж чадаж байна л даа тийм ээ. Тэгээд харин тэднүүдээс авах юм, нэг авах юм байна. Нэг банди нь нэг гэр барьсан, байшин барьсан, хотод байгаа. Тэгээд тэнд очсон юм. Тэгээд очход яахав хүнээрээ л болдог байх. Тэр залуучууд дандаа хэлгүй, нөгөө хэлгүйн сургуулиар яваад, тэгээд төгсөөд тэгээд гарчихсан банди нар охидууд юм байна л даа, баахан хэлгүй юм ирэх юм. Тэгээд дараа нь нөгөөдүүлийгээ оруулж ирэх юм байна л даа. Нөгөө зүгээр улстай

хутгалдахаар тэр чинь ямар ч утгагүй болчих юм. Тэгээд ангийнхан л сүүлд нь цөмөөрөө орж ирлээ. Аа өнөөдүүл чинь нэг ингэсэн юмнууд л хөхрөлдөөд байх юм. Би чинь дэргэд нь хэлгүй. Тэгээд ороод ч нэмэр алга. Хааяа нэг орчихоод л хааяа нэг наагуур нэг наагуур цаагуур явах юм. Тэгээд хөхрөлдсөн бөөн хөгжилдсэн, архи уухгүй, ерөөсөө архи уухгүй. Тэгээд ууж идээд л нөгөө ундаа мундаа тийм юмаа уугаад, тэгээд сайхан хоол хийж идээд л тэгээд л шуугилдаад байх юм. Тэгээд архи уухгүй, архи бол муу ерөөсөө архи ууж болохгүй. Ганц нэг бас уудаг байдаг болтой байна. Тэднүүд чинь тэр дотор бас ганцаараа яаж уух вэ, зүгээр гадуур л уудаг болтой юм. Түүнээс тэр болгон уухгүй. Ер нь тэгээд тэр залуучүүд тэр нь их сайхан, хамгийн гол нь, тэр архи уулгахгүй байгаа нь. Бүр ингэхээр өөрсдөд нь сэтгэл санааг хольно, архи бол хэрэггүй гэдэг бас нэг ойлголт төрсөн юм шиг санагдаж билээ. Тэр болвол сайхан л байна, тэр бол бас болж л байна. Аль болох? дүлий юмнууд чинь архи уугаад л янз бүр болоод л явбал ямар байх вэ дээ. Гэхдээ ухаантай эрдэмтэй номтой мөртлөө архинд ороод яаж яваа билээ тийм ээ. Тэгэхэд чинь тэднүүдийг тэгээд бас нэг зөв замд нь оруулчихна гэдэг нь бас нэг олзуурхууштай юм. Аа бусад нь бол одоо хэн мэдэхэв дээ, тэгээд тэр ном момыг нь мэдэх биш. Тэр байтугай өөрийнхөө шашны номыг ч мэдэх биш.

Д : Хөдөө орон нутгаар бол одоо христийн шашины хүмүүс явах уу?

Б : Явахгүй зүгээр. Манай энд нэг, энэ төв дээр нэг юу байдаг юм гэсэн. Христийн бас нэг тийм салбар малбар. Зүгээр сүм ч гэхэд хаашаа юм, нэг юм байдаг гэсэн. Чухам ямар ч юм байдаг юм, би ер нь сонирхдоггүй юм. Мэдэхгүй, зүгээр байдаг гэж ярьдаг. Сум мум тойрч яадаг юм уу бас, нэг л байдаг л болтой юм.

Д : Одоо ч олон шашин орж ирж байна даа, монголд.

Б : Монголд олон шашин гээд байх юм. Чухам тэр Мохамед бил үү юу бил ээ, лал ч гэж л ярьдаг. Мэдэхээс лал христ хоёрыг л мэдэх юм даа. Дөрөв таван шашин байдаг гэдэг бил үү. Тэднүүд нь бусдууд нь аль зэрэг орж ирдэг юм мэдэх биш, одоо ялгах ч биш. Зүгээр лал бол одоо казакууд л шүтэж байгаа байх.

Д : Ер нь бол олон шашинтай байсан нь дээр юм болов уу, эсвэл одоо ингээд урдны бурхны шашинтайгаа байж байсан дээр үү, аль нь дээр юм бол, таны бодлоор бол?

Б : За яахав дээ. Зохицоод, хоорондоо зохицоод, эв зүйгээ олоод, нээх дээр доороо орохгүй нэг зиндаанд тэгээд байж байвал, одоо тэрнийг нээх хөөж хориод байх ч яахав дээ тийм ээ. Аа зүгээр нэг янз бүрийн, шашны хагарал мөргөлдөөн гээд янз бүрийн юм ярьдаг, тиймэрхүү юм болоод ирэх юм бол бас нэг л онцгүй л ажил л даа, тийм ээ. Тэгэхгүйгээр нэг зэрэгцээ ингээд байж байвал одоо яахав. Яахав дээ тэгээд байж л байхаас, тэгэхээс тэрнийг

энэ муухай тэр сайхан гээд хөөж туугаад байх юм алга. Надад хэрэг ч үгүй. Бас нэг хагаралын л нэмэр болно биз, тийм ээ.

Д : Таны үед гэр бүл болоход аав ээж нь танилцуулдаг байсан уу, өөрсдөө танилцчихдаг байсан уу?

Б : Өө өөрснөө өөрснөө. Тэр үед чинь болвол аав ээж оролцоо байхгүй. Маний үед чинь харин тэр бол их нээлттэй байсан шүү дээ. Янз бүрийн тэр баян хоосны ялгаа энэ тэр гэж байхгүй. Өөрөө нэг энэ нэг зиндааны хурим... байхаас биш. Хөрөнгөтэй баян улс байлгүй яхав. Манай хөдөө талд бол ерөнхийдөө тэр, нэг зиндааны маягийн л шүү дээ. Малгайтай нь малгайтай, цөөн нь цөөн, олон нь олон, юмгүй нь юмгүй л байсан. Тэгэхдээ тэр нээх тийм хориг саад тавиад л тэрэнтэй болохгүй, энэнтэй суу заавал энэ тэр гэсэн тийм юм бол байхгүй. Тэгээд л өөрснөө сэтгэл санаа нийлвэл заавал... Тэр бол, одоо чинь болвол харин баян хоосон хүнтэй суулгахгүй гэдэг тэр юм хотод бол бүр лут юм биш үү. Энэ кино миногоор харж байхад, үнэн л байх гэж боддог юм. Тэр хоосон юм бас гараагүй, юм чинь заавал нэг эхтэй. Зөгнөлт зохиол л биш бол, тийм үү. Зөгнөлт зохиол бол ондоо юм. Одоо энэ гараад байгаа “Хэцүү анги” гээд энэ чинь нэг тиймэрхүү юм бас цухалзаад л байх юм байна шүү дээ.

Д : Тийм шүү, тэр ч одоо.

Б : Тэр ч үнэн ч байх. Ер нь тэгээд хөдөөний хүүхэд эд нарыг бол бас тоохгүй ч байж магадгүй. За тоосон байгаа гэхэд хот газрын улсын чинь нарийн ширийн бас тэр хөдөөнийхтэй ер нь нийлэхгүй шүү дээ. Ер нь ондоо шүү дээ. Хөдөөнийхөн бол ерөнхийдөө тэгээд нэг гол нуруугаа бас нэг гайгүй. Юмыг нээх янз бүрээр алагчлаад байхгүй, тэр бас байдаг нь байдаг л байх. Нээх алагчилаад энэ тэр гэр хоосон ч гэдэг юм уу янз бүрээ тэгээд хамаагүй бас алагчилаад байхгүй. Аа янз бүрийн нэг тийм ашиглах, ашиглаад байх тиймэрхүү сэтгэхүй бол бас бага. Хотын чинь одоо залуучуудын харж байхад чинь зарим нь одоо ашиглагчаад, ашиг нь өнгөрвөл тэгээд найзаа ч бай нөхрөө ч бай ханиа ч бай больше гэх маягийн тийм сэтгэхүйтэй болчихсон юм биш үү, ай.

Д : Тийм, тийм юм харагдаж байгаа шүү бас.

Б : Тийм юм харагдаад байх шиг байгаа юм. Тэгээд ер нь буруу хүмүүжил, тэгээд эд хөрөнгө гэдэг айхтар юм болохлоор за яхав дээ, бас тэр мөнгөтэй хүн амьдардаг, мөнгөтэй хүн гоё харагддаг. Одоо гоёгүй ч хүн гэж байхгүй. Гоё явахын тулд юу хэрэгтэй вэ, мөнгө. Аа мөнгийг яаж олох вэ гэдэг асуудал гарч орно. Тэгээд тэр асуудал дээр очихлоороо бас их өрөөсгөл байна. Би чинь одоо мөнгө хэрэгтэй болвол, одоо за байз юу хийгээд нэг мөнгө олчих бол гэж бодогдох. Тэгвэл одооны чинь зарим хүмүүс яаж аргалаад хүнээс нэг хэдэг мөнгө зээлчих вэ, тийм ээ. Ийм л сэтгэхүйтэй. Түүнээс биш юм хийгээд олчихно гэсэн сэтгэхүй байхгүй. Хөгшин би бол

өчнөөн юу хийгээд юу олох вэ дээ. Үйлдвэр байгуулья чадахгүй, мэдэхгүй, юм хийхлээрээ нэг л сур элднэ биз дээ. За тэгээд гараараа нэг юухан хийнэ, хийвэл хийх л юм. За нэг зөөлөн чулуу олдвол юухан сийлбэл сийлэх юм. Тэрнийг би хаана ч аваачиж зарах вэ. Уг нь би хийвэл бас нэг муухан юм хийчихдэг юм. Юухан хийхэн хийчэхнээ бас. Төмрөөр бол бас, нимгэн төмрөөр бол би бас 5-р зэрэгтэй бас дажгүй төмөрчин. Цэрэгт байхдаа сурсан юм. Тэгээд энэ гурилын үйлдвэрт гагнуурын хажуугаар хамт хийж байгаад бас одоо дажгүй сурчихсан бас. Баргийн салхивчны тооцоог бол эхнээс нь шугам нь гараад ирсэн байвал, дараачийнхуудыг нь бол иймэрхүү гээд залгачихаж мэднэ. Янз бүрийн тохиргоо мохиргоо бол хийчихэж чадна. Аа гагнуур бас бол яахав хүний дор орохооргүй гагначихна бас. Тэгээд одоо надад хийгээд байх юу байхав. Би хөгшин хүн одоо өвлийн хүйтэнд гадаа гудамжинд сууж байлтай нь биш. Хэрвээ одоо нэг дөч тавиад насных бол нэг гагнуурын будка барьчихаад юм гагнаад байхад над дээр хүн ирээд л юм гагнуулаад л байна. Би хүнээс дор гагнахгүй болохлоор хийгээд л байна тийм ээ. Одоо 70 хүрч байгаа хүн чинь одоо яаж тэгэж чадах вэ дээ тийм ээ. Аа залуучууд болохлоор за яахав зарим нь хийж л байна. Тэр болгон хүн болгон одоо энийг хийвэл тав арван цаас олох нээ но гэсэн сэтгэхүй одоо алга байна. Явал амар мөнгө олчих бол гэж. Амархан мөнгө олох, их гоё явах, архи уух, гоё тамхи татах иймэрхүү л юм бодогдно. Тэгээд л тэрнийгээ яаж олох вэ гэхдээрээ, тэн дээр очоод ерөөсөө байхгүй.

Д : Энэ орон нутгаар ер нь хутагт хувилгаан гэж хүн байсан болов уу, яригддаг, орон нутгийн хүмүүст яригддаг?

Б : Манай энэ хавьд болвол байгаагүй байх. Энэ хоёр хүрээний том лам нар л мундаг байсан гэж ярьдаг юм. Миний түрүүний тэр хоёр лам байсан гэдгийн нэг нь бол бүр хутагт хувилгаан нэртэй байгаагүй байх. Гэхдээ мундаг лам байсан гэж ярьдаг юм. Гандан манданд л сууж байсан их эрдэмтэй лам л байсан гэж ярьдаг л байсан. Одоо мэдэхгүй. Мэдэхгүй юм. Зүгээр байх нь байсан л байх даа. Зүгээр яг тийм хутагт мутагт гэж нээх байгаагүй байх. Болуу даа. Энд нэг домог байдаг юм. “Эдгийн гэлэн” гэж нэг гэлэн байсан гээднэ. Манайхны байдгийн энүүхэн энгэрт Эдгийн энгэр гэж. Тэнд нэг гэлэн хүн байсан гэж ярьдаг юм. Нэг домог байдаг юмаа. Тэр нэг тийм нээх ядуу амьдралтай тийм хөгшинтэйгээ хоёулаа, нэг таван ямаатай нэг тийм л хөрөнгөтэй хүн байж л дээ. Тэгээд аль ч үед юм, аль ч үед нь байсан хүн юм тэр бол домог болчихсон байх, учир битүүлэг. Тэгээд Богд дуудаж ир гэж. Тэгээд өнөө хоёулаа хоёр хөгшин л одоо таван ямаагаа туугаад Богдын хүрээ ордог юм биз дээ. Тэгээд ороод, ингээд Богдын хүрээнд очоод л нөгөө таван ямаагаа саагаад л тараг мараг бүрээд л, бас жоохон хурааж тэгээ л биз дээ. Жоохон борви шиг ч юм уу борви л байгаа байлгүй, тийм жаахан саванд хийгээд очиж. Тэгээд л өнөөхийгөө өнөө Гандангийнх саванд хийсэн чинь

өнөө сав нь дүүрч байсан гэж, өнөө сав нь. Өнөө жаахан юмнаас нь ингээд л юүлээд л байсан чинь дүүрч байсан гэж, тэгэж байсан гэж. Тэгээд л их л мундаг хүн байсан юм гэлээ гэж. Тэгээд яагаад ч юм бас тэр хэлмэгдэл тийм үе л бас биш байх, нэг баригдаж тавигдахаар ч болсон юм уу. Яасан ч юм бол нэг буруут болсон юм уу. Тэгээд очсон чинь энд тэндгүй л эдгийн гэлэн гүүд суугаад байсан гээд л. Тэнд ч нэг гэлэн, энд ч нэг гэлэн энд тэндгүй баахан олон эдгийн гэлэн болчихсон гээд л. Тэгээд алийг нь гэж барьж чадахгүй тэгээд буцаж байсан юм гэнэ лээ энэ тэр гээд тиймэрхүү домог. Домгийн юм л даа. Тэгээд эднийн тэр хойд энгэрт тэнд нэг жаахан ийм өндөр энгэр уулын өвөр дээр нь нэг ийм жоохон толгойрхуу нэг ийм жоохон овгор юм, нэг хадтай толгойрхуу л юм даа, тийм юмны өвөрт нэг хэсэг ийм овоо байдаг юм. Тэгээд тэрнийг л тэр хүний шарил байх л гэж ярьдаг юм байна лээ, тэгэж ярьдаг юм. Тэгээд тэр хэдий үед ч амьдарч байсан юм бүү мэд.

Д : Эдгийн гэлэн. За тэрнийг судлаж үзэх хэрэгтэй юм байна тийм ээ. Ямар хүн байсан юм тэр?

Б : Тэгээд тэр Богд дээр тэгэж очиж байсан юм гэнэ лээ. Тэгээд л өнөө номоо уншаад л тэгээд нэг ид шидээ нэг үзүүлэдэх гэж нөгөө бусад нь. Богд л мэдэхээс бусад хүн ч нээх мэддэггүй нарийн тэгээд мэдэхгүй болохлоор улс тоохгүй л байхгүй юу. Бусад лам нар нь ч сайн мэдэхгүй байгаа биз. Тэгээд за та нэг шидээ нэг үзүүлэдэх гэж Тэгээд өнөө унзад хоолойгоор нээх ном уншсан юм биз дээ, айхтар одоо ямар ч хэмнэлтэй байдаг юм. Дуганы нь орой ингээд салгалаж чичирч, бас дээрээс нь шороо мороо ч бас орчих юм уу тийм ээ. За за одоо болно одоо, та одоо ингээд боль боль гэж Ббогд тэгэж байсан юм гэнэ лээ. Тэгээд л нэг тиймэрхүү юм. Ярьдаг юм. Тэр тэгээд нээх эрдэм ном хөөгөөд л одоо ном мом бичээд л юм уу тэгээд ч байгаагүй хүн байх. Тэгээд тэр өөр нэрээр явж байхыг хэн мэдэх вэ дээ тийм ээ. Гэхдээ л нэг тийм ид шидтэй ч байсан юм уу нэг чадалтай л хүн байжээ тэ. Тийм ээ. Тэгэж л ярьдаг юм.

Д : Өөр одоо тийм яригддаг орон нутагт яригддаг, тийм лам хуварга хүн байдаг болов уу?

Б : Мэдэхгүй. Ер нь нээх мэдэгддэггүй юм зүгээр.

Д : Одоо сүүлийнн үед ингээд л овоо усаа тахиад байхаар хур бороо ер нь орох юм уу ер нь тэрэнтэй холбоотой байна уу, байхгүй нь уу?

Б : Үгүй ер нь тэгээд нэг жаахан юм ч орох юм орчих гээд байдаг юм шүү.

Д : Тахихаар уу?

Б : Мм. Тахиж байгаад ер нь жаахан нэг хорь гучин минутын үед нэг жаахан юм орчих, ядахнаа нэг салхи гараад нэг хэдэн ширүүн юм чулуудчихна. За тэгээд тэгэхлээр нь за энэ ч буруу л тахичихав уу гээд бас биенийгээ шоолох, үгүй ядахдаа тэгэж л байх юм байна шүү дээ. Тэгээд бас юм хаяна шүү. Орох

нь орно. Бас юм их юм эс болохнээ бас жоохон юм, жоохон ч болохноо юм үзүүлчихээд л байх шиг байгаа юм даа. Тэгээд тэр нь ер нь бас болж байгаа юм болов уу гэх сэтгэл төрж байгаа юм.

Д : Та бол гэртээ сан хүж уугиулчих уу?

Б : Уугиулчихна аа. Монголоор бол монгол ном байвал уншчихна, монголоор уншчихдаг юм.

Д : Өө та яаж сурав?

Б : Би өөрөө бие даагаад л тэгээд оролдож байгаад сурсан.

Д : Юу социализмын үед үү?

Б : Тийм. Тэгээд ер нь батжих нь юугаар. Энэ хөдөө гарснаасаа хойш нилээн оролдсон тэгээд гайгүй ээ, бас уншчихна. Монгол ном бас хэцүү, зарим нь. Барын Оройн ном (wooden printing book) бол өнөө өмнө нь байдаг на га гийн цэг таслал байхгүй тийм байдаг юм. Тэгээд уншаад жаахан харж байгаад яахлаараа, тэгээд цагаашраад ирэхлээрээ уншчихна. Бичмэл ном бол бас тиймэрхүү таслалтай хэрнээ бас хүн хүний бичиг өөр. Тэр үед чинь бас нөгөө нэг кирил шиг одоо тэр үсгийн ард заавал ийм юм гэж байх ёстой гэж байхгүй, бас хүн хүн өөр өөрийнхөө янзаар бичнэ. Аа заримдаа болохлоор юу яана, өнөө нэр үгнүүд адил дуудлагатай үгнүүд болохлоороо адил хэлдэг үгнүүд байна шүү дээ, тийм үгнүүд болохлоороо тэднүүдийг цөмөөрөнг нь ялгаж бичсэн. Тэр болвол үсгээр ялгаад биччихсэн, тийм байдаг юм. Тэгэхлээр тэрнийг болвол би тэр болгон толь бичиг биш болохлоор бас яг ингээд бичих юм бол чадахгүй. Аа унших юм бол, аа тэр нь ингээд ижил дуудлагатай үгнүүдийг чинь одоо тэгэж. Тэгээд бас хэдэн ном судар хуулж авсан, үгүй яахав дээ сонирхлоор, хобби гэгчээр. Өвөл одоо өнөө зурагт мурагтгүй раажав маажав л (радио) мадио л сонсно. Раажав (Радио) л сонсоно доо биднүүд. Раажав (Радио) чинь ер нь хамгийн их мэдээлэл өгдөг юм шүү дээ, зурагтаас илүү. Ер нь тэгээд өдөрт нь юмаа хийгээд сууж байхад ярьж л байна... чагнаад л сууж байна. Мэдээлэл авч л байна. Тэгээд л тэр мэтийг чинь зогссоноос хойш өнөөхийг чинь лааны гэрэл тавьж байгаад л нүдний шил хийж байгаад тэгээд л хуулаад л. Яахав ээ хэд хэдэн судар Алтангэрэл (Sanskrit: Suvarna-prabhasottama-sutra), Банзрагч (Sanskrit: Pancha-raksha), Таравчимбэ (Sanskrit: Arya-ghanaja-mahabhricaphulukarma-avirnasodhaya-bhudharakusumasancaya-sutra.) Даравжам тэгээд Найман гэгээн мэгээн гээд л хэдэн судрууд хуулж авсан. Хааяа нэг салхи оруулах юм, тэгээд тэр болгон ч уншаад байхгүй юм. Одоо үед чинь болохоор жаргал нь ташуураад зурагт руу гөлрөөд ерөөсөө ном уншиж чадахгүй юм. Зүгээр ном ч байсан одоо, би бол их уншдаг хүн байсан, уншиж чадахаа байгаад байгаа юм, энийг хараад. Аа нэг хэрэггүй нэг америк солонгос кино харж, өнөөхдөө алалцсаар байгаад, нүгэл л хураагаад байгаа юм. Энийг цохичихоосой энийг ч цохичихоосой гээд л. Ерөнхийдөө өнөө бие хэл сэтгэл гурвын нүгэл гэдэг

чинь, тэр чинь сэтгэлийн нүгэл хураагаад байгаа хэрэг. Арван хар нүгэл гэдэг чинь энэ гурав дээр л байгаа юм гэнэ лээ. Энэ чинь хэлнийх нь дөрвөн нүгэлтэй, сэтгэл биенийх нь гурав гурван нүгэлтэй. Ингээд 10 хар нүгэл энэ биенээс чинь тэр л гарч байгаа юм гэнэ лээ. Тэгвэл тэрнийг чинь хараад энийг л алчихаасай гээд сууж байх чинь сэтгэлийн нэг нүглийг л үйлдээд байгаа гэсэн үг шүү дээ. Бурхны ном манай дээр үеийн гүүш нар агуу орчуулдаг байж. Тэр орчуулсан ном нь бол яг л төрөлх хэл дээр, төрөлх хүн л зохиосон юм шиг бичигдсэн байна шүү дээ. Тэгээд ер нь тэгээд тэр мэргэн цэцэн байгаа тэр, янзын гоё юм л даа.

Д : Одооны яг хуучин монголоос нь шинэ монгол руу буулгачихаар бас орчин үеийн хүмүүс ойлгохгүй байна гэж, тийм бас яриад байх юм тийм ээ?

Б : Тийм яг үг үсэглээд ойлгогчихвол буулгачихвал ойлгохгүй. Утгачлаад яг сайхан Дамдинсүрэн гуайн өнөө Нууц товчоог монгол хэлэнд буулгана гэдэг шиг тэгэж орчуулах юм бол ойлгох л байх, тийм монгол юм чинь. Тэгэхлээрээ тэр орчуулагчийн чадал мэдэж байгаа асуудал. Одоо тэгээд хийдийнхэн, тэр бурхан багшийн сургааль гээд одоо нэг Энхбаярын орчуулга байна уу даа. Тэрнийг чинь уншихад бол ерөөсөө бурхны ном ерөөсөө сонсогдохгүй байгаа юм шүү дээ. Ингээд уншихад яг Библи, Библи орчуулчихсан юм шиг.

Д : За, за за.

Б : Орчуулга нь тийм гологдож байгаа юм. Бурхны ном гэдэг чинь бол ингээд гүйгээд л байна шүү дээ. Энэ үг хэл нь, тэр чинь ямар эрдэмгүй мань мэтийн юм орчуулж байгаа биш шүү дээ. Тиймээ эрдэмтэй мундаг хүн тийм ээ, орчуулгын дээд талын эрдэмтэй хүн байгаа шүү дээ, Энхбаяр. Тэгэхэд чинь тэгэж гологддог юм байна. Тэгээд нэг Библи л судар уншиж байгаа ном шиг санагдаад байхаар, тийм л санагдаж байна лээ. Харин тэр энэ америк ламын бичсэн номыг, ингэж харагдаж байсан, монгол хүн орчуулсан байна лээ, тэр болвол харин дажгүй орчуулсан байна лээ, сайхан орчуулчихсан байна лээ.

Д : Тийм кирил үсгээр гаргасан ном бас хэрэгтэй байгаа тийм ээ бас?

Б : Аа тийм, хэрэгтэй л дээ. Ер нь тэгээд шашин шүтэе гэж байгаа бол сүсэг бишрэлтэй бол номоо мэдэхгүй бас боогдож байгаа тал байгаа л даа. Тэр бол байж л байгаа. Аа монгол хэл дээр байгаа номыг бол бас ойлгохгүй л дээ. Ер нь тэгээд бурхны номыг бол кирилл дээр байсан ч бас ойлгохгүй л дээ, гүн ухааны номнуудыг бол ойлгохгүй. Зүгээр тэр хялбарчилсан тэр сургаалийн ном бол янз бүрийн сургаалууд их байдаг юм байна шүү дээ. Тэднүүд бол ойлгомжтой. Бадамсамбуу (Padmasambhava) багшийн сургааль гэж нэг жижигхэн ном байгаа. Тэрийг бол бол ерөөсөө яруу найраг. Тэгээд л тэр хүний сайн муу явах юуг л, бүхэлдээ сургааль л юм л ном л даа. Тэр бол тэгж явах хэрэгтэй, энэ нь бол. Ерөөсөө л сургааль. Тэгээд ерөөсөө тэгэж л яруу найраг. Жигтэйхэн гоё орчуулгатай. Нэгэнт л Бадамсамбуу багш гэдэг хүн одоо арван хэддүгээр зууны үед юм дээ, бараг Чингисийн үеийн ч хүн

юм уу, тийм төвд хүн юм байна. Тэрнээс ч өмнөх үе. Энэ юу нь байж л байдаг юм, би тогтоохгүй юм. Тэр хүний бичсэнийг тэр өөрөө бичээд л монгол хүн орчуулсан болоод л гайхамшигтай орчуулга тэр гэж бодогдоод байдаг юм. Зүгээр монгол хүн тэр хүний нэрээр бичсэн болвол тэр яруу найрагч хүн бас л их мундаг хүн. Тэгэж л ерөөсөө хаашаа ч харсан ер нь их гоё л доо.

Д : За тэгээд сайхан ярилцлага өглөө. Их гялайлаа.

Б : За их бурлаа даа. Ер нь ч их олон төрлийн сэдэв хамарчихав уу даа.

Д : Тэглээ.

Б : Бурхан шашин.

Д : Ер нь тийм л дээ одоо. Их сонирхолтой. Энэ бүхэн чинь бас монголын түүх болон үлдэж байна.

Б : Социализмын үед бол ер нь их хураана барина гэх юм байхгүй. Зүгээр яахав тийм ухаантайгууд нь хурааж хумиж л байсан байх. За хэрвээ хурааж хумидгийгаа бас ад үзэх “Аа энэ муу шуналтай, шуналтай, цаадах чинь шунаж л яваа” гэж маягтай. За дарга нар бол бүр үзэхгүй, энэ шуналтай нөхөр. Аа тэгээд өөрснөө ч бас нэг тиймэрхүү сэтгэхүйтэй, тийм байсан шүү дээ. Тэгээд л яахав дээ таван зуу гаруй, гурван зуу гаруй энэ тэр цалингаа аваад сардаа хүргэчээд л. Яахав нэг далын даавуу гэж байлаа, жаран хэдэн онд. Тэгээд янз бүрийн үнэтэй даавуу байх. Энүүгээр эрчүүд нь гоёно. Торго дурдан арван хэд, хорин хэд, гучин хэдийн торго байна, эмэгтэйчүүд нь гоёно. За тэгээд тэрнийгээ аваад л... хоол унд түлээ түншээ бэлднэ, тэгээд л амьдрал болоо. Сайхан жаргаж явна, иймэрхүү сэтгэхүйтэй байлаа шүү дээ, биднүүд чинь. Ер нь тэгэж л залуу насаа өнгөрөөж. Одоо болвол жаахан юм олсон нь бүүр олж бүүр ийм болгох гээд л. Зарим нь олох гэж явж ингэж ойчоод л, буруу зөрүү ингээд мацаад л байна. Зарим нь бол одоо яахав дээ тэгээд байгаагаараа, мань мэтийн юм бол байгаагаараа, тэрнийгээ бөөрөнхийлөөд л тэгээд идэж хэрэглэж байна л даа. Тэгээд энэ хоёр нийгэм болоод, эрс тэс хоёр нийгэм болоод манайхан бол бас нэг хэсэг их цочирдлоо шүү дээ ер нь. Одоогоороо ч цочроо нь гараагүй л байна. Зарим тааруухан нь болвол ер нь тэгээд их ядуу, их л ядуу байгаа байх. Ямар сайндаа л тэр траншей мараншейний нүх рүү очоод л, хүүхэд шуухдаа тэр гудамжинд хаяад л явах вэ дээ тэ. Ядарсан л хэрэг.

Д : Таны үед одоо идэш мидэш бэлдэх, сааль сүүгээ, малынхаа сааль сүүг өөрсдөө хувьдаа хэрэглэх тийм юм байсан болов уу?

Б : Аа байлгүй яахав, тэр чинь. Мань мэт бол хөдөө гадаагай, аав ээж дээр нэг хэдэн мал байна, өнөөхөөсөө л иднэ шүү дээ. За тэгээд өнөөхөөрөө хүрэхгүй бол САА-аас цохуулна. Хонь мал цохуулж иднэ. Малчид нь САА-н ажилчид үхэр адуугаа цохуулж иднэ. Тэр данс нь ямар байна, тэрүүгээрээ цохуулаад морь злэн дээрээсээ хөөгөөд л ингээд идчихнэ, тийм л байсан. Зүгээр нэг

хүнсний хомсдолд бол бас нээх халгиж цалгиагүй хэрнээ бас нээх хомсдоод ядраагүй юм шүү дээ ер нь. Хүсний хомсдол. Ер нь тэгээд монгол орон гэдэг чинь болвол хүн турж үхэхгүй газар байгаа юм. Энэ хэдэн мал энэ л байгаа юм. За би чамд нэг онцгой жишээ хэлье. Хоёр ядуу хүн нэг баян хүний мал маллаж, мөн үү. Нөгөө хоёр одоо юу ч байхгүй. Одоо тэр хонь төллүүлэх үеэр малласан юм байлгүй. Тэр юуны өнгөнөөс харахад, тэгээд өнөө хоёр хонио төллүүлээд бужигнаад байдаг. Тэгээд өнөө баян хүн боджээ “За энэ хоёр ерөөсөө ямар ч идэх юм байхгүй. Энэ хоёр одоо миний хониноос л идэж байгаа даа. Хариулж байгаа хониноос арай болоогүйг нь гаргаж идсэн байх ёстой. Өөр идэх юм байхгүй юм чинь юугаа идэх юм энэ хоёр. Чимээгүй байх л юм энэ хоёр яг идэж байгаа”. Ингээд нэг шөнө очжээ. Үдэш л очоод гэрийн нь гадаа чагнасан чинь л тооноор нь уур савсаад л хоол хийж болтой байгаа юм гэнэ дээ. “За яг даа” гэж бодно биз дээ. Ингээд л очоод чагнасан чинь хоёулаа ярьж байна гэнэ. “Ээ чи бид хоёр буянтай хүний хүчинд мөн сайхан жаргаж байна аа” гээд хоёулаа ярьж байна. “За энэ хоёр одоо яг л идчихэж одоо барьна даа” тийм ээ. Давхиад орчихож. Тэгсэн чинь яасан гэхлээр зэрэг хургалсан хониныхоо хальсыг чанаж идээд. Тэгээд “энэ буянтай хүний хүчээр чи бид хоёр жаргаж байна аа” гэж. Хүний сэтгэл гэдэг тийм гоё байхгүй юу. Одоо тэр наад харуулж байгаа малнаасаа алах, тэрнээс одоо шамшигдуулах тийм сэтгэхүй алга байна. Тийм их сайхан сэтгэлтэй. Тэгээд өнөө хүн баярлаад “За та нар энийгээ ингээд ав” гээд тэр чигээр нь өгч байсан юм гэнэ лээ. Тэгэхлээр монгол хүн турж үхэхгүй шүү дээ. Одоо нэг бас нэг яриа байна. Хоёр монгол хятад орчихоод, тэгээд яасан ч юм унаа унашгүй болж л дээ. Хоёулаа тэгээд л наашаа нэг хятдаас л наашаа явган мацаж, тэгээд л өнөө урд говьд л явж байж. Хоёулаа ер нь өлсөж үхэх гэнэ ээ дээ ер нь. Идэх юм байдаггүй одоо ер нь яалт ч байхгүй ер нь өлсөж үхэх гээд л. Тэгээд явж байсан нэг адууны толгой, сэгний толгой таарч гэнэ. Тэгээд өнөөхийг аваад л жоохон гал түлээд, өнөө ясаа ингээд гал дээр бариад байхдаар яс нь түлэгдээд дороосоо хална биз дээ. Халаад ингээд байж байтал өнөө тархи ерөнхийдөө болж эхэлнэ биз дээ. Тэгээд хоёулаа идэж, тэгээд тамир тэнхээ ороод ирж байсан юм гэнэ. Тэгэхлээр чинь борог нь хүртэл тийм байхгүй юу, тийм ээ. Борогийг нь хүртэл идэхэд одоо юу гэдэг нь. Одоо ухаан нь. Аа биднүүд одоо ярья даа, одоо зүгээр ер нь өөрснөө болвол идэхдээ сурсан л байдаг л байх, зүгээр. Мань бол одоо хорхой шавьж тэгэж иднэ ээ (never). Монгол хүн ер нь тун л бага иднэ ээ дээ, тийм ээ. Голио ч бай царцаа ч бай, янз бүрийн хорхой шоргоолж ч бай иддэг л гэж ярьдаг. Ном зохиол дээр байж л байх юм байна шүү дээ. Тэгэхэд чинь бол манайхан тэрнийг тоож идэхгүй байгаа шүү дээ, тийм ээ. За байз хонь үхрийн мах, тэгээд ахихлаараа тарганыг нь, туранхайг идэхгүй. Илжигний мах идэж байна гэж дуулсан уу?

Д : Ёстой дуулаагүй юм байна.

Б : Тийм. Монгол зохиол байсан байхдаа, хятад арай биш байсан юм болов уу, одоо. Нэг л зохиол л юм даа, уншсан. Нэг ядуу хятад яахав нэг ганц илжигтэй байгаад л. Тэгээд өнөөх нь насны туйл болоод л тураад үхэж гэнэ. Тэгээд өнөөхийг янз бүрийн ногоотой холиод л өнөөхийгөө буцалгаад л байж буцалгаад л байж. Өнөөх чинь бантан болоод л өнөө цэлцгий болно биз дээ. Тиймэрхүү юм болоод ирэхлээр нь баахан юу ногоо хийгээд л, ингээд л хоол амтлагч хийсэн байгаа юм. Тэгээд өнөөхийг чинь л одоо сүүлдээ юу яагаад, өнөө хоолонд чинь арай бас нэг чадалтай, өнөөхийгөө зарж ирсэн юм байгаа биз. Бас нэг хоол хийх маягтай болоод, тэгээд өнөөхдөө нэг савхаар нэг өнөө ваартай, нөгөө хүнд хоол хийгээд өгнө мөнгөөр өгнө тиймээ, өнөөхөөсөө савхаараа нэг дүрээд л хутгахлаар өнөө хоол янзын гоё амттай. Мань бол илжиг байтлаа үхэр үхсэн ч тэрнийг хаяна шүү дээ, тийм ээ. Хэрвээ тэр хүн шиг сэтгээд манайхан үхсэн үхрийнхээ махыг энэ одоо, энэ ирж байгаа янз бүрийн амтлагчийг хийгээд, ингээд нэг зутан юм болгоод л тийм амтлагч хийчихвэл тэрнээс юу нь дутах вэ, тийм ээ. Тэгээд амьдарвал, монгол хүнд бол амьдарвал идэх юм бол их байгаа юм. Өөрснөө хэрэглэхгүй өөрснөө чадахгүй л болохоос биш. Залхуу байна, үнэндээ залхуу байна одооны залуучууд. Ерөөсөө залхуу, айхтар залхуу. Ер нь тэгээд бэлэн л, бэлэн л юмаар амьдрах гээд байх шиг санагдаад байх юм даа. Би л бол одоо тэгэж л бодоод байгаа юм.

Д : Одоо чинь хөдөөнөөс, одоо юу гэдэг юм, бүр хөдөө малладаг бол сумын төв рүүгээ ороод, сумын төвөөсөө аймгийн төв, аймгийн төвөөсөө хот руу орох нэг ийм л.

Б : Тийм тийм. Нэг төв суурин бараадвал, нэг л биеийн амраар л жаргалтай сайхан л амьдрах ийм сэтгэхүйтэй л юмаа даа.

Д : Хөдөө одоо мал маллахад хэцүү болоод хүмүүс нүүж орж ирээд байна уу, яагаад хүмүүс орж ирээд байна?

Б : Ерөнхийдөө ч одоо хэцүү нь ч хэцүү. Ер нь хэцүү л дээ мал дээр ажил бол. Тун чөлөөгүй Таван жил үгүй шүү дээ. Аа нэг цаг улирлын сайхан, зүны дэлгэр цаг болоод нэг мал хуй нь таргалаад, ингээд нэг айраг цагаа нь дэлгэрчихээд байгаа үед бол малчин хүн шиг жаргалтай эрх мэдэлтэй, ууж идсэн хүн харагдахгүй. Энд ч хуруудаж л байна, тэнд ч найрлаж л байна. Тийм ээ, ууж идээд л наргиад л ингээд л байж л байна. За тэгээд хэцүүгээ хүрэхлээр ер нь янз бүрийн шуурга бас тааралдлаа, өнөөхийхөө хойноос л явна бас. Өнөөхийгөө алдчихгүйн тулд өнөөх нь амьдрал юм чинь. Аа тэгээд л зарим нь осгож үхэж байна, төөрч үхэж байна. Янз бүрийн л болж байна. Үгүй болвол хөлдөж бээрч ирж байна. Тэр чинь бол бас бэрхшээл шүү дээ тийм ээ. За тэгээд л өнөө ажил байна. Шавар шавхайг нь малтна, өтгийг нь гаргана. Аа хадлан бордоо бэлтгэнэ. Малын ажил гэдэг чинь ерөөсөө

өнөөдөр ингээд хийчихээд дуусчихлаа гэх юм байхгүй, маргааш нөгөөхийгөө дахиад л хийнэ шүү дээ. Ингээд л өдөр болгон л дахиж хийнэ. Ерөөсөө насан туршдаа тэр ажлыг болвол дахиж хийж л байгаа гэсэн үг шүү дээ. Тэр ерөөсөө дууссан ажил гэж байхгүй шүү дээ, малын ажилд бол. Тийм л юм байгаа юм. Тийм учраас нэгдүгээрт тэгэж байна. Хоёрдугаарт яахав амьдралын бас юу байна л даа, ганцхан малын ажлаас ч бэрхшээгээд юм уу дандаа жаргал хөөгөөд ч явж байгаа бас биш л дээ. Энэ бол бас олон талтай, олон талаас нь харахгүй бол бас болохгүй. Тэгээд хүүхэд сургууль соёлд явж байна. За тэгээд бас нэг л амьдралын эрх арай илүү мөнгө олчих, бас нэг худалдаа наймаа хийгэхвэл ч арай замд ойр юм уу гэнэ, янз бүрээр л явж байгаа байх, тийм ээ. Тэгээд амьдралын эрх л дээ тэр чинь. Ганцхан ч одоо зүгээр мөнгө олох гээд жаргал хөөгөөд ч явж байгаа юм биш. Тэгээд ер нь болвол амьдралын эрхээр амьдрах, бас нэг сайн сайхны төлөө л зүтгэж л яваа улс шүү дээ, тэр чинь. Түүнээс биш ганцхан жаргалтай амьдраад л зүгээр мөнгө олоод идчих тэгэж яваа улс биш, ерөхийдөө. Тэр дотор бол залуучууд эд нар болвол нэг бодохгүй амар амьдрах гэсэн залуучууд байна л даа. Тэрийг л би шүүмжилдэг байхгүй юу. Түүнээс биш тэр нүүдэл суудал болвол бас нэг арай аятай газар оччих тийм ээ. Одоо баруун аймгийнхан их нүүж байна. Тэр чинь зах зээл рүүгээ л ойртож л бас л нэг айтайхан л амьдрах гэсэн. Тэнд нь өнөө мал байгаа, зах зээл байхгүй, тийм ээ. Махаа зарна, зах зээл байхгүй шүү дээ. Аймгийн төв сумын төв хоёрыг л хангачихна, тэгээд болоо шүү дээ, өөр. За тэндээс чинь машинаараа ачаад давхина. Зуны цаг болвол замдаа гээгээд очно, өвлийн цаг бол өнөө мах нь тал талаасаа ирээд цуглачихсан үнэ хүрэхгүй. Өнөө бензинийхээ үнийгээ дийлэхээ байна. Гэхдээр зэрэг л малтай нь малаа туугаад л ингээд явж байгаа гэсэн үг л дээ. Тийм ээ. Тийм л юм.

Д : Бас дээрээс нь хүүхдүүд нь одоо хот руу сургууль соёл руу явна. Тэд нарыгаа бас дагаад хот руу орж ирээд байх шиг байна тэ?

Б : Аа тийм. Тэд нарыгаа дагна. За тэгээд нөөдүүл нь хотоос бас авгай хүүхэд авна. Нөхөр ханьтай болно. Тэндээ шингэнэ. За тэгээд тэднүүдийг чинь бас бараадхаас өөр арга байхгүй.

Д : Одоо ч одоо зуун хэд ч байна уу, хоёр зуугаад ч байна уу, их дээд сургууль Улаанбаатар хотод байна шүү дээ. ТМС техникум гэдэг нь байхгүй болсон.

Б : Ер нь тэгээд их дээд сургууль ч яахав төгсдөг. Уул нь бол дээд сургуульд сууж байгаа хүн гэдэг чинь дарга л болох гэж сууж байгаа биз дээ, тийм үү. Дарга болох ахиухан цалинтай ажилд орчих. Тэгээд тийм ажил олдохгүй юм, тэрний зах зээл байхгүй байна шүү дээ, тийм ээ. Эхлээд хүн болгон дээд сургууль руу. Яахав одооноос яахав, одоо бас нэг мэргэжлийн сургууль коллеж гээд гараад байнаа даа. Тэр л одоо уул нь их хэрэгтэй юм л даа. Их сайхан мэргэжсэн мэргэжлийн ажилчин хүн гэдэг чинь даргаас илүү цалин

авна, авна шүү уул нь болвол, тийм ээ. Тэрнийг л ухаарах хэрэгтэй юм байгаа юм залуучууд. Тэгээд л өнөөх чинь бас нэг муу нэрэлхүү зан байна л даа. Зүгээр нэг дунд чинээний сурлагатай хүүхэд байлаа гэхэд чинь бас нэг тийм дунд чинээний сурлагатай нэг дээд сургуульд орчихсон болохлоор би ч орчихно, би энэнээс дутуу юу байх вэ. Чи тэр барилгын коллежд оч, тэрнээс дор байхдаа яадаг юм, гэсэн ийм сэтгэхүй төрөөд байдаг юм болов уу гэж би таагаад байдаг юм.

Д : Харин бас нэг тийм юм байгаа байх тэ.

Б : Тийм. Би дордохдоо яахав дээ. Тэгээд хоёр гурван дээд сургууль төгсчихөөд л ажилгүй байна шүү дээ. Тэгээд энэ аав ээжийн хэдэн малын мөнгө, аав ээжийн тэтгэврийн мөнгө л тэр урсаад дуусна. Тэр нөхөр бол ерөөсөө мөнгө олоогүй шүү дээ. Хоёр гурван дээд сургууль төгсчихлөө л гэнэ, ажилгүй л. Муухан хүн бол хичнээн юманд яваад тэр толгойд хэрэглэх ашиглах, тэрнийгээ ашиглах арга замаа олдоггүй л юм байна л даа. Тэгээд дөмөг нь бол яахав тэгээд болдог. За яахав татаа чангаалттай нь бол яахав, тэгээд янз бүрээр болж байгаад, нэг юм тэгээд ажилд ороод, тэгээд тэндээ нэг юм шигдээд байгаад байж болдог л байх. За тэгээд татаагүй танил талгүй мань мэтийн хөдөөний юмнуудын хүүхэд хичнээн гайгүй байсан ч их л сүрхий эс бол тэгээд савахгүй шүү дээ. Нэг онц гэсэн дүнтэй л хичээгээрээ л очно л доо. Тэр чинь. Багшдаа нэг хэдэн юм атгуулж байгаад л, бас нэг онц гэсэн дүн тавиулчихаад л очно шүү дээ, хүний адил л очно. Тэгээд өнөөхөд итгэж байгаа хүн байна уу, үгүй юу. Тэр их хэцүү л дээ, тийм ээ.

Д : Танай хүүхдүүд бол одоо, танай нэг хүүхэд тань одоо хөдөө малчин болсон уу?

Б : Тийм. Нэг хүүхэд л малчин болчихсон. Хамгийн сурлага гайгүйтэйг нь малчин болгочихсон юм би. Тэгээд бусад нь энэ төвд л явдаг юм. Нэг нь төвд, нэг нь хотод. Нэг хоёр охин байдаг юм, нэг нь Эрдэнэтэд, нэг нь Солонгост яваа юм. Хойтноос. “Бушуу ир” л гэж загнадаг юм. Ирэхгүй юм. Мөнгө олсон ч юмгүй зүгээр тэнд дэмий тэнэж явахаар чи энд ир. Уул нь энэ “Хас”-д юуны, зээлийн мэргэжилтэнгээр ажиллаж байсан юм. Тэгэж байгаад гэв гэнэтхэн би явахаар боллоо гээд л, тэгээд л нууж байгаад л гэв гэнэтхэн яваад өгдөг золиг юм. Түүнээс бид хоёр эхнээс нь мэдсэн бол. Орой л гэв гэнэтхэн л өнөө маргаашгүй явах болсон гэж нэг хэлээд л, нэг орой ажлаа өгнө гэж ирээд л тэгээд л шөнөжингөө сууж ажлаа өгчихөөд, маргааш болсон хот руу явсан. Ээж нь арга байхгүй хот руу дагаад л явсан. Очоод хоночихоод л маргааш нь нисээд явчихдаг хүн гэж байгаа юм. Тэгэхлээр чинь одоо яах вэ, бид хоёр яалт ч байхгүй тэгээд алдчихаж байгаа юм. Ноднин өвөл цагаан сарын үеэр ирж нэг хэд хоночихоод л тэгээд явсан, дахиж сунгуулчихсан гээд л явсан. Тэгээд заримдаа ажлаа сольчихсон л гэж дуудах юм. Тэгээд юу болж явдаг юм одоо. “Зүгээр чи тэнд ажилтай

ажилгүй тэнэж явахад ир” гээд л би чинь загнадаг юм. Би ч одоо яахав, за за өөрөө л мэдэхээс биш. Болсон болоогүй дэмий юм яриад ч яахав, тэгэхийгээд байж байх минь.

Д : Өнөөдөр чинь одоо шуурна гэсэн, гайгүй л байх шиг байна.

Б : Гайгүй байна. Жаахан уурдуураа байх. Манай энэ Өвөрхангайн хойд зах нь юм болохлоороо бас арай жоохон зөөлөндүү тэгээд нэг... баруун хөндийгөөр ингээд явчихдаг. Тэгээд Өвөрхангайн урд талыг тойроод ингээд явчихдаг. Тэгэхлээр Өвөрхангай ч гэж ярьж болно. Тэгэхнээс оройхноос бас, бас нэг юм ирж магадгүй л дээ юм. Ер нь тэгээд манай цаг уур чинь ч сайн шүү дээ. Ер нь алдахгүй дээ, ер нь хэлнэ дээ. Цаг уурыг чагнаад байхад бол хэрэгтэй л.

Д : Дээр үед малчны календарь гэж нэг юм байлаа тийм ээ.

Б : Тийм. Малчны календарь яахав нэг арга билгийн улирал, цаг өдрийг л заачихсан, он сар өдөр гаригтай нь заачихсан тийм л календарь. Одооных шиг тийм ч дэлгэрэнгүй байгаагүй. Аа тэгээд л сайн өдөр олох гээд эрэхлээр чинь ерөөсөө олдохгүй. Нэг хүн хэлж байсан юм гэсэн. Нэг үздэг хүн гээд үздэг гэсэн чинь “Аа чи ч ажил хийхгүй юм байна даа” гэсэн гэж. Янз бүрийн ажил. Тэр юу гэж байгаа юм бэ гэхлээр зэрэг, энэ өдөр үзээд, сайн өдөр олох гэхлээр зэрэг сайн өдөр гэдэг олддоггүй юм байна л даа. Тэгэхлээр ажил хийж чадахгүй байхгүй юу. Аа энэ ч муу өдөр, тэр ч муу өдөр тэр ч тэгдэг өдөр гээд. Ажил хийхгүй юм байна даа гэж байсан гэнэ лээ.

Д : Гэхдээ та бол бас нэг чухал өдрүүдээ бол бас харчих уу?

Б : Аа бас харчина л даа яахав.

Д : Энэ Батхүү гишүүний?

Б : Батхүү гишүүний календарь.

Д : Батхүү гишүүн чинь эндээс гарсан уу?

Б : Тийм. Сонгуулийн жил календарь л их болдог юм. Хэдэн төрлөөрөө л календарь. За ярьсаар байгаад галаа ч унтарчихаж, ухаангүй ярьж дээ.

Д : За та их сайхан ярьлаа даа, та.

Б : За яахав. Цаг завтай бол ч яриад л байх юм байна л даа. За тэгээд болов уу?

Д : За боллоо, сайхан боллоо.

Interviews

We are grateful to Ms. Buyana Bayasgalan for checking and correcting the translation.

I Badamkhand

B: Badamkhand

D: Lkhagvademchig

1 Origins or Past History

B: Let's use this desk to write on.

D: Alright.

B: Religion in our day was poorly understood.

D: You must sit down. Where would you like to sit?

B: Never mind — it doesn't matter.

D: Aren't you cold?

B: I'm fine.

D: Sit right here and tell me your name.

B: Badamkhand.

D: Your last name?

B: Dambin.

D: Where are you from?

B: You mean now?

D: Yes.

B: From this general area, but I was born near the far eastern side of the Khandjamts stupa.

D: In which year were you born?

B: 1943.

D: Have you been living here since you were born?

B: I have always lived here. I now live in the countryside where I retired after working in a factory. I live on a pension and am now 68 years old. My mother and father still live there, as did my ancestors, among whom was a *taij* (or nobleman). One of my father's relatives was a Buddhist lama. There was a monastery on a hillock and the lama there was my father's relative, and he was my great uncle. He was a doctor of Buddhist medicine and this relative of mine was talked about all over. But lamas were taken away.

D: Did you go to school when you were young?

B: No. In my time, there were hardly any primary schools for five year olds. Kids who didn't go to school became "street smart" and cunning, as did those taken

out of school by their parents.

D: How many children were in your family?

B: There were two of us. My younger brother lives in the city and is now an old man. He was in the military for many years and now is on a pension.

D: Did your brother go to school?

B: My brother did and from school he went straightaway into the military and now is pensioned.

D: Are your parents alive?

B: Yes, they tend their herds and there are many animals for them. I was a herder for a long time. But life goes on. As of now I can say I never learned much — I didn't go to school.

2 Building the Kharkhorin State Farm

D: Had the *negdel* movement started in your time?

B: It started in 1958, and everyone joined in 1959. For example, my area became Shankhain *negdel*, and I think it was named "Peace" but I am an old woman and so I forgot. In 60 and 61 and even in 58, 59 and 60 the Virgin Lands Plan started, and ploughing began. In the 1960s, the State Farm took over, and this area became the Kharkhorin State Farm. Most of our *negdel* herds were given over, and those animals that remained with us were looted. Finally, the State Farm came to control the herds, and people were left without their own animals. Herding was the main occupation in the countryside, but by 1978 our State Farm had cleared out everything, and nothing was left — not even ten head of cattle. But only our State Farm suffered in this way.

D: Did the animals return?

B: Yes — as we tried to replenish our herds, but only one hundred remained.

D: What happened to the herds?

B: All the herds were sold to the *negdel*.

D: The State Farm herds?

B: The State Farm herds were sold to the *negdels*. But the *negdels* sold them so, really, our State Farm was looted. Looking back now, I can see there was no accountability. The *negdel* farmers had many more animals than most private herders — even more than the herding families on the State Farms who had few of their own herds.

D: Did people generally like the *negdel* movement? How was it received?

B: Some liked it and some really hated it. I was 16 or 17 at the time of this *negdel* movement, and I was quite mature. Many people just followed along with the majority, but others hated the *negdels*. Others disliked communal things, and that was the general feeling.

D: Did your parents have herds when they were on the State Farm?

B: Yes, they were given them by the State Farm.

D: Did your younger brother attend school?

B: My younger brother went to school and finished the fourth class at Shankhad, and then went to a school in Khujirt. There were seven grades in the school in Khujirt, but he only completed, maybe, fifth or sixth grade. He drove a tractor or a combine in the countryside for several years on the State Farm, and then he joined the military.

D: What did children generally do after getting up in the morning?

B: After getting up, the kids milked the herds and took care of them. It was around three o'clock.

D: Really that early?

B: Yes, the stars were still out. Even before the *negdel* movement, we had a milk factory, and the milk was collected. What a shame to be up so early, the stars glittering everywhere as the children gathered up the cows for their milking. Here and there you could hear the noises from the cows that were being milked. Nowadays, the children don't get up so early, and if they do, they say they will die!

D: When did you go to bed?

B: We went to sleep when it was very dark because all day long we were busy milking the cows and chasing the young calves out with the herds, and the day seemed like a year. So it was only in the evening that we had a little free time. In the summer, the evening was cool, and we could play. We did not go to bed until after the sun went down way after dusk. But it seemed to me that as soon as I fell asleep, it was time to get up again. Now I have my own children, but since I was little, I woke up to milk the cows. I worked for the State but if a person has only his or her own cow one doesn't get too tired, and it isn't too much. People cannot manage with more than six, but if there is an early winter those six may decrease to one by the summer (an early winter could lead to death for many animals).

D: What did you do for fun, and how did the children play?

B: Us? We used to play along the river banks with the rocks and the bones.

D: Did you use the stones to play the game of *ger*?¹⁾

B: Yes, and we built things from animal bones, and that is how we played.

D: Did the boys also play *ger*?

B: Yes, and the girls and the boys played together, and the girls would also herd the animals. Sometimes we would find a brightly colored and beautiful piece of china. Such was how we played. Today, however, children see beautiful things but pay them no attention.

D: At that time, did the old people, in the evening, tell stories about famous events?

B: They spoke from the heart and also played many games, which included flicking

the ankle bones as well as the game of *alagh melkhii*²⁾ Today young and old also play games with ankle bones, and at Tsaagan Sar (New Year) in both the city and small towns everyone gathers, and a rug is spread out to sit on when everyone plays that game. All the generations play together and sometimes games are played with precious stones.

D: Precious stones and wood?

B: Wooden animal figures are played with, as are dominoes. We also play with squares of wood with animals carved on the tops.

D: Did you play cards?

B: No — I have never seen them.

3 Food in Socialist Times

D: What sort of food did you eat then? Did you eat vegetables as we do now?

B: No. Generally eating vegetables was unknown. At that time, only flour was produced from things that were planted. The norm for one family was three kilograms of white flour and two kilograms of coarse grain. Bran flour looked pitch black. The flour would arrive at the center and we would pick up our share —if we were lucky we would get two kilograms and we would eat it with “white fat”, *aruul* or *eezgii*³⁾. In the evening we could eat meat and, in the morning we drank butter tea with some meat. The children put their *aruul* and *eezgii* in their pockets. In the evening we might have blood pudding sausage or the meat from a head or shin.

D: Were there potatoes and other vegetables?

B: We knew about potatoes. The *negdel* movement had been victorious by 1962, and there were some vegetables planted — especially potatoes. But in 1958-9 we had no idea how to eat potatoes. Actually, in 59, 60 and 61, the State Farms were raising what seemed like these strange potatoes which now are strangely beautiful when they have turned yellow and their skins are new. And when cabbages were unloaded on the ground, few were even given away since most of us did not know how to eat them. The animals wouldn't even eat them, so they just rolled around. I didn't know how to eat the potatoes, cabbages, and other vegetables which I eat now. In the past, the potatoes were sliced and mixed with other food, but since they were never cooked through, no one ate them. Later in 1963, we moved to the [village] center, and the children began from 1965-1970 to eat their vegetables. Funnily enough, I now enjoy vegetables and use them in making soup.

D: Did you have many grains?

B: We had some millet. Rice was extremely rare so only a few people ate it. There wasn't much white rice. Now I am grown up and am alone with my parents who are brother and sister. My father had two children; my brother was raised by my

father, and I was raised by my mother who is my father's sister. So my brother and I grew up separately. We had very little rice but when a child caught cold or had a cough, he or she would be given boiled rice. But millet was also scarce.

D: What else do you give a child with a cold or cough?

B: We give light food, including millet.

D: Do you offer the child sugary fruit?

B: If we can find it. When I was small, we had a little pot which held big white sugar cubes — like crystalized sugar. We didn't have wrapped candy. Every so often, a person could find "marrow candy," which was long and narrow, but recently it is hard to find. Now we have sugar all the time. A pot of sugar was a big deal since it was helpful in getting a sick person to drink. Sugar is best in cubes.

D: Russian?

B: Russian cubes. Children gather around the sugar bowl and grovel as they divide it up, pounding it with a hammer or a knife.

D: Did you get any?

B: The children gave me some, but adults got their sugar in the city and divided it up. You never saw granulated sugar. We rarely saw raisins, but at the end of the 1960s the lamas gave us Chinese Nanjing plums, which were delicious. Now we have similar things which the overseas Chinese bring here. When there is no war threatening us, things are pretty good, and we can buy things. There is technology in the field of transportation as well. So that is how we grew up. We do eat and drink more, and we eat a lot of blood pudding sausage as well as the inner stomach, the head and shins of animals.

D: What about sausage and tea?

B: We weren't allowed to drink much tea.

D: Why?

B: Children do not generally drink tea, which is believed to make them sick.

D: I have heard that tea was not given to children.

B: They drank a mixture of water and milk, not tea. In the spring and summer you could not yet drink the new batch of *airagh*⁴⁾ and fatten up and get satisfaction.

D: Is meat generally eaten during the summer?

B: No — and *bortz* (strips of dried meat) isn't even made. Spring is the time for ploughing and planting vegetables. The animals need to migrate, so it is not the time to slaughter the animals and, anyway, the meat could spoil. If some animals were slaughtered, their meat was cooked with hot stones or boiled and eaten. But in summer, little meat is eaten.

D: Did you want to eat meat in summer?

B: Not in summer. In spring after Tsaagan Sar⁵⁾ when there still is snow, all is beginning anew, and the herds start to calve and give birth in places spotted with

snow. We then have milk with our grain, which with their protein can substitute for meat. When it is very cold and rainy, we enjoy this milk and grain, and if this weather continues for several days we eat lungs. I don't know why we didn't make *bortz*, but at such times one should make a gruel and slice fat into it — so delicious. So you didn't see that much meat then.

D: Did you have barley flour or parched barley?

B: No barley flour, but there is parched barley flour in the Gobi. We really didn't have barley flour then, but it can now be found in the south Gobi area.

D: Did your work with the herds include industrial work?

B: Yes, I worked with the herds on the State Farm for two years taking care of the sheep, and then I worked in a factory for thirty years. I got my pension after these thirty years.

D: What sort of factory?

B: I worked in a flour factory for many years, which had been built about the same time as the State Farm. After it was built, people came from the distant Guchin and Bogd *sums* (or districts) by truck to work there. Herders, tractor drivers, and workers all labored in this factory.

D: Were most of them young people?

B: Nothing but young people, only about twenty, during my time.

4 Festivals and Religion in Socialist Times

D: When you were young, what festivals did you enjoy?

B: There weren't many other than Naadam⁶⁾, which had its faults. Let me think what there was besides Naadam. There was an election in a *ger*, or one went to the Erdene Zuu lamasery for several days. And we played chess, draughts, and if things were bad perhaps we listened to the radio station, which had a board game connected to it. It was nice when it was decided to hold horse races or chess or draughts matches. Naadam did have wrestling as well, which our children now have. We got up early in the morning to milk the cows, and then we went to the town of Shankh, galloping on our horses. We returned to milk the cows in the evening and did the same the next day. But the *ger* Naadam was a great two days for the children, while fathers and mothers enjoyed three days of drinking spirits and *airagh*. That is what I call Naadam.

D: Tsagaan Sar?

B: Yes, Tsagaan Sar. We were not allowed to celebrate Tsagaan Sar. We could not greet people or give Buddhist offerings and, in fact, we would hide them in a chest. We could have no festivities, nor could we arrange the table. In the evening, however, we would take the *deel* (or Mongolian robe) from the chest and lay it out by the lapels.

D: So this went on during Tsagaan Sar?

- B: Yes. When I was young, things were hard during that time. Now I remember the agitator who would come by and check that we were not celebrating and would check our table.
- D: When was that?
- B: In the 60s and in 57, 58 and 59 we couldn't even greet people. In the 50s, only the State herders could celebrate Tsaagan Sar, which we could only celebrate much later.
- D: In those days, could you do much at Tsagaan Sar?
- B: No, as a worker, I couldn't.
- D: Did you celebrate December 25th?
- B: We didn't know about Christmas. I only heard that many other countries celebrated this holiday. I was not a pious woman and knew little about this.
- D: Were you a Buddhist when you were young?
- B: We had to hide my Buddhism. If we were open, we were punished. That is how it was. But the religion remained. We were considered remnants of feudalism if we were believers. When I was young, we hid many small statues of the Buddha in the cliffs.
- D: Did you light a Buddhist incense lamp in the evening?
- B: Yes. We took the lamp out of the chest and saw the image.
- D: Just in the evening?
- B: In the evening. That was the best time. Later it was quickly locked away.
- D: Was this true of all families?
- B: My family always did this, and I don't know about what other families did.
- D: Did your children wear protective amulets?
- B: Yes. Some small leather images of Buddha were made to be pinned onto clothing.
- D: Were you taught the Buddhist incantations during those oppressive times?
- B: We recited these in times of distress out in the countryside.
- D: Did your parents teach you these?
- B: Yes, they gave us a demonstration.
- D: At that time, did you come across many lamas?
- B: No, one did not generally see a lama in his costume, although there were a few lamas, always dressed in black, here and there.
- D: Were they involved in animal husbandry?
- B: They worked in herding and if they didn't, they would have been arrested as remainders of feudalism.
- D: Does your husband have children?
- B: Yes — we have children together and have built a *khüree* (or lamasery). Later they left for the city before returning to the country and had their *khüree* once their religion was permitted. They were “people of the book.”

D: Did people read the sacred texts?

B: Yes, at night. An old man — (and certainly during Tsagaan Sar) led the reading of the books at night to the family that had formed a circle and all were silent.

D: Did the lama speak and ask questions?

B: Yes, in a secretive sort of way, and there were questions foretelling the future. A fortune teller could tell who would fail. Things got better later.

D: Were there periods when things were going quite well? Did families generally accept Buddhism?

B: By the 1970s things were better, and the fear of worshipping Buddha had lessened compared with earlier times. People were less afraid to read the scriptures and give blessings.

D: Did the Dalai Lama visit Mongolia and did you see him? Had it been about sixty years since he visited?

B: I worked in the capital at that time.

D: Did you and many other Mongols hear him?

B: We heard him. He rode into the city on a special bus in the 1970s and went to the Gandan Monastery⁷⁾. The road was closed, incantations were said, and people gathered.

D: How are people doing nowadays? Did the Party leaders promote atheism?

B: Yes, some did.

D: Did some people preach against religion?

B: Ah, frequently, frequently. Religion is often spoken of badly. They would say that there has been deception and oppression caused by religion for two hundred years. By the 1980s, things were not as bad and finally almost alright. Some people were exonerated, one could talk about what was bad, and there was less fear.

D: Do you have a sutra book?

B: I had a sutra book but didn't know how to read it.

D: Is it alright if the lamas read the sutras for you?

B: The book wasn't read very often — just now and then. Once a year it was read, and then the family put it away. I don't know what happened to the sutras. There are no books now. My mother said they were not essential but respected the Buddha.

D: What did you think of the Buddhist religion when you were young?

B: I didn't really believe in the religion and thought it was all a lie. Now I can talk about what is false. Now we do not need to be ignorant, and we can talk about the feudal era and all sorts of things.

D: Is there an artel (or workshop) in existence?

B: Artel? There is the "Khujirt artel" in the "Shankhad Lower center," which produces elegant Mongolian boots.

D: Do the lamas work in the artel?

B: The older ones do. Several remained and worked for Shankh, but I really don't know about the Khujirt artel in Khujirt. There are quite a few artels in Khujirt, where there is a spa for holiday makers near the big *oboo*⁸⁾ in the *sum*.

D: Was there a sort of “cultural revolution?” (The reference is really to a “hygienic revolution”)

B: Yes, when I was no longer a child, and it was exciting. It really was a requirement of “The Three Ministries” that everyone had to have a blanket, and each bed had to have two sheets made from washable cotton.

5 The Course of the “Cultural Revolution”

D: What happened in this “cultural revolution?”

B: You couldn't sleep well because you were told that the officials would check on you at night, and if you didn't meet their demands, you could go to prison. But as a result of this “cultural revolution,” children were given a play area, a library with a reading room, and sanitary facilities. There was a notebook pinned on a post showing which leader or committeeman was in charge for a week or two. There was improvement thanks to the introduction of the notebook and cotton bedclothes, which were intelligent additions. Grease could be wiped off the cotton curtain.

D: Do you know which curtain I am referring to?

B: Yes, it is hung in front of the bed, and they are decorated but not every *ger* is painted, and most are grey-brown and without color. Cleaning the wood and rafters and roof rings in the *gers* requires scraping them back to their base. The “cultural revolution” was very demanding.

D: During this “cultural revolution” did people use the sheets or stow them away and save them?

B: They were used and a big family would use them many times over. But they had to be kept clean in case of a random inspection.

D: Do you have a metal frame bed or a wooden bed?

B: Wooden beds — the blue and the green beds (referring here to the headboards) were the nicest. Metal beds came in later, and we got a new one with an elegant blue head board when we moved to the *aimag* (or province) center. We still have that bed, which is now coated with smoke. But there are no such beds in the countryside. A bright colored bed is elegant and can also serve as a bench, which can need to have its feet repaired.

D: Were you supposed to be a member of the Party?

B: I was in the factory union and if you were in that union, most people joined the Party.

D: You didn't have to be a Party member?

- B: No. There were strict requirements, and only those with a good education and good job could be Party members. One had to “shadow” or be under the guidance of a Party member for three years before becoming a member.
- D: Was your salary at the time enough for you to live on?
- B: Yes. My salary at the time was good. Back then money was really money. A guard was paid 100 to 200 (*tugriks*), and a cleaner earned 120. Those who had worked for a long time in a factory received 180. Those who worked with grains got 350 to 400 and certainly 400 to 350 wasn’t bad — it was good money. My husband and I each fulfilled our norms and so we had two salaries which gave us enough
- D: Were goods sufficiently plentiful?
- B: Yes—plentiful enough. We had cotton cloth and calico and satin twill, which are now also available.
- D: And Chinese goods?
- B: We had Chinese 18 and 30 *tugrik* silk — elegant silk and very precious silk. Russian silks are poor — the Russians don’t have good silk, and their best silk is soft and costs 22 *tugriks*. But there are all sorts of Russian satin, as well as rather coarser goods. Now there are a lot of luxury products. In our day we didn’t dress up as much as the children do today. We used to make our everyday *deels* out of calico and cotton. The nice decorated silk we grown-ups used to make our fancy *deels*. Ready- made clothes were rare.
- D: Were there Russian specialists in your factory?
- B: There were two or three Hungarians from Hungary.
- D: How did they fare?
- B: As if they lived here. They taught in the industry night and day.
- D: With a translator?
- B: Yes there was a translator — we couldn’t manage without one. and could only use some sort of sign language. After working beside us for a while, they studied and spoke our language. So that was the Hungarians. Poles did some work on the electric station, and we came to depend on them. They also were involved in the spirit industry.
- D: Did the children join the Young Pioneers?
- B: Everyone joined the Pioneers.
- D: Was it important to go to school?
- B: It was important to go to school, and it was also important to join the Young Pioneers and wear a red scarf with your *deel*.
- D: Did you wear one?
- B: We didn’t have a uniform then, so we wore the scarves with our *deels*.

6 The Changes in Religion and the Present Way of Life in Democratic Times

D: Who was the famous lama in your area and what was his story?

B: These people were by and large hidden so I did not know them, but there is a story about this rather isolated old man called “the Orkhon teacher” who lived near the source of the river.

D: Have you been interested in Buddhism for long?

B: We didn’t have a Buddhist altar until recently — in the 1990s.

D: Who was this lama?

B: Which lama?

D: The one on the far side in the photograph.

B: That man is my children’s father.

D: Oh, yes.

D: Maybe I am that lama.

B: You are not a lama.

D: Later, did you display the Buddha?

B: Yes, later, I don’t know the name of the Buddha — it’s from the children.

D: Did you have a book of sutras that is the guide to everything?

B: No — we didn’t have one. The one I have now is from my son. Those two little ones came from the children in the lamasery.

D: Are there novices at the lamasery? Are any of your children lamas?

B: One of our sons-in-law is a lama — a Buddhist lama. The family has no sutra book, but the lama has a rather large one. He is called Gombo, and our son’s child is a Buddhist lama.

D: Do you approve of your grandson?

B: Well, The little one is my grandson, and the bigger one is our son-in-law. How can one not approve since they are doing what they like to do?

D: As a Buddhist, do you offer the choicest food and a lamp as prayer offerings?

B: Yes. I do pray from time to time although I sometimes have to remind myself to do so.

D: When is the Shankhin Monastery open?

B: The Shankhin Monastery has now been restored and reopened not long ago — maybe in 1992 or 1993.

Daughter : My father passed away in 1994, and we went to have prayers read at the Shankhin Monastery.

B: I am sure that many elderly people were there when prayers were read and since the monastery had just opened it must have been in 1992-3.

D: Are there still older lamas at the Lamasery?

B: Yes. though most of the elderly have died. So there are mostly children.

D: What is happening to the elderly lamas at Erdene Zuu lamasery?

B: There are only a few who are very old. There are always younger lamas but few who are really old.

D: Were there many lamas your age?

B: One or two here and there. Not many any more. Back then, very few lamas at the Shankhin Monastery were appointed by the government. We didn't see many Buddhists, but there were many elderly people including lamas in our time. Later, many children were becoming lamas. The abbots of our monastery were youths in their twenties and thirties. Purevee (Head Lama at Erdene Zuu) was about 40, wasn't he?

Daughter : 42.

B: Oh, he's my age. The assistant or junior abbot was a bit younger.

D: At this monastery.

B: Yes, they were all very young.

D: Both are abbots. Are there two abbots?

B: Yes, two. The health of the chief abbot is not so good. Sometimes they work — sometimes they don't.

D: Do you go to the lamasery?

B: I do.

D: Do you have prayers read?

B: I am not too healthy, but I have them read when I can. My son-in-law is a proctor in this lamasery.

D: What is his name?

B: Erdenechuluun. He goes to the city a lot.

D: Is he there now?

B: Yes. he is now.

D: Is Basansüren the other abbot?

B: Yes.

D: Is he also in the city?

B: Yes. Basansüren and my son-in-law are about the same age, maybe one is a year older. Now they are in the city, but I heard that recently they were in the south at Utaagumben.

D: Did he become a lama there?

B: Yes. He had been there since he was young.

D: After the 1990s, did all the children want to become lamas?

B: Yes, they did. I like to learn about the great lamas.

D: Why did the children all wish to become lamas?

B: Who knows? Even now children talk about that.

D: Children do feel that way.

B: Yes. It is thought that a lama's life is very comfortable. Our children joined a small group of novices to later become lamas. One of our grandsons is a

Buddhist lama at Erdene Zuu, and another is at the lamasery.

D: And after the 1990s, were there other religions than Buddhism?

B: There is Jesus.

D: Ah, I see.

B: Jesus was introduced to us a while ago and is still here, and the followers are always singing.

D: Did many young people turn to him?

B: Plenty did. I don't really know what they do, but many youngsters joined, and some became leaders. Some hand out pamphlets on the street to the children and offer food.

D: Is there a religious school here?

B: Yes, there is a religious high school here where my son-in-law is the head teacher. The lama there works double time for no salary, just the offerings people leave.

D: Was religion oppressed during socialist times?

B: Frequently. There was oppression in socialist times. One could not ask questions. Children should be able to ask about things and not cause a furor when asking. They should not have to hide in the evening. Democracy permits free and frank discussions. Everything was in secret before.

Daughter : I know about that. In the 1980s my mother and father were told by the leader Tserennadmid to keep their Buddhism a secret, and so they did.

B: In the 1980s, they did not abandon their beliefs, but they had to conceal them. When Dabaasüren got sick, I went at night, because we were so afraid, to the lama at Shankh for advice on his health. I asked my questions of the lama, who was well known locally. If this feudal business had been openly known, there would have been difficulties.

D: Did anyone worship at the *oboo*?

B: No, there was no worshipping at the *oboo* and placing anything there was discouraged. Now in our democracy, it is permitted to worship at the *oboo*. There was no private ownership at that time, so we were afraid we could lose our jobs.

D: At the time, was juniper incense burned?

B: Yes, a lot of juniper incense was burned, but there had to be a 100 meter distance, so the air could be clear of the juniper. That's how it was burned.

D: Do you now purify yourself with this ritual incense?

B: Ritual? I used it when my children were in the hospital even though it was forbidden. The person on duty would not permit incense, so we used a candle. They claimed that if we used incense we believed in the Shankh lama.

D: You had the chance to burn the incense?

B: Yes — for the smoke. Later, in democratic times the lamas were not afraid to worship Buddha.

D: Was there a religious organization after the 1990s?
B: Yes.
D: Did this organization support the lamas?
B: Yes, I guess so, but I don't really know.
D: Do you follow the customs of having a small sutra book and the practice of circumambulation?
B: Yes. We agreed to circumambulate with the sutra book in the evening.
D: Did children or only grown-ups do this?
B: We ourselves circumambulated, wearing a special belt and a hat. We took several turns reciting the incantations but we were all muffled up to stay quiet.
Daughter : Were there lamas at Erdene Zuu?
B: No, the temple had fallen into ruins. The tops of the stupas were all gone but it was not in complete ruin. After the 1970s, they began to renovate the parapet and fix the place up like a museum. Then lamas did come.
D: Did the lamas and the children come from here?
B: Generally everyone did. In the fall, many lamas assembled at the lamasery.
D: Back then, did one powerful lama give a child his name or were they named by others?
B: For the most part, an older person gave them their name. However, they say –or perhaps it was a lama who said — secretly that I was named for a dead relative. The lama and my late mother said go and see Anjaa in secret. It was quite late in 1962. I asked his name and the color of the blanket. He was known to be a powerful person. The name given was Davaasüren and was given by a lama who lived in the first district and was said over a yellow blanket. Then he said: “You will name the next child and don't ask me about naming anymore. Just add ‘süren’ to the name of the week.”
D: When someone died, was the Golden Box secretly opened. (The Golden Box was a figurative term referring to the rites offered the deceased) What used to happen?
B: Yes, we would open it, but it was hard to find a lama to do so. There was only one person at Shankh who could open the Golden Box. Sometimes we would not open the Golden Box out of fear because if we were found out we would be in trouble.
D: When a person dies now, do you look up the burial date in the sutras?
B: We pick the best day ourselves.
D: Yourself?
B: We reckon on the day from Monday to Friday. Things were much simpler then and an ox cart carried the dead.
D: Was it left open?
B: Yes. Few people were needed. Only one person, either the son or someone special, led the ox cart away.

D: Is a lamp then lit?

B: Yes, a lamp is lit, and the scripture book is read.

D: Are there fewer restrictions?

B: I don't know. Everything was so secret, and there are few details.

D: When did the Mongols first celebrate New Year?

B: It was a while ago. When the first State Farms began, New Year celebrations began but I don't know when it started in the city.

D: How did people celebrate New Year's? Was it like in the movies with Father Frost?

B: Oh yes. Now little snow girls do a dance around Father Frost who has a long beard and uses a white cane. There are all sorts of decorations for the New Year. We stretched a string which was covered with cotton and made to look like snow balls. Cut paper painted snowflakes and paper chains were also made. There were no fancy ornaments like nowadays.

D: Did you have a New Year's tree?

B: We brought the tree down from the mountain but now we have fake trees.

D: Does every family do this?

B: They do, but there are not big trees and since the 1990s, children have put up the trees. I was pretty bad and didn't think much about having a tree.

D: At that time were there Russians in Kharkhorin?

B: No, there were few Russians.

D: Chinese?

B: No, the Chinese finished building a channel and one or two remained in the south as well as in the Shankh. They were revolutionaries who distributed hand-outs, but I heard they were swept away during the Revolution.

D: A long time ago?

B: Yes.

D: In the twenties?

B: So then there were almost no Chinese. In the 1950s, there were some but I don't remember well. The city seemed full of Chinese, and they stuck together, and then they were deported so none remained. Now the Chinese are plentiful and are everywhere. They are not good people (and she says a prayer).

D: Were there good Russians at that time?

B: Oh, yes. The Russians were good and praiseworthy. All sorts of praise goes to the Russians. Russia is our elder brother.

D: People nowadays generally drink a lot of spirits. Did they then?

B: We didn't have many spirits. They were rare, especially vodka, although we occasionally did see "Monopol" vodka, and a family enjoyed one or two bottles of this Monopol vodka during a celebration. Mongolian spirits included *airagh*, and on Tsagaan Sar there were a few Russian spirits, which were hard to find,

so that a family could have only about two liters. *Airagh* was drunk, but things were not disorderly. The seating order ran from the oldest person down to the youngest child at the farthest seat. Nobody under thirty drank although those at the *older* end of the table drank together.

D: Was there drinking at the factory?

B: There was some drinking of strong spirits on holidays. Today, however, alcohol and money are plentiful, and though the money is often hard to come by it is easily spent. In addition, no attention is paid to discipline, and things are out of control.

D: Did men in their thirties and forties who wished to find a lama have to ask around to find one?

B: Ah. Mostly you asked your father and mother, but not your friends. I am not involved. People of thirty or forty watch their elders during a celebration and drink from time to time when everybody drinks a bowl of spirits. They are more disciplined, but today's youth has no limits and they drink too much. Now there is even drinking in a Korean film which can lead to youthful drinking. Thus the Koreans have these little girls who get drunk from drinking spirits, stumble about, and then are picked up by someone or other.

D: Did your father and mother introduce you (to your husband) or did you meet on your own?

B: No, no. People were afraid and kept their acquaintances secret.

D: Did your father and mother ask about your compatibility?

B: I don't know. They might have but I think they kept quiet.

D: Did your late husband name all your children?

B: Yes.

D: Did you ask other people?

B: No, we would be afraid to ask others, even mother and father. We were very shy and scared in front of other people.

D: How does a man ask for a bride?

B: There are certain things that are done. It is one thing for a rich lord to continue his line but that didn't happen in my day. In our day, I prepared what I needed and waited, at a certain time of night, outside my *ger* where two horses were brought to the ravine. All of this was done in secret, so I wouldn't have to leave with just the clothes on my back. That is what happened to me.

D: Did the woman then go off with her man?

B: They then go off on the horses.

D: Is that how you got married?

B: Secretly, and then father and mother came after us.

D: Your father and mother must have known what was going on.

B: Perhaps they knew, and certainly must have checked carefully when they came

after me.

D: Was there a wedding feast then?

B: In summer, yes, but I didn't have a wedding feast. I eloped in the winter, and my late husband did not tell his mother — he just took two horses and left. When we returned, there was a dish of boiled meat ready. Later in the evening, two saddled horses arrived. I am sure my husband's mother wondered what was going on until we arrived, and she prepared tea for us. But I was young then and don't remember much.

D: Was there a *ger* all set up for you?

B: We had to put up the small *ger* ourselves.

D: Did the factory workers stay in the dormitory?

B: There was no dormitory so we had to remain in our *gers*. A dorm was built, but we couldn't get used to the building and nobody liked living there permanently.

D: Was there enough heat to keep it warm?

B: It was very cold, the heating was very bad, and in winter you could freeze to death. Later a two story building for the factory workers was built. There were several families living there, but the doors and the heat were bad, so it was very cold. During democratic times it was privatized, and we were not allowed to live there anymore. People were forced out carrying their bundles, with nowhere to live.

D: Were there shares given out during privatization?

B: We were given shares or blue tickets.

D: Were there blue tickets with a flag?

B: We were sold the little pink tickets and were told that they would never expire and could be handed on to our children. They were like bonds and would only rise in value. We have six or seven of these, and I can't figure them out. They tell us now that this stock is coming back, and I think that I might like to sell these pink tickets.

D: What were people's reactions when democracy started?

B: Many reactions. There were no big battles and, in fact, things turned out well for us. Some say that our government will last seventy years — ten more than expected.

D: What kind of people talked about all of this?

B: I have talked to those who are older between fifty and sixty. First, in 1921 the Revolution destroyed the lamas who said that a government usually lasted six years. Now it has been here for seventy. Of course people spoke about the good and the bad times.

D: What do things seem like to you?

B: Now things are good — I don't remember the bad times. But I am not sure what to think since the government keeps a lot from us so we don't worry.

D: Were the herders allowed to keep sheep for their own eating?
B: Yes, they were permitted to do so in order to feed themselves.
D: And milk?
B: And milk as well. In summer, there was a norm for milk production, and if you reached that norm, you had no more debt. And there was also a norm for wool and hair. In fact, there was a norm for almost everything except poop! In summer, we achieved those norms or even went beyond them, so we had no debt.
D: Did you have enough milk to put in your tea?
B: Yes, enough for tea and for yoghurt. But not sheep's milk — only cow's milk.
Daughter: Later, was sheep's milk used for tea?
B: Yes.
Daughter: We didn't milk the sheep very much when we were young.
B: We didn't have much sheep's milk, maybe because of the poor distribution.
Daughter: Was that because of the State Farm or the company?
B: The company took the sheep's milk.
Daughter: Did the State Farm become a company?
B: Yes. The State Farm was broken up, and a company took over and controlled the sheep's milk. The State Farm would never have milked the merino sheep.
D: Was the trend toward meat or wool/hair production?
B: Some wool and meat, but mostly sheep's wool. Sheep had a lot of wool — upwards of five kilos from each sheep, as is seen on TV. The herders are not trained to care for the merino sheep, which is very difficult.
D: Compared to Mongolian sheep?
B: The young merinos are very fragile compared to Mongolian sheep.
D: Were they pastured?
B: We gave them fodder.
D: Did you retire from the company?
B: Yes, and since I worked in the factory, I can receive a pension.
D: Were the herds of the *negdel* herders privatized?
B: Yes, they were privatized.
D: And the herds on the State Farm?
B: They were privatized later. There is now one company, and if you work as a herder for this company, you may have a few private herds, but they are not so good.
D: Do people who continue to work in the factory get anything?
B: No, people who work in the factory or hold public office have no herds. Those who held official positions in a factory or on a State Farm kept sixteen sheep and ten remained for us.
D: Do you have any herds now?
B: I have several in the countryside, and the children do the herding, but I am lucky

if I have enough for soup.

D: Do you have a place there?

B: Yes, although I live here I used to live in the countryside. Last year I wasn't too well, and the children said it was warmer in the city, but maybe in the summer I will go there if I am well. My youngest daughter takes care of me and took a leave of absence from her school to do so.

D: Now I must move along. Thanks a lot.

Notes

- 1) *Gers* refers to the Mongolian tents.
- 2) Charles Bawden, *Mongolian-English Dictionary*. London: Kegan Paul, 1997, p. 10.
- 3) *Aaruul* is a type of cheese made by drying the residue left after straining the whey from boiled, fermented milk. *Eezgii* is made by boiling most of the whey in the curdled milk of sheep, goats, or cows and setting the residue to dry on a screen. See Bawden, pp. 1, 575.
- 4) Fermented mare's milk.
- 5) Mongolian New Year.
- 6) A festival held in July that emphasized the sports of archery, horse-back riding, and wrestling.
- 7) The Gandan in the capital of Ulaanbaatar was one of the very few monasteries permitted to survive after the Buddhist purges of the late 1930s.
- 8) A pile of stones and other objects usually in hills or mountains or other elevated locales that play a role in both shamanism and Buddhism.

II Badamregzen

B: Badamregzen

D: Lkhagvademchig

1 Family: From the Field to the Monastery

D: What is your name?

B: I am called Badamregzen. I am from Övörkhongai *aimag*, Zuunbogd *sum*, which today is called the Övörkhongai *aimag*, Bogd *sum*. I am a local man, but I have an historic background because I saw the original Gegeen¹⁾ Lama who came to the great and little mountains or the Bayankhongor Baruun Bogd, Övörkhongai *aimag*, Zuun Bogd. The Zuun Bogd, or Eastern Mountain, is also called the Juniper Mountain and is in Övörkhongai. I am from this Juniper Mountain, as is my clan, and I can trace my father's side back to the eighth Bogd Shav *khoshuu*²⁾. This *khoshuu* was in Sainnoyankhan *aimag* and did not fall directly under the jurisdiction of the Bogd Shav *khoshuu* as it was an ecclesiastical estate. Now, however, this ecclesiastical estate is an administrative unit in the Övörkhongai Bogd *sum*, where I was born. The Guchin-uus *sum*, Toghrogh, Baruunbayan-Ulaan and Khairkhardulaan *sums* are now found in Nariintel.

A book has been written by a student about the Artzbogd Gegeen of the Dund Bogdiin ecclesiastical estate. He is now the eighth Bogd of Bogds who the Buddhist lama Purevbat has written about. The Artz (Juniper) Bogd Gegeen and the lama Gegeen are the two Gegeens. The Artz Gegeen and the other Gegeens are on my father's side, so I am called Dashpeljeeiin Badamregzen. I was named Dashpeljee after Tsembeliin Dashpeljee. This man was called Tsembel and became what is called a senior attendant to a high lama, and he is now in attendance on the Gegeens. Our Bogd Gegeen who was called Bayardin Sonomtseren was the Merciful Teacher among our Gobi people. In 1937, this Merciful Teacher was arrested in July, 1937, and he became a victim. His holy name is known throughout the Gobi. Now the honorable men are Nasantogtokh and Damdinsharav, whose father was Chimidbazar, not Chimidorj. So there were Chimidbazar, Nasantogtokh and Damdinsharav. The elderly brother of Chimidbazar was the Merciful Teacher who was called the Bogd Sonomtseren. In my genealogy, Tsembel is the grandchild of the senior attendant to the lama.

I am now seventy-four years old and was born in 1936 in the area of Bogd *sum* near the Merciful Teacher and the lamasery near Davaa Mountain. It wasn't until I was seventy that a lama at Erdene Zuu lamasery offered me a chance at Buddhism. For thirty-seven years during socialist times I had worked as a professional agronomist in the agricultural industry. Now as a lama, I no longer work, and even now as a lama I have planted about two hectares of vegetables

in an area that I am permitted to use. I grew all sorts of things on this one hectare. This sort of work never ends. Two or three nights ago, there was a celebration honoring the third phase of the Virgin Lands program in an area which had been only wilderness.

People talked about the socialist period. Back then, I had tried three or four times to join the Mongolian People's Revolutionary Party (hereafter, MPRP)³⁾, but now, having joined the monastery, I look back and see it was destiny. In those times, we couldn't introduce the idea of destiny but now I am becoming enlightened through studying the sutras and have come to understand them. Back then, people were under a lot of scrutiny, especially religious people, and could not speak up. More democratically inclined people were looked at askance and were oppressed for speaking out openly at meetings, especially in regard to the Buddhist texts. In fact, in the past, people were punished for having the Buddhist sutras, and we could not talk or read about all sorts of things like divination nor were families allowed to worship Buddha.

In the 1970s, I was a *negdel* agronomist and the leader of my *sum* committee of the Mongolian Revolutionary Youth League for the MPRP. I had served as a military leader from 1964 to 1969 and had tried to join the Party two or three times but I wasn't accepted. I was, by nature, rather a sharp character, and I saw all things honestly and followed the correct and true path. Even now when I read my sutras, I do so to help others. When I make mistakes or say something wrong, I always believe from the bottom of my soul that the prayers from my books will help others who are in need. At times, this point of view did not sit well with the leaders or the Party.

In my lifetime I have been falsely accused by both the MPRP and the Övörkhangai *aimag* Party Committee. In 1969, I had advanced in my profession, and having been at the Agricultural University, became an agro-technician. In 1962, I worked in Matad *sum* in Dornod *aimag*, having finished Dornod's agricultural technicum, and in the fall I went to the Arvai area in Övörkhangai *aimag* where I worked as an agronomist on the first Virgin Lands planting area⁴⁾. In October, 1969, I went to study at the Agricultural University again. The First Secretary of the Övörkhangai *aimag* Party Committee was Lkhamkhoo, and he sent a signed telegram to the head teacher at the Agricultural University Jamianjav, and it said that I had been transferred to the Law Department and was told to take two weeks to decide about this. I decided to get ready for this and bought a suit and pea jacket, so I could be an elegant student, but I had to sell them to cover the sixty *tugriks* for my travel expenses, and then my situation came up before the *aimag* Party committee, and I went into irrigation in Övörkhangai *aimag* and on to do research into wells and electricity. So, for a year, I erected wells and became used to this work. There was a Russian nearby

for a while but, there were people in the Gobi who spoke Russian. I heard Russian words spoken for a while, so I began to understand the language. Thanks to working with water and talking a bit of Russian, I got the position. Thus, in 1969, I completed, in a hurry, the Agricultural University and moved up in my profession.

After the University in the spring, I was dismissed by the leader of the *aimag* Party Committee for working on the wells. In the fall in the 1970s, I got to know the famous agronomist Ayour, and he pulled some strings for me, and I found myself in the second production unit of a State Farm and moving upon a path as I worked the sidewalk. In 1975, I was told by Renzen, known as vague Renzen, and who has since died, to go to the State Farm Party Committee, which said that “A professional is needed for the spa, and its waters at Khujirt. You are a good man and are suitable for the job, so go there.” This Renzen was the Second Party Secretary, and a letter was found in his desk from Lokhuuz, so he was removed, and another leader was appointed to the Party Committee⁵). So in 1975, I went to the spa in Khujirt, and in 1978 the waters were at 65 degrees and the bubbles rose five meters. I built a greenhouse for tomatoes and cucumbers, and I wore a white lab coat. The leader of the Central Committee, Mr. Dүgersүren, and the *aimag* Party Committee leader, Guchin, came there, as did the Ulaan Baatar Party Committee, which came in secret. Altangerel came to the Khujirt spa for a rest, along with the Minister and the Deputy Minister from the Ministry of Agriculture. So, like a doctor, I wore a white coat and tended the tomatoes, which were delivered to the spa when they ripened. I talked with them about further building. This was the time for the Central Committee’s Fourth Khural, where a food program was being promoted. Although there were more herds, meat production decreased, while more greens were planted and eaten. Toghtuun was a leader of the *aimag* agricultural ministry and he supported this plan. He is now dead — let us say a prayer for him. This leader, Toghtuun, brought me to Övörkhangai *aimag* Toghrog *sum*, which is now the Mazrin *khoshuu* (in this case, a cooperative). There are two Mazrin cooperatives, and recently people have come to celebrate its fiftieth anniversary of the Virgin Lands. They came from far away and stayed three nights.

I was in Mazrin in 1978 and worked there until 1985, when the goals of the food program had been achieved. Now there is really no institutional support for all sorts of vegetables. In August, 1985, I worked as an agronomist with 1,200 prisoners who were confined at Kharkhorin. So there I was at the Kharkhorin confinement center with 1200 prisoners who did not even know about eating potatoes. Many were unloaded, and then thrown away, but for us on pensions they would be good to eat. There was a place in the prison area selected for a greenhouse to start growing vegetables. I retired in 1993, and since then I have

grown my own vegetables. At seventy, I began to study at the lamasery in order to become a lama. So that is the summary of my life, and for the past four years I have been studying the scriptures, and now I can divine the future. I also spent a year with Dashtseren, and we thought things out together and told fortunes for people, trying not to make things up. That is first. Second — I now read the sutras, and I make translations. A person can fare poorly as he moves into the 60s and 70s. I cannot do my translations as well as other teachers who do them. The reading is in the Tibetan language, as well as in Mongolian, and they are studied and memorized. There are prayers to the White Tārā, the Green Tārā, and the Wind Horse Flag Incense all offered to lift peoples' spirits⁶. These are very important prayers, and I read them in Mongolian and then in Tibetan.

D: I see.

B: Now you need to hear more. My teacher is, of course, Soninbayar with whom you are acquainted. Now as a lama and a teacher I do what is right — not wrong. It was said that I must not be lazy and that I must not get tired as we read the prayers. One gets a foundation for the Tibetan by reading the Mongolian patterns. Since I now know the Mongolian patterns, I have begun to sit and read the Tibetan, and I can do the translations. I did this in my prayer sessions.

D: Oh, yes.

B: I can read right here in this room the prayer of blessing for the journey or the wind horse flag incense prayer in English.

D: Oh, yes.

B: This wind horse incense flag offering had to be translated into English, so I had an English person read it to me, and thus I learned to read it quite well myself. Recently, however, there has been no one to read this prayer in English — no one permanently here. So maybe I will forget it. This is the sort of thing a lama goes after. Now, since I have briefly introduced you to some significant things, you can ask me about others.

2 My Childhood

D: Where did you live when you were young up to 1945?

B: There was the first primary school in our Bogd *sum* Övörkhongai *aimag* in 1945 — the first primary school in Bogd *sum*. My childhood friend, Janchivin Radnaabazaar, who knows eight languages and has written forty-two books, is doing research on maternal and child health at the Pediatric Hospital. He has done a lot of work trying to maintain health. He was also the doctor to both Y. Tsendenbal and J. Batmünkh⁷. The second hospital was built in the south near where another of my friends, Dr. Guntevin Gaitav, is now living. I phoned Sanchirov, who was the first engineer at the Agricultural Ministry and now is in the newest Bayan-Ulaan *aimag* area. I recently met the chap in the city at the

Dragon as he planned to go onto Övörkhongai. We had arranged our get together on the phone. We hadn't met for many years, and it is good to see those classmates who are still alive.

From 1945 to 1949, I was involved in finishing primary school. In 1949, Övörkhongai *aimag* was waiting for a Postal Car, and since there was no such thing, all the mail was delivered by the relay. There were two hundred and ten kilometers to the Bogd *sum*, Övörkhongai *aimag* center on the relay with a station every thirty kilometers. On the way to school, we rode our horses past seven stops. Even as a little kid, I would gallop on the horse, but we don't have a picture of that. It was rare in those days, not like now, that a family had the money to spend on such things. Someone would have to herd the sheep for a week to get enough money. For a week or two of work, a person earned one *tugrik* a day. By the time I had graduated from primary school, I had saved up money for two weeks to buy a school book, but I fell off my horse, my boot stuck in the stirrup, and I was injured, so I could not go on to high school, which all my friends did. I did not, therefore, leave the countryside for three years from 1949 to 1951.

We were poor — just imagine — the *negdels* hadn't started yet, so I herded yak or horned cows for a rich family. For three years, I wintered them in pasturage on the Bogd ridge. Now there are other ways for a family to make money, and one does not have to be a servant or work for others. But I took care of seven hundred yaks or horned cows, together with my mother always along the Bogd ridge. I liked one particular hill and can picture it in my head like it could be in the movies. I would like to visit this area before I die. The Tsogchin temple is there, and it had a rare painting now in a museum. It was not known or esteemed, but now it is, and we need a fund to maintain it in the *aimag* museum.

Let me add that I have written four or five books of poetry, the first in 1997. Tsedmediin Gaitav and I were in the same class in our area, and he became the State Poet. Ten years ago, he had his seventieth birthday, and this year was his eightieth birthday. I gave him my first book of collected poems called "Sleeping Under the Moon," and I went to his eightieth birthday party this year on September 19th where we placed a statue at the *ger* I used to live in. Mongolian writers from the *aimag* co-operated on celebrating his eightieth birthday and a documentary was made. Here is one of Gaitaviin's books — my next book was not written in 1995, but in the twenty-first century and for the fiftieth anniversary of Kharkhorin, and it is called "Full Moon."

I also wrote a brief history of the Orkhon Valley from the fourteenth century way before the State Farm, and it is called "The Legend of the Womb of Life." I have also written a history of the State Farm at Kharkhorin, which is now fifty

years old. This history is in three parts and includes the “Full Moon.” So I have written poetry, the history of Kharkhorin, and the short history of the Orkhon Valley with the third part entitled “The Story of Planting in Övörkhongai.” My next book is called “A Historical Memento of the Orkhon Valley.” I had a publisher in the MPRP building that would print a thousand copies of this book and at a cost of 1,320,000 *tugriks*. But how could an old man like me on a pension of 84,000 *tugriks* find 1,320,000 *tugriks*. So I asked eight people at the Great Khural but had to go to Landeejantsan for help. I finally was promised money after the election from the democratic four including Chinzorig from the MPRP. But no money came, and the Parliament building burned down in July. Fortunately I had held on to three copies, and I took one to the Mongolian Writers’ Association to get it printed. Finally, I sent a copy to Naigald in my native area and asked him for money.

The Mongolian Writers’ Association celebrated its eightieth anniversary to which I was invited, and I was honored for my book “The Sky Heritage.” “The Memento from the Orkhon Hollow” now includes passages on the ancient city of Khar, Tsaidan *khoshuu* and north to Arkhangai city and Doitin knoll. The cave of the Red Cliffs is near the Doitin knoll and should be studied, and there should be pictures. The Orkhon Hollow was part of our cultural history, and the book is very good in every way. “Full Moon” is another good book. Recently, I went to the Virgin Lands’ fiftieth birthday celebration with four books for Gaitaviin’s eightieth birthday, where my book “The Agronomist of the Sacred Juniper Barley Planting” was honored. It has just recently gone to press. My daughter took it in, and the editor will look at it, revise it, and return it. Then parts of it can be printed after the money has been worked out. Yesterday our daughter went to the city, and she will return today.

I went to the main lamasery hall at Erdene Zuu just now, and my book on the Orkhon Hollow includes Erdene Zuu where there was a reincarnation of a high lama, which began most forcibly in the Arkhangai *aimag*, Lun *sum* where it has been spoken about and looked for. By the side of Erdene Uul is the area of Lun *sum*, which has some quicksand. The mountain bulges out of the knoll, but they say that the area has changed. A nice stupa has been constructed on Lun knoll this spring by the local people. I single out Erdene Uul because the seventh reincarnation of Tsorj Dagvadarjaa, who was the reincarnation of the Khutukhtu, was born at Erdene Uul. My studies of the history of the lamasery run from 1500 to 1700. There is a building for worship at Erdene Zuu, which is as famous as our Parliament building. The seventh King of the Law, Dagvadarjaagiin, built it in 1770 as the main meeting hall of the lamasery within a five year period from 1770 to 1775. There was a gathering of one hundred and eight *tsam* dancers who were unique to that place and were not found elsewhere in Mongolia⁸). They

jumped about performing the temple dance “The Magic Good Khan.” 1937 was the end of such dances, but they have come back recently. A Russian also made a movie about them. Such is the history of the lamasery hall. After the death of the seventh “King of the Law,” Dagvadarjaa, his birthplace in Khogshin Gol, Khotant *sum* area, Arkhangai *aimag* has been talked about. In the historical biography of Gonchigjaltsan the lama’s *oboo* is mentioned in “The Orkhon Hollow.” The very great Lungiin is now creating art, and Mr. Chuvammid lives in Bayangol mountain range where the lama comes from.

This Gonchigjaltsan is the final incarnation of the high lama and was shot on December 3, 1937 when he was over seventy years old. He was born in what later became Bayangol where there was the lama’s *oboo* for worship and offerings. There are several stupas on one side as well as many caves and places named for Gonchigjaltsan and the Dalai Lama. Now that Natsagdorj is the leader in Ulaan Baatar, there is a medical college in the lamasery near Avtai Khan Lake near a corner of evergreens. There are four lamaseries that have planted what is needed for their pharmacies as well as planting trees and vegetables including red, green, and white potatoes and even red flowering potatoes. In addition, there were further ecological changes. Gossip is prevented. The *khonin zergen* (Sheep Ephedra or Eastern Przewalskii) is on the corner of the eastern side, grows in the semi-desert, and is now raised as an opiate. Goat ephedra and sheep ephedra both grow in the semi-desert. All sorts of tasty red fruit is also there. There are stories behind everything grown here, and I write them down so they will not be lost. I get no money from all of this. Maybe I see things differently, but I keep my thoughts to myself because I could be despised. Now is the time to build the lamasery, and I wish to leave my mark on history.

D: Did you stay in the dormitory at your primary school?

B: Yes, I did stay in the dormitory in 1945 when it was not a five walled or sectioned *ger* but a four walled *ger*. Two *gers* were set up — one for the kitchen for cooking the food and the other for the children where single mattresses were spread out. There were no bed clothes then, so we covered ourselves with our wool *deels* and wore fur trousers, which were full of lice. Then the *deel* was full of lice so even if we were cold, we took off our trousers and slept on those long thin mattresses, which we rolled up so we could put our notebooks on them. We had no pencils or notebooks. There was a long hollow tree named *tavila* that grew near Bogd Ridge, and we would pick off some of its branches and find coal or graphite. We dissolved the latter and stuffed it in the centers of the sticks and in that way made our sharpened pencils. There were a lot of earthquakes in our area, but there has not been one since 1957. However, now the *sum* is in ruins, and there is so much mud that there are mud houses.

There is an ochre colored-reddish earth found near the mountain where there

was a lot of water, and a Buddhist sacrificial cup was found on the lower slope of the mountain about thirty kilometers from us. There were also a lot of tea cups with no bottoms made of white metal, and one had a seal on it. Red earth had been put in these bottomless cups, and they were wired together, and we made ink from the red earth and used a bit of metal for a pen. Radnaabazaar and Gaitaviin can tell you the same stories.

Tsookhor Bavuu was the lama who was our teacher, and he read the prayers every day. His monk's name was Badmaaregjin which means lotus flower. The Juniper Ridge was 180 kilometers long, and it was to the south of Baga Bogdinkhuu in the Gobi-Altai mountains. Juniper ridge and Artzbogdin (the Juniper God) were like weather forecasters. Our Merciful Teacher was hidden at Juniper Ridge at Shar Khuls in the south. The lamas at the lamasery were nearly arrested, but they fled and hid. They received the blessing and much later gave the blessing and selected names for children. I was the last person they named, and I was called Badmaaregjin. That was in 1949, and I had been only Regjin which was not so difficult to say, but my parents and brothers called me Badmaa. "Hey, Badmaa," they would call. At school, I was called Badmaaregjin which I couldn't write. There was a pock-marked Lama called Bavuu who was a teacher. There was a new script that had to be taught — not the ancient script. We could play around with the old script but had to get used to the new one. Teacher Bavuu told me that my name was too long, so he changed the last part of my name from Regjin to Regzen and I became Badamregzen. So for all official purposes like military accounting, diplomas, or passports, it was written Regzen. So the name, my merciful teacher, gave me — Badamregzen — is what I am called. When I was in my seventies, I became a monk, and I went to my monk-teacher Purevdavaa in Bayankhongor. He is now an abbot at Bayankhongor Erdene. For fifteen years he had worked on a book in the Stalin Library and then served on the Central Committee, and now he is at Bayankhongor. I took my vows with him, and my name in the book of vows is Badmaaregzen. However, despite this throw of the dice, I was given another name, Badmaadorj, so it certainly was my destiny to have a name with Badmaa in it.

D: What classes did you have at primary school?

B: Oh, at that time we studied numbers and the Mongolian language. In the third class we began to study the ancient Mongolian Uyghur script. We learned about the environment and history and we studied the Xiongnu⁹). There were several teachers in the third and fourth classes including Sambuu from Arkhangai *aimag*, Arkhangai Khairkhan *sum*. Our fourth class teacher was Demchigiin Gonchisüren who became the procurator for the military and finally was in charge of checking the MPRP. Although I did my lessons, I also pursued my hobby, which was literature. I also liked to memorize poetry, including the poem "There was a

Foal” written by Dasheevgin Sengeegin. I remember everything else that he wrote and haven’t forgotten all the poems that I memorized. I am always reading poetry. In the middle school, I remember “The White Basket of Buddha” and “The Rainbow of Fate.” They were elegant poems. Even though I was an agronomist on a State Farm, I liked art. The writer Garvaagiin was selected as the champion reader from the State Farm for his poem “My Brother Sūkhbaatar.” Even though this poem was about the partisans, it is studied today and is not forgotten.

As one gets older, one is more forgetful, but one’s intelligence remains and not everything is forgotten. I was very interested in history, art, and literature as well as movies and the theater. I write poetry and write about the movies for news magazines and the radio. I even tried to write a movie script as many now do. We can write criticism now even if it is regarded with some disdain.

Now we can go to the museum. In 2007, the paper “Zindaa” number 7 wrote that the Erdene Zuu monastery had been reopened as a museum. There was a lot of criticism about the restoration of this museum that had such a reputation. A lot had been done, but in one year three golden Buddhas had been stolen by train, but the thieves were given two years and four months in prison. That is just an example, Strange.

D: How and what did you eat and drink at your primary school?

B: We needed to use firewood to cook our food at school and those with money brought their own fuel and ate meat. In the Gobi desert area, saxaul (tumble weed) was used as fuel, and we burned it a lot. We gathered armfuls of saxaul and dropped them in a pile near the west building.

D: What sort of food did you have? Were there vegetables?

B: At that time, green things meant death. Nothing was known about vegetables. Now at Bogd Ridge, we both grow and eat vegetables. Wild onions grow everywhere, and since vitamins are rare in Mongolia we had our wild onions in the Bogd area. They used to grow wild, and maybe they still do, but I don’t know. But in many places the wild onion is still gathered in sacks and is very good in *buuz* (steamed meat dumplings) or foods with flour. At that time, the Mongolian gazelle was plentiful in the Gobi along with the black-tailed Persian gazelle, the goitered gazelle, and there was no ban on hunting them. There were mountain goat and wild sheep on the Bogd Ridge, and they became food for the school children. A variety of soups was available, and a yak or a cow could have been prepared. So, there was a lot of food, so no one could complain. In addition, there were dried cheeses and curds and white fat. There was no *negdel* at the time, so everything was privately made.

3 The Lamas Own the Private Fate

D: There were no lamas, right?

B: Not for all. Some lamas had been punished for ten years. Some lamas were not oppressed and remained, and there were many in my area. Now I am such a lama, and I have my own lama name. I know a very religious lama called Sengeravdan who was my father's brother, but I do not know how he got the title of cleric. Maybe he had gone to India. My father said that he was hidden to avoid arrest so he survived this from time to time. Some lamas had no home or children and would hop from one family to another. There was an old man called Balkhaanvannchig, and the teacher Gonchiguren, now an old man, has moved. Demchigiin Vaanchig is nicknamed Balkhaan. Demchigiin Vaanchig is a strong and religious old man who is now an example of a true democrat. In 1951, there was a small *Khural*¹⁰. There was a guy who worked on a building for ten years under the jurisdiction of the builder Gesrengiin Shar in Övörkhangai *aimag*, Guchin-Uur *sum*. In 1951 after finishing school I went to the countryside for two years. There was this agitator in a ten man family unit. In this election, Gesrengiin Shar was elected to be the agitator in this ten man unit and to agitate for the Party. I didn't quite know what was going on. Then Mr. Vaanchig was so passionate about the elections and the Constitution and talked so much that the dogs chased him away. But Mr. Vaanchig thought that the Deputy to the People's Great Khural was ignorant and that even the children derided him. Finally, the Party said that he was guilty of slander and so, to serve as an example, Mr. Vannchig was sent away for ten years. There were many lamas in my area and many, poor souls, did good and important things but were often victimized.

Forgive me, Merciful Teacher. Finally only Natsagdorj remained in Uriangiin Khüree who said he will stay here until I die¹¹. Natsagdorj was made proctor. Balchin was the father of Natsagdorj and was the director of services at the lamasery. The elder Natsagdorj was an important lama and our Holy Man with the rank and title of Gunga Getzel. He had served a ten-year sentence, and his older brother, the Lovon Senge, had died in our Kharkhorin. He was the teacher and Khutukhtu¹²) and Lovon in our lamasery. Senge was the first government leader at our Bogd *sum*, and he was called Lovon Senge. As things were, to remain free from arrest these men had to be faithful to the MPRP and become "black" or non-religious or non-believing. That is what the leader did.

Now the sutras might be at our Khutukhtu's lamasery and could be among the seventeen chests of books of Natsagdorj. Now at the Khutukhtu's lamasery is the offering of a mandala and a coral and pearl bell, which are all preserved in storage. The Lovon Mr. Senge and this Gunga Getzel were the two brothers. There is a cave in our holy warm merciful mountain. This year is the eightieth anniversary, and the author was brought to see the treasures. Before going to

prison, the Gungaa wrapped the treasure in two bundles of felt and left them in the cave. He was in prison for eight years and seven months and when he returned he found that the sutra books had been eaten away on the outside but were fine on the inside. Finally, not long ago, Mr. Senge went to Kharkhorin to work in the grain industry where the base was located. The proctor who saved these books had worked in the grain industry. We had got to the monk Khishigt, the son of Davaa from the Shankh Western Khüree. Khishigt was the abbot at the lamasery hall. There was news from a teacher that a temple was being built for an ancient sutra and that the government would provide a fund for a museum to keep the sutra safe. Since the sutra was State property, the monastery had no power to keep it. Natsagdorj knew where some of these books, including perhaps the coral and pearl sutra books, were hidden but some did not know. In all likelihood, these were the Choir books¹³⁾. However, I am not sure because I have never opened them, and they need to be studied. There are seventeen sutra chests.

D: Did people actually speak with you about the destruction of the lamas?

B: Frequently, even though I was young. I may have forgotten some things. That's the way things were, but there is a sad story as well. When the Merciful Teacher was arrested in July for a year and seven months, he stayed with a family, and the father's name was pig-tailed Sengedorj, who is now dead. He had a yellow bamboo ring, and there were two men with horses and guns who went after him. It was a rainy year with ten days of rain, thunder, and terror. The elders ascribed this to the arrest of the Merciful Teacher, which angered the local nature deities. All this has been talked about by the old people, and now I know the truth.

The Merciful Teacher had a previous incarnation and was born twice in our land. I travelled to find the picture of his previous incarnation, and I found a picture of his last incarnation. With the same reverence that I placed the national flag on a point 3,000 and several meters above sea level, I have now reached the summit for an incarnation portrait. That is how it is for this simple seventy-four year old man. I know that I am the man to reach the top of Bogd Mountain because I have been led to the path of righteousness. At home, I can tell a lot of stories about all of these things. All the photographs have been developed. Now our son works at TV-9 for Ariunbold, and he heads the marketing there. There are two Ariunbolds. My son works for B. Ariunbold who is the leader of the marketing firm. The father Ariunbold has these photographs and will put them on a disk. In his previous incarnation, he was a man called Tserenvanchig, and I found Mr. Tserenvanchig's Buddha. I do not know what kind of stone was made into a dragon, which was carried by yak, to the Urandoshiin Ridge. The Urandoshiin Ridge and the Bogd Ridge were 3,796 meters above sea level, and there was a large area to build a lamasery 269 meters in front of the mountain. So the dragon was placed on top of the Urandoshiin Ridge. Tserenvanchig, the

Merciful Teacher, worshipped at the *oboo* at Urandoshiin Rudge. There were four colonels climbing with him, and one of these was a man from Baruunbayan and was a red hat Buddhist. This person was related to the last incarnation of Tserenvanchig, and his family worshipped Tserenvanchig, and they all wore silver Buddhist amulets. To make the dragon, a yak had to be sent to the high Bokhiin Ridge where the load was roped onto the yak who bucked so much that the load fell off and got stuck in the valley where it lies to this day. In fact, the dragon is wedged in to the rocks, but its beautiful design is still clear. I wonder what kind of rock was used and how it was made. So that is the story of the dragon. Recently, all the *khadaghs*, paper money and fat *aruul* have been removed, which were destroying the dragon, and it has been restored¹⁴.

Everything has been fixed, and a glass case has been put out for the paper money and a flat stone platform for offerings of rice and four trees have been set up for the *khadaghs*. A local council was formed to preserve all of this, which included Bayasgalan, the secretary of the environment for Övörkhongai *aimag*, who was a religious man. Now the Khüree cliff springs is a place where people can relax and Bayasgalan, himself, was resting there when he met the four colonels, and they rode with him. Our younger brothers paid for the horse, which cost 20,000 *tugriks*, and they camped in the southern hollow. In addition, it cost 15,000 *tugriks*, not 20,000 *tugriks*, to eat a marmot cooked with hot stones. This must be the free market economy. Now a trader, Baruunbayan, also a Red Hat¹⁵, has set up a *ger* camp with eight *gers*, to see the dragon and wishes, with Bayasgalan, to build a coalition to protect the area. Last August he came and talked to us at the *sum* office. The monastery had been robbed, and in the rubble inside a broken prayer wheel had been found. The bell had been smashed and broken and all that remained was the ritual thunderbolt, a clay marvel now kept in our *ger*.

This beautiful thing was created from nothing but clay or mud and was decorated with an earthen paint as well. We cannot figure out how the main hall, built in 1770, was made. The United Nations is now involved in figuring out what the paint was made of, but it is hard to understand what sort of paint was used. Now even the varnish is up for discussion. We talked about this past construction of this lamasery which was built in secret.

- D: When you were little, was there talk about how the lamas were arrested and how the lamasery fell into ruin?
- B: Yes, there was talk. The Khututkhu lamasery is on the eastern side of the Airgiin mountain pass, and it must have been the big, black ZIS-5 with the wooden seat covered in cotton cloth that arrived with men with guns who took four or five lamas from the lamasery. At least, that is what people said. The eastern side of the Airgiin mountain pass was famous for a rock with a horse footprint called

Horse Rock Near Stone Horse Pass. On the rock were footprints of a horse and a colt, and their treads were stamped in the mud. In fact, you can tell different animals' foot prints — for example, a pig from a horse. There was a lot of talk about what went on in all that trouble from which the “big” lamas fled. The Buddhist novices, wondering where they should go, were arrested. All this was very interesting but, at that time, going to the Airgiin Pass on horseback was very difficult, and it seemed impossible for a car to make it. Now a powerful car or motorcycle can go on the road if it is not too rocky. Because of the earthquake in 1957, there was little traffic on the road and many breakdowns.

D: When you were young did the lamas who had been arrested look normal when they returned?

B: Yes, and their lives were ordinary. There was one old man called Perleeguntev who had been arrested and was given a ten-year sentence, which he served by the Dalan Tuppu River. When he returned, he lived in east Goyo where he hobbled his camel. But we did not know if Mr. Perleeguntev was alive or dead. At the time, the school was the only cultural institution in our area. In 1969, I went off to agriculture school for a while, and then I came back to the area. However, by 1978, I went to Togrogt or the Mazrin zone and came on to Kharkhorin.

D: Were there ordinary lamas here?

B: I was young and did not know the elders.

D: Did the ordinary lamas take wives and have children?

B: Generally, as far as I know, most of the lamas did not have wives or children — certainly not Mr. Vaanchig. They usually lived with their younger siblings, as did Demchig Vaanchig who was the eldest in his family. Mr. Perlee was a younger brother who had no wife, but the teacher Bazarkhuu had a wife and children. Sainnyambuu was an important lama and a Party leader. He became the Holy Lama, and now his son is also the Holy Lama who is called Amartogtokh Sainnyambuu. He moved up from Khovd *sum* where he had been a Party leader for several years. For forty-two years, he was our first Party leader and remained the Holy Lama until he died. His brother Duger was also a famous lama who was called Dugerau. He was a holy lama who took a wife as did teacher Bavuu. There was an old man lama called Galsandargiin who was a major lama at the Khututkhu monastery. He was the older brother of my wife and the younger brother of Radnabazariin. Now Khalzan Sengetuv is the leader of the State Planning Commission who was later replaced by Ragchaa in the Bayankhosoo area. Along with Khalzan Sengetuv and Radnaabazaar, there was also Galsanjambaa who had neither wife nor children. Finally, at 64 to 69 he worked with me raising vegetables for the Department of Agriculture. The lamas did well with vegetables. I shall now speak of Ajinmonkh, the teacher. He taught at my

school and participated in our games. With Galsandargia and Ajinmonkh were lamas who either read the prayer books or later learned them. Green Dandar was an old man who lived in Kharkhorin with his wife and children. His wife died, and now he and his children remain here. There is also Mr. Green Banzar who is in the group of lamas who read the prayers and played. And it was jokingly said to them that if they were so holy they should get us some rain for our vegetables! I now realize that I should have been more serious learning the Tibetan script. I wrote about all of this in my book of history which includes photographs.

D: Did the lamas secretly read the prayers together?

B: Yes, they would gather and read the prayers. In those days, the old man Galsansengay had a little *ger*. He dressed in a skirt and wore no trousers and was reprimanded for such dress. But he read the prayers.

D: Did the local people secretly come for these prayer readings? Did they ask questions?

B: Certainly. There was a Holy Center, and there were several lamas at the Darkhan camp, including Dugeya, who pictured his own destiny. Mr. Khentiidorj was another old lama, and the elder Vaanchig was a Buddhist lama and the Merciful Teacher. There was also an old man called Choisengay, a revered lama, and his son, Bodgereliin, was my tractor driver. Mr. Choisengay was deaf, sadly, and so wrote notes on paper as we travelled rapidly to Guchingiin and Togrogt by motorcycle for two or three days. Now people say the prayer “Yanbidaljir.” In 1978, Mr. Choisuren called to say that he heard the “Yanbidaljir” midst the laughter (Because the prayer was so long).

D: Was this prayer read in Tibetan or Mongolian?

B: It was read in Tibetan, but it was written down in Cyrillic. I listened to the monk read the prayer, even though I did not know Tibetan, and I would write in Cyrillic. Then I began to read and memorize the poems “The One With the White Parasol,” “Pure Things,” and “The Wind Horse Flag.”

4 Astrology in Socialist Times

B: I was thirteen years old and interested in divination, and the Merciful Teacher was an astrologer and a diviner along with the Yellow lama, Adaya, who was rather undisciplined, curious, and intrusive, and he sort of flapped around. It was 1949, and I was thirteen when he taught me. When my primary school was over, I went to Bayantsariin hill in the countryside where there were a few families. In the rain and under the cloudy sky, I looked after the sheep at the southeastern cliff called Shuvuubast where there were many wolves. I knew that in the rain the wolves go after the herds, so my mother told me to look after myself. There was a strong, old woman named Baljin who was a good herder, and she said

“Badam, if you go to sleep you will lose your herds, so you must learn this prayer or incantation. You are a clever child, and I will teach you this prayer which will keep the wolves away.” So I recited this prayer to myself as I looked after the herds every noon. As the day wore on and began to grow dark, the sheep filed along and did not clump up. There was a ditch for corpses called the Altantevsh burial ground which I had to avoid, but I was afraid as I was too close to it.

Then it began to rain, and a dog barked at someone in a raincoat, and a Red Hat who went into Lady Baljin’s home, and I ran after him. Soon a divination was arranged which was very strange, and Lady Baljin, in a white blouse and short trousers, unusual dress at the time, began to make tea. In those days, we were not supposed to run around naked, and we respected our elders and did what we were told. We had to endure a difficult upbringing. Then Lady Baljin hit me with a ladle and said: “Bad, Badam, leave now.” Mother, father, and I were sure that this woman had lost her reason, and we were afraid. If she found that you were sleeping instead of caring for the animals, she would beat you. I ran out of there and found Nasantoghtokh who was in school with me. But Lady Baljin always carried a stick, and I took off running with my ten sheep, goats, and the other animals, but I had not yet seen a wolf. Then I got on my horse and was so scared that the hair on my head stood up on end; there was no sound in my throat, and there were tears in my eyes. Then I saw the wolf which resembled a dog or a snake. Then I heard “hui hui” as the dogs were set loose. Lady Baljin had gone. I chased the wolf and saw that the herds were alright because the wolf’s jaws had clamped shut. Maybe the prayer worked or... his jaws were just stuck shut. Anyway, he didn’t bite.

I thought that I should go to Mr. Adaya who was a good diviner. My mother had the nine cards (used in divination). My father was a cattle drover for thirty-seven years before he died. Mother and father asked Adaya for a divination, and mother held the nine coins and told me that she would give them to Adaya who would teach her. So I took the coins to and quietly gave them to Mr. Adaya. Mother said: “Here is my son, Badam. He is an intelligent boy and has come to study divination with you, oh Mr. Adaya.” The teacher was acting arrogantly and said he did not want to meet us that day saying “you can’t just walk in and expect to be taught any old time.” I asked him what I should do, and he told me that I had to find the best day and bring an offering. But we could not do that, and Mother was upset as she had brought a simple *khadagh* and ten *tugriks*, so she knelt down before Mr. Adaya and gave him her offerings and received a blessing on her head. He told me to sit down and that the coins we had brought could be used to help us. There was talk about the nine names of the coins, and I was told to say the name of each one three times. He said that if the head coin was first, then it was yours. I had to be taught to recognize all these coins, and as he taught

me and spoke simply in our first lesson. I was told that this was not something to guess at and that I needed to understand all of it. Guessing would not explain what was best. Looking back, I know that I was taught the rules of divination and was given all that Mr. Adaya knew. So at thirteen, I began telling fortunes, thanks to Mr. Adaya and, as time went by, I got better at it. Under socialism, I later gave my coins to my mother and left her in 1964, but I lie, it was in 1961. Then, when I became an agronomist, I brought my mother and my *ger* to Burd *sum*, and she brought the coins. However, I had to keep my divination secret. When I was the leader of the youth, I was especially secretive about this. And in 1990, with the arrival of democracy and the rebirth of Lamaism I went on pension and began to raise vegetables. The State Farm had an excellent mechanic named Tserennadmid who was also the State Farm leader and who raised garlic, but that was years ago. However, you can grow garlic in the desert or the *khangai*¹⁶. I grew more than 50 *sot* (or an old measure) on one half an acre.

A while ago a plane disappeared, and there was a one million dollar reward. So, I turned to divination to try to find the plane. When the State Farms were privatized and shares were given out, I got a mare and a colt, and they disappeared. So, as a diviner, people told me to use my divination skills to find them. I tried my hand at divination and was only told that everything was where it should be, so I figured that I was just being tested. Then I was told to use the 69 car to find my horses. After that, I moved to the city and planted my vegetables near my cabin. Tsend was the caretaker and looked after them as well as saying the prayers. He is now dead. But, in those days, the leader summoned Tsend as the accountants had come to the *aimag* center to go over the books, but there was snow and maybe there had been an accident. I said I would call them as soon as the accountants arrived. Then I changed my clothes and called again to say that they had arrived, and indeed they had. So this was my second successful divination! Later we were eating, and the leader came by, and we all started making idle talk, and we chatted about the plane that had disappeared, I was made the head diviner of the company and was told to try and find that plane. Dashtsereng Ochirbat was another diviner who had tested me twice, and I told him that I was right and that I should be the company's lead diviner. However, the coins could not turn up any living people, and as the plane had come down in a foreign land in a mountainous area with lots of ice, I did not know where it was. The plane was soon found in such a place, and I again made clear that I should be the company diviner. However, this was really just a game, and we all laughed a lot. So it was. In 1990 I was seventy years old. It is now 2004, and I became a lama in 1999.

D: Were you taught by the diviner Adaya, and is he a lama now?

B: He is a lama leader and the astrologer for the Merciful Teacher, along with the

lama Choisengee who recites the “Yambiidaljir.”

D: When you were young, were there Buddhas at your home?

B: We didn't have Buddhas, but my mother had a small Green Tara Goddess, about which I had some confusion and whose picture was replaced by a very handsome Marshal Choibalsan¹⁷⁾ in a frame.

D: Did you have diviner's coins?

B: Yes.

D: What happened to them?

B: My poor mother stowed away the coins from my teacher. Last year I went to China to both Wutai Shan and Beijing. I returned to Ulaan Baatar, and I visited my relatives in the fourth district, and they had money problems. When I took the bus, I gave the conductor 5000 *tugriks* and received no change. Then I left my purse with another 5000 *tugriks* and a snuff pipe in it.

D: Did you hide the Green Tara and replace it with the picture of Marshal Choibalsan?

B: With a lot of upset. But Buddha has set things right.

D: Where did you put it?

B: I put it on the top of the chest.

D: Was it alright to keep things there?

B: With all those paper folds to get the picture in the frame, it was not alright but I was young. At the time, there was a fear of religious doctrine. I finished school in 1949-50, and then I made a mistake. I lost my 19-year old daughter, and I turned to divination which attributed her death to God. Now my oldest daughter's boy is mentally ill. He is twenty one or twenty two and a beautiful boy and was normal until the fifth grade. In the sixth grade, he disappeared in Ulaan Baatar and lived as a street child for a month. After searching for him for several weeks, we found him and brought him home.

5 Changing the Culture

D: Did you have to conceal your Buddhist worship?

B: Oh yes, in the past — especially during the cultural attack against the Buddhist sutras. There was also destruction aimed at the distillery barrels and the pots for making *airagh*. In our Bogd *sum*, the *negdel* leader was Sharavchogdon, who had been the secretary to the Mongolian Embassy in Korea. Finally, a deputy from the Bogd Great Khural came to our party, but it was Sharavchogdon who was in charge of destroying the barrels. So I was the leader of the young people who destroyed the wooden pots. If, however, they insisted that we keep breaking them we would have to use rubber barrels for making *airagh*. But this Sharavchogdon and I did not get along, and he kept me out of the Party.

D: Did you wish to join the Party?

B: I was rather interested in joining the Party and since I did work for the Party I wished to be a member but probably it was for the best that I did not join.

D: Do you generally pray to Buddha?

B: Oh, I am very pious. The prayers are written in Cyrillic.

D: Were you young when all this was going on?

B: Of course, I was young.

D: How old?

B: About thirty years old. In 1964, I was the Youth leader on the Bogd *Sum* League for six years.

D: Were you the leader when you reread all the prayers in Tibetan?

B: It was later when my “older brother” Vaanchig was out under the open sky with a wind horse flag incense offering.

D: Were you interested in these prayers at that time?

B: Back then, I did learn the basic prayers like the wind horse flag sutra and later I began to read other texts.

D: Did the sutras interest you?

B: I must have been destined to read them since such an interest runs in my family. The Merciful Teacher gave my father the name for me. In addition, my father was an interesting fellow, and he had horses for his hobby. The Merciful Teacher owned an ambler that was as precious to him as a sandalwood throne, and in fact was worth fifty sheep with their lambs and ten yaks and their young. At that time, one was lucky to get a horse for five sheep, so there really must have been an abundance of herds then. My grandfather, Tsembel, was the Merciful Teacher’s yak herder and was involved in the festival to the God Maidar¹⁸⁾ and when there was a celebration, my grandfather, who was not a Buddhist, led out this horse with the white patch on his forehead as was the custom. This is both an interesting and true story. I even went to this place and took a picture. Now my Uncle, Bandakhain, had a curse placed on him and was poisoned. Previously, he had repaired the statues at Erdene Zuu, and he was then invited to work along with the artist Rentsendorj and Unkh and Sharav at Kharkhorin. Rentsendorj’s brother has two sons who were lamas in India where they had studied for seven years and then returned home to teach. Their teacher was a lesser disciple of the Merciful Teacher, and they, both well educated, were then the directors of lamasery services in the *dugan* (lamasery hall). They had both studied the sutras with the Merciful Teacher, but there were some differences between their teaching and ours. There is one sutra which contained a certain exorcism which involved these two men and a teacher who follows the Choir school of Buddhist philosophy and is either at Tsogchin and now mostly follows the Bogd Shav Khutukhtu.

Thus there was a kind of secret rivalry between these two schools of philosophy

with the prize being a higher ranking position in the Buddhist hierarchy. In our lamasery, there were discussions between the religious and the secular, and there was one teacher aside from the Merciful Teacher who was oppressive about following the right path and imposed some sort of curse on those who did not agree with him. This curse made clear that, as in a family's household, so too at the lamasery there was a crazy dog and a rabid wolf. The dog would scratch on the door of the Merciful Teacher's dwelling so all the lamas were afraid of getting bitten. There are, indeed, some lamas who can inflict curses like in witchcraft. When bad things began to happen they went to the two men, and the monk Perlayguntev took the brothers prisoner and put them in a torture box and threw some sand on top of them. He then asked them "whom did you curse at?" This happened a day before the Maidar celebration where my Grandfather, Tsembel, arrived on a black horse. He stayed in the *ger* next to the Merciful Teacher, but died the next day from the curse of the two lamas who were in the sand box. Oh no! Tsembel died during the festival for Maidar. I went there as well and took a picture of the remains of the house. Then the two men in the sand box were put into prison where some people who did not confess were killed. Now there is a wooden chest that still holds the bones. The soul of those two men became two earless and tailless wolves. Then a Mr. Maant came to our lamasery and made up a prayer for them. Now, on the east side of the Burgast ravine, there is a monument to them, with Mr. Maant's prayer engraved on the stone. There is also a historical legend connected to the fertility stone or Phallus that even had stone genitals. In 1947, I was in school in Bogd *sum* where a person entitled "Kharlaan Toghooch" still lives and is about seventy. There was also a man named Surengaa who was killed by a bull. These two men tried to cut down some aspen trees and sell them for firewood, though some of the wood was given to the school. I don't really remember the details since I was young at the time, but I do remember an odd tree. But at about this time, the two tailless wolves came to the Burgast Valley where two young monks had brought some girls to the Valley, but they were eaten by the wolves. Because of this calamity, the monks performed exorcisms on the wolves and placed the fertility stone or Phallus Statue in plain sight. Then the two wolves, reincarnated as terrifying monsters, had to be destroyed. This horrifying series of events began with grandfather Tsembel and the curse and all that witchery.

D: Those two men must have placed a curse on the whole area.

B: Yes, that is true. I went to my home locale last year and talked with an eighty-year old woman who told me the whole story. This year I went back there by motorcycle to further investigate and met with several lamas and Gegeens, including the lama Gegeens of West and East Bogd. I became an historian and examined signs and symbols and took pictures for my study. I do not have any

more elderly relatives or acquaintances to talk to now about the old days, and I have only one sister left.

D: During socialist times, did practicing Buddhism get any easier?

B: It was easier in the nineties. Before that, it wasn't allowed. Especially, in the Gobi area there were Buddhist practices, although families did not have the sutras. Party and League members were checked for the sutras and were oppressed if they were found. I know this well because I was the leader of the Youth League Committee.

6 The Buddhist Religion After Democracy

D: Are Buddhist objects confiscated?

B: There has been almost no confiscation, but I do not display these objects publically. Perhaps Tsagaan Sar¹⁹⁾ is the right time to display the sacred omens. In the past, sacred objects were put in the bottom of a chest and were not mixed in with clothes and shoes. The chest could have a tray or shelf for the Buddhist offerings and paraphernalia, and everything else would be put below them. Traditionally, for the Gobi people, when a family moves, the first camel is loaded up with the most important things including the “toiron” or tent ring, and the Buddhist artifacts and the children and the clothes would go on the second camel. The *negdels* were given rubber barrels for distilling that we use to this day. In the Gobi and the *khangai*, people kept some of their animals and those that were left over were collectivized. The service and government workers, however, were not permitted to have animals and in addition, there was a tax imposed on milk and meat. So although I was the leader of the League Committee and had served the government I had no animals. One horse per year was the allotment, which made it difficult for me as I wandered all over the place.

D: Is Buddhism changing and flourishing in Mongolia today?

B: It is doing well. During the National Assembly, Batkhoo presented a discussion of religion, and I sent my views on this to the newspaper, but my piece was not published. The issue of religion was raised in the fall, but it was passed over in silence. I could not follow this up because I recently had to go for a week's treatment and had to rest for twelve days. No thoughtful lama has brought up religious issues, so for now it is clear that there is little free and frank religious discussion. Nor has a group been set up to pursue such talk or the connections between different religions. Any such conversation is important to me because since I wished to build a temple, I had to talk to the *aimag* leader Dembereliin Erdenbileg, who is now the ambassador to Russia. But back then, he came over with five friends for drinks. Then I went to the Övörkhangaï Ministry, which wasn't set up, so I then went to talk with a writer for the paper “Zindaa” to find out about a religious organization that would support my temple. I also met with

the lama Choijamts. At the Gandategchilen lamasery, the Gandan abbot was a key figure in Mongolian religion, and he did assume the leadership of all Mongolian religion. Every *sum* and *aimag* should have a small temple lamasery. The real issue is not just talk of the sutras but of establishing a fund for the high lamas and the devout. I am also concerned about educating folks in the religion so that they understand it. I go to the teacher Soninbayar when I am worried about these issues. I took him my book "Full Moon" and a yellow *khadagh* (indicating he wished Soninbayar to be his teacher) on our first meeting. Later I met the very learned L. Khurelbaatar who was a Tibetan translator. I went to his living area called "Moskva," and I also gave him a yellow *khadagh* and my book and told him what I was doing. The teacher said that there are thirteen different reincarnations and that we are one of them because we have two seals of the Merciful Teacher from the Dalai Lama. One is the seal of the Bogd lama and, in addition, we also have a blessing rod. But this is not known to many people. I do not know Tibetan well enough so I am lost on how to pursue these matters further. I was given a book from Khurelbaatar about the Dilav or Dundgov Khutukhtu who was Mongolia's first Prime Minister during the time of Manchu domination and was told to read it so I could learn about my teacher²⁰. The year before last, after the death of my uncle, I met briefly with my elder sister in the countryside to further study what Khurelbaatar had presented to me. There was a lot of talk about all the things from the temple.

D: Are they now discovering a reincarnation of the Khutukhtu?

B: Yes.

D: Is it alright to find the reincarnation?

B: Of course. There are scientific sources that confirm the existence of the soul. There is a scientific specialty which focuses on the study of the soul, and there have been great scientific discoveries. This is really true. The soul and the intellect are bound together. The wind horse prayer assures good fortune and while you are alive your soul is intertwined with your fate or destiny. When the body dies, the soul lives on in the people's consciousness. Women have human shaped souls, and men have snake shaped souls. In making a baby, the female egg and the male sperm unite to make the baby. In the same way, your soul and intellect unite and are one.

Take Mozart as proof. At the age of four, he was considered to be a renowned musician and wrote music at that young age. I have studied this as have scientists around the world who also connect the soul to genius. We know that Mozart's father and mother, a singer, were great musicians, so their child was made up of both of their souls. His father's soul was in Mozart's compositions, and his mother's soul was in his songs. Their child incorporated both their souls and their intellects into his music and combined with the music he had started listening to

at the age of four, he went on to write world famous music himself. Thus many people study this great musician.

Now let's talk about incarnation. The soul leaves the body, and old people offer legends about this for the children. For example, there was the fierce Khutukhtu Danzanravjaa who was the fifth reincarnation, while the sixth, seventh, and eighth reincarnations were of Tserenvanchig²¹⁾. Danzanravjaa saw his fifth, sixth, seventh, and eighth reincarnations killed by the Manchu Khans, so then Tserenvanchig, the Merciful Teacher, was the seventh and eighth reincarnations. The next reincarnations were all self-appointed. There is, nonetheless, a great story about the sixth reincarnation, which tells about a boy who was born in a *ger* to a poor single mother who was always exhausted, and his name was Tserenvanchig. He then grew up at our lamasery, and at five years old it was discovered that he was an incarnation, so off he went to India. At ten years old, he became our Khutukhtu at our Bogd lamasery the day it opened. So this Tserenvanchig studied how to discover an incarnation, but soon died and became the Merciful Teacher in his next incarnation in our Övorkhangai *aimag*, Bogd *sum*, second *bag*²²⁾ at Khurkhreegiin where his tent still remains.

D: So is the Merciful Teacher the later incarnation?

B: Umm — yes. That is so.

D: How is this legend significant?

B: I am not sure if the story is about the sixth or seventh incarnation — I had to guess- but it is certainly a fairy tale. The fifth incarnation was dropped, so this sixth incarnation was in the Gobi area.

There was another *khoshuu* (or Banner) in the Gobi which is now a *bag*, and its leader was called a *zangi* and this *zangi* Tsedev had a servant girl over twenty years old and worked as the *zangi's* herder²³⁾. She became pregnant, bore a son and died leaving this little three-year old boy who remained with Tseved who forced this little child to herd his animals. One day while watching the sheep on the steppe a wolf hurried after the “consecrated” animals²⁴⁾. The wolf also went after the child and then took off. Mr Tsedev's wife, who was in her twenties and wore her native headdress, was an overbearing and nasty woman who scolded and beat the little boy. She yelled at him and demanded that he either pay for the lost sheep, which especially horrified her because they were consecrated or holy, or leave their home. So, in tears, the child left. At the same time, Tsedev was herding his camels and lived in a *ger* with an open fireplace for cooking and a kettle for boiling water. Nor did the family have a wooden door with only a piece of hanging felt. Then the child showed up, holding the wolf and said “take this creature which ate your sheep.”

D: The 3 year old?

B: Yes, and soon Tsedev realized that the three-year old was amazing, and he toned

down his reaction to the boy's earlier bad behavior. Since he wasn't an entirely bad man, he made an offering of incense, but his wife threw the ashes on the child and told him never to cross their threshold again. She must have been possessed by the devil because throwing ashes at someone is a terrible thing to do and was a bad omen. Then the child, weeping, left their home, wearing his little fur *deel* and his Mongol boots in which he looked after the animals in the spring. He found shelter for the night near a dense forest of saxsaul (a kind of poplar) trees where he came across a wandering mendicant lama who was afraid of this child but still passed the night with him. The lama wondered about this little boy with the boots and the white Mongolian *deel* who became frightened when evening approached. Then the child told the monk his story about the sheep and how the wolf went after the "consecrated" sheep. He mentioned that he took the wolf back to his father's *ger* but also asked what he was to do now as he had neither parents nor a place to go. The lama said that the little boy was now his son and that they would go to the Toson Prince lamasery where the boy would be taught. We talked about Tserenvanchig and of the Tserenvanchig lamasery before. I know a legend about Tserenvanchig and a lama and a little boy, and I think it might well be a story of him as a little boy.

Anyway, back to the story. The lama told the boy that he had a cup of rice in his pack and then instructed the child to gather firewood, and he would get water to boil the rice. There was water from the snow and a pot and a small plate waiting, but the little boy did not break up the firewood, which was most unusual for a child. When asked why, the little fellow answered that it was fine not to break the firewood which the lama landed up doing. At that moment, the boy's face became strange, and he told the lama never to let his fingers break another piece of wood. As much as the lama tried to break up the wood, the little boy did not let him, so they both went to sleep on empty stomachs. Later, the child told the lama to get water for the rice and when he returned there was a fire started from burning feather grass, which the boy had collected. The rice thickened and the bowls were filled. The lama had no idea that feather grass grew nearby and when he tasted his rice he realized it had been sweetened with brown sugar. Not only was this mendicant lama not such a bad man, but the child was no ordinary child. The story goes on to point out that the lama was well aware that this child was unusual and made him his son. So, after the rice, they went to sleep, but the mendicant lama had lice, so he apologized to the boy. However, in spite of the lice and the cold, they both went to sleep. When they awoke, they were conscious of intense heat, and the lama noticed that a sable lined cloak had been draped over him and the boy. From this sable cloak, which had disappeared in the morning, and the feather grass fuel which was, in fact, incense, the lama came to the realization that the little boy was a reincarnation. Then the lama and

the boy arose to find a greenish turquoise stone emerging from the ground, which was like a big, marvelous ball that the boy kicked with his Mongolian boots. The lama said greedily that they should put the large stone in their sack, but the little boy warned him not to do so, saying “enough, enough — leave it there.” So the lama listened to the child, but wondered what was really happening, since he wasn’t allowed to hold on to the sable cloak nor pick up the precious stone.

Then the two of them went to a market where a woman was frying a chicken. The boy asked a nearby family for some salt and gave it to the woman. The child was afraid, and his face took on a strange look as he urged them to get out of there, so Mr. Gonchig, the mendicant lama, and the boy hurried off. Mr. Gonchig’s premonition became a reality as they passed a black dog, who was running off with the chicken, which was cursed and struck on the foot by the woman. Yelping and with its sore foot dangling, the dog could not find a place to hide. This was not the first time something like this had happened, and the lama and the boy moved fast to the lower slopes of the valley, which were so cold they almost froze to death. But they found a sort of blind alley in the tumbleweed where they spent the night in the shelter of their sable *deels*. Before they knew it, it was morning, and they saw on the hillside a cloth tent and a horse carriage. They figured that several people they hadn’t noticed had arrived during the night, but they did not want to be seen by them. However, they had to reach the hillside area, so they walked rapidly to a low ravine and up to the mountain pass, and they were not caught. That’s what happened. The child tried to get beyond the mountain pass, but heard a lot of noise from people on horses so he remained hidden in the tumbleweed. Gonchig, however, was captured and taken away up the pass on a horse to a brightly colored tent, where there was a large prideful lama, whose student told him that the mendicant lama, poor soul, had been lost in the mountain pass and was captured. Gonchig was told to sit down and was asked why he was there, and he only answered that he had been in the south. He did not mention the boy. But the arrogant lama questioned him about travelling, a month ago, with a little boy and wondered where he was, since he was their Khutukhtu or reincarnation. The large lama demanded if Gonchig had lost him or killed him. In spite of being threatened, the mendicant lama replied that he had never seen the child nor did he know where he was. He added that such a boy would never stay with a poor lama like himself. But Gonchig was accused of lying because he had been seen talking with someone and was again accused of either abandoning the boy or killing him. Thus, he was going to be tortured with the nine punishments²⁵. Evening came, and the mendicant lama excused himself to go see the horses (to urinate).

Since it was clear the poor lama could not go very far without a horse, he was let outside where the child was waiting for him. The lama told the boy to go

inside the tent, and that he would enter after him. Thus this child, born in the Gobi, had come to a lamasery where people realized he was the true reincarnation. The sutras were read, and it became clear why that steppe animal, the wolf, went after the consecrated sheep in the first place. The little boy adjusted to life in the lamasery, and Gonchig became the major lama of the right hand with the name of Khutukhtu Tserenvanchig. There were three things to find out about. The first was that you should not cut down the trees for firewood because, in revenge, the local deities would blind your eyes. The second thing related to picking up the turquoise stone. That should not be done because in so doing one stepped on the roof of the underworld temple. And the third related to the woman frying the chicken, which represented her own child whom she was about to eat. The dog was, in fact, the spirit of this woman's mother who was trying to prevent her daughter from devouring her own child. But the woman in breaking the dog's leg actually broke her mother's leg, all of which led the little boy to leave the scene as fast as he could. Every other reincarnation had been self-proclaimed, but this sixth reincarnation tells us how Tserenvanchig became the Khutukhtu. The seventh reincarnation was that of our Merciful Teacher Sonomtseren. So this is what I have learned. Next year, I will go to Khamrin lamasery and then to Demchin lamasery. Yes, I will certainly go there.

D: Is the fifth reincarnation the Princely Khutukhtu?

B: The fifth reincarnation was destroyed by the Manchus. It had started in Erdene Zuu, but moved about. The Living Womb and the Stone Phallus are both inscribed with the letter "om," thanks to the fifth reincarnation of Ravjaa who went to Tövkhön for thirteen or fourteen days, almost one half a month, for a rest. While he was there, he saw the stupas of the first reincarnation at the Tövkön mountain pass, and he saw Ochirvaan and the Tara Mother Goddess at the place where the first incarnation was seen, which was wonderful. This was the place that inspired the song "Ulemjiin Chanar." Luvsandanzan was the lama who came to Erdene Zuu with four young people and performed the one hundred and eight *tsam* dance. The first Danshig Naadam honored the Jetsamdamba²⁶⁾ and there were horse races at the area where the Phallus stone monument has been placed. This Mongolian Great Naadam²⁷⁾ was first begun by Danzanravjaa, and for the past four years, the Danshig Naadam with its horse races has been held in Kharkhorin. Danzanravjaa also wrote the song "Ulemjiin Chanar" and selected wine to serve people but he turned it into water so there was no intoxication, which the eighth Bogd (or Jebtsundamba Khutukhtu) was unable to do²⁸⁾. He and Danzanravjaa came to hate each other and sought revenge on each other and with the Manchu Khan, it was decided to kill the fifth reincarnation. They went to Tövkhön and on to Khujirt.

To get back to the story, the fifth reincarnation found a good woman companion,

Dr. Baljidmaa, but she was not permitted to go on to Khujirt, so she went to her home in the Tuul River area. She had been called all sorts of names midst the drunkenness of the eighth Bogd. But they went on to Taraght and the rocky mountain area and then to the Dundgov Ongiin lamasery, which is, I guess, where Baljidmaa went, and so the place was considered to be unclean. It is interesting how such a powerful woman could be seen as defiled. But the fifth reincarnation was cursed, and so he began to drink and became involved with the lama Luvsandanzan, and he killed him. Two scholars have written about all of this. Mr. Damdinsüren described the six-year drought at Erdene Zuu and how the mice overran and destroyed the temple hall²⁹. The mice scampered all over the sutra books of Dagvadarjaa. At the time, there was a measles outbreak in the south side of the yellow hollow, which killed many children for whom the doctor could do nothing. The eighth Bogd set up the stone phallus and offered fifty “oms.” But this did nothing to lift the curse, and the drought continued. Then Danzanravjaa was invited to perform at the Naadam with his one hundred and eight *tsam* dancers who performed a rain dance, which along with the power of the Merciful Teacher did, indeed, bring rain, and the dead mice were swept away in the rushing waters. So, things got better. Another scholar, Altangerel, wrote that on his return Danzanravjaa drank a great deal and killed a lama³⁰. According to the television, Mr. Damdinsüren pointed out there was a frightening Devil figure on a brown horse seen near the lamasery. He also said that Danzanravjaa ordered Luvsandanzan to destroy the devil, which he did, but he died in the process. Then the eighth Bogd reported to the Manchu Khan that Danzanravjaa was a drunk who had killed a fellow lama so the Manchu Khan ordered the death of Danzanravjaa who was then arrested. His four extremities were pulled and stretched until he died, and his body was left to the black vultures³¹.

D: In which *aimag* or *sum* is the Khutukhtu’s lamasery?

B: Ours. Our Khutukhtu lamasery? In Bogd *sum*.

D: Övörkhantai?

B: Yes, Övörkhantai, Bogd *sum*. Last summer a few lamas were at Demchig lamasery in Bayankhongor. Ömnögov is Khankhongor or Khanbogd — maybe. There are twelve lamas there and a lamp has been consecrated. I put a *khadagh* at the home of “The Merciful Teacher” near the lamasery hall. I firmly believe that the last reincarnation did happen.

D: Did all these incarnations include that of Tserenvanchig, the Princely Khutukhtu and “The Merciful Teacher?”

B: The sixth reincarnation is from the Demchig lamasery, and the seventh is from here and it, along with the eighth, has not yet been discovered. So I must go to the Demchig lamasery and from there on to the Khamrin lamasery which has been built up and where I know Baatar and Altangerel. I also want to meet Mr.

Khurelbaatar, the historian. So now I have spoken. I pay for all my expenses on my pension of 92,400 *tugriks*, but I can't afford to publish a book. This is all just a hobby. Everything is stored away in my brain, but a book is necessary for the next generations. Here then, child, is my story.

D: Thank you.

Notes

- 1) Gegeen is the title of an incarnated lama with great merit.
- 2) *Khoshuu* or Banner, was an administrative unit during the Qing dynasty rule over Mongolia. See Jigjidiin Boldbaatar and David Sneath, "Ordering Subjects: Mongolian Civil and Military Administration (Seventeenth to Twentieth Centuries)" in David Sneath, ed. *Imperial Statecraft: Political Forms and Techniques of Governance in Inner Asia: Sixth-Twentieth Centuries*. Bellingham: Center for East Asian Studies, Western Washington University, 2006, pp.296-303.
- 3) The Communist Party that was the only legal political party from 1924 to 1990.
- 4) On this Virgin Lands policy that originated in the Soviet Union, see Morris Rossabi, "Introduction" in Yuki Konagaya and I. Lkhagvasuren, *Socialist Devotees and Dissenters: Three Twentieth-Century Mongolian Leaders*. (SER96) Osaka: National Museum of Ethnology, 2011, pp.10-11.
- 5) In 1964, Tsogt-Ochiriin Lookhuuz, who had been Director of the State Farms, was purged in a struggle with Y. Tsendenbal, the Head of State. Labeled as part of an Anti-Party clique, he was exiled and later imprisoned. In this atmosphere, a letter from him could be used to portray the one addressed as "subversive" and could lead to dismissal. See Konagaya and Lkhagvasuren, pp.129-151.
- 6) Tārā represents the female aspect of Avalokitesvara (known to the Chinese as Guanyin and to the Japanese as Kannon), a Bodhisattva. The White Tārā symbolized compassion, healing, and longevity while the Green Tārā symbolized enlightenment. See Stephen Beyer, *The Cult of Tārā: Magic and Ritual in Tibet*. Berkeley: University of California Press, 1978. For visual representations of Tārā, see Terese Tse Bartholomew and Patricia Berger, *Mongolia: The Legacy of Chinggis Khan*. San Francisco: Asian Art Museum, 1995, pp.291-293.
- 7) Y. Tsendenbal was Head of State and Secretary of the MPRP from 1952 to 1984, and J. Batmunkh held the same posts from 1984 to 1990.
- 8) For interesting descriptions of the *tsam* dances, which were not originally part of Buddhist rituals, and the masks used during the performances, see Aleksei Pozdneyev, *Religion and Ritual in Society: Lamaist Buddhism in Late 19th-Century Mongolia* (trans. by Alo Raun and Linda Raun; ed. by John Krueger). Bloomington: The Mongolia Society, 1978, pp.505-521 and Henning Haslund, *Men and Gods in Mongolia*. London: Kegan Paul, 1935, pp.43-48. Bartholomew and Berger, pp.155-171 include photographs of the masks and the associated regalia.
- 9) The Uyghur script for Mongolian was developed early in the thirteenth century and was replaced by the Cyrillic alphabet in the 1940s. The latest work on the Xiongnu people who inhabited Mongolia from about the third century, BCE to the third century, CE is Ursula Brosseden and Bryan Miller, eds. *Xiongnu Archaeology: Multidisciplinary*

Perspectives of the First Steppes Empires in Inner Asia. Bonn: Vor- und Frühgeschichtliche Archäologie Rheinische Friedriche-Wilhelms-Universität Bonn, 2011. The Xiongnu were not Mongolians, but modern Mongolians frequently refer to them as their ancestors.

- 10) Usually referring to a Parliament, but in this case, a local Congress in his region.
- 11) Khüree was a monastery.
- 12) A reincarnated lama.
- 13) Choir is a site along the Sino-Mongolian border, adjacent to the border-crossing town of Zamyn-Üüd.
- 14) A *khadagh* is a ceremonial scarf. For its uses, Sechin Jagchid and Paul Hyer, *Mongolia's Culture and Society*. Boulder: Westview Press, 1979, pp.85-86 and 132-133. *Aruul* is a type of cheese. Many objects were placed on these statues, rocks, and other sacred sites to ensure good fortune.
- 15) Refers to the Red Hat sect of Tibetan Buddhism.
- 16) A mountainous and forested steppe region.
- 17) Marshall Choibalsan (b. 1895), often labeled as Mongolia's Stalin, was the Head of the country and the Secretary of the Mongolian People's Revolutionary Party until his death in 1952. Ironically, a statue of him is in front of the National Mongolian University.
- 18) The Mongolian name for the Maitreya or Future Buddha.
- 19) The Mongolian New Year.
- 20) On this remarkable figure and his real activities, see Owen Lattimore and Fujiko Isono, *The Diluv Khutagt: Memoirs and Autobiography of a Mongol Buddhist Reincarnation in Religion and Revolution*. Wiesbaden: Otto Harrassowitz, 1982.
- 21) On this figure, see the popularized account of Danzan Ravjaa (1803-1856) in Michael Kohn, *Lama of the Gobi*. Hong Kong: Blacksmith Books, 2010.
- 22) An administrative unit below a *sum*.
- 23) On the role of *zangis* as heads of *sums* during Qing (1644-1911) China's domination over Mongolia, see Charles Bawden, *The Modern History of Mongolia*. New York: Frederick Praeger, 1968, pp.175 and 178.
- 24) Charles Bawden, *Mongolian-English Dictionary*. London: Kegan Paul, 1997, p.322. These animals were distinguished by ribbons around their necks and thus could not be used.
- 25) On punishments during the Qing dynasty, see Ch'ü T'ung-tsu, *Local Government in China Under the Ch'ing*. Stanford: Stanford University Press, 1962, pp.117-118, 126-128 and Derk Bodde and Clarence Morris, *Law in Imperial China*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press, 1967, throughout.
- 26) The Jebtsundamba Khutukhtu or the leader of the Buddhists in Mongolia. See Charles Bawden, *The Jebtsundamba Khutukhtus of Urga*. Wiesbaden: Otto Harrassowitz, 1961.
- 27) An annual festival held in July emphasizing the three traditional sports, archery, wrestling, and horseback racing.
- 28) On this reputed skill, see Kohn, p.83.
- 29) Tsendiin Damdinsüren (1908-1986) was a distinguished linguist, poet, editor, and literary critic. He was Editor of the MPRP newspaper *Ünen (Truth)*, produced the first Russian-Mongolian dictionary, and was the Head of the Institute of Languages and Literatures at the National Mongolian University. He was imprisoned in the 1930s for so-called unorthodox views and was criticized once again in the 1960s for bringing to light and championing pre-Communist Mongolian literature. On him, see Bawden, *Modern*

Mongolia, pp.413-415; Kohn, pp.203-210; Robert Rupen, *Mongols of the Twentieth Century*. Bloomington: Indiana University Press, 1964, p.287; and *Through the Ocean Waves: The Autobiography of Bazaryn Shirendev* (trans. by Temujin Onon. Bellingham: Western Washington University), 1997, pp. 106, 124, and 213.

30) Altangerel is the Curator of the Danzanravjaa Museum. On him, see Kohn.

31) There are quite a few legends about his death. See Kohn, pp.186-190.

III Borjigon

B: Borjigon

D: Lkhagvademchig

1 Early Years

D: So what is your name and what area do you come from?

B: I am a local man and come from around here, from Shankh *sum*. In fact, my home is 10-20 kilometers from here. I am called Borjigon.

D: When were you born?

B: 1941.

D: Just as the war began.

B: As the war began. I was born at the beginning of the war.

D: Is this your locale?

B: Yes — around Kharkhorin and our *sum*.

D: How many brothers did you have as you grew up?

B: There were three or four of us, but my parents were not around when I was young. In 1959, I had just finished the first grade when my oldest brother died. So now there are three of us, and my two youngest brothers are in the city, and I am here.

D: Did your father and mother live near here?

B: They were from this general area.

D: Did you go to primary school when you were young?

B: From 1949 to 1953 I went to the school near where I lived. When it ended, I was living with my grandfather and grandmother who had grown old and who died around 70 — about my age now. They did not like me going far but while Grandma was drinking the waters at Mogoitin Spa, which was a fourteen day trip by horse or camel, I registered for school. When August 25th came around, Grandma was not there so I could not start school. Thus, I did not go so my education lagged behind.

D: What grade did you finish?

B: The 4th grade. I have a 4th grade education.

D: Is there now a central school to go to?

B: Yes. There is a school in Shankh center in our Shankh *sum*. There is also a lamasery and a place that has pretty good things. I attended an artel¹⁾ or craft co-operative which was the main institution there. Lamas from the old Shankhin lamasery worked at this artel where quite a few metal goods, carpentry products, and boots were made. The artel made essential goods like Mongolian boots, saddle cloths, chests, dishes for the home, and felt. Generally factories are large, but I am talking about a small factory which later moved to Khujirt *sum*, and we

set up the joint “Khadni artel.”

So that is what went on in our *sum*. In 1956 the State Farm was organized in two years, and Shankh *sum* was abolished and was united with the Kharkhorin State Farm. Thus Kharkhorin *sum* no longer existed. I was young at the time, around fifteen, and I lived with my mother and father who were herders for the *negdel*²⁾ and later the State Farm. Then I was drafted into the military and joined the 7th battalion, the building of which later became a meat and flour Kombinat. I helped build part of this Kombinat – #24. The meat Kombinat grew larger when I worked there from March to July. I then worked at an auto repair factory, and then a flour factory from which only the ruins now remain. Most everyone discharged from the military worked in construction all over the country. I was thus delighted to find work in the flour factory in Kharkhorin, which has been opened for twenty years, and I have worked there twenty-two. But wait a minute. After 1988, I was the assistant herder at the factory. My father died, so I helped my mother with the herds, and since 1988, I have been herding my parents’ fifty or so sheep, twenty odd cows and horses, but then the factory lost all of its animals. So since 1988 I have been a one thousand herder (a competent herder) with my own animals. So that is how I have lived my life. Now I try to make a better life for my children as my wife and I live out our lives with our herds.

D: Did you live in a dormitory when you were little?

B: If you knew someone near the school, you stayed with them and not in the school dormitories. In the first year, there was an old man who was my grandfather’s brother and some of us stayed there, then we stayed with Grandpa, and then we stayed in the dormitory for three years. However, if I had gone to several schools, I would be better educated.

D: Where did the children come from?

B: From Shankh.

D: Yes.

B: Of course all school age children came from their *sum*. But some ran away.

D: Like in the movies.

B: Like in a movie. Such was our life. We would run away, and the teachers would follow us. We tried to escape on the red horse., but the teachers would catch us and bring us back to school. Some of course really did flee, but I never did. On vacation, I slept for two or three days.

D: When did children begin school?

B: At eight years old and we finished the fourth grade at twelve. We did not have a middle school then but now there is one in Khujirt that goes through the seventh grade. Later it became a high school for our *sum*, which is convenient for many but a bit far for those in the countryside. People did not like to send their children to school, so only a few children attended from our area — maybe

three or four. The rest are from the countryside.

D: Did the teacher come from the city or the country?

B: In the beginning they were local, but when I attended they came from the city, from teaching in Khujirt. The teacher was well trained for the children in the seventh grade, and I finished the fourth grade with a young teacher from Zunbayan-Ulaan. That teacher finished high school and then became a teacher and after some difficulty, came to our area. He was a tall young man. There was a short, light-skinned teacher from Uvs before him who had come from the city. The school started in October or November, but he was moved to the Khasagdal *aimag* where there must have been a teacher shortage. He wrote to us, and we wrote back. However, he had, in the beginning, been very strict, and he was hard to get used to but when he left, we all crowded around him and did not want him to go, and we even followed him. He understood kids very well. I wonder where he is now.

D: Was he a young man?

B: He was a youth just over twenty who had, I think, finished school at fifteen or eighteen. Generally, though, the teachers came from a school in Khujirt where many of them went. We didn't have a high school.

D: How many teachers were there?

B: There were four or five teachers — one for each group, and there were two groups per class. The head teacher had no more than five or six classes.

D: Generally four classes?

B: Yes, four classes.

D: How many students were in a class?

B: Thirty children.

D: That is quite a lot.

B: Yes, quite a lot, but by the end of the fourth grade only twenty remained.

D: Male and female?

B: Boys and girls, but I can't tell how many of each.

D: Were there separate classes for boys and girls?

B: No, we didn't have the resources for that. Later, a small building was set up and used for the second and third year.

D: Did the children live together in the dormitories?

B: No, there was separate housing.

D: Ahh, in a *ger*?

B: There was a *ger* with heat and a caretaker who attended the fires and lit the wood burning stoves at night in two or three *gers*.

D: How many children in one *ger*?

B: Over ten children — or almost ten. They might study in another area but my lessons were all in that *ger*, which could get very dirty, but I went to others for

different lessons.

D: I see.

B: In the first grade, we craned our necks to see the writing on the blackboard which we copied.

D: In the school *ger*?

B: Since the first grade did not have many classes, we stayed in one *ger*. In the second grade, we slept and had classes in the new building.

D: Was there Cyrillic writing then?

B: No. In 1949, I used the Cyrillic and the fourth class was taught the Mongolian script. Then that stopped, and we used the Cyrillic, so the Mongolian script was cut back.

D: The Mongolian script?

B: Yes.

D: So then the Cyrillic script was taught.

B: Yes. Then we were taught the Cyrillic script. I am not sure but I think that Cyrillic has been taught since the sixties.

D: Your food is getting cold.

B: The seven and eight year olds knew the Mongolian script before the Cyrillic was introduced.

D: Did families at that time like their children to go to school?

B: Clearly, some did not, but I don't know about everyone.

D: My brother said that some people did not like their children going off to school.

B: Since the herds were private then, the children were needed.

D: What lessons were there then?

B: Geology and world geography in the fourth grade along with Mongolian literature, gymnastics, and cycling.

D: What was taught in Mongolian literature?

B: There were not too many writers, then so fairy tales and riddles. Sometimes there were stories by Tarvaagiin and Baastiin in the children's readers. I think those authors wrote them, but I am not sure if they were understood. I would answer the teachers' questions.

D: Did you wear the little red scarf or tie?

B: Of course, and the boys wore blue cotton *deels*, and I think that the girls wore green *deels*. That was the uniform along with a cotton knapsack for books.

D: Did boys wear a special *deel*?

B: Blue cotton, and green for the girls.

D: Did the parents make these *deels*?

B: Yes. We did not have clothing in Shankh, so fathers and mothers made them.

D: Was the food and drink prepared by parents or the government?

B: The state provided meals and sent the food. There usually was meat for the

children, but there was no flour or rice. However, I do not know about the money and everything that went on.

D: Were there three meals a day?

B: There was tea in the morning, a meal during the day, and one at night.

D: What sort of food was served throughout the day?

B: In the morning there was *mantuu* or steamed bread — generally *mantuu*. Other types of bread had not yet been introduced — same for rice. Sometimes there were boiled joints of meat, and there were cabbage and potatoes. We didn't like the cabbage, but the potatoes were edible. One cook cut the cabbage into thick slices which no one wanted to eat, so the cabbage just sat there.

D: Did you eat soup or *khoorga* (chopped meat and vegetables in fat)?

B: We generally did not eat them. Since there were forty or fifty children, it would have been hard to make the *khoorga*. Now, at Shankh, there are three halls and two smaller ones on the side. The meals were cooked on one side, and the classes were held in front, so we marched off to eat and then returned to classes.

D: Did you ever taste the cabbage and the potatoes at school?

B: The potatoes were alright. An old uncle and my grandparents lived in one *ger*, and the old man brought in several potatoes, but we didn't know what to do with them, even though we were told they were good to eat. The artel had planted potatoes and a few vegetables. But one hectare or even less was not enough, though a *khashaa*³⁾ was square, and some vegetables and cabbage and potatoes were planted by ten old Chinese who had settled in the area amongst the Mongols and Kazakhs. The school children helped with the plowing, which was good for them. Old Mr. Namsrai gave each child a big moon cake the size of a potato for working the land. We loved the moon cakes.

D: Was Mr. Namsrai Chinese or Mongolian?

B: He worked in the artel, but I don't know if he was there when he was giving out the moon cakes.

D: What sort of work did all of you do?

B: The work was hard. In the spring, we plowed the field and had to remove and gather up all the old roots and stones under our feet.

D: Were the children satisfied with the food in the dormitory? Was it enough?

B: They were always hungry, though sometimes more so than others. Sometimes, we were given dried curds (*ezgii* or *aaruul*) and two buns, which were wolfed down.

D: Did lessons run from morning until evening? How many hours did they last?

B: A long day — from nine in the morning until four.

D: That was quite long.

B: Yes. Now the Shankh lower region is “the lower center,” and it is called the West Khüree. Many families and children came from there, and they went home after

the sun had set in the dark of night. Then the children played outside on the road and horsed around with their friends.

D: Were there blackboards?

B: There was a blackboard the size of a picture which hung on the wall.

D: Was the blackboard placed in the honored part of the *ger*?

B: It was alright to put it anywhere because the teacher had to follow the light.

D: Did you sit on beds in the *ger*?

B: Yes, we settled down, and the blackboard was set up.

D: Did the teacher use chalk?

B: Yes.

D: Now students have paper, pencils, and notebooks.

B: The teacher gave us what we needed. Students in the first grade used lead pencils and in second grade they used ink. The glass ink bottle had a cone shaped hole for the ink. Have you seen these?

D: No, I am not familiar with them.

B: It is round, and the tip of the pen can be dipped into the ink in a glass ink bottle. One has to be careful not to spill the ink, which can't be rinsed off. It is easy to turn the cone shaped bottle around, it does not break if it falls and it can be washed with a cloth. When the ink ran out, the teacher refilled the bottle. Later, there were different colored inks that dissolved in water and turned pink. Now the black ink is pink.

D: Back then, what was the grading?

B: It was based on 5, 4, 3, and 2.

D: I have heard that children, in those days, were very afraid of their elders.

B: We were. We wanted to appear dignified so tried to be good and not fight in front of them. On occasion, the elders could become upset and would scold a child no matter whose child he was. They might be admonished: "You are a rogue! Why? What has become of you?" The children were frightened. When everyone told the child that he was doing something wrong, he was frightened and stopped being offensive. A child had to be raised calmly, had to greet people politely, and needed to say "thank you" and "excuse me," no matter how busy he was.

D: Now, their "excuse me" or "thank you" was based on a Russian or foreign tradition.

B: Whatever happened, one needed to say thank you.

D: In the old days one said *gialailaa* and now *bayarlaa* is said for "thank you."

B: *Gialaila* means "more peaceful." People also say *saikhan bollo*. Any of these is an expression of happiness, and some people even say *basiba* or *bashiba* or *bashila*. I wonder if all of these evolved from *spacibo*.

D: Did you learn Russian in primary school?

B: Not in the primary school — in middle school.

D: Were there Russians in your area?

B: There were Russians on horseback who carried big sticks and could have been “mappers.”

D: Were they frightening?

B: We ran away from them.

D: Did they look foreign to you?

B: We had never seen Russians before, and their faces were different and we were not accustomed to them.

D: What sort of people were the Russians?

B: They were alright. They were not bad people, and the Mongolians, generally, think very highly of them. And all of us came to regard the Russians as good people. And the men with the sticks must have been cartographers who climbed to the summit of hills and put their sticks in the ground. I remember them well.

D: At the time, did you have ample money to go to the store?

B: As a child?

D: Yes.

B: Rarely. We would only go to the store when we had three or five *tugriks*, so I saved every last precious penny for fruit candy or juju plums and for one...moon cake which cost twenty *mung* and five moon cakes for one *tugrik*.

D: Did all the candy come from Russia?

B: Yes. We could not afford a kilo of candy. But foreign guests would bring us some which did not fill us up like the moon cakes or a *tanzuu*.

D: Did the Russians have a vodka called “Monopoly?”

B: People did talk about this “Monopoly” but I don’t know about it. Sorry.

D: From what I have heard, *manakhual* or “white spirits” was supposed to be good for your health, and people would buy it as soon as they got their paychecks. There was a lot of talk about this “white spirits.”

B: This could happen to city people who have salaries but not in the countryside. There is this “white spirits” in the liquor stores which costs fifteen *tugriks*.

D: That is quite expensive.

B: Yes, that is pricey. By the 1960s and 1970s, it cost it cost twenty seven or twenty eight and even more than thirty. Now it costs over four or five thousand.

2 Religious Beliefs in Socialist Times

D: When you went to primary school, did your parents say prayers for you?

B: No. Generally people were afraid to do that. But my father could not do that anyway as he was a Party member. Party members would be criticized if their children wore a guardian spirit amulet. So we did not do that.

D: Did other children in your area wear them?

B: I do not know. I did not really see them. It has been several years since the

lamaseries which were scattered all over were closed. At that time, though, people were afraid to practice the Buddhist religion.

D: Were there Buddhas in your area?

B: Yes there were Buddhas. Every family had them; some were displayed and some were hidden.

D: Did you put out twenty-five lamps for the Buddhist feast day?

B: Of course, in the *ger*. It is said that we are masters in our own homes. There were no officials around on feast days so the lamps could be lit while the elders silently read the prayers.

D: Did the lamas wear lamas' clothing?

B: A lama did not wear his lama *deel*.

D: Were the lamas who worked at the artel bald or did they get their hair cut?

B: They shaved their heads and did not let their hair grow out.

D: Did the lamas have wives and children?

B: Generally, the black lamas (or those who were laicized).

D: When the Buddhists were worshipping, were people invited to read the sutras?

B: You were asked to do so in secret. If things were not going well for you, you might turn to a trusted person for guidance. Everyone held some sort of belief.

D: Was there *oboo* worship?

B: Not generally. That began later, and now there is a little more praying than when I was young. We didn't understand when the older people talked so happily about the *oboo*, Naadam, and going to wrestling matches. At the frequent Naadam festivals for the *oboo*, there are memories of the wrestling and the race horses. But when I was young, worshipping at the *oboo* wasn't known by everyone.

D: Were there other people besides the lamas and the Chinese who worked at the artel?

B: There were women who made the basic white soled boots and later light sewing was done but not at the Shankh artel. The seam work was as tough as wood or metal, and people from Khujirt joined in the sewing.

D: Were there artels just for lamas?

B: I don't know. There was organized coercion at the Shankh artel, so when the lamas' artel was organized, people left. Actually, this was the first lama artel, and many lamas were forced to join but it was so small, it was not paid much attention.

D: Did you have an idea of what a lama looked like when you were young?

B: Certainly. I knew that two elderly lamas were my ancestors, and one found the Bogd's elephant.

D: Elephant?

B: Yes.

D: Oh, at the khüree or lamasery.

B: At the Bogd khüree. Now the elephant has died, and nobody really cared. They say that a man came here, but no one knows who he was. Maybe he was a lama from Odgoi who lived in a three walled *ger*. There was also a woman there, but they lived separately, although the lama would show up from time to time. Now I live near the *aimag* settlement where this man came from, and everyone knows that he was a devout and serious man and a good fellow. But he came and went. There was also a senile old lama on the far side of the Orkhon River who moved around to avoid prison, and he is still there.

D: Did your family have Buddhas when you were little?

B: We had all sorts of gilded, yellow or golden, bronze Buddhas and just one or two pictures of a Buddha.

D: Could your parents worship the Buddha since they were Party members?

B: They could. At first we didn't conceal the images that much, but later when people started talking, we put them away in a chest.

D: Was there a prayer lamp?

B: Yes, there were many.

D: A lot?

B: Yes, a lot.

D: Were there sutra books?

B: My father had no sutra books, oh, just a very small one which he got from his brother. I have it now and it is the Mongolian Dorjzodov (Sanskrit:Vajracchedika sutra, The Diamond Cutters' Sutra) I have that now. I also have the small sutra book, *Ish Uzuulsen* (Predictor of the Future) and the *Bogd Lunden* (The Holy Instruction for the Jebtsumdamba Khututhku or The Holy Book Predicting the Future).

D: Could he show his religious beliefs as a Party member?

B: No, he hid them.

D: Did he hold strong beliefs?

B: He didn't know a great deal, but he did secretly read the sutras for the *oboo*, and he could offer the special prayer for the ritual called "The Four Monks' Food Corner" at which four people gathered in someone's home, and prayers were read and special dishes were prepared. We sometimes went to Shankh, but we had to hide all this if there was a Party member around. However, being a Party member did not mean you were a revolutionary.

D: Was your father a leader in the Party?

B: No, he was a herder and also the *bag*⁴⁾ leader after he was discharged from the military, and then he led the Shankh cooperative.

D: Did your mother teach you the incantations?

B: No. We were not instructed even to open the sutra books. Before I attended school when I was around five or six, I lived with my grandparents, and they

taught me about the Goddess Tara and others but I couldn't memorize all the incantations. Still, I know some of them. I was made into a red revolutionary at school, but that is all forgotten now.

D: Did you memorize the Tibetan or the Mongolian?

B: The Tibetan.

D: Were you close to your grandparents?

B: Yes, we were close for fourteen years from when I was born until I returned to my parents at around fourteen or fifteen.

D: Did your grandparents give offerings to the Buddha?

B: Yes, yes. Our *oboo* had a Mongolian inscription where I could offer incense and prayers in Mongolian. Although my grandfather owned two or three Buddhas, he was a secular man and not a monk.

D: From time past?

B: Yes. He was bald in the front with the traditional pigtail composed of three braided strands with the tips knotted and held together by a leather strap — kind of like a tail. He almost reached ninety but passed away at eighty-seven years old after falling from a horse. How he loved his horse, but when he was about seventy his horse fell from a parapet, and my grandfather broke his pelvis, which is not good for someone approaching ninety. He had almost twenty years in bed and had good nursing care.

D: How was his treatment? Was western medicine available or did the lamas care for the sick?

B: Western medicine was available. A young doctor from the *sum* tended to him. Although there may be some Tibetan hospitals, they are not out in the open, and people might say they mislead you.

D: When was bread available to you?

B: For the past ten years, we have eaten bread though even in the fifties at Shankh, there was a small bakery. Then good bread was baked at the artel, but I really don't know much about baking bread or what was made in the artel. Bread also comes from Khujirt.

D: Was it strange to eat bread for the first time?

B: It was really good, and I even tasted a delicious cake, which we have many of now. They are cut into little pieces, so we have a lot of them to eat.

D: Did your school give the message that religion and the lamas were bad?

B: Of course there was some talk about the remains of the feudal opposition, but you were scolded if you asked questions and were told that you were lazy and unproductive. But everything depends on one's character, and it can be frightening if the leader himself has a bad character. It is best if a director has a lot of experience and can evaluate all situations. When someone is accused of having a bad character, he is considered an "enemy of the state" or an "enemy

of the people.”

D: Can you be your own worst enemy?

B: Yes, you can be your own enemy. If you are not doing good work, you hurt the state and are labeled or scolded.

D: When you were young, did you know if the people working at the artel were lamas?

B: Of course, we knew.

D: Did you dislike them because they were accused of being remnants of feudalism?

B: No, no because these lamas had beloved relations throughout the countryside. We didn't hear “he is one of those bad feudal lamas but he is Mr...” They had really stopped being lamas, and they were never hated. Everyone knew them, and they were not regarded as prisoners.

D: Do some lamas live alone?

B: Not very often, but there are some who live on their own.

D: I heard that the sutras were read at night in secret. Did that happen?

B: Yes that is true. The door to the *ger* and the *khashaa* gate were locked, the lamp was lit, the incense smoldered, and the sutras were read. During the day the teacher read books, but there were prayers at night. The lamas had a daily prayer service at Shankhin Lamasery which no one missed, and everyone remembered that after the lamasery was restored. Otherwise, one stayed in one's own *ger* to pray with one's own religious artifacts. We had a lot of such Buddhist things, as did other families. The lamas protected the finest Buddhist things, but when Buddhism revived people assembled their hidden Buddhist treasures. However, many things were ruined.

D: When you were small, was the Shankhin Lamasery in disrepair?

B: Yes. The lower area where the lamasery is now located near the river's edge was called the western lamasery and was the largest and had a *dugan* or lamasery hall. While I was herding I saw the remains of the hall which, when I was in school, had three pointed stupas which were knocked down. Some of the halls disappeared without a trace, and the gilded bronze Buddhas had been destroyed, their limbs and heads broken off. Now one can't even find scraps though recently, in the nineties, there has been some excavation and parts of a lot of clay statues have been found. Now things are being dug up which were buried when there was a fire in the *dugan*, and it is alright to take a little bag for the various things that are found. People are looking through the rubbish and ashes for the buried clay Buddhas. There is one Buddha with no paint on it, and its arms, legs, and other bits were thrown about along with the colored beads that are hung in front of the image of the Buddha. Smashed, crumbled, and broken bits of stone were dug out of holes while other pieces had been blown about. Some with their hidden mystery were buried deep in the earth — or something like that.

Generally, everything was in ruins, and much had been thrown away or abandoned.

D: Did the lamas give children their name when they were born? What usually happened?

B: We would find a suitably revered lama who offered the vows and was a good person. You could not name the child yourself, so mother and father would ask the lama to the naming ceremony which included the offering of incense.

D: When a person died, was it still the custom to consult “The Golden Box” for calculations on the death and the burial?

B: Yes, this custom had not been abolished, but it was consulted in secret. “The Golden Box” gave us the way to start the rituals and the sutra readings. This still continues here at Shankh and in the countryside. On the north side of the Orkhon River there is a maker of Buddhist images who was invited by two lamas to Shankh. But, by and large, one must consult “The Golden Box” about the burial and follow its demands. I really do not know how to consult this “Golden Box,” but there is a lot of talk about it. People, in the past, went to the big lamasery for help in following the traditions.

D: Not long ago people dug a hole to deposit the corpse. Was it traditionally just left on the steppe?

B: It used to be left on the steppe, and no holes were dug, so it was just exposed in the open.

D: When did this practice stop?

B: Generally in the fifties and sixties when more people were buried. I finished school in 1953 when they had begun to stop exposing the body in a faraway area.

D: Did the Tsagaan Sar celebration stop under Marshal Choibalsan?

B: He died on the eve of Tsagaan Sar.

D: I see.

B: He was dead by the day of Tsagaan Sar, so we skipped the celebration because of his death. The teacher collected us from our homes, and we had a meeting and then we were brought home.

D: So was there no Tsagaan Sar celebration?

B: Yes and no. In many households, there was no celebration, but I had done my work and had visited my neighbors, and I would have been sad if I had not done that. Then I left with my teacher so things were not so bad.

D: Did the young enjoy Tsagaan Sar?

B: Yes, we counted the days waiting for it to come. Then it was as nice as it is today. After all, Tsagaan Sar is the Mongolian national holiday which is even bigger than Naadam because it is the first celebration of the year. I think of Naadam all the time where one always enjoys oneself. From the old days, Naadam has been a festival. There were seven local Naadams, or ritual offerings,

for the Jebtsundamba Khutukhtu, and the precise day and month was based on the seasons with summer being better than fall. There have been ten national Naadams, and provincial Naadams are held whenever there is free time. Tsagaan Sar has been passed down the generations for many years, but it began with Chinggis Khan and revolved around a kowtowed greeting from Börte, his wife. Or Tsagaan Sar may have started as a celebration of the beginning of spring, with Chinggis personifying the new spring moon. Yes, that was eight hundred years ago. Now Tsagaan Sar begins what is hoped will be a healthy and successful year, and it is a time when siblings meet, greet, and toast each other.

D: Did you have a winter festival with a tree to celebrate the New Year?

B: In the fifties, our school had some sort of New Year's festival and a teacher was Father Frost and a pine tree from the mountains was cut and decorated. But it was many years ago when all of that started.

3 Living Conditions After the War

D: Although you were young during the war, do you recall what people talked about?

B: I was born in 1941, so I had no idea what was happening in 1945. The Mongols did sign a proclamation of independence in 1945 which I vaguely remember. I must have been a little younger than this kid here (pointing to a child who is about 6 years old). Then ink was put on my finger, so I could be fingerprinted which I found very fascinating. (And the kid pressed his fingers on hearing this.) That's about all I remember from those years. I guess that there were some grains back then that we do not have now. Flour was bought in units of five to ten kilograms, no one sold it by the sack and those with more money bought ten kilograms. There was almost no sugar, and we could not get fine and tasty things. Sugar was used mostly for the pastry at Tsagaan Sar. On ordinary days we ate simple food and we missed sweet things.

Back then, a family had a few animals and did not reckon them in the hundreds but by tens or twenty but ten or twenty animals is hardly enough to live on, especially when taxes are included. At that time, allotments of hair, wool, tail and mane hair, antlers, hooves, and wool were demanded, and it was difficult to meet those norms. Calves, lambs, goats, and kids were all needed but, from what I know now, we didn't always have them. These allotments were demanded by the Party during the first Five Year Plan. From the beginning, both sheep and cows were affected because of the demands for their wool and meat. But a fine was levied in spite of the fact that there was not enough of either to meet the norms. Because of the dissension over this plan, there were revisions. Henceforth, people who had many animals would make up for those with fewer, and all the herds would be counted and divided into three groups while the most that would

be asked for was one kilogram of wool and two kilograms for meat. The reason for joining the *negdel* was generally to make sure that there would be more people with herds, and it was up to the officials to manage the wealthier herders which could be difficult. But some people said “let’s get away from all of this” and joined the *negdel*. So that was the first Five Year Plan and here is an example: Five ewes lambed in the spring with five little lambs, so there were ten sheep altogether. The count was taken by September 1, and it included all the young animals, many of whom died, and those with the larger herds made up for those who had fewer animals. Many people had the hard job of being fully responsible for the herds, and the wealthy were unhappy with the way things went. So that is why the *negdels* were started, and this was how the phrase “guilty herds” came into being. (“Guilty herds” refers to the animals of the rich that were taxed while the poorer herders had trouble making ends meet. This situation led to resentment on the part of both — the rich resented the extra tax and the poor were ashamed and angry that the rich had more than they did.) The Party and the government promoted this *negdel* movement with slogans. However, joining the *negdels* was not always voluntary, and there was some victimization. Nevertheless, the yield of wool rose, and there were fewer “guilty herds.” Our lives stand as example: my grandmother had pretty good herds but they did not produce enough wool so she was brought before the court to be heard and judged. She was found guilty and fined three stallions to make up for the small wool output from her sheep.

D: So things evened out.

B: No, they didn’t. For example, a horse in good condition was deemed equal to ten kilograms of wool. So after the first milk, there might be a mare but no stallion. So the resentment continued. Our Shankh *negdel* had not yet been organized, so my grandmother decided to join the Khujirt *negdel* with all her herds. However, the *sum* administration did not permit, at that time, a *negdel* at Khujirt but finally, in 1956, it started, and my grandmother took her animals and joined and finally had a bit of rest. There was work that had to be done because in the beginning there were not many herds. It was also a little dangerous to join a *negdel*, but things were not good if you did not join. I think that in the fifties raw materials were generally taxed at three or four *tugriks* a kilogram and later in the sixties for nine *tugriks*. There was no compensation for cashmere, and one was allotted meat from the officials who were strict about these provisions. In the *khangai*⁵ you had annually to raise fifty animals, in the Gobi zone seventy five and in the middle region sixty per year. In the sixties, we changed from being under the jurisdiction of the *negdel* to that of the State Farm, and you received sixteen animals. Any more had to be returned to the *negdel*, and you had to find a way to manage. Since one could be arrested and given a fine, many people concealed

their herds. Later in the sixties, after I had grown up, the prices of raw materials rose, and the first kilogram of cashmere earned nine *tugriks*, which was a good price but not enough for a brick of tea, which cost ten *tugriks*. But these nine *tugriks* bought nine kilograms of flour. Most of the raw materials were exported to China and Russia where we didn't really get a good price under socialism, but one could make some sort of profit. Then there was the movement to push Mongolia forward. Personally, I think that was a good idea but the money needed to be equalized.

4 Military Life

B: In 1962, I was in the military and in the fall, we gave a gift of sheep to the Vietnamese. I was sent there by army headquarters and directed, with caution, all sorts of tasks. At that time, the Chinese Red Revolution had started and it was the time of the Chinese Indian War, so we had to be vigilant⁶. We were all told to "be alert". China was also rather under developed, weak, and uncivilized. You must acculturate that country but also had to be vigilant. As we loaded our cargo, or sheep, onto the train, we didn't really know what life would be like in this endeavor. Then we came to the border and the station. It was colorful and we saw a young man approach us, and he was a policeman who said that he was a Mongolian. I asked him if he was Chinese, and again he said: "I am a Mongolian, by our Namsrai" (Sanskrit: Vaisravana)⁷ and, in fact, he was a real Mongolian nationalist. We changed our tracks at a place called Zinen, and a soldier in green overalls came to what was the old terminal, and I saw no green tank. There were two other Mongolians with the fellow in green overalls, but they envied my uniform which was made out of good material. The Chinese wear shoulder patches and generally use poles to transport things as they walk along the river where they walk along clapping as they decide what to do. Ten, twenty, thirty forty — all those Chinese just had one style of uniform.

D: Were they blue?

B: Yes, a navy blue cotton jacket and pants. There was nothing else to wear. Then we finished at the train station and went to water the herds, so we carried the water from the well in pails. Two or three strong men helped us. I looked at the people, and I thought they seemed quite poor. We just added water from a well to our tinned dry food, and we put the cans in the bin at the station, and people took them for their own uses. A metal band held the grass that we gave the sheep on the train, and the Chinese used this as they did everything else since they had very little. We delivered the sheep to Dushan and then returned on November 7th to Wuhan, which was a very frightening and big city. Back in Mongolia, flags fly for the October holiday, but there were none in China. It is a communist country, but still one did not see such a flag in China. There was poverty so now

it is strange to see movies of China. I spent three nights in Beijing, and I saw the Royal Palace (Forbidden City) and the zoo. I also went to a store or a market which was underground almost like in Kharkhorin. I walked around Beijing and saw that the people in that city wore nice clothes, and I noticed that life in the countryside was difficult. It was fall and harvest time as crops were gathered in for the winter. So disheveled folks loaded up hand-carts, and they filed along pulling their carts, which were similar to the ox carts in Mongolia. If one of the wheels was broken, the whole line would stop. That's the way it was.

D: How many head of sheep were there in your cargo?

B: One thousand. Over 1000 heads from our country. One compartment in a wagon held seventy two or seventy three animals. There were two locked doors with gratings on both sides, and in the middle of the car the hay reached to the ceiling. There was also a trough in the middle of the car to put the hay into for the sheep. We slept on the top of the hay at night, but as we were young, and in the day time we wanted to see as much as possible so we kept the windows open and stood outside on the platforms between the cars. We saw how people lived as well as many interesting places in the country. Except for when we were scattering hay, we looked out at the passing scenes from dawn until dusk.

D: How many people were with you?

B: Twenty and thirty with the military leaders.

D: Oh, yes.

B: There had been another delivery and convoy the year before. I am not sure for how many years this had gone on, but Leader Tsedenbal presented one hundred thousand sheep to Vietnamese families⁸⁾.

D: Why all these sheep? Were they for food?

B: Just a gift.

D: Did you pass through China on your way to Vietnam?

B: We did not reach Vietnam and followed the Chinese border route. We went to the border, and then returned because it was the year before I had joined the military. My father was a bit of an agitator and held on to a number of newspapers including "Unen" ("Truth"), "Hodolmor" ("Labor"), "Zaluuchuudiin Unen" ("Young Truth") as well as "Ovorkhangai Hodolmoriin Toloo" ("For the Sake of Labor"). I read them all, and it was written on the fourth page of an American paper that one hundred thousand had gone to Vietnam — these free market people are a mean bunch since they are always lying. At home, I talked with my contemporaries about what was written. Later it became clear that people had thought that all those uniformed men were delivering soldiers so they then wore white cotton hats so no one would think they were soldiers. But if they were apprehended they were told to say that they were agricultural students. But all this was kept pretty much secret. The military did not want to be in the papers

again, although I will never forget that I was one of those one hundred thousand soldiers.

- D: Yes, most interesting. Were relations with the Chinese quite good at that time?
- B: They were good at first, but then began to go awry because we were afraid. At that time, the Chinese came to work on buildings, and then they were sent home by Tsendenbal, which made for an unpleasant situation, and the Chinese proclaimed that Tsendenbal was bad. Two or three Chinese worked on the steel framework, but they said that “Tsendenbal was good and Mao was bad.” Some of the Chinese were in their forties and fifties, and they stayed just a short time in Mongolia.
- D: At the height of Mao’s power, did you sing “The Sun Rises in the East” at school?
- B: We did sing that song at school concerts, as well as songs about Lenin and Choibalsan⁹. Nowadays, children like to sing love songs.
- D: When you lived in the city, did you visit the Gandan?¹⁰
- B: Yes, when I was in the military I visited the Gandan. My time there was rather wild, and my battalion was a group of rowdies. In those days, it was not good to brawl, but we were young and liked to go out and enjoy ourselves. Things got sort of boring, so we would go out and walk around. I skipped work for half of Sunday, and I would disappear and return late and look at all the stores in the city. Or I would visit family and friends but I didn’t go very far. That is what a person in the military did. From time to time, we had candy or fruit, but we never enjoyed spirits. “Puushig” cigarettes had become popular, and we smoked to look cool. In fact, I had started smoking again when I was in China. When I was a child, I had tried my father’s tobacco. In the military we had one cigarette a day. And we loved to show off to the Chinese by standing on the platforms between the train cars with a cigarette in our mouths. We also gave some of these cigarettes to the Chinese. Most people smoked “Puushig” cigarettes in those days but now the Russians don’t even smoke them. In those days, if someone asked for a smoke, I just gave him a cigarette, and it was fun and made people happy to peer through the holes (in the smoke rings). Even those who had never smoked easily took it up in the military, like riding on a horse. Everyone smoked if only to keep warm so when it was very cold, we went inside and had a smoke and a chat.
- D: Did the tobacco come from Russia?
- B: Yes, it came from Russia since the fifties, but the pipe tobacco came from China and was colored and oily. The outside paper wrapping was shiny because it was soaked with the tobacco oil. Long ago, the old people liked this Chinese tobacco, but it became so greasy and oily that the tobacco had to be handled with tongs. Sometimes smoking this red tobacco made one cough, and for many years now

no one smokes the Chinese tobacco. In 1949, the Chinese went through their People's Revolution, so our countries were friends and as trade and barter developed with China, there were all sorts of tobaccos. There were plenty of other goods as well, including Chinese crepe silk for women and children, which was generally of a better quality than the Russian crepe. The Chinese now have innumerable products, and children nowadays don't know about what used to be available to us. In addition, Russian goods are much better today.

D: Is that true?

B: Generally, Russian steel and metal goods are better than the Chinese, which breaks more easily because the temper or hardness is poor.

D: You went to the Gandan lamasery in the city. Have you been to any of the religious services held there?

B: Yes. I was curious. But as an atheist, I did not pray and just went in and left. It hasn't changed. Generally that is how it is now.

D: Were there any young monks reading the prayers?

B: A religious school had been organized for the youth, and there were quite a few elderly lamas. Many young boys studied there.

D: Do the youngsters wear their lama outfits or ordinary clothes?

B: Sometimes their lama outfits which they are known by. So if they wore ordinary clothes, how would we know they were lamas?

D: Did you know about the first visit of the Dalai Lama to Mongolia?

B: I heard about it on the news and saw it on the TV, but I was in the countryside, so I did not see him in person.

D: When you were travelling, how did the Inner Mongolians feel to all of you?

B: They seemed generally devoted, in fact, very devoted. The people I met were very fond of us, even if we are less accepting of them.

D: What did people think about Inner Mongolia?

B: That it was just a fragment of Mongolia. After the Cultural Revolution, these Mongols were oppressed, and they suffered. This situation was written about in several novels, including "A Foot With No Place To Step," by an intellectual from Inner Mongolia who was persecuted, went abroad, and has just returned and now lives here somewhere among our Mongols, perhaps in the Gobi. He wrote "A Foot With No Place To Step" in the seventies, and it is now forgotten. However, in the seventies, I was a young man working in the grain factory, and that is where I read that book. I saw the foreman reading a book and asked what it was. Then I borrowed it, read it all night long, with no sleep, and I finished it by eight in the morning, had breakfast, and returned the novel.

D: Did you read a lot in those days?

B: I am a big reader. I read quite a lot and am pretty good at it. But when I went to the countryside, I left my books behind, and they were destroyed.

5 The Cultural Revolution

D: Had there been a cultural revolution in the past?

B: Yes, like now.

D: What was the reason for this?

B: We were backward and were being left behind. Now we need to wash and paint all that is dirty and dusty in our homes. That is the correct thing for us to do. I think we must do this as we have been a bit crude in some of what we do. This cultural revolution has forced us to clean up and improve our appearance. Such work is necessary for grandmas and grandpas who have not updated their homes and who do not understand the need to do so. Their *gers* have smoky open fires right up to the rafters from which they hang things. Smoke clings to their hands. In addition, the felt covers of the roofs of the *gers* have become stiff with a smoky film and must be taken down and scraped, washed, and painted. Both the inside and the outside of the *gers*, then, must be cleaned, which will make things more comfortable. There must be a white covering both inside and outside and until the level is raised, life will be unpleasant, so we must raise it, and a clean covering is one way to do that. In the *khangai*, we have a canvas cover and we cut a pine board into 1.5 cm for all four walls of the *ger*. This covers the mud and is good for a poor family, and it looks better. These board walls were used in the sixties but not after that.

Thus we see that bit by bit lives do improve, which has been portrayed in the novel “Tungalat Tamir” (The Clear Tamir River), which was made into a movie. In the past the outside of the *ger* was grey, and now it is white. In the past, the elderly were rather coarse and did not even wash in a basin, and now they are beginning to wash, wear underpants and undershirts and use cotton bedclothes. These cultural changes in the sixties were very nice and after these cultural advances people were encouraged to read books, and writers have matured, and their works are studied more critically. When people read, they understand a bit more, and when we look back on the sixties, we see that people learned about hygiene through reading and were encouraged to stop doing bad things. Thus reading can improve peoples’ lives and is good for children. However, bad things like killing were not read about. We used to hear that children tried to imitate the movies and so they committed crimes. Now I don’t know if people care about this or just don’t talk about this. Generally, “things should be nice” but we must expect some missteps even when people are generally quite moral. Some movies and radio shows reflect this, and I think that is the way it is now.

6 The Course of Democracy

D: What were your thoughts in the late eighties and nineties about the coming of democracy?

B: I went to a family in the city who had a TV, and I saw the first discussions of a meeting of the Democratic Union. My factory leader was there, and we thought that there was nothing stranger than the direction we were heading in, but I marveled at all of this. We saw that we were becoming a democratic country. I talked to a young intellectual, a mechanic in our industry, who represented the climate of the times. He had served as an advisor to President Enkhbayar¹¹⁾ who was in office at the time but is now retired. The man said that a person could feel oppressed when everything that he or she believed in or worshipped was denied. When that happened, this person could then turn to worship a leader. He went on to say that such a situation was, in fact, meant to happen. I thought a lot about what he said. People had all sorts of differences, and some supported the revolutionary party which had some good aspects. Other people said: “We do not need a revolutionary party. My ancestors were shot, my herds were confiscated, most were driven away and only a few remained. This was a terrific blow for the herders. Now it is time to return the herds to the herders.” There was a daily wage for *negdel* labor, and I know because I worked on one. However, the salary was very meager — about fifty to sixty *tugriks*, so together one might have a hundred and twenty. Yes, I herded on the *negdel* for many years, and then all the herds were given to the State Farm. One year I was responsible for several lambs, and by the spring they had been generally raised well. Under socialism, the pay was poor for all the work we did taking care of the herds and milking the cows. Three hundred *tugriks* was considered a high salary on the State Farm *negdel*. If you herded a thousand head, you were paid seven or eight hundred *tugriks*. That’s the way it was. I was a fifth level welder at the grain factory and did not make the fourth rank or the sixth degree but only the eighth or ninth, so I went back to herding, and I earned five hundred and thirty *tugriks* until the age of sixty. People with fewer years got four hundred a month, which is not a bad salary. My wife worked for many years as a bookkeeper in a trade organization, and she squeezed out a salary of four hundred *tugriks*, and, certainly, two hundred *tugriks* was not enough. People are sometimes stupid and say all sorts of things. Some months we made nine hundred and some only eight hundred. Now, we both were smart to work in herding and have cattle — three milch cows, which I milk myself and seven or eight cows altogether including the infertile ones. I chat with my cows, and I also have a horse and sheep.

D: Did you take care of the animals on the State Farm?

B: I helped in the grain factory which didn’t seem right for two hundred *tugriks*, or really one hundred to two hundred *tugriks*. My salary did not reflect the productivity of herding my own animals but still, I returned to herding, even though I did not make a great deal of money. Three years later, the winds of

democracy blew and women with children who worked on the farm were given a pension. I could also retire from the State Farm at fifty with a pension, which I wanted to do. Thus I went back to the factory to find out how my salary had been set, so I could start the process of retiring on a pension. These pensions were fixed in 1991 at seven hundred *tugriks*, but since the inflation has doubled one really only receives three hundred *tugriks*. To make sure the pension was under my own name, I had to transfer all the herds to my name. Once I got my pension, I could just focus on herding. Under the twentieth resolution, pensions were adjusted from time to time for inflation. However, perhaps because I had several herds in the countryside, my pension was not adjusted, even though I heard all sorts of excuses about this and ways to manage the problem. I was cheated from a pension of 95,000 to what I have now — 81,000. Initially, the pension was set too high and was not correctly adjusted and really went down. My wife's pension was also lowered to only 81,000.

D: Did you gain more herds during privatization?

B: No.

D: Really? So you really became a 1000 herder on your own.

B: I remember when they divided the herds, and I received one horse and three sheep. Our State Farm, this Kharkhorin State Farm, generally wasn't divided up, and all the sheep went to the Khangai Company. The leader, at the time, started the distribution which proceeded without any quarrels or rebellion. Many of the herders joined one of the several private companies and did not stand up and demand their share. So the herds were divided up, and the herders began to work for the companies. Later, some of the herds were sold — perhaps secretly. That is pretty much what happened in Kharkhorin. The State Farm decided that the herder who had the most children and had been working the longest should receive six head. I had worked at the grain factory, so I got a horse and two or three sheep. That's what happened. So the people of Kharkhorin raised their own herds, and things stayed pretty much as they had been. We are right next to Khujirt *sum*, and I now go to and fro along the border, and I think on that side there are people who have more animals than we do in Kharkhorin.

D: Were the herders on the *negdel* all gone?

B: Yes. Those who were shrewd or were wealthier got more than their share. Some companies bought the herds and divided them up, but I was not included in this deal. So I have told you what happened in the past.

D: I gather that the *negdel* provided you with herds, but the State Farm did not.

B: Our Kharkhorin State Farm did not, and I don't know about the other farms just about Kharkhorin.

D: Is this what happened here?

B: They gave us sixteen animals here and no more.

- D: In socialist times was the pastureland allotted by the State Farms? What is going on with the pastureland now?
- B: There are no State Farm animals, but a few measures have been taken. People like me with a family and from the countryside are better off while those in other places have nothing. Some folks, including parents and siblings, have all their herds in one area, and they don't move faraway.
- D: Are there quarrels over the pasturelands?
- B: There are quarrels because the pasturelands raise very important issues, and they have, in fact, decreased in size while the herds have increased in number, especially the goats.
- D: Are the goats profitable?
- B: Oh yes. But there are many factors involved in herding, particularly the pasturage. I didn't get any animals from privatization and raise only my own herds.
- D: Yes. What kind of animals?
- B: Well, I have a horse, cows, sheep, and goats.
- D: Are the pasturelands a big problem for the herds?
- B: A difficult problem. We need to really beg the sky for rain since there is a drought in the *khangai* area, which means less grass and that is hard. In the nineties, we had, particularly in the north, experienced desertification, which has recently been described in the press. We have less of that here.
- D: Yes, indeed.
- B: I have seen desertification with my own eyes, and I remember when flowers and grass were plentiful. But they are all gone, and now there is in our area a silica plant which fattens up its herds. I haven't seen this but it is an example.
- D: What is going on?
- B: There is no moisture.
- D: And no rain.
- B: There is little rain, so there is desertification. Water is so essential, and now only weeds are growing along with tumbleweed, which the older animals can feed on but not the young ones. There is one plant which grows along with the cowberry with a fine covering, and violets also grow wild about five to ten centimeters apart. We should plant huge areas with these things, but there is so much wind that there are places where the roots of the grass and stumps are exposed, so it is hard to plant and grow things. The wind has blown sand on the eastern and southern slopes which plants cannot penetrate.

7 Life After Democracy

D: When did the Shankhin khüree open?

B: It opened a bit later. At first the Baruunkhüree was opened by the Ondor Gegeen,

who was 11 years old, and later the Noyan lama set about building the *dugan*, as it is located in the lamasery today. Only ruins are left, however.

D: So after the nineties, was the lamasery revived?

B: It was revived, and all four of its halls have been restored. It was really never demolished. There were three two-story *dugans* or halls on the middle steppe, but when I was in school, they were taken down. Later, we built a rounded roof which is now a storage area for the co-op goods and for the storage of raw materials. The third *dugan* is still used by the co-op. Then the *negdel* was dismantled and combined with the State Farm, and Shankh became the *sum* center, as in the days when the brigade was there. Several old lamas lived there, but then their children asked them to come and live with them in the city, so there were fewer left in the *dugan*. Finally, the lamasery became like the center of the brigade. After the renovation began, the two *dugans* at the end were saved, and two small areas were repaired. This is where the religious services started. The third *dugan* was returned to its original style. Back in the days when I was in school, the little *dugan* served as the kitchen, and later became a storage area. Now, nothing remains since so much was moved to Kharkhorin, and the entrance is now where the pedestal stone stood. The *dugan* at Shankhin Lamasery now has a foundation pedestal, and the threshold is where the Shankhin Lamasery used to be. In the seventies and the eighties, the walls were thin and of red brick, and now they are blue brick, and there is a wall of raw brick. Gombo was a great builder but he worked on the destruction of the building since all directives came from the Party, and the propaganda decreed the destruction of the lamaseries. There was a wooden building for the administration in the center, which served as a community center or cultural club or school, but it is now gone, as is the State Farm. Another lamasery was built that served the people quite well as they came and went, and the children could stay there and study. Now there is also an expensive store, and the area is enclosed by a fence, but there are only about twenty some odd families within the *khashaa*. Twenty odd families — that's what is happening there.

D: Is the monastery open for prayers?

B: Yes, it is open, but there are few people there. Twenty lamas registered but actually there are only about ten elderly lamas who have settled there. There was a youngish man, but often when these young lamas grow up, they move to town, where some teach in the religious schools. Some settle in other lamaseries where they hold services. Such is the case. This is a remote area for some lamas, since there is little electricity and no TV. If a monk lives here and says the prayers, where does he get his salary? Well, there is a sort of salary for twenty to thirty thousand, but the young, who have a wife and children, find it hard to manage on that amount and might have to go to the city. Some of the lamas are at the

Geseer lamasery. Some are not badly off.

D: Do you go to a lamasery to have prayers read?

B: Yes.

D: Where do you recite them?

B: At the Shankh lamasery which was called the Baruunkhüree during the time of our ancient ancestors, some of whom lived at the lamasery when I was a pupil there.

D: Your elders?

B: Yes. That is why this lamasery is so important to me. I belong in this area, and it is our family's place.

D: Is religion less restricted than in socialist times?

B: Yes. In those days, if people were doing what they said they were doing it seems they followed the wrong path. Some people do not belong to any lamasery and pursue their own selfish goals and do what they consider is best for them. People should go to a lamasery to have prayers read. That is most important. Maybe it is the market economy.

D: Do the lamas offer classes in the Buddhist religion?

B: No. People have generally been taught to be pious and act virtuously.

D: Do you have an understanding of the Buddhist religion and the prayers?

B: An alright understanding. Most everything about the Buddhist religion is merciful, and nowadays peoples' concerns with science and religion may enter into Buddhism. But this is true for all religions which have as their primary goal the betterment of people. One American Buddhist has written a book on the "Ochir Ogtlogch" or "The Dorjzodov" — "The Diamond Cutter's Sutra," which he translated himself. This "Dorjzodov" is the sutra most followed for a successful life. It is a philosophical book and although it can be read in Mongolian, we do not really understand it. It is only understood when it is practiced. For those of us who are not very important it promises the true religion. All religions, generally, work for the good of the follower, and I think that Buddhism is the best religion for the Mongols. But, there are all sorts of religions, and it is important to learn about Islam, which is not well known here and Christianity.

D: Yes, there are now quite a few religions.

B: Quite a few are spoken about and have ways to attract people. Some religions meet the needs of the homeless and the alcoholics by taking them food. Our Buddhist religion does not offer such services but focuses on the individual's piety and beliefs. Christianity is a very powerful religion for some people. For example, my younger sibling was mute and was taken by his family, who had said they did not need Buddhism, to a Christian church. Somehow Christianity must have entered his parents' heads, so that their son went to a special school

for the deaf in the city which was run by the church (either Christian or Mormon). At his graduation all the girls and boys were laughing, eating, and having a good time without drinking, and I was the only one who could not communicate! We knew that drinking was not so good, but what about liquor for the deaf? However, in ways it is good to follow the straight and narrow, and it is good that these youngsters are in a pleasant environment with no liquor when so often we see those who are educated drinking too much and not knowing the Buddhist scriptures.

D: Are there Christian people in the countryside?

B: No, only in the cities, and there is not much interest in the countryside. There is usually a lamasery in the *sum* but I can't say much since I don't know my own religion all that well.

D: Now there are many religions in Mongolia.

B: Yes, Mongolia has many religions. I can mention Mohammedanism or Islam which along with Christianity are the two that I know. There are four or five religions, but I cannot distinguish between them and don't know much about them. Certainly, Islam is the religion of the Kazakhs¹²).

D: Which is better — many religions or Mongolian Buddhism?

B: Well, as long as there is harmony, no one faith is better than another. It is not good to have religious quarrels and conflicts.

D: Did parents generally arrange a couple getting together or did the young man and woman meet on their own?

B: They met on their own, and their parents were not involved — we are more open now but in the past we made no distinction between the rich and the poor when it came to marriage. In fact, there were few wealthy people, and nothing was fancy. Life was sort of like this: if you had a hat, you had a hat; if you had a little, you had a little; if you had a lot, you had a lot, and if you had nothing, you had nothing. There were few obstacles to marrying whom you wished as long as the couple got along. But in the city this may not be the case as we see in movies like “The Difficult Group,” which must, after all, be based on some sort of reality.

D: Oh, really.

B: So it must be true. Rural children, on the other hand, are ignored because a city person is not intimately connected to the countryside, and the two groups are different. On the other hand, those from the countryside have their heads screwed on the right way and are more genuine and less materialistic. They do not discriminate that much and don't take advantage of people while the youth in the city use any one they can to get ahead.

D: Yes, so it appears.

B: Yes it seems so. Their lives are based on having money and looking elegant but

how do they get the money? I also need money and have to stop for a minute and think about how to get it. Some people today borrow money, but that is not the best way to get it. I am now an old man and don't know how to build up an industry and can only make a leather strap. I like to use my hands to work in stone and make things to sell. I learned to be a pretty good metal smith in the military and became a fifth rank smithy. I also learned about the grain industry and became a pretty good welder, and worked mostly on small window vents. As an old man, I cannot sit outside and sell things. If I was forty or fifty, I would work as a welder or a painter, and I would be quite good. But having reached seventy, I can't do these things which the young people do anyway. Now people think they have to make five to ten *tugriks*, and the youth think they must find easy money to look elegant and drink and smoke. How do they find this money which is not equally divided in our society?

- D: Was there a high or reincarnated lama in your locale who spoke to the people?
- B: Not near my area. The big lamas spoke at the two lamaseries. One of the lamas was famous, and the other was not. The famous one did the talking, and people had heard of this lama who came to live in the Gandan, but I did not know about all of this. There was no *khutukhtu*, then but there was a legend about the Edgiin monk from our area of Edgiin who led a life of poverty with his wife and only five goats. The story about him was mysterious, maybe because the Bogd called them to his lamasery with their five goats which they milked and then prepared *tarag* (yoghurt), which was put into a small container. They then went on to the Gandan where there was a small *tarag* bag, which always remained full. This Edgiin monk was accused and persecuted, but he then became many monks who scattered everywhere so that the Edgiin monk could not be caught and arrested. Or so the legend goes. It is said that this Edgiin monk's body is resting on a little knoll on a cliff near an *oboo* on the southern slope of the mountain. I do not know how long it has been there.
- D: What sort of man was the Edgiin monk?
- B: He spent time with the Bogd, read the prayers, and did magic. Only the Bogd really knows about him, and the other lamas knew little. He read the prayers in such a deep voice that the hall trembled and the wind stirred up the dust so that the Bogd had to tell him to stop. He would not have been considered a well-educated person and had never written a book, but he could perform magic.
- D: Do people in your area talk about this man?
- B: I don't know.
- D: Have the recent prayers for rain at the *oboo* brought rain?
- B: A bit, yes.
- D: From prayer?
- B: Well, a bit of rain fell for about twenty or thirty minutes, but there really was

not much rain. Maybe they did something wrong, but at least there was some rain.

D: Do you burn incense at your *ger*?

B: Yes, incense is burned, and I read the prayer in Mongolian myself.

D: How did you learn all of this?

B: I really taught myself.

D: In socialist times?

B: Yes, and I am pretty good at this. In the countryside, I also read some Mongolian books which were difficult. Unlike more modern books, the old wooden printed books had no punctuation and were hard to read, even though one got used to them. A hand written book had many missed places, and there were many homophones, so I always had to use a dictionary. Now there is an interesting hobby of copying out the sutras. During the winter when there is no TV, I listen to the radio, which has a lot more news than the TV. I listen in the evening, and by candle light with my eyeglasses on I do my copying. So I copied the sutras using Altangerel for the (Sanskrit: Suvarna-prabhasotama-sutra), Banzrach (Sanskrit: Pancha-raksah), and Taravchimbay (Sanskrit: Aria-ghanaja-mahabhicap-hulukarma-avirnasodhaya-bhudharakusumasancaya-sutra.) Daravjam, the Eighth Gegeen, copied several sutras which cannot be read very often since they are so pure. With the TV on, you can't do anything. There are a lot of good books now, and I am a reader so there is no need to see an American or Korean film with all their crime and killing. There are three sins committed by the mind and soul and four sins committed by the body. These comprise the ten black sins. So watching TV is a mind sin as is seeing a movie and wishing the villain were dead. Long ago in the past, a great translator translated the Buddhist scriptures and wrote them down in our own language. They were quite clear and oddly elegant.

D: People say that now, if the Uighur script is transliterated into Cyrillic, Mongolians will not be able to understand it.

B: The meanings must be translated and not just the letters just like Mr. Damdinsüren translated "The Secret History of the Mongols."¹³ A translator must handle all the works of the Great Teacher. Enkhbayar has done translations of the Buddhist prayers, but they are hard to understand. The same is true of the translations of the Bible.

D: Yes.

B: Translations are often looked down on. The Buddhist prayers must not be translated by people like me who are poorly educated. Enkhbayar is a major scholar and even his translations are not well regarded. You must know the books of the Bible and the sutras very well in order to write about them. When an American lama writes a book, a Mongol translator checks the translation for

accuracy.

D: Is it necessary to use Cyrillic?

B: Yes, it is necessary. One's religion and piety are compromised if one does not know the prayers. That's the way it is. Even when one knows the Mongolian language, the prayers are not always understood. The Buddhist prayers and the books of philosophy written in the Cyrillic script are not understood but there are all sorts of simplified study books or guides which are easier to understand. There is a strangely beautiful little book of poetry by the teacher Badamsambuu (Padmasambhava,) who lived during or even before Chinggis Khan, which includes the essential principles of what is good and what is bad. A Mongol did a wonderful translation of this poetry book.

D: This has been a good conversation. Many thanks.

B: Yes, and we have talked about many aspects of Buddhism.

D: Yes.

B: Buddhism.

D: The condition of Buddhism today and how it will enter Mongolian history is most interesting.

B: Generally, there are not many things relating to Buddhism that were collected during socialist times. The intellectuals, some of whom were the leaders, saved some things but were told that they were greedy for holding on to these religious artifacts. They had a salary of more than three hundred and up to five hundred *tugriks* a month, so they could afford to buy cloth, as well as firewood, which were expensive in the sixties, and they could look elegant. We passed our youth in this way. Nowadays people want more and more. Some fall on their faces, others claw their way up the ladder, and some, like me, just live out our lives. In fact, I am surprised that we have two societies. Many people are very poor, and many are shocked that there is such a big difference. You can peer down a tunnel and find children who are being raised underground and on the streets. They certainly must be desperate.

D: How much time did you spend on raising your animals? Did you do the milking yourself?

B: Certainly. My father and mother had several animals which we ate, but the State Farm controlled the number by marking the sheep that we could eat. When food was in short supply, the number of animals marked for butchering was reduced, but that did not lead to hunger even though the food was scarce. You seldom saw places where people were wasting away and as long as there are animals there will not be starvation in Mongolia. Let me give you an example. There were two very poor men who herded for a wealthy man when the sheep they were tending gave birth midst great confusion. The rich man wondered if these poor men were eating his sheep because they were so quiet, and so he spied on them at night

and listened outside their *ger*. Smoke was billowing from the roof as food was being prepared, so he figured he was right and listened to the two poor men who said that since they helped the rich man they were enjoying a good meal of the after birth and were both lucky and happy. However, the rich man was convinced that they were eating his sheep. So, no Mongol experiences starvation. In another story some Mongols who had no transportation visited a Chinese family near the Gobi. They were afraid that they might starve to death since they had nothing to eat, but they found the remains of a horse, lit a fire and heated the bones and the carrion as they kept warm and cooked the head, which they ate to retain their strength. Generally, we do not eat a lot and certainly not some of the strange things others eat like grasshoppers, worms, or ants. A book has been written about this sort of food, but we don't pay much attention to that kind of thing. Eating meat makes you fat, and you get too thin if you don't eat meat. Have you heard of eating donkey meat?

D: No I haven't heard about that.

B: Maybe a few Chinese eat donkey meat. I read somewhere about a very old, Chinese man who was wasting away and had only one old donkey who died. So he boiled him up and made a soup and some jelly with spices and flavoring. This sort of food is sold sometimes in nice pottery bowls with chopsticks and is quite delicious. Even if a cow died, we would not eat it unless we had to. Then we would cook it up with all sorts of spices and make a mash of it. But we usually do not do such things. I think that today's youth are lazy — frighteningly so — and they just live for the moment.

D: Is the migration from the countryside to the *sum* center to the *aimag* center and then to the city?

B: Yes. People think that life is easier if you live near a city.

D: Since it is now difficult to herd, are more people leaving the countryside for the city?

B: Herding is difficult and for five years there is little free time. The one nice season is the mid-summer when the herds get fat, and it is *airagh*¹⁴⁾ time when the herder is at his most competent and happy. Then a person can really eat and drink. People have fun playing a finger guessing game, and everyone eats and drinks and enjoys himself. But then life becomes difficult, as all sorts of storms come in from the north. People can get frost bite, lose their way, and freeze to death. There certainly are difficulties, and all sorts of things can happen. The mud and dung must be dug up, and the hayfield must be prepared for fodder. Thus working with the herds never ends, and what you did today, you do all over again tomorrow for your whole life, and there is no end of work. One also has to think about the children's education and cultural life, so one has to get involved in trade to make a bit of money, even though children can become spoiled by

money. I am, however, critical of those who want to live with no responsibilities. Moving can offer a better place to live and some people, with little access to markets for their herds, are leaving to sell their meat to *aimag* and *sum* centers, even though there may be few people in some areas. The price of gas is high for the vehicles which speed along and transport the meat, but the price of the meat is not always what is asked for. But that is the way it is with herding.

D: Do the parents follow their children if they move to the city?

B: Ah, yes they do follow their children.

D: There are now about one or two hundred schools in Ulaan Baatar but there is no TMC technicum.

B: Generally a person who graduates from college goes on to get a better job since a boss earns a good salary. If, however, the market does not produce jobs, then a person must go to high school, college, or a professional school. Now it is essential to do that. A worker in a skilled profession can be a leader in his trade and earn a good salary. The young people must understand that. The child of average ability should attend an average school and not prefer the university to a school which is more appropriate for him.

D: Yes, that does happen today.

B: Yes. You must not be considered inferior to someone who has graduated from two or three universities but who has no job and turns to his parents for money from their herds and pensions. Such a person will never earn money. A university degree and no work — that is not good. However, if someone has influence or pull, work can be found, but without it, one is stuck. The children from the countryside do not have the friends or the connections, so no matter how serious and qualified, they are they will lose out. Thus they put out a great deal of effort. In addition, if you bribe the teacher, you can find a job more easily.

D: Are your children now herding in the countryside?

B: Yes. I made the best student go into herding, but the others went to the city. One is in Erdenet¹⁵⁾ and one is in Korea. Although I scolded them about being away and asked them to return soon, they didn't come back. The girl in Korea works in marketing for the Khas bank, and though she does not make much money, she stays there. She secretly and suddenly took off. If we had known what she was about to do, we would not have let her go. She resigned from her job here, went to the city with her mother following her, and then flew off. We had no choice and we lost her. She came home last year for Tsagaan Sar, but she has extended her stay in Korea. She has changed her job and seems to be wandering about, sometimes working, and sometimes not. I scolded her and told her if she is doing nothing, she should come home. But it is useless to talk about this because she will do what she wants.

D: Today it is very stormy.

B: That is alright. The climate to the north and the south of Övörkhangaï is generally quite gentle. Now it is late in the evening, and the weather is good. One must always listen to the weather reports.

D: The calendar used to be focused around the herder.

B: Yes the herders' calendar showed the seasons and the times of day, the months, and the years, and we depended on it. Now the calendar is less extensive, and it does not mark the rest days. Thus each person decides the best days to stay home, so the job is never properly completed, and there are really bad days when nothing is done.

D: Do you use the calendar to find the lucky days?

B: Sometimes.

D: Is this Batkhoo's calendar?

B: It is Batkhoo's calendar.

D: Did Batkhoo get elected from here?

B: Yes, although there are lots of calendars given out in an election year. During all this talk, the fire has gone out.

D: We have had a very good conversation.

B: Yes. We have had plenty of time to talk.

D: And it is good to talk like this.

Notes

- 1) A cooperative.
- 2) A cooperative movement in the countryside that was initiated in the mid-1950s.
- 3) A fenced-in enclosure for animals.
- 4) An administrative unit below the *sum*.
- 5) A mountainous and forested steppe region.
- 6) This refers to Sino-Indian border clashes in 1962. For one viewpoint of this war, see Brahma Chellaney, "India's Intractable Border Dispute with China" in Bruce Elleman, Stephen Kotkin, and Clive Schofield, eds. *Beijing's Power and China's Borders*. Armonk: M.E. Sharpe, 2013, pp.47-59.
- 7) Namsrai is the Chief of the Four Heavenly Kings and guards the North. He is reputed to help the poor and is the "God of Wealth."
- 8) Y. Tsendenbal (1916-1991) was the Head of the Mongolian state and the Secretary of the MPRP from 1952 to 1984.
- 9) K. Choibalsan (1895-1952) was the Head of the Mongolian state from the mid-1930s until 1952.
- 10) The most important monastery in Ulaan Baatar.
- 11) N. Enkhbayar (1958-) was President of Mongolia from 2005 to 2009, but was arrested in 2012 on charges of corruption. He was found guilty, but many believe his claims that his arrest and trial were politically motivated.
- 12) A Turkic people who constitute about five percent of Mongolia's population. Most live in Bayan-Ölgii. On their recent history, see Peter Finke, *Nomaden im Transformationsprozess*:

Kasachen in der post-sozialistischen Mongolei. Münster: Lit Verlag, 2004; Alexander Diener, *One Homeland or Two? The Nationalization and Transnationalization of Mongolia's Kazakhs*. Stanford: Stanford University Press, 2009, and Holly Barcus and Cynthia Werner, "The Kazakhs of Western Mongolia: Transnational Migration from 1990-2008," *Asian Ethnicity* 11:2 (2010), pp.209-228.

- 13) T. Damdinsüren (1908-1986) was a poet, writer, and translator. He helped in the adoption of the Cyrillic script for Mongolian, a task he later regretted. He was the Editor of the official newspaper *Ünen* and compiled a Russian-Mongolian dictionary.
- 14) Fermented mare's milk.
- 15) Site of a major copper and molybdenum mine.

Three Buddhists in Modern Mongolia

Morris Rossabi

Preface

Lkhagvademchig Jaadamba, who conducted the three interviews translated in this volume in December of 2010, is a Lecturer in the Department of Social and Cultural Anthropology at the National Mongolian University and has devoted much of his career to the study of Buddhism in Mongolia. A graduate of the Central University of Tibetan Studies in Sarnath, Varanasi, Mr. Lkhagvademchig earned a M.A. in Buddhist Studies from Hong Kong University and is currently pursuing a doctoral degree with a dissertation on the revival of Buddhism in Mongolia, focusing specifically on the re-introduction of the institution of reincarnated lamas.

Unlike the six people whose interviews have been translated into English in *Socialist Devotees and Dissenters: Three Twentieth-Century Mongolian Leaders* and *A Herder, A Trader, and a Lawyer: Three Twentieth-Century Mongolian Leaders*¹⁾, the three individuals in this work have not become major figures in Mongolia. The earlier groups included a Minister of Industry, a State Procurator, the Director of the State Farms, and the brother of the Head of State and Secretary of the Mongolian People's Revolutionary Party (hereafter, MPRP). The present three people were not leaders and did not achieve prominent positions. One had been a factory worker, another was an agronomist, and still another was a herder and worker. Several in the earlier group were born to herder families, but serendipity or support from friends or officials permitted them to reach the capital in Ulaan Baatar and offered an opportunity at education. Five of the six then qualified to study in the USSR, which often proved to be critical for advancement in socialist Mongolia. Each was born in a different section of the country.

By contrast, the three individuals in this collection are inhabitants of the same general areas, Kharkhorin, in the central part of Mongolia, and nearby regions, and have scarcely spent much time in Ulaan Baatar. Two had rudimentary, if any, educations, and the other enrolled in an agricultural school and had wider interests and aspirations. None have studied in the USSR or the Eastern European bloc and one has not traveled out of the country. They have led lives centered on work, family, and festivals, offering the reader a unique view of life in socialist Mongolia than in the earlier volumes. A different slice of life, including popular beliefs and

religion, not concerns about the government or the MPRP, appear in their interviews and lives.

1. Mongolian Buddhism: a very short introduction

The interviews often focus on Buddhism, which has had a significant influence on Mongolian history²⁾. The Mongolian empire was exposed to Buddhism in the thirteenth century. The Mongols' move into Tibet led to their first direct involvement with Tibetan Buddhism. A young monk named the 'Phags-pa lama (1235-1280) impressed Khubilai Khan who invited him to his court. Khubilai's wife Chabi was captivated by the Tibetan monk and received instruction about Buddhism from him³⁾. Perhaps influenced by his wife, Khubilai appointed the 'Phags-pa lama State Preceptor and gave him jurisdiction over much of the Buddhist establishment in China⁴⁾. Later the Khan delegated him to be the secular and religious ruler of Tibet. However, conflicts among the various Buddhist sects in Tibet led to the 'Phags-pa lama's assassination in 1280. Other than conversions and interest in Buddhism by some in the Mongolian elite, evidence about mass conversion at this time does not exist. The Mongols eventually withdrew from China in 1368 to return to Mongolia, but they had not opted to become Buddhists, nor did they restore the unity that characterized them in the thirteenth century.

Buddhism truly arrived in Mongolia in the late sixteenth century. The Altan Khan, one of Chinggis Khan's descendants, concluded that religious unity would translate into Mongolian political unity. He invited a Tibetan Buddhist to instruct the Mongolian elite in the precepts of Tibetan Buddhism. The Tibetan lama reached the ancient capital of Kharkhorin, the native land of the three individuals interviewed in this volume, and was astonishingly successful, resulting in a considerable number of conversions. Before the Tibetan cleric departed, he asserted that the Altan Khan was a reincarnation of Khubilai Khan, associating the present Khan with one of the greatest periods of Mongolian history. He then claimed that the Khan was a reincarnation of Manjuśri, the Bodhisattva of Wisdom, bolstering the Khan's image with Buddhists. In turn, the Altan Khan gave him the title of Dalai Lama and dispatched a force to impose him and his order as Tibet's ruling sect⁵⁾. It turned out that religious unity did not lead inexorably to political unity. Nonetheless, the Mongols built their first monastery in Erdene Zuu, the site of the Dalai Lama's teachings, which is repeatedly referred to in these interviews.

Moreover, Buddhism did not become the dominant religion in Mongolia without some challenges. Shamans and shamanism resisted the Buddhists through the middle of the seventeenth century, but the two practices eventually developed a rapprochement⁶⁾. Buddhists accepted some shamanic figures⁷⁾, and both had a fire cult and sought protection from the Fire Goddess and performed ceremonies around

*oboos*⁸). Both began to use charms and spells to protect against pain, disease, and epidemics, and each claimed to foretell the future through astrology and other methods of divination⁹. They asserted that their prayers and practices could prolong life and foster economic prosperity. So-called beneficiaries of the monks' efforts were expected to make offerings of butter, milk, meat, tea, and alcohol¹⁰.

The rise of Buddhism coincided with China's domination of the Mongols. Qing China compelled the Khalkha Mongols to submit in 1691 and overwhelmed the Western or Zunghar Mongols by 1697. The Manchu Qing dynasty imposed a colonial administration over the country, supervised by a government body known as the Lifanyuan¹¹. The Manchu court divided the country into a number of Banners (the organizational scheme that also characterized the Manchus as well) in seeking to prevent the Mongols from uniting around one single leader. It also limited the herders' migrations to specific territories in order to maintain supervision and control over them.

The Qing then offered rewards to the Buddhist establishment to "tame" the Mongols¹². It encouraged the Banner princes to grant substantial lands and animals to Buddhist monasteries and their head, the Jebtsundamba Khutukhtu (or Bogdo Gegeen), whose first reincarnation was the multi-talented Zanabazar (1635-1723), a translator, developer of a new alphabet for Mongolian, and builder of new monasteries, but perhaps most important, a brilliant sculptor¹³. The monasteries received *shabinar* (or forced laborers) to tend the herds, to care for the monks, and to fashion luxurious ritual objects and statutes. As the monasteries became wealthier, they increased in size and needed more supplies and greater means of bartering or selling their own products. They created settled communities and took an active part in trade. Such commerce yielded even more profits for the monasteries and prompted some parents to turn their children over to them or induced some adult Mongols to join. Most obviously became monks for spiritual reasons, but pecuniary objectives no doubt attracted many. By 1900, approximately one-fifth of the country's males were monks. Most were ordinary lamas and did not have access to the luxuries enjoyed by the chief monks. Nonetheless, many continued to join the monasteries, leading to population decline, as many but not all chose to remain celibate.

Chinese merchants exacerbated the Mongols' problems through economic exploitation. The Mongols had meat and meat products to barter only in later summer and early autumn but needed Chinese products throughout the year. The Chinese merchants and eventually Chinese banks offered loans at usurious rates of interest to the herders and the princes, who craved Chinese luxury products. Many Mongols became indebted, and the country became increasingly pauperized.

The Qing had prevented Mongolian unity and undermined the Mongolian threat. Part of its strategy had been to foster Buddhism and support the monasteries, which, it hoped, would lead to the spread of pacifism among the Mongols and thus

a weaker military. A brief outbreak by a Mongolian noble named Chenggünjab (1710-1757) in 1756-57 prodded the Qing court to prevent secular and religious unity by mandating that all future Jebtsundamba Khutukhtus be Tibetans¹⁴). The leader of the Buddhist establishment would, in this way, be unable to stimulate Mongolian national unity.

The leading specialists on eighteenth and nineteenth-century Mongolia concur that, by 1850, many in the Buddhist hierarchy were exploitative, corrupt, avaricious, and, on occasion, ill-educated. Joseph Fletcher, for example, wrote that “There was little that ordinary Mongols could do to protect themselves against the growing exactions that banner princes, monasteries, and Han [Chinese] creditors imposed upon them.”¹⁵) Charles Bawden describes the exploitation of ordinary lamas and then adds: “What critical writing there was in Mongolia in the nineteenth century had the limited purpose of exposing abuses in Church and society...”¹⁶) Larry Moses offers the most devastating indictment of the organized Buddhist establishment: “The Church, its dogma, and its officers were responsible, in part, for the illiteracy, poor health, and poverty of the population...Every Mongol recognized the venality of the lamas and the parasitic nature of the organized church.”¹⁷)

Russian, European, and American travelers, including Aleksei Pozdneyev and James Gilmour, contributed first-hand accounts of the Buddhist lamas, which tallied with the cited specialists. John Sheepshanks, Bishop of Norwich, was appalled at the lamas’ laziness and their lack of celibacy¹⁸). William Woodville Rockhill, American diplomat and scholar, wrote about “the innumerable rapacious lamas who swarm in every corner of the land,”¹⁹) while others blamed the lamas for the high incidence of sexual diseases. The early Mongolian Communist leaders also had extraordinarily negative perceptions of lamas²⁰).

A few Buddhists or those sympathetic to the religion have questioned these generally negative perceptions of the Buddhist establishment during the Qing dynasty. One asserts that this dim view is based on the views of nineteenth and early twentieth-century Orientalist voyagers in Mongolia, but that assertion ignores confirmation of the travelers’ depictions by the almost unanimous consensus of historians who have studied the formal Buddhist organization during this time. Moreover, no one denies that the Buddhist establishment did little to improve the lot of the poor and weak or to challenge injustice. It also scarcely objected to China’s oppressive rule.

On the other hand, the monasteries contributed to Mongolian culture. They produced or acted as patrons for sculpture, paintings, textiles, and gold and silver ritual objects. They managed the construction of hundreds of lamaseries throughout the country, some of which were exquisite. The monasteries preserved both Mongolian and Tibetan texts, and indeed the Mongolian State Library currently has the largest collection of extant Tibetan texts, including the *Kanjur*, 108 volumes

reputedly of the Buddha's own writings and the *Tanjur*, 224 volumes of Buddhist commentaries. Warfare in Tibet, the Tibetan revolt, and the damage inflicted by the Red Guards during the Chinese Cultural Revolution caused the loss of many of these texts in Tibet. The volumes in the Mongolian State Library are in parlous condition, but they have survived and are being digitized²¹). Individual monks, such as Danzan Ravjaa (1803-1856), wrote poems, songs, and a musical play entitled *Saran kökege-yin namtar* (*Moon Cuckoo*)²²). The lamaseries also introduced Tibetan medicine and whatever medical care was available.

Qing dynasty support, assistance from Banner princes, and the monasteries' own power and popularity contributed to their enormous wealth²³). One source writes that by 1921, Buddhists had 747 monasteries, 181 temples, 40,000 monks in the lamaseries, and 80,000 to 90,000 forced laborers²⁴). At one game and festival, the participants, who derived from the elite, offered 10,000 ounces of silver and 1,000 ounces of food for the Jebtsundamba Khutukhtu²⁵). An ordinary Mongolian had to provide ounces of silver in order to worship with the Heads of the Buddhist establishment who were not necessarily pillars of rectitude²⁶). The Jebtsundamba Khutukhtu's own residence attracted so many of the pious and required so many retainers that it became the largest town, which was known as *Khüree* or *Urga*²⁷).

The later Jebtsundamba Khutukhtus scarcely contributed to a positive image of Buddhism and instead were notorious for their sexual and alcoholic profligacy. The eighth and last Khutukhtu had sixteen waiters to cater to his every wish and whim. He was sexually insatiable, leading to a dreadful case of syphilis. Discarding his wife, he took up with a servant girl. Later he had a homosexual liaison but then had his partner exiled and killed²⁸). His remarkable power allowed him to act capriciously²⁹). Even some pious and loyal lamas were appalled by these excesses.

The decline and final collapse of the Qing dynasty in 1911 offered the Mongolians and especially the Buddhist establishment an opportunity to achieve independence. In the mistaken belief that Buddhism could serve to unify the population, Mongolian patriots concurred that the Jebtsundamba Khutukhtu should be granted the title of secular as well as religious ruler. However, the already cited failings of the Buddhist potentate left a vacuum that foreigners sought to fill³⁰). The Jebtsundamba retained his title as "King," but he scarcely wielded the power signified by that appellation. Foreigners capitalized on the lack of Mongolian unity, creating chaotic conditions in the country. In the decade until 1921, Chinese warlords, Japanese-supported Chinese militarists, bizarre White Russian renegades, and American, Japanese, and Russian diplomats vied for power, with the Jebtsundamba on the sidelines. The Jebtsundamba and other Mongolians initially perceived of the White Russian Baron Roman Nikolai Maximilian von Ungern-Sternberg, who occupied Urga in 1921, as a savior, but they quickly recognized that he was simply a mad and murderous nobleman³¹). The Russian Tsarist Court, which

had attempted to play a pivotal role in Mongolia from the mid-nineteenth century on, faced its own difficulties in the years after 1911, with World War One and calls for revolution, and was not an entirely reliable supporter of Mongolian independence. Only with the accession of the Bolsheviks in 1917 did Mongolia's northern neighbor engage in the country. Perceiving that they needed foreign assistance to eliminate the rapacious and increasingly devastating military forces, Mongolian patriots turned to the USSR for help. Soviet troops, together with Mongolian detachments, crushed the forces of the bizarre and genocidal Ungern-Sternberg by July of 1921, and agents of the Communist International (or Comintern) collaborated with Mongolian nationalists to proclaim Mongolia the second socialist State in world history.

2 Mongolian Buddhism in the Socialist Era

Although the new leadership did not immediately adopt radical measures from 1921 to 1928, the stage was set for such transformations. The earliest and most dramatic changes were the winnowing out of the Mongolian leaders, who were not necessarily radical socialists, and, in fact, several had been lamas. Their fellow leaders or Comintern agents had them executed, or they died under suspicious circumstances. A more forceful policy would be initiated after the death of the Jebtsundamba in 1924. The government quickly announced that a reincarnation who could serve as the Jebtsundamba could not be found. In the same year, it changed the name of the country to the Mongolian People's Republic and mandated that the only legal political party would be the Mongolian People's Revolutionary Party.

Yet four years elapsed before the government attained sufficient confidence to challenge the Buddhist establishment. It confronted an influential antagonist, with considerable resources and popular support. It had launched anti-Buddhist and anti-religious propaganda from the early 1920s but had not yet adopted punitive measures. In 1928, however, it followed the example of the USSR in initiating more radical measures to change society. Like Joseph Stalin's collectivization movement and his liquidation of the *kulaks*, or so-called rich peasants, the government's new policies aimed to undermine both the secular and monastic elites. The government imposed stiff taxes on the monasteries and confiscated some of their herds³². Monks responded with sporadic outbreaks that erupted into a civil war "spearheaded, in part, by lamas."³³ The opposition was so fierce that the government finally abandoned the policy and blamed MPRP Leftist Deviationists for provocative and illegal actions.

The ensuing peace did not last long because the monasteries remained powerful and, from the state's viewpoint, had to be tamed. Stalin also pressured the MPRP and the government leaders to curb, if not crush, the Buddhists. He and some, though not all, the leaders in the MPRP accused several of the monasteries of

seeking to collaborate with the Japanese against the Mongolian government. They maintained that monks had contacted the Inner Mongolian nationalist leader Demchugdongrob (known to the Chinese as De Wang), whom they regarded as a Japanese puppet and who sought to break away from China in the same way that Puyi (1906-1967), another Japanese puppet and the so-called Last Emperor of China, separated from China³⁴.

Stalin's pressure led like-minded Mongolians to imprison or execute government and MPRP leaders who resisted efforts to launch an anti-Buddhist campaign, resulting in purges in the mid-to-late 1930s. The government needed to persuade the Mongolian population of the monks' perfidy and subversion of Mongolian independence. Thus it adopted the strategy of the contemporary Moscow trials³⁵. The so-called traitor monks had to admit their crimes in a public arena. Threats, propaganda, and torture persuaded the monks to recount their "subversive" activities in big show trials in a theater in Ulaan Baatar³⁶. The trials centered on high-ranking lamas who were found guilty and quickly executed. Monks resisted, leading in 1937-1938 to government reprisals in the form of destruction of hundreds of monasteries and temples and thousands of Buddhist texts and ritual objects and the deaths of thousands of lamas. The government closed the monasteries, and only in 1943-1944 did the state allow the Gandan, Ulaan Baatar's most important monastery, to reopen as a show piece of the regime's tolerant attitude toward religion.

From the late 1930s to 1990, the government issued propaganda in support of atheism and in opposition to Buddhism and prevented much public worship of Buddhism³⁷. The number of monks declined, with few children joining the monasteries. Yet some monks secretly performed ceremonies, including presiding over weddings and funerals. The interviewees in this volume reveal that they had hidden Buddhist objects from the authorities, and the substantial quantity of surviving artifacts confirms their testimony. Monks and laymen preserved sutras, once again attested to by the interviewees and the number of such texts that have been saved.

3 Buddhism in Post-Socialist Mongolia

The collapse of the socialist system in March of 1990 influenced the fate of the Buddhist establishment. A scant four months elapsed before an Association of Mongolian Believers was founded, with the specific intentions of reviving the religion but also to search for books and artifacts and to press for the rehabilitation of lamas imprisoned or killed in the late 1930s³⁸. In 1992, the new Constitution granted religious freedom but did not follow the pleas of some monks to accept Buddhism as the state religion. By this time, the general population and indeed monks had lost much of their knowledge about Buddhism. The question was: could

Buddhism revive?

Foreigners actively participated in attempts to revive Buddhism. The Dalai Lama and high-level Tibetan lamas repeatedly visited Mongolia and gave lectures and teachings³⁹). Buddhists from Western countries also arrived to instruct the Mongols in the tenets of Buddhism, and one American Buddhist even lectured on Mongolian television⁴⁰). Japanese, Koreans, and Westerners provided funds for the rebuilding and repair of Buddhist monasteries and the preservation of Buddhist texts. Bhutanese craftsmen came to assist in repairing Buddhist buildings, and Nepalese Buddhists helped to set up a nunnery⁴¹).

Perhaps the most important foreigner was Kushok Bakula (1917-2003), the Indian Ambassador to Mongolia, who sought to revive Buddhism. This leading reincarnate provided funds for the construction of a monastery in Ulaan Baatar, intending it to take an active part in the transmission of Buddhist teachings⁴²). The U.S. Embassy contributed to growing interest by funding a project, in collaboration with the Arts Council of Mongolia, to map out the sites of the old monasteries and temples throughout the country, many of which had been destroyed or damaged in the late 1930s⁴³).

The collapse of socialism offered Buddhism, and to an extent, shamanism opportunities to become vibrant forces in Mongolian society⁴⁴). They were no longer stigmatized as subversive and illegal, and the demise of socialist ideology left a vacuum in people's lives, especially among the youth⁴⁵). Parlous economic conditions, in part due to a wild ride to unregulated capitalism, contributed to malaise and anxiety and then social instability in the form of increased alcohol consumption, crimes, and corruption⁴⁶).

The Buddhist establishment began to respond to these problems but now faced considerable competition. Islam, Hinduism, Bahai, and, most important, Christianity started to make their mark in Mongolia. Christian missionaries from Korea, the U.S., and Europe streamed into the country, and some misleadingly portrayed themselves as English language teachers but covertly engaged in proselytizing for Christianity⁴⁷). A fundamentalist Christian group founded a television broadcasting station called Eagle TV to promote its ideas⁴⁸). By 2005, Mongolia had seventy churches, as opposed to 157 Buddhist temples and monasteries, not to mention seven mosques⁴⁹). The accelerating pace of conversion to Christianity may have been due to the benefits offered by its representatives — exposure to the West, English language classes, and possible study or travel to English-speaking countries. The preponderance of Mongolians who attended Christian services consisted of women, and some have suggested that the women sought to find more suitable mates among the foreigners who were less prone to alcoholism and domestic abuse. In any event, the accelerating pace of conversions to Christianity concerned the Buddhist establishment.

Facing such competition, the Buddhist monks now attempted to ingratiate

themselves to the population rather than maintaining a remote attitude and focusing on prayer and other ceremonies. They championed environmental issues, including protection of endangered species, such as wolves, deer, and snow leopards, opposed unregulated mining and performed rituals at sacred mountains and rituals⁵⁰. They engaged in such social welfare as community projects, prison counseling, and summer camps for children, and they started clothing drives for the poor, founded a Children's Center for abused children, offered English language classes, and developed a meditation center⁵¹. Capitalizing on the burgeoning Mongolian nationalism of the post-1990 period, they linked up to the virtual deification of Chinggis Khan, the attempt to renew use of the Uyghur (rather than Cyrillic) script, and the wearing of the traditional *deel* robes⁵². Moreover, some Buddhist symbols, such as the lotus, became intertwined with politics and nationalism⁵³.

Despite the cessation of anti-religious propaganda, the support of foreign Buddhist communities, and the monastic community's own efforts, the revival of Buddhism has not been robust and does not compare with the religious developments in Tibet. The Buddhist establishment is not as wealthy as it had been during the Qing dynasty and through the 1920s, and the government now owns the old Buddhist sites, although more and more of them are being turned over to the monasteries and other Buddhist organizations⁵⁴. However, more significant is the quality of the lamas⁵⁵. There is scarcely any high-level Buddhist education⁵⁶. Some monks may have memorized the sutras, but they do not know Tibetan and cannot understand the religious texts. Part of the liturgy has been translated into Mongolian, but the bulk of the most important texts have not been translated.

One scholar who visited many monasteries observed that "the average knowledge of Mongolian lamas is still rather poor."⁵⁷ Such lack of knowledge may be due to the haphazard way of reestablishing Buddhism. Four lamas in one location are needed to form a *sangha* or community, but only three out of thirty-six sites in Ulaan Baatar have the required number⁵⁸. Many of the others are organized in *gers* because the state no longer subsidizes these sites. Lay clergy who are often not ordained and scarcely have the best reputations take charge. They are stereotyped as ignorant, as users of tobacco and alcohol, and as making money out of fortune telling⁵⁹. Many educated youth thus view them as corrupt, superstitious, and obscurantist⁶⁰. Donations are essential for most services provided by the monks. There have also been lingering rumors about corruption even among the most prestigious monks. Lamas have been accused of stealing carpets and paintings from monasteries⁶¹. In 1998, an investigative journalist asserted that Choijamts, the Head of the Gandan or the country's most important monastery, was guilty of nepotism, corruption, and misuse of donated funds for personal travel⁶².

Critics also questioned the Gandan's judgment in employment of its resources. In 1996, the Gandan built a huge statue of Migjid Jansraisig (in Sanskrit,

Avalokiteśvara or in Chinese, Guanyin)⁶³ The rationale for construction of this statue was replacement for a statue of Migjid Jansraisig that the USSR dismantled during World War Two; the Soviets allegedly used the metal for its war efforts. The new statue consisted of twenty tons of copper and iron and was gilded in gold⁶⁴. Construction of this expensive statue appeared, to some critics, to be insensitive in a time of an extraordinarily high rate of poverty.

Despite such critiques, monks and Buddhists in general have assumed some of their traditional roles, especially in the countryside. Worshippers consult lamas about the most propitious date for a wedding, and lamas often preside over funerals. Believers also seek medical treatment from lamas⁶⁵. Photographs of the Dalai Lama and prayer wheels, books, family altars, and other ritual objects, which had been hidden, have reappeared⁶⁶. The Gandan has founded astrological and medical colleges and has, for the past two decades, accepted a few acolytes⁶⁷.

The establishment of nunneries has added new Buddhist institutions. At least three nunneries have been founded in Ulaan Baatar⁶⁸. Many of the women have been lay nuns who wear makeup, have not shaved their heads, and are married and have children⁶⁹. They live in their own homes and do not reside in the nunneries. They appear to have faith in Buddhism but are not well informed about its teaching. Some may have joined for the educations offered at the nunneries, including courses in mathematics, physics, and English. In these turbulent times, a few have become nuns as employment to avoid becoming “street-beggars and prostitutes.” Because they also encounter quite a few unemployed and alcoholic men, not good marital prospects, they seek the sanctuary of the nunneries. As a study in the early years of the twenty-first century noted, “Faced with bleak prospects for the future, young women, exposed to ideas of gender equality, have therefore started to enroll in monastic institutions and religious schools, not only to satisfy their spiritual needs but also their wish for both a secular and religious education.” The real novices cut their hair, wear Tibetan robes, and study religious subjects, but they appear to be in the minority.

4 Three Modern Mongolian Buddhists

Living near perhaps the most revered Buddhist site in Mongolia, the three interviewees confirm the general trends concerning the religion described above. All three resided adjacent to the remains of the thirteenth-century Mongolian capital at Kharkhorin and the sixteenth-century monastery of Erdene Zuu and could actually notice its 108 stupas or reliquaries, its surviving temples, its statues, and its ritual objects. Having been born either in the 1920s or in the early 1940s, they were old enough to witness both the socialist and post-socialist eras and to remember the socialist restrictions on the religion. Their families had been ardent Buddhists, with

some stretching back several generations. One of the three was, in fact, directly related to important Buddhist lamas, and another became a lama in old age. They would naturally emphasize the positive aspects of the religion.

Badamkhand Dambind (b. 1943) was the first to describe the status of Buddhism in the socialist period. She explains that, during her childhood, the government repeatedly labeled Buddhism as “feudal” and demanded that lamas participate in herding rather than reading and chanting texts. Erdene Zuu, she notes, was closed until the 1970s. Nonetheless, she attests to continued devotion to Buddhism in the socialist era, as her family had statues, incense lamps, amulets with the Buddha’s image, and other ritual objects. Devotees requested that lamas read prayers on their behalf and act as fortune tellers. Badamkhand says that participation in such religious activities was hazardous, as the government could portray participants as counterrevolutionaries. Starting in the early 1980s, however, the state adopted a more relaxed attitude toward the practice of Buddhism, and Badamkhand even heard that the Dalai Lama had visited Mongolia. The collapse of the socialist system permitted religious organizations to assist lamas, especially the elderly, and her own son-in-law, a teacher, to talk even-handedly about Buddhism.

Badamregzen, another of the interviewees, descended from a long line of Buddhist monks and confirms even greater limitations imposed upon Buddhism. He and his friends could not even talk about the sutras. Nor could they mention the lamas who had been arrested or executed in the 1930s purges or the confiscation of ritual objects. The socialist government tolerated lamas who proved to be loyal to the MPRP, but it would not allow independent lamas who did not subscribe to its tenets. Despite all these restrictions, Badamregzen reveals that lamas presided over secret prayer services which some Mongolians attended while other lamas preserved sutras in nearby caves. He also claims that executed lamas, as well as those hounded to death, placed curses on the people and places that harmed them. Their souls would be converted into wolves who could avenge them. After 1990, Badamregzen, now freed from the constraints of the socialist system, studied in a lamasery for four years and became a lama and a diviner or fortune teller. Some lamas who had married during the socialist era were now accepted as legitimate. The revival of the Gandan monastery, the renewed visits of the Dalai Lama, and the preliminary translations of the sutras from Tibetan into Mongolian all earned his praise in his new role as a lama.

Borjigon provides additional evidence about the covert efforts to preserve Buddhism during the socialist period. He too mentions the cache of Buddhist ritual objects that were hidden by devout families, as well as night-time prayer meetings, offerings to the Buddha, and surreptitious prayer services with lamps in front of Buddhist statues. Lamas continued to give names to the new born, an ancient tradition, and secretly participated in wedding and funeral ceremonies.

Although he did not consider himself to be an ardent Buddhist, he still was distressed by the socialist-era destruction of statues and ritual objects, by the fear that led monks to avoid wearing robes that would identify them with Buddhism, and by the government demand that lamas work in the economy and not necessarily follow their religious vocation.

Borjigon appears pleased with the revival of Buddhism after 1990 but is not uncritical of the religion. He praises other religions for working with the homeless and with alcoholics but finds that Buddhism focuses on piety and beliefs rather than the welfare of the population. Judging from this observation, the great monasteries' attempts since the 1990s to ingratiate themselves by caring for the population seem not to have reached his area.

Buddhism aside, the interviewees reveal much about other religious or customary practices. They are pleased that the *tsam* dances, the Naadam athletic events, and the Tsagaan Sar or New Year celebrations that were forbidden in the socialist period have now been revived and are an integral part of the annual cycle of festivities. They scarcely mention shamans or shamanism in the interviews except for rituals associated with the *oboos*. It seems that shamanism has revived in specific locations in the country, especially in northern Mongolia and among the Darhad peoples, but not in others. Christian missionaries have introduced Christianity, but the interviewees assert that most Mongolians had little interest in the religion. Again, Christianity may appeal in specific areas of the country.

5 Three Interviewees and Society

The interviewees challenge other socialist propaganda. Badamkhand never went to school and says that there were no countryside schools in her area until the early 1950s, and Badamregzen states that the first school in his *sum* was established only in 1945. Borjigon attended school only through the fourth grade and notes that children often fled from schools, and many parents, who needed the children for herding, kept them out of school⁷⁰. He estimates that one-third of the students dropped out by the fourth grade. The schools were often in makeshift *gers*, and the students in the fourth grade were offered courses in geology, world geography, gymnastics, and literature, especially in the forms of fairy tales. A group of students joined the so-called Young Pioneers and wore the red scarfs associated with this honored organization. However, the MPRP leadership had claimed that it emphasized education. Yet as late as the 1950s, few resources had been allocated to the countryside schools although the schools in Ulaan Baatar seem to have been better attended. The *negdels* or cooperatives of the mid-1950s may also have provided more opportunities for countryside children to attend schools and to achieve a higher rate of literacy. Judging from these interviews, however, the socialist government's

astonishingly high figures for literacy were inflated and need to be revised.

The interviewees provide scenarios about the *negdels* and about life in the countryside that differ from government accounts. They assert that herders did not voluntarily join the *negdels*, and the more prosperous of them had to be cajoled, if not pressured, to become members, with many killing their animals to avoid turning them over to the collectives. Badamkhand recounts an even worse fate that befell her area. Within a few years after the founding of its *negdel*, the government converted these lands into a State Farm, confiscated most of the herds, and ordered the herders to engage in farming. The work on the *negdels* and the State Farms was grueling, even for children. It started early with the milking of the herds at 3 in the morning in the *negdels* and laboring in the fields by daylight. The government also mandated substantial taxes to be paid in wool, antlers, and animal hair, and considerable effort was required to meet such state quotas. Even Badamregzen, a water and irrigation specialist, found the work demanding, and he had a relatively less difficult position in a mineral water spa in the town of Khujirt.

The countryside food was not lavish, consisting of some mutton and other meats and dairy products. The three interviewees hardly saw vegetables except for cabbage and wild onions. No rice was available, and millet was scarce. As late as 1985, some herders had not tasted potatoes. Children barely saw candy, and adults rarely had access to sugar and fruits. The government occasionally sent meat but no flour or rice. Borjigon says that children were, on occasion, hungry and had no money to buy goods at the sparsely supplied stores in the *sum* centers.

All three interviewees credited the socialist era with the introduction of better sanitation and medicine and other social and recreational changes. The MPRP emphasized public hygiene and dispatched specialists to teach the herders about proper sanitation, including how to check bedding for vermin. Western medical care replaced Tibetan therapies, and the state sought to prevent lamas and shamans from treating the sick. Badamkhand reveals that her parents had arranged her marriage, but she implies that the practice became less common in the socialist period. Other sources write that the state sent teams of projectionists to the countryside to show mostly propaganda films, but the interviewees mention only night time story-telling and ankle bone and playing cards games as recreation.

All three interviewees were aware of the significance of MPRP membership and of the presence of Russians in the countryside. The MPRP imposed strict requirements on its recruits, but members often had access to better education and employment. The Russians who worked in Mongolia also had special privileges, and knowledge of the Russian language offered opportunities for study in the USSR. Russian technical advisers assisted in Mongolia's few industrial enterprises and in the joint railway commission and the copper and molybdenum mining complex in the city of Erdenet. One hundred thousand Russian troops were stationed in the

country during the height of the Sino-Soviet dispute from the 1960s through the 1980s. All the Russians had higher salaries than their Mongolian counterparts and could shop at special stores for products unavailable to most Mongolians, a source of considerable irritation and hostility. Yet both Badamkhand and Borjigon emphasized that they liked the Russians and were grateful for their help.

Their attitudes toward the Chinese offered a sharp contrast to their mostly favorable view of the Russians. A few Chinese had remained in Mongolia through the early stages of socialism, but most had returned to China by the early 1930s. After the establishment of the People's Republic of China in 1949, Chinese workers streamed into the country, which had a labor shortage, to undertake infrastructure projects designed to pave the way for industrialization. Badamkhand found them clannish and uninterested in interacting with Mongolians. Her judgment on the post-socialist arrival of Chinese was that "they are not good people." Borjigon came across Chinese when he helped to transport sheep from Mongolia to Vietnam during the Vietnamese War. He and fellow Mongolians had to travel, via China, to Vietnam. He characterizes late 1960s China as underdeveloped, especially the countryside, and notes that the Chinese picked up anything the Mongolians threw out as trash, an indication of their poverty. He also comments negatively on the fact that nearly all Chinese wore the same kind of blue uniforms. In light of the dramatic growth of the Chinese economy since the late 1970s, it is unlikely that he would have the same views today.

All three interviewees are as critical of the post-1990 state policies as they are of the socialist period. They agree, for example, that immediate privatization and so-called shock therapy, which Western advisers and some in the Mongolian elite championed, turned out to be problematic. Badamkhand, who had worked in a factory for thirty years, criticized the privatization of her place of employment because a small group, rather than the majority of the workers, profited. The company's assets were not equally divided, and the new owners then closed the dormitories, leaving many workers homeless. Similarly, a small group benefited from the privatization of the *negdels* and State Farms, leaving behind weak or unfit animals and poor land for ordinary people. The workers in the factories, many of whom were dismissed, did not receive any animals. Borjigon reports that conditions deteriorated after privatization.

He describes a rapid and increasing rate of income inequality, as a privileged few gained ownership over the vast majority of animals. Acknowledging that food was scarce in the socialist era, he nonetheless argues that the current level of hunger is unprecedented. He laments the decline in the pasturelands as desertification increases because of the lack of rain and of overgrazing in some areas. Herders face constantly higher prices for fuel to transport their animals to market, while the prices they receive remain relatively constant. Such difficult conditions compel herders to

migrate to the towns and cities, especially Ulaan Baatar where they have generally been unable to obtain steady and gainful employment and have had to live in *ger* slums without food security, running water, trash pickups and electricity. Because they and their children have no connections or friends in Ulaan Baatar and other cities, they have been discriminated against in employment and education.

The testimonies of these three individuals naturally do not yield the entire context of Buddhism or of social and economic life in socialist and post-socialist Mongolia. Yet these accounts supplement the interviews and autobiographies that others who lived through these eras have produced. Oral history projects on twentieth and twenty-first century Mongolia undertaken by specialists on the country as well as field research by anthropologists and non-governmental organizations have enriched our knowledge of Mongolia and will continue to contribute to understanding of this period of Mongolian history. It is, after all, the lives and testimonies of specific individuals that provide vivid portraits of a society in a particular era.

Notes

- 1) Interviews conducted by Yuki Konagaya and I. Lkhagvasuren (trans. by Mary Rossabi; Edited and Introduced by Morris Rossabi) *Senri Ethnological Reports* 96 (2011) and 107 (2012), National Museum of Ethnology, Osaka.
- 2) The next few pages offer a short sketch of Mongolian Buddhism to provide the background for the three biographies and should not, in any way, be construed as a definitive work on the subject.
- 3) Morris Rossabi, *Khubilai Khan: His Life and Times*. Berkeley: University of California Press (2009), pp.16 and 41.
- 4) Song Lian, *Yuanshi (Yuan Dynastic History)*. Beijing: Zhonghua shuju, 1976, p.68.
- 5) For a slightly different version of events, see Johan Elverskog, *Our Great Qing*. Honolulu: University of Hawaii Press, 2006, pp.44 and 55.
- 6) Walther Heissig, "A Mongolian Source to the Lamaist Suppression of Shamanism in the 17th Century," *Anthropos* 48 (1953), pp.1-29 and 493-536.
- 7) Walther Heissig, *The Religions of Mongolia*. Trans. by G. Samuel, London: Routledge and Kegan Paul, 1980, pp.62-64.
- 8) Christopher Atwood, "Buddhism and Popular Ritual in Mongolian Religion: A Re-examination of the Fire Cult," *History of Religion* 36: 2 (1996), pp.121-125; *oboos* were piles of stones and other objects in hills or mountains which allegedly led to good fortune and prevented harm. Buddhists initiated circumambulations around the *oboos* as a means of ensuring such blessings.
- 9) Henning Haslund, *Men and Gods in Mongolia*. London: Kegan Paul, 1935, p.40.
- 10) Agata Bareja-Starzynska and Hanna Havnevik, "A Preliminary Study of Buddhism in Present-Day Mongolia" in Ole Bruun and Li Narangoa, eds. *Mongols From Country to City*. Copenhagen: NIAS Press, 2006, p.216 and Aleksei Pozdneyev, *Religion and Ritual*

- in Society: Lamaist Buddhism in Late 19th Century Mongolia*. Trans. by Alo and Linda Raun. Bloomington: The Mongolia Society, 1978, pp.221-230.
- 11) A comprehensive study of this agency is Ning Chia, "The Li-fan Yuan in the Early Ch'ing Dynasty," Ph.D. diss., The Johns Hopkins University, 1991.
 - 12) The term "tame" derives from the essay produced by Joseph Fletcher in "Ch'ing Inner Asia c. 1800" in the authoritative *The Cambridge History of China*, Volume 10: *Late Ch'ing, 1800-1911*, Part I edited by John Fairbank. Cambridge: Cambridge University Press, 1978, p.52.
 - 13) For a Mongolian depiction of Zanabazar's life, see Charles Bawden, trans. *The Jebtsundamba Khutukhtus of Urga*. Wiesbaden: Otto Harrassowitz, 1961, pp.42-67. For his works of art, see N. Tsultem, *The Eminent Mongolian Sculptor — Zanabazar*. Ulaanbaatar: State Publishing House, 1982 and Patricia Berger, "Zanabazar (1635-1723)" in Terese Tse Bartholomew and Patricia Berger, *Mongolia: The Legacy of Chinggis Khan*. San Francisco: Asian Art Museum, 1995, pp.261-304.
 - 14) Charles Bawden, "The Mongol Rebellion of 1756-1757," *Journal of Asian History* 2:1 (1968), pp.18-21; Morris Rossabi, "The Development of Mongol Identity in the Seventeenth and Eighteenth Centuries" in Leonard Blussé and Felipe Fernández-Armesto, eds. *Shifting Communities and Identity Formation in Early Modern Asia*. Leiden: Research School of Asian, African, and Amerindian Studies, Universiteit Leiden, 2003, pp.56-60; and Christopher Kaplonski, "Collective Memory and Chingunjav's Rebellion," *History and Anthropology* 6: 2-3 (1993), pp.243-246.
 - 15) "The heyday of the Ch'ing order in Mongolia, Sinkiang and Tibet" in Fairbank, p.353.
 - 16) *The Modern History of Mongolia*. New York: Frederick Praeger, 1968, p.170.
 - 17) *The Political Role of Mongol Buddhism*. Bloomington: Asian Studies Research Institute, Indiana University, 1977, pp.6-7.
 - 18) John Sheepshanks, *My Life in Mongolia and Siberia*. London: Society for Promoting Christian Knowledge, 1903, pp.32 and 74.
 - 19) For a brief sketch of Rockhill, see Alicia Campi and R. Baasan, *The Impact of China and Russia on United States-Mongolian Political Relations in the Twentieth Century*. Lewiston: Edwin Mellen Press, 2009, pp.18-33.
 - 20) See for example, Morris Rossabi, ed. *Herdsmen to Statesmen: The Autobiography of Jamsrangiin Sambuu of Mongolia*. Trans. by Mary Rossabi. Lanham: Rowman and Littlefield, 2010, pp.5-7, 45, and 87-88.
 - 21) Pearly Jacob, "Mongolia: Preservation Challenges Confront Treasure Trove of Buddhist Texts," *Eurasianet*. <http://eurasianet.org/node/66551> (February 13, 2012; accessed February 14, 2013) and see my report to Open Society Institute and Arts Council of Mongolia, January, 1999.
 - 22) For a brief description of literature in this period, see Walther Heissig, *Geschichte der mongolischen Literatur*, Wiesbaden: Otto Harrassowitz, 1972, vol.1, pp.215-217.
 - 23) Bawden, *Modern History*, p.169 writes, in this connection, that "Yet at the same time the Church was immensely popular and valued by the ordinary Mongols, who were, in a way, the slaves of their own piety and superstition."
 - 24) Shagdarii Sandag and Harry Kendall, *Poisoned Arrows: The Stalin-Choibalsan-Mongolian Massacres, 1921-1941*. Boulder: Westview Press, 2000, p.121.
 - 25) C. R. Bawden, trans. *Tales of an Old Lama*. Tring, U.K.: The Institute of Buddhist Studies, 1997, p.18.

- 26) Bawden, *Tales*, p.46.
- 27) Robert Rupen, "The City of Urga in the Manchu Period," *Studia Altaica: Festschrift für Nicholas Poppe zum 60. Geburtstag am 8. August 1957*. Wiesbaden: Otto Harrassowitz, 1957, pp.157-169.
- 28) Bawden, *Tales*, p.26.
- 29) Bawden, *Tales*, p.48.
- 30) On this era, see Thomas Ewing, *Between the Hammer and the Anvil? Chinese and Russian Policies in Outer Mongolia 1911-1921*. Bloomington: Research Institute for Inner Asian Studies, Indiana University, 1980.
- 31) For a popular account of Ungern von Sternberg's career, see James Palmer, *The Bloody White Baron*. New York: Basic Books, 2009.
- 32) Moses, pp.197-202; Vesna Wallace, "Surviving Modernity in Mongolia" in Bruce Knauff and Richard Taupier, eds. *Mongolians After Socialism: Politics, Economy, Religion*. Ulaan Baatar: Admon Press, 2012, pp.90-91.
- 33) Christopher Kaplonski, "Prelude to Violence: Show Trials and State Power in 1930s Mongolia," *American Ethnologist* 35: 2 (2008), p.325.
- 34) On Demchugdongrob, see Sechin Jagchid, *The Last Mongol Prince: The Life and Times of Demchugdongrob, 1902-1966*. Bellingham: Center for East Asian Studies, 1999. For Puyi's life, see Henry Pu-yi, *The Last Manchu: The Autobiography of Henry Pu Yi, the Last Emperor of China*. New York: Skyhorse Publishers. Rev. ed., 2010; also see Michael Jerryson, *Mongolian Buddhism: The Rise and Fall of the Sangha*. Chiang Mai: Silkworm Books, 2007 on the fear of an alliance of the lamas with the Japanese in Inner Mongolia. For a detailed work on Japanese plans for Mongolia, see James Boyd, *Japanese-Mongolian Relations, 1873-1945: Faith, Race and Strategy*. Folkstone: Global Oriental, 2011.
- 35) Kaplonski, "Prelude to Violence: Show Trials and State Power in 1930s Mongolia," *American Ethnologist* 35: 2 (2008), pp.326-330.
- 36) Baldandorjiin Nyambuu provides a description of these show trials in one of his interviews with Yuki Konagaya and I. Lkhagvasuren, *Socialist Devotees and Dissenters: Three Twentieth-Century Mongolian Leaders* (trans. by Mary Rossabi). Osaka: National Museum of Ethnology, 2011, pp.174-178.
- 37) Wallace, "Surviving," p.92 writes that "By 1934, the MPRP had produced twelve feature films that portrayed Buddhist ideas and practices as corrupt and shameful...In 1936, the MPR government printed 3,000 copies of its first anti-Buddhist magazine and disseminated it among the lower-ranking lamas."
- 38) Udo Barkmann, "The Revival of Lamaism in Mongolia," *Central Asian Survey* 16:1 (1997), p.72; also see Bayantsagaan Sandag, "Contributions to the Development of Mongolian Buddhism by the Association of Mongolian Devotees," in Knauff and Taupier, *Mongolians*, pp.101-107.
- 39) Agata Bareja-Starzynska and Hanna Havnevik, "A Preliminary Study of Buddhism in Present-Day Mongolia" in Ole Bruun and Li Narangoa, eds. *Mongols from Country to City*. Copenhagen: NIAS Press, 2006, pp.223-224. This essay is a useful guide to post-1990 developments in Mongolia. On the Dalai Lama's visits, see *Mongol Messenger*, November 6, 2002. He visited in 1979, 1982, 1987, 1991, 1995, and 2002 and continues to visit. On the survival of shamanism, see Matyas Balogh, "Contemporary Shamanisms in Mongolia," *Asian Ethnicity* 11: 2 (2010), pp.229-238. The author argues that "The

revival of shamanism in Mongolia is closely connected with the cult of Chinggis Khan being a revival of nationalistic pride that had been suppressed during the Soviet era similar to other forms of practicing religion. It is essential to bear in mind that the religious revival is mostly about the renaissance of Buddhism, and shamanism plays a more and more significant but still a secondary role in the religious life of the contemporary Mongolians” (p.236).

- 40) *Mongol Messenger*, March 31, 1999 on Michael Roach, one of these Americans.
- 41) *Mongol Messenger*, July 30, 2008.
- 42) See Oidov Nyamdavaa, *Mongolia-India Relations*. New Delhi: Bhavana Books and Prints, 2003, p.128 ; *Email Daily News*, July 19, 1999; and Sue Byrne, “The Ambassador-Teacher: Reflections on Kushok Bakula’s Importance in the Revival of Buddhism in Mongolia,” *Mongol Survey* (2008), pp.11-16.
- 43) Kriszina Teleki, “Building on Ruins, Memories, and Persistence: Revival and Survival in the Mongolian Countryside,” *Silk Road* 7 (2009), pp.64-65; *Mongol Messenger*, June 3, 2009 and November 29, 2006.
- 44) Laetitia Merli, “Shamanism in Transition: From the Shadow to the Light,” in Bruun and Narangoa, *Mongols*, pp.254-271; Tuvshintugs Dorj, “The Development of Shamanism in Mongolia after Socialism” in Knauff and Taupier, *Mongolians*, 115-127; see also the field study conducted by Morten Axel Pedersen, *Not Quite Shamans: Spirit Worlds and Political Lives in Northern Mongolia*. Ithaca: Cornell University Press, 2011.
- 45) Wallace, “Surviving,” pp.94-95.
- 46) Wallace, “Surviving,” p.96; Manduhai Buyandelgeriyn, “Shamans, Marginal Capitalism, and the Remaking of History in Postsocialist Mongolia,” *American Ethnologist* 34: 2 (2008), pp.127-147; Richard Tomlinson, “From Genghis Khan to Milton Friedman: Mongolia’s Wild Ride to Capitalism,” *Fortune*, December 7, 1998, pp.192-200, and Morris Rossabi. *Modern Mongolia: From Khans to Commissars to Capitalists*. Berkeley: University of California Press, 2005.
- 47) Wallace, “Survival,” pp.95, 98; Purevdorj Jamsran, “Developing Christianity in Mongolia During the Last Two Decades” in Knauff and Taupier, *Mongolians*, pp.129-137.
- 48) “Among Foundation Finds Eagle TV,” *New York Times*, January 22, 1997, p.13
- 49) Guido Verboom, et al. *Mongolian Buddhists Protecting Nature*. Ulaanbaatar: Netherlands Mongolian Trust Fund on Environmental Reform, 2009, pp.7-9.
- 50) Guido Verboom, et al., *Mongolian Buddhists*, pp.15-21; Bayantsagaan Sandag, “Contribution” in Knauff and Taupier, *Mongolians*, p.104.
- 51) Bataa Mishig-Ish, “Buddhism and the Grand Maitreya Complex Project in Mongolia” in Knauff and Taupier, *Mongolians*, pp.111-113; Matthew King, “Finding the Buddha Hidden Below the Sand: Youth, Identity and Narrative in the Revival of Mongolian Buddhism” in Julian Dierkes, ed. *Change in Democratic Mongolia: Social Relations, Health, Mobile Pastoralism, and Mining* Leiden: Brill, 2012, pp.23-25; *Email Daily News*, November 17, 1997 and December 3, 1997.
- 52) See Alicia Campi, “The Rise of Nationalism in the Mongolian People’s Republic as Reflected in Language Reform, Religion, and the Cult of Chinggis Khan,” *Central and Inner Asian Studies* 6 (1992), pp.46-58; for more on the link between Buddhism and nationalism, see Bareja-Starzynska and Havnevik, “A Preliminary” in Bruun and Narangoa, *Mongols*, pp.224-226.
- 53) Uradyn Bulag, *Nationalism and Hybridity in Mongolia*. Oxford: Oxford University Press,

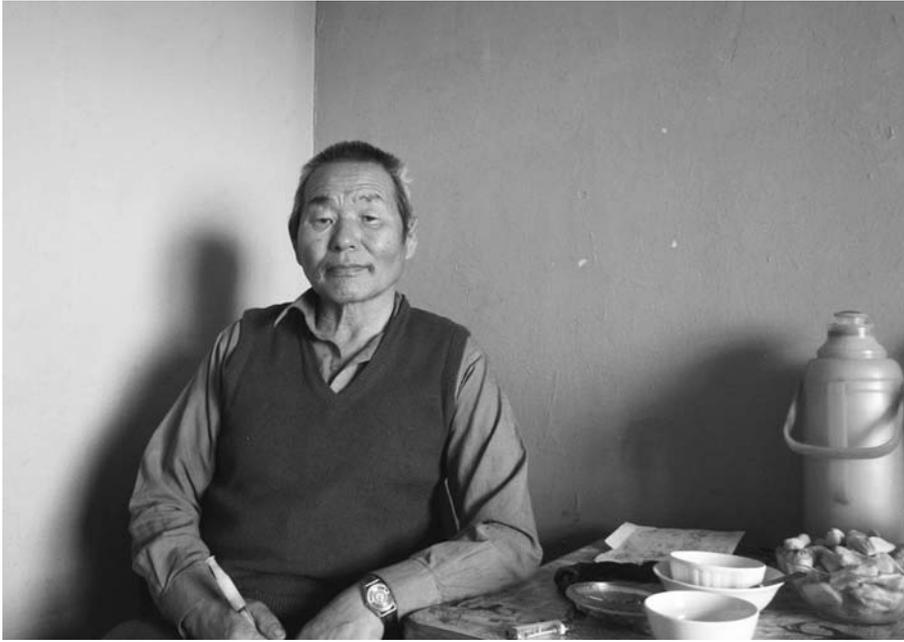
- 1998, p.238.
- 54) Bareja-Starzynska and Havnevik, "A Preliminary" in Bruun and Narangoa, *Mongols*, p.224.
 - 55) Karénina Kollmar-Paulent, "Buddhism in Mongolia After 1990," *Journal of Global Buddhism* 4 (2003), pp.21-24.
 - 56) Zsuzsa Majer, "Continuation or Disjunction with the Past and the Tibetan Buddhist Tradition," *Silk Road* 7 (2009), p. 52.
 - 57) Majer, "Continuation," p.62.
 - 58) Majer, "Continuation," p.57.
 - 59) Barkmann, "The Revival," p.71.
 - 60) King, "Finding the Buddha," p.72.
 - 61) *Mongol Messenger*, October 18, 2000; One monk stole statues. See *Email Daily News*, January 5, 1999.
 - 62) *Mongol Messenger*, June 10, 1998.
 - 63) Kollman-Paulent, "Buddhism in Mongolia," p.42.
 - 64) *UB Post*, September 25, 1996.
 - 65) Ole Bruun, *Precious Steppe: Mongolian Nomadic Pastoralists in Pursuit of the Market*. Lanham: Rowman and Littlefield, 2006, pp.121-142 on Buddhism in one rural site.
 - 66) Barkmann, "The Revival of Lamaism in Mongolia," *Central Asian Survey* 16:1 (1997), p.57; Bareja-Starzynska and Havnevik, "A Preliminary" in Bruun and Narangoa, *Mongols*, p.212.
 - 67) Bareja-Starzynska and Havnevik, "A Preliminary" in Bruun and Narangoa, *Mongols*, p.220.
 - 68) Bareja-Starzynska and Havnevik, "A Preliminary" in Bruun and Narangoa, *Mongols*, pp.226-228 on these nunneries.
 - 69) Majer, "Continuation," pp.55-57; Verboom, et al., *Mongolian*, p.13.
 - 70) The renowned herder Namkhainyambuu noted that he too attended school through the fourth grade. Ts. Namkhainyambuu, *Bounty from the Sheep: Autobiography of a Herdsman* (trans. by Mary Rossabi). Cambridge: White Horse Press, 2000, p.47.



Badamkhand



Badamregzen



Borjigon

Senri Ethnological Reports (最新号)

当館のウェブサイトにてバックナンバーのPDFをダウンロードすることができます。

<http://ir.minpaku.ac.jp/dspace/handle/10502/49>

- No.114 モンゴル口頭伝承の一資料 (2013; 小長谷有紀・斯琴編; モンゴル語, ロシア語)
- No.113 *Монголын Бурханы Шаины Соёл: Хэнтий, Хангайн Сүм, Хийдийн Судалгаа* (2013; M. I. クリャーギナ-コンドラティエワ, S. チョローン, T. I. ユスポワ編; モンゴル語, ロシア語)
- No.112 *Development Trajectories for Mongolian Women in and after Transition* (2013; eds. Yuki Konagaya and Maqsooda S. Sarfi; 英語)
- No.111 梅棹忠夫のモンゴル調査スケッチ原画集 (2013; 小長谷有紀・堀田あゆみ共編; 日本語)
- No.110 モンゴル国営農場資料集 (2013; 小長谷有紀・S. チョローン; 日本語, モンゴル語)
- No.109 西南中国少数民族の文化資源の“いま” (2013; 塚田誠之編; 日本語)
- No.108 土方久功日記Ⅳ (2012; 土方久功, 須藤健一・清水久夫編; 日本語)
- No.107 A Herder, a Trader, and a Lawyer: Three Twentieth-Century Mongolian Leaders (2012; Interviews conducted by Yuki Konagaya, I. Lkhagvasuren, translated by Mary Rossabi, edited and compiled by Morris Rossabi; 英語)
- No.106 情報化時代のローカル・コミュニティ-ICTを活用した地域ネットワークの構築 (2012; 杉本星子; 日本語)
- No.105 *Buddhist Fire Ritual in Japan* (2012; Madhavi Kolhatkar and Musashi Tachikawa; 英語)
- No.104 東アジアの民族イメージ-前近代における認識と相互作用 (2012; 野林厚志; 日本語)
- No.103 マダガスカル地域文化の動態 (2012; 飯田卓編; 日本語)
- No.102 「障害のない社会」にむけて-ウェルビーイングへの問いとノーマライゼーションの実践 (2012; 鈴木七美編; 日本語)
- No.101 *Altai Uriankhains: Historical and Ethnographical Investigation Late XIX – Early XX centuries* (2012; Ichinkhorloo LKHAGVASUREN; 英語・モンゴル語)
- No.100 土方久功日記Ⅲ (2011; 土方久功, 須藤健一・清水久夫編; 日本語)
- No.99 *Research Notes on the Zhangzhung Language by Frederick W. Thomas at the British Library (Bon Studies 14)* (2011; eds. Tsuguhito Takeuchi, Burkhard Quessel and Yasuhiko Nagano; 英語)

[国立民族学博物館刊行物審査委員会]

須藤健一 館長
岸上伸啓 副館長
久保正敏 副館長
韓 敏 民族社会研究部
八杉佳穂 民族文化研究部
寺田吉孝 先端人類科学研究部
塚田誠之 研究戦略センター（研究出版委員長）
朝倉敏夫 文化資源研究センター

平成25年11月29日発行

国立民族学博物館調査報告 115

編者 小長谷有紀
J.ルハグワテムチグ
Ma. ロッサビ
Mo. ロッサビ

発行 人間文化研究機構
国立民族学博物館
〒565-8511 吹田市千里万博公園10-1
TEL. 06(6876)2151(代表)

印刷 株式会社 遊文舎
〒532-0012 大阪市淀川区木川東4-17-31
TEL. 06(6304)9325(代表)
